

## 壱岐原の辻遺跡：東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査 報告書Ⅱ

宮本，一夫  
九州大学大学院人文科学研究院：教授

松本，圭太  
九州大学大学院人文科学研究院：助教

松尾，樹志郎  
九州大学大学院地球社会統合科学府

鈴木，瑞穂  
日鉄テクノロジー株式会社九州事業所

他

<https://hdl.handle.net/2324/6795072>

---

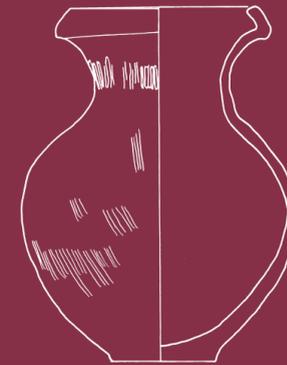
出版情報：2023-07-26. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室  
バージョン：  
権利関係：

# 志岐原の辻遺跡

— 東亞考古学会志岐原の辻遺跡調査報告書Ⅱ —

Harunotsuji Site: The Report No. 2 of Excavations at Harunotsuji Site in Iki Island  
conducted by the Far Eastern Archaeological Society

宮本一夫編 edited by MIYAMOTO Kazuo



2023. 7

九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

# 壱岐原の辻遺跡

－東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅱ－

Harunotsuji Site: The Report No. 2 of Excavations at Harunotsuji Site in Iki Island conducted by the Far Eastern Archaeological Society

宮本一夫編 edited by MIYAMOTO Kazuo

2023. 7

九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

# 序

東亞考古学会は、戦後、大陸での調査が不可能になり、大陸に接する壱岐・対馬や唐津の発掘調査を進めた京都大学と、北海道東部での発掘調査を進めた東京大学の二つに分かれた。前者は京都大学人文科学研究所の水野清一を中心に、1951年の対馬の調査に始まり、同年壱岐原の辻遺跡、1952年には壱岐カラカミ遺跡、1953年から1961年まで原の辻遺跡で発掘調査が行われた。これらの調査に参加した岡崎敬は、1960年に九州大学文学部考古学講座に赴任した後、1961年の最後の東亞考古学会の原の辻遺跡調査を水野清一とともにやっている。これらの調査資料は発掘後に京都大学人文科学研究所に運ばれていたが、1982年に九州大学考古学研究室に移管されていた。岡崎敬は、唐津の調査資料に関しては『末廬国』に一部報告していたが、その他の壱岐の発掘調査資料は未整理のままであった。

こうした中、九州大学考古学研究室では、1952年調査のカラカミ遺跡の再整理調査を行うにあたって、2004年から2011年まで6回の発掘調査を実施しながら再整理調査を進め、4冊の発掘報告書を出版し、カラカミ遺跡の内容を明らかにしてきた。その後、1954年の原の辻遺跡第3次調査の石棺墓・甕棺墓遺跡である原の辻閨繰遺跡の再整理調査を行った。さらに、1953年の原の辻遺跡第2次調査に並行して壱岐の全島調査で東亞考古学会が発掘した妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳の再整理調査を進めた。これら原の辻閨繰遺跡と妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の再整理調査の結果は、『東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅰ』として、2018年に刊行している。

科学研究費補助金・基盤研究(S)「東アジアにおける農耕の拡散・受容と牧畜社会生成過程の総合的研究」(代表：宮本一夫)が2019年に採択され、2019年夏にはモンゴル国アブダライ・ヒューサー遺跡の発掘調査を行い、秋には中国山東省烟台市博物館で大仲家遺跡の土器分析・石器使用痕分析・土器植物圧痕分析を始めた。その後、2020年に始まる新型コロナウイルス感染症拡大により、モンゴルや中国での現地調査ができない日々が続いた。その間、東アジアにおける農耕の拡散を探るため、日本列島最古の炭化米が出土した佐賀県唐津市宇木汲田貝塚の再整理調査とその発掘報告書を刊行し、水稻農耕社会である弥生時代の始まりの実年代を確定した。さらに、農耕の受容過程を探る意味で、東亞考古学会が発掘した弥生時代の拠点集落である壱岐の原の辻遺跡の再整理調査を進め、その整理調査報告書を『東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅱ』と題してここに刊行するものである。東亞考古学会の調査は半世紀以上前の発掘調査ではあったが、その調査成果は重要であり意義深いものであった。カラカミ遺跡や原の辻遺跡など、東亞考古学会が対馬・壱岐で調査してきた遺跡調査の内容を、ここにすべて公にできたことを喜びとしたい。

最後に、本基盤研究(S)の分担研究者以外で発掘資料の分析ならびに原稿執筆をしていただいた、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の谷澤亜里さんと田村朋美さん、さらに株式会社日鉄テクノロジーの鈴木瑞穂さんに感謝申し上げたい。また、京都大学人文科学研究所の岡村秀典教授には、東亞考古学会の原の辻遺跡発掘調査に関わる写真を提供していただいた。ここに記して感謝したい。

2023年3月25日

九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室  
宮本一夫

# 例 言

- 1 本書は、長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触に所在する原の辻遺跡の再整理調査報告書である。
- 2 本書で再整理の対象とした調査は、東亜考古学会による1951年第1次調査、1953年第2次調査、1954年第4次調査、1961年第5次調査の原の辻遺跡発掘調査である。
- 3 本書の刊行は、令和元年～5年度科学研究費補助金・基盤研究(S)「東アジアにおける農耕の拡散・受容と牧畜社会生成過程の総合的研究」(代表 宮本一夫)によるものである。
- 4 本書における方位は磁北を示し、レベル高は海拔を表す。
- 5 遺構の略号は奈良文化財研究所の方式に従って、住居址：SB、土坑：SKのように表示し、通し番号を1から付した。
- 6 遺物には、全てを一括して通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。
- 7 原則として、出土土器の実測図は縮尺1/4、出土石器の実測図は縮尺1/3に統一した。遺構の実測図や他の縮尺のものはそれぞれに縮尺を明記した。
- 8 注は各章ごとにまとめて、章末に記載した。
- 9 遺物の実測と製図は宮本一夫、松本圭太(九州大学大学院人文科学研究院)、三浦萌、李寧、陳映玉、内田千種、鈴木沙弥、津久井駿、中田風歌、王騰飛(九州大学大学院人文科学府)、松尾樹志郎、植野律子、日高風海斗、森春奈(九州大学大学院地球社会統合科学府)、坂上義実、坂ノ上奈央、田中佑希乃、出見優人、唐尚暉、永島さくら、諸岡初音、山田樹、佐久間慧、進藤菜々穂、今村竜平、笠屋佑輔、瀧内更朝、田渕朱莉、中原佳佑、松村祐奈、矢崎空音、栗原悠里子、重石拓郎、野村華鈴、藤岡実優、渡邊響(九州大学文学部)が行った。
- 10 人工遺物の写真撮影は宮本一夫が担当した。
- 11 本文は、宮本一夫、松本圭太(九州大学大学院人文科学研究院)、上條信彦(弘前大学人文社会科学部)、谷澤亜里、田村朋美(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)、鈴木瑞穂(日鉄テクノロジー株式会社 九州事業所)、松尾樹志郎(九州大学大学院地球社会統合科学府)が分担執筆した。それぞれの執筆分担は目次と各章の初めに示した。
- 12 編集は宮本一夫が行った。

# 目 次

序	宮本一夫	i
第1章 原の辻遺跡の位置と環境	松本圭太	1
1. 地理的環境		1
2. 歴史的環境		2
第2章 東亞考古学会による原の辻遺跡調査の経緯	宮本一夫・松本圭太	8
1. はじめに		8
2. 原の辻遺跡調査日誌（抄）		10
3. 発掘調査の組織		28
第3章 原の辻遺跡の調査区ならびに遺構と層位	宮本一夫	30
1. 調査区の位置		30
2. 第2次調査（1953年）の調査区の遺構と層位		32
3. 第4次調査（1954年）の調査区の遺構と層位		50
4. 第1次調査（1951年）・第5次調査（1961年）の調査区の遺構と層位		51
5. まとめ		53
第4章 原の辻遺跡出土土器・土製品	宮本一夫	55
1. 1953年第2次調査の土器		55
2. 1954年第4次調査の土器		71
3. 1951年第1次調査の土器		77
4. 1961年第5次調査の土器		89
5. 原の辻遺跡出土地不明土器		103
6. 壁土		104
7. まとめ		105
第5章 原の辻遺跡出土石器	松尾樹志郎	115
1. はじめに		115
2. 1953年調査出土石器		115
3. 1954年調査出土石器		125
4. 1951・1961年調査出土石器		131
第6章 原の辻遺跡出土骨角器	松本圭太	147
1. 鹿角製へら状製品		147
2. 原の辻遺跡出土鹿角製へら状製品の位置づけ		147

第7章 原の辻遺跡出土青銅器	松本圭太	150
1. 銅鏃・銅製品		150
2. 貨泉		152
3. 現存しない青銅器		152
第8章 原の辻遺跡出土鉄器	宮本一夫	153
1. 鑄造鉄器		153
2. 鍛造鉄器		153
3. まとめ		159
第9章 原の辻遺跡出土鉄製品の調査	鈴木瑞穂	162
1. 調査対象		162
2. 調査方法		162
3. 調査結果		162
4. まとめ		171
第10章 原の辻遺跡出土玉類	谷澤亜里・田村朋美	173
1. 資料の概要		173
2. ガラス小玉の材質分析		174
3. 資料の考古学的位置づけ		176
第11章 原の辻遺跡出土米および九州大学所蔵出土米の粒形質分析	上條信彦	178
1. 分析資料について		178
2. 分析方法		179
3. 種子塊の観察		179
4. 原の辻遺跡出土米の計測結果		179
5. 立岩遺跡出土米の計測結果		179
6. 津古内畑遺跡出土米の計測結果		180
7. 津島遺跡出土米の計測結果		180
8. 本分析資料における出土米の粒形質評価		181
第12章 原の辻閩線遺跡調査報告補遺	宮本一夫	188
第13章 原の辻遺跡の整理調査の成果と課題	宮本一夫	191
1. 東亞考古学会調査の概況		191
2. 東亞考古学会調査の成果		191
3. 原の辻遺跡の歴史的 position づけ		194
図版		197

# 図 版 目 次

図版 1	1	原の辻遺跡遠景（1951年第1次調査）
	2	第2次調査（1953年）第1トレンチ貝層出土状況
図版 2	1	第2次調査（1953年）第2トレンチ O・P 区土器出土状況
	2	第2次調査（1953年）第2トレンチ L・M 区土器出土状況
図版 3	1	第2次調査（1953年）第2トレンチ拡張区（E1～U 区）の遺構（東から）
	2	第2次調査（1953年）第2トレンチ拡張区と1号住居址（北西から）
図版 4	1	第2次調査（1953年）第2トレンチ1号住居址（南から）
	2	第2次調査（1953年）第2トレンチ1号住居址（北西から）
図版 5	1	第2次調査第3トレンチ柱穴群（南から）
	2	第2次調査第4トレンチ遺物出土状況
	3	第2次調査（1953年）第4トレンチ I 区遺物出土状況（西から）
図版 6	1	第2次調査（1953年）第5トレンチ甕棺墓出土状況
	2	第2次調査（1953年）調査参加者
図版 7	1	第4次調査（1954年）第1トレンチ A 区遺物出土状況
	2	第4次調査（1954年）第1トレンチ A～F 区遺物出土状況
	3	第4次調査（1954年）第1トレンチ A 区遺物出土状況
	4	第4次調査（1954年）第1トレンチ A・B 区遺物出土状況
図版 8	1	第4次調査（1954年）第1トレンチ遺物出土状況（西から）
	2	第4次調査（1954年）第1トレンチ L 区出土土器
	3	第4次調査（1954年）第1トレンチ D 区遺物出土状況（北から）
	4	第4次調査（1954年）第1トレンチ L 区遺物出土状況
図版 9	1	第4次調査（1954年）第1トレンチ遺物出土状況
	2	第4次調査（1954年）第2トレンチ柱穴遺構（南東から）
図版10	1	第1次調査（1951年）第1トレンチ（南から）
	2	第1次調査（1951年）第1トレンチ h・r 区土器出土状況
	3	第1次調査（1951年）第1トレンチ h・p・q・r・f・g 区遺物出土状況（北から）
図版11	1	第1次調査（1951年）第1トレンチ h・p・q・r 区（北から）
	2	第1次調査（1951年）第1トレンチ h 区甕棺出土状況（北から）
図版12	1	第1次調査（1951年）第1トレンチ h 区甕棺出土状況（北東から）
	2	第1次調査（1951年）第1トレンチ h 区甕棺内人骨および鉄釣針
図版13	1	第1次調査（1951年）第1トレンチ a 区犬骨格および丹塗壺出土状況
	2	第1次調査（1951年）第1トレンチ b 区遺物出土状況
図版14	1	第5次調査（1961年）第1トレンチ F・G 区遺物出土状況
	2	第5次調査（1961年）第1トレンチ L・M 区遺物出土状況
図版15	1	第5次調査（1961年）第1トレンチ M・N・O 区遺物出土状況
	2	第5次調査（1961年）第1トレンチ W・X 区遺物出土状況
図版16	1	第5次調査（1961年）第1トレンチ S' 区遺物出土状況

- 2 第5次調査(1961年)第1トレンチS・T区遺物出土状況
- 図版17 1 第5次調査(1961年)第1トレンチS・T区焼土層出土状況
- 2 第5次調査(1961年)第2トレンチN区甕棺墓出土状況
- 図版18 1 第5次調査(1961年)第2トレンチA区遺物出土状況
- 2 第5次調査(1961年)第4トレンチD区遺物出土状況
- 図版19 1 第5次調査(1961年)第5トレンチC区遺物出土状況
- 2 第5次調査(1961年)第5トレンチC区遺物出土状況
- 図版20 第2次調査(1953年)出土土器(1)
- 図版21 第2次調査(1953年)出土土器(2)
- 図版22 第2次調査(1953年)出土土器(3)
- 図版23 第2次調査(1953年)出土土器(4)
- 図版24 第2次調査(1953年)出土土器(5)
- 図版25 第2次調査(1953年)出土土器(6)
- 図版26 1 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器(1)(表)
- 2 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器(1)(裏)
- 図版27 1 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器その他(2)(表)
- 2 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器その他(2)(裏)
- 図版28 第4次調査(1954年)出土土器(1)
- 図版29 第4次調査(1954年)出土土器(2)
- 図版30 第4次調査(1954年)出土土器(3)
- 図版31 第4次調査(1954年)出土土器(4)
- 図版32 第4次調査(1954年)出土土器(5)
- 図版33 第4次調査(1954年)出土土器(6)
- 図版34 第1次調査(1951年)出土土器(1)
- 図版35 第1次調査(1951年)出土土器(2)
- 図版36 第1次調査(1951年)出土土器(3)
- 図版37 第1次調査(1951年)出土土器(4)
- 図版38 第1次調査(1951年)出土土器(5)
- 図版39 1 第1次調査(1951年)・第4次調査(1954年)出土楽浪系土器・三韓系土器(1)(表)
- 2 第1次調査(1951年)・第4次調査(1954年)出土楽浪系土器・三韓系土器(1)(裏)
- 3 第2次調査(1953年)出土壁土
- 図版40 第5次調査(1961年)出土土器(1)
- 図版41 第5次調査(1961年)出土土器(2)
- 図版42 第5次調査(1961年)出土土器(3)
- 図版43 第5次調査(1961年)出土土器(4)
- 図版44 第5次調査(1961年)出土土器(5)
- 図版45 第5次調査(1961年)出土土器(6)
- 図版46 第5次調査(1961年)出土土器(7)
- 図版47 第5次調査(1961年)出土土器(8)
- 図版48 第5次調査(1961年)出土土器(9)

- 図版49 第5次調査(1961年)出土土器(10)
- 図版50 1 第5次調査(1961年)出土楽浪系土器・三韓系土器(表)  
2 第5次調査(1961年)出土楽浪系土器・三韓系土器(裏)
- 図版51 出土地不明土器
- 図版52 1 第2次調査(1953年)出土石器(1)(表)  
2 第2次調査(1953年)出土石器(1)(裏)
- 図版53 1 第2次調査(1953年)出土石器(2)(表)  
2 第2次調査(1953年)出土石器(2)(裏)
- 図版54 1 第2次調査(1953年)出土石器(3)(表)  
2 第2次調査(1953年)出土石器(3)(裏)
- 図版55 1 第2次調査(1953年)出土石器(4)(表)  
2 第2次調査(1953年)出土石器(4)(裏)
- 図版56 1 第2次調査(1953年)出土石器(5)(表)  
2 第2次調査(1953年)出土石器(5)(裏)
- 図版57 1 第2次調査(1953年)出土石器(6)(表)  
2 第2次調査(1953年)出土石器(6)(裏)
- 図版58 1 第4次調査(1954年)出土石器(1)(表)  
2 第4次調査(1954年)出土石器(1)(裏)
- 図版59 1 第4次調査(1954年)出土石器(2)(表)  
2 第4次調査(1954年)出土石器(2)(裏)
- 図版60 1 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土石器(表)  
2 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土石器(裏)
- 図版61 1 第1次調査(1951年)・第2次調査(1953年)出土石器(表)  
2 第1次調査(1951年)・第2次調査(1953年)出土石器(裏)
- 図版62 1 第5次調査(1961年)出土石器(1)(表)  
2 第5次調査(1961年)出土石器(1)(裏)
- 図版63 1 第5次調査(1961年)出土石器(2)(表)  
2 第5次調査(1961年)出土石器(2)(裏)
- 図版64 1 第5次調査(1961年)出土石器(3)(表)  
2 第5次調査(1961年)出土石器(3)(裏)
- 図版65 1 第5次調査(1961年)出土石器(4)(表)  
2 第5次調査(1961年)出土石器(4)(裏)
- 図版66 1 第5次調査(1961年)出土石器(5)(表)  
2 第5次調査(1961年)出土石器(5)(裏)
- 図版67 1 第5次調査(1961年)出土石器(6)(表)  
2 第5次調査(1961年)出土石器(6)(裏)
- 図版68 1 第5次調査(1961年)出土石器(7)(表)  
2 第5次調査(1961年)出土石器(7)(裏)
- 図版69 第4次調査(1954年)第1トレンチ出土石製支脚
- 図版70 1 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土青銅鏃(表)

- 2 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土青銅鏃(裏)
- 3 原の辻遺跡出土アワビおこし(表・裏)
- 図版71 1 原の辻遺跡出土鉄器(1)(表)
- 2 原の辻遺跡出土鉄器(1)(裏)
- 図版72 1 原の辻遺跡出土鉄器(2)(表)
- 2 原の辻遺跡出土鉄器(2)(裏)
- 図版73 原の辻遺跡出土鉄器(3)
- 図版74 1 原の辻遺跡出土鉄器(4)(表)
- 2 原の辻遺跡出土鉄器(4)(裏)
- 3 原の辻遺跡出土玉類
- 4 閨繰遺跡出土管玉
- 図版75 1 原の辻遺跡出土米1(G'G"グリッド)
- 2 原の辻遺跡出土米2(Fグリッド)
- 図版76 立岩遺跡第3次調査出土米
- 図版77 津古内畑遺跡出土米
- 図版78 津島遺跡出土米

# 挿 図 目 次

図 1	壱岐島の位置と遺跡分布図	1
図 2	原の辻遺跡各地区と東亜考古学会調査のトレンチ	2
図 3	原の辻遺跡における集落の変遷	3
図 4	カラカミ遺跡における環濠の変遷	4
図 5	東亜考古学会による原の辻遺跡調査地点	9
図 6	第 1 次～第 5 次調査の配置	30
図 7	原の辻遺跡の地形と第 2 次調査（1953 年）のトレンチ配置	31
図 8	第 2 次調査（1953 年）第 1 トレンチの配置と層位	32
図 9	第 2 次調査（1953 年）第 1 トレンチ F・G 区遺物出土状況	33
図 10	第 2 次調査（1953 年）第 2 トレンチ	34
図 11	第 2 次調査（1953 年）第 2 トレンチ G～H 区遺物出土状況	35
図 12	第 2 次調査（1953 年）第 2 トレンチ K 区遺物出土状況	35
図 13	第 2 次調査（1953 年）第 2 トレンチ F'～G' 区の 2 号方形住居址	36
図 14	第 2 次調査（1953 年）第 2 トレンチ O・P 区遺物出土状況	36
図 15	第 2 次調査（1953 年）第 2 トレンチ S・T 区遺物出土状況	37
図 16	第 2 次調査（1953 年）第 3 トレンチ	38
図 17	第 2 次調査（1953 年）第 3 トレンチ検出の柱穴	38
図 18	第 2 次調査（1953 年）第 4 トレンチ	39
図 19	第 2 次調査（1953 年）第 4 トレンチ出土遺物	39
図 20	第 2 次調査（1953 年）第 4 トレンチと壱岐市教育委員会発掘調査地点との関係	40
図 21	第 2 次調査（1953 年）第 5 トレンチ甕棺出土状況	41
図 22	第 4 次調査（1954 年）のトレンチ配置	42
図 23	第 4 次調査（1954 年）第 1 トレンチ A～E 区遺物出土状況	42
図 24	第 4 次調査（1954 年）第 1 トレンチ A・B 区上層遺物出土状況	43
図 25	第 4 次調査（1954 年）第 1 トレンチ A・B 区下層遺物出土状況	43
図 26	第 4 次調査（1954 年）第 1 トレンチ C～E 区下層遺物出土状況	44
図 27	第 4 次調査（1954 年）第 1 トレンチ E～G 区上層遺物出土状況	44
図 28	第 4 次調査（1954 年）第 1 トレンチ G・H 区上層遺物出土状況	45
図 29	第 4 次調査（1954 年）第 1 トレンチ K 区下層遺物出土状況	45
図 30	第 1 次調査（1951 年）第 1 トレンチ層位図	45
図 31	第 1 次調査（1951 年）第 1 トレンチ、第 5 次調査（1961 年）第 1・第 4 トレンチ配置図	46
図 32	第 1 次調査（1951 年）第 1 トレンチ b 区遺物出土状況	47
図 33	第 1 次調査（1951 年）第 1 トレンチ e・f 区遺物出土状況	47
図 34	第 1 次調査（1951 年）第 1 トレンチ h 区出土小児甕棺墓	48
図 35	第 1 次調査（1951 年）・第 5 次調査（1961 年）と環濠の位置	48
図 36	第 1 次調査（1951 年）第 1 トレンチ h・p～r 区上層遺物出土状況	49
図 37	第 5 次調査（1961 年）第 2・第 3 トレンチと層位	50

図38	第1次調査（1951年）・第2次調査（1953年）・第4次調査（1954年）・第5次調査（1961年） のトレンチ配置と環濠の位置……………	53
図39	第2次調査（1953年）第1トレンチ出土土器……………	56
図40	第2次調査（1953年）第1トレンチ出土土器……………	57
図41	第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器……………	58
図42	第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器……………	59
図43	第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器……………	60
図44	第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器……………	61
図45	第2次調査（1953年）第3トレンチ出土土器……………	62
図46	第2次調査（1953年）第4トレンチ出土土器……………	63
図47	第2次調査（1953年）第4トレンチ出土土器……………	64
図48	第2次調査（1953年）第4トレンチ出土土器……………	65
図49	第2次調査（1953年）第5トレンチ出土甕棺……………	66
図50	第2次調査（1953年）出土楽浪系土器・三韓土器……………	66
図51	第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器……………	67
図52	第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器……………	68
図53	第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器……………	69
図54	第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器……………	70
図55	第4次調査（1954年）第2トレンチ出土土器……………	71
図56	第4次調査（1954年）第2トレンチ出土土器……………	72
図57	第4次調査（1954年）出土地区不明土器……………	73
図58	第4次調査（1954年）出土地区不明土器……………	74
図59	第4次調査（1954年）出土楽浪系土器・三韓土器……………	75
図60	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	76
図61	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	77
図62	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	78
図63	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	79
図64	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	80
図65	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	81
図66	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	82
図67	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	83
図68	第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器……………	84
図69	第1次調査（1951年）出土地区不明土器……………	85
図70	第1次調査（1951年）出土地区不明土器……………	86
図71	第1次調査（1951年）出土楽浪系土器・三韓土器……………	87
図72	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器……………	88
図73	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器……………	89
図74	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器……………	90
図75	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器……………	91
図76	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器……………	92

図77	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器	93
図78	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器	94
図79	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器	95
図80	第5次調査（1961年）第1・第4トレンチ出土土器	96
図81	第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器	97
図82	第5次調査（1961年）第2・第5トレンチ出土土器	98
図83	第5次調査（1961年）出土地区不明土器	99
図84	第5次調査（1961年）出土地区不明土器	100
図85	第5次調査（1961年）出土土製品	101
図86	第5次調査（1961年）出土楽浪系土器と無文土器・三韓土器	101
図87	出土地区不明土器	102
図88	出土地区不明土器	103
図89	出土地区不明土器	104
図90	第2次調査（1953年）出土壁土	105
図91	第2次調査（1953年）出土石器（1）	116
図92	第2次調査（1953年）出土石器（2）	117
図93	第2次調査（1953年）出土石器（3）	118
図94	第2次調査（1953年）出土石器（4）	119
図95	第2次調査（1953年）出土石器（5）	120
図96	第2次調査（1953年）出土石器（6）	121
図97	第2次調査（1953年）出土石器（7）	122
図98	第2次調査（1953年）出土石器（8）	123
図99	第4次調査（1954年）出土石器（1）	126
図100	第4次調査（1954年）出土石器（2）	127
図101	第4次調査（1954年）出土石器（3）	128
図102	第4次調査（1954年）出土石器（4）	129
図103	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（1）	130
図104	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（2）	131
図105	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（3）	132
図106	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（4）	133
図107	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（5）	134
図108	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（6）	135
図109	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（7）	136
図110	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（8）	137
図111	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（9）	138
図112	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（10）	139
図113	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（11）	140
図114	第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（12）	141
図115	原の辻遺跡出土骨角器	148
図116	各地の鹿角製ヘラ状製品	148

図117	原の辻遺跡出土青銅器	151
図118	原の辻遺跡出土貨泉	152
図119	原の辻遺跡出土鉄器 (1)	153
図120	原の辻遺跡出土鉄器 (2)	155
図121	原の辻遺跡出土鉄器 (3)	156
図122	原の辻遺跡出土鉄器 (4)	157
図123	原の辻遺跡出土鉄器 (5)	158
図124	原の辻遺跡出土鉄器 (6)	159
図125	原の辻遺跡出土鉄器 (7)	160
図126	原の辻遺跡出土鉄器 (8)	161
図127	鑄造鉄斧 (HRN-1・2) の X 線 CT 画像	163
図128	鑄造鉄斧 (HRN-1) の顕微鏡組織・EPMA 調査	164
図129	鑄造鉄斧 (HRN-2) の顕微鏡組織・EPMA 調査	166
図130	鉄製品 (HRN-3・4) の X 線 CT 画像	168
図131	棒状素材 (鍛造鉄器) の顕微鏡組織・EPMA 調査	169
図132	鉄製品 (土器付着) の顕微鏡組織・EPMA 調査	170
図133	ガラス小玉 (755) の顕微鏡写真	173
図134	原の辻遺跡出土玉類	173
図135	基礎ガラス成分によるカリガラスの細分	174
図136	淡紺色ガラス小玉 (753) の可視分光スペクトル	175
図137	基礎ガラス成分によるソーダガラスの細分	175
図138	弥生時代の水晶製算盤玉の法量分布	176
図139	原の辻遺跡1953年出土種子塊	180
図140	九州北部弥生時代を中心とする粒型・粒大の比較	182
図141	原の辻閩線遺跡の墓葬分布	188
図142	東亞考古学会調査区の墓地	189
図143	第4・5号石棺墓、第8号甕棺墓出土管玉	189
図144	原の辻閩線遺跡12号甕棺	190
図145	東亞考古学会による原の辻遺跡の調査区と環濠	192
図146	原の辻遺跡と東亞考古学会の調査区	193

## 表 目 次

表1	東亞考古学会による壱岐島調査一覧	8
表2	原の辻遺跡出土土器・土製品観察表	107~114
表3	原の辻遺跡出土石器観察表	144~146
表4	原の辻遺跡出土骨角器観察表	147
表5	原の辻遺跡出土青銅器観察表	151
表6	原の辻遺跡出土鉄器集成表	154
表7	供試材の履歴と調査項目	162

表8	原の辻遺跡出土玉類一覧	173
表9	原の辻遺跡出土ガラス小玉の蛍光 X 線分析結果	174
表10	出土米の粒型と粒大の分類基準	179
表11	上條（2018）における粒形質パターン	181
表12	原の辻遺跡検出のイネ種子の観察表	184
表13	立岩遺跡第3次調査検出のイネ種子の観察表	185
表14	津古内畑遺跡第19号竪穴検出のイネ種子の観察表	186
表15	津島遺跡検出のイネ種子の観察表	187
表16	原の辻閨線遺跡出土管玉一覧	189

# 第1章 原の辻遺跡の位置と環境

松本圭太

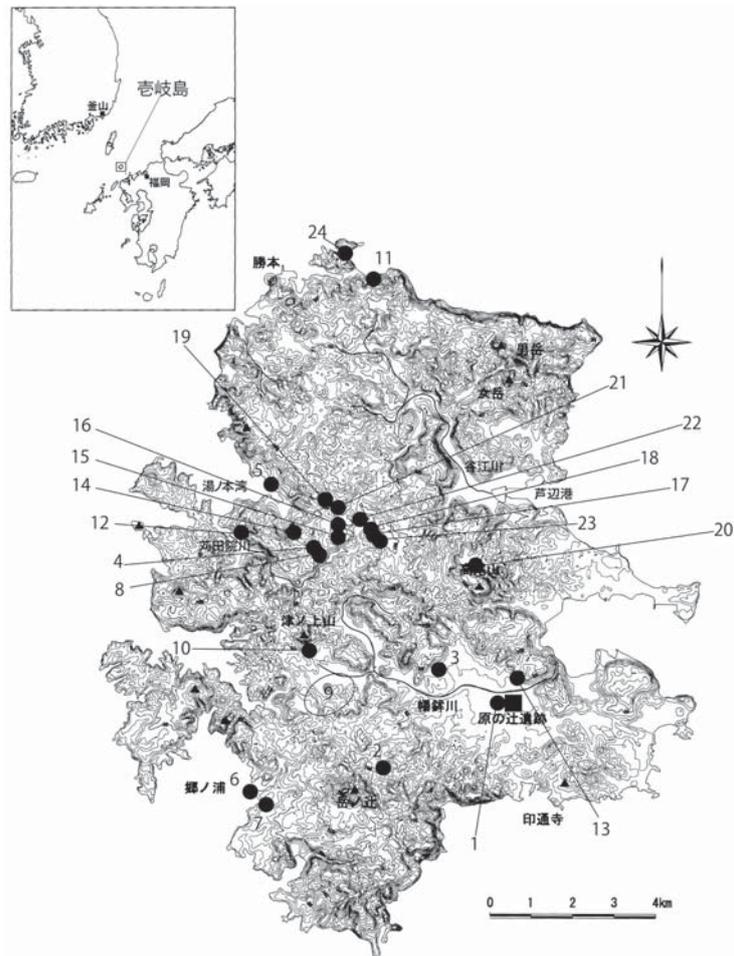
## 1. 地理的環境

原の辻遺跡は長崎県壱岐市芦辺町に所在する。壱岐市は長崎県に属するが、博多から約67km、東松浦半島から北北西に約20kmの玄界灘上に位置する。また、西北へ70km程度で対馬、120km程で釜山に達し、防人の設置や元寇の被害に示されるように、大陸との交渉において古来重要な位置を占めてきた(図1)。

島の規模は南北17.2km 東西14.8km で総面積約139km<sup>2</sup>である。海岸線は入り組んでいる一方、地形は比較的平坦であり、その地質は大部分が玄武岩類によって構成されている。こうした平坦な地形は、壱岐島と釜山の間位置し、山地が多くを占める対馬とは対照的である。壱岐島の分水嶺は西に偏り、二大水系として、北部では谷江川、南部では幡鉾川が知られる。後者は壱岐島最大の川であって、下

流域には河内盆地が広がり、中でも深江田原は、諫早平野に次いで長崎県第二の広さを誇る天然の沖積平野である。この深江田原の小高い丘陵を中心に、原の辻遺跡は所在する。これは、東亞考古学会によって調査された同島のカラカミ遺跡が、周辺に農耕地が存在しない丘陵頂部に位置することと、対比をなしている。

原の辻遺跡の丘陵では、江戸時代から昭和前半頃までは畑を高く盛り上げた饅頭畑が見られ、このことは東亞考古学会の調査写真によっても知られる。しかしながら、ブルドーザーによる整地などによって、現状では標高17mを最高点とする平地化が進んでいる。長岡信治氏らによると、本丘陵の表層地質は以下のように区分される。丘陵先端部の高元地区には玄武岩E、原地区から萱ノ木地区、原の久保地区、鶴田地区には礫層B、丘陵中央部には玄武岩F、大川



- 1: 鶴田遺跡、2: 大宝遺跡、3: 興触遺跡、4: 国柳遺跡、5: 松崎遺跡、6: 鎌崎遺跡、7: 名切遺跡
- 8: カラカミ遺跡、9: 車出遺跡群、10: 山中遺跡、11: 天ヶ原セジウ神遺跡、12: 片苗イシロ遺跡
- 13: 大塚山古墳、14: 対馬塚古墳、15: 双六古墳、16: 笹塚古墳、17: 鬼の窟古墳、18: 兵瀬古墳
- 19: 掛木古墳、20: 妙泉寺古墳、21: 百合畑古墳群、22: 百田頭古墳群、23: 壱岐嶋分寺跡
- 24: 串山ミルメ浦遺跡

図1 壱岐島の位置と遺跡分布図(本章言及分のみ)  
(福田・中尾編2005を改変)

地区、柏田地区にかけては玄武岩Dが分布する（長岡ほか2005）（地区名は図2参照）。本丘陵上の旧石器時代の包含層は全て礫層B部分にあたり、縄文時代の包含層は知られていない。この背景について、後世の削平以外に、風化土層の形成速度が遅く厚い土層形成がなかった可能性が指摘されている。

## 2. 歴史的環境

### 1) 旧石器時代～縄文時代

壱岐島最古である鶴田遺跡（図1-1）は、ナイフ形石器文化中期、始良 Tn 火山灰（AT）降下の直前（約30000年前）に遡る。この段階は、最終氷期極大期に相当し、海水面が現在より100m以上低く、壱岐と九州本土は陸続きであったと考えられている。特に、原の辻遺跡、鶴田遺跡、大宝遺跡（図1-2）では原位置を保ったブロックが検出されている。また、原の辻遺跡では1992・1995年の河

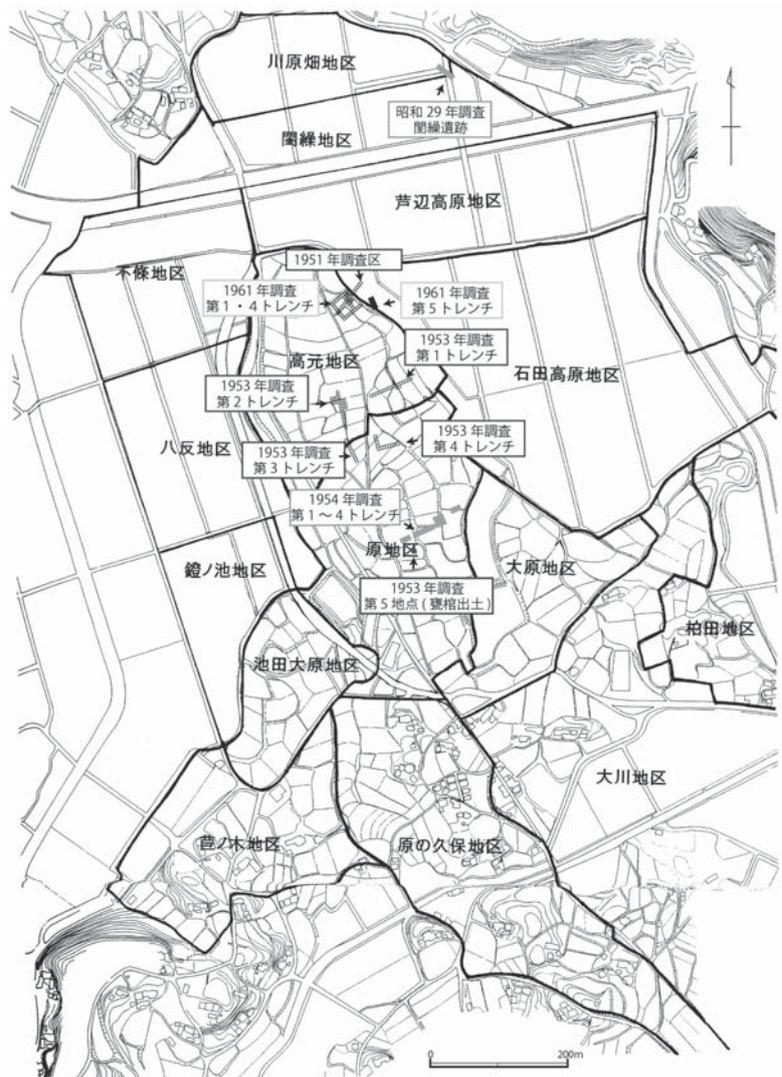


図2 原の辻遺跡各地区と東亞考古学会調査のトレンチ  
（松見編2013を改変）

川改修工事に伴う調査で「ナウマンゾウ・オオツノジカ」が発見されたが人工遺物との共伴関係は確認できなかった。また、AT降下以降の遺跡としては、興触遺跡（図1-3）、カラカミ遺跡、国柳遺跡（図1-4）などを挙げる事が出来、重要な石器器種として、原の辻型台形石器がある。

壱岐島全体では20カ所ほどの縄文時代の遺跡が知られ、島の南西から西海岸に集中している。また、これらの遺跡は潮間帯に存在する。松崎遺跡（図1-5）は曾畑式土器、阿高式系土器が多くを占めるが、半島系の隆起文土器や太線沈線文土器が確認された（古澤2014）。

鎌崎遺跡（図1-6）と名切遺跡（図1-7）は共に郷ノ浦町に存在し、現在は新田によって分断されているが、本来は一体の遺跡である。名切遺跡では縄文時代中期から後期にかけての堅果類貯蔵用堅穴「どんぐりピット」が30基確認された（長崎県教育委員会1985）。深さ1m程度の内部は湧水に満たされ、堅穴底面からは堅果類が、埋土からは石皿や礫石が出土した。また、同遺跡出土の黒曜石には、壱岐産のほか、佐賀県腰岳産のものも含まれ、当時の交流を示すものとして注目されている。鎌崎遺跡は、出水式土器や多様な石器が表面採集された。特に、全体が直角三角形状を呈し、底辺にゆるい弧状刃部を附すスクレイパーは、鎌崎型スクレイパーと呼ばれる。

なお、原の辻遺跡でも坂の下式土器や局部磨製石鏃、鎌崎型スクレイパーなどが出土し、縄文時代後期前葉を中心とする土地利用が想定されるが、遺構などは確認されていない。

## 2) 弥生時代

弥生時代の遺跡は約60カ所におよぶが、これらのうち、大規模集落かつ大陸との交渉を示す遺物を含む豊富な資料が出土した原の辻遺跡、カラカミ遺跡(図1-8)、車出遺跡群(図1-9)は、とくに重要な遺跡として認識されてきた。

まず、本報告の対象となる原の辻遺跡について、『原の辻遺跡総集編Ⅱ』(川道・古澤編2016)における段階区分(図3)を参照しながら記述する。先述のように本遺跡は深江田原に位置する。本遺跡最古の遺物は板付Ⅱ式であり、それ以前の遺物は確認できないことから、弥生時代前期後葉から前期末にかけて突如として集落が形成されたと考えられる(図3左上)。この時期の生活関連遺構は丘陵の先端部(高元地区)に集中している。原の辻遺跡の立地する丘陵部周辺は、冬季には厳しい北西風が吹き込み、生活しやすい場所ではない。この場所にあえて集落を形成した背景の一つとして、船待ちのできる内海湾への連結が容易である立地であることなどから、対外交流を目的とした可能性が挙げられている(宮崎2001、川道・古澤編2016)。この時期の墓域は、丘陵の最頂部付近(原地区)に形成され、後にこの丘陵を越えて南東側に広がる別の丘陵部(大原地区)へと移動する。これらとほぼ同時期に位置づけられる墓群が、丘陵先端部から北に300m程度の場所に位置する原の辻閨線遺跡である。当該遺跡は東亜考古学会によって1954年に調査され、6基の列状配置の石棺墓と16基の小児用甕棺墓が発見された。年代は前期末から中期前半に及ぶ(宮本編2018)。また、1995年には1954年閨線遺跡調査区の西北において、長崎県教育庁による調査の結果、中期後半を主体とする石棺墓、石蓋土墳墓、土墳墓、甕棺墓が発見された(安楽編1999)。閨線遺跡の両調査地点を別の墓域とすれば、丘陵上の墓域を含めて、原の辻遺跡全体では10地点の墓域が存在したことになる。こうした各墓域は、それぞれが氏族墓地であった可能性がある(宮本編2018)。

中期初頭から中期中葉は、前段階に形成された集団が丘陵部全体に拡大し、丘陵全体が居住域として利用されるようになる(図3右上)。丘陵を囲うように環濠が、西側に船着き場が形成される。船着き場では版築や、矢板による土流出の防止など、当時の最先端技術が窺える。さらには粘土帯土

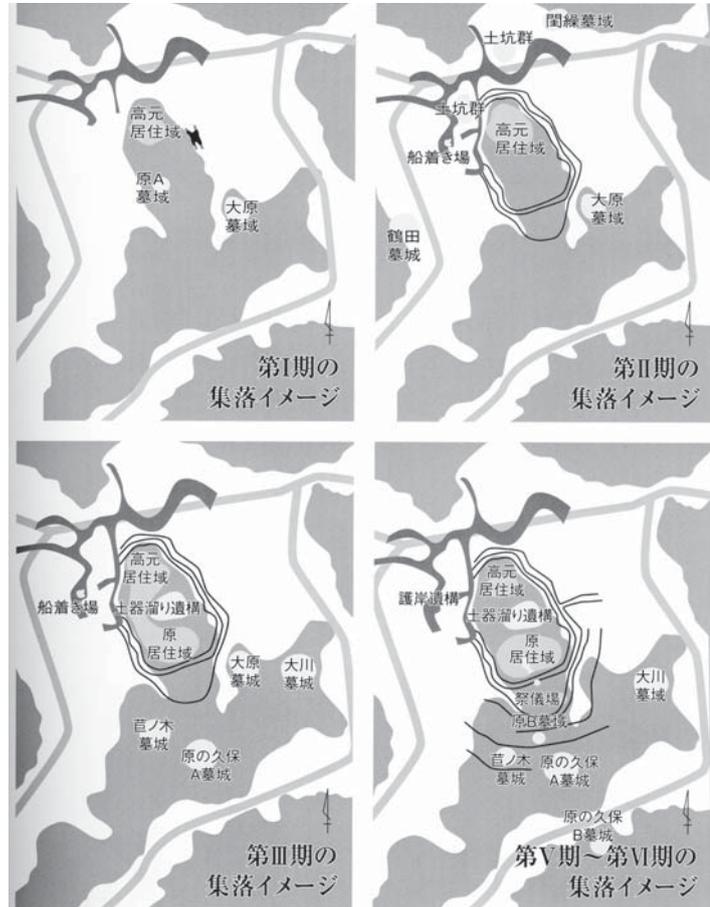


図3 原の辻遺跡における集落の変遷  
(松見編2013より転載)

器・擬粘土帯土器など多くの外来系遺物の搬入が見られ、渡来人の存在が顕著になる。墓域では、先に挙げた大原地区において、墓坑に周溝を巡らす墓も築造され、弥生時代中期になると細形銅剣や蜻蛉玉などが副葬される墓も出現する。

中期後葉～中期末には、集落の規模が拡大する（図3左下）。同時期には、幡鉢川の上流部に形成された車出遺跡群、さらには北西部の山地にカラカミ遺跡が形成された。墓域の拡大も見られ、環濠に近い大原地区から、比較的遠い大川地区、原の久保地区・萱ノ木地区へ墓域が広がっていく。船着き場も存続しており、周辺から三翼鏃や五銖銭を含む大陸・半島系遺物が多数出土した。小規模な鉄器・青銅器生産は行っていた可能性があるものの、大規模な工房などの存在は確認されていない。

後期前葉に原の辻集落は一時衰退し、弥生時代中期初頭に築造された船着き場が解体され、環濠も埋まる。低地部に堆積した粒子の細かい砂粒を含む灰白色の粘土質の土層から、大規模な水害によって低地部の殆どが水没した可能性が推定されている。こうしたことを背景に、原の辻遺跡の集団がカラカミ遺跡や車出遺跡群に移動したことが考えられている（川道・古澤編2016）。後述のように、カラカミ遺跡や車出遺跡群では、中期中葉に集落が形成され、弥生時代後期以降に盛行する。

後期中葉から後期後葉には丘陵部に生活拠点が戻り、環濠も再掘削された（図3右下）。丘陵頂部では祭儀場と呼ばれる祭祀的空間が形成され、建物の配置にも計画性が窺える。墓域は中期後葉～中期末に存在したものが拡大し、原の久保地区の墓域では、径20cmを超える内行花文鏡や小形仿製鏡が、大川地区の墓域からも銅釧や鉄矛などが見つかった。

古墳時代前期には、集落の解体が始まる。解体の一つの原因は、交易のルートの変化である。古墳時代前期以降には、博多湾沿岸に交易の拠点が移ったのであった。カラカミ遺跡や車出遺跡群の集落も大体同時期に衰退している。

次に、壱岐島西北の拠点集落であるカラカミ遺跡をみよう。カラカミ遺跡は弥生時代中期後葉から後期後半まで存続する。カラカミ遺跡も原の辻遺跡同様、東亞考古学会によって調査された経緯があり、学史的に古い段階から大陸交渉において重要な遺跡であることが認識されてきた。周辺が可耕地である深江田原に立地する原の辻遺跡に対し、丘陵頂部に位置するカラカミ遺跡周辺には可耕地が存在しない。一方で、遺跡南側の刈田院川を下ると湯本湾に達することから、漁撈活動が可能な立地であり、このことは本遺

跡土層出土の魚貝類や骨角器によっても窺える。また、鉄器生産遺構や土器の胎土分析から、原の辻遺跡とは異なる、カラカミ遺跡独自の交易網の存在が指摘されている（宮本編2013）。

カラカミ遺跡は環濠の掘削に基づく、大きく二段階に分けることができる（図4）（宮本2022）。弥生時代

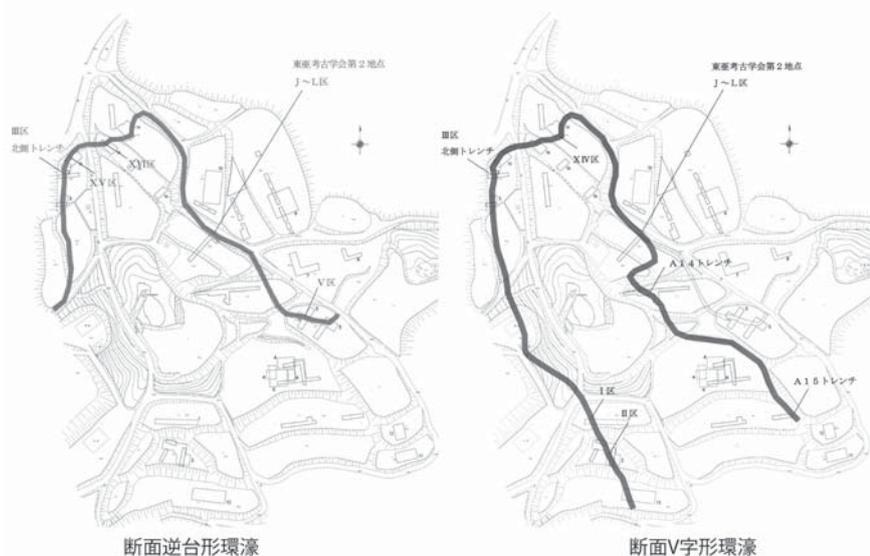


図4 カラカミ遺跡における環濠の変遷  
（宮本2022を改変）

中期後葉（須玖Ⅱ式段階）には、断面逆台形環濠が掘削され、現状ではカラカミ神社の丘陵を中心とした地域の北側を大きく囲んでいる（図4左）。環濠内の東側では、鍛冶炉を持つ可能性のある住居址群が発掘された。また、本遺跡第2地点（東亞考古学会調査、小川貝塚）出土の細頸壺は、この段階（紀元前1世紀頃）の楽浪土器である（宮本2020）。

断面逆台形環濠の廃棄・埋没後、掘り直され、弥生時代後期（高三瀆式から下大隈式段階）に主に使用されたのが、断面V字形環濠である（図4右）。遺跡北部では、前段階の断面逆台形環濠に沿う形である一方で、東西いずれでも南下していく様子が確認できる。前段階よりも若干西側で鍛冶炉が見つかったほか、北側の環濠外ではベンガラ生産がなされていた（村上ほか2019）。また、同地点からは、「周」銘文を持つ瓦質系の折腹盆が出土したが、遼東・山東系土器であり、後漢中・後期に相当し（宮本2020）、下大隈式に併行する。こうしたものは、カラカミ遺跡の集団が、交易を生業の一つとしていたことを示すものである。

カラカミ遺跡と同じく、中期後葉から後期後半まで存続し、壱岐島の中心部に位置するのが車出遺跡群である。本遺跡群は、原の辻遺跡を流れる幡鉾川上流5kmの小さな平野部に位置する。本平野部を取り囲むように、車出遺跡、大谷遺跡、戸田遺跡、田ノ上遺跡、鉢形遺跡が登録されていたが、調査の結果、ほぼ同時期の遺跡と判明し、車出遺跡群と総称される。集落の実態は解明されていない部分が多いが、方格規矩鏡、小型仿製鏡、貨泉などの青銅器（安楽編1998）のほか、壱岐独特の石製支脚であるクド石が多く出土している。近年の調査では、1地点から50個体分を超える袋状口縁壺、さらには鉄関連資料が発見されるなどの成果が得られている（田中・松見編2022）。また、本遺跡群に含まれる墓地と考えられるのが、山中遺跡（図1-10）であり、車出遺跡群の西北400mに位置する。甕棺墓2基、箱式石棺墓1基などが発掘され、甕棺墓は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭頃に位置づけられる。箱式石棺墓からは碧玉製勾玉や鉄剣が発見され、3世紀末から4世紀中頃とされている（白石編1999）。

以上の3遺跡以外では、壱岐島北部の砂州状に延びる海岸部に位置する、天ヶ原セジョウ神遺跡（図1-11）が特筆される。海岸波打ち際の石祠の下、地下80cm程度から中広形銅矛3本が発見された（岩永1985）。埋納時の配置法は不明であるが、対馬と対照的に銅矛の出土例が少ない壱岐にあって貴重であり、対馬との関係を考える上でも重要である。当時の壱岐島の様子を、『魏志』倭人伝は、「方可三百里、多竹木叢林、有三千許家。差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糶」（広さは三百里四方で、竹や木の茂みが多く、三千ほどの家がある。田畑は少しあるが、耕作地が不足しており、南北に海を渡って食料を買い入れている）と記している。特に「南北市糶」は上述の原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡群に見られた、対外交渉の様子を髣髴とさせるものであり、その後の壱岐の歴史をも貫くものであった。

### 3) 古墳時代～古代

原の辻遺跡では古墳時代前期の3世紀後半から4世紀前半にかけての竪穴住居址、片苗イシロ遺跡（図1-12）では古墳時代中期の5世紀前半の竪穴住居址が発見されている（平川編1987）ものの、壱岐島における古墳時代の生活遺跡は限られたものである。また、墳丘を伴う前期古墳の存在は確認されておらず、5世紀後半における大塚山古墳（図1-13）が最古の古墳となる。大塚山古墳は深江田原の北側に位置する、竪穴系横口式石室を持つ円墳であり、直径約14m、高さ約1.4mを測る（山口編2012）。

6世紀中葉以降には、前方後円墳である対馬塚古墳（図1-14）、双六古墳（図1-15）が築かれ、その周辺で6世紀末から7世紀前葉に、笹塚古墳（図1-16）、鬼の窟古墳（図1-17）、兵瀬古墳（図

1-18)、掛木古墳(図1-19)が造営されるようになる。以上の6基が国史跡の壱岐古墳群であり、島中央部の国分から亀石地区を中心に分布している。さらに、これら古墳の周辺には多数の群集墳が築かれている。対馬塚古墳は湯本湾を見下ろす標高90~100m程度の丘陵上に位置し、墳丘の全長は63mである。2室構造両袖式の横穴式石室を持ち、石室内2か所に線刻による装飾がある。須恵器を含む土器類の他、武器・農耕具・馬具などの鉄器やガラス製品が見つまっている。双六古墳の墳丘長は91mで、長崎県下最大規模である。2室構造の両袖式横穴石室に、短い羨道部が付属する。前室右側壁に線刻による船の装飾が見られる。土器類のほか、金銅製単鳳環頭大刀柄頭、金銅製圭頭大刀柄頭などを含む数多くの遺物が発見された。笹塚古墳、鬼の窟古墳、兵瀬古墳、掛木古墳はいずれも円墳である。鬼の窟古墳は、1953年における本報告の原の辻遺跡第2次調査と同時期に、東亜考古学会によって調査された経緯を持つ。直径45m、墳丘高13mの円墳であり、複室両袖型横穴式石室を持つ。出土遺物としては土器類の他、鉄鏃などがある。出土須恵器から考えると、初葬が6世紀後葉~末、追葬が7世紀代を通じて行われたと考えられている(宮本編2018)。これらの壱岐古墳群は、6世紀後葉~末の島内における古墳の秩序では、最上位に位置づけられる。

鬼の窟古墳と同様の複室両袖型横穴式石室を持ちながらも、全体的に小型化した様相を呈するのが、墳径約16mの妙泉寺7号墳(図1-20)であり、壱岐古墳群に準ずる上位層の所産と考えられる。妙泉寺古墳群は鬼の窟古墳から東に2.5km程度の距離にあり、東亜考古学会の調査では1号墳から8号墳までの存在が確認されている。7号墳からは土器類のほか、刀剣や農耕具などの鉄器が出土している。墳丘や石室の規模から考えて、妙泉寺7号墳のさらに下位に位置づけられるのが、百合畑古墳群(図1-21)や百田頭古墳群(図1-22)といった群集墳である。前者は前方後円墳5基、円墳16基などで、後者は円墳8基で構成される。このような6世紀後葉~末の島内における古墳の集中的造営には、最上位の壱岐古墳群で多くの新羅土器が出土していることを考え併せると、当時の対新羅をめぐる軍事的緊張関係の増加が影響しているといわれる(宮本編2018)。

こうした古墳の造営は7世紀前半には減少し、7世紀中葉前後に一旦終焉を迎える。7世紀後半には、663年の白村江の戦いにおける敗戦によって、壱岐に烽と防人が置かれた。また、『延喜式』などの記録によると、7世紀末頃から存在していたと考えられる壱岐直の氏寺が整備され、8世紀後半以降に壱岐嶋分寺(図1-23)が成立した。壱岐嶋分寺跡出土の軒丸瓦は、平城京出土品と同範であることが知られている(高野編1991)。嶋分寺跡は壱岐古墳群の近くに位置し、この付近が壱岐島の政治的中心であり続けたことが知られる。また、古代の遺跡として知られる、島北端の串山ミルメ浦遺跡(図1-24)では、卜占に使用された亀卜甲と大量のアワビ貝殻が出土した。亀卜甲は平安時代に朝廷に出仕した壱岐卜部を示唆するものである。原の辻遺跡では、越州窯系青磁や白磁などの初期貿易陶磁器が出土している(山下・川口編1997)が、川原畑地区では古代の道路状遺構が検出され、壱岐国成立前後の8世紀初頭の施工年代が推定される(山下・川口編1997)。さらに、高原地区では5点の木簡が出土し、官街内の活動を示すものと考えられている(平川1995)。これらは、その出土地点と、初期国府比定地の大川地区や印通寺港を結ぶ、当時の駅道を考える上で示唆的である一方、明確なルートの復元については保留されている(河合2021)。

平安時代の寛仁三年(1019)には刀伊の入寇があり、鎌倉時代の文永(1274)・弘安の役(1281)でも壱岐は大きな損害を被った。また、14世紀後半には倭寇の根拠地の一つとなった。このように、原の辻遺跡やカラカミ遺跡に顕著に現れる大陸との交渉は、その後の壱岐の歴史においても一つの軸をなしていたことが理解されるのである。

## 引用文献

- 安楽勉編1998『車出遺跡』長崎県教育委員会・郷ノ浦町教育委員会
- 安楽勉編1999『閨繰遺跡』長崎県教育委員会
- 岩永省三1985「天ヶ原遺跡出土の銅矛について」『申山ミルメ浦遺跡』長崎県勝本町教育委員会、17-22頁
- 河合恭典2021「官道をゆく～古代律令制度下における壱岐国の体制～」『古代世界の中の壱岐』壱岐市教育委員会、76-110頁
- 川道寛・古澤義久編2016『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター
- 白石純悟編1999『山中遺跡』郷ノ浦町教育委員会
- 高野晋司編1991『壱岐嶋分寺1』長崎県芦辺町教育委員会
- 田中聡一・松見裕二編2022『車出遺跡群1次〔I区・II区〕久保頭古墳・双六古墳隣接地』長崎県壱岐市教育委員会
- 長岡信治・鳥井真之・林信雄2005「原の辻遺跡周辺の地形地質」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』長崎県教育委員会、1-13頁
- 長崎県教育委員会1985『名切遺跡』長崎県教育委員会
- 平川敬治編1987『片苗インロ遺跡』勝本町教育委員会
- 平川南1995「長崎県壱岐郡原の辻遺跡出土の木簡」『原の辻遺跡 幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会、1-7頁
- 福田一志・中尾篤志編2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』長崎県教育委員会
- 古澤義久2014「玄界灘島嶼域を中心にみた 縄文時代日韓土器文化交流の性格」『東京大学考古学研究室研究紀要』28、27-80頁
- 古澤義久2017「壱岐市名切遺跡出土韓半島系土器について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号、pp48-58
- 松見裕二編2013『原の辻遺跡一原の辻遺跡出土資料集成一』壱岐市教育委員会
- 宮崎貴夫2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』4、53-79頁
- 宮本一夫2020「遼東・山東系土器と楽浪系土器からみた弥生時代後半期の国際関係」『史淵』第157輯、31-55頁
- 宮本一夫2022「カラカミ遺跡から広がる交流ネットワーク」『カラカミ遺跡 総括編Ⅰ』長崎県壱岐市教育委員会、457-491頁
- 宮本一夫編2013『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 宮本一夫編2018『壱岐原の辻閨繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- 村上恭通・中西眞・高田潤2019「カラカミ遺跡で検出したベンガラ焼成炉について」『市史跡カラカミ遺跡6次 市史跡カラカミ遺跡7次 国特別史跡原の辻遺跡』長崎県壱岐市教育委員会、179-187頁
- 山口優編2012『壱岐の島の古墳群～現状調査』長崎県壱岐市教育委員会
- 山下英明・川口洋平編1997『原の辻遺跡・安国寺前 A 遺跡・安閣寺前 B 遺跡』長崎県教育委員会

## 第2章 東亞考古学会による原の辻遺跡調査の経緯

宮本一夫・松本圭太

### 1. はじめに

1926年に組織された東亞考古学会は、1927年の遼東半島の高麗寨遺跡や単砒子遺跡の発掘調査を皮切りに、日本の中国東北部への権益の拡大に伴い、黒龍江省東京城、内蒙古の赤峰市紅山後遺跡や元の上都の発掘調査に拡大する。さらに、1937年に始まる日中戦争後は、山西省や河北省の調査に拡大し、1941年の前漢の萬安北沙城の調査まで続いている（宮本2017）。戦後、大陸での調査を失った東亞考古学会では、東京大学の駒井愛和が鞆鞆との関係を求め、北海道のオホーツク文化の発掘調査に移った。一方、京都大学の水野清一は、朝鮮半島に近い対馬、壱岐、唐津での調査を行うこととした。

その皮切りは、1951年の9学会による対馬の総合調査であった（水野・樋口・岡崎1953）。その帰りに立ち寄り調査が行われたのが、壱岐の原の辻遺跡の第1次調査である（表1）。その調査は、原の辻遺跡の集落の本体部分にあたる低丘陵部の東北端にトレンチを設定した（図5）。上下の2層に分層され、その上層の土器が、弥生中期の須玖式と後期の高三瀦式の中間の土器型式として、原の辻上層式と呼ぶべきとされた（水野・岡崎1954）。なお、第1次調査の発掘地点は、1939年に鴫田忠正氏による発掘調査地点（鴫田1944）に隣接して設定されている（高倉1982）。

1952年のカラカミ遺跡の調査（宮本編2008・2009・2011・2013）を経て、1953年から本格的な原の辻遺跡の発掘調査が始まっている（表1）。第2次調査である。この調査は、集落遺跡の中心部分に位置しており、東西方向に四つのトレンチが配置された（図5）。また、第5地点では甕棺墓が検出された。第2次調査時には、壱岐全島の一般調査も併せて行われ（表1）、妙泉寺古墳群や鬼の窟古墳の発掘調査も実施されている（宮本編2018）。

1954年には、春と夏の2回にわたって発掘調査がなされ、前者が第3次調査、後者が第4次調査である（表1）。第3次調査は、1953年3月に土木工事に際して、石田地区の墓群から銅剣・銅矛が発

表1 東亞考古学会による壱岐島調査一覧

年度	遺跡名	調査区	調査期間	団長	参加者
1951(昭和26)	原の辻第1次調査		7.24~8.7	水野清一	金関丈夫、藤田国雄、岡崎敬、高橋猪之介、西谷眞治、森貞次郎ほか
1952(昭和27)	カラカミ遺跡	第1トレンチ 第2トレンチ	7.25~8.11	水野清一	藤田国雄、岡崎敬、高橋猪之介、金関恕、金関丈夫、森貞次郎
	一般調査		7.25~8.10		樋口隆康、林巳奈夫、西谷眞治ほか
1953(昭和28)	原の辻第2次調査	第1トレンチ 第2トレンチ 第3トレンチ 第4トレンチ 第5地点（甕棺出土）	7.24~8.12	水野清一	有光教一、岡崎敬、樋崎彰一、藤田国雄、金崎丈夫、森貞次郎、高橋猪之介ほか
	一般調査	妙泉寺古墳群 鬼の窟古墳	7.26~8.10	水野清一	樋口隆康、林巳奈夫、西谷眞治
1954(昭和29)	原の辻第3次調査	閩隸遺跡	3.22~3.26 4.11~4.20	水野清一	西谷眞治、金関恕、Kidder
	原の辻第4次調査	第Iトレンチ 第IIトレンチ 第IIIトレンチ 第IVトレンチ 銅剣・銅矛出土地（推定）	7.18~8.18		藤田国雄、岡崎敬、高橋猪之介、金関恕ほか
1961(昭和36)	原の辻第5次調査	第1・4・5トレンチ 第2・3トレンチ	7.22~8.11	水野清一	岡崎敬、潮見浩、三木文雄、藤田国雄、高橋猪之介、秋山進午、西谷正

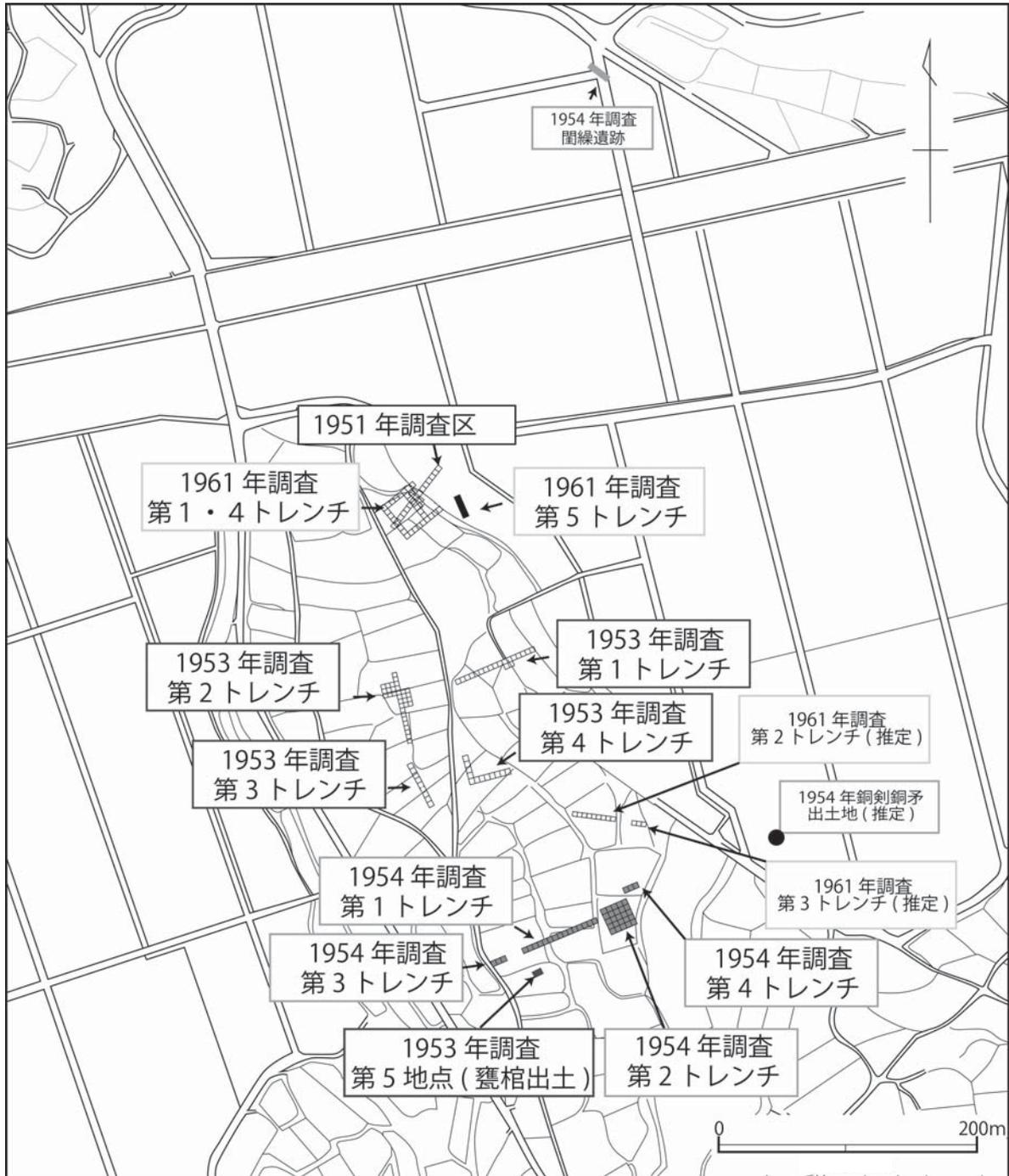


図5 東亞考古学会による原の辻遺跡調査地点 (縮尺1/5000)

見されたことにより、同年4月に現在で言う緊急発掘調査的な位置づけで、閩線地区において石棺墓と甕棺墓の発掘調査がなされたものである(宮本編2018)。同年7・8月には、本来の調査目的であった集落部分の調査を行い、低丘陵部の南側部分に四つのトレンチを設定した(図5)。

1961年には、東亞考古学会としては最後の調査である第5次調査が実施された。第1次調査区を囲むように「口」の字型のトレンチである第1・第4トレンチが設定された。さらにその東に第5トレンチである。原の辻上層式を検討するために、第1次調査と同じ地点にトレンチが設定されている。さらに、1954年銅剣・銅矛出土地の西側に第2トレンチと第3トレンチが設定された。この第5次

調査が東亜考古学会としても最後の調査となった。

以下に、調査日誌（抄）を掲載する。

## 2. 原の辻遺跡調査日誌（抄）

### (a) 第1次調査

1951年（昭和26年）

7月21日 晴

京都、水野清一宅に高橋猪之介、藤田国雄が集合。今後の壱岐調査について、水野よりおおよその指示を受ける（現場監督および報告書における遺跡説明は森貞次郎に依頼する旨、調査費ほか）。同日午後、測量道具等を博多に搬送。

7月22日 晴

高橋、藤田が京都を出発する。

7月23日 晴

兩名博多着。森貞次郎、岡崎敬、金関教授令息（金関恕？）が出迎える。夕刻より県職員会館にて打ち合わせ（参加者：金関丈夫、森貞次郎、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治、藤田国雄、西日本新聞記者）。

7月24日 晴

参加者：金関丈夫、森貞次郎、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治、藤田国雄。8時に大衆丸にて博多出発。

午後12時、郷ノ浦到着。壱岐全景を南方より撮影。曾野壽彦、山口麻太郎らとともにバスにて安国寺へ。山口の案内で原の辻遺跡の予備踏査を2時間程度行い、トレンチ設定地の見通しを立てる。黒曜石片、土器片、石鎌破片を得た。下村光春、鮎川昭ら来訪。

7月25日（水） 晴

午前、第1班（金関、高橋、森）は田河町役場に向かい、町長（松永利光）に挨拶。その後、郷ノ浦役場にて、教育庁出張所主事（長島泰雄）、土木課長（佐田清吉）に挨拶し、発掘機材を借用。第2班（岡崎、藤田、川端）は高校生3名（増田義一、野本土廣、後藤精二）に竹べら作製を依頼。地主ら（西川栄治、高田友満）に挨拶、交渉し、発掘許可を得る。その後、石田村平触の合口甕棺出土地を地主（山口良明）の案内にて踏査、付近の鬼の窟古墳を見学。

午後、岡崎、藤田、川端、森が田河中学校に赴き、校長代理に挨拶。鴫田忠正、たばこ屋（藤江トセ）が来訪。藤江により土器4個が提示される。

7月26日（木） 晴

調査員：金関丈夫、森貞次郎、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治、藤田国雄、山口麻太郎、鴫田忠正、藤岡謙二郎、平山敬治郎、後藤綱賀、下村光春、林（深江中学校教官）。壱岐高校生として後藤義輝、亀井寛、竹下三郎、長崎大学生として吉富孝汎が参加。毎日新聞、西日本新聞記者が来訪。

9時半、作業開始。地主（西川栄治）立会の下、2m×30mの発掘地点を決め、第I地点と命名。午後、2m幅に各区画をa～oと命名、全ての表土を剥ぐ。約一尺掘ると、黒灰色有機土を確認、a～c、f～hをさらに掘り下げるが、遺物層に至らず。表面採集にて黒曜石片、突帯を有する土器片を得る。対馬調査から藤岡謙二郎が来訪、原の辻遺跡周辺の地形、岩石を観察、所見を述べる。

夕刻、付近（別地点）の土地所有者の案内にて、包含層、甕棺露出面などを見学。

7月27日（金） 晴

午前、金関、高橋は石田村長（松永英太郎）に挨拶、同村印通寺君ヶ浦の黒曜石露出部を調査。

調査員：森貞次郎、岡崎敬、川端眞治、藤田国雄、藤岡謙二郎、鴫田忠正。深江中学校林教官以下中学生13名、武生水高校生8名（村上成義、池内春俊、野本土弘、後藤義輝、日高弘隆、山内キヨ子、竹内ミサ子、吉本夕子）、長崎医大学生（大蔵元廣）、作業員（中村吉彦、松野秀吉）。午後より高橋が調査に加わる。

午前、昨日に続き、a～c、f～hをさらに掘り下げる。褐色土層（約1m）下に黒色土層を確認。褐色土層より、漢式土器破片？、鉄銚？（b区）、土錘（g区）が出土。

午後、黒色土層より、土器、獣骨（b区）、甕棺、壺、獣骨（h区）を検出。川端、林によりa～o区の標高を測定。

上記他、かやの実？（b区）を検出、採取した。

7月28日 晴

調査員：金関丈夫、藤田国雄、川端眞治、高橋猪之介、森貞次郎、岡崎敬。深江中学校林教官、田河中学生18名、壱岐高校生8名、作業員2名。

a区南壁にてイノシシ前膊骨（深さ75cm）、その上部にて漢式土器（深さ35cm、55cm）を検出。b区にて、石囲い内に粘土を巻いた土器を検出。e・f区境界（川端、高校生、作業員）にて、高坏坏部、壺口縁部を検出。h・g区（岡崎、川端、藤田）にて、昨日検出の甕棺を掘り下げ、埋置状況を確認。その周辺に甕、壺、イノシシ下顎骨を検出。壺のみ取り上げる。g区黒色土層上部排土内で鉄器採集。午後3時、水野清一が現場に到着。

7月29日 晴

調査員：金関丈夫、水野清一、藤田国雄、高橋猪之介、川端眞治、森貞次郎、岡崎敬。壱岐高校生7名、福岡高校生7名、作業員2名、青年団2名。午前のみ林教官および中学生6名。

午前、a・b・c区にて甕棺？を検出。f区の土器包含層清掃、下方に土器、甕棺、イノシシ歯を検出。g・h区にて甕棺実測（川端）。m・l・k区（林教官および中学生）にて、掘り下げ。

午後、a・b・c区を掘り下げ。a区より、漢式？土器片検出。c区より古伊万里が検出（深さ80cm）され、かなりの攪乱が認識される。h区の北側に2×2mの拡張区設定。拡張区を1m掘り下げると、遺物層に到らず。m・l・k区は深さ1.5mにて遺物層が断絶。l区にて小甕棺（深さ90cm）、炭化穀物検出。

7月30日 晴

調査員：水野清一、森貞次郎、藤田国雄、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治。壱岐高校生7名、福岡高校生10名、深江中学生3名、作業員2名。午後3時より、福岡学芸大学生3名が加わる。

午前、b区にて甕棺清掃、写真撮影、実測（藤田）。c・d区を南壁に沿って幅1mで約2m掘り下げ（森、福岡高校生）。e・f区にて土器堆積を実測（岡崎）。g・h区の北側に接する拡張区（h区に接する2×2mのp区および、g区の西半分）に接する1×2mのq区）を設定。k・l・m区を南壁に沿って幅1mで掘り下げ（鴫田、深江中校生）。

午後、宿舎にて土器洗浄。

黒土層（第一包含層）は表土下80cm、厚さ40cmであるが、k・l区ではやや薄い。c・d区では、黒土層下に厚さ約80cmの非包含層があり、その下に須玖式土器を含む第二包含層が見いだされた。非包含層はf区においては厚さ20cmである。p・q区境界付近に完形土器が多く検出された（器台3、壺3、小壺4）。k・l・m区では2m以上掘り下げたが、包含層は認められなかった。m区南壁面の

黒土層より小児甕棺口縁部検出。

7月31日 晴

調査員：水野清一、森貞次郎、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治、藤田国雄、鴫田忠正、日高顕。福岡学芸大学生3名、福岡高校生6名、壱岐高校生10名、作業員2名。

b区平面、断面実測（藤田）。d区第一包含層下を掘り下げ、約50cmで第二包含層に到り、須玖式丹塗り壺、甕を検出（福岡高校生）。f・g区清掃（福岡高校生）。p・q区清掃（高橋、川端、福岡学芸大学生）。1m区掘り下げ、岩盤にあたる（壱岐高校生）。日高および壱岐高校生が測量を開始し、斜面の高低測量を岡崎、川端が行った。

8月1日 晴

調査員：水野清一、森貞次郎、高橋猪之介、藤田国雄、川端眞治、岡崎敬、鴫田忠正、日高顕。金関恕（3時到着）。福岡学芸大学生3名、福岡高校生6名、壱岐高校生、作業員3名。

午前、i・j区間を貫通（作業員3名）。h・p・q・r区を清掃、q区東よりガラス小玉1点検出（川端・高橋・岡崎）。f・g区を1m下げ、下層土器（須玖式）層を検出（福高生）。c・d区も掘り下げ、下層土器層に到る。b区にて小甕棺実測（藤田）、断面実測（森）を行う。

午後、r区で銅鏃、石剣片検出（芸大生：鷹野重三）。b区甕棺周囲の配石状況確認（藤田・岡崎）。写真撮影（高橋）、断面実測（森）を行う。

8月2日 晴

調査員：水野清一、森貞次郎、藤田邦夫、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治、金関恕、鴫田忠正、日高顕。壱岐高校生8名、作業員3名。（婦人会にて水野講演。）

b区の甕棺取り上げ。甕棺の第2包含層への食込みを確認、外側よりイノシシ歯2点採取（藤田）。e・f区にて、第一層土器を採取、掘り下げ（岡崎、水野）。f区第一包含層より棒状鉄製品、石斧、貨泉（壱岐高校生前田徹文）、鉄斧（中村吉吾）発見。e・f・g・h区の俯瞰撮影後、甕棺周辺の土器片を取り上げ、周囲を掘り下げる。直下に須玖式土器口縁部を多数検出。p・q区にて実測（川端、金関）、r区を清掃。i・j区では、第一包含層が薄く、第二包含層に直ちに達した。須玖式土器、石包丁片を検出。地形実測を日高、鴫田、壱岐高校生3名にて行う。

8月3日 晴

調査員：水野清一、森貞次郎、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治、金関恕、藤田国雄、鴫田忠正、日高顕。壱岐高校生16名、作業員3名。（水野、石田村長松永英太郎を午前に訪問。）

a・b・c・d・e・f・g区掘り下げ。第一、第二層土器取り上げ（藤田、岡崎、壱岐高校生）。砥石検出。c・i・j区実測（岡崎）、i区第二層土器取り上げ。p・q区実測（川端、金関）完了後、第1層土器取り上げ（川端、金関、高橋、岡崎、藤田）。鉄鏃、管玉4点、石剣検出。j・k区第二層まで掘り下げ（作業員2名）。日高、地形実測を続行。第一、第二層の断面にて堆積状況調査（森）。

8月4日 晴

調査員：水野清一、森貞次郎、藤田国雄、高橋猪之介、岡崎敬、川端眞治、金関恕、鴫田忠正、日高顕。壱岐高校生9名、作業員3名。

早朝より、r区およびh区甕棺断面実測（川端、金関）。a区第一層にて須玖式土器検出、午後、蹲った犬？の遺体を検出（森、水野）。d区掘り下げ。第二層下は青色粘土層であり、本層底に木実、葉を含む有機層検出。g区基盤層確認。h区甕棺内清掃、甕棺内より玉1点、鉄製品1点（高橋、川端、金関）、頭蓋骨、臼歯、犬歯等検出（岡崎により実測）。p・q区掘り下げ、銅鏃1点、凹石1点、魚骨検出。j区にて石剣出土、基盤層を確認。r区に2×2mの拡張区を設定。夕刻、人骨および犬？

骨出土状況を写真撮影（高橋）。

8月5日 晴

調査員：水野清一、森貞次郎、藤田国雄、高橋猪之介、岡崎敬、鵜田忠正、日高顕、川端眞治、金関恕。壱岐高校生6名、作業員3名。

a区にて昨日検出した犬骨を実測（金関）、午後取り上げ（森）。掘り下げ、基盤層を確認。a区東壁側半分では、第一、第二層土器が混在、基盤上の青色粘土層に達する。h区の甕棺、人骨の取り上げ。ガラス玉3点発見。上下棺接合部にのみ粘土がみられ、甕棺下の施設は確認できず。I・J区にて赤褐色の焼土面を辿ると、h・i区境界から急に下降する状況を確認。p・q・r区では同深度で焼土を確認できず。p・q区全体を30cm掘り下げ、第二層土器を少量、黒曜石鏃1点確認。r区にて第一層土器、器台（完形）、カマド石を採集。h・r区境界にて、壺（ほぼ完形）が斜下向きで確認され、壺内部に粗粒が多数認められた。本来、第一包含層に属するものが倒れたものと認識。

トレンチ周辺部の地形測量完了、本遺跡発掘も完了。

8月6日 晴

二班にわかれ、一班（水野、森、高橋、藤田、川端、金関）は印通寺にて松本コレクション調査、もう一班（岡崎）は埋め戻し作業。田河村深江青年団有志によって、午後7時半終了。他に、r区第二層の土器片、獣歯取り上げ、土器水洗作業を行う。

8月7日 晴

午前、森は印通寺へ向かい、水野は田河町役場に挨拶。高橋、岡崎は石田村役場にて松本友雄コレクションの実測、撮影。

午後、水野、高橋、藤田、川端、金関が武生水支庁に挨拶。山口氏宅にて原の辻の遺物を実測、撮影。岡崎、安国寺にて遺物梱包。

8月8日 晴（船中、福岡で夕立）

午前、バスにて郷ノ浦へ。11時30分出航。3時博多入港。森が高校生2名とともに出迎え。裏辻憲道氏宅で休憩後、西日本新聞社の加藤氏を訪問。19時解散。

## (b) 第2次調査

1953年（昭和28年）

7月23日 晴

参加者：水野、有光、岡崎、藤田、川端、林、Elligiers、高橋、榎崎、松田、赤司

8時、霧島丸にて博多出航。森貞次郎氏見送り、朝日新聞社写真班松田氏、貴社赤司氏同行。

12時半、郷ノ浦着。山口麻太郎氏、石田小学校林氏らと打ち合わせ。岡崎、川端、林、高橋、藤田が荷物とともに宿舎安国寺へ。林、川端は安国寺に残る。水野、山口、Elligiers、有光、榎崎は壱岐支庁、那賀村村役場、瀧山敏（平山医院）に挨拶、鬼の窟古墳見学後、安国寺到着。藤田、高橋、岡崎が田河村小学校、田河町役場に挨拶。夕刻、原の辻遺跡現地予備調査。

7月24日 晴

参加者：水野、有光、高橋、岡崎、藤田、樋口、Elligiers、林、後藤マラソン翁、松田、赤司、田河中学校教員（1名）・生徒（20名）

岡崎、藤田による表面採集にて黒曜石鏃、漢式土器片など発見。トレンチ（A～Q区）設定（34×2m）後、表土剥ぎ。F区地表下10cmにて貝層検出。

7月25日 快晴

参加者：水野、有光、高橋、藤田、岡崎、Elligiers、榑崎、赤司、ほか学生・作業員など22名

A～G区掘り下げ。A～E区まで地表下1mまで土器細片含み、1m附近より破片大きくなる。いずれも黒褐色土層。砥石、猪歯、漢式土器口縁部（D・E表土層）、石包丁、黒曜石片出土。

7月26日 快晴

参加者：岡崎、榑崎、藤田、Elligiers、田河中学校教員（1名）・生徒（12名）

F、G区それぞれに2×2mの拡張区設定（F1、G1）。G1区より鉄鎌、須玖、高三瀦式土器片出土。E区より遠賀川式甕片、F区より須玖式土器片、G区貝層より高三瀦式土器片出土。

7月27日 快晴

参加者：水野、高橋、藤田、榑崎、岡崎、有光、後藤綱賀、赤司、松田、ほか学生・作業員など19名

N7とN8の間、直角に16m延ばし、4mさらに東に延ばす（第2トレンチ）。I、J区、粘土層に到る。高橋、遺跡附近撮影。

7月28日 快晴

参加者：水野、岡崎、榑崎、高橋、Elligiers、藤田、後藤、林、松田、赤司、ほか学生・作業員など21名

第2トレンチを16m延長、K～R区とする。B～C区にて須玖式土器層の下に遠賀式川土器確認。D～J区にて竪穴住居址存在の可能性。I区にて猪牙、K区にて敲石、L区にて石錐発見。

7月29日 快晴

参加者：水野、有光、高橋、藤田、榑崎、金関、岡崎、渡邊正氣（九大）、山田清（学芸大）ほか学生・作業員など17名

第2トレンチ？：B・C区にて遠賀川式土器層検出。E・F区にて炭化粉相当数出土。K～Q区排土作業。K～M区において、少量の須玖式土器細片および炭化物含む黒色土を掘り下げ、赤土粘土基盤層に達する。P区にて小型クド石、凹石検出。

7月30日 快晴

参加者：水野、有光、藤田、高橋、榑崎、金関、岡崎、Elligiers、佐藤、渡邊正氣（九大）、山田清（学芸大）ほか学生・作業員など23名

第2トレンチ：C区に接する拡張区（S・T・U区、各2×2m）を設定。F・H区より粉、K区より銅鎌（地表下78cm）を検出。P区は土器多く、鉄鎌出土。U区でも鉄鎌（地表下45cm）が出土し、排土中より鉄釘のようなもの検出。H・K・L・M区実測。

7月31日 快晴

参加者：水野、有光、岡崎、藤田、佐藤、金関、山田、森、高山、ほか学生・作業員など18名

第1トレンチ：貝層より砥石、石包丁2点出土。

第2トレンチ：E～G区に接する拡張区（E'・E''・F'・F''・G'・G''区、各2×2m）を設定後、拡張区掘り下げ、地表下60cmにて須玖式土器層。E'区にて石包丁検出。O・P・S・T・U区平面実測。M・N区境界にてガラス玉、O・P区境にて漢式土器片、Q区にて鉄鎌、鉄鋏、銅鏡出土。S・U区においても鉄器出土。

8月1日

参加者：水野、有光、高橋、藤田、榑崎、森、佐藤、高山、金関、山田、岡崎、ほか学生・作業員など37名

第1トレンチ：貝層（厚5～10cm）より高三瀦式土器、鉄片、漢式土器出土。貝層下の黒色土層

より須玖式土器多く検出。石包丁、磨製石器片、棒状土製品、骨製品、糲、獣骨も検出。

第2トレンチ：E～G区および拡張区E～G”区にて、円形竪穴住居の東・西・南壁を検出。直径5.20m、床面は地表下30cmで住居内より多くの糲、豆?を検出。他、石斧、鉄製品、遠賀川式・須玖式土器も検出。O・P区で敲石、漢式土器など、Q区で棒状鉄製品、麦、糲を検出。

第三、第4トレンチを設定。

8月2日 曇

参加者：水野、有光、森、岡崎、金関、藤田、佐藤、高山、山田、浦田、榑崎、ほか学生・作業員など39名

第2トレンチ：竪穴住居プランをほぼ確認。住居内埋土は、いずれも木灰・木炭を含む2層から成る。午後、床面および柱穴4基確認。柱穴no.1より遠賀川式土器片出土。床面より、須玖式土器片、片刃石斧、敲石、紡錘車、炭化物などを検出。住居外では、Q区より鉄片、OP区より漢式土器片出土。

第3トレンチ：A～H区掘り下げ。表土以下に土器片が含まれ、G区地表下90cmの褐色土層より石斧出土。F区より銅鏃出土。

第4トレンチ：A～E区約40cm掘り下げ。表土層、黒褐色土層に土器片が含まれる。表面付近にて鉄製品?採集。

8月3日 快晴

参加者：水野、森、金関丈夫、金関恕、藤田、岡崎、高橋、Elligiers、山田、榑崎、高山、浦田、佐藤、後藤、吉田（毎日記者）、ほか学生・作業員など22名

第1トレンチ：平面、断面実測。F区より瑇瑯片出土。

第2トレンチ：竪穴住居床面清掃、壁面検出作業。柱穴4基検出。E'・E”区北側では側壁検出できず。砥石、炭化物多数出土。

第3トレンチ：側壁を整え、1.1～1.2mまで掘り下げ。E区にて銅鏃出土。

第4トレンチ：E区より拡張するF・G区を設定。砥石、石鏃、抉入石斧、石斧出土。

榑崎、金関恕による地形測量（縮尺1/500）開始。（8月9日まで）

8月4日 晴

参加者：水野、金関丈夫、有光、森、高橋、藤田、榑崎、金関恕、佐藤、岡崎、石丸、鎌木、ほか学生・作業員など28名

第2トレンチ：竪穴住居の外周（G・I区）にて柱穴2基、石斧検出。E'・E”区の北壁は耕作で削平された可能性。午後、実測、土器取り上げ。

第3トレンチ：C区より水晶、土器蓋、E・G区より漢式土器、石包丁出土。

第4トレンチ：F・G区と同方向へH・I区を設定。A～E区について1.1mまで掘り下げ。F区・G区（1/3）3を60cm、G区（2/3）・H区を40cm掘り下げ。B区より石鏃出土。

8月5日 晴

参加者：水野、金関丈夫、有光、森、高橋、藤田、岡崎、榑崎、金関恕、佐藤、石丸、鎌木、ほか学生・作業員など26名

第2トレンチ：竪穴住居床面清掃。柱穴4基、炉跡?の検出。第2柱穴より獣骨、第7柱穴より銅鏃出土。住居外の、S・T・U区を粘土層基盤まで掘り下げ。基盤に接するように遠賀川式壺肩部（重弧文）出土。その上に須玖式を含む黒色有機土層が形成される。粘土層で複数の柱穴を検出。

第3トレンチ：黒色土層掘り下げ完了。柱穴複数を検出、11個まで埋土除去。E区より石包丁、F

区より鉄器出土。

第4トレンチ：C・D・E区について黒土層（須玖式単純層）まで掘り下げ。E区より石鎌、F区より鉄器出土。

第5トレンチ：甕棺遺構。口縁部を下に向けた須玖式甕を単独検出。上半部（底部）は破損、内部に落下し、甕棺内部の土は粘質の少ない黄褐色を呈する。甕取り上げ後、地山を掘り込んだ、直径70cm、深さ70cmの埋置用竪穴土坑を検出。赤褐色に焼けた土壌底部の上に、順に黄褐色粘土、青色粘土を敷いて甕棺を埋置。竪穴および敷き粘土は南に傾けて形成されており、南端の甕口縁部は地山にほぼ接するが、北側は12cm高く据えられていた。なお、土坑東側1/4にて、後代の火葬人骨および副葬小皿2枚を検出した（金関丈夫、有光教一）。

8月6日 快晴

参加者：調査者未記入、ほか学生・作業員など38名

第2トレンチ：S・T・U区およびD・E区に接する拡張区D1・D2・D3・E1・E2・E3区を設定。拡張区より凹石4点検出。3点は同一面上。拡張区は中央付近に土器片が密集するほか、鉄片、漢式土器片、石斧？を出土。竪穴住居に関して、E区の柱穴位置をやや南側に変更（37×32cm、深さ35cm）。柱穴より鉄片、土器片、石包丁を得た。P・Q区より石剣片出土。

第3トレンチ：側壁を整える中で、柱穴1、2基を検出。

第4トレンチ：A区に接するS・T・U区を設定。S・T・U区を掘り下げ。表土を含む40-50cmに殆ど土器は無いが、砥石を出土。A～E区を清掃、D・E区実測。F～I区で黒土層に達する。G区で鉄片、H区で鉄片、青銅片検出。

森、金関、有光、Elligiers、岡崎により山口コレクションの調査を行う。

8月7日 晴

参加者：水野、金関丈夫、有光、森、高橋、岡崎、榑崎、金関恕、佐藤、鎌木、藤田、林徳衛ほか学生・作業員など15名

第2トレンチ：竪穴住居柱穴実測（岡崎）。D1～D3、E1～E3区を掘り下げ、黒色有機土層（須玖式以降の型式の土器を含む）から粘土層に達する。D1区のピット内にて青銅鏃（破碎）、D2区より銅釧、E2区より磨製石斧検出。

第3トレンチ：掘り下げ後、床面清掃。黒色土層で柱穴を新たに検出（計14基）。B区柱穴壁よりガラス丸玉を検出。

第4トレンチ：S・T・U区を掘り下げ。A・B区清掃。D・E区の3つの土器群取り上げ。G・H区掘り下げ。I区より土器群2つ検出。うち一つでは漢式土器片、須玖式甕片、高三瀝式甕を確認。

8月8日 快晴

参加者：水野、金関丈夫、森、有光、岡崎、榑崎、金関恕、鎌木、佐藤、藤田、高橋、ほか作業員6名

第2トレンチ：D2・D3・E2・E3区の黒色土層を剥ぎ、粘土有機層に到る。D2・D3区にて約2.0m×1.0mの窪み、E3区で方形の焼土跡検出。D1・E1区より円形柱穴計13基発見。D2区より貝製玉発見。

第3トレンチ：実測終了（藤田）。

8月9日 快晴

参加者：水野、有光、岡崎、榑崎、金関丈夫、藤田、高橋、金関恕、森、鎌木、佐藤、Elligiers、赤司、ほか学生・作業員など22名

第2トレンチ：D2・D3・E2・E3区付近の粘土有機層を掘り下げ、粘土層検出。D2・D3区に窪み

があり、石斧、須玖式土器片が出土。P区にて柱穴確認。

第3トレンチ：午後より埋め戻し開始。

第4トレンチ：T・U区を掘り下げ。U区より骨製品片出土。S・A区土器検出状況実測。F・G・H・I区の土器片の取り上げ。F区より石包丁？出土。

甕棺下畑東面より漢式土器（図50-142）出土。

8月10日 晴

参加者：水野、金関丈夫、有光、森、高橋、岡崎、榑崎、金関恕、鎌木、Elligiers、藤田、ほか学生・作業員など14名（図版6-2）

第2トレンチ：D2・D3区掘り下げ。西面、南面の断面図作成。黒色土層の下の赤褐色粘土層を切り込む柱穴を確認。A～R区までの断面図作成。M・P区にてピット、柱穴、N区にて溝状遺構を発見。西側断面では、表土、黒褐色土層、赤褐色粘土層、黄褐色粘土層の順に確認でき、柱穴は赤褐色粘土層を切り込む。東側断面では赤褐色粘土層は明瞭ではない。

第4トレンチ：A・S区の土器取り上げ。S区より漢式土器片出土。T・U区を掘り下げ。T区より石鎌、U区より鉄片出土。E～I区清掃。I区西壁下より壺1点検出、E・F区西壁に沿って柱穴3基（第一～三号）、E区北側に柱穴1基（第四号）を検出。第一号柱穴にて土製紡錘車、土器片、第二号柱穴より土器片を検出。

8月11日 快晴

参加者：水野、岡崎、高橋、榑崎、鎌木、藤田、金関恕、ほか学生・作業員など15名。樋口、林、川端が古墳調査を終えて合流。

第1・第3トレンチ：埋め戻し完了。

第2トレンチ：K区土器分布状態実測、取り上げ。埋め戻し1/3程度完了。

第4トレンチ：A～E、S～U区において、黄褐色土層（基盤）まで掘り下げ。S区よりU区東端中央付近より、炭化糊の充満したピットを検出。南側壁面の断面図作成。（鍵状に延ばしたトレンチ床面に柱穴状ピット4基を確認。）

8月12日 快晴

各トレンチの埋め戻し

第4トレンチ：B区にて黒土層、間層、黄褐色土層の土器の状態を検出。U区の黄褐色土層に切り込むピットを検出。多量の木材、糊殻を取り上げ。

8月13日 快晴

調査員：水野、樋口、岡崎、金関恕、林、川端、榑崎、藤田、高橋、鎌木

11時、大衆丸に乗船。遺物（27箱）とともに郷ノ浦出発。15時博多着。一行寺泊。

8月14 快晴・15日 晴

各調査員、各地へ出発。

### (c) 1954年（昭和29年）

7月15日 雨

水野清一、高橋猪之介、藤田国雄、岡崎敬が京都を立ち（8時30分）、博多に到着（19時10分）。森、波多江、裏辻、毎日新聞記者吉田らが出迎え。裏辻宅にて、金関、渡辺を交えて打ち合わせ。

7月16日 晴

水野清一、高橋猪之介、岡崎敬、藤田国雄

水野は長崎県庁と打ち合わせのため、8時30分博多発。その他は8時博多港発、郷ノ浦12時30分到着。山口麻太郎、目良、後藤マラソン翁が出迎え、壱岐交通本社へ赴く。壱岐高校、国警、教育庁、支庁にて挨拶および車・機材借用。17時、壱岐交通本社を出発、安国寺到着。

7月17日 雨のち晴

高橋、藤田、岡崎、金関、林

午前中、田河町役場、石田町役場に挨拶。午後、金関到着。林の案内で遺跡踏査。

7月18日 雨のち晴

水野、藤田、岡崎、高橋

午前中、降雨のため休養。午後、水野が郷ノ浦公民館（山口麻太郎）、支庁長（谷口傳）、教育庁出張所を訪問。高橋は会計事務を、藤田、岡崎、金関は遺跡踏査および発掘地の選定を行った。昭和28年甕棺出土地の北の畑にて漢式土器片を採集し、この畑を一応の発掘地として選定した。2×16mのトレンチを傾斜沿い（東西方向）に通すことにした。数か所の湧水点が見いだされ、これと弥生時代水田の開発の関係、水田開発の状態、順序の復元を問題として認識する。

7月19日

記録なし

7月20日 快晴

水野、高橋、藤田、金関、岡崎、佐藤英美、ほか作業員・学生13名

吉富藤作所有の畑に東西長20m×幅2mのトレンチ（第1トレンチ）を設定、西よりA・B・C…区と名付ける。17時まで、A～G区まで表土掘り下げ。A区では、表土層（11～19cm）、赤褐色土層（15cm）、黒褐色土層を確認し、黒褐色土層には比較的細かい土器片が含まれる。D区表土より砥石が出土。土錘を表面採集する。

第一地点東方の台地切通しにピットがあり、精査の必要を認識する。

7月21日 曇時々小雨

水野、高橋、岡崎、金関、佐藤、藤田、ほか作業員・学生13名

A～E区にて黒褐色土層の掘り下げ。地表下50～60cmにて比較的大きな土器片（大部分は須玖式）、高坏、壺、カマド石、石斧、砥石を検出。一部取り上げ。E区の土器片中に赤色格子文土器片（漢式か？）あり。H・I区の地表下65～76cmにて土器包含層に達する。

7月22日 曇時々小雨

水野、高橋、岡崎、藤田、佐藤、金関、ほか作業員・学生11名

A～F区にて黒褐色土層の掘り下げ。B区より磨製石器、C区より漢式土器片（表面に敲き格子目文）、E・F区境界でクド石出土。A区の一部をさらに掘り下げると、黒褐色土層（厚さ65cm）の下に黄褐色土層があり、ここでは土器片は少ない。午後、A・B区境界で大石が出土。A区北寄りでは松材の木炭、A・B区境界付近より稲朶出土。

G～O区の表土剥ぎ。H区の一部を深く掘り下げ。

水野および高校生2名により同年4月20日出土の甕棺（P12、P13）を洗浄。

7月23日 快晴

水野、高橋、藤田、金関、佐藤、岡崎、Elligiers、（山口麻太郎、林徳衛、後藤綱賀、後藤カッパ）ほか作業員・学生14名

A～E区では昨日の検出面の精査。G区にて表土（～50cm）、黒褐色土層、黄褐色土層（～130cm）、黄色粘土土層の層位を確認。完形壺（黄褐色土層）、鉄鏃出土（破碎）出土。L区南側にて

甕棺および漢式土器片を検出し、南側へL区を拡張（L'区）。

7月24日 晴時々小雨

水野、高橋、藤田、金関、岡崎、Elligiers、原口（曾野寿彦、増田精一、鵜田忠正、壱岐高校・八幡中央高校教諭数名）ほか作業員7名、学生（十数名）。

A～E区、L区（甕棺）の実測。L区の甕棺上甕は土器下腹部。粘土などを用いて覆った痕跡はない。付近に須玖式土器口縁部、ほぼ完形の高坏。甕棺は堆積した須玖式土器層に掘り込まれたものの可能性。

7月25日 晴時々俄雨

水野、金関丈夫、高橋、岡崎、金関、原口、佐藤、Elligiers、藤田、ほか作業員、学生（8名）。

A～E区の平面図に高さ記入後、土器取り上げ。全体を掘り下げ。L区の甕棺実測後、取り上げ。

F～I区にて、第1・第2灰層、第1・第2焼土層を確認。第1灰層（厚さ1～3cm）はF～I区の殆ど全面に広がり、その直下に第2焼土層が続く。第2灰層はF・G区で明瞭（厚さ約2cm）、H・I区では薄くなる。第2焼土層はF・G区にて極めて明瞭（厚さ約5cm）である。

7月26日 夜来豪雨、晴

水野、岡崎、原口、佐藤、金関、藤田、金関、高橋、Elligiers、ほか作業員（5名）。

第1トレンチ：夜来の豪雨のため水たまり多く、本日の作業中止。K区にて石錘、B区にて漢式土器を実測取り上げ。

第1トレンチの東側に第2トレンチを設定（A・B・C区）、掘り下げ。耕作土（黄褐色土層、20cm）、黄色土層（30cm）、黒褐色土層（40～60cm）、黄色砂混じり層（地山？）の順に確認。黒褐色土層より須玖式を含む土器出土。B区にて短脚の高坏出土。

7月27日 晴

水野、金関、高橋、藤田、金関、佐藤、原口、岡崎、Elligiers、ほか作業員、学生（15名）。

第1トレンチ：B区にて灰層検出。G区にて高坏、器台、K区にて凹石、M区にて石錘出土。L区で検出した甕棺について、黄褐色土層（須玖式単純層）成立後、これを掘り下げて埋置したものと認識。

第2トレンチにて柱穴（計8基）を検出。

第1トレンチの西側に第3トレンチを設定。表土掘り下げるも、包含層に達せず。

7月28日

水野、金関、高橋、藤田、金関、佐藤、原口、岡崎、Elligiers、ほか作業員など（13名）。

第1トレンチ：A・B区の実測、撮影、遺物取り上げ。土器は木炭層中より出土。C～F区を掘り下げ、須玖式土器層に達する。D区のピットよりイネ粃出土。H・I・K区にて柱穴（計6基）を検出。

第2トレンチ：拡張区（E～G区およびO・P区）設定。O・P区およびF・G区にて土器群検出。

第3トレンチ：A～C区の掘り下げ。地表下1.0mにて須玖式土器片を含む黒褐色土層に達する。

7月29日 雨

水野、金関、高橋、藤田、金関、佐藤、原口、岡崎、ほか作業員、学生（8名）。水野浩一、夜来訪。

午前9時、第2トレンチにて作業開始するも、雨のため中止。今回および本年春出土の甕棺洗浄、接合作業。

7月30日 豪雨

水野、金関、高橋、藤田、金関、佐藤、原口、岡崎。

作業中止。夜、田河村深江青年学級のため、水野・金関丈夫が幻燈を上映。

7月31日 曇のち雨

水野、金関、高橋、藤田、金関、佐藤、原口、岡崎、および赤司記者（朝日新聞）

高橋は支庁、食糧営団に挨拶。藤田、岡崎、原口は公民館にて原の辻出土土器実測。佐藤・金関恕は海筒城浜を含めた海岸部踏査。各地点で貝種の調査を行う。金関丈夫は巖原にて夜講演を行った。

8月1日 晴

水野、金関、高橋、藤田、金関、佐藤、原口、岡崎、および赤司記者

水野、赤司が現場確認。第1トレンチの壁崩落、第2トレンチの浸水を報告。

他の調査員は、公民館にて遺物調査。

8月2日 晴、3時過ぎ一時雨および夕刻より雨

水野、金関、藤田、高橋、佐藤、金関、原口、岡崎、赤司記者、ほか作業員、学生など（21名）。

第1トレンチ：午前、B区第一層土器原位置実測、E・F区土器の平面実測。午後、A～E区の掘り下げ。D区南側より須玖式壺、高坏が出土。A・D区の土器群について撮影（カラーフィルム使用）。トレンチ南側断面（G・H・I区）の撮影。A～D区の上層土器が厚い木炭層中にあることを確認、実測。

第2トレンチ：排水後、D・H・Q～U区を拡張。A～C区以外は地盤層に達せず。黒色土層中の土器は殆どが須玖式であることを確認。

第3トレンチ：排水後、乾燥待ち。

8月3日 晴

水野、金関、高橋、藤田、岡崎、金関、原口、佐藤。森貞次郎？・杉原荘介午後到着。ほか作業員など（15名）。

第1トレンチ：A～G区の下層（粘土層、須玖式土器単純層）を掘り下げ、大体地山に達する。F・G・H区の崩落土上げる。D区にて須玖式丹塗り壺、高坏出土。実測後取り上げ。

第2トレンチ：A～C区、R・S・U区にて柱穴を検出。

8月4日 晴

水野、金関、高橋、岡崎、藤田、森、金関、原口、佐藤。ほか作業員など（15名）。杉原はカラカミ遺跡、鬼の窟古墳見学。

第1トレンチ：A～F区下層検出後、実測。A・B区取り上げ。D区丹塗り壺附近撮影。

第2トレンチ：D区にて漢式土器出土。拡張区設定（I～N区およびW～Z区）。

8月5日 晴

水野、森、高橋、藤田、岡崎、金関恕、原口、佐藤、杉原。ほか作業員（11名）。金関丈夫は離島。

第1トレンチ：断面図作成。断面下半部、C～E区下層撮影後、遺物取り上げ。G・H区下層実測。A区より8m間隔で地山までボーリング調査（約1m）。

第2トレンチ：E～H区、O区にて溝を検出、掘り下げ。

原の辻全景撮影。

8月6日 快晴

水野、高橋、藤田、岡崎、金関、佐藤、原口、水野浩一。ほか作業員など（11名）。杉原、森は離島。鴫田校長夫妻、植山俊一郎来訪。

第1トレンチ：各区実測。第2トレンチ側のトレンチ端で溝を検出。第2トレンチに接続するものである見通し。

第2トレンチ：F・G・H区（溝）およびD・U区にて作業。溝が僅かに曲がりつつも直進する状況を確認（勾配は約4度）。U区にて石組群検出。さらに、新規拡張区を設定。

金関、原口により地形測量開始。

8月7日 快晴

水野、高橋、藤田、岡崎、金関、原口、佐藤、水野。ほか作業員（9名）。大塚初重、山口麻太郎、滝川来訪。

第1トレンチ：断面図の修正、地山落ち込みの追求。各土層の土壌採取。

第2トレンチ：拡張区掘り下げ。地盤に達せず。

8月8日 快晴

岡崎、金関、大塚、水野。ほか作業員（11名）。

第2トレンチ：拡張区掘り下げ。柱穴および底面を検出。太形蛤刃石斧出土。

地形測量完了。

8月9日 快晴

金関、岡崎。ほか作業員（12名）。

第1トレンチ：H・L～N区掘り下げ、第2トレンチの溝との接続関係がないことを確認。

第2トレンチ：拡張区で炉址を検出。炉底に炭化物、焼土を確認。

8月10日 快晴

金関、岡崎。ほか作業員、学生（11名）。

第1トレンチ：A・H区掘り下げ、H区にて溝底部を確認。平面・断面実測。

第2トレンチ：撮影、平面・断面実測。計21基の柱穴を確認。

第3トレンチ：B区掘り下げ。黒土層より須玖式土器出土。実測。

8月11日 快晴

金関、岡崎。ほか作業員（9名）。後藤綱賀来訪。

第1トレンチ：埋め戻し半ば終了。

住居址（第2トレンチの炉含めた部分か？）撮影。

8月12日 快晴

金関、岡崎。

盆休み・行事のため、作業を休み、支庁、公民館、高等学校へ挨拶。

8月13日 快晴

第1トレンチの埋め戻し。

8月14日 快晴

第一、第3トレンチの埋め戻し終了。福岡より見学団来訪。

8月15日 快晴

第2トレンチの埋め戻し。武生水に行き、出土品を発送。

8月16日

第2トレンチの埋め戻し。武生水に行き、諸費用の支払い。

8月17日

田河町農協の車両で勝本港に行くが、台風の為欠航。湯ノ本泊。

8月18日

終日荒天。湯ノ本泊。

8月19日

午前10時、大衆丸にて出航。午後2時半、博多到着。裏辻憲道宅に寄り、荷物を発送。赤司光生と面会。

(d) 1961年(昭和36年)

7月19日

荷物受け取りの為、秋山進午が先に福岡入り。岡崎敬、小田富士雄と打ち合わせ。深見清、西谷正は京都を夜出発。

7月20日 快晴

荷物受け取りの後、秋山、岡崎、深見、西谷で8時30分博多港発、11時50分芦辺港入港。山口麻太郎夫妻、先着の潮見浩が出迎え。安国寺到着。岡崎、潮見は芦辺町役場へ挨拶、買い物。5時過ぎより全員で原の辻遺跡の発掘地選定に出かける。昭和26年発掘地の西側の高い部分が削平され、一面に須玖式土器の散布を確認。この付近(A区)を発掘予定地とした。また、A区と昭和28年発掘地の間で、須玖式土器散布地点(B区)、漢式土器片採集地点(C区)を確認した。以上のほかに、黒曜石2点を採集した。

7月21日 快晴

岡崎、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。

9時40分のバスにて郷ノ浦へ。壱岐日報社(山口麻太郎)を訪問、山口も同行し、壱岐支庁へ挨拶。土木課より機材を借用。藤田国雄が昼に郷ノ浦港着、共に安国寺へ。河田中学校教頭(末田吉勝)が来訪、学生の応援を依頼。芦辺町役場総務課長(山口定徳)来訪、機材の借用を依頼。後藤綱賀(マラソン翁)来訪。A区の地主(西川豊)への交渉を山口定徳に依頼。

7月22日 晴、午後より曇

岡崎、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。作業員1名。

午前8時30分、現地着。9時過ぎに山口定徳が地主の了承を伝える。発掘地点設定、杭打ちを行った。昭和26年発掘地点の南方と西方にL字形トレンチ(南北16m、東西18m、各A~P区)を設定。10時前、地主(西川豊)から発掘了承を受ける。

午後、発掘開始。表面採集で土器(須玖式)を採集し、A~I区で表面全体を掘り下げ。表土下10cm余で黒色包含層に達する。夕方5時まで約30cm掘り下げ、作業終了。包含層A区より敲石、C区より石斧?、G区より、石剣?片、石斧片、凹石を発見。A~F区にて南北に連続する灰層を確認し、層中より炭化植物採集。F・G区の土器片出土量がやや多い。

7月23日 晴、夕立

三木、藤田、岡崎、潮見、深見、西谷、秋山。作業員1名、学生5名。

午前8時30分作業開始。昨日に続き、A~G区の掘り下げ。10時頃、G区、続いてF区に丹塗高坏、甕などが次々と現れてくる。地表から30~40cmで、昨日の大き目の破片もこの一群と認識。須玖式壺、甕2点、敲石2点が平面上に並んで出現。元の生活面の可能性を示唆。清掃、写真撮影。夕方より実測するも、夕立の為半分にて終了。

A~E区は深く掘り下げるが、遺物が出ず、C区をさらに掘り下げ、黒色包含層下の粘土層に達した。E区の溝状堀込みを確認。昭和26年の発掘痕跡と認識。

H~J区を午後より掘り下げ、J区表土より銅鏃出土。土器は極めて少ない。J区をさらに掘り下げ、粘土層に達する。鉄製品(鉄斧?)、獣歯出土。

7月24日 晴、夕立

三木、藤田、岡崎、潮見、深見、西谷、秋山。作業員2名、学生1名。

午前8時30分作業開始。F～G区の実測（平面、断面）の続きを行い、完成。午後、取り上げ後、床面に柱穴を探すが不明。土器が少々出土。宿舎に帰って後、土器接合。

A～E区では2部分のみ掘り下げ、地山を検出。炭化木片を検出するも、昭和26年度発掘時の混入の可能性。A～H区の断面図を作成。A～E区は終了。

M区の北に拡張区（Q～W区）を設定。M・Q・R区を掘り下げる。

7月25日 曇、時々俄雨

三木、藤田、岡崎、潮見、深見、西谷、秋山。作業員3名、学生2名。

午前8時30分作業開始。F・G区を掘り下げるが、遺物少なく、地山検出。地山面は西から東へ傾斜。

拡張区Q～T区掘り下げ。O・R・S区は、遺物検出面（下層）まで発掘。R・S区では昭和26年のトレンチを確認。S区（原文T区、翌日の記述で訂正）の東壁、上層（黒色土層）中に完形の丹塗り壺確認。

N区にて、地表下約1mの黒色包含土層（上層）でうつ伏せの甕（原の辻上層式）を検出。同層でガラス小玉2点出土。本土層に溝状の落ち込みがあることを確認。M区では、地表下160cmで下層土器（須玖式）の甕2点出土。L区は半分掘り下げ、鉄器（表土下50cm）、獣骨を検出し、下層に達する。Q区は下層に達し、甕?の底部を発見。

これらの他、石剣2点（L・R区）、石包丁（R区上層）、抉入石斧・凹石（S区上層）が出土。

7月26日 曇のち雨

三木、藤田、岡崎、潮見、深見、西谷、秋山。作業員4名、学生2名。

午前8時30分作業開始。L・M・Q区の下層土器の検出作業。M・Q区より甕3個体検出。N区にて、昨日のうつ伏せの甕（上層）の下から丹塗り土器検出。これらは甕棺葬の可能性。

昨日確認したS区上層の丹塗り壺附近より、ガラス玉1点出土。同区にて石包丁片1点を採集。

T区下層にて環状の赤粘土層を確認。

O・P区にて掘り下げを開始。P区表面で銅鏃1点を採集。

W区では原の辻上層土器多数を、東西列状で発見。東へ僅かに傾斜を確認。W区に接するX・Y区を設定、表土を剥ぎ、黒色土層（上層）を掘り下げる。

7月27日 晴

三木、藤田、岡崎、潮見、深見、西谷、秋山。作業員2名、学生2名、手伝い9名。

午前8時作業開始。Q～T区下層掘り下げ。Q区中央にて甕および底部片の西方から石剣片?を発見。R区でも土器片検出。S区中央に大きい自然石があり、その東方より二条沈線文を持つ遠賀川式土器を、西方からは鉄器（鎌あるいは鉄素材?）を検出（下層（須玖式）に伴う）。T区では直立した底部出土。

N区のうつ伏せの甕を甕棺と決定。そのすぐ東部でガラス玉1点発見。N区東半・O・P区では上層土器を検出できず、掘り下げ続行。O区にて砥石発見。

W区の清掃、写真撮影。拡張区X・Y区を掘り下げ、X区にて獣歯、植物、多数の上層土器、完形の器台2点出土。W・X区境界でガラス玉2点（1点は半分のみで、灰色）、碧玉製管玉片が出土。W区西北隅に石囲い確認。

昼食時の表面採集にて、石斧、鉄器片、鉄鋤先片、漢式土器片を採集。

7月28日 快晴 風少し

三木、藤田、岡崎、潮見、深見、西谷、秋山。作業員3名、学生3名、手伝い1名。

午前8時作業開始。

O・P区を掘り下げ、下層に達する。O区中央北寄りに甕口縁部（上層土器?）、その東方に骨角器、西方で獣骨出土（下層）。

V・X区に接する拡張区（Z区）を設定。Z区上層より壺2点、甕1点、高坏1点検出。同層または埋土中より漢式土器片発見。

S区の東側に拡張区（S'区）設定、上層より器台3点を発見。S区付近で上層が窪んでおり、一面に灰が付着することを確認。

T・U区では、焼土層を検出（昨日）、清掃。中窪みの施設を検出。

他、1953年発掘地にて土製投弾採集。

藤田、岡崎は勝本町天ヶ原の銅矛出土地、カラカミ遺跡、郷ノの壺岐郷土館を見学。

7月29日 曇

三木、藤田、岡崎、潮見、小田、深見、西谷、鶴久、秋山。作業員4名、学生1名。

午前8時作業開始。三木、秋山、鶴久は地形測量調査。1/500にて新たに測量。

T・U区における焼土層を追求。S'区上層より、大甕、凹石、砥石など発見、焼石が散乱し、炉址の可能性。R区下層より焼米、小麦?を発見。

O・P区は地山まで掘り下げ、P区下層にて猪右上顎骨出土。同区では漢式土器片も出土。

Y区東端で地山検出。清掃の上、W～Z区土器撮影。X区でガラス玉1点出土。

午後、M・N区、W～Z区の実測。

藤田は、第2トレンチの選定と交渉を行った。

7月30日 曇 時々雨

水野、三木、藤田、高橋、岡崎、仙波、潮見、深見、西谷、秋山。作業員4名。

水野清一、高橋猪之介が午後3時到着。

午前8時10分作業開始。（第1）トレンチ全体を1/50にて平板測量。L・M・N・Q・R区および、V～Z区の平面図作製。U・V区は下層まで掘り下げても、昭和26年発掘部と重複しており、出土品は少ない。

昭和28年銅剣出土地に隣接する丘の2か所に、第2トレンチ（2×16m、A～H区）、第3トレンチ（2×6m、A～C区）を設定。第2トレンチA・H区より発掘開始。表面には須玖式土器の破片が僅かに散布。A区の黒褐色土層の底面で、黄褐色土層に食い込んだ土器を検出。H区では黄褐色土層に食い込んだ柱穴?を検出。

他、第1トレンチより動物骨、同トレンチA～H区埋土中より土製投弾発見。土製紡錘車、砥石、石鎌を表面採集。

7月31日 曇 時々晴 風やや強し

水野、三木、高橋、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。作業員4名、学生1名、手伝い2名。

岡崎、仙波は帰福。水野は石田村へ挨拶、武生水公民館へ向かう。

午前8時30分作業開始。第1トレンチL・M・N・Q・R区の平面図作製を継続、N・M区は完成。甕棺（内部より歯出土）、下層土器の取り上げ完了。W～Z区の断面図完成。午後、上層土器の取り上げを行うが、土硬く、7点のみ取り上げ完了。S'区上層の平面図の作製。

第2トレンチ：A・E・H区をさらに掘り下げ、地山までの土層変化を確認。表土（15cm）、黒褐

色土層 (30cm)、黄褐色土層 (60-70cm)、岩盤の順で確認。A 区で甕 2 点および柱穴を確認。

第 3 トレンチ : A ~ C 区の掘り下げ。表土 (17cm) の下の黒褐色土層中に、若干の土器片と近世の磁器片を認め、本層の攪乱を考える。黒褐色土層は、ほぼ 70cm で黄褐色土層に達し、この面で平坦にした。

第 1 トレンチ R 区下層より砥石、N 区上層より敲石、M 区下層、S 区より獣骨出土。

8 月 1 日 曇 時々雨 夜雨 台風近し

水野、高橋、三木、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。学生 2 名、手伝い 2 名。

午前 8 時 20 分作業開始。第 1 トレンチ W・X 区の土器取り上げ、鉄製釣針 1 点、須玖甕 (上下層) を発見しつつ、夕刻完了。本区付近で上下層の接近を確認。S' 区上層の平面図、断面図を完成。新たに東西断面図作製のため、K・L 区北壁附近を掘り下げ。夕方、S' 区上層の土器取り上げ開始。M ~ X 区東壁断面図作製。

第 1 トレンチ X 区に接して、第 4 トレンチ (A ~ D 区) を設定、掘り下げ。状況により北方に拡張予定。

第 3 トレンチ : A ~ C 区を掘り下げ。本トレンチの黒褐色土層の厚さ (70cm) および、第 2 トレンチとの層序の共通性を確認。黒褐色土層下面には土器なし。午後、平面図、断面図を作成。

他に、第 1 トレンチでは鉄製釣針 (Y 区上層)、鹿角ナイフ (W 区下層)、獣骨、凹石 2 点、敲石 (以上 S' 区)、第 2 トレンチでは石鏃が出土した。

8 月 2 日 曇 のち豪雨 台風

水野、三木、高橋、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。作業員 10 名、学生 2 名、手伝い 1 名。

午前 8 時 20 分作業開始。第 1 トレンチ N・Q・R 区の断面図準備。W 区で昨日検出した須玖甕の実測図作製。S' 区にて敲石、凹石を発見。

第 2、3 トレンチ : 埋め戻し開始。

第 4 トレンチ : A ~ D 区の掘り下げ開始。A 区にて黒曜石鏃を発見。D 区の表土下 30cm 程度で上層土器が出現。W 区へ急に傾斜し、W 区では上層が下層に近接していることを確認。10 時頃より台風 12 号のため雨激しく、作業を中止し、終日土器洗いを行う。

8 月 3 日 雨 のち晴

水野、三木、高橋、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。作業員 6 名、学生 2 名、手伝い 6 名。

台風の雨が残り、現場の作業は不可能。土器洗い (午後 2 時頃完了)、出土品実測を行う。土器洗い後、快晴となり現場へ赴く。

第 2、第 3 トレンチ : 埋め戻し。第 2 トレンチ西端北方について、検出された土器を基に拡張する。甕 2 点の並びを確認。地山を掘り込んで、須玖式甕を置いた状況を確認。

第 1 トレンチと併行して、その東隣りに第 5 トレンチを設定。約 1 尺掘り下げる。

他に、第 1 トレンチ H 区排土中より獣歯 1 点、P 区排土中より漢式土器片第 4 トレンチ A 区排土中より銅鏃 1 点、B 区排土中よりガラス (水晶?) 玉 1 点を発見。

8 月 4 日

水野、高橋、三木、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。作業員 11 名、学生 2 名、手伝い (人数不明)。

午前 8 時作業開始。第 1 トレンチ (南・東側) : H ~ P 区の断面図作成のため、地山までの掘り下げと壁面検出。S' 上層土器の取り上げを完了、黒褐色土下層を掘り下げる。須玖式甕、獣骨 2 点などを検出。撮影後、実測開始。S' 区では焼土層の上に黄褐色土層 (須玖式) が被さること確認。

第 1 (北側)・第 4 トレンチ : 第 4 トレンチを清掃後、D 区のみで土器検出。表土下約 50cm にて、

上下層の土器がほぼ重なり合って、第1トレンチ W・X 区へ落ちていることを確認。第1トレンチ W 区北壁中央の須玖甕（下層）ほかの取り上げ、断面図を作成、完了。Y 区北壁に食い込む完形器台1点を発見。W 区上層直下より磨製石剣を発見。

第5トレンチ：A～G 区にて深さ約30cm までまばらに土器片が出土するが、それ以下の黒褐色土層では土器少ない。A 区にて砥石1点検出。

他、第1トレンチ M 区にて砥石、獣骨2点、同 V 区にて獣歯、第5トレンチ C 区にて漢式土器片、鉄器、同不明区にて骨2点を発見。

8月5日 雨 のち晴

水野、三木、高橋、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。

朝から雨のため作業中止。水野、高橋、藤田は土器整理と地名表作製。三木、潮見、深見、西谷、秋山は郷ノ浦にて郷土館見学。郷ノ浦片原、吉ヶ崎出土品を実測、撮影。一の森稻荷神社（郷ノ浦町東触）の合わせ口甕棺出土地を踏査。

8月6日 晴 時々曇

水野、三木、藤田、高橋、潮見、深見、西谷、秋山。作業員10名、学生2名、手伝い3名。

午前8時20分作業開始。

第1（北側）および第4トレンチ：第4D 区清掃、上下層がほぼ接する状況を確認。本区に接する第1W・X 区の下層土器検出を行うも、まとまった土器群なし。第1A 区と第4C 区一部を断面図のため掘り下げ。第1A 区では、上層がなく、下層包含層、黒土層（遺物なし）、黄褐色土層の順に確認。第4C 区では包含層が厚く、上下層の区別がはっきりしないことを確認。第1Y 区を掘り下げ、須玖式甕を発見。

第1トレンチ（南側）：I～P 区の北壁断面図の作製完了。上下層とも西から東に下降し、下層はかなり厚い（100cm）。M 区の下層面、O 区の木炭層など、下層内で細分出来る面を二、三確認。

第1トレンチ（東側）：一昨日（原文は昨日）検出した甕や壺の平面・断面実測。黄褐色土層（須玖式土器を含む）を除去しながら、S・T 区の焼土面を追求。T 区を中心に、T'・S'・S'' 区に僅かに広がることを確認。前回調査で検出された焼土部を合わせ、住居跡の可能性。焼土層の上に土器片付着。焼土層の下には須玖式土器を含む層を確認。

第5トレンチ：表土以下90cm を掘り下げ。C 区土器群の清掃。黒色層に土器が集中し、その下30～40cm にわたって黒味を増し、須玖式土器片を伴う。土器片はかなり深くまであるが、その下はやや黄色の崩壊土層と認識。B・D・E 区（深さ120～130cm）にて土器片を検出。B 区より獣骨、C 区より鉄器、石器、獣骨、D・E・F 区より獣骨などの出土があった。

以上の他、軽石（第10 区下層）、石斧（第1W 区上層）、凹石（第1S'～T' 区下層）、棒状石器（第1X 区上層）、獣骨（第10・S' 下層・S'' 下層下）が出土した。

8月7日 晴 時々曇

水野、藤田、三木、高橋、潮見、深見、西谷、秋山。作業員8名、学生2名、手伝い7名。

午前8時20分作業開始。水野は勝本町に青銅矛返却および、串山貝塚見学。

第1（北側）および第4トレンチ：第4D 区の実測完了。第1A・第4C 区を繋ぐ壁面断面図を作製。第1Y 区を掘り下げ、古式の須玖式甕を検出。

第1トレンチ（東側）：S～T 区の焼土の範囲の平面・断面図作製。午後、焼土を立ち割り、下層の掘り下げ。焼土が5～25cm の厚さで、内部に土器や凹石を含むこと確認。焼土下には遠賀川系統を含む多数の土器、獣骨を含む層が存在。

第5トレンチ：A～G区の掘り下げ（170～200cm）。C区黒色土層面の土器の平面。断面図作製。DからE区にかけて、40cmほどの黄褐色土の落ち込みを確認。A区地表下130cmにて猪の下顎骨、B・C区にて石剣が出土。

以上の他、獣骨（第1S～T、第5B・C区）、歯（第5E区）が出土。

8月8日 晴 時々曇

水野、三木、高橋、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。作業員13名、学生2名、手伝い10名。

午前7時50分作業開始。三木は土器荷造り（15箱）。潮見、秋山は国分寺（瓦拓本、略測）、鬼の窟古墳、亀石、カラカミ遺跡などを見学。

第1（北側）および第4トレンチ：第1W、4D区の土器取り上げ。第1W・X・Y区にその後出た上下層の土器の平面・断面図作製、土器取り上げ。

第1トレンチ（東側）：S～U区の断面図作製完了後、埋め戻し。焼土層下に40cm程の、須玖式土器を含む黄褐色土層があり、その下に遺物を含まない40cm程の黄褐色土層、さらに下に青色粘土質土層（地山）を確認。

第5トレンチ：A～F区の断面図作製、埋め戻し開始。B区最下層より、遠賀川式（刻目口縁、焼土下および第1Y区最下層のものと同様。）出土。G区を拡張（H区）、清掃、平面図作製。石斧片、鉄鏃、漢式土器、骨器、魚骨、瓢形土器が出土。

以上の他、石器片（第1S～T区）、石斧片（第5G区）、漢式土器片（第4D区上層）、獣骨（第1W・X区上層、T区焼土下、第4D区上・下層、第5E区下層）が出土。

8月9日 晴

水野、三木、藤田、高橋、潮見、深見、西谷、秋山。作業員8名、学生2名、手伝い11名。

午前8時20分作業開始。三木は土器洗いおよび荷造り。藤田、秋山は午前中、原の辻台地全体の分布調査を行う。高橋、西谷、深見は山口麻太郎（壱岐日報）訪問。郷ノ浦の郷土館にて写真撮影、弁天崎踏査。

第1トレンチ：Y区土器取り上げおよび、北壁断面図作製。第1、4トレンチ北側を深掘り。Y区深位の土器が遠賀川式でないことを確認。

第5トレンチ：土器取り上げおよび、南壁断面図作製。

以上の他、凹石（第1X区下層）、石斧（第1Y区）、漢式土器（第1Y区）、獣骨（第1W区黒土下層・X区・Y区下層、第5G区下層・第5H区下層）、麦芒？（第1W区下層）、木炭（第1W・X区落ち込み）が出土、分布調査による採集品として、石斧、漢式土器、土錘、鉄器がある。

以上にて現場の作業が全て終了。埋め戻し作業。夜、巡査に発掘届を手渡す。

8月10日 晴

水野、高橋、三木、藤田、潮見、深見、西谷、秋山。作業員6名、学生2名。

現場埋め戻しは作業員により17時に完了。

午前、水野は芦辺町、石田村、壱岐支庁に挨拶。藤田、潮見はカラカミ遺跡見学。高橋、深見、西谷が荷造り。

午後、深見、西谷は国分寺、鬼の窟古墳、カラカミ遺跡を見学。

8月11日 晴

水野、高橋、三木、藤田、潮見、秋山、深見、西谷。

朝、記念撮影の後、潮見は借用機材返却の為先発。本隊は9時30分にタクシーにて郷ノ浦へ。出航までの間に、水野、藤田、潮見、秋山は弁天崎の縄文？遺跡を見学。

大衆丸にて12時出航、午後3時博多着。九大医学部内恵愛園に宿泊。藤田は博多駅にて解散。  
8月12・13日、各隊員出発。19日、荷物44個到着。

### 3. 発掘調査の組織

以下に、各発掘調査の組織を掲げる。

(1) 第1次調査 (1951年7月24日～8月7日)

調査班長 水野清一 (京都大学人文科学研究所教授)

調査員 藤田国雄 (東京国立博物館技官)

川端 (西谷) 真治 (京都大学大学院生)

金関丈夫 (九州大学医学部教授)

高橋猪之介 (京都大学文学部文部事務官)

森貞次郎 (福岡高等学校教諭)

岡崎敬 (福岡中央高校教諭)

(2) 第2次調査 (1953年7月24日～8月12日)

調査班長 水野清一 (京都大学人文科学研究所教授)

調査員 有光教一 (京都大学文学部助教授)

樋口隆康 (京都大学文学部講師)

岡崎敬 (京都大学人文科学研究所助手)

林巳奈夫 (京都大学大学院生)

川端 (西谷) 真治 (京都大学大学院生)

榑崎彰一 (名古屋大学文学部助手)

藤田国雄 (東京国立博物館技官)

金関丈夫 (九州大学医学部教授)

森貞次郎 (福岡高等学校教諭)

高橋猪之介 (京都大学文学部文部事務官)

鴫田忠正 (長崎県教育庁社会教育課長)

山口麻太郎 (武生水図書館長)

エレギィルス Elligiers (ベルギー UNESCO 留学生)

石丸太郎 (長崎県古文化財調査委員長)

(3) 第3次調査 (1954年3月22日～3月26日・4月11日～4月20日)

川端 (西谷) 真治 (京都大学文学部助手)

金関恕 (京都大学文学部学生)

Edward Kidder (京都大学留学生)

(4) 第4次調査 (1954年7月18日～8月18日)

調査班長 水野清一 (京都大学人文科学研究所教授)

調査員 藤田国雄 (東京国立博物館技官)

高橋猪之介（京都大学文学部事務官）  
岡崎敬（京都大学人文科学研究所助手）  
金関恕（京都大学文学部学生）  
原口正三（京都大学文学部学生）  
佐藤英美（京都大学文学部学生）  
エレギルス Elligiers（ベルギー UNESCO 留学生）

（5）第5次調査（1961年7月22日～8月11日）

調査班長 水野清一（京都大学人文科学研究所教授）  
調査員 岡崎敬（九州大学文学部助教授）  
高橋猪之介（京都大学文学部技官）  
藤田国雄（東京国立博物館技官）  
三木文雄（東京国立博物館技官）  
秋山進午（大阪城天守閣学芸員）  
潮見浩（広島大学文学部助手）  
森貞次郎（福岡高等学校教諭）  
深見清（京都大学大学院生）  
西谷正（奈良学芸大学学生）

**参考文献**

- 高倉洋彰1982「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、801-836頁
- 鴫田忠正1944「長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』
- 水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』、295-309頁
- 水野清一・樋口隆康・岡崎敬1953『対馬－玄海における絶島、対馬の考古学的調査』（『東方考古学叢刊』乙種第6冊）東亞考古学会
- 宮本一夫2017「日本人研究者による遼東半島先史調査と現在—東亞考古学会調査と日本学術振興会調査—」『中国考古学』第17号、7-20頁
- 宮本一夫編2008『壱岐カラカミ遺跡Ⅰ—カラカミ遺跡東亞考古学会第2地点の調査—』九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室
- 宮本一夫編2009『壱岐カラカミ遺跡Ⅱ—カラカミ遺跡東亞考古学会第1地点の調査—』九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室
- 宮本一夫編2011『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ—カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）—』九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室
- 宮本一夫編2013『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ—カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査（1977・2011年）—』九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室
- 宮本一夫編2018『壱岐原の辻閼縹遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳』九州大学大学院人文科学研究所考古学研究室

# 第3章 原の辻遺跡の調査区ならびに遺構と層位

宮本一夫

## 1. 調査区の位置

1951年の第1次調査地点は、原の辻遺跡の主体部である台地の東北隅で行われた（図6）。1939年の鴫田忠正氏の調査地点に隣接して設定されている（高倉1982）が、1939年の調査を踏まえ出土遺物量の多さと分層が可能である点を考慮して、トレンチが設定されたものと考えられる。この調査では、上下の2層に層位区分がなされ、原の辻上層式の設定がなされた。さらに、この原の辻上層式土器を検証する意味で、1961年の第5次調査地点では、第1次調査地点に重なるように「口」の字形のトレンチが設定されている。1974年以降に行われた沓崎市教育委員会や長崎県教育委員会の発掘調査により（長崎県教育委員会2005）、集落を囲むように弥生時代中・後期の多重環濠が検出されている。1951年の1次調査と1961年の第5次調査の第1・第4トレンチは、ちょうど環濠部分に重なっている。

一方、1953年の第2次調査地は台地の中心部にあたり、多重環濠の内側の集落の中心部にあたっている。ここに四つのトレンチが設定された。第2次調査の第5地点からは、甕棺墓が出土している。これは、翌年の1954年に実施した第4次調査地点よりさらに南側に位置するものである（図6）。

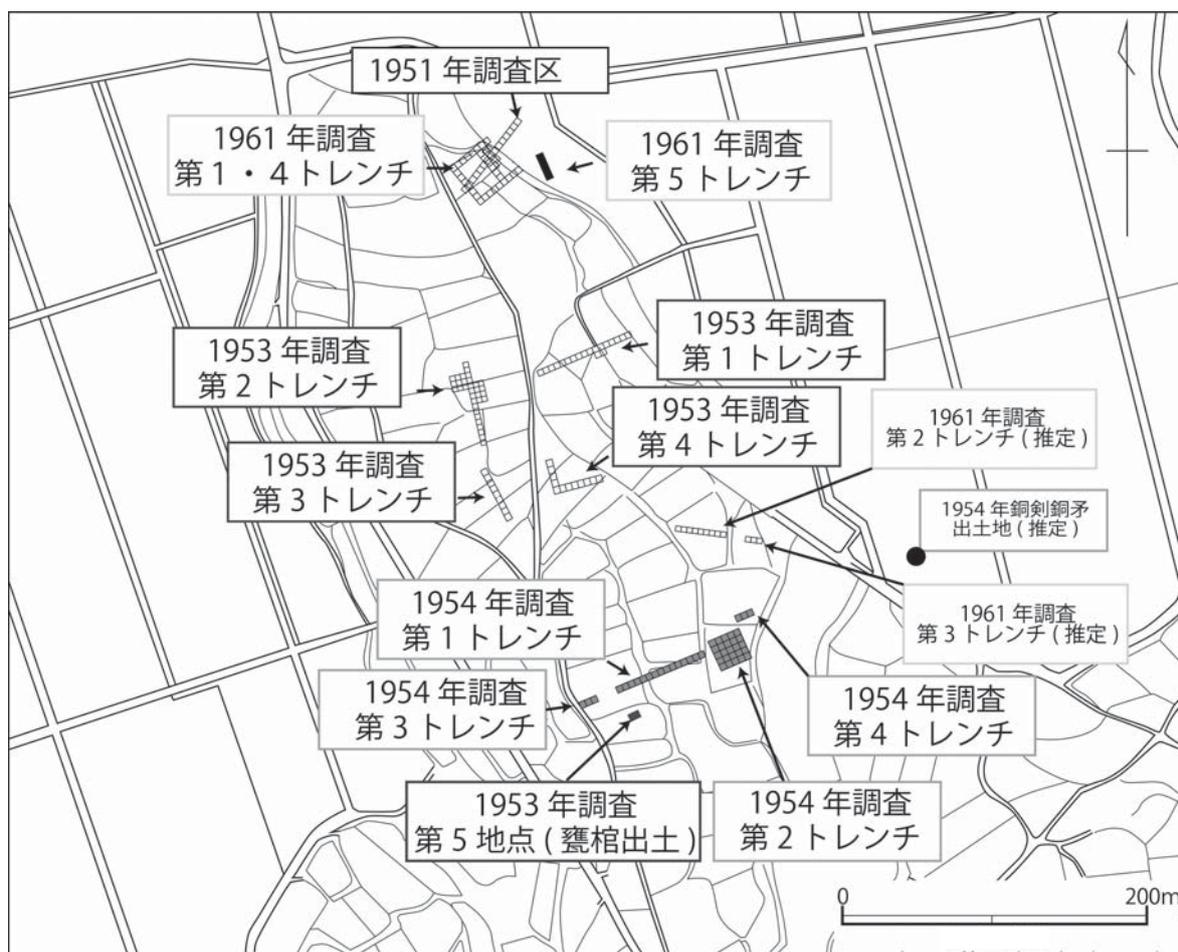


図6 第1次～第5次調査の配置（縮尺1/5000）



図7 原の辻遺跡の地形と第2次調査（1953年）のトレンチ配置（縮尺1/2500）

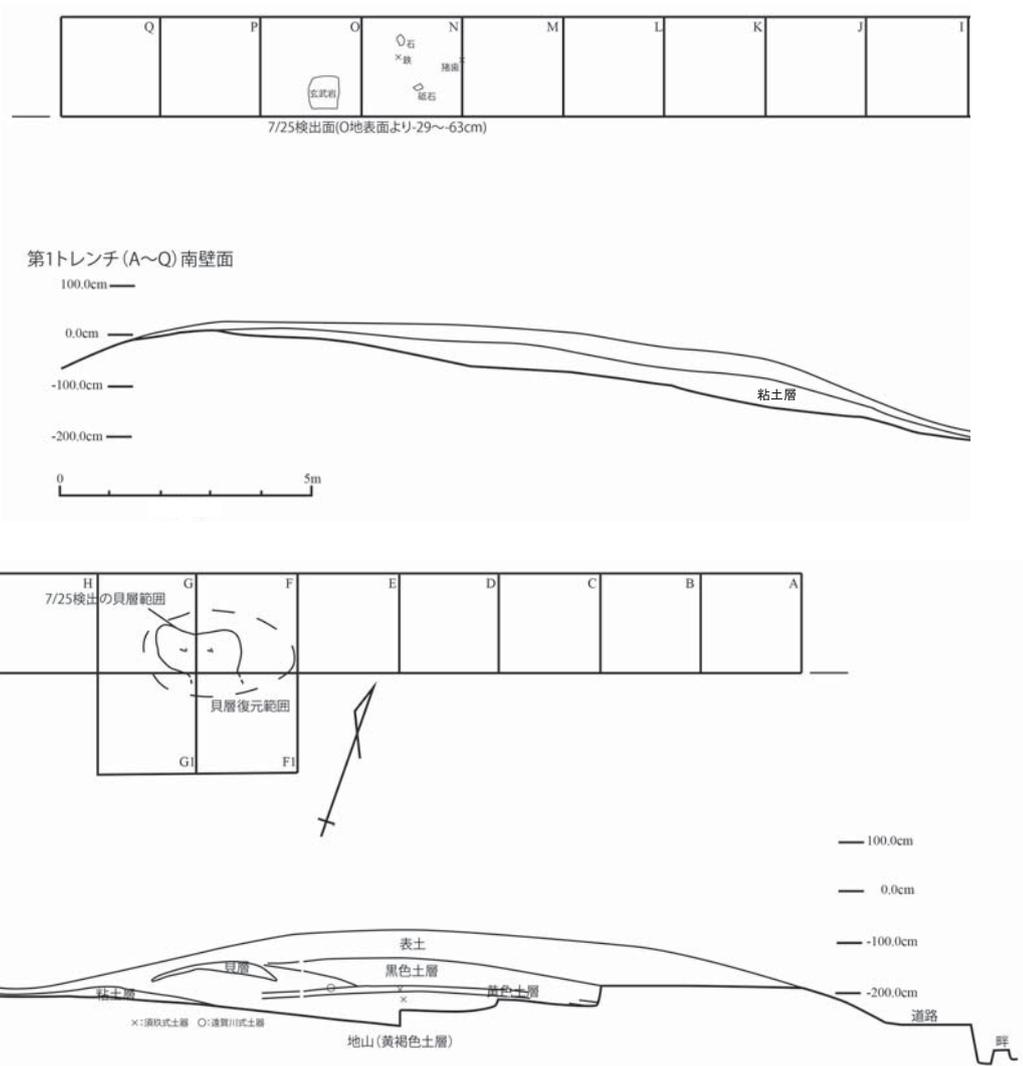


図8 第2次調査(1953年)第1トレンチの配置と層位(縮尺1/150)

さらに1954年の第4次調査では、台地基部に近い地点に、東西方向に直線ないし平行になるように、東西方向に長い四つのトレンチが設定されている。これらのトレンチの一部は内環濠の南端部分にあたっている。

このように、低い台地の北端部である1951・1961年調査地点を起点に、1953年地点を台地の中央部に、さらにその南側の台地基部に1954年調査地点を設けた。以下に、第2次調査、第4次調査、第1次・第5次調査の順に説明していく。

## 2. 第2次調査(1953年)の調査区の遺構と層位

### (1) トレンチの配置

図7が1953年時点の地形図とトレンチの配置である。原の辻遺跡の低丘陵上の中心部分を調査した。当時の原の辻遺蹟は土饅頭の畑が幾重にも連なる丘陵であった(図版1-1)。第1トレンチは台地の東裾部から中心部に向けて東西方向にトレンチが設定された。第2トレンチは台地中心部に南北方向に設置されてのち、遺構の検出に応じて東西方向にトレンチを拡張している。第3トレンチは、第2

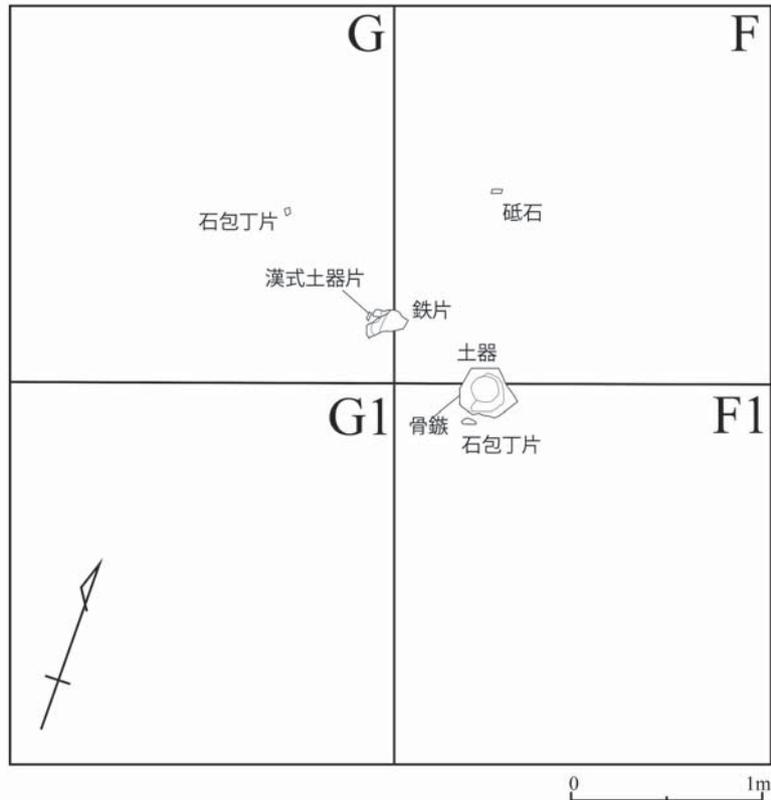


図9 第2次調査(1953年)第1トレンチF・G区遺物出土状況(縮尺1/40)

トレンチの南部分に同じく南北方向のトレンチを入れている。さらに、第3トレンチに平行するように、第3トレンチの東側に東西方向のトレンチを入れ、さらに東側と北側にトレンチを拡張し、L字形のトレンチを設定した。

## (2) 第1トレンチ

第1トレンチは、2×2mの範囲でA～Q区が設置され、東西14m、南北2mの細長いトレンチになっている(図8)。このうち、トレンチA～G区がダイズ畑に、トレンチI～Q区が芋畑にあたり、トレンチH区が二つの畑の間の小道に相当する。トレンチG・F区では貝層が発見されたため、南側に2×2mのトレンチを拡張し、それぞれG1・F1区と名付けられた。

第1トレンチの南壁の層位(図8)にみられるように、地表面は土饅頭畑に応じて東西方向に丘陵部と谷部を形成している。この丘陵部が畑であり、谷部が二つの畑の間の小道にあたる。本来、西側から東側に向かい緩やかに下る丘陵部の東側斜面に相当している。それを畑にするために饅頭状に改変した状況が見て取れる。トレンチF～P区にみられる地表下の第2層(粘土層)は遺物包含層と考えられる。これに対し、トレンチC～G区の層位は大きく異なり、黄色土層の上に黒色土層、貝層が載るように堆積している(図版1-2)。貝層はトレンチG・F区で検出された。最下層の第4層は地山を掘り込むように堆積しており、ここに遺構が存在していたとみられる。この遺構が廃棄された後に黄色土層が敷かれ、そこに何らかの遺構が形成されている。その廃棄後に貝層が堆積し、さらに黒色土層が堆積している。トレンチG・F区の貝層部分は円形住居址が存在していたところに、その廃棄後に、貝層が形成されたと考えられる。貝層の下位部には、石包丁、骨鏃、韓式土器片などが検出された(図9)。

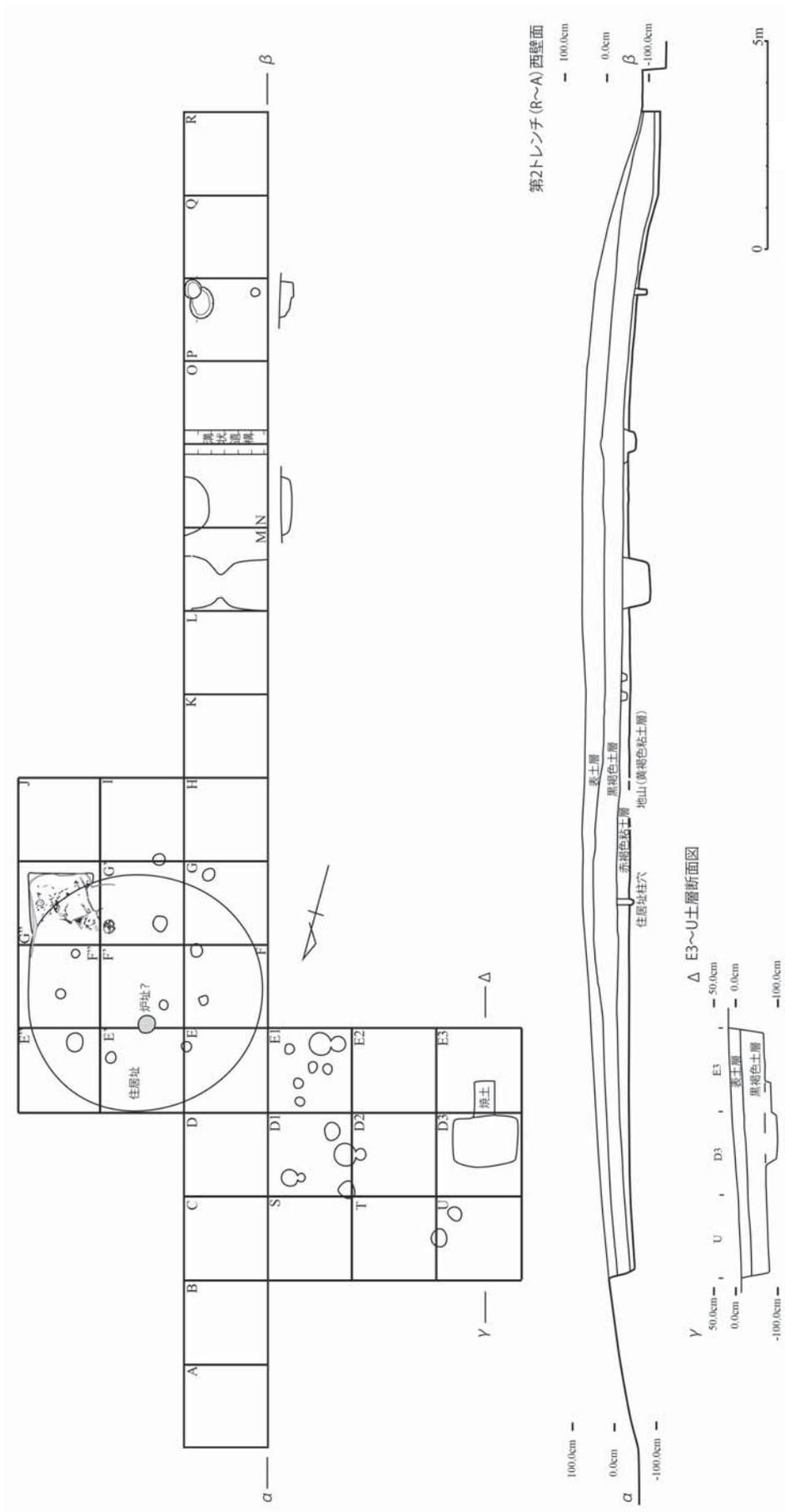


図10 第2次調査 (1953年) 第2トレンチ (縮尺1/150)

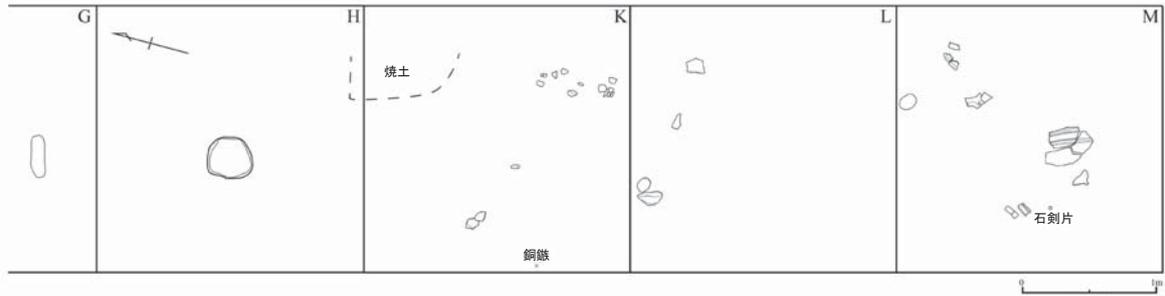


図11 第2次調査（1953年）第2トレンチ G～H区遺物出土状況

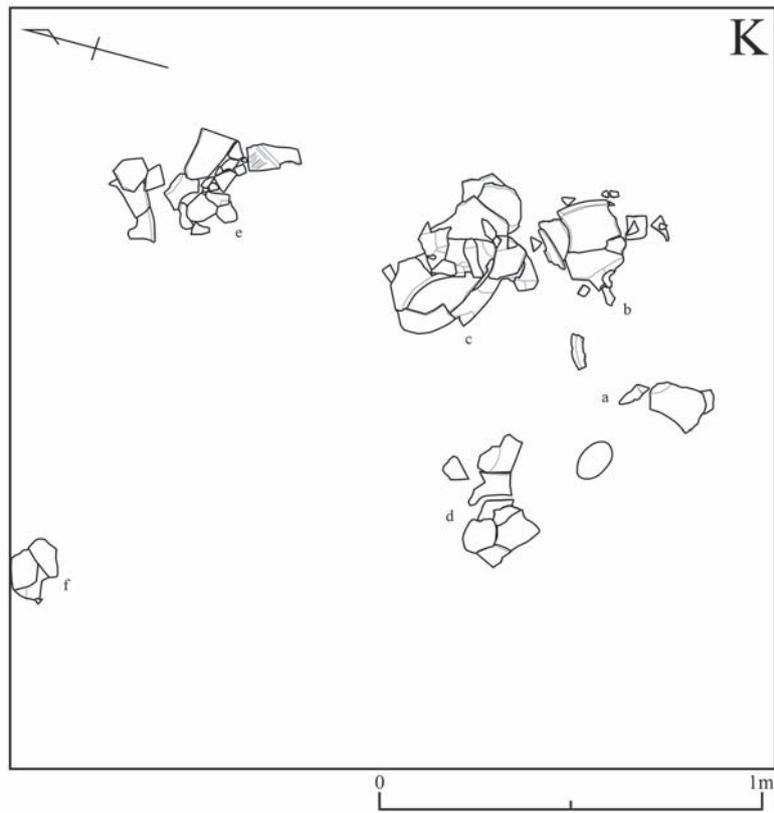


図12 第2次調査（1953年）第2トレンチ K区遺物出土状況（縮尺1/20）

### （3）第2トレンチ

A～H区の南北16mに及ぶ2×2mのトレンチ8カ所を設定した（図10）。その後、トレンチH区から東方向にI・J区の二つのトレンチを拡張し、その後トレンチH区の南にさらに8カ所のトレンチK～R区を設定した。

トレンチG～L区のトレンチH・K区では、焼土が検出された（図11）。遺構の性格は不明であるが、住居址に伴う炉址の可能性もあろう。周辺からは銅鏃や石剣片が検出された（図11）。銅鏃が検出されたトレンチK区では、大型の土器片が検出されている（図12）。そうした点からも、何らかの遺構が存在したのであろう。トレンチK区に隣接したトレンチL・M区でも土器が密集して出土した（図版2-2）。また、トレンチC～E区の西側に6m×6mのトレンチE1～E3区・D1～D3区・S～U区の拡張区を設定した。この拡張区からは複数の柱穴と土坑が発見された（図版3）。

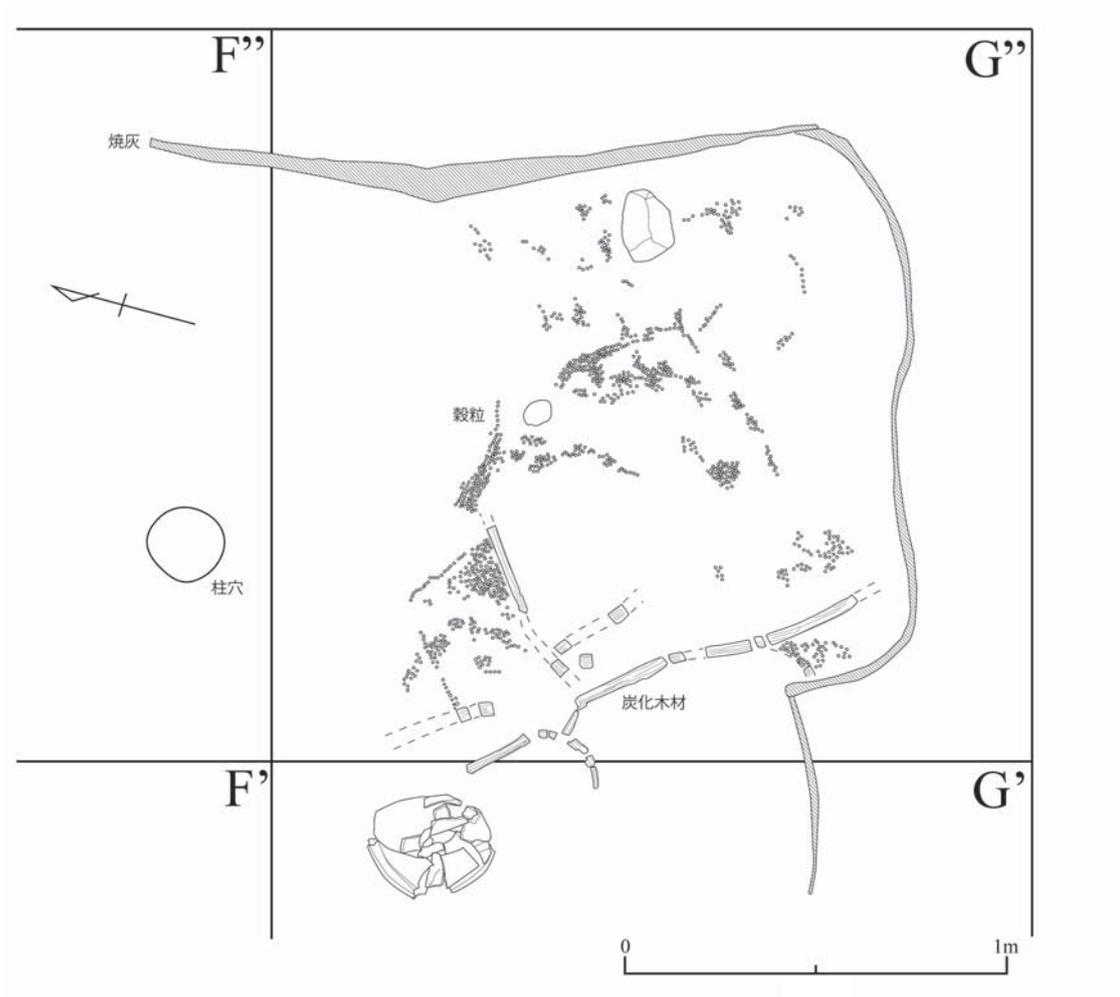


図13 第2次調査（1953年）第2トレンチ F' ~ G'' 区の2号方形住居址（縮尺1/20）

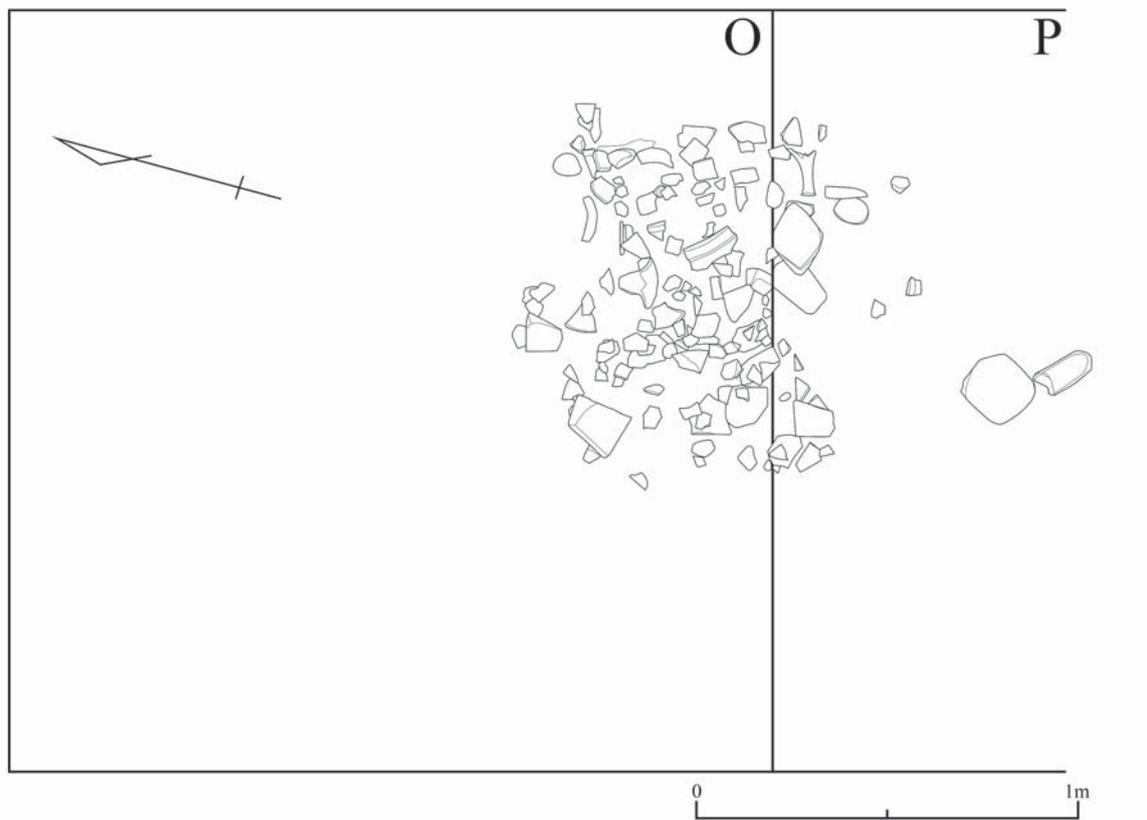


図14 第2次調査（1953年）第2トレンチ O・P 区遺物出土状況（縮尺1/20）

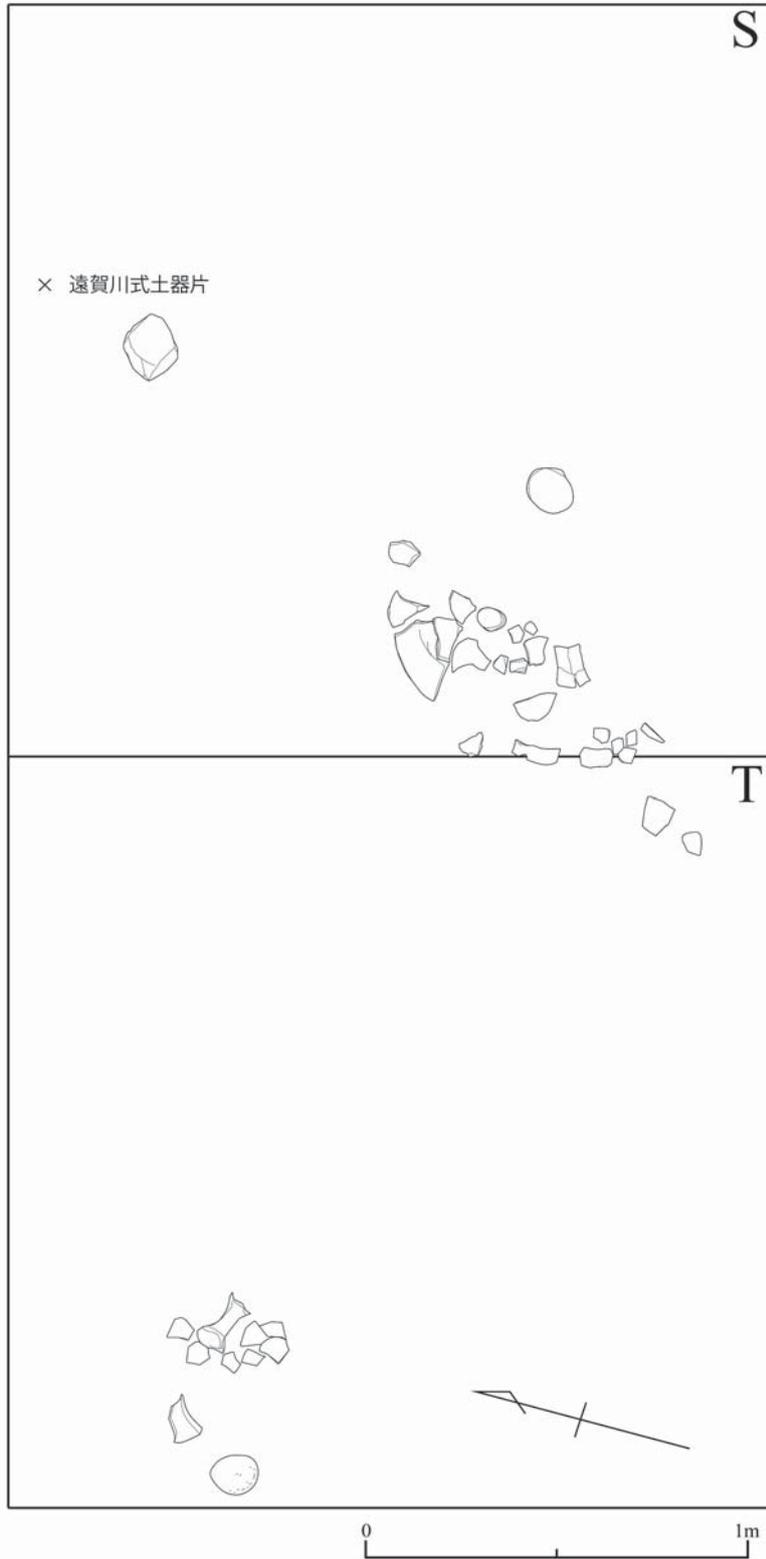


図15 第2次調査（1953年）第2トレンチ S・T区遺物出土状況（縮尺1/20）

さらに、トレンチ E～G 区では遺構らしき落ち込みが発見されたところから、さらに東側に 4 × 6 m のトレンチを拡張し、E'、E''、F'、F''、G'、G'' トレンチを設定した。ここからは円形住居址が検出された（図版 3-2）。この 1 号住居址は、住居址の中央部に炉址を持つものであり、弥生時代の円形住居址と考えられる（図版 4）。G'G'' からは炭化米が出土しており（図 10・13）、炭素年代の暦年較正年代は 204～151calBC（43.5%、1σ）、210calBC-97calBC（63.8%、2σ）を示しており、おおよそ弥生中期の須玖 I 式の年代に相当する。第 4 章で述べるように、1 号住居址から出土した土器も須玖 I 式が主体であり、炭化米の炭素年代と調和的である。一方、この住居址の南西部を切るように、トレンチ G' から、方形の遺構が検出されている（図 13）。方形部分は炭層によって囲まれているが、おそらく壁立ち住居の壁部分を意味しているであろう。これを 2 号住居址と呼ぶ。内部には炭化木材とともに、多量の炭化米が検出されており、図 13 の穀粒と記されたものが炭化米である。炭化材 1 点の暦年較正年代は 24calAD-AD-80calAD（59.3%、1σ）、7calAD-122calAD（91.9%、2σ）であり、弥生時代後期に相当する。また、この炭化材の樹種同定の結果は、サンショウ属であり二次林の先駆種であると

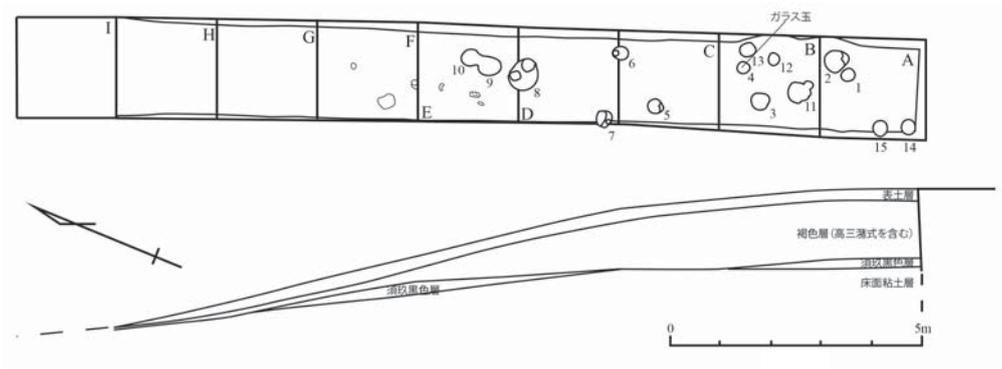


図16 第2次調査 (1953年) 第3トレンチ (縮尺1/150)

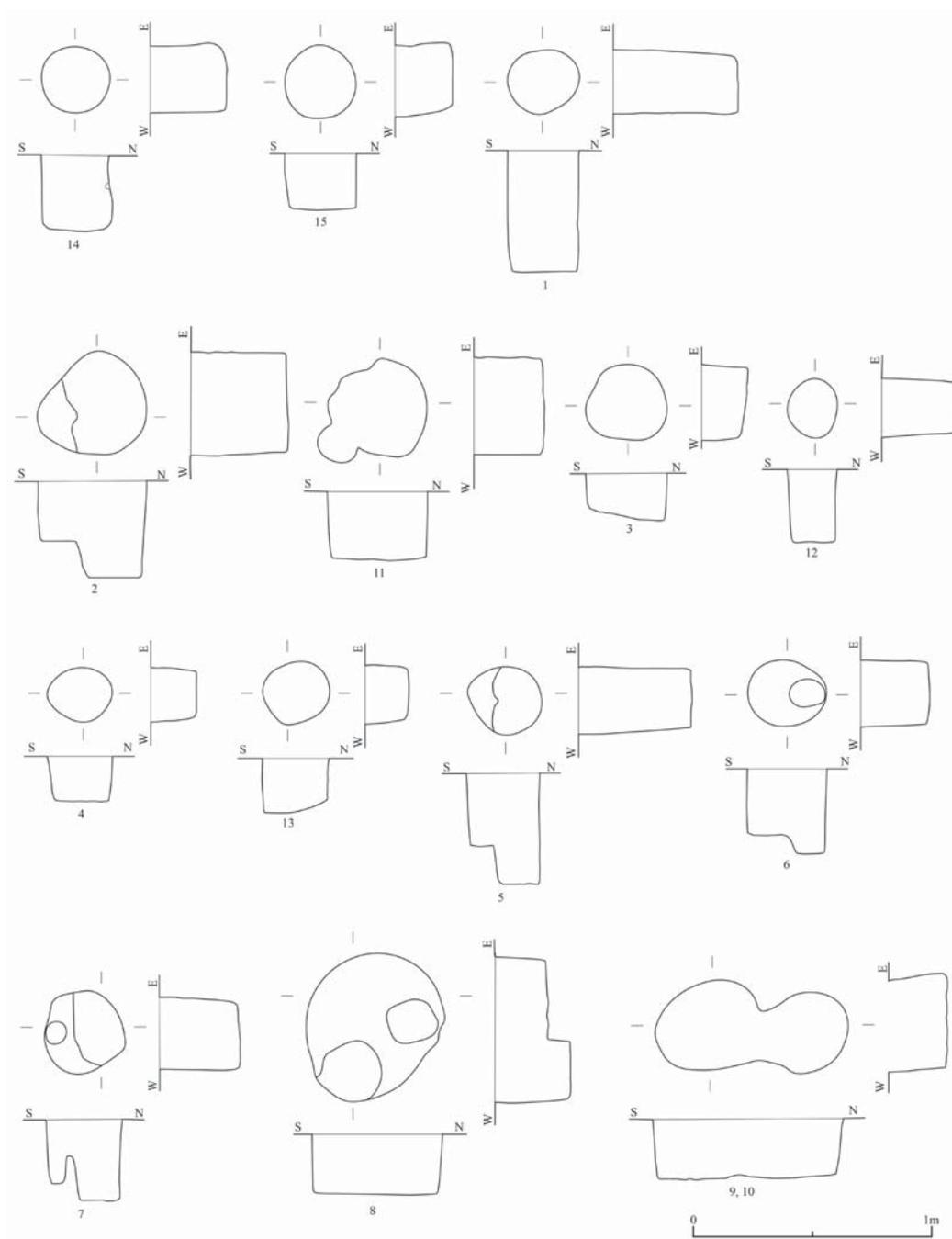


図17 第2次調査 (1953年) 第3トレンチ検出の柱穴 (縮尺1/30)

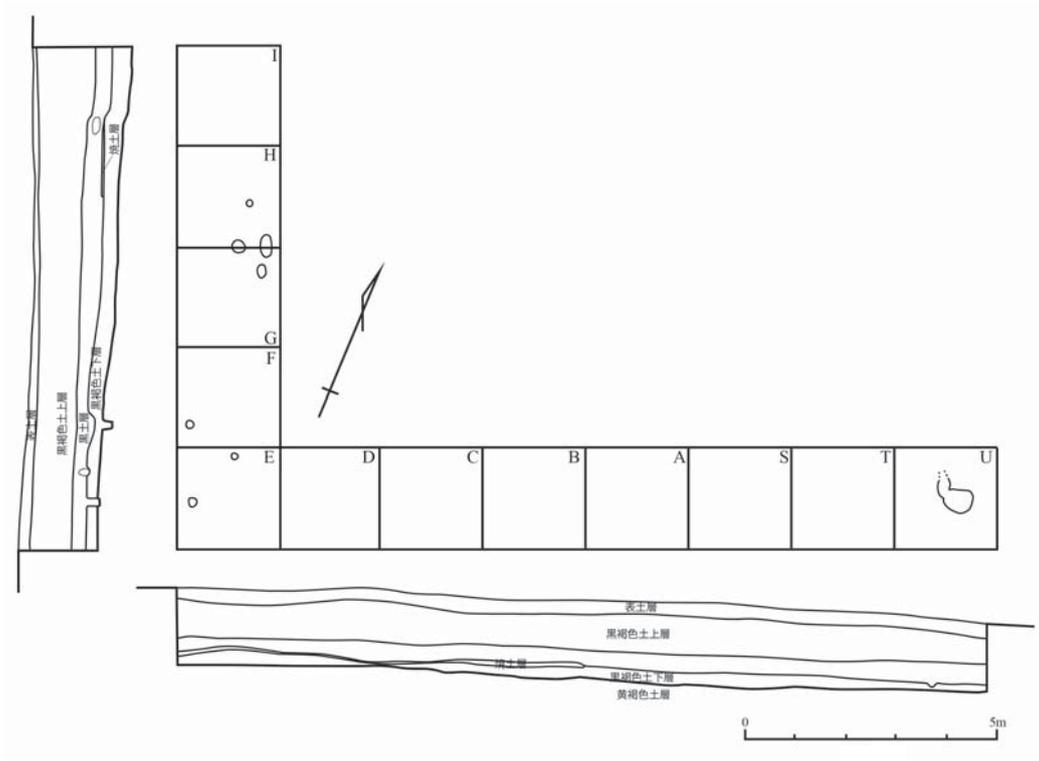


図18 第2次調査（1953年）第4トレンチ（縮尺1/150）

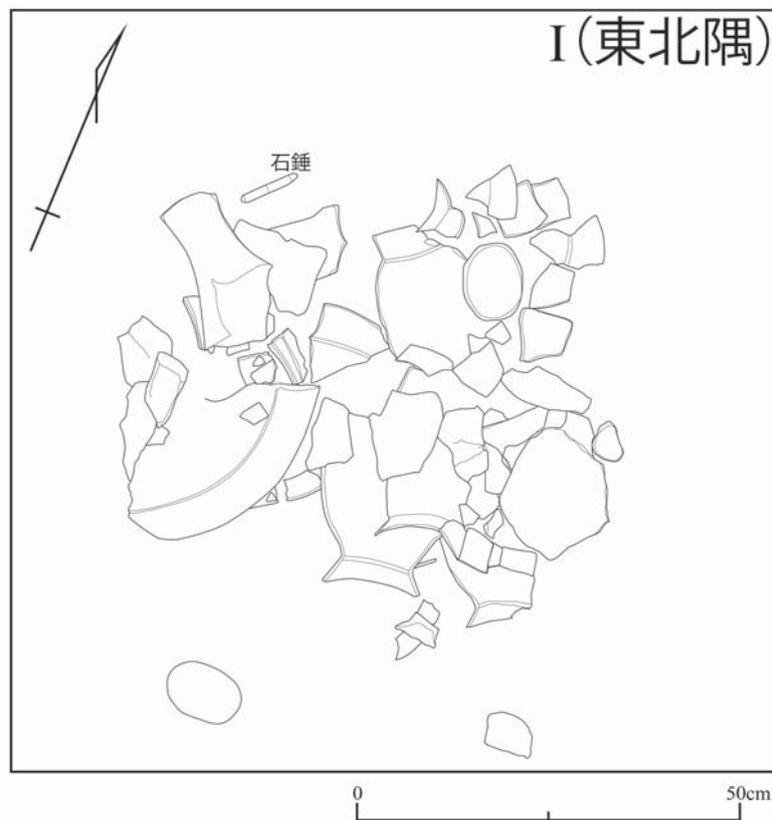


図19 第2次調査（1953年）第4トレンチ出土遺物（縮尺1/10）

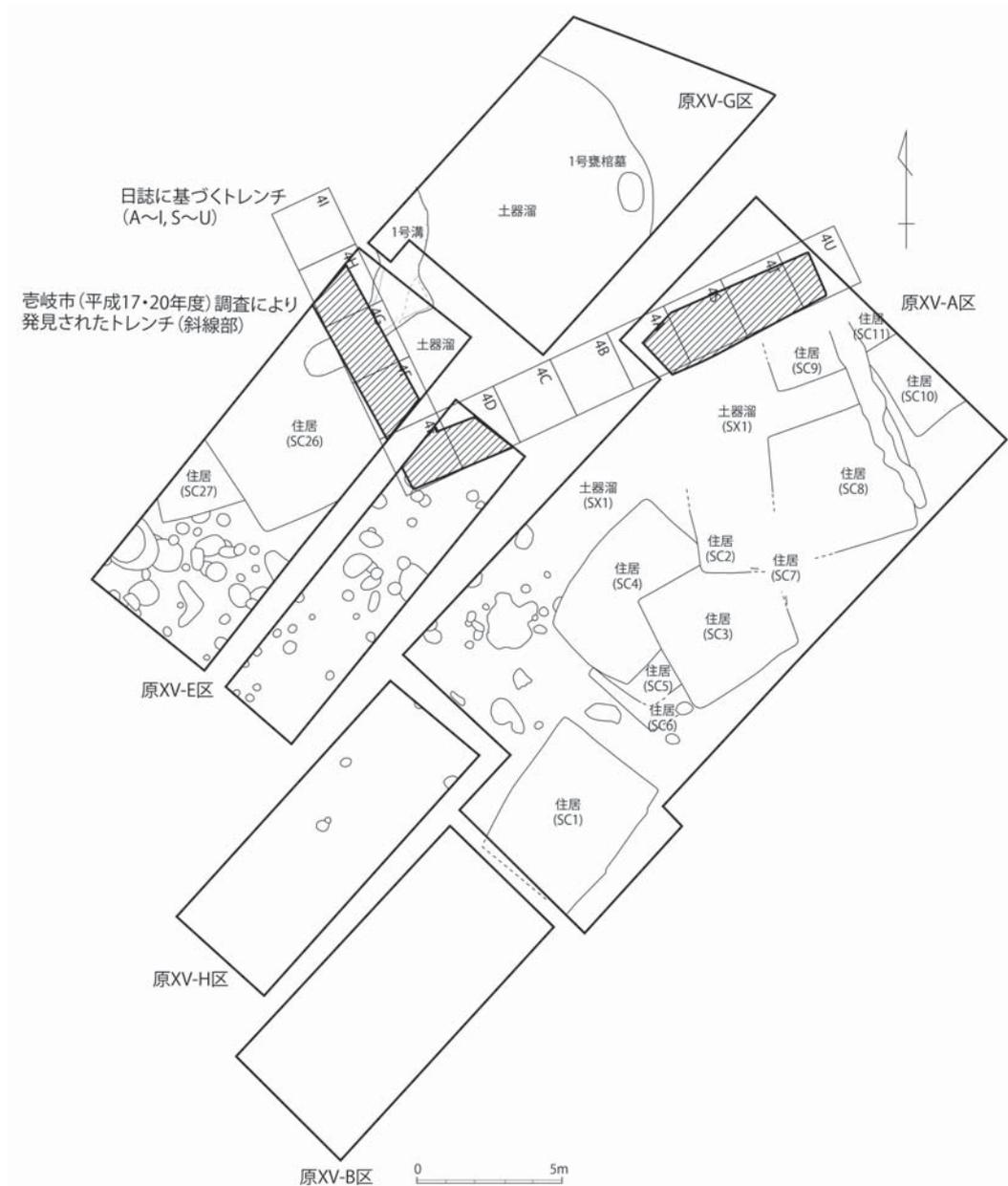


図20 第2次調査（1953年）第4トレンチと岐阜市教育委員会発掘調査地点との関係（縮尺1/250）

ころから、遺跡周辺の二次林からもたらされたものであろう。

このように、1号住居址である円形住居址の年代は、G'Gの炭化米の炭素年代と、この地点の出土土器から弥生中期の須玖I式のものである。さらに、1号住居址を切って作られた方形の2号住居址は、炭化材の炭素年代から弥生後期のものである。

この他、トレンチO・P区から土器がまとめて出土している（図14、図版2-1）。これらは第4章で詳述するように、古墳時代前期のものが中心となる。また、S・T区でも土器片が集中して出土している（図15）。これらの土器は、日誌には須玖式土器と記されていたが、遺物の再整理調査の課程では、残念ながらこれらの土器を特定することができなかった。

#### （4）第3トレンチ

2×2mのトレンチをA～I区まで南北に長さ18mに渡って設置した（図16）。饅頭畑の最も高い

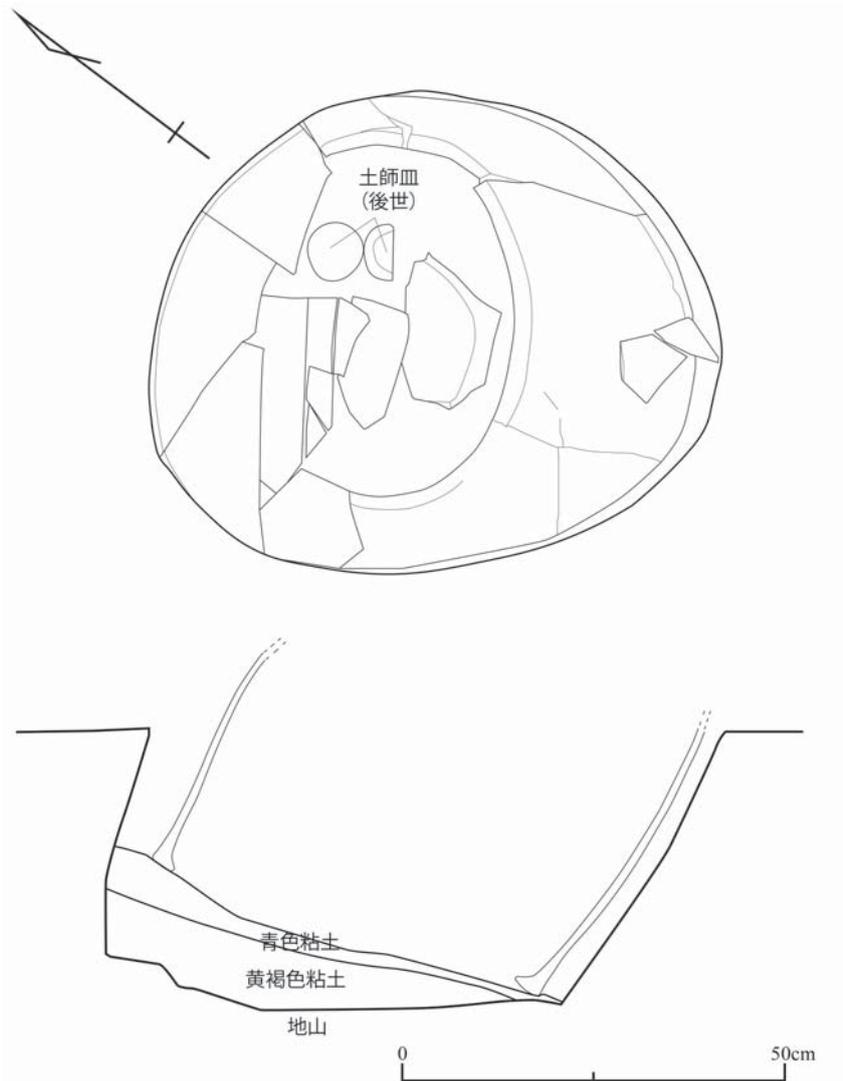


図21 第2次調査（1953年）第5トレンチ甕棺出土状況（縮尺1/10）

ところがAトレンチであり、トレンチA区から北側に向けて次第に地表面が低くなっていく。弥生時代包含層である褐色層と黒色層が残るトレンチA区からF区までには柱穴が検出されており（図版5-1）、それ以北のG～I区では、遺構面が削平されている可能性がある。第2層の褐色土は高三瀧式を含み、第3層の黒色土には須玖式を含むと誌には記載されていた。これら検出された柱穴は、第3層の黒色土下面の床面粘土層すなわち地山面で検出されたものであろう。各柱穴の形態や断面は、図17のように記録されている。4号柱穴内からはカリガラス製のガラス玉が発見されている。これら柱穴の年代は、第2層から第3層の遺物年代である弥生中期から弥生後期のものであろう。

#### (5) 第4トレンチ

2×2mのトレンチをまず東西方向にA～Eの五つの区として設定した（図版5-2）。さらにトレンチA区の東側に三つのトレンチを伸ばすとともに、トレンチE区から北方向にF～I区の四つのトレンチを伸ばした（図18）。トレンチI区からは、古墳時代前期の土器群がまとまって出土している（図19、図版5-3）。トレンチI区は、層位図によれば、地山が一段低くなっているところから、ここに遺構があった可能性がある。出土土器群はこの遺構内のものであるかもしれない。E・Fトレ

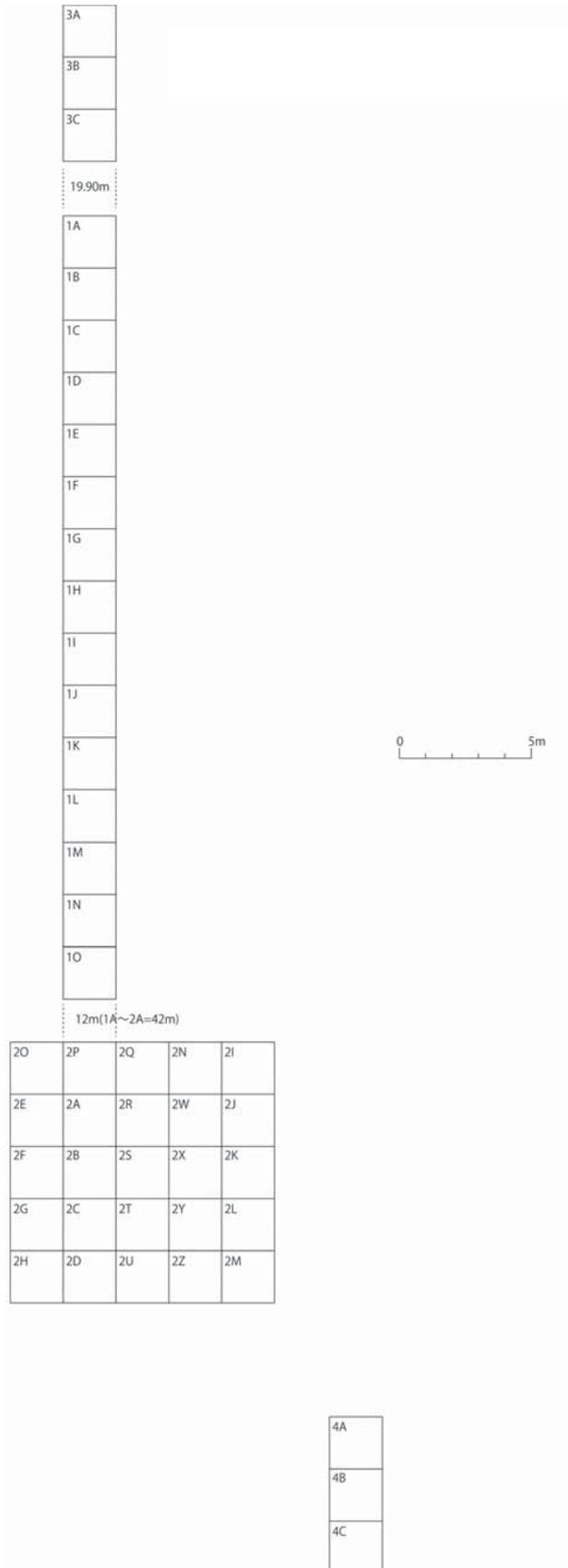


図22 第4次調査（1954年）のトレンチ配置

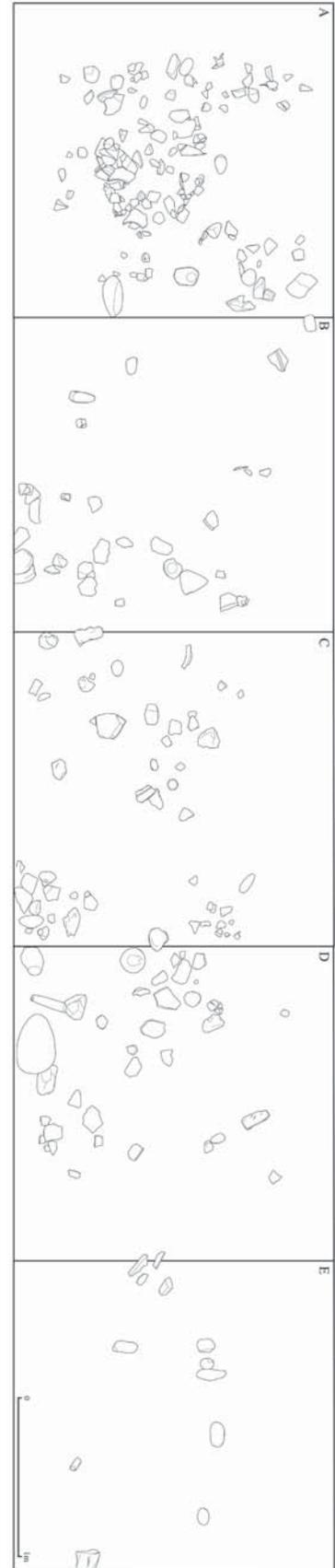


図23 第4次調査（1954年）  
第1トレンチ A～E区遺物出土状況

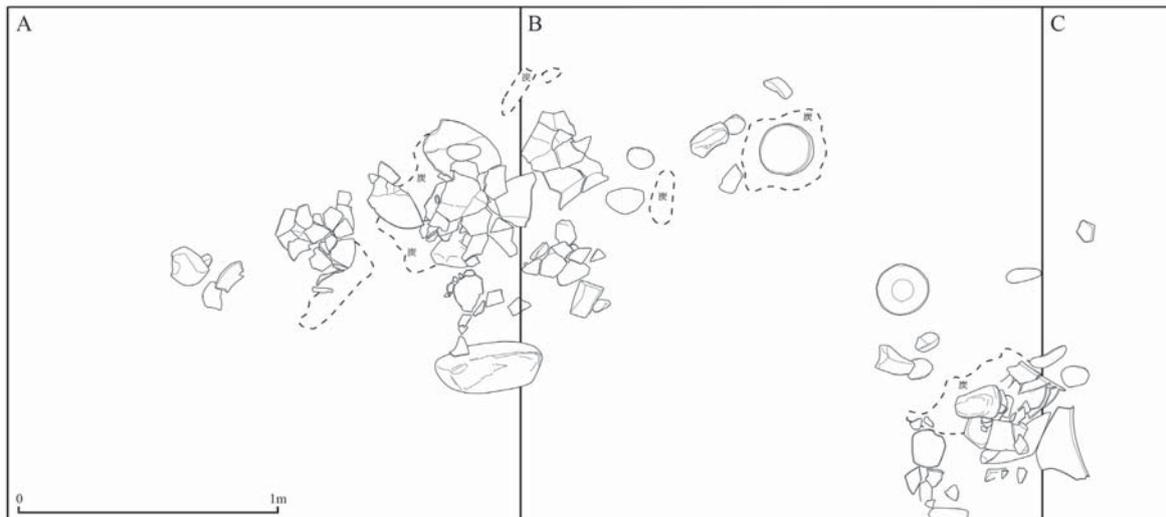


図24 第4次調査（1954年）第1トレンチ A・B区上層遺物出土状況（縮尺1/150）

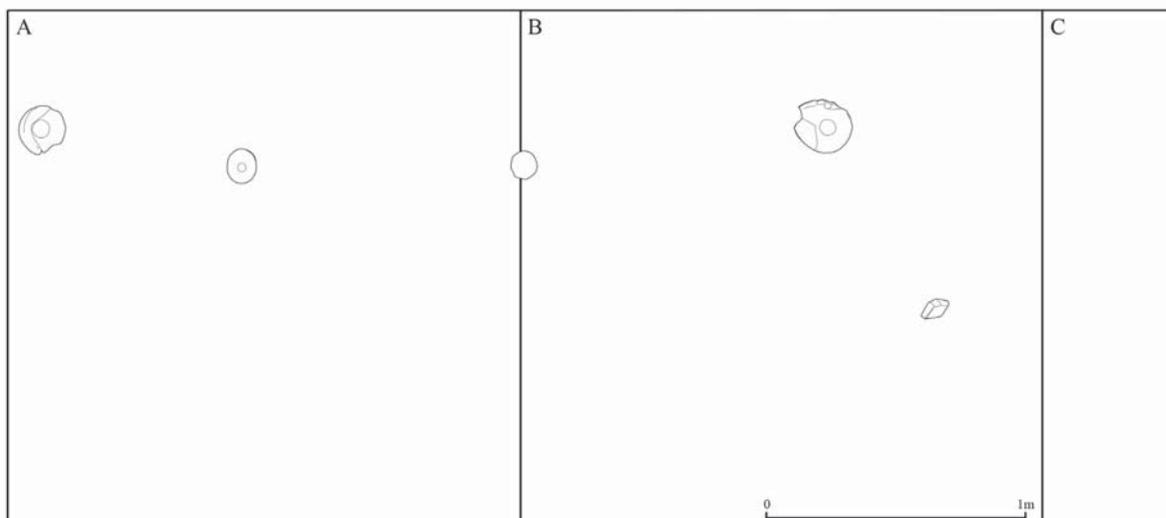


図25 第4次調査（1954年）第1トレンチ A・B区下層遺物出土状況（縮尺1/30）

ンチの西側側面では三つの柱穴を、Eトレンチの北端でも一つの柱穴を検出し、合計4基の柱穴を発見した。また、Uトレンチ中央で、炭化米が充填された土坑を検出した。多量の炭化米は出土地点不明として保存されていたが、この炭化米がUトレンチの土坑出土のものであろう。炭化米の炭素年代の暦年代は495calAD -535calAD（43.5%、 $1\sigma$ ）、423calAD-541calAD（95.4%、 $2\sigma$ ）であり、古墳時代中・後期に相当する。第4トレンチからは古墳時代前期の土器もまとめて出土しており、この土坑はそれに続くものである。古墳時代中・後期の遺構であれば、原の辻遺跡では数少ない発見例となる。

さて、壱岐市教育委員会が平成17（2005）・18（2006）年度に、原X V区を発掘調査した際に（図20）、第4トレンチを発見している（長崎県壱岐市教育委員会2006・2009）。トレンチG区は壱岐市調査の1号溝に、トレンチF区は壱岐市調査の土器溜に、トレンチT区は壱岐市調査の住居址SC9に相当している可能性がある（図20）。第4章で示すように、トレンチH・I区から古墳時代前期の土器がまとめて出土しており、古墳時代前期の方形住居址SC26（長崎県壱岐市教育委員会2009）に

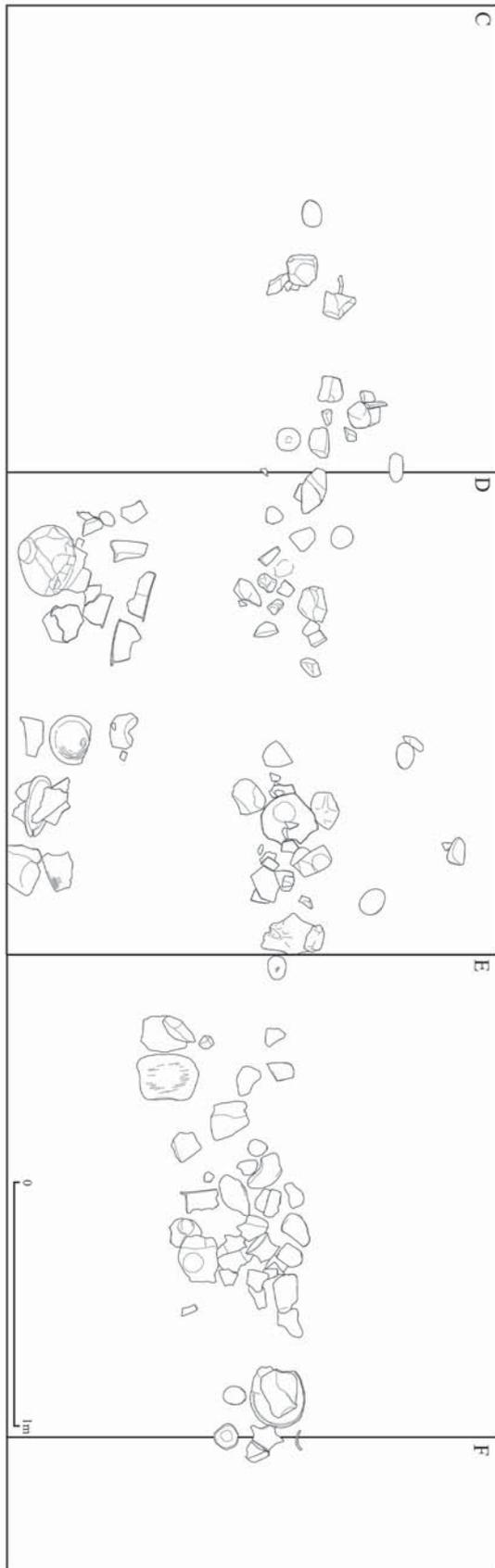


図26 第4次調査(1954年)  
第1トレンチC～E区下層遺物出土状況(縮尺1/30)

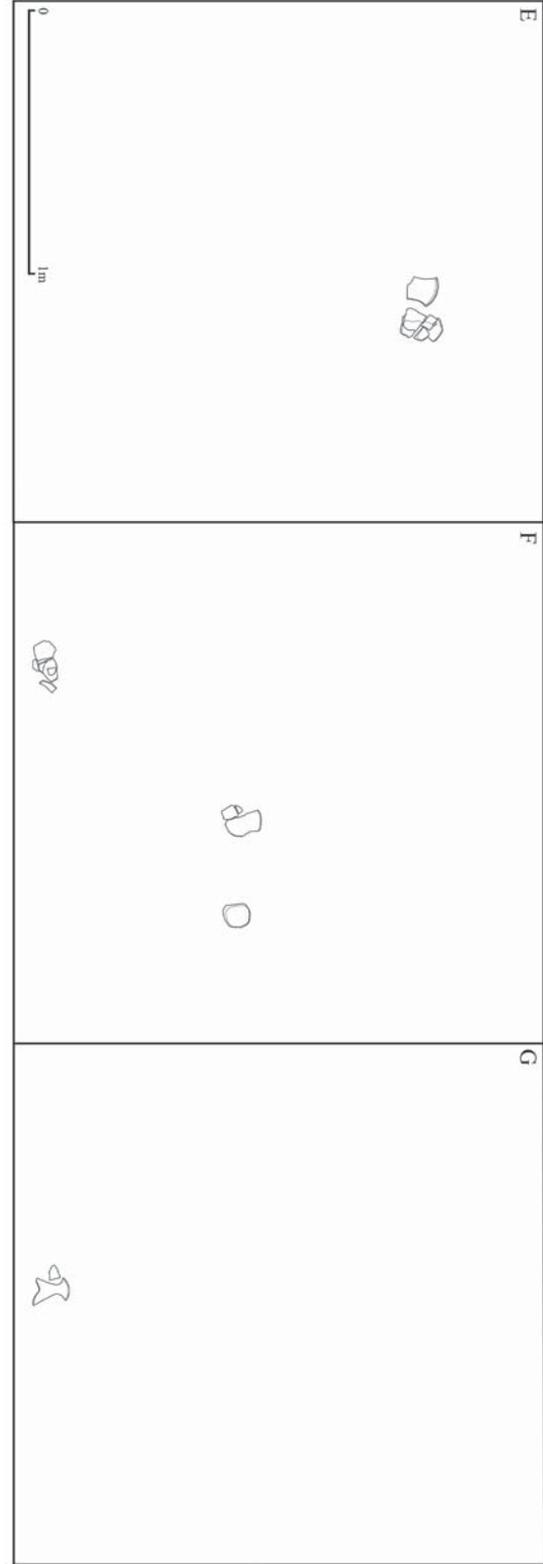


図27 第4次調査(1954年)  
第1トレンチE～G区上層遺物出土状況(縮尺1/30)

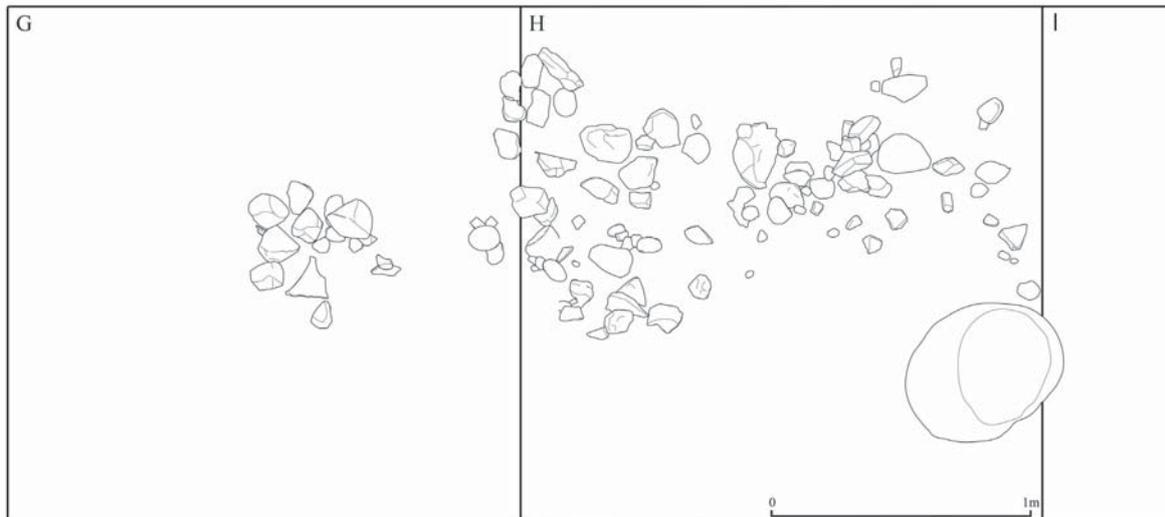


図28 第4次調査（1954年）第1トレンチ G・H区上層遺物出土状況（縮尺1/30）

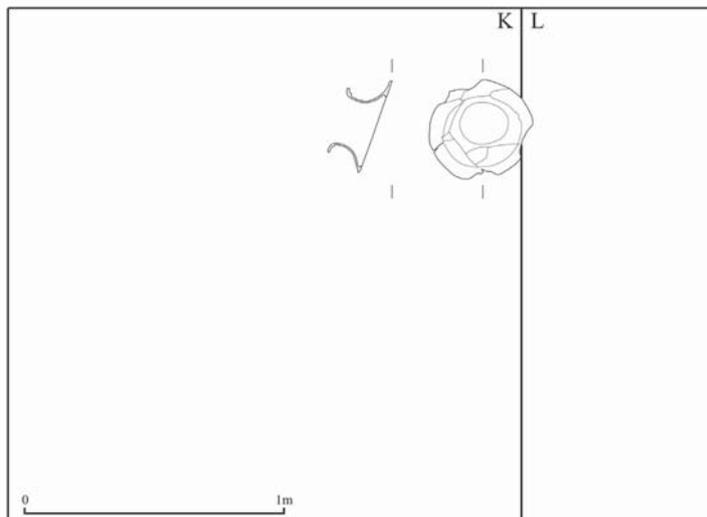


図29 第4次調査（1954年）第1トレンチ K区下層遺物出土状況（縮尺1/30）

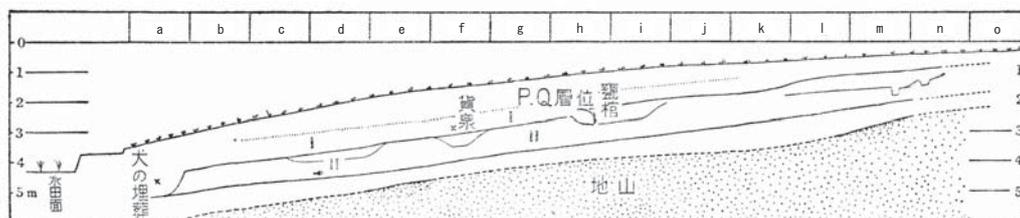
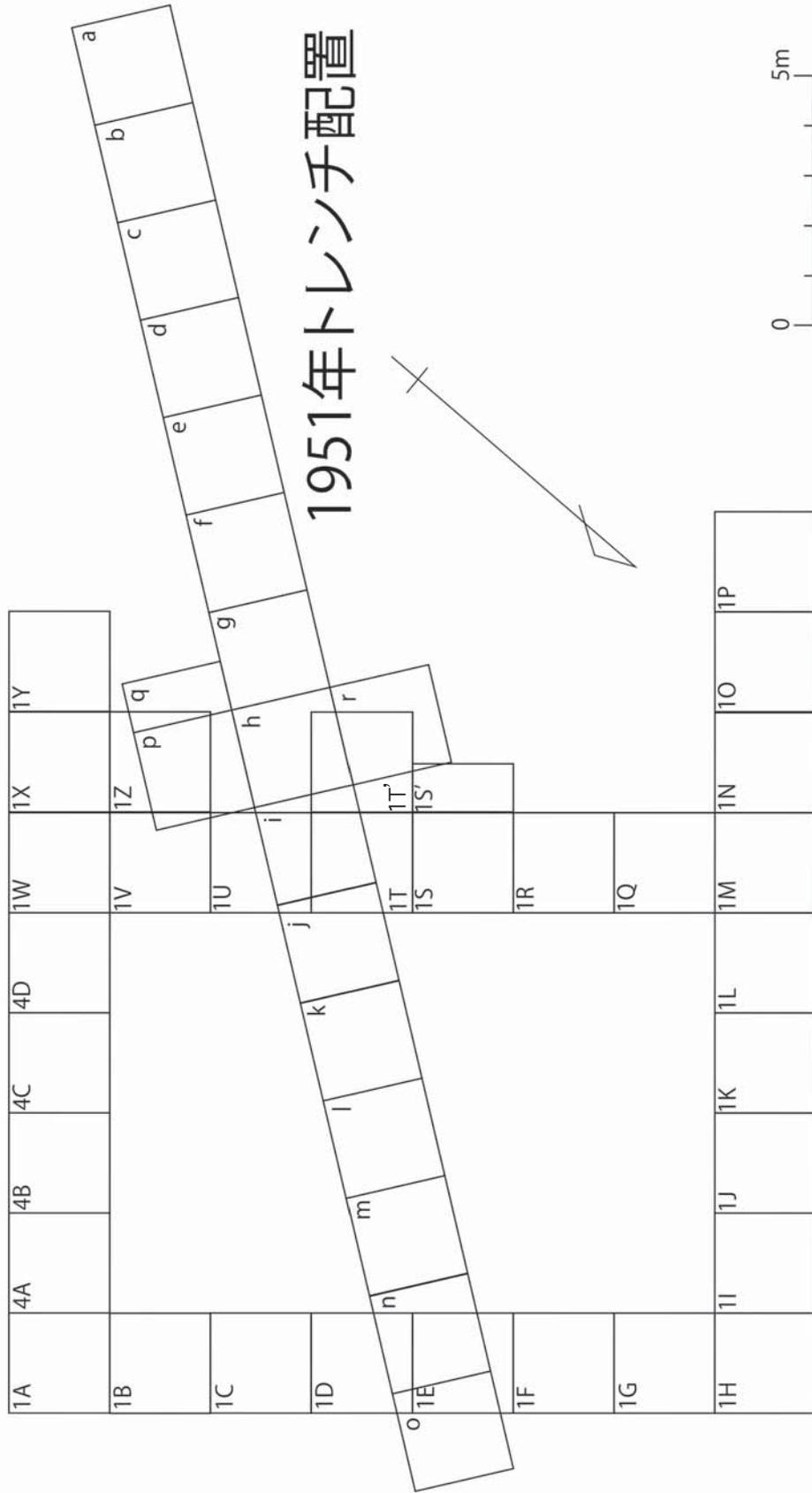


図30 第1次調査（1951年）第1トレンチ層位図

伴うものであるかもしれない（図20）。なお SC 9 の方形住居は弥生中期の SX1 の土器溜りよりより新しいものとされている（長崎県壱岐市教育委員会2006）。また、トレンチ E・F 区で検出された柱穴の一部は、壱岐市調査の住居址 SC26 に伴うものであるかもしれない。トレンチ U 区の土坑は、壱岐市調査の住居址 SC 9 または SC11 に伴うものである可能性がある。

# 1961年第1・第4トレンチ配置



# 1951年トレンチ配置

図31 第1次調査 (1951年) 第1トレンチ、第5次調査 (1961年) 第1・第4トレンチ配置図



図32 第1次調査（1951年）  
第1トレンチ b区遺物出土状況（縮尺1/25）

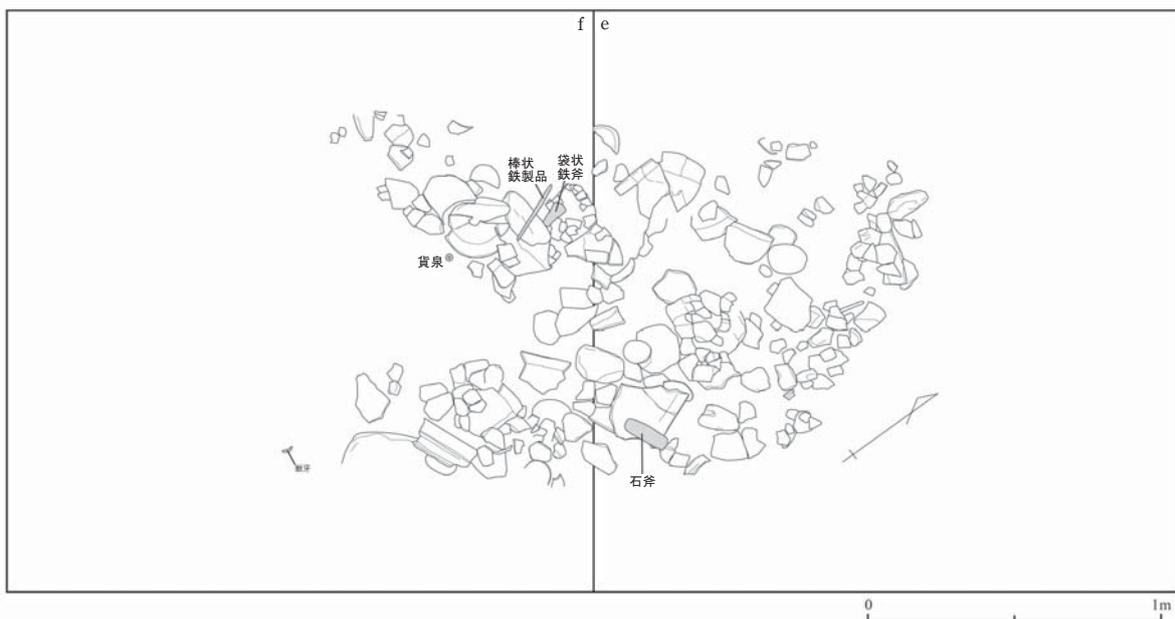


図33 第1次調査（1951年）第1トレンチ e・f区遺物出土状況（縮尺1/25）

#### (6) 第5地点（甕棺墓）

第4トレンチのかなり南側で甕棺墓が発見された（図21、図版6-1）。結果的に甕棺墓の位置は、1954年調査の第1トレンチの南側約20mに位置していた。口縁部を墓壙下面に接するように配置するものであり、倒置式の甕棺である可能性がある。糸島平野から唐津平野では倒置式の甕棺墓が流行するところから、こうした地域の墓制が壱岐にも伝来した可能性がある。甕棺は第4章の115（図49）の汲田式甕棺である。なお、検出面では甕棺の胴部から底部が削平されていたが、削平面で、中世の

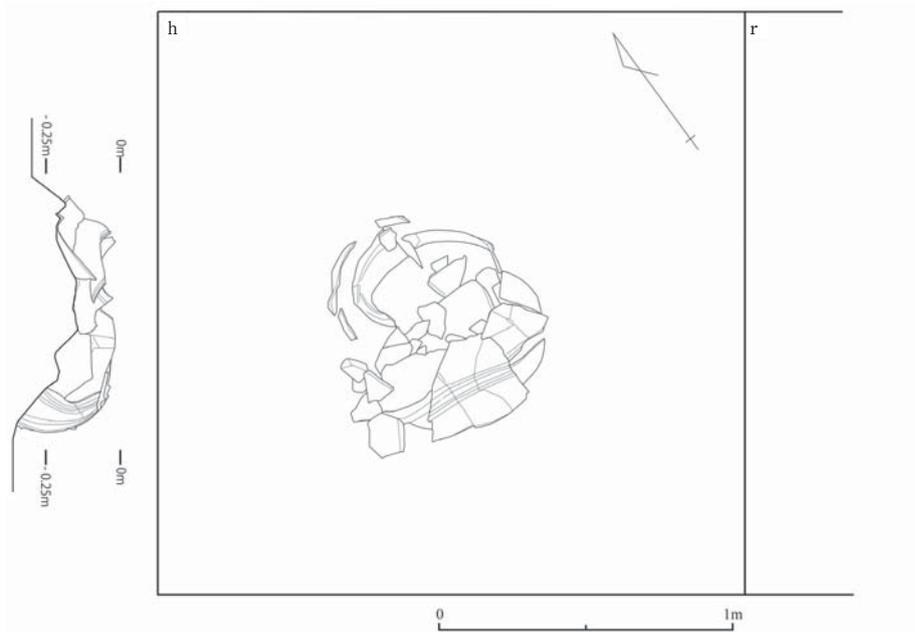


図34 第1次調査（1951年）第1トレンチh区出土小児甕棺墓（縮尺1/25）

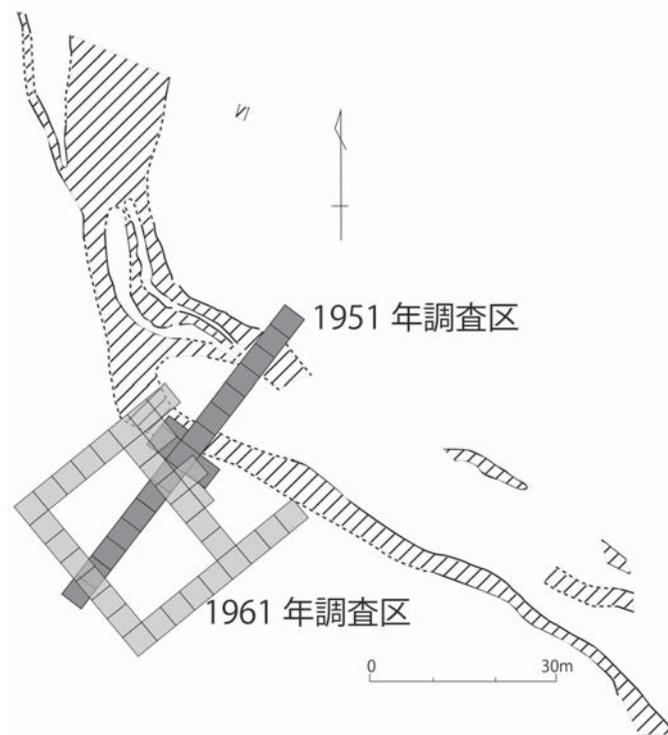


図35 第1次調査（1951年）・第5次調査（1961年）と環濠の位置

土師器皿が存在し（図21）、中世に甕棺墓が破壊された可能性がある。この土師器皿は、甕棺を掘り込むようにして火葬人骨を埋葬する際に、供えられたものと考えられる。

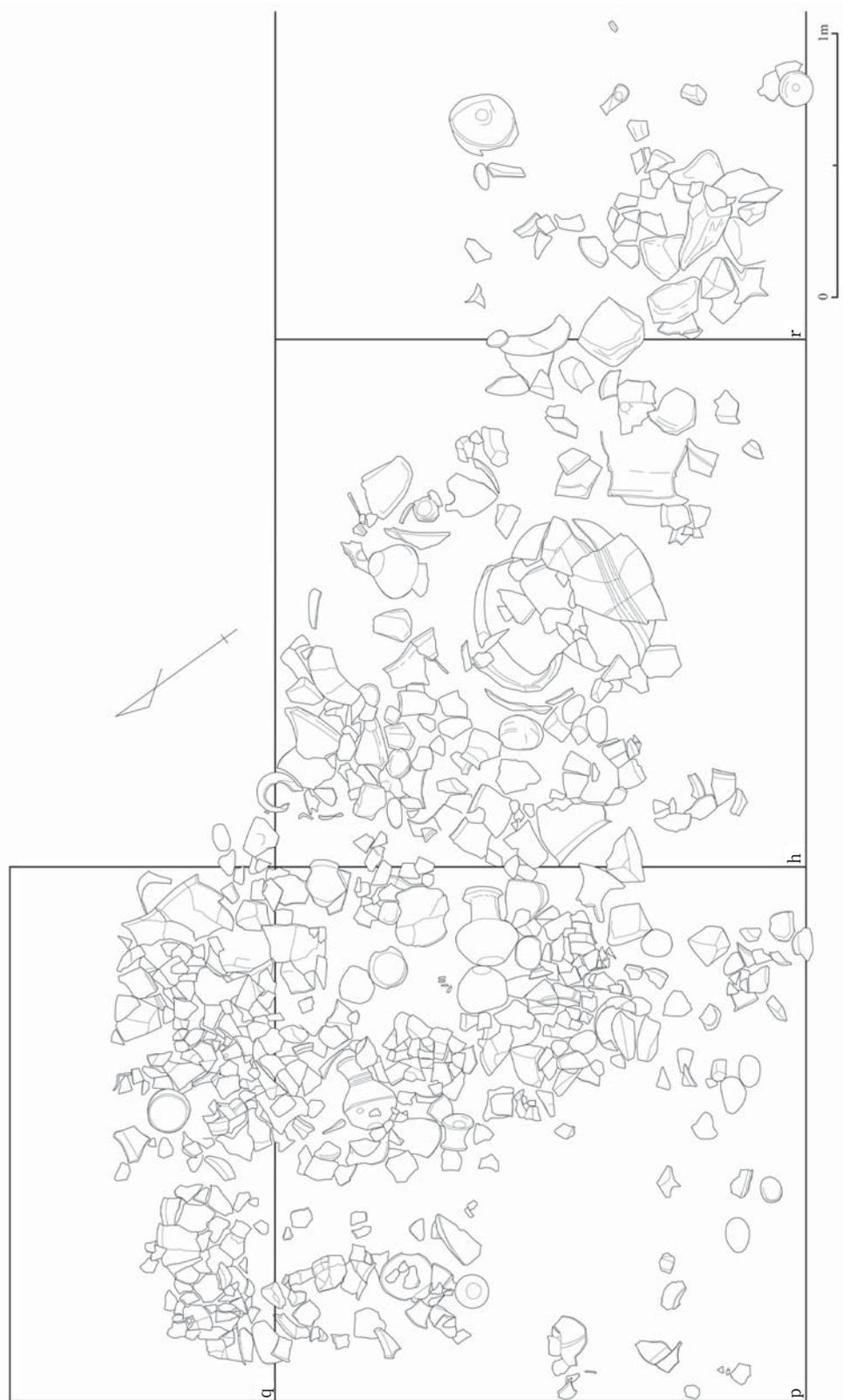


図36 第1次調査（1951年）第1トレンチh・p～r区上層遺物出土状況（縮尺1/25）

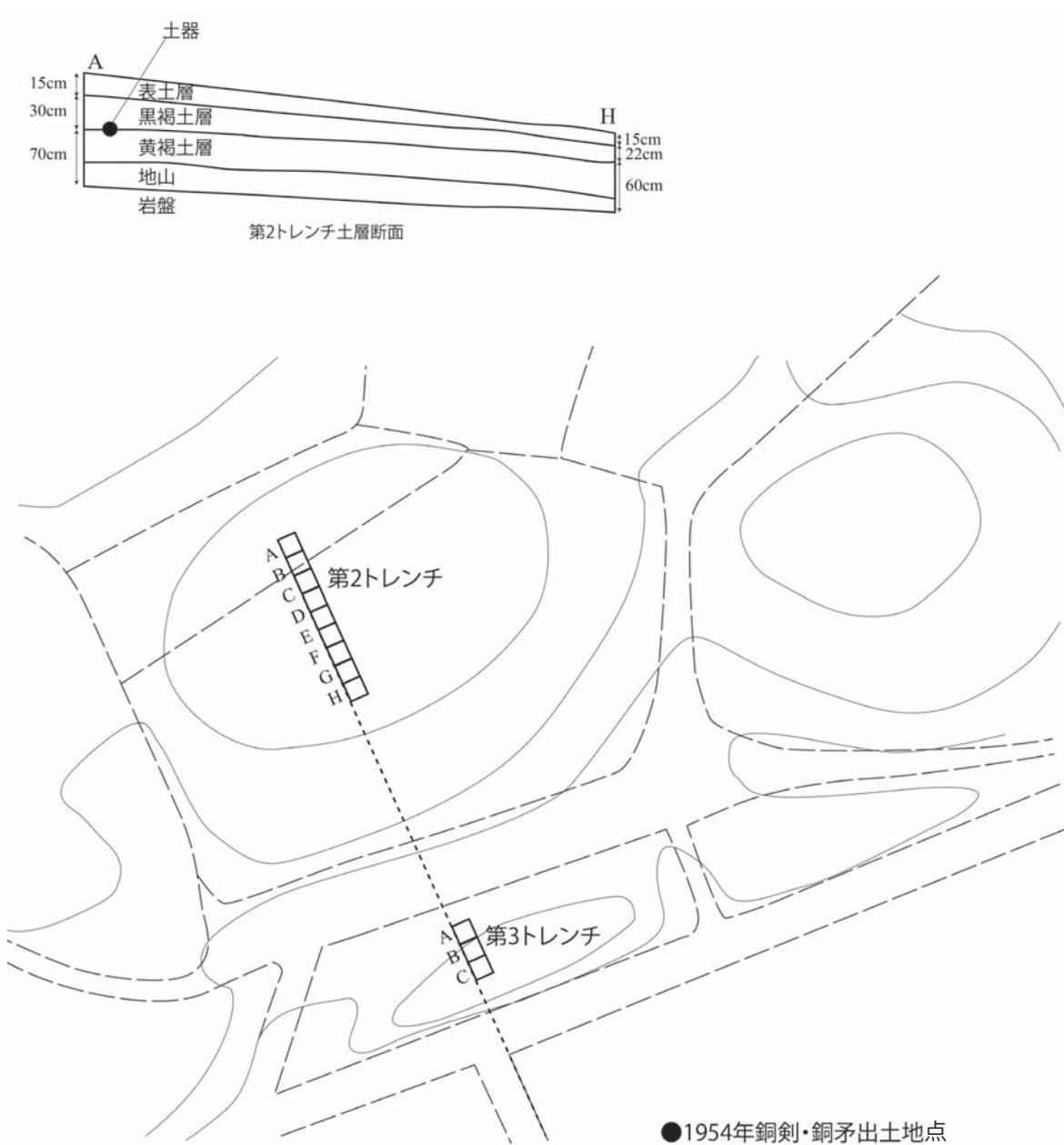


図37 第5次調査（1961年）第2・第3トレンチと層位

### 3. 第4次調査（1954年）の調査区の遺構と層位

#### (1) トレンチの配置

第3次調査5地点で発見された甕棺墓の北側において、漢式土器片を採集したところから、ここを第4次調査地点とすることとなった。第3次調査の低丘陵中部からさらに南側の低丘陵基部に位置しており、東西方向に第1～第4までのトレンチが配置された（図22）。

#### (2) 第1トレンチ

2×2mのトレンチをA～O区の長さ30mに渡って東西方向に設置した。このうち、トレンチA～E区では表土下の第1面で遺物が集中して出土した（図23、図版8-1）。さらにその下部の上層

では、トレンチ A～B 区で遺物がまとまって出土している（図24、図版7）。ここでは、出土土器の周辺に炭層が認められる。さらにその下部の A・B 区下層では遺物はほとんど出土していない（図25）。一方、トレンチ C～E 区では上層で遺物がほとんどみられないが、その下層では遺物が集中して出土している（図26、図版8-3）。続く E～G 区トレンチの上層は遺物の出土が散在しているが（図27）、トレンチ G・H 区の下層（図28）ならびに K・L 区トレンチの下層（図29、図版8-2・4）では遺物が集中して出土している。これらは、後に述べるように、低丘陵基部側で長崎県教育委員会によって発見された内環濠に相当する部分の遺物出土様相であろう。したがって、遺物が比較的集中するトレンチ A～L 区の間が環濠部分に当たると考えられる。H 区の黒褐色土層すなわち第2層は原の辻遺跡上層に相当するが、ここから木炭が出土している。木炭の放射性炭素年代は、128calAD-203calAD（68.3%、 $1\sigma$ ）、113calAD-226calAD（90.7%、 $2\sigma$ ）である。第4章の出土土器の検討によれば、内環濠の上層は高三瀧式と下大隈式の弥生後期の包含層であり、炭素年代の紀元後2世紀はほぼ下大隈式段階にあたり、内環濠の埋積年代を示していると考えられる。

### （3）第2トレンチ

第1トレンチの東側12mのところを設置された（図22）。まず A～C 区トレンチを設置し、柱穴8基を検出した。その後トレンチを拡張し、E～G 区トレンチと O・P 区トレンチおよび D・H 区トレンチを設置した。O・P 区トレンチおよび F・G 区トレンチで土器の集中地点が認められた。さらに、Q～U 区トレンチを設定し、遺物包含層である黒色土層の土器はほとんど須玖式土器であることを確認した。第2トレンチは、最終的に I～N 区・W～Z 区のトレンチまで拡張され、1辺10m×10mのトレンチとなった。そこでは柱穴ならびに土坑が発見され、堀立柱住居などの何らかの遺構になる可能性がある。

### （3）第3トレンチ

第1トレンチの西側で設定されたトレンチである（図22）。A～C 区トレンチと比較的小さなトレンチである。地表下1mのところ須玖式土器片を含む包含層である黒褐色土層が認められた。

### （4）第4トレンチ

第2トレンチの北西側に設定された A～C 区の比較的小さなトレンチである（図22）。日誌には遺物出土の記載はない。

## 4. 第1次調査（1951年）・第5次調査（1961年）の調査区の遺構と層位

### （1）第1次調査

1951年の第1次調査では、1939年に鴫田忠正氏が調査した原の辻の台地東北端の崖（鴫田1944）に接したところにトレンチが設定された（水野・岡崎1954）。トレンチは崖面に直交するように崖面上部の2m×2mのトレンチ o 区から崖面下部の2m×2mのトレンチ a 区までの全長30m、幅2mのトレンチが設定された（図31）。第1次調査の層位は斜面堆積をなし、上層の第I層と下層の第II層からなる（水野・岡崎1951）。第I層はトレンチ i 区から始まりトレンチ a 区まで続いている。一方、第II層はトレンチほぼ全面に存在していた（図30）。

上層のI層からは b 区で壺棺が出土している（図30～32、図版13-2）。検出時には既に壊れていたが、壺棺の上を石で囲み粘土で包んでいた。小児棺と考えられている（水野・岡崎1951）。この壺棺は第4章の249の土器（図61）が当たるであろう。また、h 区でも壺棺が出土している（図34、図版11-2・12-1）。頸部および胴部に2条の突帯を巡らせるもので、第4章の265（図63）が相当する。

口縁部は埋葬当時欠損しており、蓋に壺の破片を使い、30°の傾斜を以て壺棺が配置され、周りは石で覆われていた。中には5、6歳の小児の頭蓋骨、下顎骨、四肢骨があり（図版12-2）、小児棺で間違いない。ガラス製小玉3個、鉄斧の破片、釣り針状鉄製品が見いだされるとされる（水野・岡崎1951）が、この内、ガラス製小玉は副葬品の可能性がある。なお、これらガラス玉は、現在所在地不明である。また、第1層を低く掘り下げた土坑の中にはほぼ全身の犬の骨格が残されていた（図版13-1）。頭部には丹塗りの壺があり、犬の埋葬に伴う副葬品のようにもみえる。丹塗壺は形態から、第4章の出土地不明の318（図69）が相当しよう。e・f区の第I層では土器の集中地点が見いだされた。ここからは貨泉、棒状鉄製品、袋状鉄斧が出土した（図33）。

下層の第II層は包含層であり、遺構は発見されていない。岡崎敬は、下層の第II層を須玖式、上層の第I層を原の辻上層式とした（水野・岡崎1951）。すなわち原の辻上層式は、高三瀧式と中期の須玖式の間とするものである。しかし、高倉洋彰は、弥生後期中葉から後半の高三瀧式から下大隈式への移行期段階の土器に相当するものとしている（高倉1982）。実際には、原の辻遺跡上層は弥生後期の高三瀧式から下大隈式が混在した状況にある。岡崎敬は、下層の第II層を貨泉の出土などを含めて前漢から後漢初期と考えた。この第I層を原の辻上層式として、後漢前期の志賀島出土金印の時期と考えた。さらにその上層として鴫田忠正氏の第3層の高三瀧式（鴫田1944）を当て、原の辻遺跡は弥生時代終末期まで続くものとみていた（水野・岡崎1951）。しかしながら、これらの上下層は安定的な斜面堆積をしていたわけではなく、長崎県教育委員会によって発見された環濠（図35）が、こうした文化層中に存在しており、実際の層位断面図はもっと複雑なものであったろう。また、岡崎敬は、鴫田忠正氏の第3層の高三瀧式（鴫田1944）に続くものとして、e・f区の異質土器を当てていた（水野・岡崎1951）。このe・f区の異質土器とは、第4章で検討するように、古墳時代前期の土器と考えられる。第1次調査の段階から、原の辻遺跡は、弥生中期の須玖式から弥生後期、弥生終末期、さらに古墳時代前期まで存続する遺跡であることが、一定程度予想されていたと言えよう。

第1次調査のh区では第I層で土器が集中して出土するところから、h区の両側にp・q区とr区が拡張された。第I層ないしその下面には、p区からr区まで、北西から南東方向に土器が帯状に集中して出土している（図36、図版10-3・11-1）。これは、環濠に相当する部分と考えられる。長崎県教育委員会の調査の環濠と一致するものである。この地点の環濠が内環濠とすれば、外環濠はb・c区が相当すると考えられる（図35）。

## （2）第5次調査

1951年調査区を再発掘する意味で、L字形のトレンチである第1トレンチA～P区（南北16m×東西18m）を設定した（図31）。続いてトレンチM区（図版15-1）の北にトレンチQ～W区を拡張し（図版15-2）、さらにトレンチW区の南側にトレンチX～Z区を拡張した。第1トレンチS区と1951年調査のトレンチr区の間にはトレンチS'区とT'区を拡張したが、第1トレンチS・S'区では土器が集中して出土している（図版16）。また、第1トレンチW・X区でも遺物が集中して出土しており（図版15-2）、これら遺物集中地点が内環濠に相当する部分である。すなわち、1951年第1トレンチ調査p～r区と1961年調査第1トレンチS・S'～W・X区の土器出土集中地点が内環濠に相当する。内環濠部分の1961年調査第1トレンチW・X区ではガラス玉が出土しており、環濠内の遺物である可能性がある。また、第1トレンチのT・U区では焼土層が確認され（図版17-1）、S'区上層では、砥石や焼け石が散乱しており、炉址の可能性が日誌で記述されているが、図や写真はなく、炉址であるかは不明である。さらにR区下層では、炭化米などの植物種子が出土している。その後、コの字形をなす第1トレンチを繋ぐように、A区とW区の間には第4トレンチのA～D区トレンチを設定



図38 第1次調査(1951年)・第2次調査(1953年)・第4次調査(1954年)・第5次調査(1961年)のトレンチ配置と環濠の位置(縮尺1/6000)

して、全体が口の字形を呈するトレンチとなった(図31)。第4トレンチD区からは遺物が集中して出土しているが(図版18-2)、この部分も内環濠に相当している可能性がある(図35)。なお、第1トレンチQ区出土の炭化材を年代測定したところ、125calAD-173calAD(47.4%、1 $\sigma$ )と110calAD-220calAD(89.6%、2 $\sigma$ )の測定値を得た。弥生時代後期後半の年代であり、上層の年代を示している。この炭化材はサンショウ属であり、遺跡周辺の2次林によるものである。

1961年調査の第2トレンチと第3トレンチは、1954年の銅剣・銅矛出土地点の西側の丘陵斜面部に設置された(図6)。第2・第3トレンチは、隣接した二つの饅頭畑に、それぞれ16m×2mのトレンチA～H区と6m×2mのトレンチA～C区が設置された(図37)。このうち、第2トレンチH区では、第3層の黄褐色土層を掘り込んだ柱穴が発見されている。また、第2トレンチA区の北側を拡張したところから甕が2点出土しており、合わせ口の小児甕棺である可能性がある(図版18-1)。これらの甕の一つは第4章の430(図82)であり、須玖I式である。さらに、第2トレンチのN区から小児甕棺である可能性がある甕が出土しているが(図版17-2)、現在、その所在は不明である。

第5トレンチは、第1・第4トレンチの西側に隣接した位置に、長さ12m×2mのトレンチA～F区が設置され、その後、さらに南に向けてトレンチG・H区が設定されている。遺構検出状況などについては不明である。

## 5. まとめ

1951年の第1次調査と1961年の第5次調査第1・4・5トレンチは、原の辻台地北西端に位置し、

多重環濠の内環濠と外環濠部分に相当している（図38）。第1次調査では、上層と下層に分層され、原の辻上層式が設定された。当時の原の辻上層式の想定年代は、今日で言う弥生中期の須玖式と弥生後期の高三瀦式との中間に位置づけするものであった。しかし、型式区分できるように明確に層位区分できたかは不明である。なぜなら、斜面堆積層の一部は環濠に相当しており、単純な上下の層位関係にはならないからである。第5次調査の環濠部分でも上下層に分層して遺物が一部取り上げられているが、下層は弥生中期の須玖式で、上層は弥生時代後期から古墳時代前期に概ね分けることができる。原の辻上層式という型式名を付すことは難しく、原の辻遺跡の環濠上層部分は、弥生後期から古墳前期に相当する。

1954年の第4次調査は、原の辻遺跡の台地基部に近い地点に設置されたが、第1・第2トレンチが南側の多重環濠の内環濠に重なるように設定されていた（図38）。環濠部分には、土器が集中して出土している。また、1953年の第2次調査の第5トレンチからは、汲田式の甕棺墓が出土している。これは南側の多重環濠の外側に位置している（図38）。環濠の南側には原ノ久保の墓域A・B・Cの三つの墓域が存在するが、それよりさらに北側に位置するものである。第3次調査第5トレンチ付近にも新たに墓域が確認される可能性を示すものである。

一方で、1953年の第2次調査は、多重環濠の内部の集落の中心に位置している（図38）。第2・第4トレンチでは、弥生時代と古墳時代前期の竪穴住居址が検出された。また、焼土層を伴う遺構は鍛冶関連遺構である可能性がある。

## 参考文献

- 高倉洋彰1982「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、801-836頁
- 鶴田忠正1944「長崎県壱岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』
- 長崎県壱岐市教育委員会2006『特別史跡 原の辻遺跡—史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査—原XⅤ区・原XⅣ区・高元Ⅲ区・高元Ⅳ区 石田大川604区・石田大川605-1区』（壱岐市文化財調査報告書第9集）
- 長崎県壱岐市教育委員会2009『特別史跡 原の辻遺跡—史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査—高元Ⅷ区・原XⅤ区・原XⅦ区』（壱岐市文化財調査報告書第1集）
- 長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ—平成16年度までの調査成果—』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第30集）
- 水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』古今書院、295-309頁

# 第4章 原の辻遺跡出土土器・土製品

宮本一夫

## 1. 1953年第2次調査の土器

### (1) 第1トレンチ (図39・40、図版20・21)

4は鋤先形状口縁で、口縁内面がやや肥厚し平面的な口縁部を持ち明瞭な1条突帯をもつ須玖I式である。1は鋤先形状口縁の甕で、頸部にやや簡略化した1条の突帯を持つ須玖II式である。2は口縁部がやや湾曲し、頸部に1条の突帯を持つ須玖II式の甕である。3は鋤先形状口縁の須玖II式の樽形土器である。5は弥生後期の高坏の脚部、6は須玖I・II式の甕の底部である。7は土錘である。B区、E区、E・F区は須玖I・II式の弥生時代中期土器がみられる。10は同じくE区出土の甕棺胴部片である。平行沈線下に縦方向の平行沈線文を施すものであり、弥生時代中期前半の甕棺である。

8・9はF1区出土で、8は貝層出土とされる。9は頸部に叩きの跡が残り、その後ハケ目調整を施した西新式段階の甕であり、8は口唇に櫛状の刻目が施される壺である。これらは同時期のものであり、同じ貝層出土のものであろう。貝層部分は円形の落ち込みを形成しており、西新式段階の何らかの遺構であった可能性があろう。

11~14はG区出土土器である。11は鋤先形状口縁で明瞭な突帯をもつ須玖I式の甕。13は口唇が面取りされた下大隈式の甕である。14は断面M字突帯からなる壺、12は頸部に突帯をもつ細首の壺で、12と14は同一個体と考えられる須玖式段階のものである。

15・16はJ区出土の鋤先形状口縁をなす壺の口縁部で、須玖I式である。15は外面が丹塗りを施され、16は内外面ともに丹塗りがなされ頸部に縦方向の暗文をもち口唇が刻まれている。17は外面が丹塗られ、暗文が施された袋状口縁壺である。第1トレンチ内の出土地不明の須玖II式土器である。18はJ・K区出土の古墳時代前期の小型丸底壺である。

### (2) 第2トレンチ (図41~44、図版21・22)

19は、A区出土の明瞭な突帯をもつ須玖I式の鋤先形状口縁の甕。22はC区出土の、甕に附属する把手であらう。

20・21は、拡張区のD2出土の古墳時代前期のものである。20は口縁端部が内面に肥厚気味のもので、21は台付椀である。23・24は同じく拡張区のT区から出土したものである。23は壺の頸部で、外面はハケ目、内面はクズリが認められる古墳時代前期のものである。24は壺の底部で、弥生土器である。

25・26はJ区出土で、25は複合口縁壺、26は長頸壺で、どちらも下大隈式段階のものである。

27・28はK区出土土器である。27は須玖I式の甕であるが、図12のK区遺物出土状況図のeがこの土器にあたる。28も同じ須玖I式の甕である。29はM区出土で、須玖I式の甕である。

30~47は、G・E・E”・G”区の1号住居址ならびそれを切る方形土坑に伴う土器である。32は城ノ越式段階の甕である。30は外面丹塗りの須玖I式の無頸壺である。31・33・34は鋤先形状口縁の須玖I式の甕で、44も鋤先形状口縁の須玖I式の壺である。43も同じ段階の広口壺であらう。35~40は鋤先形状口縁の甕で、須玖II式の甕である。46の底部は40に、47の底部は39の甕にそれぞれ対応し同一個体である可能性がある。41・42は跳ね上げ口縁の遠賀川以東系の甕であり、同じく須玖II式段階のものである。45は注口部をもつ小型の壺であり、須玖II式段階のものであらう。1号住居址は、

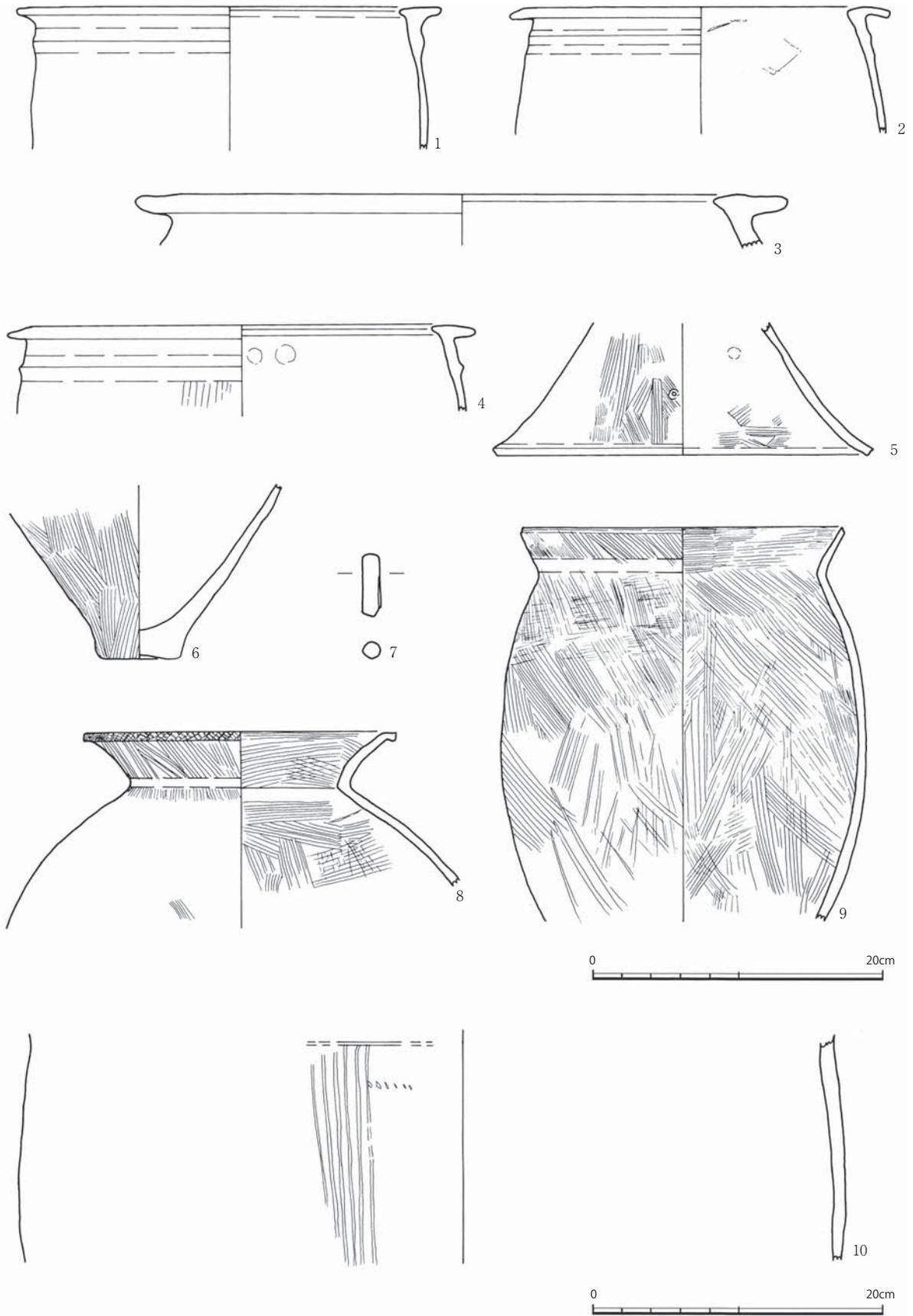


図39 第2次調査（1953年）第1トレンチ出土土器

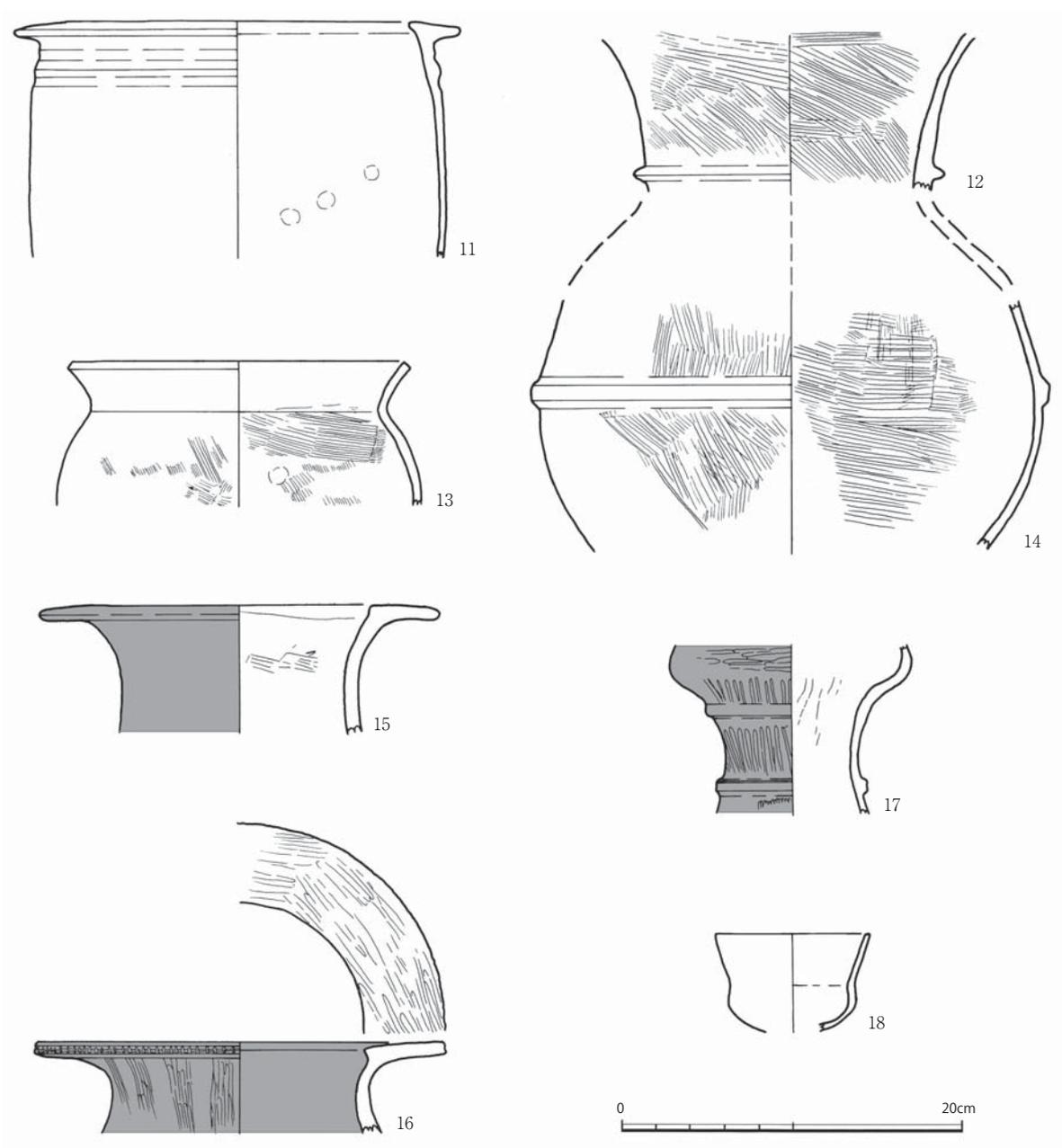


図40 第2次調査（1953年）第1トレンチ出土土器

須玖 I 式あるいは須玖 II 式段階のものであろう。

48～51は E2・E3区出土の古墳時代前期の土器である。48・49は甕で、48の口縁は内湾気味であり、49は口唇内面にわずかな肥厚部がある。50は小型丸底壺、51は高坏で、同じ段階のものであり、E2・E3区には古墳時代前期段階の何らかの遺構があった可能性がある。

52～63は O・P 区出土の土器である。出土状況は図14に示されている。52は板付 I b～II a 式の甕である。O・P 区出土と表記されていたが、S 区で遠賀川式土器出土が記録されており（図15）、S 区出土品である可能性が高い。53～55は須玖 II 式の甕である。59・60は内外面ともハケ目調製された弥生終末期の西新式の甕である。56～58・61～63は古墳時代前期の布留式段階の土器である。56は山陰系の複合口縁壺で在地化したものである。57は頸部外面に波状のハケ目調製が施され、内面はケズリ

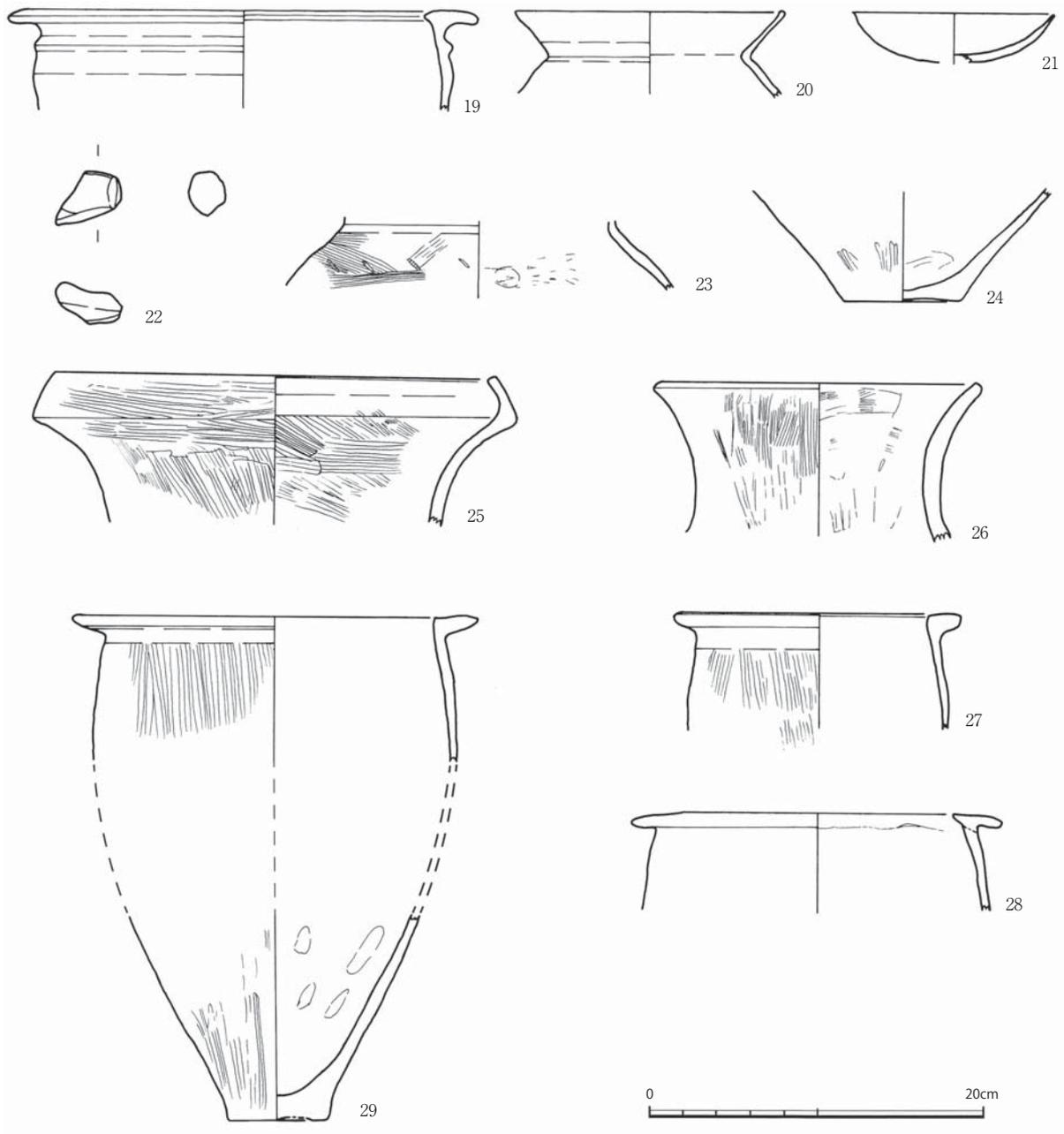


図41 第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器

調製がなされている。57～59の甕の口唇部は面取りが施されている。61～63が高坏であり、61は杯部外面に波状の暗文が、内面には縦方向の暗文が施されている。62・63は61と同時期の高坏である。脚部には穴が空けられている。

64はQ区出土の土製漁網錘であり、一面に溝が施されている。

**(3) 第3トレンチ** (図45、図版22・23)

65～67はH・I区出土土器である。65は須玖I式の無頸壺で、外面に丹塗りが施される、66・67は須玖II式の袋状口縁壺である。A～F区では柱穴群(図16・17)が検出されているが、それらとは関係しないものである。

68～74は第3トレンチ出土であるが、出土の区が不明な土器である。68～70は須玖I式の甕である。

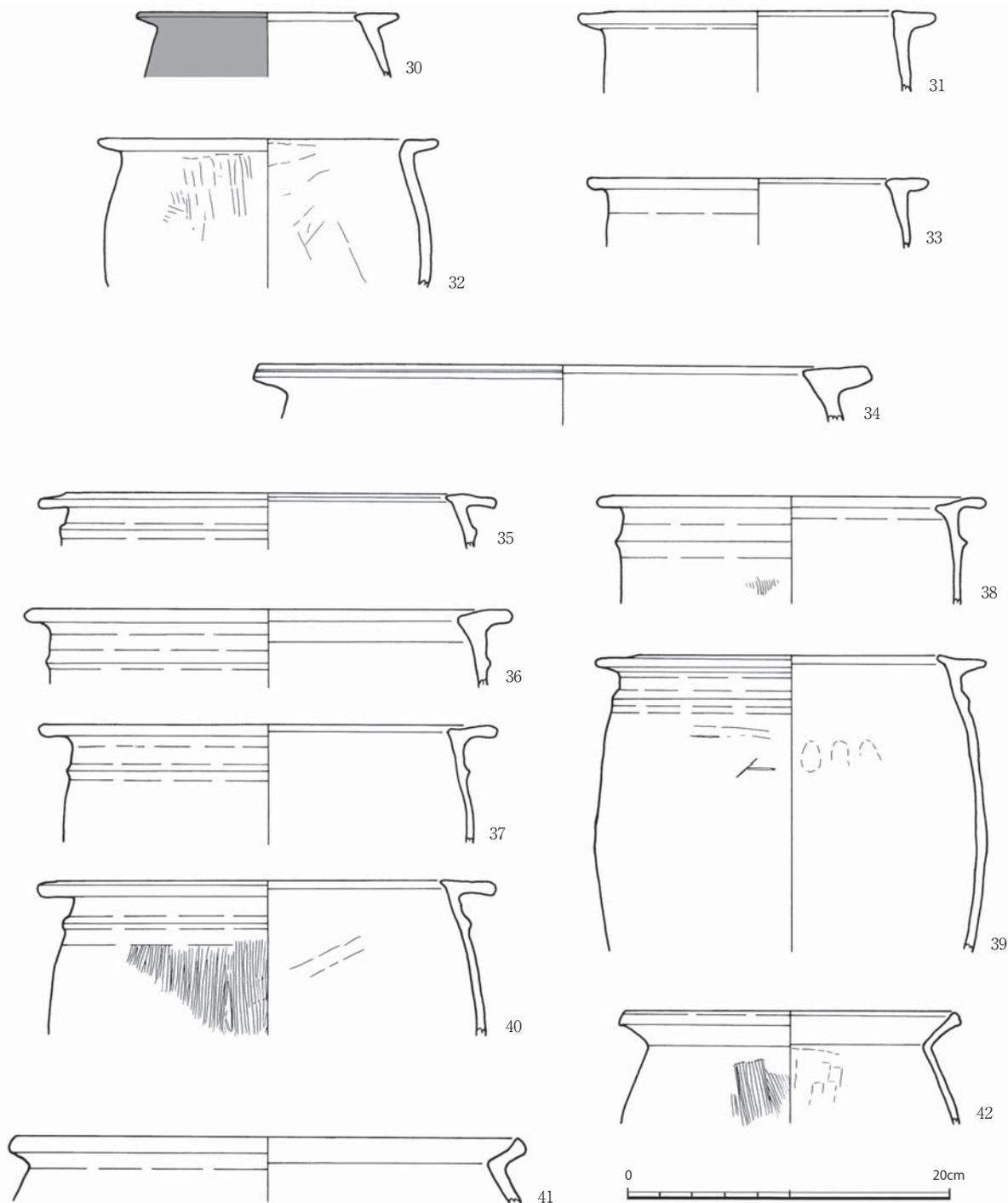


図42 第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器

71～73は須玖Ⅱ式の甕である。このうち72は外面丹塗りの甕であり、口唇は刻目が施され鋤先形状口縁上部には縦方向の暗文が、頸部の断面 M 字突帯の下部にも同方向の暗文が施される精製土器である。74は遠賀川以東系の跳ね上げ口縁であり、口唇内面が若干肥厚している弥生時代中期後葉の須玖Ⅱ式のものである。

(4) 第4トレンチ（図46～48、図版23～25）

75は A 区出土で、高三潄式の甕である。76～83は B・C 区出土の土器である。この地区は、壱岐

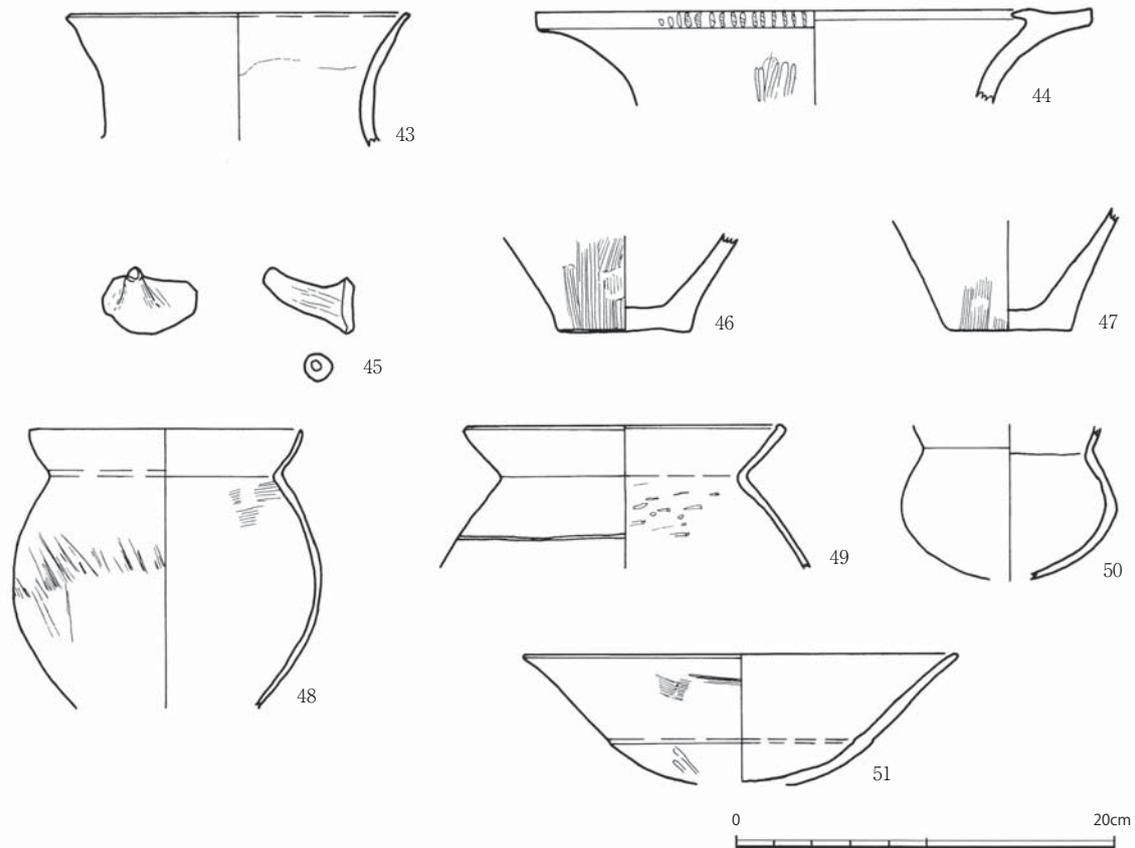


図43 第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器

市教育委員会調査区に重ならない地区である（図20）。77は胴部上半外面に貝殻による綾杉文が施される響灘沿岸の弥生前期後半の壺である。78も外面が丹塗りされた小型の壺で同時期のものであろう。79～81・83は須玖Ⅰ式の甕、82は須玖Ⅱ式の甕である。76はこれら須玖式の甕の底部である。

84～91はD区出土土器であり、壱岐市教育委員会調査の原の辻遺跡XV-E区の土器溜まりと重なっている（長崎県壱岐市教育委員会2009）。84は中期初頭の城ノ越式の壺であり、86・88も城ノ越式の甕である。85・87・89・90は、鋤先形状口縁で明瞭な突帯をもつ須玖Ⅰ式の甕、91は須玖Ⅰ式の高坏である。

92～96はE区出土遺物である。92は須玖Ⅰ式の短頸壺、93～95も須玖Ⅰ式の甕である。96の土製紡錘車も同じ時期のものであろう。97はF区出土の壺であり、頸部に1条の平行沈線が施され、その下の胴部上半に縦方向の3条の沈線文が施され、胴部中央に2条の突帯文が施される広口壺である。須玖式の壺であろう。これらE・F区は、壱岐市教育委員会調査の原の辻遺跡XV-E区の26号住居址（SC-26）に相当する。26号住居址からは古墳時代初期の丸底埴が出土しており（長崎県壱岐市教育委員会2009）、時期差が認められる。

98はF・G区出土の中世の土師皿で、底部に糸切り痕が認められる。第5トレンチの甕棺墓を切って中世の火葬人骨の埋葬に伴う土師皿が存在する（図21）。98はF・G区出土と表記されているが、この火葬人骨に伴う土師皿の可能性はある。一方、G区出土の99は須玖Ⅰ式の甕であるが、壱岐市教育委員会調査の原の辻遺跡XV-E区の1号溝（長崎県壱岐市教育委員会2009）のものに相当する。

100～103はS区出土のものである。101は、頸部に1条の突帯をもつ須玖Ⅱ式の長頸壺。103も同じく須玖Ⅱ式の甕である。102は下大隈式の複合口縁壺である。100は弥生後期の器台である。

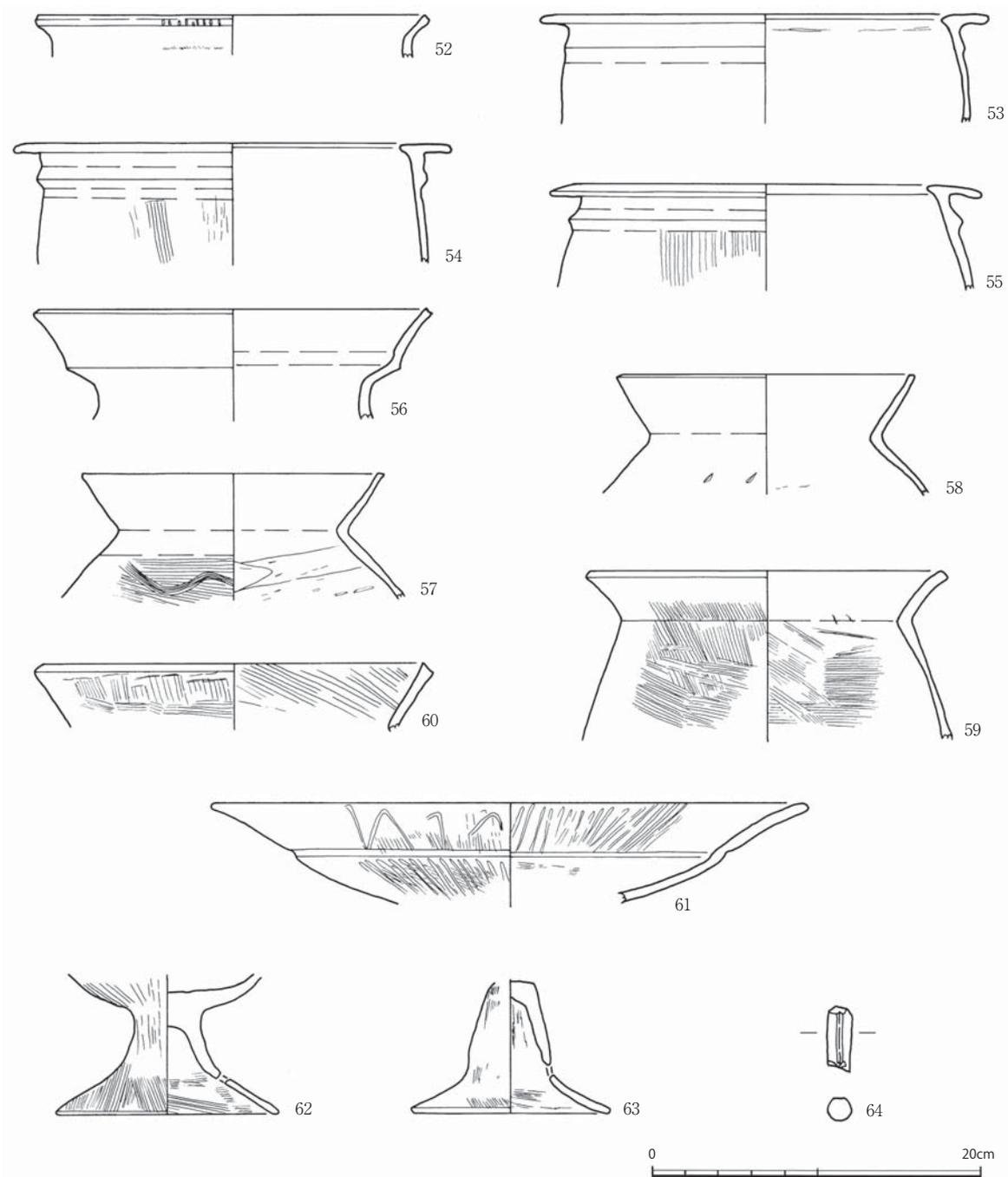


図44 第2次調査（1953年）第2トレンチ出土土器

104～106・108・110はI区出土土器である。I区の東北隅で遺物が集中して出土しているが（図19）、これらがその集中地点の遺物にあたる。104・105は須玖I式の高坏である。104は内面に、105は内外面に丹塗りが施されている。106の小型丸底壺は、久住猛雄編年のII C期に相当するものであり（久住1999）、古墳時代前期の布留式段階のものである。108・110ならびにH区出土107も同じ段階の甕であり、口唇内面が若干肥厚するものである。107・108は内面にケズリ調整が認められる。また、110は頸部外面に1条の波状沈線文を持つ北部九州の特徴的文様を示す。109はG・H区出土であるが、口唇の若干の肥厚や内面のケズリ調整など同様な時期の甕の特徴を示している。109は灰白色の胎土で、他のものとは異なっている。これら古墳時代前期のまとまった土器は、この時期の何らか

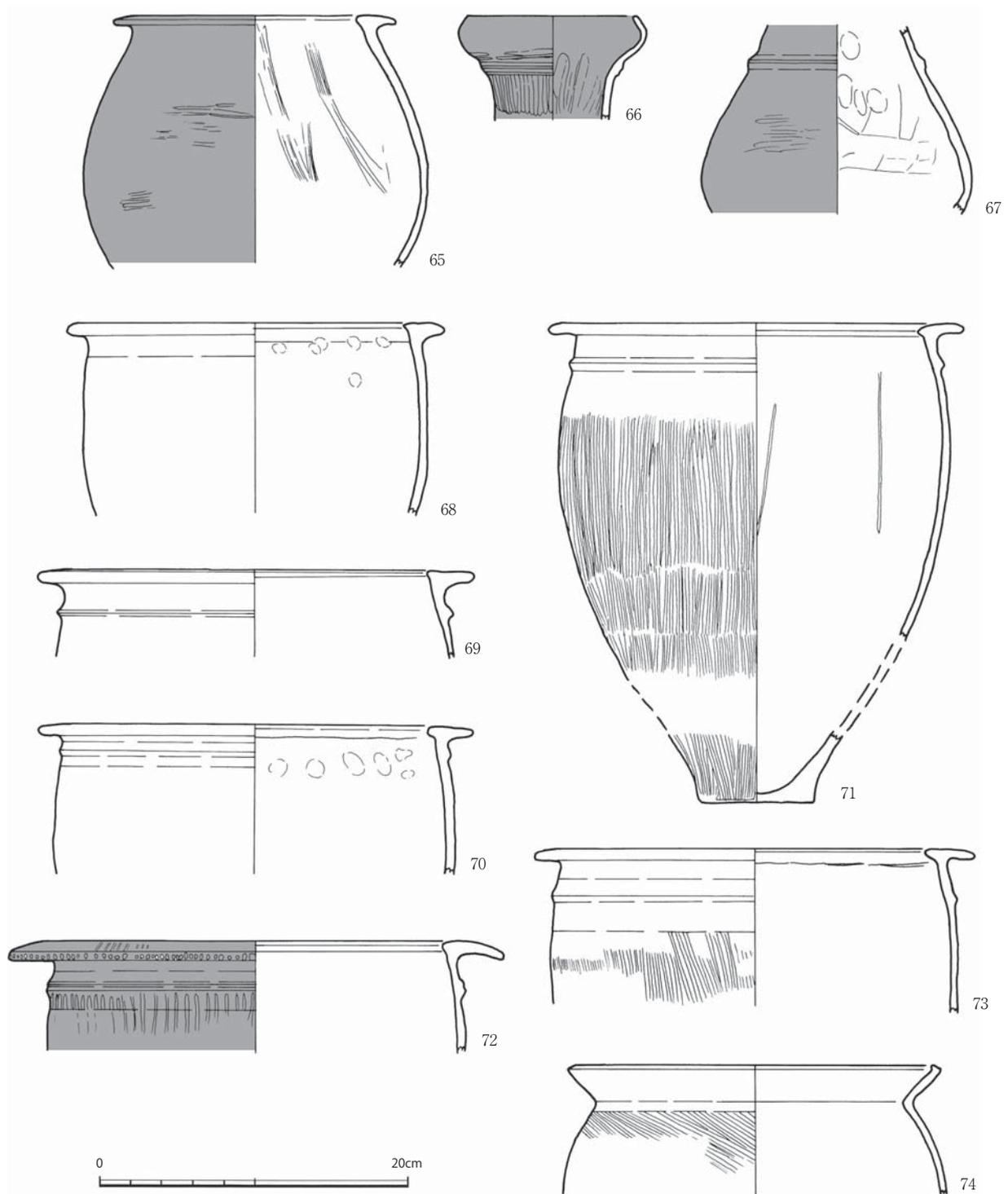


図45 第2次調査（1953年）第3トレンチ出土土器

の遺構に伴うものであろう。

111～113は第4トレンチの不明土器であるが、I区の一括遺物（図19）の一部である可能性がある。111は下大隈式～西新式の器台。112・113は内面にケズリ調整が施される古墳時代前期の甕である。112は108と同様に肩部に平行沈線文、113は110と同様に肩部に波状沈線文が施されている。I区出土の106～110の古墳時代前期土器と同一遺構のものと考えられる。

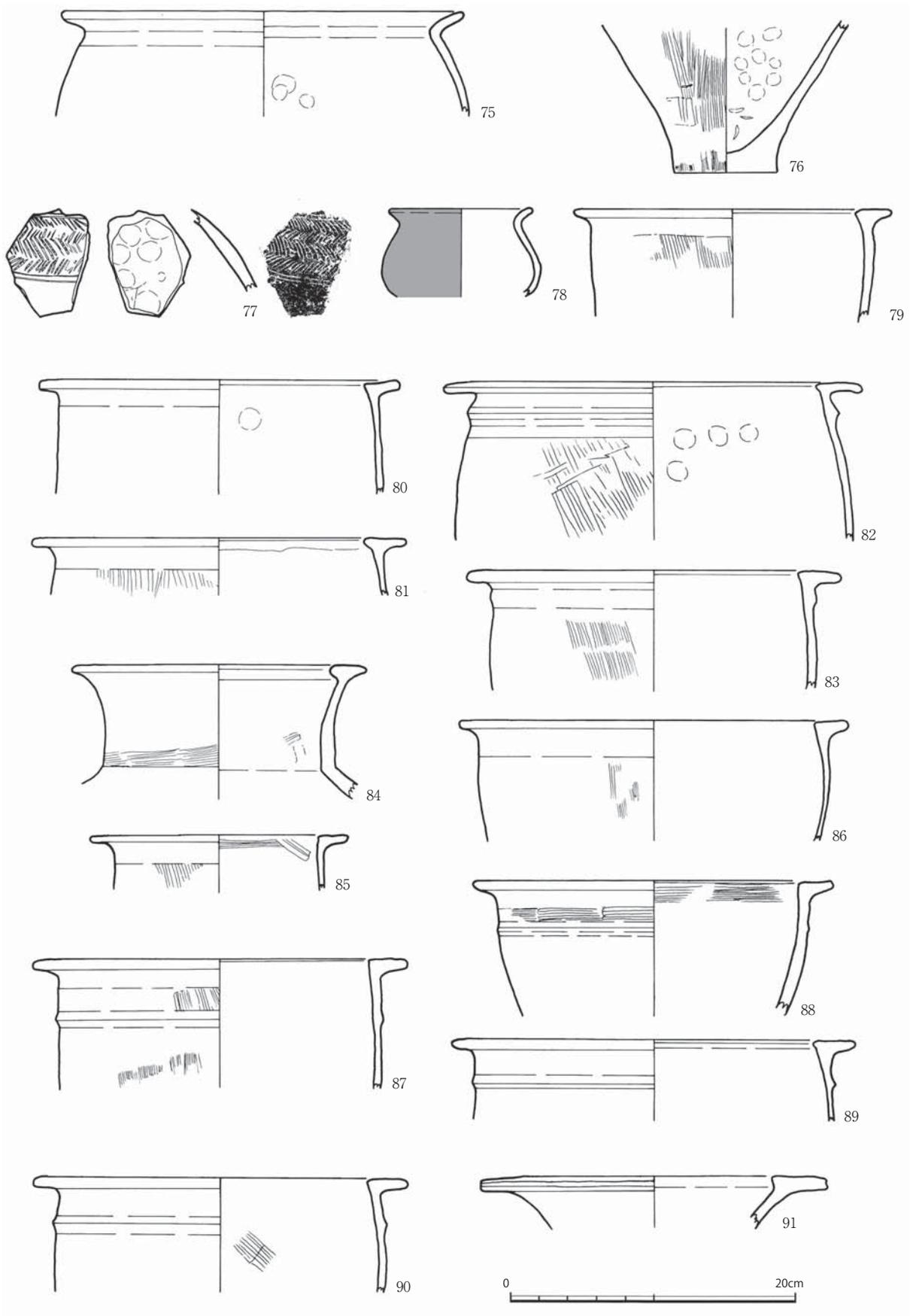


図46 第2次調査（1953年）第4トレンチ出土土器

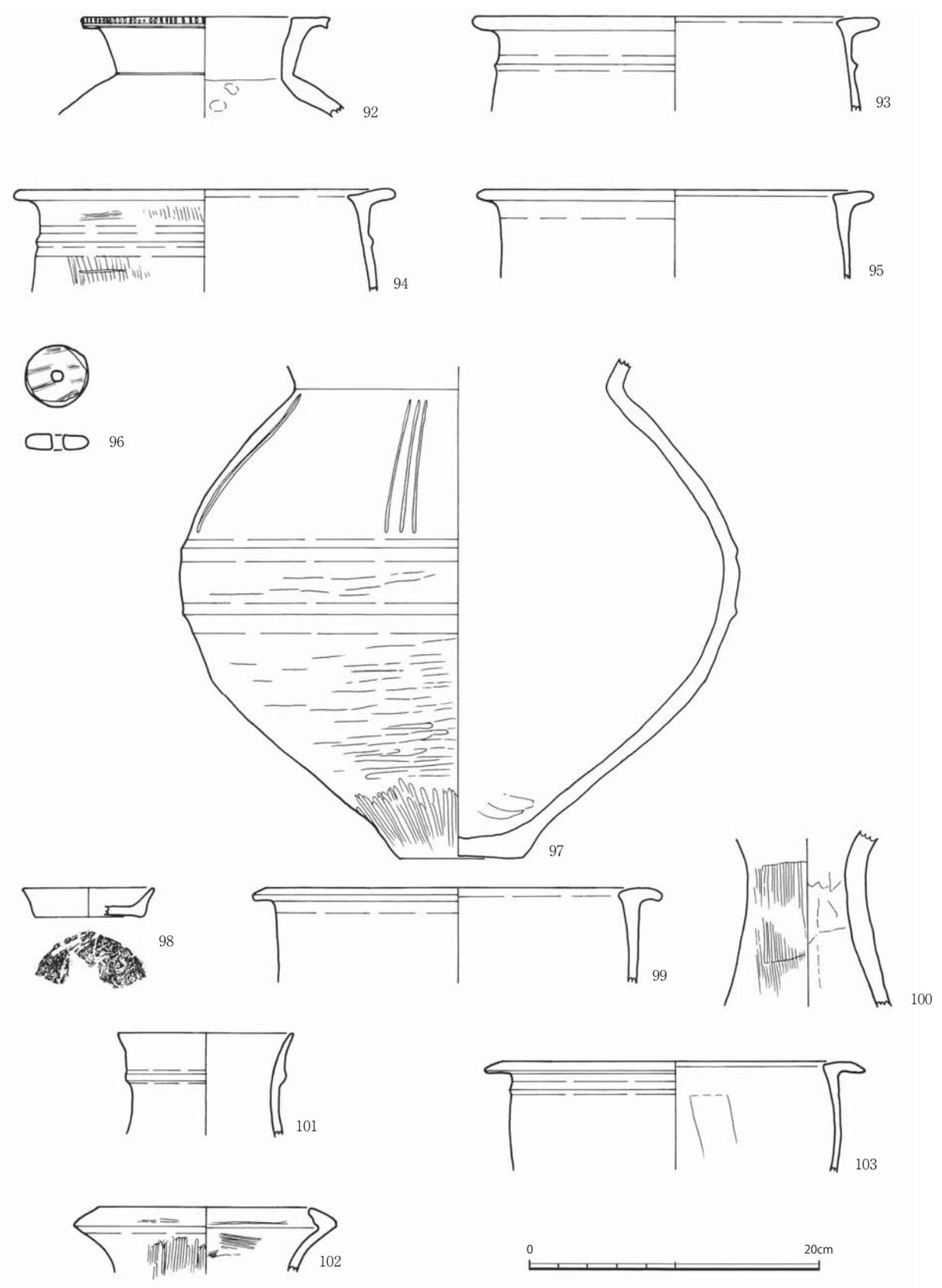


図47 第2次調査（1953年）第4トレンチ出土土器

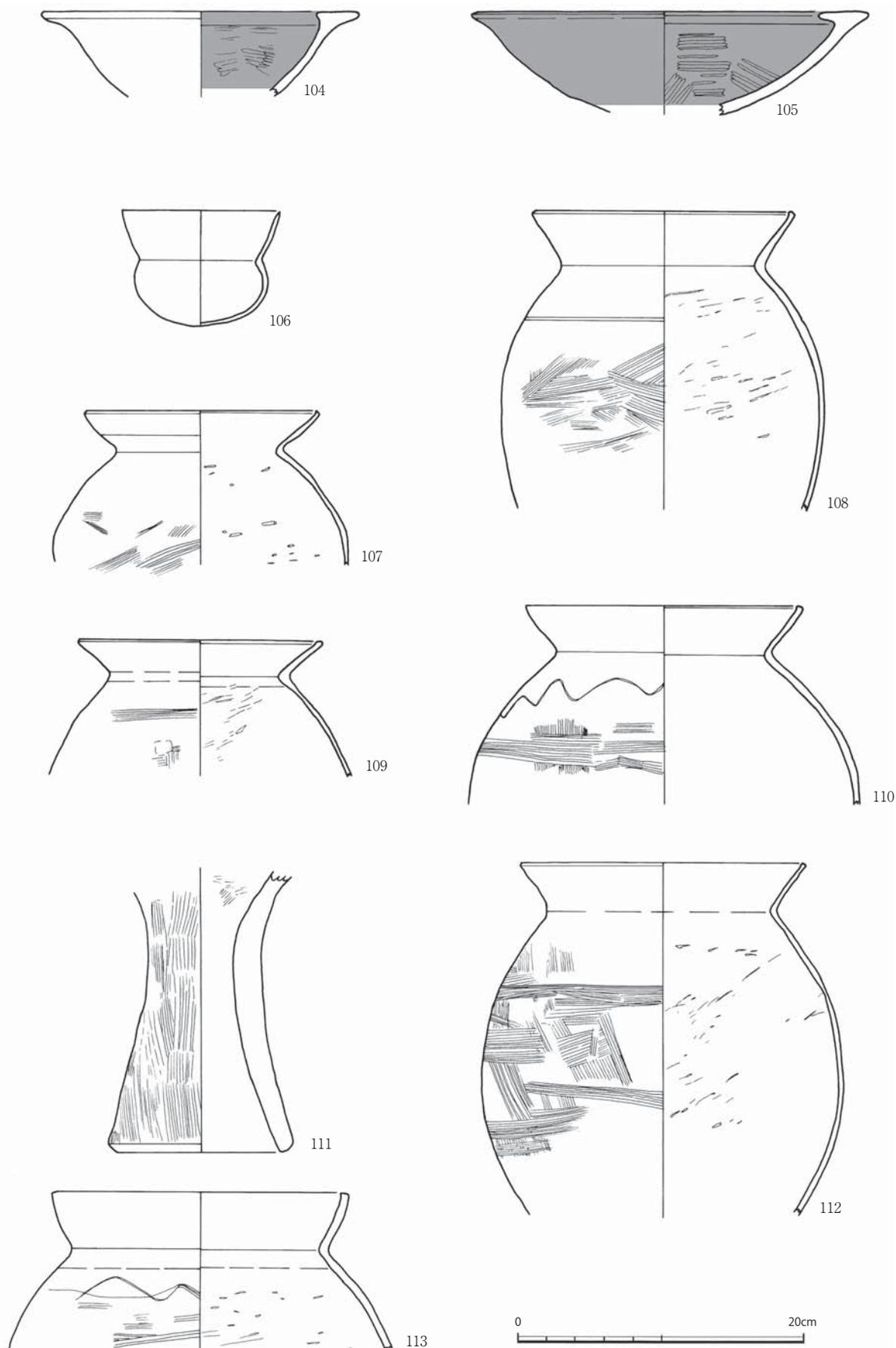


図48 第2次調査（1953年）第4トレンチ出土土器

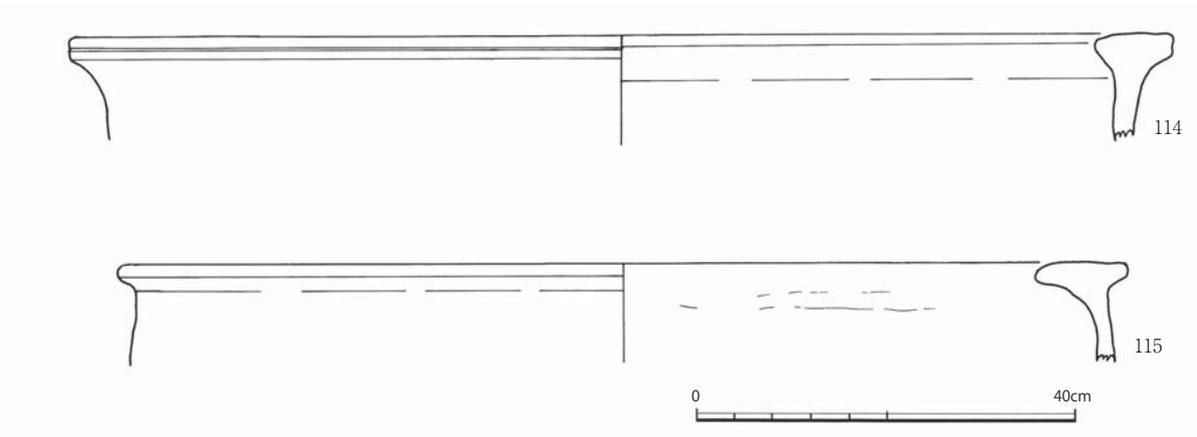


図49 第2次調査（1953年）第5トレンチ出土甕棺

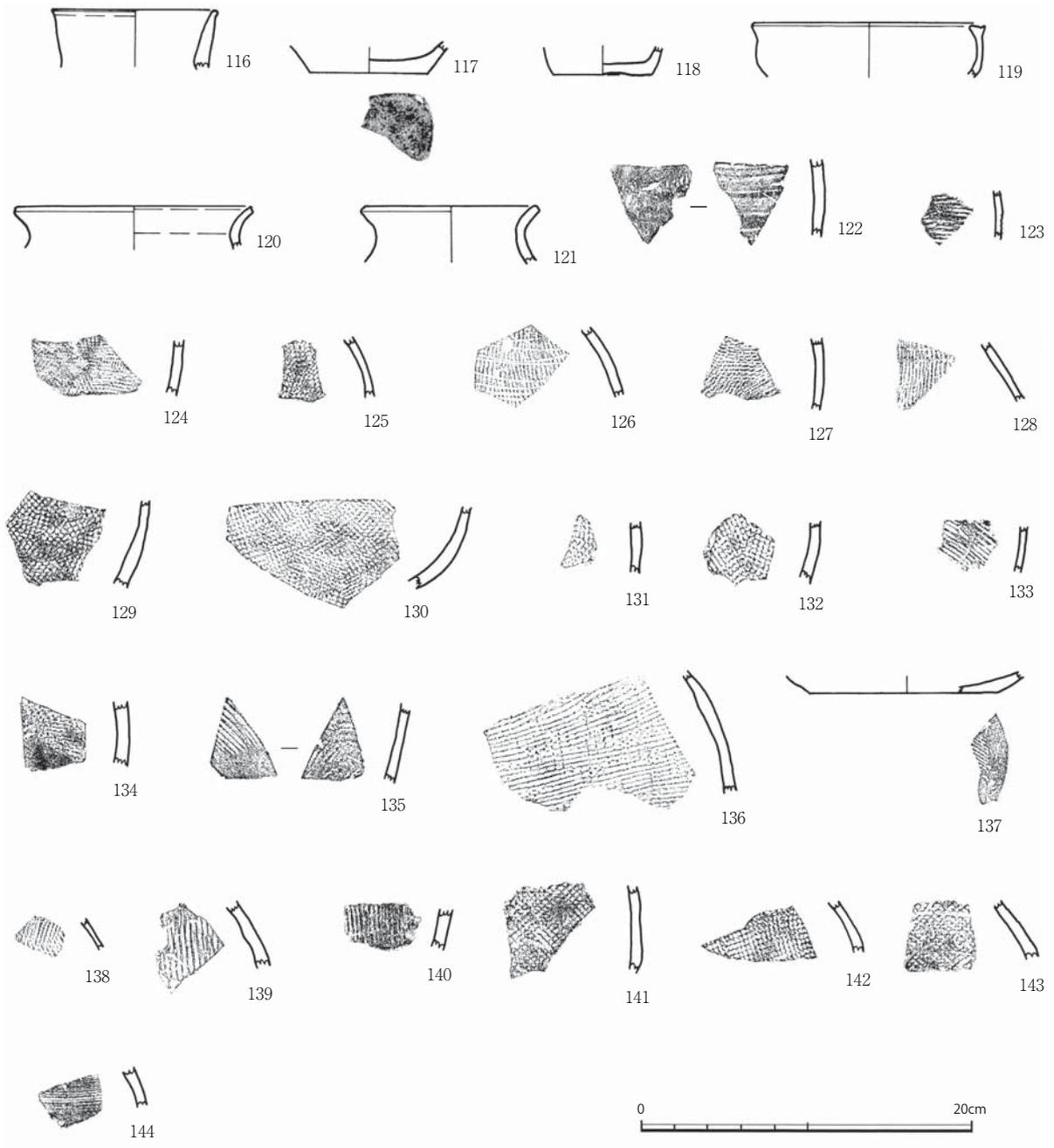


図50 第2次調査（1953年）出土楽浪系土器・三韓土器

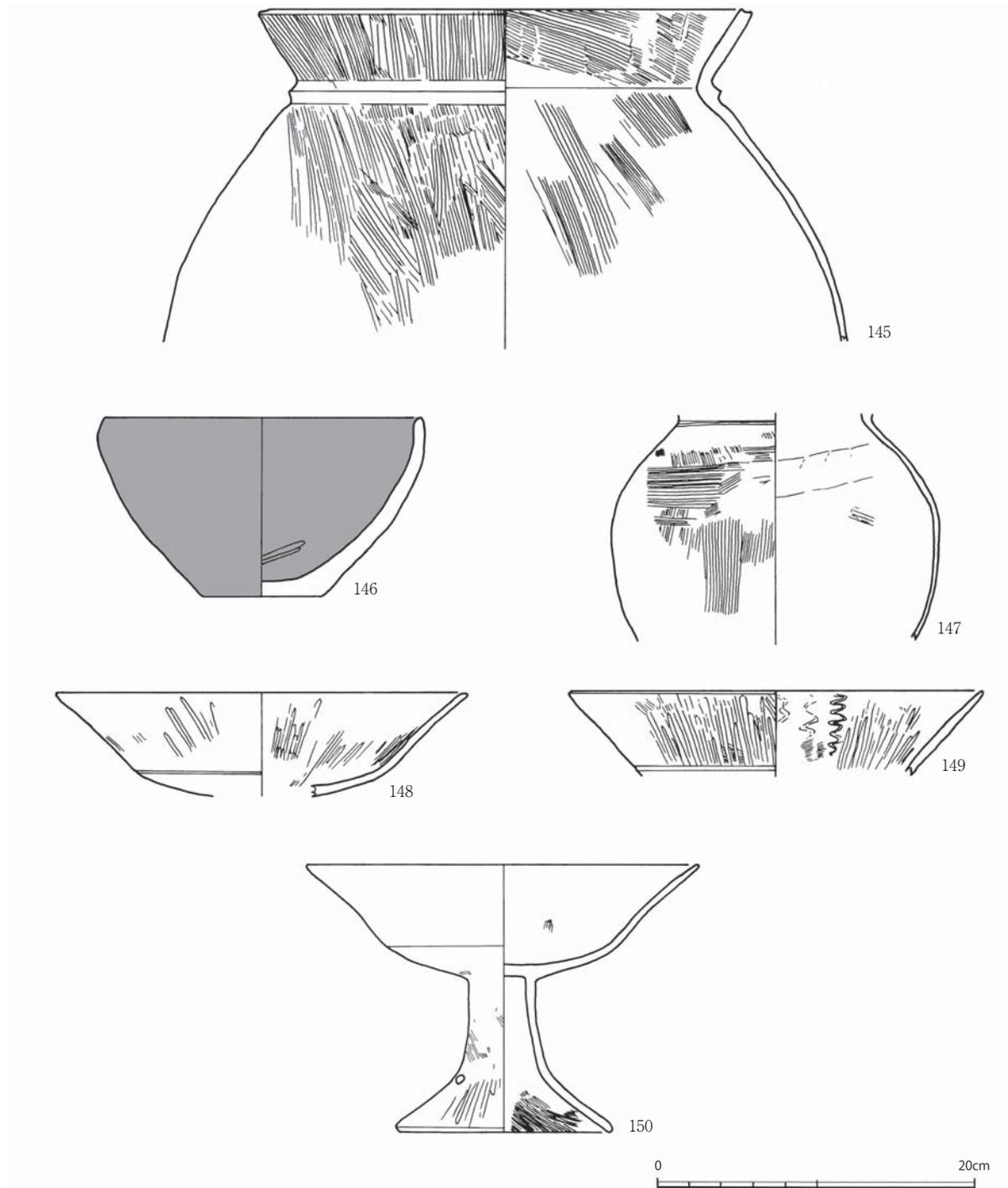


図51 第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器

(5) 第5トレンチ（図49、図版25）

114は汲田式の甕棺である。115は鋤先形状口縁を呈し、頸部外面に1条の沈線文が認められ、明らかに114とは別個体であるが、同じく汲田式である。第5トレンチで発見された甕棺墓は、図21に認められる口縁断面形態からも115がそれにあたると考えられる。したがって、第5トレンチでは少なくとも2基の甕棺墓が存在したことになり、この一帯が甕棺墓地を形成していた可能性がある。

(6) 楽浪系・三韓土器・須恵器（図50、図版26・27）

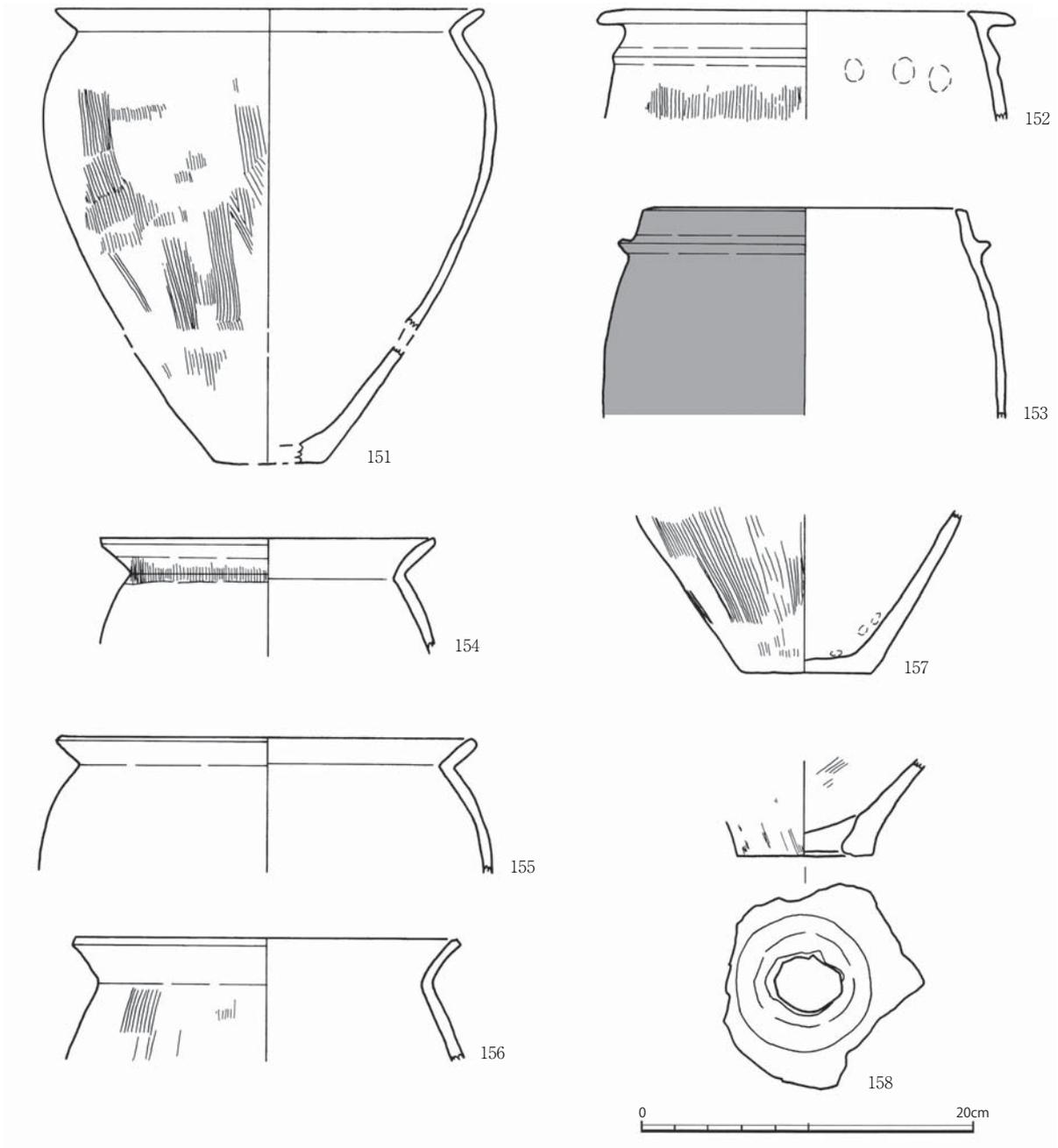


図52 第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器

117・118・122・123は楽浪系土器で、117・118は細頸壺の底部であろう。116は細頸壺、120・121は短頸壺の口縁部で、121は瓦質である。123は灰陶系土器で、平行叩きが認められる。116・120・121は三韓系土器である。

122・124～133は第2トレンチ出土のものである。122は短頸壺の胴部で、内面に当て具の痕跡がわずかに残る楽浪系土器である。124・126～128は縄蓆文叩きであり、126は頸部の条線が認められる三韓土器である。125・129～132は方格文からなる三韓土器である。133は細かい縄蓆文であり、楽浪系土器の可能性はある。

第3トレンチ出土の134・135は細かい縄蓆文を持ち、135は内面に当て具痕が認められる楽浪系土器である。

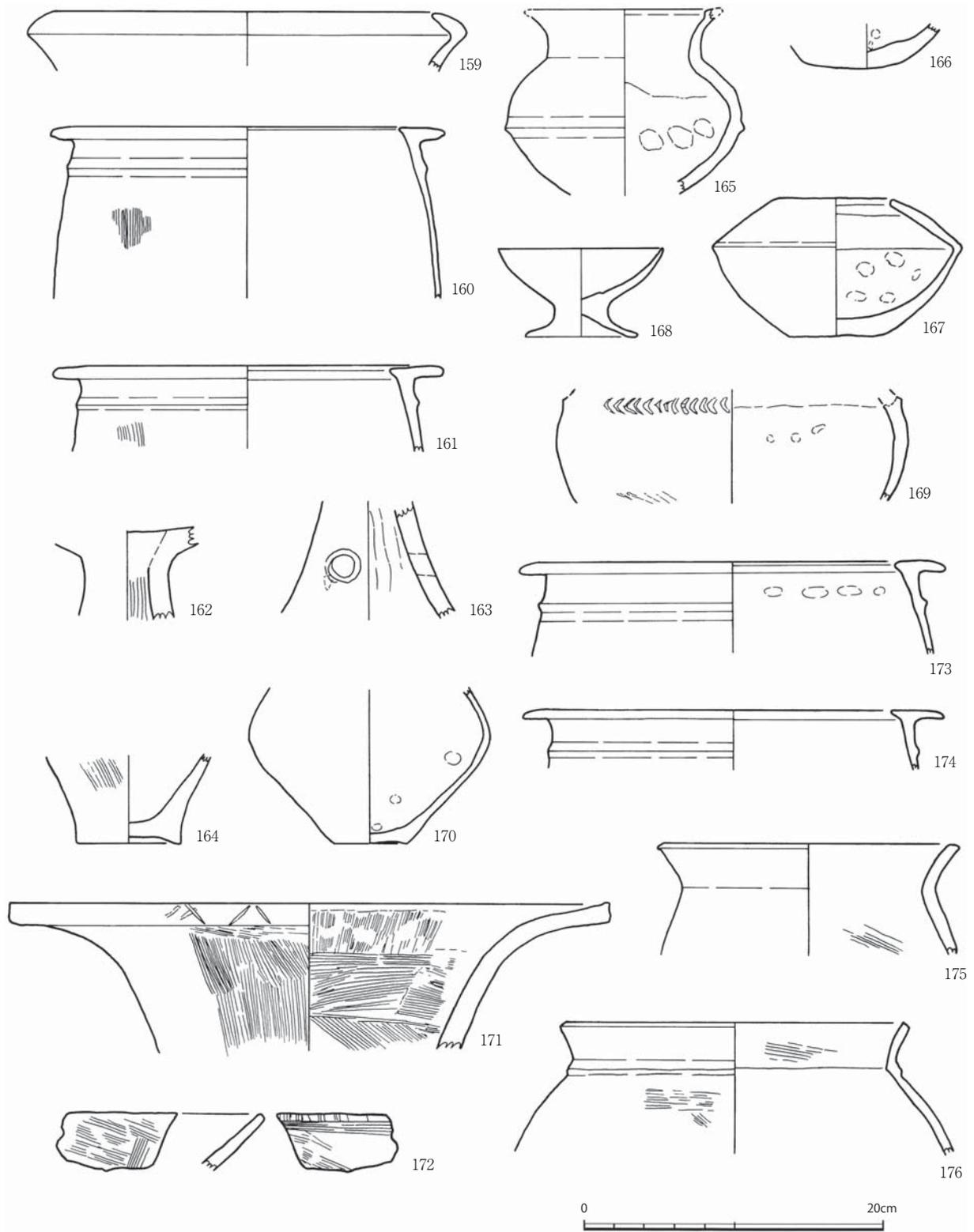


図53 第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器

136・137は第4トレンチ出土のもの。136は方格文叩きの三韓土器である。137は底部に糸切り痕をもつ楽浪系土器碗である。

138～143は表面採集のものである。138・140は縄蓆文叩きの三韓土器であり、141～143は方格文叩

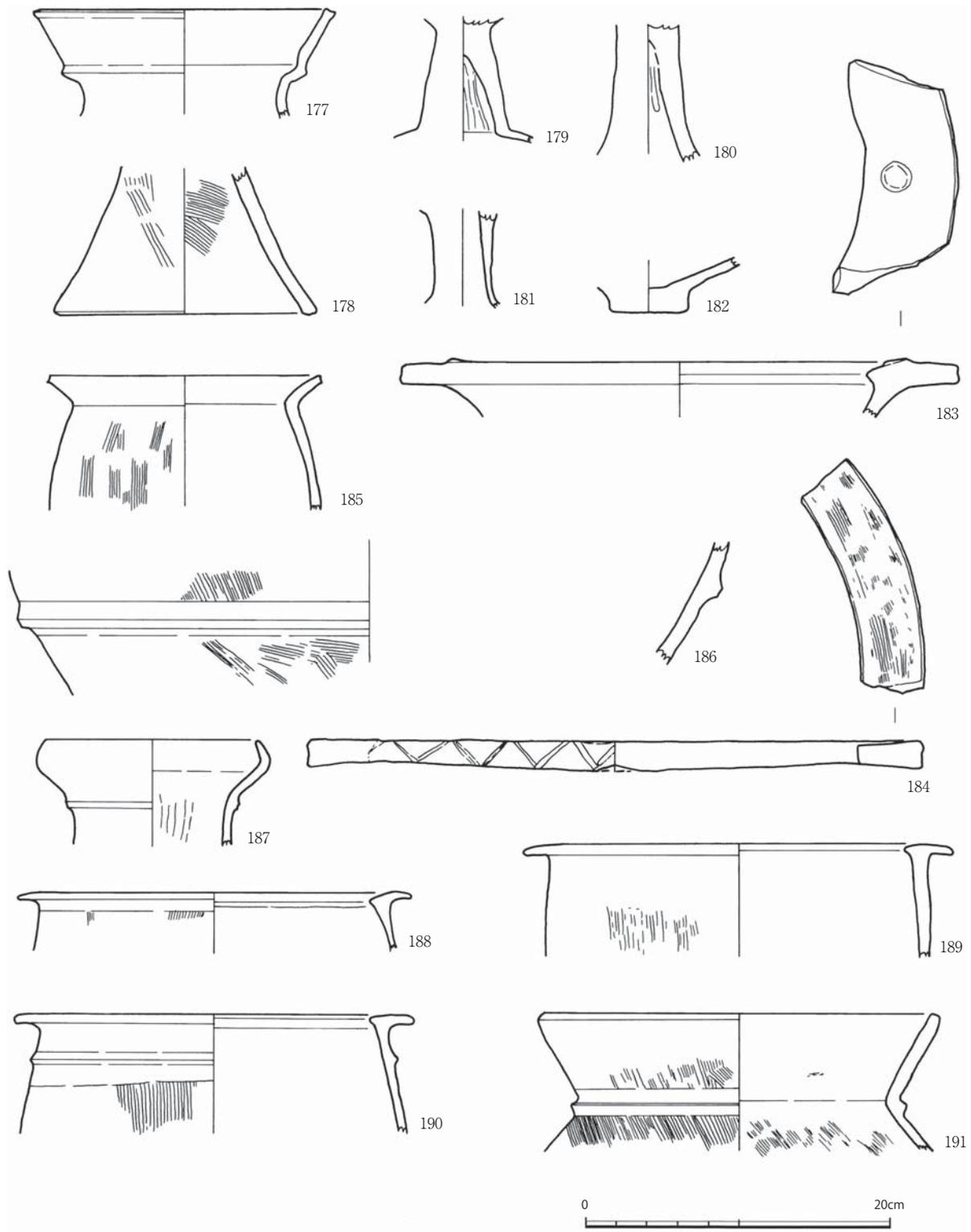


図54 第4次調査（1954年）第1トレンチ出土土器

きの三韓土器である。139は平行叩きの陶質土器であろう。

表面採集の119は7世紀代の須恵器坏身で返りの立ち上がり部分を欠損している。第2トレンチL区出土の144も須恵器であろう。

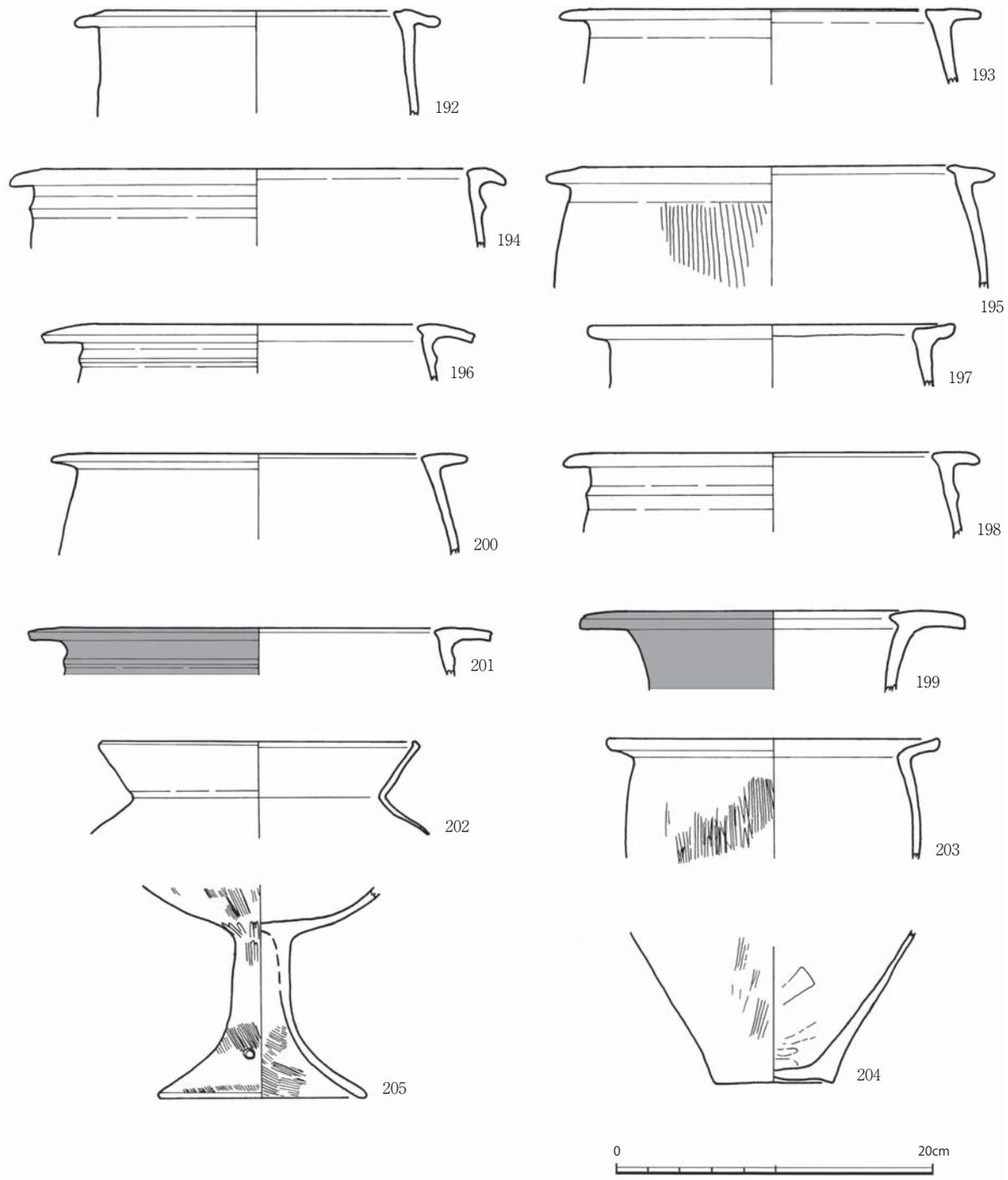


図55 第4次調査（1954年）第2トレンチ出土土器

## 2. 1954年第4次調査の土器

### (1) 第1トレンチ（図51～54、図版28～30）

145～149はA区出土土器である（図23・24）。145は頸部に突帯を巡らす広口壺であり、下大隈式である。146は内外面に丹塗りが施された鉢であり、同時期のものであろう。147は古墳時代前期の甕であり、内面にわずかにケズリ調整が認められる。148・149は高坏であり、どちらも内外面に縦方向の暗文が認められ、古墳時代初頭のものである。

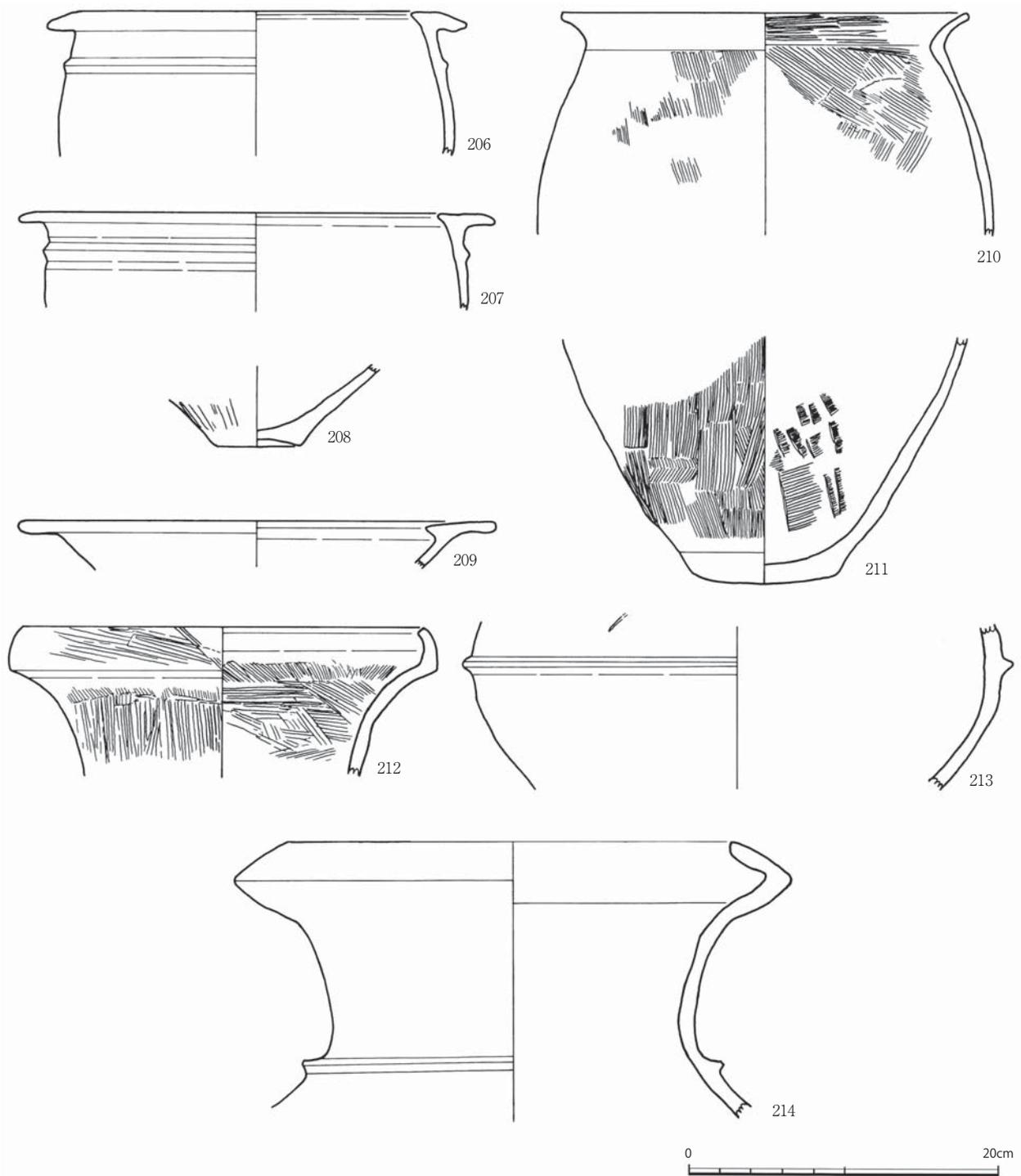


図56 第4次調査（1954年）第2トレンチ出土土器

150～158はB区出土の土器である（図23・24）。150の高坏は、148・149に比べやや深めの坏部からなり、脚部に穿孔をもつ古墳時代前期のものであろう。152は須玖Ⅱ式の甕。153は外面に丹塗りの施される須玖Ⅱ式の樽形壺である。151・154・155は高三濬式、156は下大隈式の甕である。157は弥生土器の壺の底部であり、158は甕の底部を穿孔して甑として利用したものである。

159～170はC区～E区出土土器である（図26）。159は下大隈式の複合口縁壺。160は須玖Ⅰ式の甕、161は須玖Ⅱ式の甕である。165は小型の壺、167は鉢であるが、どちらも胴部中央部に突帯を巡らし

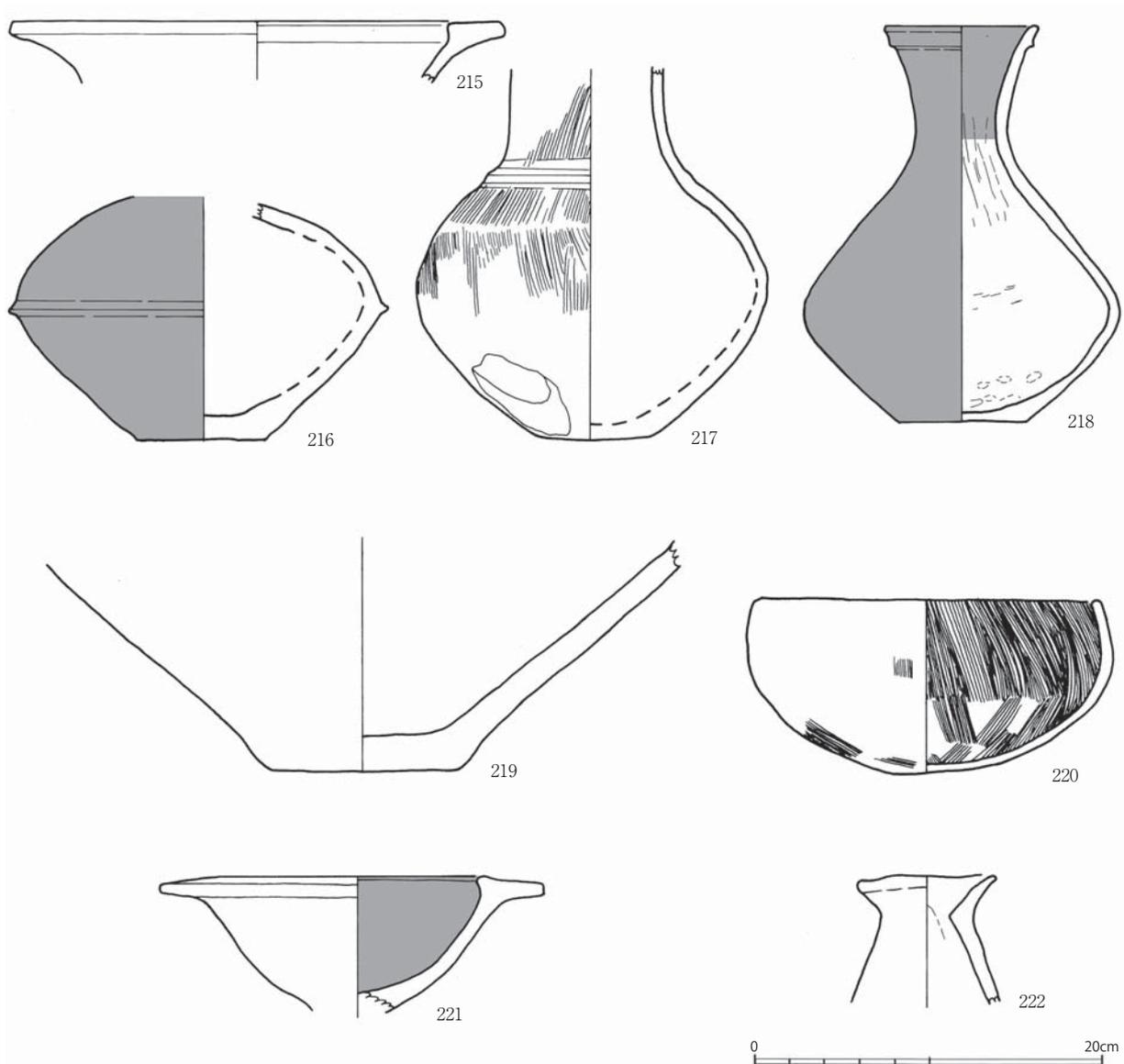


図57 第4次調査（1954年）出土地区不明土器

ており、須玖式のものであろう。169は壺の胴部で、胴部中央部に突帯を巡らす、突帯に綾杉状の刻目が施される弥生土器。170は須玖Ⅱ式の袋状口縁壺の一部であらう。164は甕の底部片である。166は凸レンズ状の底部であり、下大隈式の底部であらう。162・163は弥生後期の高坏の脚部であり、同一個体の可能性がある。168は古墳時代初頭の台付鉢である。

171～182はG区出土の土器である（図27・28）。171は広口壺であり、口縁端部に「ハ」の字状の刻目が施される。西新式の壺であらう。173・174は鋤先形状口縁甕の須玖Ⅱ式である。175は口唇に面取りが施された下大隈式の甕である。176は頸部に突帯を巡らす下大隈式の甕である。172は口唇部を刻む短頸壺で、弥生後期のものであろう。178～181は高坏の脚部である。177は山陰系の複合口縁壺である。177は古墳時代前期のもので、179も同時期であらう。178・180・181は弥生後期のものであろう。182は小さい底径の底部で、西新式の鉢形土器に伴うものであろうか。

183～191はJ区～M区出土の土器である（図29）。183・184は広口壺で、183は須玖Ⅱ式、184は幅広の口縁端部を鋸歯状に刻む下大隈式である。191も頸部に突帯を巡らす下大隈式の広口壺である。

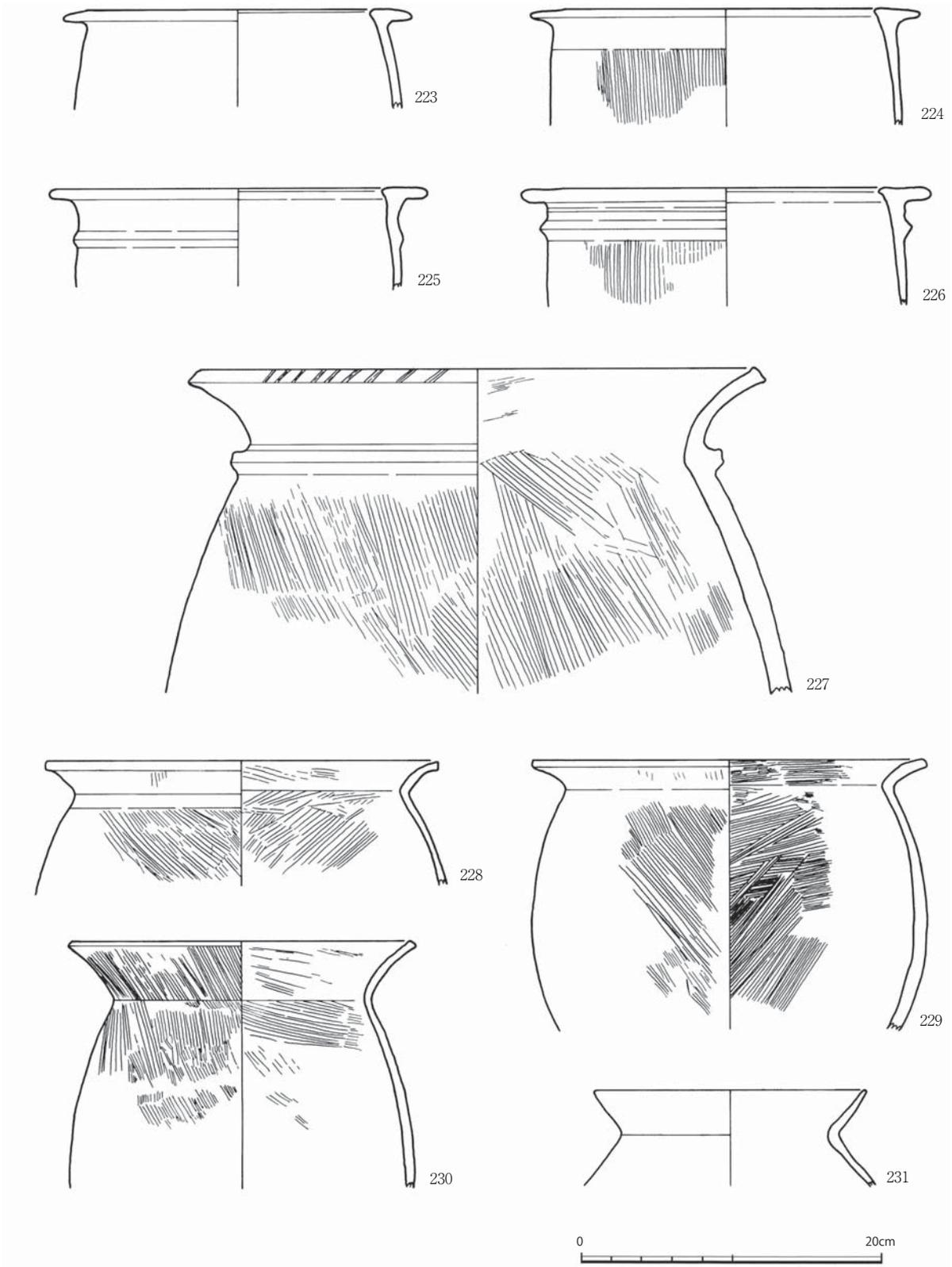


図58 第4次調査（1954年）出土地区不明土器

186も胴部下半に突帯が貼られた壺であり、弥生後期のものであろう。L区からは複合口縁壺が出土しているが（図版8-2）、この胴部はその一部である可能性がある。187は須玖Ⅱ式の袋状口縁壺で

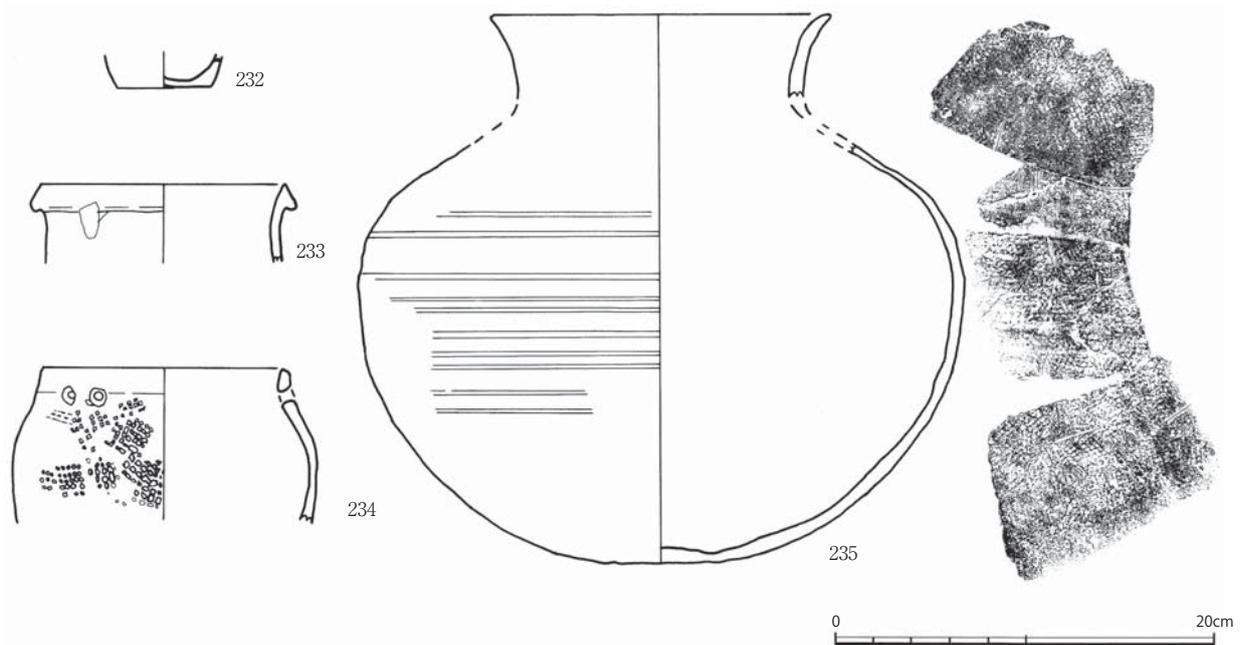


図59 第4次調査（1954年）出土楽浪系土器・三韓土器

ある。188・189は鋤先形状口縁をなす須玖Ⅰ式の甕、190は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕である。185は口唇が面取りされる下大隈式の甕である。

第1トレンチの遺物の大半は環濠に伴うものである。弥生中期後葉の須玖Ⅱ式から弥生後期後半の下大隈式が主体であり、古墳時代前期まで認められる。

### （2）第2トレンチ出土土器（図55・56、図版31・32）

199は外面丹塗りで鋤先形状口縁をなす須玖Ⅱ式の壺。192～195・197・200は鋤先形状口縁の須玖Ⅰ式の甕、196・198は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕である。201は外面丹塗りの須玖Ⅱ式の甕である。203は高三瀦式の甕であろう。204はこれら弥生中・後期の甕の底部である。202は布留式段階の甕で古墳時代前期のもの。205は弥生終末期から古墳時代前期の高坏である。

206～209は第2トレンチ拡張区と記されたものであるが、トレンチA区～H区・O区・P区をさらに拡張したトレンチ出土品であろう（図22）。206・207は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕である。208は弥生中・後期の壺の底部。209は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の高坏である。

210から214はⅠ区出土の土器である。212・214は複合口縁の壺であり、下大隈式のものである。213の壺胴部も同時期のものである。210・211は甕であるが、211は凸レンズ状の底部をなし、下大隈式の特徴を示している。下大隈式の210と211は同一個体の可能性がある。Ⅰ区には下大隈式段階の柱穴などの遺構（図版9-2）が存在したのであろう。

### （3）出土地区不明土器（図57・58、図版32・33）

215は須玖Ⅰ式の壺。221は内面に丹塗りが施される鋤先形状口縁の須玖Ⅰ式の高坏である。222は高三瀦式の器台である。216～218は下大隈式段階の長頸壺であり、216は外面に丹塗りが施され、218は外面と内面上半に丹塗りが施されている。227は、口縁端部が摘み上げ状に肥厚し、口縁端部に刻目が施される西新式段階の広口壺であり、頸部に突帯が巡らされている。219は大型の弥生の壺底部である。220は内外面に丁寧なハケ目が施される鉢であり、西新式のものである。

出土地不明の216長頸壺は第1トレンチD区出土である可能性があり（図版8-3）、220鉢は第1ト

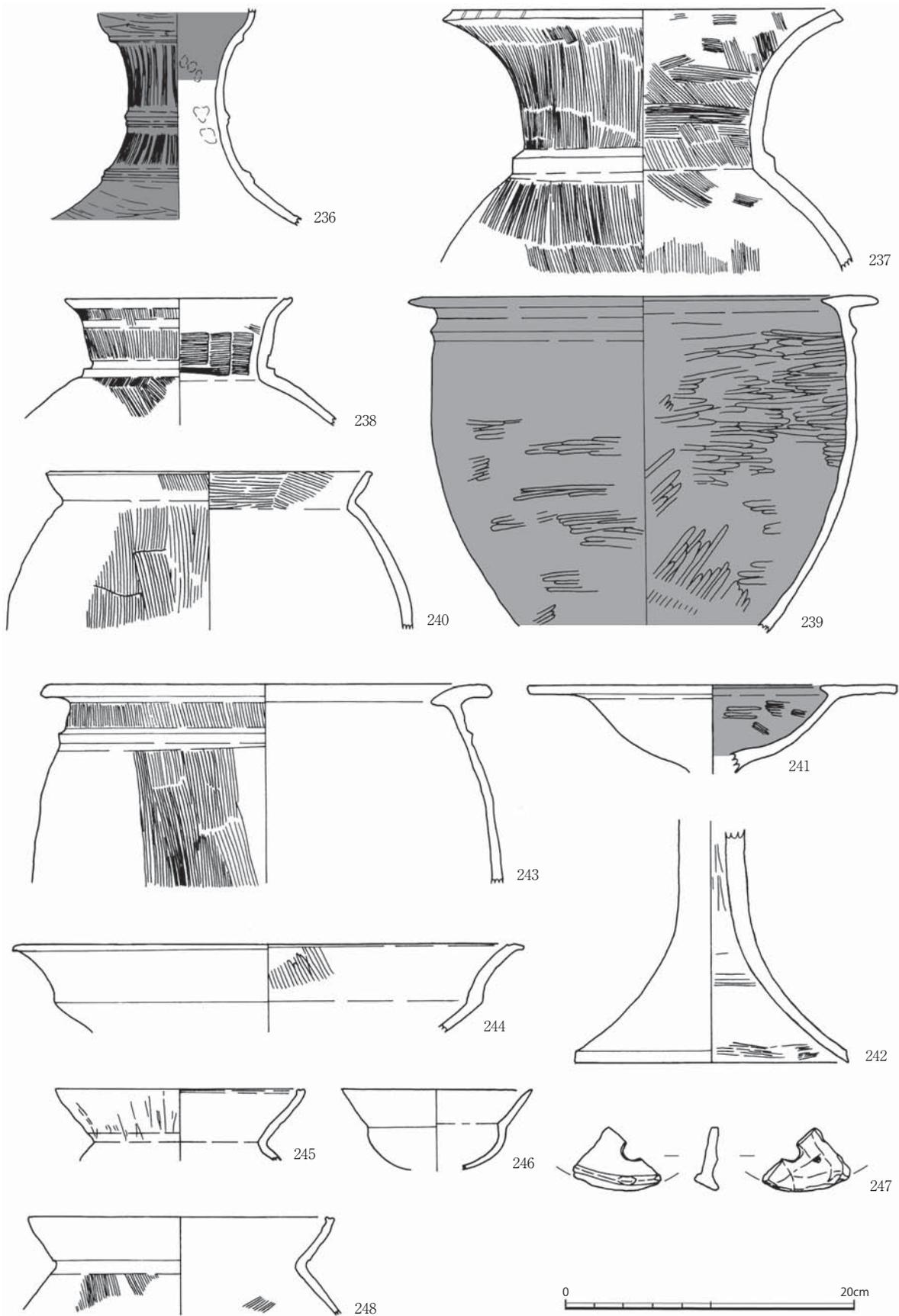


図60 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

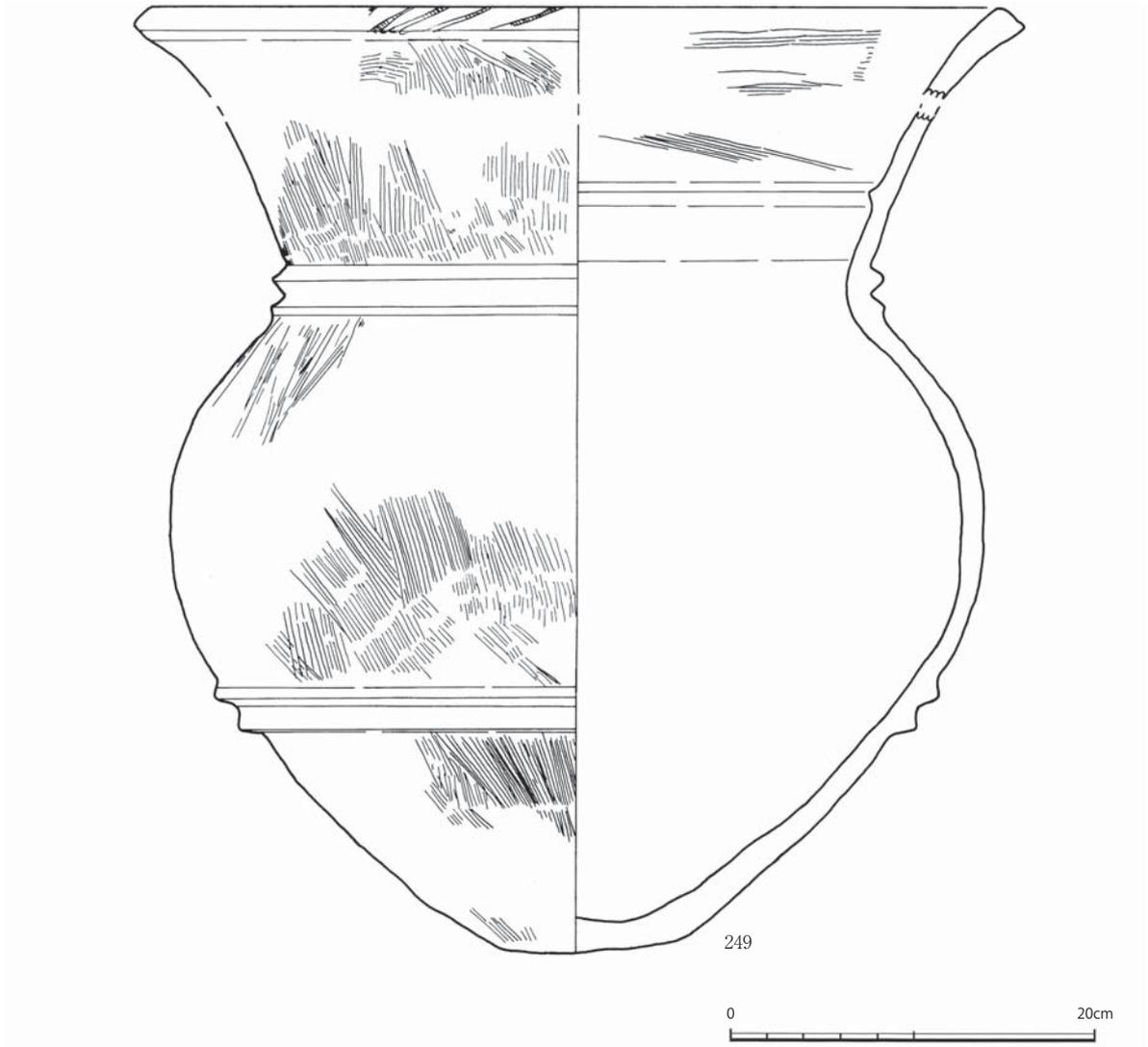


図61 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

レンチ A・B 区出土である可能性がある（図版7-4）。また、221の高坏は、第1トレンチ出土遺物である可能性がある（図版9-1）。

223～226は鋤先形状口縁甕の須玖Ⅰ式である。228・229は下大隈式の甕、230は西新式の甕であろう。231は古墳時代前期の甕である。

**（4）楽浪系土器・三韓土器**（図59・図版33・39）

232は灰陶系の壺底部で、底面に糸切り痕がかすかに認められる楽浪系土器である。233は三角形粘土帯土器。234は方格文叩きの軟質土器の鉢であり、235は方格文叩きで胴部に条線をもつ瓦質土器の短頸壺で、ともに三韓土器である。

### 3. 1951年第1次調査の土器

**（1）第1トレンチ出土土器**（図60～68、図版34～37）

236・237・242・245はa区出土土器である。236は外面と内面上半に丹塗りが施された須玖Ⅱ式の

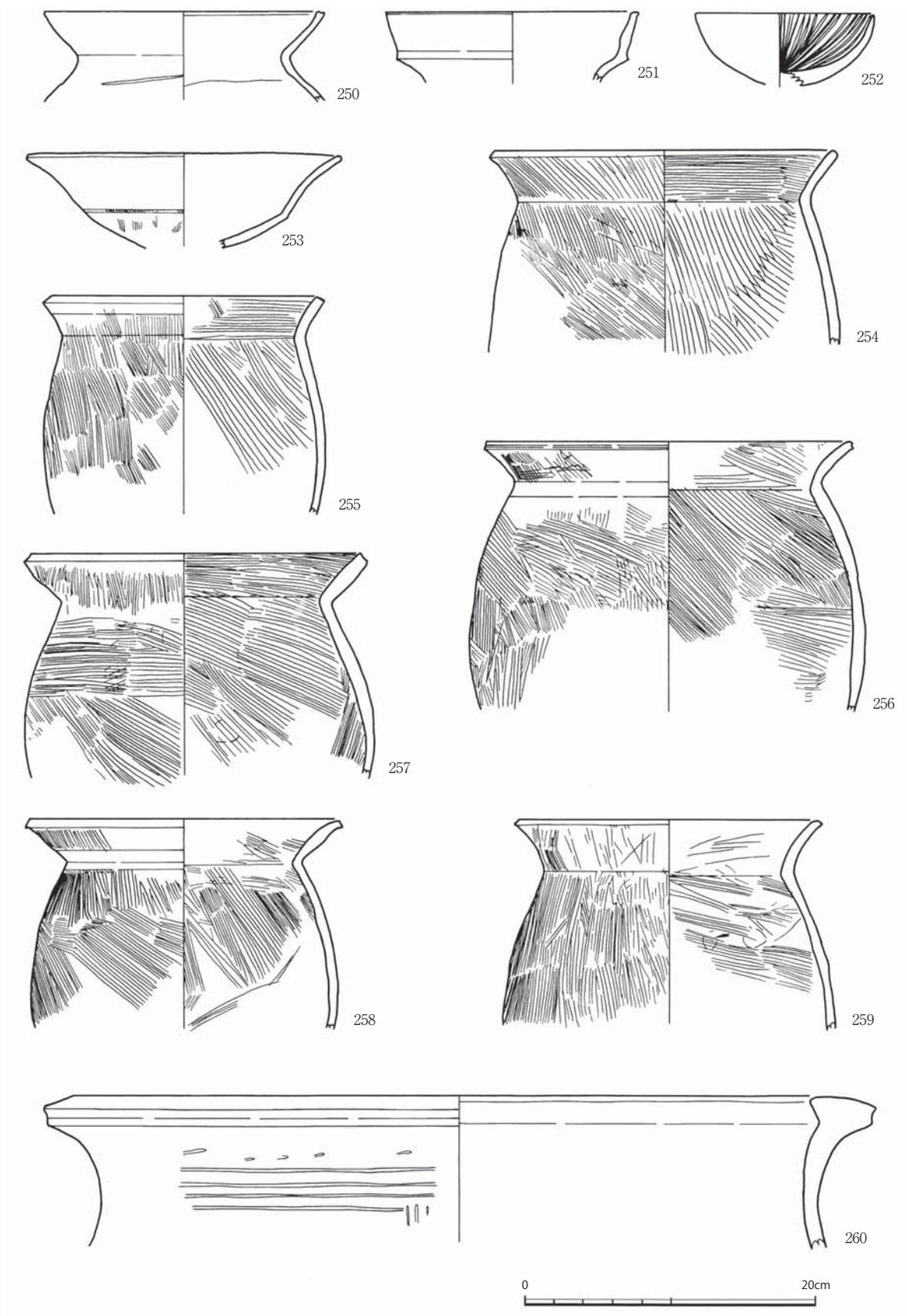


図62 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

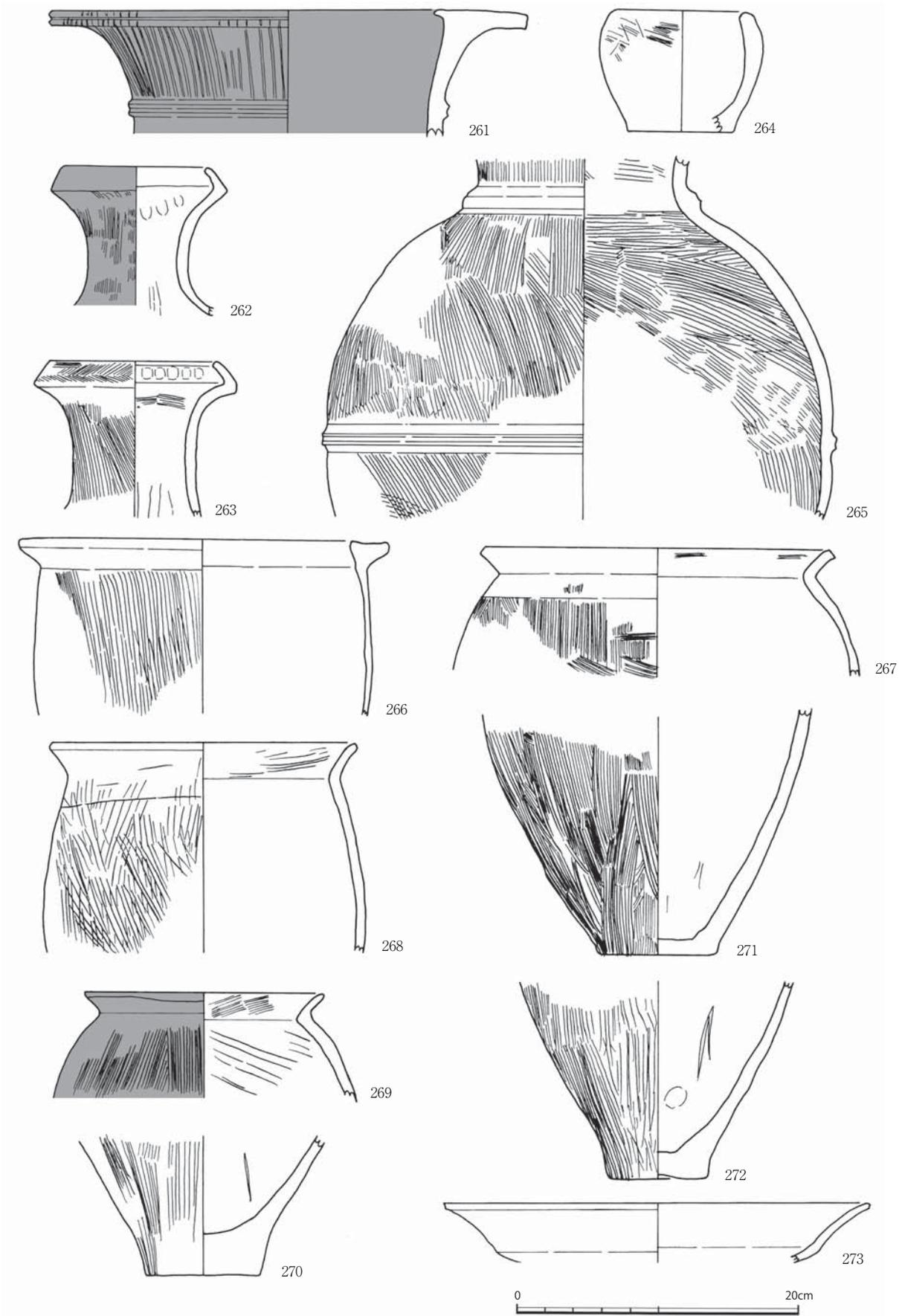


図63 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

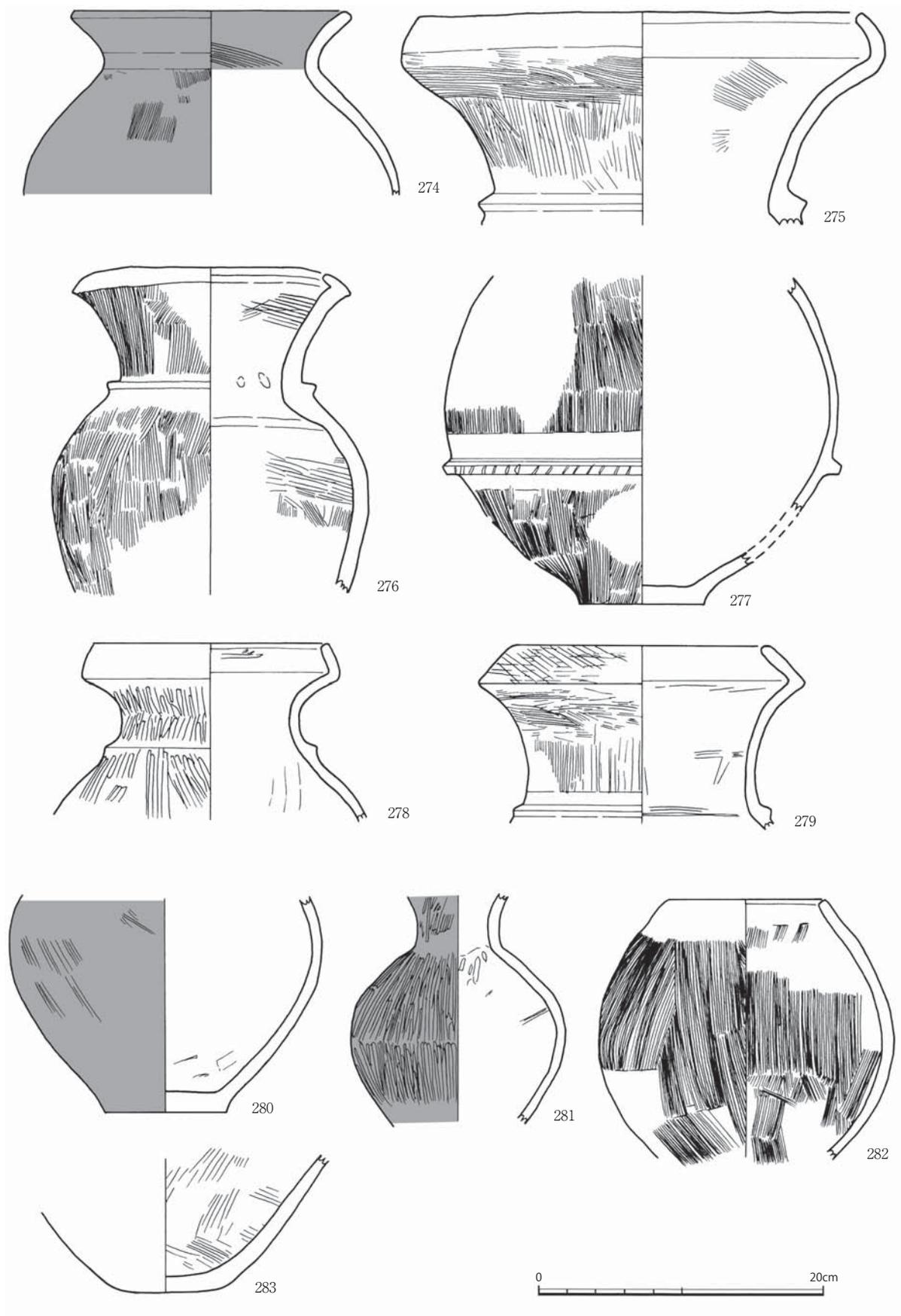


図64 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

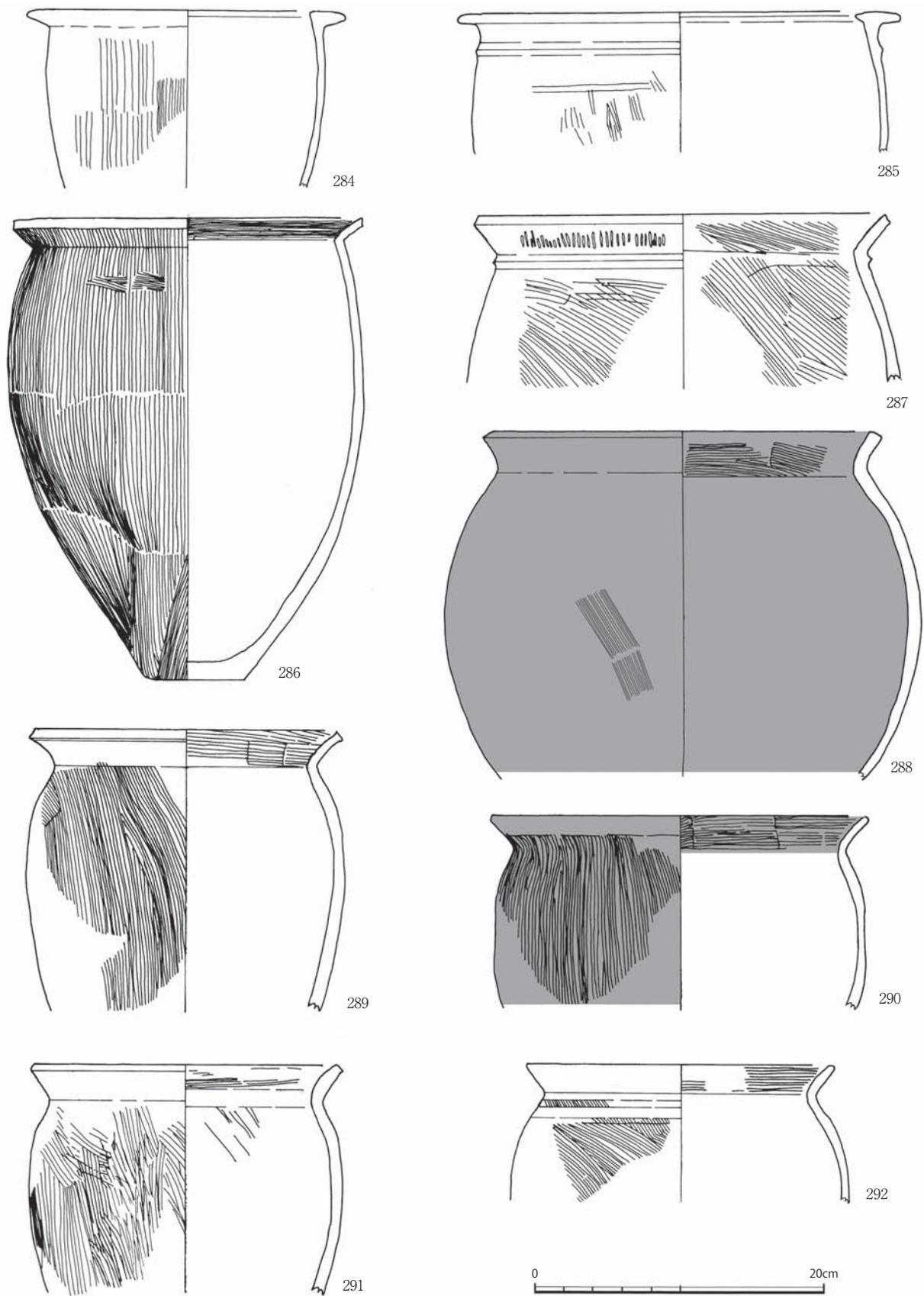


図65 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

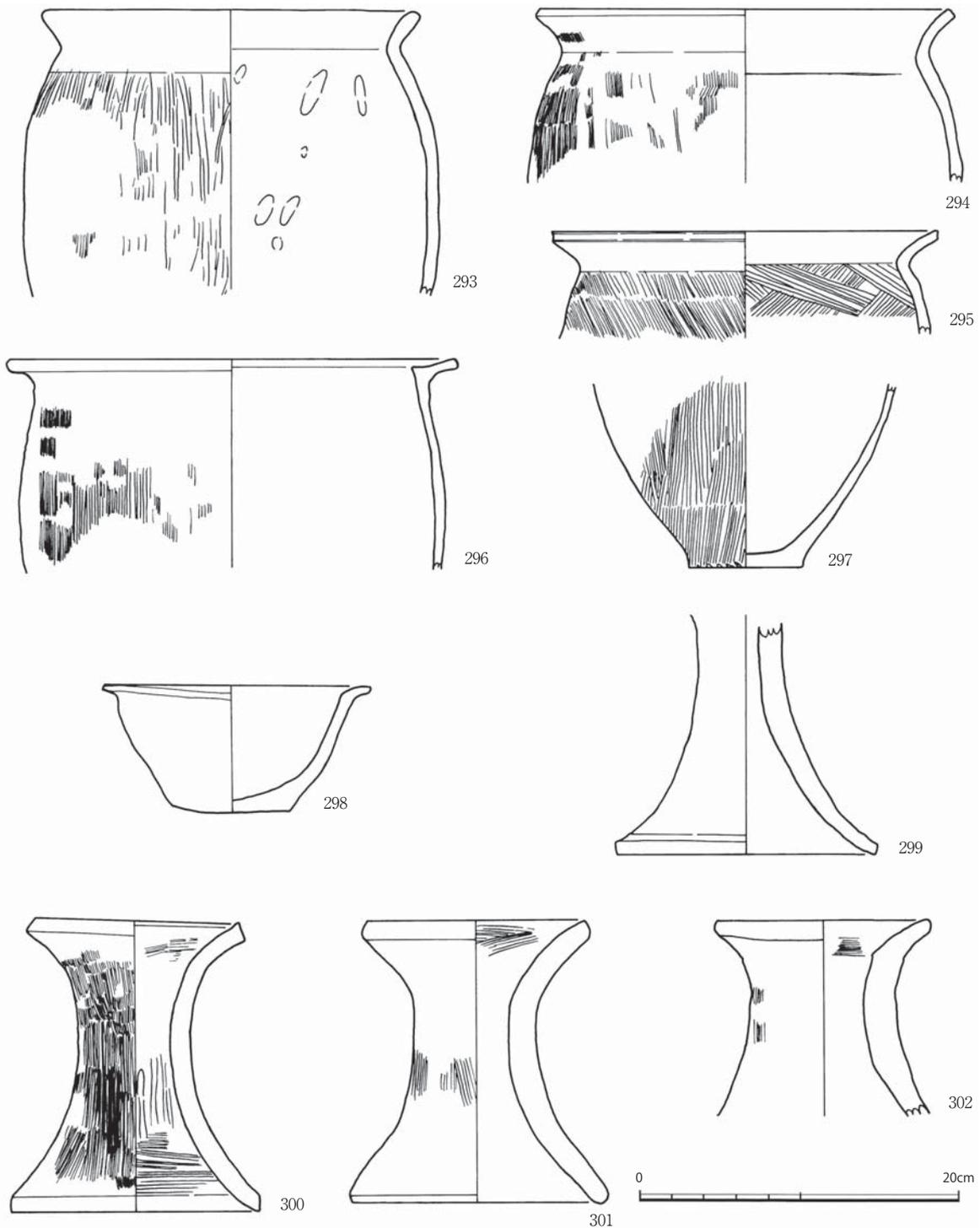


図66 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

袋状口縁壺。237は口縁端部に斜線文が施された西新式の広口壺である。242は弥生中・後期の高坏脚部。245は布留式系の古墳前期の甕である。

238・240・243・244・246～250はb区出土土器（図32）である。238は下大隈式の壺である。243は須玖Ⅱ式の甕、240は口唇に面取りが施される下大隈式の甕である。249は口縁端部が刻まれる西新式の広口壺である。246は古墳時代前期の小型丸底壺、248・250は古墳時代前期の布留式の甕、244は

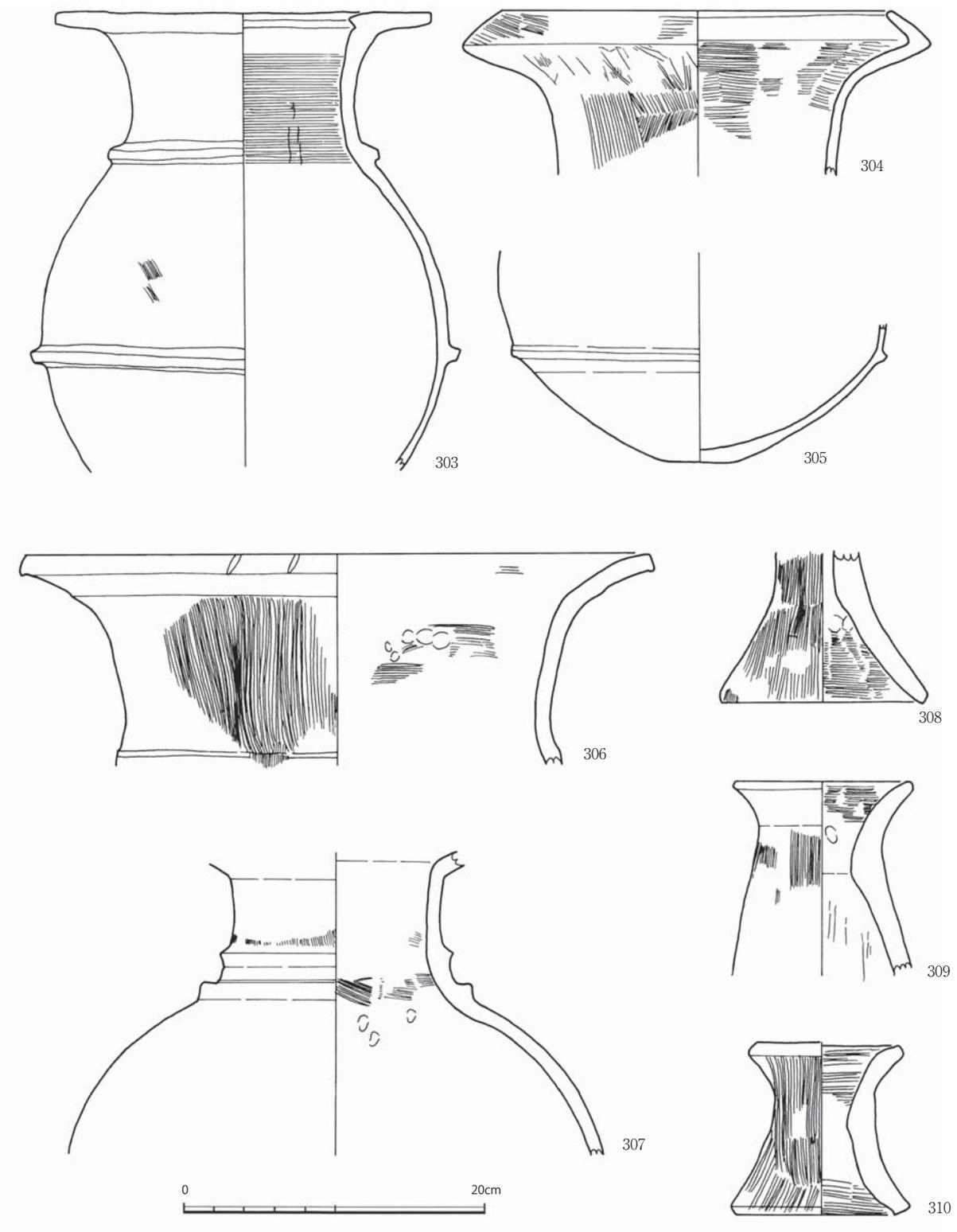


図67 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

古墳時代前期の高坏である。247は甑の簀の子である。古墳時代前期のものであろう。

239・241はc区出土土器である。239は内外面に丹塗りが施される鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式甕、241も内面に丹塗りが施された須玖Ⅱ式の鋤先形状口縁の高坏である。

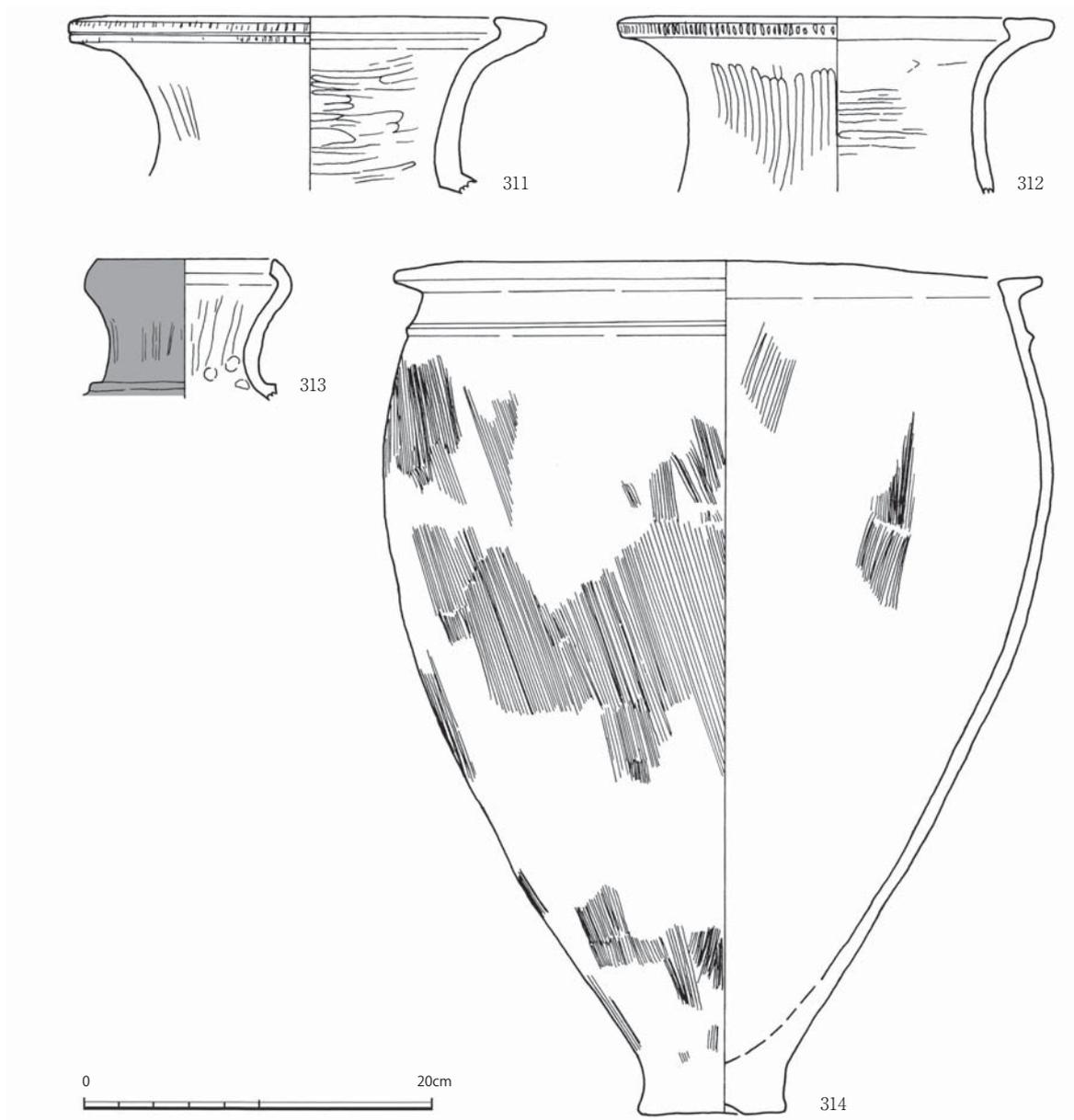


図68 第1次調査（1951年）第1トレンチ出土土器

これら b・c 区は外環濠に相当する可能性のある土器である（図35）。その内容は、弥生中期の須玖Ⅱ式から古墳時代前期の土器からなっている。

251～260は e・f 区出土土器である。e・f 区では遺物が集中して出土しており（図33）、f 区からは貨泉も出土している。260は弥生前期末・中期初頭の金海式甕棺である。254～259は長卵形の胴部をなす西新式の甕であろう。251は山陰系の二重口縁壺で古墳時代前期のものである。252・253は同じく古墳時代前期の高坏で、252は坏部内面に暗文が施されている。

266・268・269・270・272・273は g 区出土土器である。266は須玖Ⅰ式の甕、269は高三瀆式の甕、268は下大隈式の甕である。270・272はそれらの時期の甕の底部である。273は古墳時代前期の高坏である。

261～265・267・271は h 区出土土器である。261は内外面に丹塗りが施された鋤先形状口縁の須玖

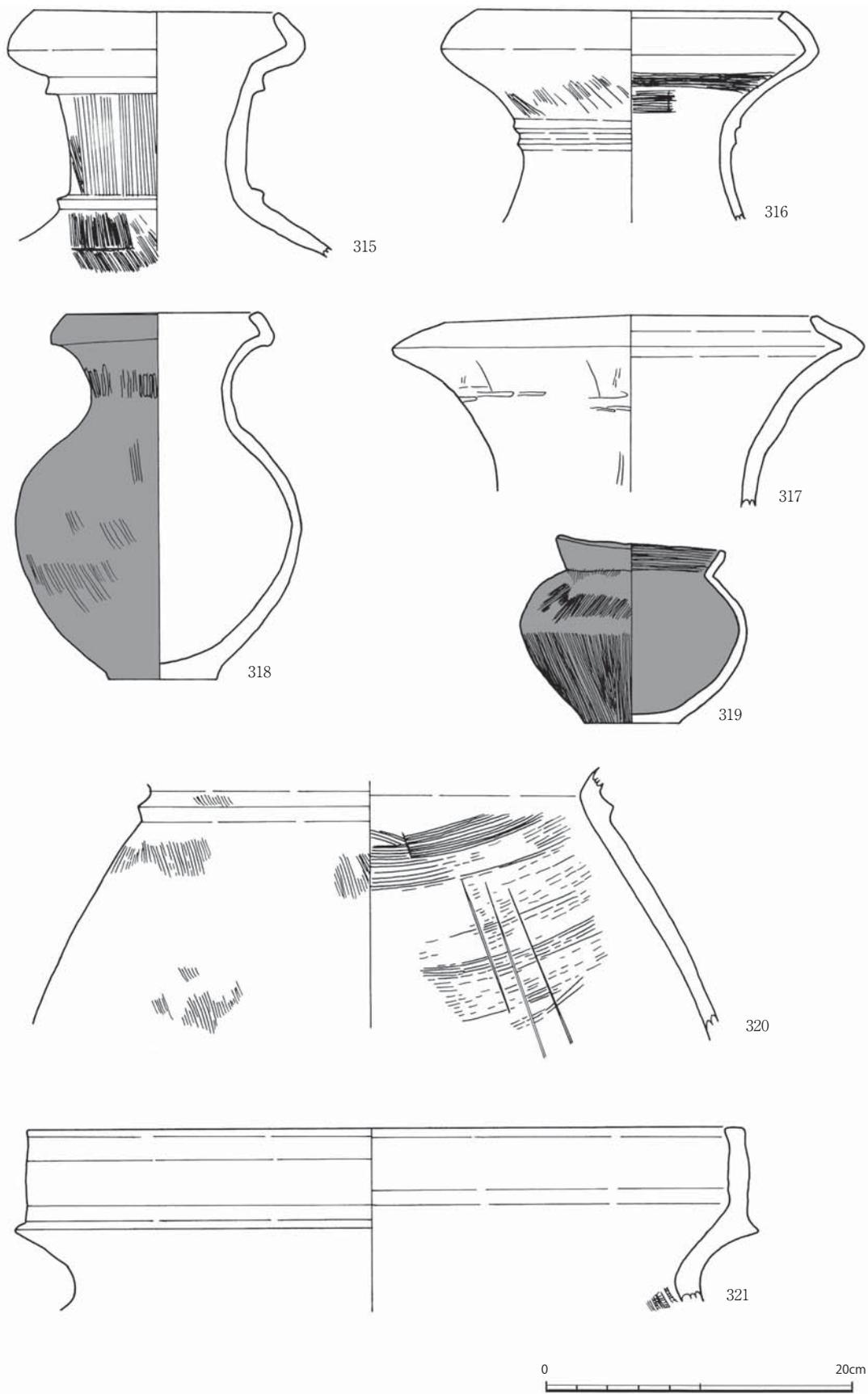


图69 第1次調査（1951年）出土地区不明土器

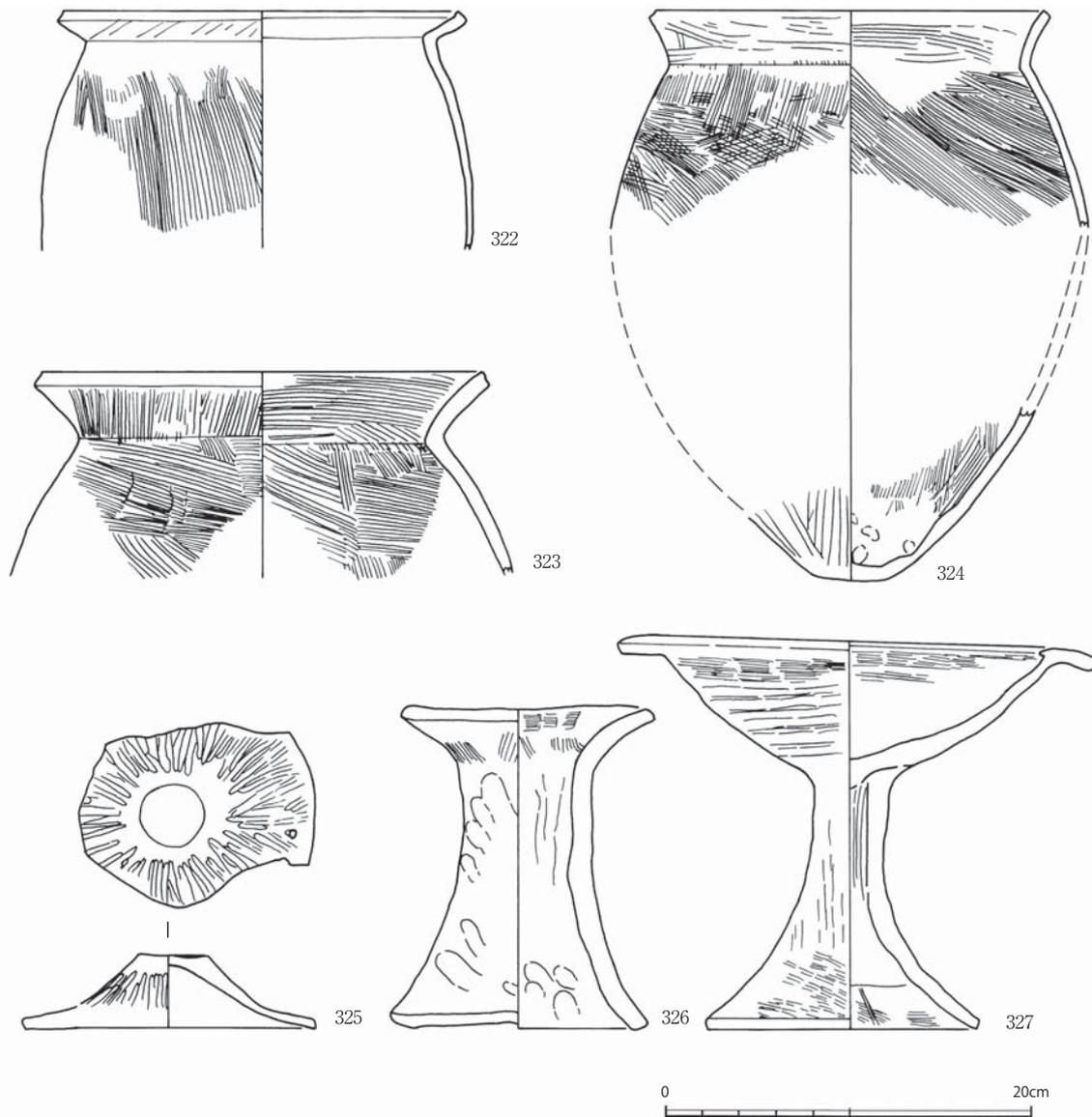


図70 第1次調査（1951年）出土地区不明土器

Ⅱ式の広口壺。262・263は複合口縁壺で高三瀦式であり、262は外面に丹塗りが施されている。265も同じ弥生後期段階の壺の胴部であり、胴部に断面M字突帯をもつ。264も同段階の鉢であろう。267は口唇が面取りされた下大隈式の甕であり、271は同一個体と考えられるものである。発掘時に小児甕棺墓と考えられたもの（図34）の一部であろう。

274～302はp・q区出土土器である。274は外面と内面上半に丹塗りが施された短頸壺、275は複合口縁壺であり、どちらも高三瀦式に相当する。276・278・279は複合口縁壺であり、口縁の屈曲部が明確に屈折している下大隈式である。外面に丹塗りが施された281の長頸壺もこの段階のものであろう。282は無頸壺であり、高三瀦式のものであろうか。277・280・283はこれら弥生後期の壺の胴部から底部にあたり、280の外面には丹塗りが施されている。284は須玖Ⅰ式の甕、285・296は鋤先形状口縁の須玖Ⅰ式の甕である。292・293は口唇が丸みを帯びた高三瀦式の甕。286～291・295は口唇の面取りが施された下大隈式の甕、294は西新式の甕であろう。288は内外面に、290は外面と内面の上半に丹塗りが施されている。297はこれら弥生後期の甕底部である。299は弥生中期の須玖式の高坏脚部

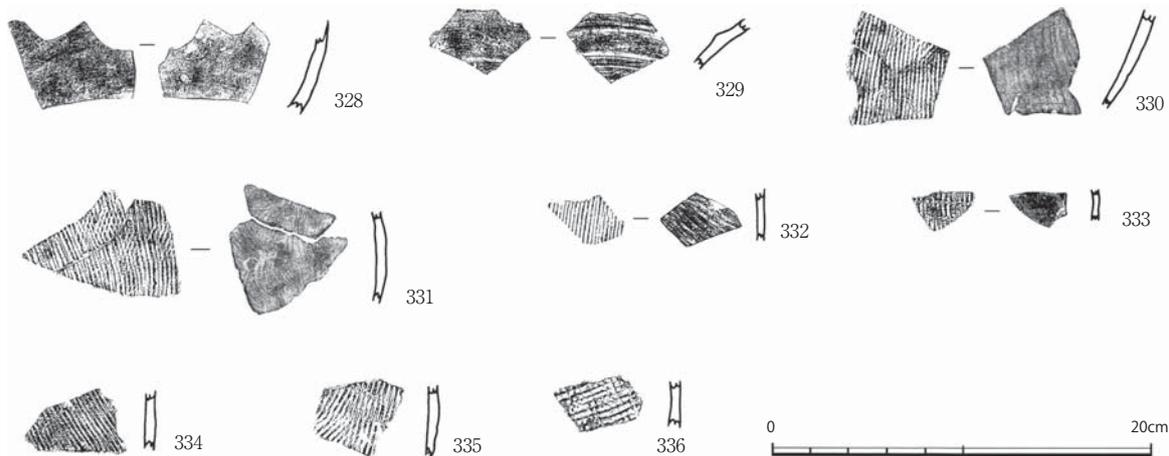


図71 第1次調査（1951年）出土楽浪系土器・三韓土器

である。298は高三瀦式の鉢。300～302の器台は、同じく高三瀦式段階のものであろう。

303～310はr区出土土器である。303は鋤先形状口縁の壺で、須玖Ⅱ式である。304は下大隈式の複合口縁壺、306も下大隈式の広口壺である。307はそれら弥生後期の壺の頸部、305は弥生後期の壺の胴部から底部である。308は須玖式段階の高坏の脚部であらう。309・310は高三瀦式段階の器台であらう。

311・312はi区出土で、ともに須玖Ⅰ式の広口壺である。

以上のg・h・i・p・q・r区は遺物が集中して出土しているところであり（図36、図版10・11・12-1）、内環濠に相当する地点である（図35）。内環濠内の遺物は、須玖Ⅰ式～西新式までの弥生時代中期中葉～弥生終末期の遺物とすることができるであらう。

313・314はm区出土品である。313は外面に丹塗りが施された高三瀦式の複合口縁壺である。314は底部が上げ底の須玖Ⅰ式の甕である。完形の土器であり、小児甕棺であらうか。

## （2）出土地区不明の土器（図69・70、図版37～38）

315～327は1951年第1次調査における出土地不明の土器である。第1次調査では第1トレンチ以外では第2・3トレンチでも発掘調査がなされており、これらの大部分が第2・3トレンチに相当する。315・316・318は高三瀦式の複合口縁壺であり、318は外面丹塗りの完形品である。317は下大隈式の複合口縁壺である。このうち、318の複合口縁壺は、第1トレンチのa区でイヌの埋葬骨付近から発見された丹塗り壺である（図版13-1）。319は内外面に丹塗りが施された高三瀦式の短頸壺であらう。320は大型の壺の胴部であり、弥生後期のものであらう。内面にハケ目調整後に3本の縦方向の沈線文が施されている。321は山陰系の大型の複合口縁壺であり、古墳時代前期のものである。322は須玖Ⅱ式段階の遠賀川以東系の跳ね上げ口縁甕である。323は口唇に面取りが施された下大隈式の甕。324は丸底に近い西新式の甕である。325は須玖式段階の蓋である。326は高三瀦式の器台、327は須玖Ⅱ式の高坏である。

## （3）楽浪系土器・三韓土器（図71、図版39）

328は灰陶系土器で、楽浪系土器の壺であらう。329は瓦質の鉢形土器であり、楽浪系土器である。330～332は、外面に縄蓆文をもち、内面に当て具痕跡が認められる楽浪系土器の短頸壺の胴部片である。333は外面に縄蓆文叩きが施され、内面にはロクロナデの痕跡がみられる、楽浪系土器であらう。334・335は、胴部外面に縄蓆文をもつ瓦質の三韓土器。336も方格文叩きをもつ三韓土器である。

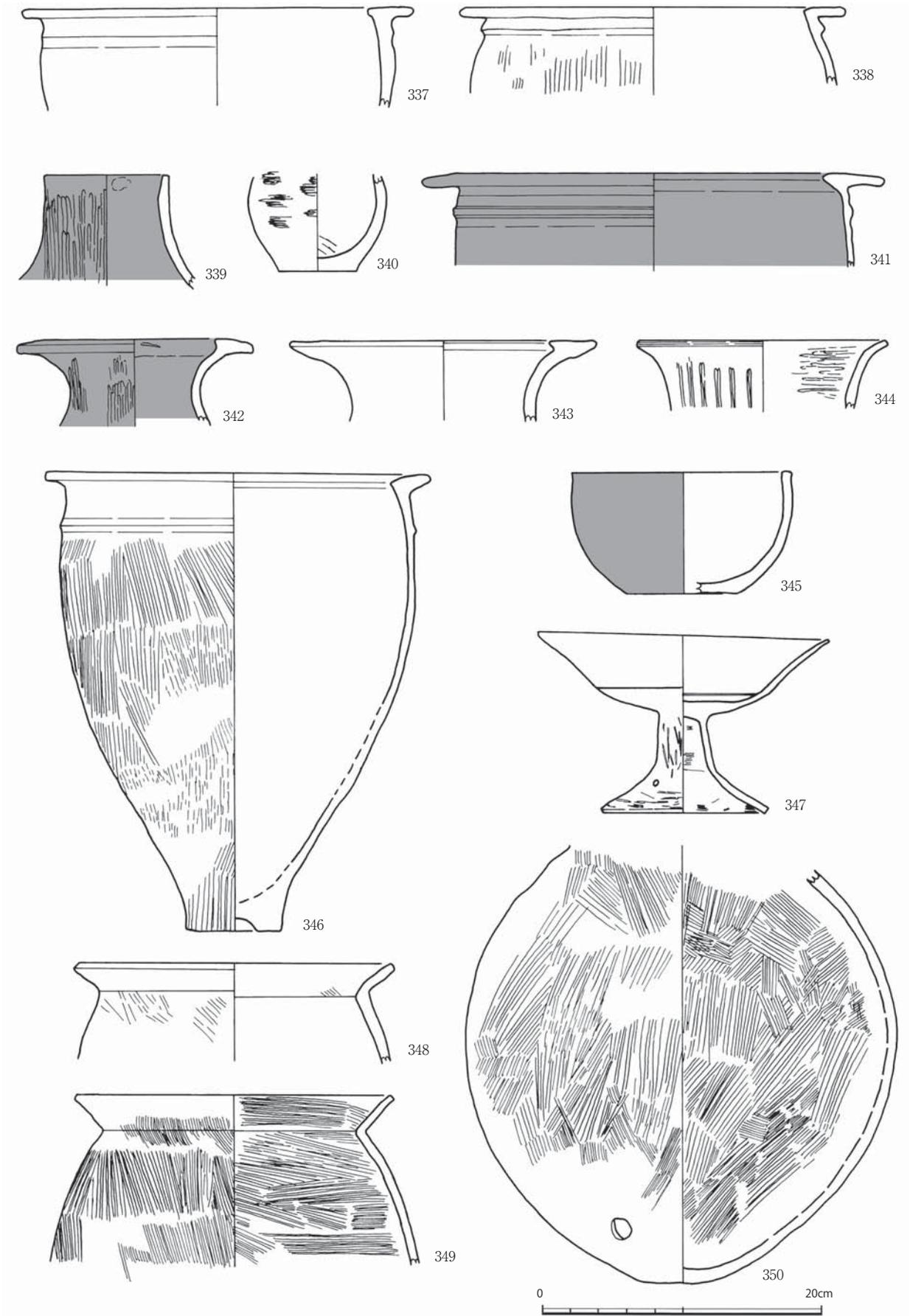


図72 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

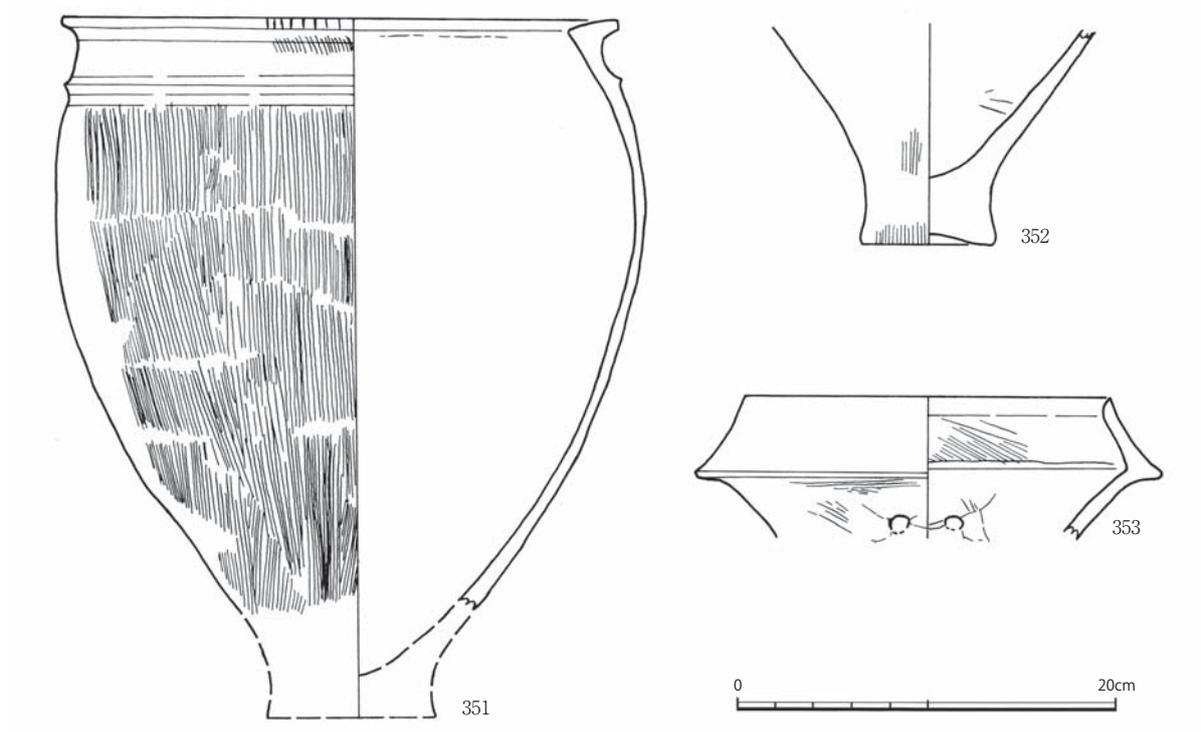


図73 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

## 4 1961年第5次調査の土器

### (1) 第1トレンチ（図72～81、図版40～45）

第5次調査では、上層と下層の分層が一部で試みられている。これは、第1次調査で設定した原の辻上層式を明確にするためであった。

337～343はE区～G区の出土土器である。342・343は鋤先形状口縁の須玖Ⅰ式の壺。342は内外面丹塗りが施されている。337・338は須玖Ⅰ式の甕、341は内外面に丹塗りが施された鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕である。339は下大隈式の長頸壺、340は弥生後期の壺であろう。外面が黒陶のように炭素を吸着させ黒く塗布されている。344・346・349・350はM・N区の土器である。344は頸部に縦方向の暗文が施された須玖Ⅰ式の広口壺。346は上げ底をなす須玖Ⅰ式古段階のもので、下層出土のものである。348は高三瀧式の甕、349は口唇が面取りされた下大隈式の甕で、両者は上層から出土している。350は丸底をなす西新式の甕である。

345はF区出土で外面に丹塗りが施された鉢である。須玖式段階のものであろう。347はK区上層出土で、古墳時代前期の高坏である。

351・352はQ区下層出土の遺物であり、351は城ノ越式、352も上げ底で城ノ越式の甕であろう。353はR区上層出土で、口縁端部がやや外反する西新式の複合口縁壺である。

354～378は、S・S'・T・T'区出土土器で第1次調査の内環濠にあたる部分の拡張区に相当している。このうち359～362は下層、363～374は上層で分層がなされているが、375～378は上下層の分層区分が表記されないものである。

354は重弧文が施される弥生前期板付Ⅱ式の壺である。356・357は鋤先形状口縁をなす須玖Ⅰ式の広口壺、355は外面が丹塗りが施された須玖Ⅱ式の袋状口縁壺である。358・359は須玖Ⅰ式の甕、361は鋤

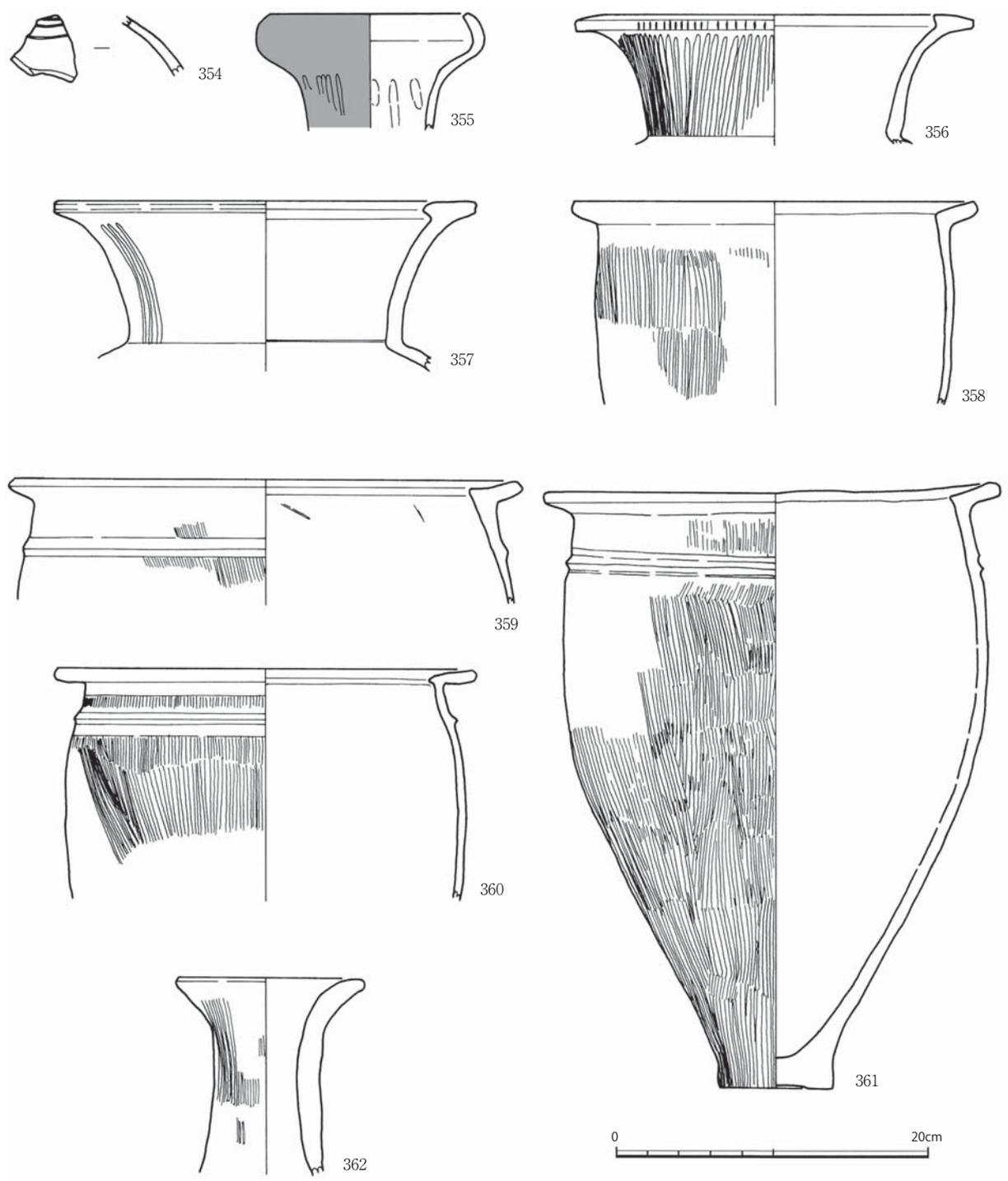


図74 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

先形状口縁の須玖Ⅰ式の甕である。360は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕で、362は須玖式段階の器台であろう。このように下層土器は、弥生前期の破片を除いて弥生中期の須玖Ⅰ・Ⅱ式に限られている。

363は、鋤先形状口縁が痕跡的に残った高三瀦式の広口壺で、口縁端部が刻まれている。373は同じ口縁部の特徴をもつ下大隈式の広口壺であるが、口縁端部は格子文が刻まれている。364・365は下大隈式の複合口縁壺である。366と367は壺の胴部から底部にかけてのものであるが、弥生後期のものであろう。368は内面が丹塗りされた鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式高坏。372は須玖Ⅱ式の器台。369～371も

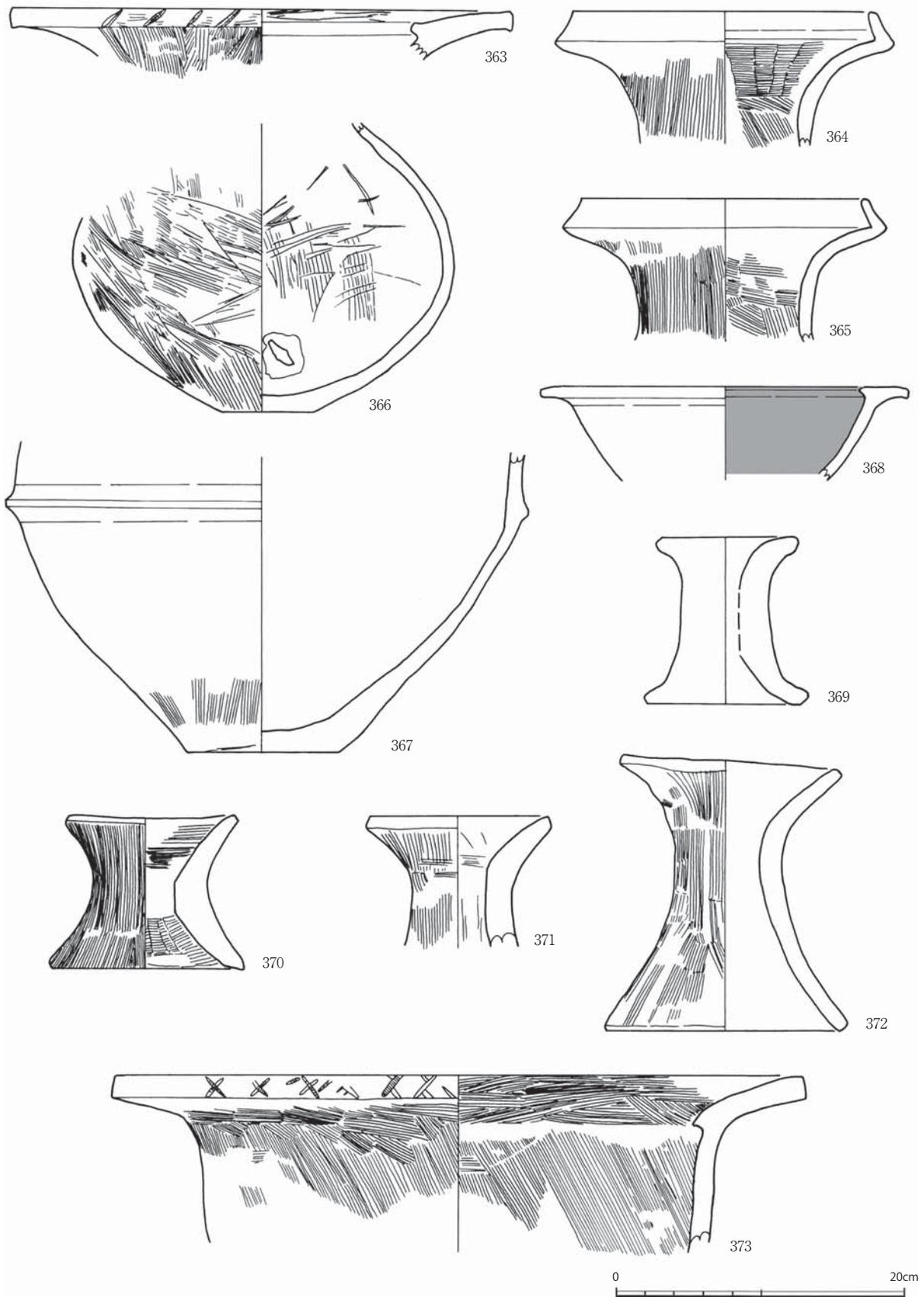


図75 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

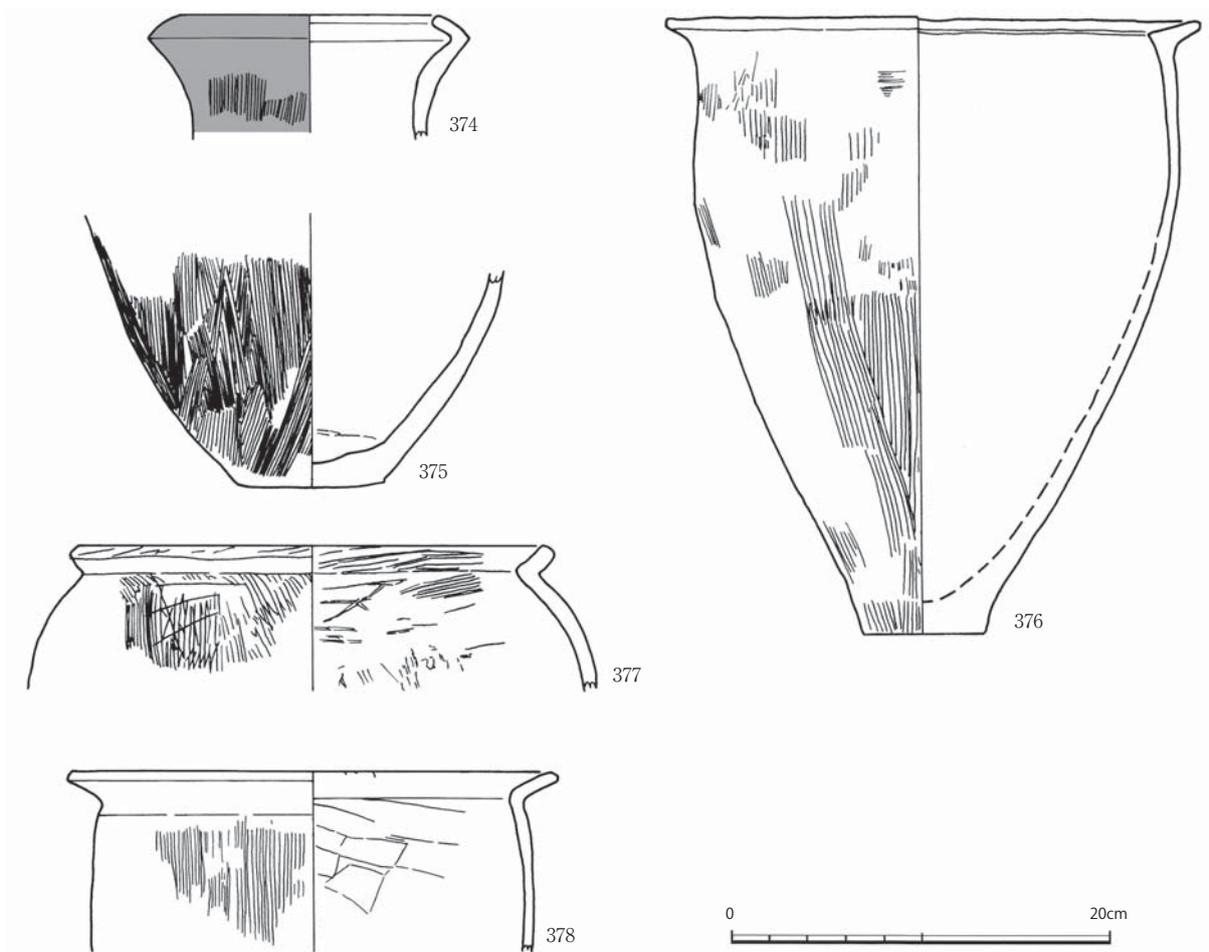


図76 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

器台であるが、高三瀝式のものであろう。このように上層の土器は、1点の須玖Ⅱ式の土器を除いて、基本的に高三瀝式と下大隈式の弥生後期のものである。

374は外面丹塗りの高三瀝式の複合口縁壺である。376は須玖Ⅰ式の甕、377・378は高三瀝式の甕である。375は凸レンズ気味の底部をなす下大隈式の甕である。

379～417はX・W・Y区出土の土器であり、内環濠に相当する土器である。379・381・414～417は下層出土土器であり、414は鋤先形状口縁の広口壺で須玖Ⅰ式である。415・416も須玖Ⅰ式の甕である。379は鋤先形状口縁の広口壺、381は外面丹塗りの袋状口縁壺であり、どちらも須玖Ⅱ式である。382も須玖Ⅱ式の外面丹塗りの袋状口縁壺である。417は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕である。

380・383・384・386～389は上層出土土器である。383・384は高三瀝式の外面丹塗りの袋状口縁壺である。380も内外面丹塗りの高三瀝式の広口壺である。386は須玖Ⅱ式の外面丹塗りの袋状口縁壺の胴部であろう。387も須玖Ⅱ式の外面丹塗りの袋状口縁壺の一部であろう。389は胴部下半に胴部最大径があり、下大隈式の長頸壺胴部から底部であろう。385・386は層位の区別ができないが、385は下大隈式の複合口縁壺、388は同じく下大隈式の長頸壺である。

391は下層出土の須玖Ⅱ式の短頸壺であり、内外面に丹塗りが施されている。390・393・394・396・398・399・400・402は上層出土の甕である。390・394・399は高三瀝式の甕で、392・393・396・400・402は下大隈式の甕である。そのほかの層位不明の395・401は高三瀝式の甕、397は下大隈

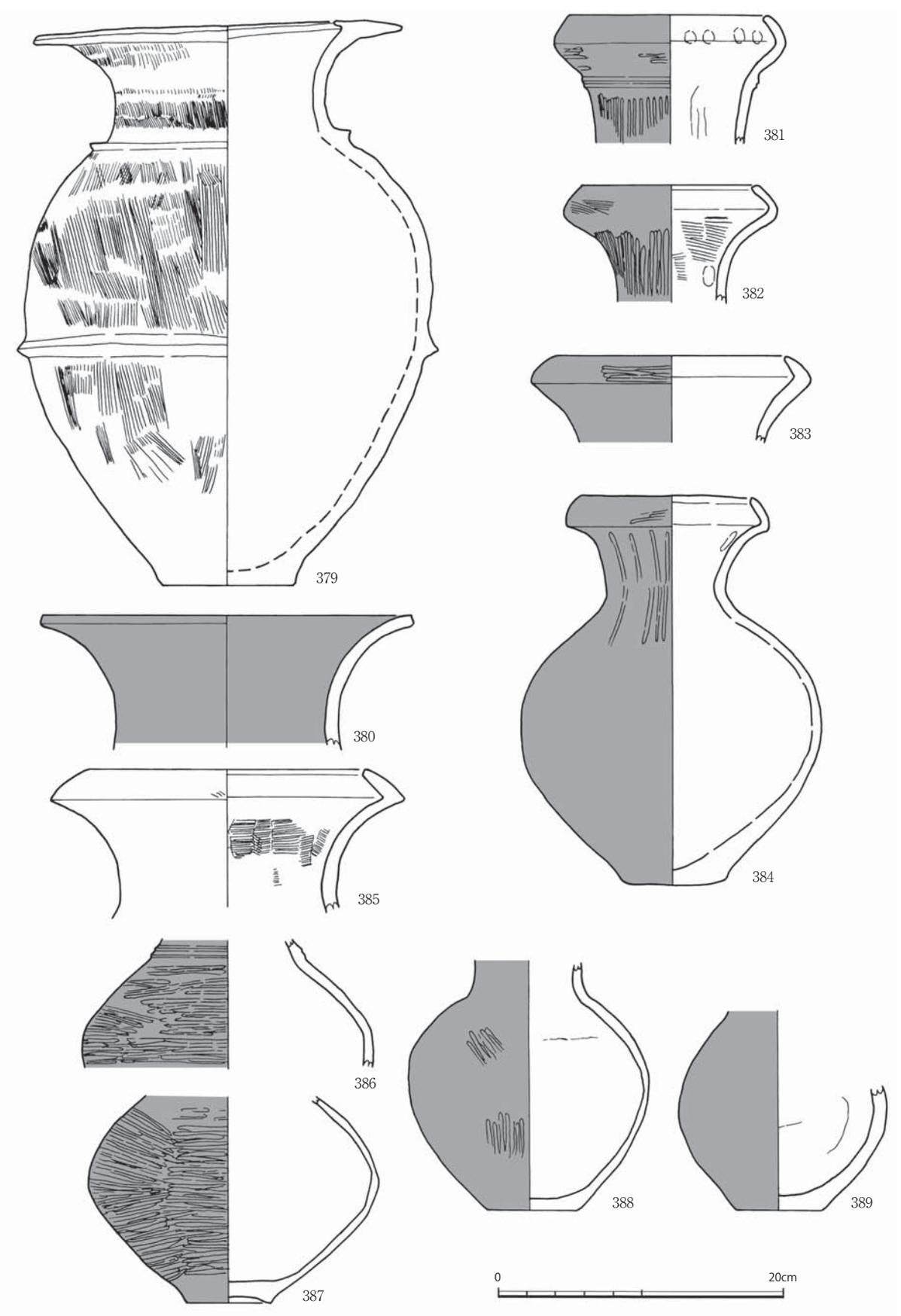


図77 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

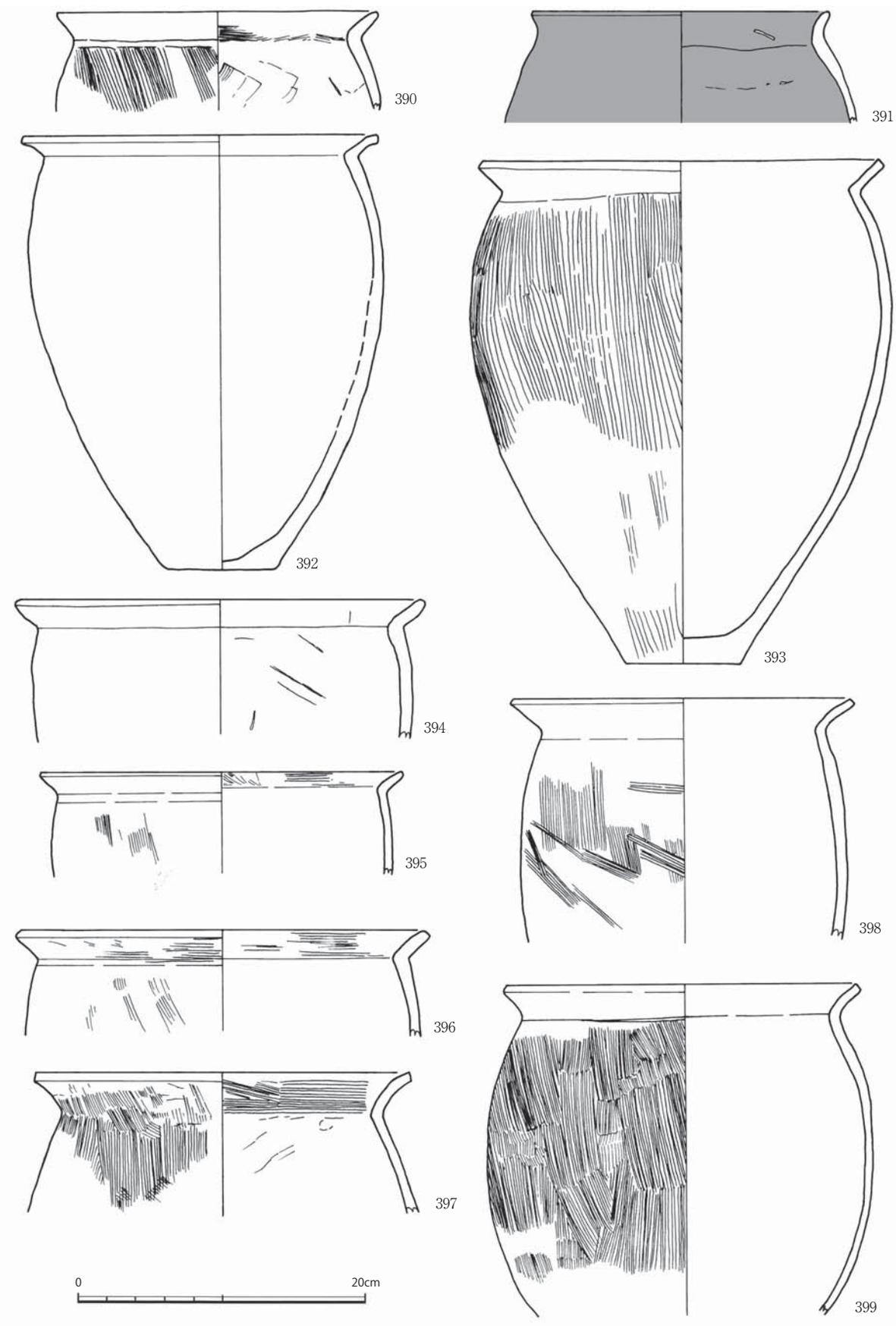


図78 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

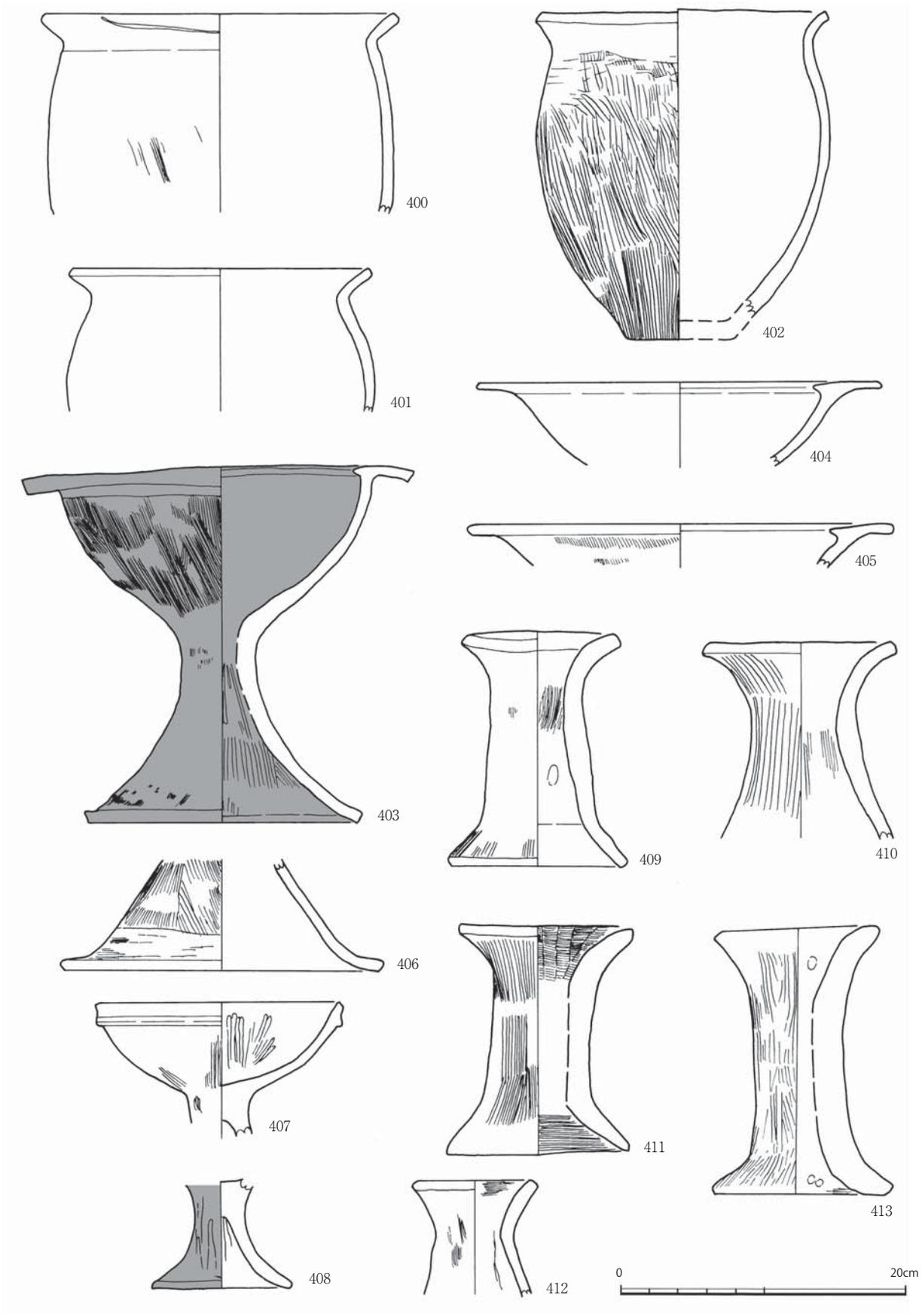


図79 第5次調査(1961年)第1トレンチ出土土器

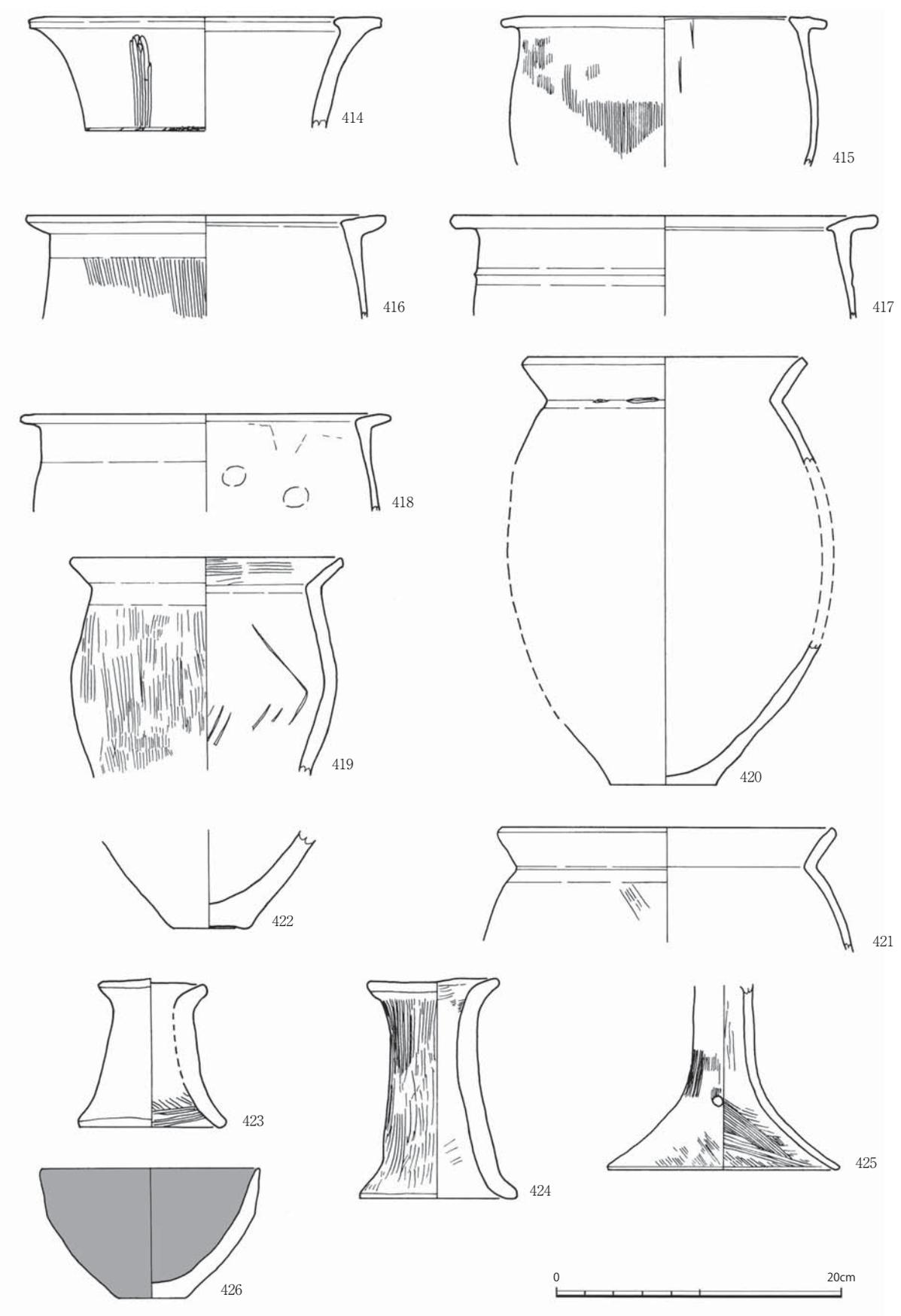


図80 第5次調査（1961年）第1・第4トレンチ出土土器

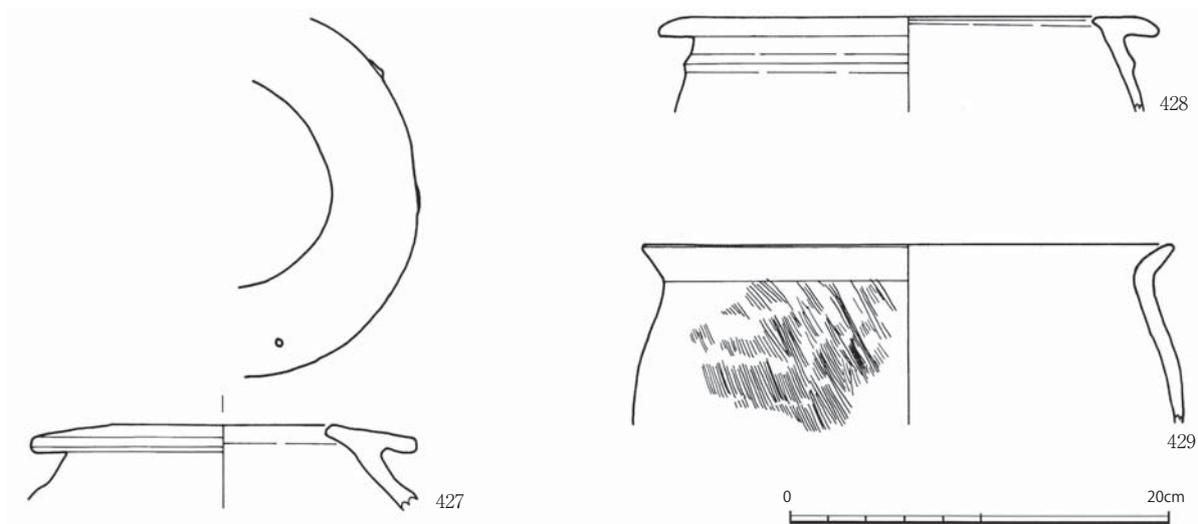


図81 第5次調査（1961年）第1トレンチ出土土器

式の甕である。

403・405は上層出土の高坏で、どちらも高三瀧式の高坏である。403は内外面に丹塗りが施されている。層位不明の404は須玖Ⅱ式の高坏である。同じく層位不明の406は弥生後期の高坏脚部である。407・408は上層出土で、弥生後期のものであろう。408は外面に丹塗りが施されている。

410～413は上層出土器台である。410は須玖Ⅱ式の器台で、411～413は高三瀧式の器台である。層位不明の409は須玖Ⅱ式の器台である。

このように、X・W・Y区の内環濠の下層は須玖Ⅱ式の弥生中期、上層は高三瀧式や下大隈式の弥生後期に限られている。

427～429は、第1トレンチの表面採集の土器である。427は鋤先形状口縁の樽形壺で、須玖Ⅱ式である。428は同じく須玖Ⅱ式の鋤先形状口縁の甕。429は高三瀧式の甕である。

## (2) 第4トレンチ（図80、図版45）

418～426がD区出土の遺物である。この内、419を除きすべて上層出土の土器である。420・421は口唇に面取りが施された下大隈式の甕、425も下大隈式の高坏脚部、426も同じ段階の鉢で、内外面に丹塗りが施されている。その他、418が須玖Ⅰ式の甕、422は弥生後期の壺底部であろう。419は高三瀧式の甕、423・424も高三瀧式の器台である。D区出土土器も、X・W・Y区の内環濠に続く環濠出土のものであるかもしれない。

## (3) 第2トレンチ（図82、図版46）

430が第2トレンチ出土土器で、須玖Ⅰ式の甕である。小児甕棺であった可能性がある。

## (3) 第5トレンチ（図82、図版46）

431～443が第5トレンチ出土土器である。この内、431・432・434～436がC区出土土器で外環濠に相当する部分出土土器である（図38）。431は外面に明瞭な縦方向の暗文が施された内外面丹塗りの須玖Ⅱ式の広口壺、432・434・435は須玖Ⅰ式の甕である。436は鋤先形状口縁の高坏であり、須玖Ⅰ式である。

433・438～443はE区～I区の土器である。433は高三瀧式の袋状口縁壺。439はH区下層の鋤先形状口縁である須玖Ⅰ式の甕、440・441は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕である。Q区出土の437は須玖Ⅱ式の器台。442はH区下層出土の弥生後期の器台である。438は古墳時代前期の高坏である。443も

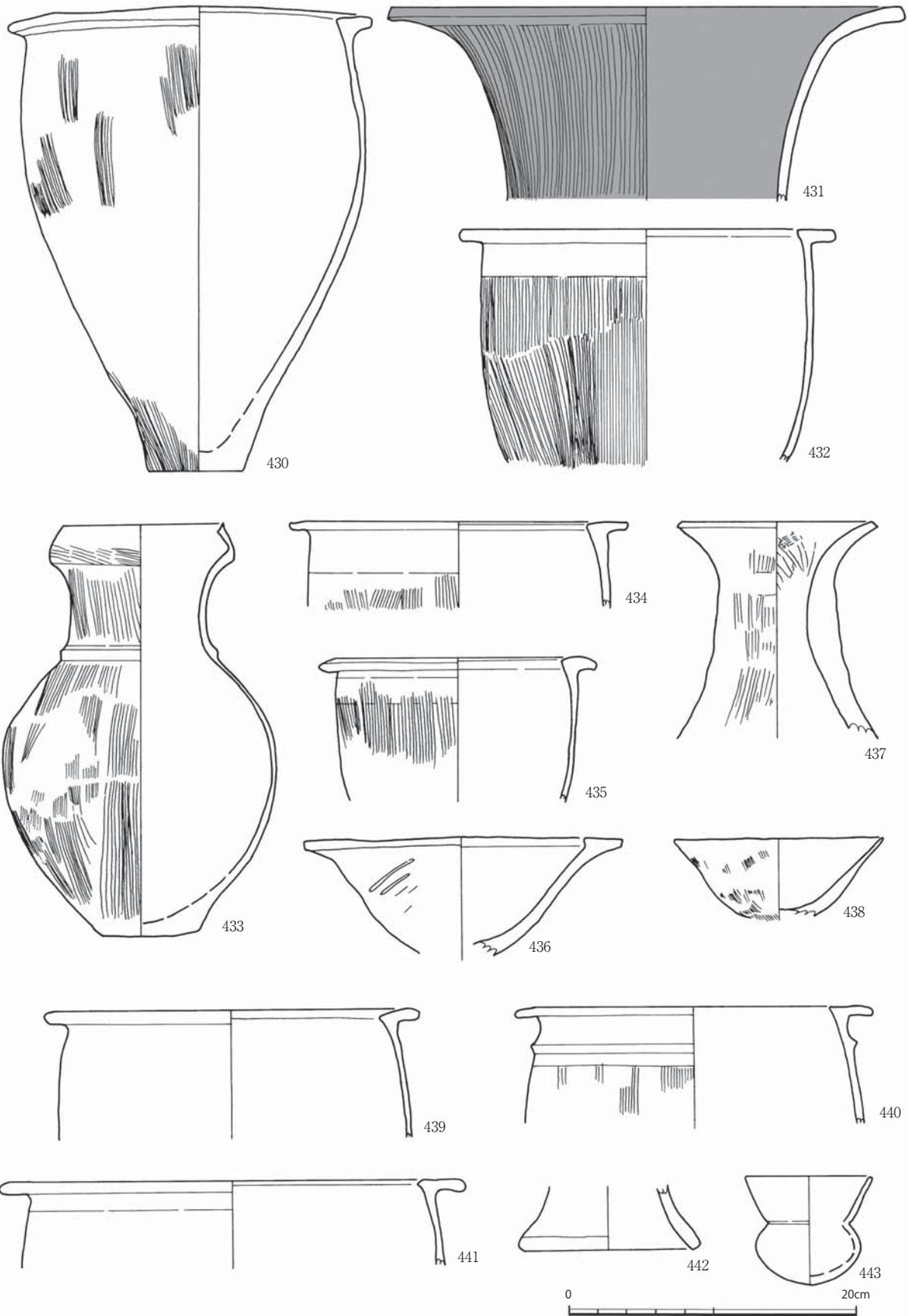


図82 第5次調査(1961年)第2・第5トレンチ出土土器

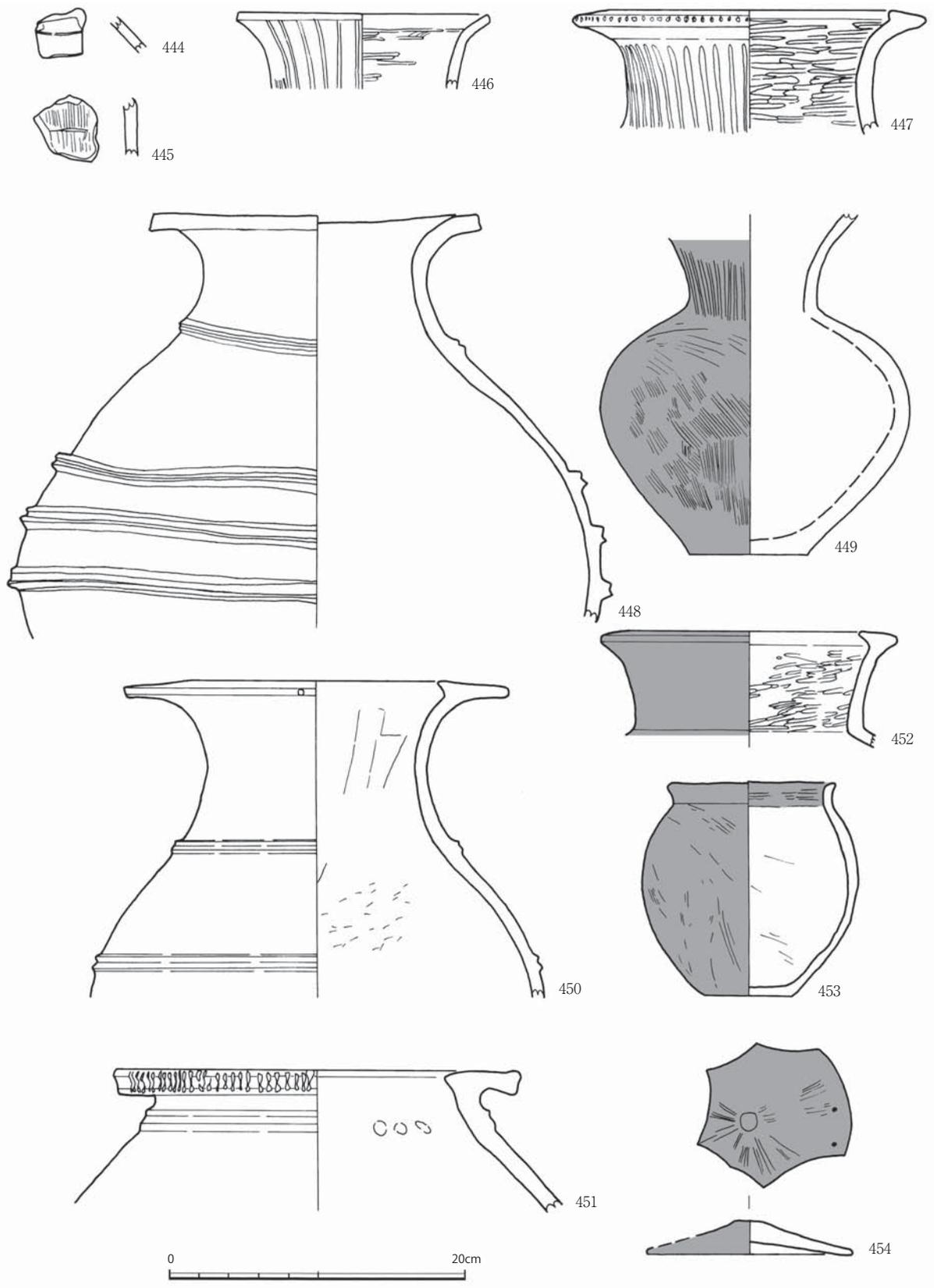


图83 第5次調査（1961年）出土地区不明土器

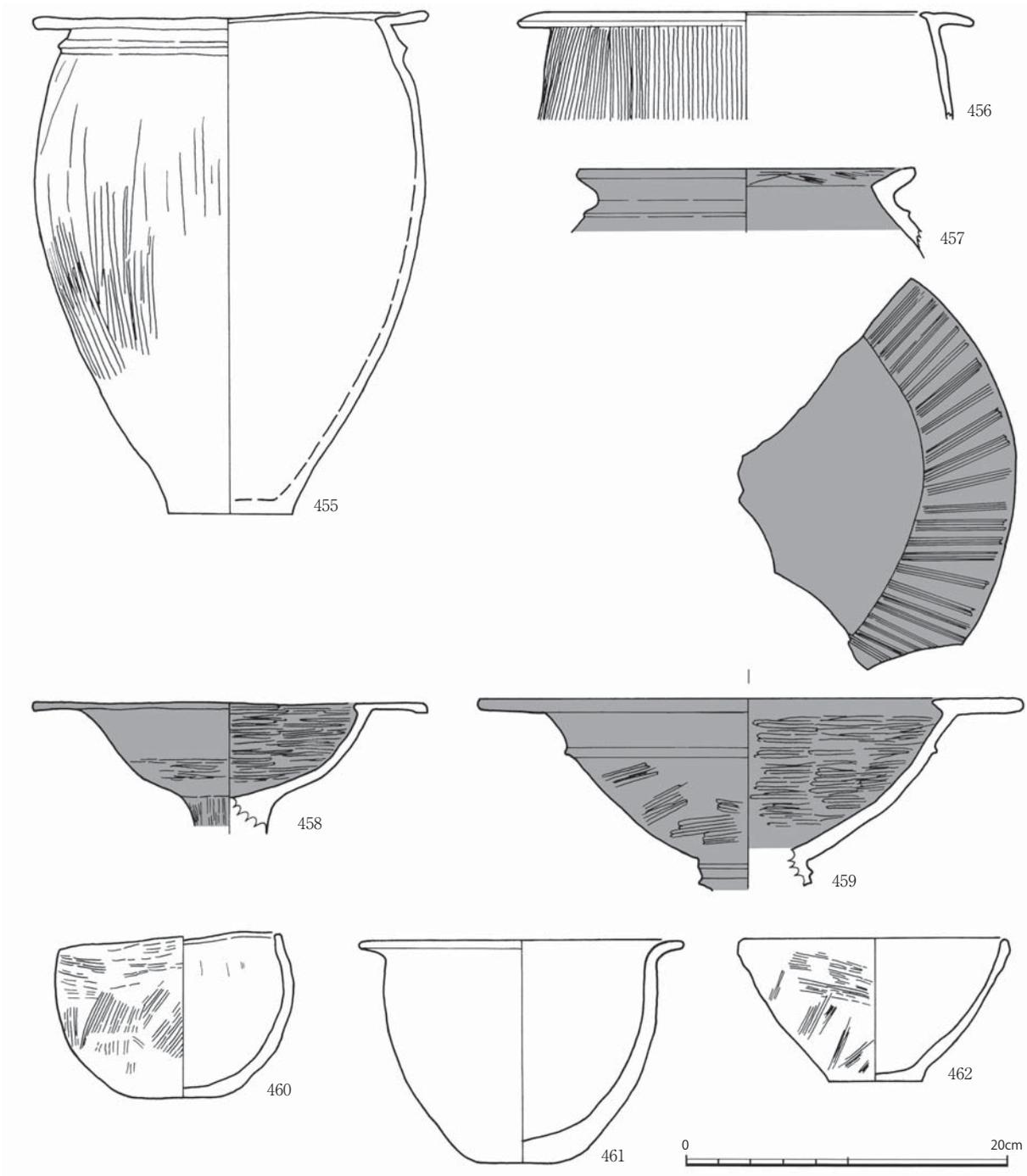


図84 第5次調査（1961年）出土地区不明土器

古墳時代前期の小型丸底壺である。

（4）出土地区不明土器（図83～84、図版47～49）

444・445は遠賀川式土器として採集されたもの。444は頸部に弧状の沈線文が施される弥生前期の壺形土器。445は貝殻施文が施される弥生前期の土器である。

446は頸部に縦方向の暗文が施される城ノ越式の壺、452も肥厚した口縁をなす須玖Ⅰ式の外面丹塗りが施された壺である。447は鋤先形状口縁の須玖Ⅰ式の壺、448も断面M字突帯が多段に貼られた須玖Ⅰ式の壺であろう。449は頸部に縦方向の暗文が施された須玖Ⅱ式の外面丹塗りの袋状口縁壺で

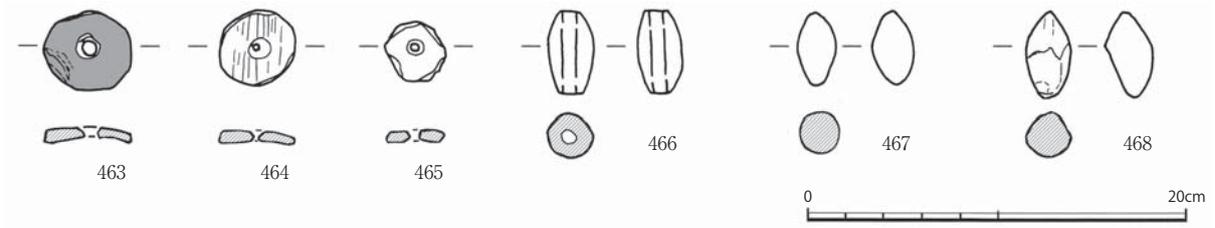


図85 第5次調査（1961年）出土土製品

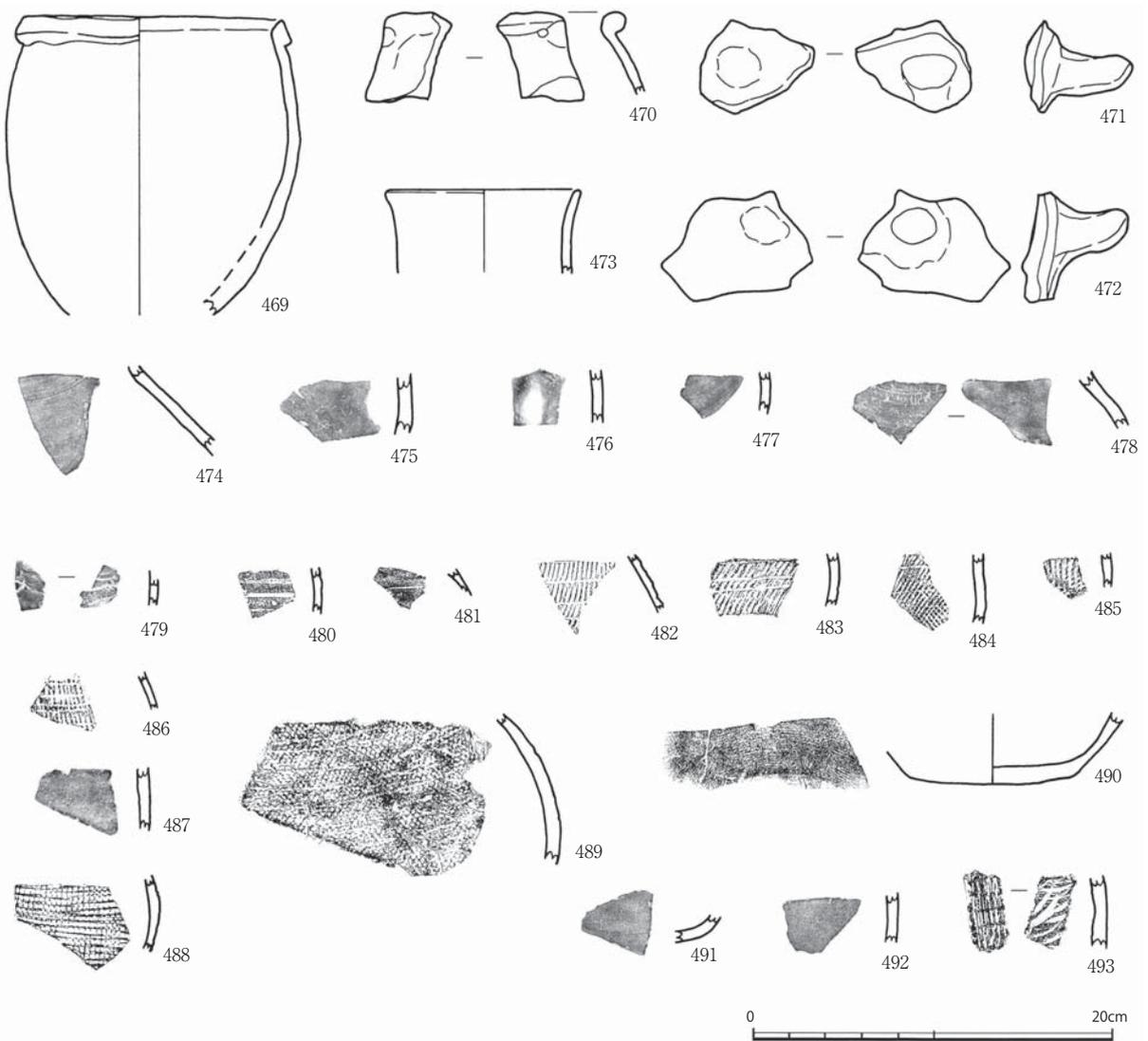


図86 第5次調査（1961年）出土楽浪系土器と無文土器・三韓土器

ある。451は樽形壺であり、須玖Ⅰ式。450は鋤先形状口縁で、胴部に断面M字形突帯を貼るものであるが、448より突帯が退化した須玖Ⅱ式の壺である。453は小型の短頸壺で、外面と内面上半に丹塗りが施された弥生後期のものであろう。454は外面丹塗りの器蓋であり、外面には暗文が明瞭に認められる。須玖Ⅱ式のものであろう。

455・456は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の甕である。457は内外面に丹塗りが施された高三瀝式の甕である。458・459は鋤先形状口縁の須玖Ⅱ式の丹塗りの高坏であり、祭祀土器に相当する。460～462は

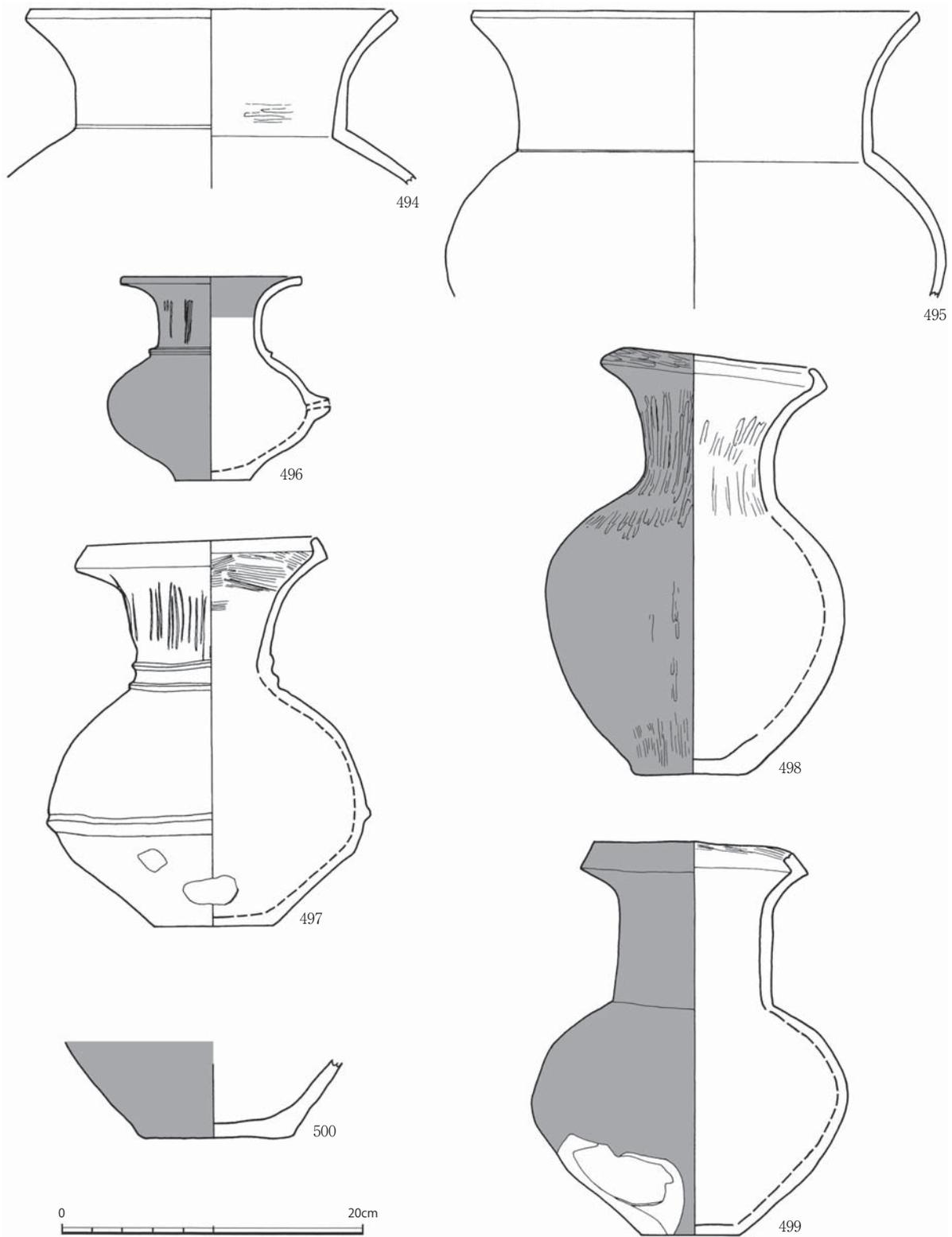


図87 出土地区不明土器

鉢であり、弥生中・後期のものであろう。

(5) 土製品 (図85、図版49)

463～465は紡錘車であるが、土器片を再加工し中心部に穴を穿孔した土器片再利用の弥生のもので

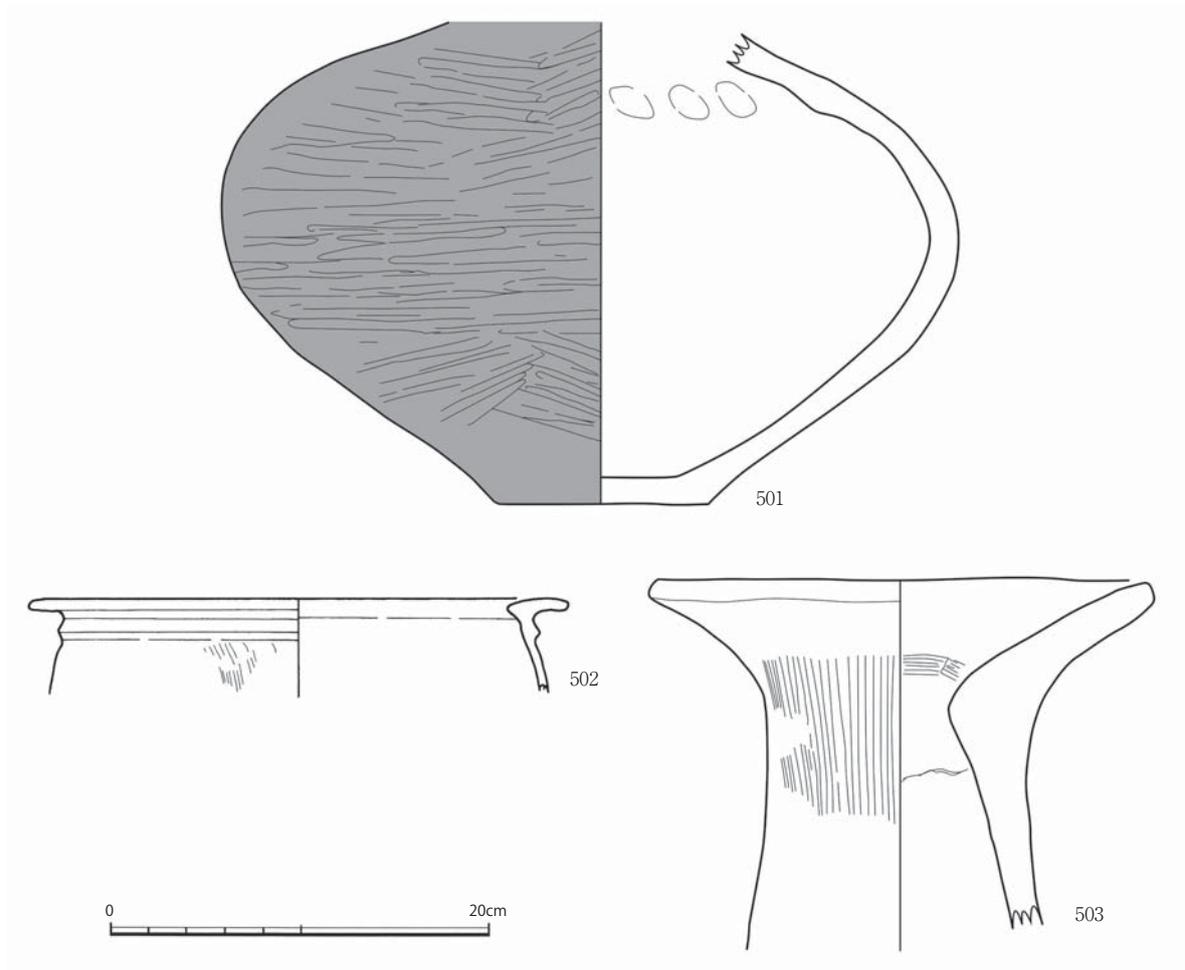


図88 出土地区不明土器

ある。463は外面に丹塗りが施された祭祀土器の再利用品である。466は弥生の土錘であり、467・468は弥生の投弾である。

**(6) 楽浪系土器・無文土器・三韓土器** (図86、図版50)

470は円形粘土帯土器、469は三角形粘土帯土器である。471・472は把手であり、無文土器に伴うものである。473は灰陶系壺で楽浪系土器であろう。478・479は内面に当て具痕を残す楽浪系土器である。474～477・480・481は、灰陶系土器で楽浪系土器であろう。482～486は縄蓆文に条線が施される三韓土器である。490は縄蓆文叩きをもつ短頸壺の底部で、三韓土器である。487～489は方格文叩きをもつ三韓土器。491・492は瓦質土器の三韓土器である。493は内面に青海波の叩きをもつもので、古墳時代あるいは三国時代のものであろう。

## 5. 原の辻遺跡出土地不明土器

原の辻遺跡の東亞考古学会調査による出土土器であるが、出土の調査年次や調査地区が不明であるものである (図87～89、図版51)。

494・495は須玖Ⅰ式の広口壺である。500は、これらの須玖式の広口壺の底部であるが、外面には丹塗りの痕跡が認められる。496は注口部をもつ小型の壺であり、外面と内面の上半に丹塗りが施されている。須玖Ⅱ式の祭祀土器であろう。497～499は複合口縁壺で、497・498は高三瀆式、499は下

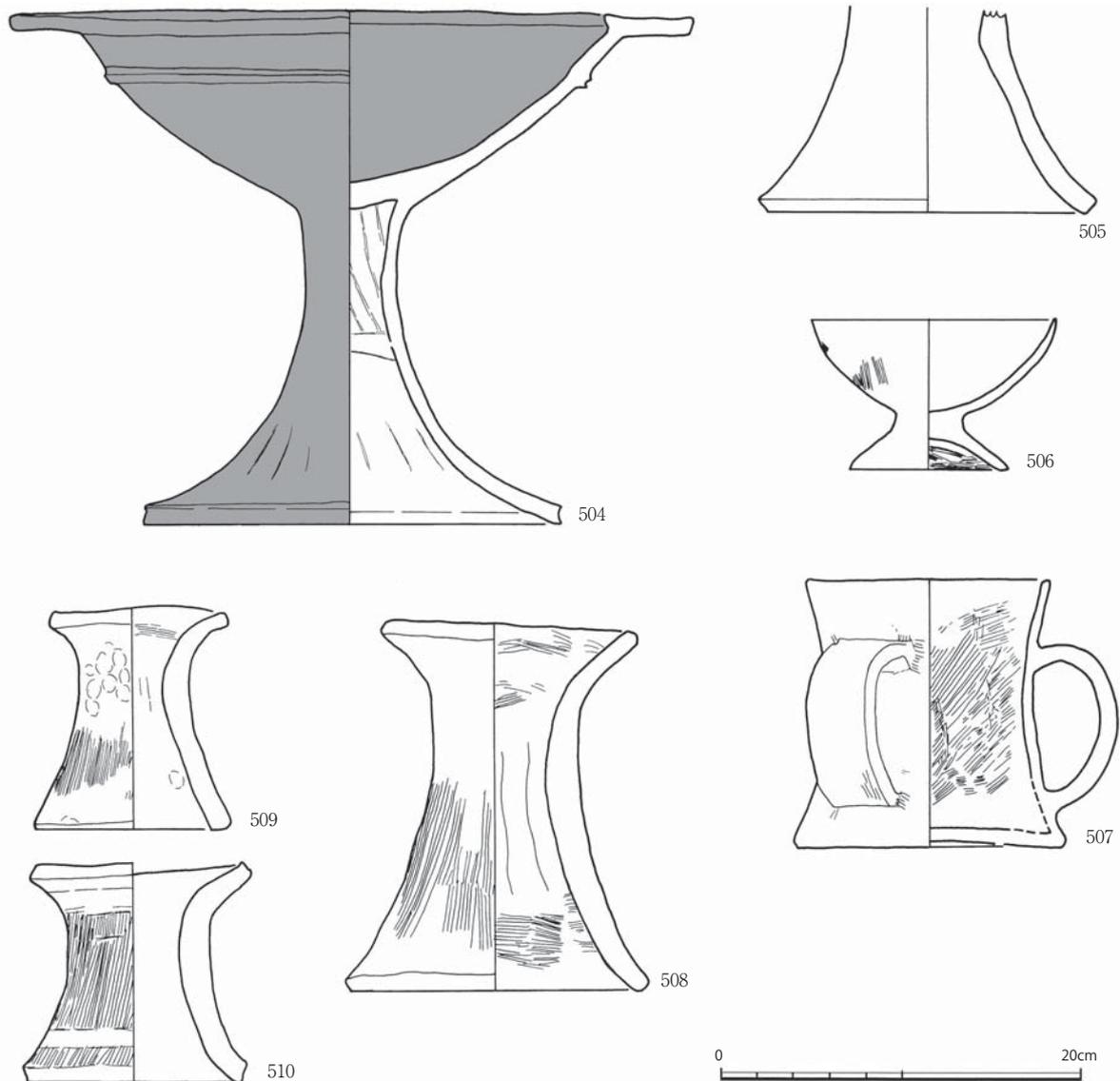


図89 出土地区不明土器

大隈式である。複合口縁壺の498と499は外面に丹塗りが施されている。

501は外面丹塗りの袋状口縁壺の胴部から底部であり、須玖Ⅱ式であろう。502は須玖Ⅱ式の甕、503も須玖式の器台である。504は内外面丹塗りの鋤先形状口縁高坏であり、須玖Ⅱ式のものである。505は須玖式の高坏脚部であろう。506は下大隈式の高坏。507も下大隈式のジョッキ形杯である。509は高三瀝式の器台、508・510は下大隈式の器台である。

## 6. 壁土

511・512は、1953年第2次調査の第2トレンチJ区出土の壁土である（図90）。鍛冶炉などの炉壁と違い焼きがあまく内面が炭化し、壁面は元の状態をよく残している（図版39-3）。第2トレンチJ区は2号方形住居址（図13）に隣接した地点であり、2号住居址内からは多量の炭化木材が出土している。2号方形住居址は壁立ち住居と考えられており、この壁土は焼失家屋の一部と考えられる。壁土の炭素年代は、511が286calBC-228calBC（46.3%、1σ）と314calBC-205calBC（70.7%、2σ）、

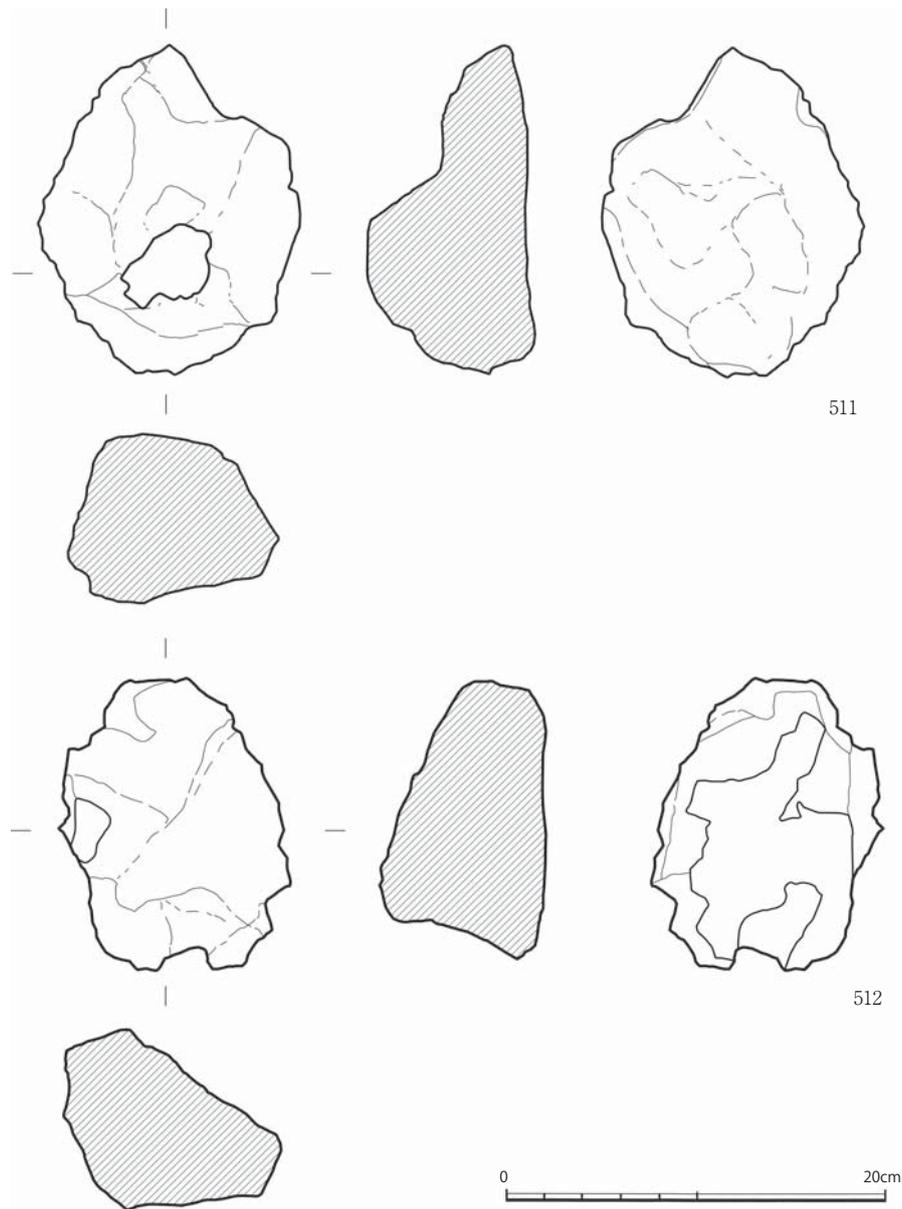


図90 第2次調査（1953年）出土壁土

512が326calBC-281calBC（33.5%、 $1\sigma$ ）と361calBC-241calBC（64.4%、 $2\sigma$ ）で、紀元前4世紀～前3世紀の年代である。2号住居址は、須玖I・II式の1号円形住居址を切った弥生後期のものと考えられている。一方、壁土の炭素年代試料は、土と炭化物が混じった状態であって土を除去することが困難であった。そのため測定された炭素の由来に一部問題があり、実際の年代より古くなっている可能性がある。したがって、これらの壁土を2号住居址に伴う壁土と考えて良いであろう。

## 7. まとめ

出土土器は、板付Ib～IIa式の土器片を除くと、これまで長崎県教育委員会や壱岐市教育委員会が行ってきた結果と同様で、弥生前期末から古墳時代前期までの土器が認められる。この他わずかに古代や中世の土器が認められるものの、原の辻遺跡の主体は弥生時代中期初頭の城ノ越式から古墳時

代前期までとすることができるであろう。また、第1次調査で設定された原の辻上層式（水野・岡崎1954）に対して、型式設定に対する疑義が述べられていた（高倉1982）。これについては、1961年の第5次調査で上層と下層の層位的な区分によって原の辻上層式を明確にすることが意図されていたが、発掘調査報告書が出版されないまま、その結果が公表されていなかった。

第1次～第5次の東亜考古学会での発掘調査時には、多重環濠は発見されておらず、その後の長崎県教育委員会による環濠の発見場所と東亜考古学会発掘地点を照合すると（図38）、環濠部分は1951年第1次調査区と1961年第5次調査第1トレンチ、ならびに1954年第4次調査第1トレンチが相当していることが判明した。この内、1951年調査のg・h・i・p・q・r区、1961年調査の第1トレンチX・W・Y区と1954年第4次調査第1トレンチが内環濠にあたる。一方、1951年第1次調査第1トレンチのb・c区と1961年第5次調査第5トレンチC区が外環濠にあたる。

内環濠は、1951年調査g・h・i・p・q・r区、1961年調査の第1トレンチX・W・Y区と1954年第4次調査第1トレンチにおいて、城ノ越式から下大隈式までの弥生中・後期の土器が出土している。一方、1951年第1次調査のb・c区と1961年第5次調査第5トレンチC区の外環濠では、須玖Ⅱ式から古墳時代前期までの土器が出土している。このことは、外環濠の方が内環濠より相対的に遅い時期に埋積していることを示している。すなわち、内環濠と外環濠では時期差が存在している可能性があるのである。

また、1961年の内環濠部分では上層と下層に分けて発掘されているが、下層は城ノ越式から須玖Ⅱ式の弥生中期に、上層は高三瀦式と下大隈式の弥生後期に分かれることが判明した。第1次調査で原の辻上層式を設定した際に、原の辻上層式は、中期の須玖式と後期の高三瀦式の間位置する土器型式であるとした（水野・岡崎1954）。一方、高倉洋彰は、弥生後期中葉から後半の高三瀦式から下大隈式への移行期段階の土器に相当するものと考えた（高倉1982）。遺物整理調査の結果、下層は城ノ越式～須玖Ⅱ式の弥生中期、上層は高三瀦式・下大隈式の弥生後期というように、層位的に時期差が明確となった。したがって、原の辻上層は弥生後期の高三瀦式と下大隈式を含むものであり、弥生後期を型式細分できる型式設定の標準層とはなり得ないことが改めて判明した。また、この層位の時期差は、環濠群が弥生中期末でいったん埋没するという長崎県原の辻遺跡調査事務所の見解とも一致する（長崎県教育委員会2005）。

## 参考文献

- 久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX、62-143頁
- 高倉洋彰1982「原ノ辻上層式土器の検討」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会、801-836頁
- 長崎県壱岐市教育委員会2006『特別史跡 原の辻遺跡—史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査—原XⅤ区・原XⅣ区・高元Ⅲ区・高元Ⅳ区 石田大川604区・石田大川605-1区』（壱岐市文化財調査報告書第9集）
- 長崎県壱岐市教育委員会2009『特別史跡 原の辻遺跡—史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査—高元Ⅷ区・原XⅤ区・原XⅦ区』（壱岐市文化財調査報告書第1集）
- 長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）
- 水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』、295-309頁

表2 原の遺跡出土土器・土製品観察表

番号	調査年	地区		土層・遺構	型式	器種	法量 (cm) ( ) 内は底元径		色調		胎土		調整		丹波
		器高	口径 (復元)				口縁部 残存率	底部 残存率	外面	内面	外面	内面	外面	内面	
1	1953	1	B	須玖Ⅱ	甕	甕	(290)	1/4		Hue25YR7/8	Hue7.5YR17/1	~3.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
2	1953	1	E	須玖Ⅱ	甕	甕	(260)	1/5		Hue2.5YR6/8	Hue2.5YR6/8	~3.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
3	1953	1	E	須玖Ⅱ	甕	甕	(444)	1/10		Hue10YR5/2	Hue10YR5/3	~2.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
4	1953	1	EF	在居	甕	甕	(320)	1/8		Hue10YR7/6	Hue5YR7/6	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ナブ	-
5	1953	1	EF	(弥生後期)	高坏	高坏	(252)	1/6		Hue10YR7/1	Hue10YR7/4	~0.5mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
6	1953	1	EF	須玖Ⅰ/Ⅱ	甕	土罐		3.2		Hue10YR7/8	Hue10YR5/3	~3.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
7	1953	1	F		土罐	土罐	最大長13cm 最大幅12cm 最大厚1.2cm			Hue7.5YR7/3		細骨	ナブ	ナブ	-
8	1953	1	F1	西新	甕	甕	21.3	2/3		Hue7.5YR8/3	Hue7.5YR8/3	~0.5mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
9	1953	1	F1	西新	甕	甕	(238)	1/2		Hue7.5YR8/4	Hue7.5YR8/6	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
10	1953	1	E	(弥生中期前半)	甕	甕				Hue5YR7/8	Hue7.5YR6/4	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
11	1953	1	G	須玖Ⅰ	甕	甕	(130)	1/5		Hue7.5YR7/4	Hue7.5YR7/4	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
12	1953	1	G	須玖Ⅰ/Ⅱ	甕	甕	(200)	1/4		Hue7.5YR8/4	Hue7.5YR6/4	~1.0mm 長石・雲母	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
13	1953	1	G	下大腰	甕	甕				Hue5YR1/4	Hue7.5YR7/4	~0.5mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
14	1953	1	G	須玖Ⅰ/Ⅱ	甕	甕	(233)	1/5		Hue2.5YR7/6	Hue7.5YR7/4	~1.0mm 長石・雲母	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
15	1953	1	J	須玖Ⅰ	甕	甕	(240)	1/4		Hue10R7/8	Hue5YR7/8	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	有
16	1953	1	J	須玖Ⅰ	甕	甕				Hue10R7/8	Hue10YR8/3	~1.0mm 雲母・長石	ナブ	ナブ	有
17	1953	1	不明	須玖Ⅰ	甕	甕				Hue10R7/8	Hue7.5YR8/6	~1.0mm 雲母・長石	ナブ	ナブ	有
18	1953	1	JK	(古墳前期)	甕	甕	(90)	1/3		Hue10YR8/3	Hue7.5YR8/4	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
19	1953	2	A	須玖Ⅰ	甕	甕	(278)	1/6		Hue7.5YR6/4	Hue7.5YR6/4	~1.0mm 砂粒・長石	ナブ	ナブ	-
20	1953	2	D	(古墳前期)	甕	甕	(160)	1/5		Hue5YR7/8	Hue5YR7/8	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
21	1953	2	D	(古墳前期)	鉢	鉢	(120)	1/3		Hue7.5YR8/6	Hue7.5YR8/6	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
22	1953	3	C	把手			最大長33cm 最大幅2.5cm 最大厚1.1cm			Hue5YR7/6		~2.0mm 白色砂粒	ナブ	ナブ	-
23	1953	2	T	(古墳前期)	甕	甕				Hue2.5YR6/8	Hue2.5YR6/8	~2.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
24	1953	2	T	(弥生)	甕	甕	(130)	1/5	7.0	Hue7.5YR7/4	Hue10YR7/3	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
25	1953	2	J	下大腰	甕	甕	(194)	1/6		Hue7.5YR7/4	Hue10YR7/1	~2.0mm 砂粒・長石	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
26	1953	2	J	下大腰	甕	甕	(295)	1/3	5.8	Hue10YR7/3	Hue10YR7/3	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
27	1953	2	Ke	須玖Ⅰ	甕	甕				Hue2.5YR7/8	Hue2.5YR2/1	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
28	1953	2	Ke	須玖Ⅰ	甕	甕	(170)	1/4		Hue7.5YR6/3	Hue5YR7/6	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
29	1953	2	M	須玖Ⅰ	甕	甕	(220)	1/3		Hue2.5YR6/8	Hue7.5YR6/4	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
30	1953	2	G'	須玖Ⅰ	甕	甕	(160)	1/5		Hue10R5/8	Hue5YR7/6	~1.0mm 砂粒・長石	ナブ	ナブ	有
31	1953	2	F'	須玖Ⅰ	甕	甕	(220)	1/5		Hue5YR5/6	Hue5YR5/6	~1.0mm 砂粒・長石	ナブ	ナブ	-
32	1953	2	F''	成人蔵	甕	甕	(210)	1/6		Hue7.5YR5/4	Hue5YR5/6	~0.5mm 雲母	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
33	1953	2	G'	須玖Ⅰ	甕	甕	(210)	1/4		Hue2.5YR7/6	Hue7.5YR7/6	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
34	1953	2	G	須玖Ⅰ	甕	甕	(380)	1/6		Hue5YR6/8	Hue5YR6/6	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
35	1953	2	EF'	須玖Ⅱ	甕	甕	(280)	1/7		Hue10YR7/2	Hue10YR7/4	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
36	1953	2	EF	須玖Ⅱ	甕	甕	(300)	1/7		Hue5YR7/6	Hue10YR7/3	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
37	1953	2	GG'	須玖Ⅱ	甕	甕	(282)	1/8		Hue2.5YR6/6	Hue7.5YR6/6	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
38	1953	2	EF	須玖Ⅱ	甕	甕	(238)	1/6		Hue5YR6/8	Hue5YR6/8	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
39	1953	2	G'	須玖Ⅱ	甕	甕	(240)	1/8		Hue7.5YR7/6	Hue10YR6/8	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
40	1953	2	G'	須玖Ⅱ	甕	甕	(280)	1/3		Hue2.5YR5/8	Hue2.5YR5/8	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
41	1953	2	EF	須玖Ⅱ	甕	甕	(318)	1/10		Hue7.5YR8/2	Hue10YR8/2	~5.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
42	1953	2	E''	須玖Ⅱ	甕	甕	(210)	1/5		Hue7.5YR8/2	Hue7.5YR8/2	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
43	1953	2	E'	須玖Ⅰ	甕	甕	(180)	1/4		Hue10YR8/3	Hue7.5YR8/6	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
44	1953	2	EF'	須玖Ⅰ	甕	甕	(290)	1/6		Hue2.5YR5/8	Hue2.5YR5/8	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
45	1953	2	E'	須玖Ⅱ	注口部	注口部	最大長18cm 最大幅5.0cm 最大高1.9cm			Hue10YR8/3		~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
46	1953	2	G	須玖Ⅱ	甕	甕				Hue2.5YR5/8	Hue2.5YR5/8	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
47	1953	2	G	須玖Ⅱ	甕	甕				Hue10YR7/2	Hue10YR7/2	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
48	1953	2	E	(古墳前期)	甕	甕	(240)	1/3	7.0	Hue7.5YR8/4	Hue10YR7/2	~2.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
49	1953	2	E	(古墳前期)	甕	甕	(170)	1/2		Hue5YR7/8	Hue5YR7/8	~2.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
50	1953	2	E	(古墳前期)	甕	甕				Hue2.5YR7/8	Hue2.5YR7/8	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
51	1953	2	E	(古墳前期)	高坏	高坏	(227)	1/3		Hue2.5YR6/8	Hue2.5YR6/8	~2.0mm 砂粒・長石	ナブ	ナブ	-
52	1953	2	OP	板付 1b-1a	甕	甕	230	1/16		Hue10YR7/3	Hue10YR7/3	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
53	1953	2	O	須玖Ⅱ	甕	甕	(270)	1/3		Hue2.5YR6/8	Hue2.5YR6/8	~5.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
54	1953	2	O	須玖Ⅱ	甕	甕	(264)	1/3		Hue2.5YR6/8	Hue2.5YR6/8	~5.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
55	1953	2	O	須玖Ⅱ	甕	甕	(260)	1/8		Hue2.5YR6/8	Hue2.5YR7/8	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
56	1953	2	OP	(古墳前期)	甕	甕	182	1/7		Hue10YR6/3	Hue10YR6/2	~1.0mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
57	1953	2	OP	(古墳前期)	甕	甕				Hue7.5YR7/6	Hue2.5YR7/8	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
58	1953	2	OP	(古墳前期)	甕	甕	(174)	1/5		Hue10YR7/3	Hue10YR7/6	~0.5mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
59	1953	2	OP	西新	甕	甕	(220)	1/8		Hue7.5YR7/4	Hue7.5YR7/4	~5.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-
60	1953	2	OP	(古墳前期)	高坏	高坏	(228)	1/3		Hue5YR7/8	Hue5YR7/8	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
61	1953	2	OP	(古墳前期)	高坏	高坏	(360)	1/6		Hue5YR7/6	Hue5YR7/6	~0.5mm 砂粒	ナブ	ナブ	-
62	1953	2	OP	(古墳前期)	高坏	高坏				Hue5YR7/8	Hue5YR7/8	~0.5mm 雲母	ナブ	ナブ	-
63	1953	2	OP	(古墳前期)	高坏	高坏	(120)	1/3		Hue7.5YR8/4	Hue7.5YR8/4	~1.0mm 砂粒	ハケム, ナブ	ハケム, ナブ	-

番号	調査年	地区	土層・遺構	型式	器種	量量 (cm) ( ) 内は復元径			色調		胎土	調整		丹塗
						器高	口径 最大径10cm	口径部 最大径1.5cm	底部 残存率	底面		外面	外面	
64	1953	2	Q		土壺					Hue5YR7/8		ハケム、ナデ		
65	1953	3	HI	須玖 I	壺	(180)	1/4			Hue5YR6/6	籾菅	ハケム、ナデ	有	
66	1953	3	HI	須玖 II	壺	(110)	1/3			Hue10YR7/4	~10mm 砂粒・雲母	ミガキ、ナデ	有	
67	1953	3	HI	須玖 II	壺	(242)	1/4			Hue8/5	~10mm 雲母	ナデ	有	
68	1953	不明		須玖 I	壺	(278)	1/4			Hue2.5YR7/6	~30mm 砂粒	ミガキ、ナデ	有	
69	1953	不明		須玖 I	壺	140	1/2			Hue7.5YR7/8	~0.1mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
70	1953	不明		須玖 II	壺	(278)	1/4			Hue5YR6/8	~20mm 砂粒	ナデ	有	
71	1953	不明		須玖 II	壺	(310)		(7.4)		Hue7.5YR7/4	~10mm 砂粒	ナデ	有	
72	1953	不明		須玖 II	壺	(318)	1/4			Hue7.5YR6/3	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
73	1953	不明		須玖 II	壺	282				Hue2.5YR5/8	~0.5mm 砂粒	ミガキ、ナデ	有	
74	1953	不明		須玖 II	壺	(240)	1/2			Hue10YR8/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
75	1953	A		高三瀬	壺	(280)	1/4			Hue10YR7/2	~30mm 砂粒・長石	ハケム、ナデ	有	
76	1953	4	B	須玖 I/II	壺			7.2		Hue7.5YR8/6	~2.0mm 長石	ハケム、ナデ	有	
77	1953	4	BC	須玖 I/II	壺					Hue7.5YR7/4	~0.5mm 砂粒	ナデ	有	
78	1953	4	BC	須玖 I	壺	(100)	1/3			Hue10R5/8	~0.5mm 砂粒	ナデ	有	
79	1953	4	BC	須玖 I	壺	(220)	1/8			Hue5YR5/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
80	1953	4	BC	須玖 I	壺	(250)	1/4			Hue5YR6/6	~20mm 砂粒	ナデ	有	
81	1953	4	BC	須玖 I	壺	(260)	1/8			Hue7.5YR7/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
82	1953	4	BC	須玖 II	壺	(290)	1/5			Hue7.5YR6/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
83	1953	4	BC	須玖 I	壺	(260)	1/8			Hue10YR5/2	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
84	1953	4	D	城ノ越	壺	(204)	1/5			Hue5YR6/8	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
85	1953	4	D	須玖 I	壺	(180)	1/5			Hue5YR6/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
86	1953	4	D	城ノ越	壺	(270)	1/4			Hue5YR7/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
87	1953	4	D	須玖 I	壺	(260)	1/8			Hue10YR7/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
88	1953	4	D	城ノ越	壺	(249)	1/6			Hue7.5YR7/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
89	1953	4	D	須玖 I	壺	(280)	1/3			Hue2.5YR6/6	~20mm 砂粒	ナデ	有	
90	1953	4	D	須玖 I	壺	(260)	1/4			Hue5YR5/4	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
91	1953	4	D	須玖 I	壺	(240)	1/5			Hue2.5YR6/8	~30mm 砂粒・長石・雲母	ナデ	有	
92	1953	4	E	須玖 I	壺	(170)	1/2			Hue5YR6/6	~50mm 砂粒	ナデ	有	
93	1953	4	E	須玖 I	壺	(278)	1/7			Hue7.5YR6/6	~50mm 砂粒	ナデ	有	
94	1953	4	E	須玖 I	壺	(260)	1/5			Hue7.5YR8/4	~20mm 砂粒	ナデ	有	
95	1953	4	E	須玖 I	壺	(270)	1/5			Hue5YR6/6	~20mm 砂粒・長石	ナデ	有	
96	1953	4	E	須玖 I	壺	4.2				Hue10YR6/1	~2.0mm 砂粒・長石	ナデ	有	
97	1953	4	F	須玖 I/II	壺			8.5		Hue5YR7/6	~2.0mm 砂粒	ミガキ、ナデ	有	
98	1953	4	FG	(中世)	皿	(90)	1/2			Hue10YR6/3	~0.5mm 砂粒	ナデ	有	
99	1953	4	G	須玖 I	壺	(280)	1/6			Hue7.5YR5/3	~10mm 砂粒	ナデ	有	
100	1953	4	S	(弥生後期)	壺					Hue2.5YR7/8	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
101	1953	4	S	須玖 II	壺	(120)	1/4			Hue10R5/8	~10mm 砂粒	ナデ	有	
102	1953	4	S	下大隈	壺	(146)	1/7			Hue10R3/8/1	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
103	1953	4	S	須玖 II	壺	(260)	1/8			Hue10YR7/4	~20mm 砂粒	ナデ	有	
104	1953	4	I	須玖 I	高坏	(220)	1/4			Hue10R5/8	~50mm 砂粒・長石	ミガキ、ナデ	有	
105	1953	4	I	須玖 I	高坏	268	1/3			Hue5YR6/8	~30mm 砂粒	ナデ	有	
106	1953	4	I	(古墳前期)	壺	8.1		1/1		Hue5YR8/3	~0.1mm 砂粒	ナデ	有	
107	1953	4	I	(古墳前期)	壺	159				Hue10YR7/2	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
108	1953	4	I	(古墳前期)	壺	(18.2)	1/8			Hue2.5YR7/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
109	1953	4	I	(古墳前期)	壺	(170)	1/2			Hue7.5YR7/3	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
110	1953	4	I	(古墳前期)	壺	(194)	1/4			Hue2.5YR8/4	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
111	1953	4	I	下大隈・再新	壺			(128)	1/4	Hue7.5YR6/8	~50mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
112	1953	4	不明	(古墳前期)	壺	(196)	1/2			Hue2.5YR6/8	~0.5mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
113	1953	4	不明	(古墳前期)	壺	201				Hue7.5YR8/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	有	
114	1953	5		浪田	壺	(720)	1/6			Hue5YR7/8	~20mm 砂粒	ナデ	有	
115	1953	5		浪田	壺	(660)	1/6			Hue7.5YR7/4	~50mm 砂粒	ナデ	有	
116	1953	-	-	三韓	壺	(100)	1/10			Hue2.5Y5/1	籾菅	ナデ	有	
117	1953	-	-	粟津系	壺			(70)	1/6	Hue2.5Y7/1	籾菅	ナデ	有	
118	1953	-	-	粟津系	壺			(60)	1/5	Hue2.5Y6/1	籾菅	ナデ	有	
119	1953	山口畑		环不系	壺	(140)	1/10			Hue2.5Y2/1	籾菅	ナデ	有	
120	1953	不明		(須玖器)	壺					Hue7.5Y5/1	籾菅	ナデ	有	
121	1953	不明		三韓	壺	(142)	1/8			Hue5Y5/1	籾菅	ナデ	有	
122	1953	2	Q	粟津系	壺	(110)	1/6			Hue2.5Y7/1	籾菅	ナデ	有	
123	1953	1	D	粟津系	壺	Hue2.5Y7/1				Hue2.5Y7/1	籾菅	ナデ	有	
124	1953	2	D	粟津系	壺	Hue3Y8/1				Hue2.5Y7/1	籾菅	ナデ	有	
125	1953	2	L	三韓	壺	Hue2.5Y6/1				Hue2.5Y7/1	籾菅	ナデ	有	
126	1953	2	OP	三韓	壺	HueN/3				HueN/4	籾菅	ナデ	有	
127	1953	2	P	三韓	壺	Hue10YR2/1				Hue10YR5/1	籾菅	ナデ	有	
128	1953	2	P	三韓	壺	Hue2.5Y2/1				Hue2.5Y5/1	籾菅	ナデ	有	

番号	調査年	地区	土層・遺構	型式	器種	器高	質量 (cm) ( ) 内は復元径			色調			胎土	調整		丹塗
							口径	口縁部 残存率	底部 残存率	外面	内面	外面		内面		
129	1953	2	O	三體					Hue25Y7/1	線菅		タタキ	ナア		-	
130	1953	2	P	三體					Hue25Y7/1	線菅		タタキ	ナア		-	
131	1953	2	R	三體					Hue5Y6/1	線菅		タタキ	ナア		-	
132	1953	2	R	三體					Hue25Y7/1	線菅		タタキ	ナア		-	
133	1953	2	Q	乘浪系					Hue25Y8/1	線菅		タタキ	ナア		-	
134	1953	3	C	半島系					Hue25Y7/2	線菅		タタキ	ナア		-	
135	1953	3	E	乘浪系					Hue25Y7/1	線菅		タタキ	ナア		-	
136	1953	4	I	三體					Hue5Y7/1	線菅		タタキ	ナア		-	
137	1953	4	S	乘浪系	碗		11.3	1/8	Hue25Y7/1	線菅		タタキ	ナア		-	
138	1953	チノト四		三體					Hue5Y6/1	線菅		タタキ	ナア		-	
139	1953	山川堂交開		三體					Hue5Y7/1	線菅		タタキ	ナア		-	
140	1953	山口畑		三體					Hue25Y6/1	線菅		タタキ	ナア		-	
141	1953	山口土織畑		三體					Hue25Y7/2	線菅		タタキ	ナア		-	
142	1953	瀬下下組東面		三體					Hue5Y8/1	線菅		タタキ	ナア		-	
143	1953	山口土織畑		三體					Hue25Y8/1	線菅		タタキ	ナア		-	
144	1953	2	L	(古墳(須恵器))					Hue75Y5/1	線菅		タタキ	ナア		-	
145	1954	1	A	下大體	壺	(318)	1/4		Hue10Y65/3	線菅		タタキ	ナア		-	
146	1954	1	A	下大體	鉢	198	1/2	7.4	Hue10Y65/8	線菅		タタキ	ナア		-	
147	1954	1	A	(白墳前期)	壺				Hue10Y8/2	線菅		タタキ	ナア		-	
148	1954	1	A	(古墳前期)	高杯	256	1/2		Hue25Y8/8	線菅		タタキ	ナア		-	
149	1954	1	A	(古墳前期)	高杯	(258)	1/5		Hue5Y7/4	線菅		タタキ	ナア		-	
150	1954	1	B	(古墳前期)	高杯	168	1/2	(135)	Hue10Y8/8	線菅		タタキ	ナア		-	
151	1954	1	B	高三瀧	壺	(255)	1/4	(72)	Hue5Y6/6	線菅		タタキ	ナア		-	
152	1954	1	B	須玖II	壺	(250)			Hue10Y7/4	線菅		タタキ	ナア		-	
153	1954	1	B	須玖II	壺	(194)	1/4		Hue5Y8/4	線菅		タタキ	ナア		-	
154	1954	1	B	下層木炭下	壺	(200)	1/5		Hue5Y8/4	線菅		タタキ	ナア		-	
155	1954	1	B	高三瀧	壺	(250)	1/8		Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
156	1954	1	B	下大體	壺	(233)	1/8		Hue75Y8/3	線菅		タタキ	ナア		-	
157	1954	1	B	黒土層	壺			7.7	Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
158	1954	1	C	(弥生)	壺	(250)	1/8	8.2	Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
159	1954	1	C	下大體	壺	26.2	1/2		Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
160	1954	1	D	須玖I	壺	(26)	1/3		Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
161	1954	1	D	須玖II	壺	(260)	1/3		Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
162	1954	1	D	(弥生後期)	高杯				Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
163	1954	1	D	黒繩土層	壺	(132)	1/3	7.0	Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
164	1954	1	D	須玖I/II	壺				Hue10Y7/4	線菅		タタキ	ナア		-	
165	1954	1	C	下大體	壺			6.2	Hue5Y8/3	線菅		タタキ	ナア		-	
166	1954	1	C	黒繩土層	壺	7.3		6.1	Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
167	1954	1	CD	須玖I/II	鉢	108		7.3	Hue75Y8/8	線菅		タタキ	ナア		-	
168	1954	1	CD	(古墳前期)	鉢			7.3	Hue25Y8/8	線菅		タタキ	ナア		-	
169	1954	1	D	黒土層	壺	(380)	1/8	4.8	Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
170	1954	1	E	須玖II	壺				Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
171	1954	1	G	西新	壺	(279)	1/5		Hue75Y8/4	線菅		タタキ	ナア		-	
172	1954	1	G	(弥生後期)	壺	(200)	1/4		Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
173	1954	1	G	須玖II	壺	(230)	1/6		Hue75Y8/4	線菅		タタキ	ナア		-	
174	1954	1	G	須玖II	壺	(196)	1/5	(170)	Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
175	1954	1	G	下大體	壺				Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
176	1954	1	G	下大體	壺				Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
177	1954	1	G	(白墳前期)	壺				Hue10Y7/7	線菅		タタキ	ナア		-	
178	1954	1	G	(弥生後期)	高杯				Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
179	1954	1	G	(古墳前期)	高杯				Hue5Y8/8	線菅		タタキ	ナア		-	
180	1954	1	G	黒繩土層	高杯				Hue10Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
181	1954	1	G	黒繩土層	高杯				Hue75Y8/4	線菅		タタキ	ナア		-	
182	1954	1	G	黒繩土層	底部	(362)	1/6	5.1	Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
183	1954	1	J	須玖II	壺	(400)			Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
184	1954	1	J	下大體	壺	178	1/2		Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
185	1954	1	K	(弥生後期)	壺	(137)	1/4		Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
186	1954	1	L	須玖II	壺	(256)	1/5		Hue5Y8/8	線菅		タタキ	ナア		-	
187	1954	1	LM	須玖I	壺	(260)	1/8		Hue25Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
188	1954	1	LM	須玖II	壺	(262)	1/8		Hue75Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
189	1954	1	LM	下層	壺	(228)	1/4		Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
190	1954	1	LM	下層	壺	(263)	1/5		Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
191	1954	1	LM	下大體	壺				Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
192	1954	2	DU	須玖I	壺				Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	
193	1954	2	CDE	須玖I	壺	(263)	1/5		Hue5Y8/6	線菅		タタキ	ナア		-	

番号	調査年	地区	土層・遺構	型式	器種	器高	質量 (cm) ( ) 内は復元径		色調		胎土	調整		丹塗
							口径 (復元)	口径部 残存率	底部 残存率	外面		内面	外面	
194	1954	2	CDE	須玖 I	甕		(34.0)	1/6		Hue7.5YR7/6	ナブ	ナブ	-	
195	1954	2	CDE	須玖 I	甕		(28.0)	1/8		Hue7.5YR6/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
196	1954	2	CDE	須玖 II	甕		(27.0)	1/4		Hue7.5YR8/2	ナブ	ナブ	-	
197	1954	2	F	須玖 I	甕		(23.0)	1/4		Hue10YR4/1	ナブ	ナブ	-	
198	1954	2	F	須玖 II	甕		(26.0)	1/8		Hue10YR5/2	ナブ	ナブ	-	
199	1954	2	G	須玖 II	甕		(24.0)	1/5		Hue5YR7/6	ナブ	ナブ	有	
200	1954	2	OPe	須玖 II	甕		(26.0)	1/5		Hue5YR6/8	ハケス、ナブ	ナブ	-	
201	1954	2	OPe	須玖 II	甕		(29.0)	1/8		Hue10YR8/4	ナブ	ナブ	有	
202	1954	2	DU	(古墳前部)	甕		(20.0)	1/8		Hue7.5YR6/4	ナブ	ナブ	-	
203	1954	2	OPe	高三浦	甕		(20.8)	1/7		Hue7.5YR7/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
204	1954	2	P	(弥生中、後期)	高坏				7.6	Hue5YR6/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
205	1954	2	G	(弥生終末、古墳前部)	高坏		(33.0)	1/3		Hue7.5YR7/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
206	1954	2	孤張	須玖 II	甕		(26.8)	1/4		Hue10YR7/4	ナブ	ナブ	-	
207	1954	2	孤張	須玖 II	甕		(30.1)	1/6		Hue7.5YR5/4	ナブ	ナブ	-	
208	1954	2	孤張	須玖 II	甕			5.6		Hue2.5YR6/6	ナブ	ナブ	-	
209	1954	2	孤張	須玖 II	高坏		(30.6)	1/6		Hue2.5YR7/4	ナブ	ナブ	-	
210	1954	2	I	下大隈	甕		(26.0)	1/8		Hue7.5YR7/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
211	1954	2	I	下大隈	甕			(9.0)	1/4	Hue2.5YR5/3	ハケス、ナブ	ナブ	-	
212	1954	2	I	下大隈	甕		(25.7)	1/4		Hue7.5YR7/2	ハケス、ナブ	ナブ	-	
213	1954	2	I	下大隈	甕		(28.0)	1/2		Hue10YR8/3	ナブ	ナブ	-	
214	1954	2	I	下大隈	甕		(28.2)	1/8		Hue5YR6/6	ナブ	ナブ	-	
215	1954	不明		須玖 I	甕					Hue5YR6/6	ナブ	ナブ	-	
216	1954	不明		須玖 I	甕			7.3		Hue7.5YR7/2	ナブ	ナブ	有	
217	1954	不明		須玖 I	甕			6.4		Hue5YR8/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
218	1954	不明		須玖 I	甕			7.3		Hue10YR8/1	ナブ	ナブ	有	
219	1954	不明		須玖 I	甕			10.7		Hue5YR6/4	ナブ	ナブ	-	
220	1954	1	AB	須玖 I	甕	10.1	19.7			Hue5YR7/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
221	1954	1	不明	須玖 I	甕		21.8			Hue5YR6/8	ナブ	ナブ	有	
222	1954	不明		高三浦	器台		8.1	1/2		Hue2.5YR6/8	ナブ	ナブ	-	
223	1954	不明		須玖 I	甕		(23.0)	1/4		Hue5YR6/6	ナブ	ナブ	-	
224	1954	不明		須玖 I	甕		(25.6)	1/4		Hue2.5YR7/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
225	1954	不明		須玖 I	甕		(24.9)	1/5		Hue5YR7/8	ナブ	ナブ	-	
226	1954	不明		須玖 I	甕		(27.0)	1/2		Hue2.5YR6/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
227	1954	不明		須玖 I	甕		(38.0)	1/5		Hue7.5YR7/8	ハケス、ナブ	ナブ	-	
228	1954	不明		西新	甕		(26.0)	1/6		Hue10YR6/3	ハケス、ナブ	ナブ	-	
229	1954	不明		下大隈	甕		(25.8)	1/6		Hue2.5YR6/3	ハケス、ナブ	ナブ	-	
230	1954	不明		下大隈	甕		22.8	1/3		Hue5YR7/8	ハケス、ナブ	ナブ	-	
231	1954	不明		(古墳前部)	甕		(18.0)	1/5		Hue2.5YR6/8	ハケス、ナブ	ナブ	-	
232	1954	不明		築込系	甕			(4.8)	2/3	Hue2.5YR7/1	ナブ	ナブ	-	
233	1954	不明		粘土層土器	甕		(14.0)	1/8		Hue10YR2/1	ナブ	ナブ	-	
234	1954	1	G	三體	甕		(13.0)	1/6		Hue7.5YR7/4	タタキ、ナブ	ナブ	-	
235	1954	1	C	黒土層	甕		(18.0)	1/4		Hue5YR8/1	ナブ	ナブ	-	
236	1951	-	a	須玖 II	甕					Hue2.5YR6/6	ナブ	ナブ	有	
237	1951	-	a2	須玖 II	甕		(27.5)	1/3		Hue2.5YR6/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
238	1951	-	b	褐色土層・黒色土層	甕		(31.4)	1/4		Hue10YR8/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
239	1951	-	b	褐色土層・黒色土層	甕		(15.7)	1/5		Hue2.5YR6/6	須賀・金雲母	ナブ	有	
240	1951	-	b	褐色土層・黒色土層	甕		(22.1)	1/4		Hue10YR8/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
241	1951	-	c1	須玖 II	高坏		(25.6)	1/4		Hue7.5YR6/4	ハケス、ナブ	ナブ	有	
242	1951	-	a1	(弥生中、後期)	高坏			(1.88)	1/4	Hue5YR7/6	ナブ	ナブ	-	
243	1951	-	b1	須玖 II	甕		(31.0)	1/3		Hue5YR7/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
244	1951	-	b	(古墳前部)	高坏		(35.2)	1/8		Hue5YR6/8	ハケス、ナブ	ナブ	-	
245	1951	-	a1	(古墳前部)	甕		(17.2)	1/6		Hue5YR8/4	ナブ	ナブ	-	
246	1951	-	b	(古墳前部)	甕		(13.2)	1/5		Hue2.5YR7/8	須賀・金雲母	ナブ	-	
247	1951	-	b	(古墳前部)	甕		(12.6)	1/6		Hue2.5YR7/2	須賀	ナブ	-	
248	1951	-	b	布留	甕		(19.1)	1/5		Hue10YR7/4	ナブ	ナブ	-	
249	1951	-	b	西新	甕		(48.6)	1/3	9.7	Hue5YR7/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	
250	1951	-	b	布留	甕		(21.0)	1/6		Hue10YR8/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
251	1951	-	f	(古墳前部)	甕		(17.2)	1/4		Hue10YR7/2	ナブ	ナブ	-	
252	1951	-	f1	(古墳前部)	高坏		12.2			Hue7.5YR7/8	ハケス、ナブ	ナブ	-	
253	1951	-	f1	(古墳前部)	高坏		(21.3)	1/2		Hue2.5YR6/8	須賀・金雲母	ナブ	-	
254	1951	-	e1	西新	甕		(23.8)	1/4		Hue7.5YR6/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
255	1951	-	f	西新	甕		(19.2)	1/3		Hue5YR6/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
256	1951	-	f1	西新	甕		(25.2)	1/3		Hue7.5YR5/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
257	1951	-	f	西新	甕		(23.5)	1/4		Hue7.5YR7/4	ハケス、ナブ	ナブ	-	
258	1951	-	f	西新	甕		(21.6)	1/8		Hue5YR6/6	ハケス、ナブ	ナブ	-	

番号	調査年	地区	土層・遺構	型式	器種	器高	量量 (cm) ( ) 内は復元径		色調		胎土		調整		丹塗
							口径 (復元)	口径部 残存率	底面 残存率	底面 残存率	外面	内面	外面	内面	
259	1951	1	f1	西新	甕				Hue25YR6/6	Hue25YR6/8	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ハケム、ナデ	-	
260	1951	1	f	金海	甕	(24.0)	1/4		Hue75YR7/4	Hue75YR7/4	~10mm 砂粒	ナデ	ナデ	-	
261	1951	1	h1	須玖Ⅱ	甕	(56.8)	1/8		Hue25YR6/6	Hue25YR6/6	観察	ミガキ、ナデ	ナデ	有	
262	1951	1	h	高三瀬	甕	33.9	1/2		Hue10R6/6	Hue5YR7/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	有	
263	1951	1	h	高三瀬	甕	10.5			Hue5YR7/6	Hue5YR7/8	~30mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
264	1951	1	h	(弥生後期)	鉢	8.7	1/3	(7.3)	Hue5YR6/8	Hue5YR7/8	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
265	1951	1	h	(弥生後期)	甕				Hue25YR6/3	Hue10YR5/2	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
266	1951	1	g	須玖Ⅰ	甕	(26.2)	1/3		Hue25YR6/6	Hue25YR6/8	~30mm 砂粒・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	-	
267	1951	1	h1	下大隈	甕	(25.2)	1/2		Hue75YR6/3	Hue75YR6/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
268	1951	1	g1	黒色土層壺棺附近	甕	(24.8)	1/6		Hue10YR3/1	Hue75YR6/4	~10mm 砂粒・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	-	
269	1951	1	gh	高三瀬	甕	(16.8)	1/3	(8.3)	Hue10R6/8	Hue75YR7/4	~20mm 砂粒・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	有	
270	1951	1	g	(弥生後期)	甕(底部)				Hue25YR6/8	Hue10YR8/3	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
271	1951	1	h1	下大隈	甕(底部)			(8.6)	Hue75YR6/3	Hue5YR6/4	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
272	1951	1	g	(弥生前期)	甕(底部)			6.5	Hue5Y6/6	Hue5YR7/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
273	1951	1	g1	(古墳前期)	高杯	(30.2)	1/6		Hue10YR6/4	Hue10YR6/3	観察・金雲母	ナデ	ナデ	-	
274	1951	1	p1	高三瀬	甕	(19.5)	1/5		Hue25Y5/4	Hue10YR8/3	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	有	
275	1951	1	p1	高三瀬	甕	30.9			Hue5YR5/3	Hue10YR7/2	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
276	1951	1	p1	下大隈	甕	(16.4)	1/2		Hue25Y6/6	Hue25Y5/6	~30mm 砂粒・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	-	
277	1951	1	p1	(弥生後期)	甕				Hue5YR6/6	Hue5YR6/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
278	1951	1	p1	下大隈	甕	(16.4)	1/3	8.7	Hue5YR6/6	Hue10YR7/3	~10mm 砂粒・金雲母	ナデ	ナデ	-	
279	1951	1	p1	下大隈	甕	(17.2)	1/6		Hue75YR6/4	Hue5YR7/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
280	1951	1	p1	(弥生後期)	甕			8.5	Hue5YR6/6	Hue75YR4/1	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	有	
281	1951	1	p1	下大隈	甕	(10.9)	1/2		Hue5YR7/4	Hue5YR6/6	観察・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	有	
282	1951	1	p1	高三瀬	甕			6.8	Hue25YR6/6	Hue75YR7/3	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
283	1951	1	p1	(弥生後期)	甕(底部)				Hue5YR6/6	Hue5YR7/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
284	1951	1	p1	須玖Ⅰ	甕	(22.0)	1/5		Hue75YR6/4	Hue75YR7/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
285	1951	1	p1	下大隈	甕	(30.6)	1/2		Hue75YR6/6	Hue75YR6/2	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
286	1951	1	p1	下大隈	甕	29.9	4/5	6.7	Hue5YR6/6	Hue5YR7/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
287	1951	1	p1	下大隈	甕	(28.6)	1/6		Hue5YR6/6	Hue5YR7/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
288	1951	1	p1	下大隈	甕	(27.3)	1/5		Hue10YR5/3	Hue10YR7/4	~10mm 砂粒・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	-	
289	1951	1	p1	下大隈	甕	(20.8)	1/2		Hue5YR6/6	Hue5YR6/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
290	1951	1	p1	下大隈	甕	(25.5)	1/4		Hue25YR6/6	Hue5YR6/6	~10mm 砂粒・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	有	
291	1951	1	p1	下大隈	甕	(24.4)	1/2		Hue75YR5/2	Hue25YR6/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
292	1951	1	p1	高三瀬	甕	(21.1)	1/4		Hue25YR6/8	Hue25YR5/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
293	1951	1	p1	高三瀬	甕	23.4	1/5		Hue10YR8/1	Hue10YR4/1	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
294	1951	1	p1	西新	甕	(26.1)	1/4		Hue75YR6/4	Hue10YR8/3	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
295	1951	1	p1	下大隈	甕	(24.0)	1/3		Hue5YR7/6	Hue25YR7/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
296	1951	1	p1	須玖Ⅰ	甕	(23.4)	1/2		Hue10YR7/3	Hue10YR7/3	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
297	1951	1	p1	(弥生後期)	甕(底部)			7.2	Hue75YR6/4	Hue5YR6/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
298	1951	1	p1	高三瀬	鉢	16.6		7.0	Hue10YR7/3	Hue25YR6/8	~30mm 砂粒	ナデ	ナデ	-	
299	1951	1	p1	高杯	高杯	(46.0)	1/2		Hue25YR4/6	Hue25YR6/8	~30mm 砂粒	ナデ	ナデ	-	
300	1951	1	p1	須玖Ⅰ/Ⅱ	高杯	18.2	13.5	15.6	Hue25YR4/3	Hue25YR6/4	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
301	1951	1	p1	高三瀬	高杯	(13.5)	1/4	15.5	Hue5YR6/8	Hue25YR6/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
302	1951	1	p1	高三瀬	高杯	13.0	2/3		Hue25YR6/8	Hue25YR6/6	~20mm 砂粒・金雲母	ハケム、ナデ	ナデ	-	
303	1951	1	p1	須玖Ⅱ	甕	(25.0)	1/3		Hue5YR6/8	Hue5YR7/2	~30mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
304	1951	1	p1	下大隈	甕	(26.0)	1/3		Hue75Y6/4	Hue75Y6/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
305	1951	1	p1	(弥生後期)	甕			4.8	Hue25Y3/8	Hue25Y3/8	~20mm 砂粒	ナデ	ナデ	-	
306	1951	1	p1	下大隈	甕	(42.0)	1/8		Hue75YR7/4	Hue5YR7/4	~30mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
307	1951	1	p1	(弥生後期)	甕				Hue75Y6/4	Hue75Y7/4	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
308	1951	1	p1	須玖Ⅰ/Ⅱ	高杯	(12.0)		13.7	Hue25YR5/6	Hue25YR6/6	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
309	1951	1	p1	高三瀬	高杯				Hue5YR7/6	Hue5YR7/6	~30mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
310	1951	1	p1	高三瀬	高杯	11.4			Hue75YR7/4	Hue25YR6/8	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
311	1951	1	i	須玖Ⅰ	甕	27.3			Hue75YR7/4	Hue75YR6/8	~10mm 砂粒	ナデ	ナデ	-	
312	1951	1	i	須玖Ⅰ	甕	(25.0)	1/3		Hue5YR7/6	Hue5YR7/6	~20mm 砂粒	ミガキ、ナデ	ナデ	-	
313	1951	1	m	高三瀬	甕	(10.3)	5/6		Hue25YR6/6	Hue75YR6/4	~20mm 砂粒	ミガキ、ナデ	ナデ	有	
314	1951	1	m	須玖Ⅰ	甕	37.0		8.3	Hue5YR7/4	Hue5YR6/4	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
315	1951	-	不明	高三瀬	甕	15.8			Hue5YR7/6	Hue10YR8/3	~30mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
316	1951	-	不明	下大隈	甕	(20.2)	1/2		Hue5YR7/8	Hue5YR7/8	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
317	1951	-	不明	高三瀬	甕	(23.8)	2/3		Hue5YR6/6	Hue5YR6/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
318	1951	-	不明	下大隈	甕	12.6		7.0	Hue75YR7/6	Hue5YR6/8	観察・金雲母	ミガキ、ナデ	ナデ	有	
319	1951	-	不明	高三瀬	甕	11.0	2/3	6.2	Hue10YR7/2	Hue10YR8/4	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	有	
320	1951	-	不明	(弥生後期)	甕	(44.8)			Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
321	1951	-	不明	(古墳前期)	甕				Hue25YR6/4	Hue5YR6/4	~10mm 砂粒	ナデ	ナデ	-	
322	1951	-	不明	須玖Ⅱ	甕	22.2			Hue5YR7/6	Hue5YR7/6	~20mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	
323	1951	-	不明	下大隈	甕	(24.8)			Hue75YR7/4	Hue10YR7/2	~10mm 砂粒	ハケム、ナデ	ナデ	-	

番号	調査年	地区		土層・遺構	型式	器種	器高	質量 (cm) ( ) 内は復元径		底部 残存率	色調		胎土	調整		丹敷
		口徑 (復元)	口径部 残存率					外面	内面		外面	内面				
324	1951	-	不明	西新	須玖 I/II	壺	4.0	Hue10YR7/3 (21.8)	1/3	3.2	Hue10YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	丹敷	
325	1951	-	不明	高三瀧	須玖 I/II	壺	17.4	Hue7.5YR7/2 (15.8)	1/4	14.0	Hue7.5YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	有	有	
326	1951	-	不明	高三瀧	須玖 II	高坏	21.2	Hue2.5YR6/6 (26.1)	1/2	14.9	Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
327	1951	-	不明	高三瀧	須玖 II	高坏	21.2	Hue2.5YR6/6 (26.1)	1/2	14.9	Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
328	1951	-	f	桑迫系	須玖 I	鉢		Hue2.5Y5/4			Hue2.5Y5/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
329	1951	-	a	桑迫系	須玖 I	鉢		Hue10YR7/1			Hue10YR7/1	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
330	1951	-	c	桑迫系	須玖 I	壺		Hue5YR7/6			Hue5YR7/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
331	1951	-	px	桑迫系	須玖 I	壺		Hue5YR7/6			Hue5YR7/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
332	1951	-	a	桑迫系	須玖 I	壺		Hue10YR8/3			Hue10YR8/3	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
333	1951	-	不明	桑迫系	須玖 I	壺		Hue2.5Y5/1			Hue2.5Y5/1	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
334	1951	-	b	桑迫系	須玖 I	壺		HueN5/			HueN5/	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
335	1951	-	不明	三韓	須玖 I	壺		Hue10YR7/2			Hue10YR7/2	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
336	1951	-	a	須玖 I	須玖 I	壺		Hue2.5Y5/2			Hue2.5Y5/2	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
337	1961	1	E	須玖 I	須玖 I	壺		Hue7.5YR5/2	1/3		Hue7.5YR5/2	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
338	1961	1	FG	須玖 I	須玖 I	壺		Hue7.5YR7/6	1/3		Hue7.5YR7/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
339	1961	1	F	須玖 I	須玖 I	壺		Hue5YR6/6	1/4	5.6	Hue10R6/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
340	1961	1	F	須玖 I	須玖 I	壺		Hue10R6/8	1/4	5.6	Hue10R6/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
341	1961	1	G	須玖 II	須玖 II	壺		Hue5YR2/1	1/3		Hue5YR2/1	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
342	1961	1	G	須玖 I	須玖 I	壺		Hue7.5YR7/4	1/5		Hue7.5YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
343	1961	1	G	須玖 I	須玖 I	壺		Hue10R6/8	1/5		Hue10R6/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
344	1961	1	M	下層	須玖 I	壺		Hue5YR7/8	1/4		Hue5YR7/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
345	1961	1	F	須玖 I/II	須玖 I	鉢	8.7	Hue2.5YR6/6		7.7	Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
346	1961	1	M	須玖 I	須玖 I	壺	33.1	Hue7.5YR6/4		7.0	Hue7.5YR6/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
347	1961	1	K	須玖 I (古墳前部)	高坏	壺	20.9	Hue7.5YR7/4	1/5		Hue7.5YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
348	1961	1	N	高三瀧	須玖 I	壺	23.0	Hue5YR7/8	1/3		Hue5YR7/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
349	1961	1	N	下大隈	須玖 I	壺	23.0	Hue7.5YR8/3	1/3		Hue7.5YR8/3	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
350	1961	1	N	西新	須玖 I	壺		Hue7.5YR7/4		9.1	Hue7.5YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
351	1961	1	Q	城ノ越	須玖 I	壺	37.6	Hue7.5YR7/4		7.2	Hue7.5YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
352	1961	1	Q	城ノ越	須玖 I	壺		Hue5YR7/6			Hue5YR7/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
353	1961	1	R	西新	須玖 I	壺		Hue7.5YR7/8	1/4		Hue7.5YR7/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
354	1961	1	S	下層	須玖 I	壺		Hue7.5YR7/8			Hue7.5YR7/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
355	1961	1	S	下層	須玖 I	壺		Hue7.5YR6/4	1/3		Hue7.5YR6/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
356	1961	1	S	下層	須玖 I	壺		Hue5YR5/3	1/4		Hue5YR5/3	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
357	1961	1	S	下層	須玖 I	壺		Hue5YR6/4	1/4		Hue5YR6/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
358	1961	1	S	下層	須玖 I	壺		Hue7.5YR5/3	2/3		Hue7.5YR5/3	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
359	1961	1	S	下層	須玖 I	壺		Hue7.5YR7/4	1/2		Hue7.5YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
360	1961	1	S	下層	須玖 I	壺		Hue10YR7/2	1/4		Hue10YR7/2	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
361	1961	1	S	下層	須玖 I	壺	38.9	Hue5YR6/6		7.3	Hue5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
362	1961	1	S	下層	須玖 I/II	器台	12.2	Hue5YR6/8			Hue7.5YR6/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
363	1961	1	S	高三瀧	須玖 I	壺	34.8	Hue5YR6/8	1/8		Hue5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
364	1961	1	S	下大隈	須玖 I	壺	27.0	Hue7.5YR3/1	1/4		Hue7.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
365	1961	1	S	下大隈	須玖 I	壺	20.0	Hue7.5YR7/4	1/3		Hue7.5YR7/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
366	1961	1	S	上層	須玖 I	壺		Hue7.5YR7/8		6.8	Hue7.5YR7/2	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
367	1961	1	S	上層	須玖 I	壺		Hue5YR6/6		10.5	Hue5YR6/1	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
368	1961	1	S	上層	須玖 II	高坏		Hue10YR5/2	1/5		Hue2.5YR5/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
369	1961	1	S	高三瀧	須玖 II	壺	11.5	Hue2.5YR5/2		10.5	Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
370	1961	1	S	高三瀧	須玖 II	壺	10.5	Hue5YR7/6		13.2	Hue5YR7/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
371	1961	1	S	高三瀧	須玖 II	壺	12.8	Hue2.5YR6/6			Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
372	1961	1	S	上層	須玖 II	壺	18.7	Hue5YR6/6		17.0	Hue5YR6/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
373	1961	1	S	上層	須玖 II	壺	48.0	Hue7.5YR3/1	1/5		Hue7.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
374	1961	1	S	上層	須玖 II	壺	13.5	Hue2.5YR5/4	1/4		Hue10YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
375	1961	1	S	下大隈	須玖 I	壺		Hue2.5YR6/8		7.8	Hue2.5YR6/8	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
376	1961	1	ST	須玖 I	須玖 I	壺	32.7	Hue2.5YR6/6		6.4	Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
377	1961	1	S	高三瀧	須玖 I	壺	28.2	Hue10YR7/4	1/8		Hue5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
378	1961	1	TU	高三瀧	須玖 I	壺	25.9	Hue5YR7/6	1/6		Hue5YR7/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
379	1961	1	WX	下層	須玖 II	壺	39.6	Hue5YR7/6		9.3	Hue5YR7/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
380	1961	1	W	高三瀧	須玖 II	壺	26.2	Hue2.5YR6/6	1/5		Hue10YR6/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
381	1961	1	W	下層	須玖 II	壺	14.0	Hue5YR6/6	1/4		Hue5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
382	1961	1	WXZ	須玖 II	須玖 II	壺	12.2	Hue5YR6/6	1/3		Hue10YR6/3	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
383	1961	1	W	高三瀧	須玖 II	壺	16.0	Hue7.5YR7/6	1/4		Hue10YR6/3	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
384	1961	1	W	高三瀧	須玖 II	壺	12.3	Hue2.5YR6/6	1/4	7.3	Hue5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
385	1961	1	WX	下大隈	須玖 II	壺	19.4	Hue2.5YR6/6	1/2		Hue10YR6/4	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
386	1961	1	W	上層	須玖 II	壺		Hue2.5YR5/8			Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
387	1961	1	W	上層	須玖 II	壺		Hue7.5YR8/3		6.0	Hue7.5YR8/3	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	
388	1961	1	WX	下大隈	須玖 II	壺		Hue2.5YR6/6		6.2	Hue2.5YR6/6	ハケム, ナア	ハケム, ナア	-	-	

番号	調査年	地区		土層・遺構	型式	器種	器高	口径 (cm)		底面残存率 (%)	底面残存率 (%)	色調		胎土		調整		丹塗
		口徑 (復元)	口径 (実)					外面	内面			外面	内面	外面	内面			
389	1961	1	W	上層	下大眼	壺						Hue5YR6/6			ナブ			有
390	1961	1	WX	上層	高三瀬	壺		(22.4)	1/5			Hue7.5YR7/4			ハケム、ナブ			
391	1961	1	WX	下層	須玖Ⅱ	壺		(20.8)	1/4			Hue2.5YR6/6			ナブ			有
392	1961	1	W	上層	下大眼	壺	30.3	24.8	7.7			Hue10YR6/6			ナブ			
393	1961	1	W	上層	下大眼	壺	36.1	28.2	8.2			Hue5YR5/8			ナブ			
394	1961	1	WX	上層	高三瀬	壺		(28.5)	1/8			Hue2.5YR6/8			ナブ			
395	1961	1	W	上層	高三瀬	壺		(25.3)	1/8			Hue10YR7/4			ハケム、ナブ			
396	1961	1	WX	上層	下大眼	壺		(28.8)	1/4			Hue10YR6/6			ハケム、ナブ			
397	1961	1	WX	上層	下大眼	壺		(26.2)	1/5			Hue2.5YR6/8			ハケム、ナブ			
398	1961	1	W	上層	下大眼	壺		(24.0)	1/4			Hue7.5YR7/6			ハケム、ナブ			
399	1961	1	W	上層	下大眼	壺		24.4				Hue5YR6/6			ハケム、ナブ			
400	1961	1	WX	上層	下大眼	壺		(25.0)	1/3			Hue5YR6/6			ナブ			
401	1961	1	W	上層	高三瀬	壺	23.3	20.5	7.7			Hue10YR7/4			ハケム、ナブ			
402	1961	1	W	上層	下大眼	壺		(21.2)	1/6			Hue5YR6/8			ハケム、ナブ			
403	1961	1	W	上層	高三瀬	高坏	25.1	27.5	19.5			Hue10YR5/8			ハケム、ナブ			有
404	1961	1	WZ	上層	須玖Ⅱ	高坏		(28.4)	1/5			Hue2.5YR7/6			ナブ			
405	1961	1	W	上層	高三瀬	高坏		(30.0)	1/5			Hue2.5YR6/8			ハケム、ナブ			
406	1961	1	WX	上層	(弥生後期)	高坏		(23.6)	1/5			Hue7.5YR8/6			ハケム、ナブ			
407	1961	1	W	上層	(弥生後期)	高坏		(17.4)	1/2			Hue7.5YR4/1			ミガキ、ハケム、ナブ			
408	1961	1	WX	上層	(弥生後期)	高坏		(9.9)				Hue7.5YR7/8			ミガキ、ナブ			有
409	1961	1	WX	上層	須玖Ⅱ	器台	16.5	11.2	12.5			Hue2.5YR6/6			ハケム、ナブ			
410	1961	1	WX	上層	須玖Ⅱ	器台		13.6				Hue7.5YR7/6			ハケム、ナブ			
411	1961	1	W	上層	高三瀬	器台	16.1	11.2	12.8			Hue5YR6/6			ハケム、ナブ			
412	1961	1	WX	上層	高三瀬	器台		8.7				Hue5YR6/6			ハケム、ナブ			
413	1961	1	WX	上層	高三瀬	器台	10.4		12.0			Hue2.5YR6/6			ハケム、ナブ			
414	1961	1	Y	下層	須玖Ⅰ	壺		(24.6)	1/3			Hue5YR5/8			ミガキ、ナブ			
415	1961	1	Y	最下層	須玖Ⅰ	壺		(22.8)	1/3			Hue7.5YR6/4			ナブ			
416	1961	1	Y	下層	須玖Ⅰ	壺		(25.2)	1/2			Hue5YR7/8			ナブ			
417	1961	1	Y	下層	須玖Ⅱ	壺		(30.0)	1/3			Hue5YR5/3			ナブ			
418	1961	4	D	下層	須玖Ⅰ	壺		(26.0)	1/4			Hue5YR7/8			ナブ			
419	1961	4	D	表	高三瀬	壺		(19.2)	1/3			Hue7.5YR7/4			ナブ			
420	1961	4	D	上層	下大眼	壺	(30.0)					Hue2.5YR6/8			ナブ			
421	1961	4	D	上層	下大眼	壺	(23.4)	1/6				Hue2.5YR6/8			ナブ			
422	1961	4	D	上層	(弥生後期)	壺		7.7	5.6			Hue7.5YR7/3			ナブ			
423	1961	4	D	上層	高三瀬	器台	10.5	7.7	10.5			Hue5YR6/6			ハケム、ナブ			
424	1961	4	D	上層	高三瀬	器台	15.2	9.2	11.0			Hue5YR4/4			ハケム、ナブ			
425	1961	4	D	上層	下大眼	高坏		(16.4)	1/2			Hue7.5YR7/3			ハケム、ナブ			
426	1961	4	D	上層	下大眼	高坏		(15.3)	1/2			Hue2.5YR6/8			ハケム、ナブ			
427	1961	1	不明	上層	須玖Ⅱ	壺	(20.4)	1/2	4.8			Hue5YR7/6			ナブ			有
428	1961	1	不明	上層	須玖Ⅱ	壺		(19.4)	1/2			Hue2.5YR6/6			ナブ			
429	1961	1	不明	上層	高三瀬	壺		(27.2)	1/8			Hue10YR7/2			ナブ			
430	1961	2	A	上層	須玖Ⅰ	壺	32.6	25.3	6.5			Hue5YR5/6			ハケム、ナブ			
431	1961	5	C	上層	須玖Ⅱ	壺		(36.0)				Hue5YR5/4			ハケム、ナブ			
432	1961	5	C	上層	須玖Ⅰ	壺	(26.2)	1/2				Hue2.5YR5/8			ミガキ、ナブ			有
433	1961	5	I	上層	高三瀬	壺	28.8	11.2	6.8			Hue5YR7/6			ハケム、ナブ			
434	1961	5	C	上層	須玖Ⅰ	壺	(23.6)	1/4				Hue5YR7/8			ハケム、ナブ			
435	1961	5	C	上層	須玖Ⅰ	壺	(19.3)	1/2				Hue2.5YR5/6			ハケム、ナブ			
436	1961	5	C	上層	須玖Ⅰ	壺	22.3	2/3				Hue7.5YR7/6			ハケム、ナブ			
437	1961	5	Q	上層	須玖Ⅱ	器台	(13.8)	1/3				Hue2.5YR7/8			ハケム、ナブ			
438	1961	5	F	黒土層	(古墳前期)	高坏	(14.6)	1/2				Hue7.5YR7/8			ハケム、ナブ			
439	1961	5	Ef	黒土層	須玖Ⅰ	壺	(26.1)	1/4				Hue5YR7/8			ハケム、ナブ			
440	1961	5	E	黒土層	須玖Ⅱ	壺	(24.8)	1/4				Hue7.5YR6/4			ハケム、ナブ			
441	1961	5	F	黒土層	須玖Ⅱ	壺	(31.6)	1/4				Hue2.5YR7/8			ナブ			
442	1961	5	H	下層	(弥生後期)	器台		(12.5)	1/3			Hue5YR7/6			ナブ			
443	1961	5	G	下層	(古墳前期)	壺	7.6	(8.9)	1/2			Hue2.5YR7/8			ナブ			
444	1961	不明	不明		胴部片	胴部片						Hue5YR7/8			ナブ			
445	1961	不明	不明		(弥生前期)	胴部片						Hue7.5YR7/6			ハケム			
446	1961	不明	不明		横穴	壺	(17.2)	2/3				Hue2.5YR5/6			ミガキ、ナブ			
447	1961	不明	不明		須玖Ⅰ	壺	(23.8)	1/4				Hue7.5YR6/4			ミガキ、ナブ			
448	1961	不明	不明		須玖Ⅰ	壺		(22.1)				Hue2.5YR5/6			ナブ			
449	1961	不明	不明		須玖Ⅱ	壺			7.9			Hue7.5YR7/4			ナブ			
450	1961	不明	不明		須玖Ⅱ	壺	(26.0)	1/3				Hue2.5YR5/8			ミガキ、ハケム、ナブ			
451	1961	不明	不明		須玖Ⅱ	壺	(27.0)	1/6				Hue7.5YR8/8			ナブ			
452	1961	不明	不明		須玖Ⅰ	壺	(20.0)	1/4				Hue5YR7/4			ナブ			
453	1961	不明	不明		(弥生後期)	壺	14.5	12.4	5.5			Hue7.5YR5/4			ミガキ、ナブ			
												Hue2.5Y7/2			ハケム、ナブ			有

番号	調査年	地区		土層・遺構	型式	器種	質量 (cm) ( ) 内は復元径				色調		胎土		調整		丹塗
		口徑 (復元)	口径部 残存率 (復元)				底面 残存率	器高	口徑 (復元)	口径部 残存率 (復元)	底面 残存率	外面	内面	外面	内面	外面	
454	1961	不明			須玖Ⅱ	壺	23	(140)	1/3		Hue25YR5/8	Hue25YR5/9	繻菅・金雲母	ミガキ・ナア	ナア	有	
455	1961	不明			須玖Ⅱ	壺	31.4	24.5	7.7		Hue25YR7/6	Hue25YR7/7	繻菅・金雲母	ハケス・ナア	ナア	有	
456	1961	不明			須玖Ⅱ	壺	(28.4)	1/2			Hue10YR8/2	Hue10YR8/2	繻菅・金雲母	ハケス・ナア	ナア	有	
457	1961	不明			高三瀧	壺	(20.0)	1/8			Hue25YR6/6	Hue25YR6/2	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
458	1961	不明			須玖Ⅱ	高坏	24.5				Hue5YR7/4	Hue5YR7/4	繻菅	ミガキ・ナア	ナア	有	
459	1961	不明			須玖Ⅱ	高坏	(33.9)	1/4			Hue25YR6/8	Hue25YR6/8	繻菅	ミガキ・ナア	ナア	有	
460	1961	不明			(弥生中・後期)	鉢	100	138	5.5		Hue5YR6/4	Hue5YR6/4	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
461	1961	不明			(弥生中・後期)	鉢	138	210	5.5		Hue5YR7/8	Hue5YR7/8	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
462	1961	不明			(弥生中・後期)	鉢	88	(16.8)	1/3	5.8	Hue25YR4/6	Hue25YR5/6	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
463	1961	不明			(弥生)	紡錘車					Hue10R8/8	Hue7YR7/4	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
464	1961	5	F		(弥生)	紡錘車					Hue7YR7/4	Hue7YR7/4	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
465	1961	不明			(弥生)	紡錘車					Hue25YR5/3	Hue25YR7/4	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
466	1961	不明			(弥生)	土甕					Hue5YR7/6	Hue5YR7/6	繻菅	ナア	ナア	有	
467	1961	不明			(弥生)	土甕					Hue7YR6/4	Hue7YR6/4	繻菅	ナア	ナア	有	
468	1961	不明			(弥生)	投渾					Hue7YR6/4	Hue7YR6/4	繻菅	ナア	ナア	有	
469	1961	不明			(弥生)	投渾					Hue25YR8/2	Hue25YR8/2	繻菅	ナア	ナア	有	
470	1961	1	S		粘土管土器	壺	14.5				Hue7YR7/4	Hue7YR7/4	繻菅	ナア	ナア	有	
471	1961	1	O		粘土管土器	壺					Hue7YR8/4	Hue7YR8/4	繻菅	ナア	ナア	有	
472	1961	5	A/D		無文土器	把手					Hue7YR7/3	Hue7YR8/4	繻菅	ナア	ナア	有	
473	1961	1	Y		無文土器	把手					Hue25YR7/6	Hue10YR8/2	繻菅	ナア	ナア	有	
474	1961	1	Y		無文土器	壺	(10.8)	1/8			Hue25YR7/1	Hue25YR7/2	繻菅	ナア	ナア	有	
475	1961	不明			薬浪系	壺					HueN6/	HueN6/	繻菅	ナア	ナア	有	
476	1961	1	P		薬浪系	壺					Hue25Y5/1	Hue25Y5/1	繻菅	ナア	ナア	有	
477	1961	1	R	上層	薬浪系	壺					Hue25Y6/1	Hue25Y6/1	繻菅	ナア	ナア	有	
478	1961	1	P		薬浪系	壺					Hue5Y6/1	Hue5Y6/1	繻菅	ナア	ナア	有	
479	1961	1	C		薬浪系	壺					Hue25Y8/1	Hue25Y8/1	繻菅	タタキ	タタキ	有	
480	1961	山口湖			薬浪系	壺					Hue10YR6/2	Hue10YR6/2	繻菅	タタキ	タタキ	有	
481	1961	不明			薬浪系	壺					Hue5Y5/1	Hue25Y6/2	繻菅	ナア	ナア	有	
482	1961	5	F		三韓	三韓					HueN3/	HueN3/	繻菅	タタキ	タタキ	有	
483	1961	不明			三韓	三韓					Hue25Y5/1	Hue25Y5/1	繻菅	タタキ	タタキ	有	
484	1961	5	H	黒土層	三韓	三韓					HueN5/	HueN5/	繻菅	タタキ	タタキ	有	
485	1961	1	WX	上層	三韓	三韓					Hue7YR6/3	Hue7YR6/3	繻菅	タタキ	タタキ	有	
486	1961	不明			三韓	三韓					Hue10Y5/1	Hue10Y5/1	繻菅	タタキ	タタキ	有	
487	1961	1	L		三韓	三韓					Hue25Y8/1	Hue25Y8/1	繻菅	タタキ	タタキ	有	
488	1961	不明			三韓	三韓					Hue25Y7/1	Hue25Y7/1	繻菅	タタキ	タタキ	有	
489	1961	1	B		三韓	三韓					Hue25Y7/1	Hue25Y7/1	繻菅	タタキ	タタキ	有	
490	1961	1	O	上層	三韓	三韓					Hue5YR6/1	Hue5YR6/1	繻菅	タタキ	タタキ	有	
491	1961	1	M		三韓	三韓					HueN4/	HueN4/	繻菅	ナア	ナア	有	
492	1961	1	FG		三韓	三韓					HueN2/	HueN2/	繻菅	ナア	ナア	有	
493	1961	4	D		古墳/三國	古墳/三國					Hue25Y7/1	Hue25Y7/2	繻菅	タタキ	タタキ	有	
494	不明	-			須玖Ⅰ	壺	(24.5)	1/4			Hue10R6/8	Hue10R6/8	繻菅	ナア	ナア	有	
495	不明	-			須玖Ⅰ	壺	(28.8)	1/6			Hue7YR6/6	Hue7YR6/6	繻菅	ナア	ナア	有	
496	不明	-			須玖Ⅱ	壺	13.5	11.9	5.0		Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	繻菅	ナア	ナア	有	
497	不明	-			高三瀧	壺	25.8	15.3	7.6		Hue10R5/8	Hue10R5/8	繻菅	ミガキ・ナア	ナア	有	
498	不明	-			高三瀧	壺	28.3	12.9	7.4		Hue25Y7/6	Hue25Y7/6	繻菅	ミガキ・ナア	ナア	有	
499	不明	-			下大瀧	壺	26.2	13.1	6.5		Hue25Y5/8	Hue25Y5/8	繻菅	ミガキ・ナア	ナア	有	
500	不明	-			須玖Ⅰ	壺			9.0		Hue5Y8/2	Hue5Y8/2	繻菅	ナア	ナア	有	
501	不明	-			須玖Ⅰ	壺			5.5		Hue7YR7/4	Hue7YR8/4	繻菅	ナア	ナア	有	
502	不明	-			須玖Ⅱ	壺	(28.3)	1/4			Hue10R6/8	Hue10YR8/1	繻菅	ミガキ・ナア	ナア	有	
503	不明	-			須玖Ⅰ/Ⅱ	器台	13.2				Hue5YR7/6	Hue5YR7/6	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
504	不明	-			須玖Ⅱ	高坏	37.6	1/2	2.30		Hue5YR6/6	Hue5YR6/6	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
505	不明	-			須玖Ⅰ/Ⅱ	高坏	(17.6)	1/6			Hue7YR8/3	Hue7YR8/3	繻菅	ナア	ナア	有	
506	不明	-			下大瀧	高坏	(13.5)	1/3			Hue5YR6/8	Hue5YR6/8	繻菅	ナア	ナア	有	
507	不明	-			下大瀧	ジョッキ形杯	13.2				Hue10YR8/4	Hue10YR8/4	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
508	不明	-			下大瀧	器台	20.5	14.2	16.7		Hue25Y5/6	Hue25Y5/6	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
509	不明	-			高三瀧	器台	12.4	9.8	10.9		Hue7YR6/4	Hue7YR6/4	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
510	不明	-			下大瀧	器台	12.2	12.3	12.4		Hue5YR5/4	Hue5YR5/4	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
511	1963	2	J		(弥生後期)	壁土					Hue10YR4/2	Hue10YR4/2	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	
512	1963	2	J		(弥生後期)	壁土					Hue10YR4/2	Hue10YR4/2	繻菅	ハケス・ナア	ナア	有	

# 第5章 原の辻遺跡出土石器

松尾樹志郎

## 1. はじめに

本章では、1951、53、54、61年調査出土石器のうち薄片や石核を除いた184点を報告する。これらの石器には表採品や出土位置が不明な資料が多く含まれ、また出土地点が分かっている資料についても遺構内からの出土かどうかの判断は難しい場合が多い。したがって、それぞれの資料に対して正確な時期を与えることは困難だが、全体的な傾向は原の辻遺跡の既往の調査成果と共通する。すなわち、弥生時代前期から中期に一般的に見られる堆積岩系の大陸系磨製石器類と、後期以降に一般的に見られる堆積岩系の砥石、玄武岩を主な素材とする敲石が中心を占める石器組成を示している。特に砥石・敲石が多量に出土している点に関しては同じ壱岐島に所在するカラカミ遺跡の様相とも共通する。

観察表には、各資料の調査年度および石材・法量と、分かるものについては出土地点を記載した。なお、砥石に関しては粒度の指標として、相当する JIS 規格の番号を備考欄に記載しているが、顕微鏡による観察等の詳細な検討は行っておらず、あくまでサンドペーパーとの対比による目安である。

## 2. 1953年調査出土石器

513～590は1953年の調査で出土した石器である。

513～516は黒曜石製の打製石鏃である。513は基部を両側から剥離して作出した凹基式である。514は凹基式で脚部の片側が欠損している。515も片側の脚部を破損した凹基式で、剥離調整は全体的に粗い。516は基部を作出し全体の形状が成形されているが、細かい剥離調整は施されておらず未成品と見られる。517～519は安山岩製の打製石鏃である。517は脚部の片側が欠損している。518は側縁に若干の剥離調整が見られるのみで、素材剥片から剥離された後の加工があまり施されていない。519は側縁に刃部が形成されていない点や全体的な形態から見て未成品と考えられる。520は黒曜石製で、加工が進んでいないため器種の判別が難しいが、形態から見て石錐とした。

521、522、523は石錘である。521は泥岩製で、長軸方向の溝を持ち、端部にはくびれを形成している。溝の中にわずかに繊維質が残存している。522は泥岩製で、短軸方向の溝が体部に3か所、さらに上端と下端に抉りが施されているが長軸方向の溝は見られない。523は砂岩製の破損品で、上下2か所の穿孔とそれらをつなぐ長軸方向の溝が確認されることから、有孔の大型石錘と見られる。これら3点はいずれも九州型石錘で、下條氏の分類（下條1984）で言えば521は小形A型、522は小型B型に相当し、523は小破片であるものの大形A型にあたと推測される。

524は水晶である。六角柱状の原石で人為的な加工の痕跡は確認されない。

525、526は紡錘車である。525は安山岩製で薄手扁平であり、断面が長方形であることから平尾氏の分類（平尾2008）のⅡa類に相当する。526は砂岩製で、扁平で平面が円形であり、一部研磨されているが、穿孔が施されていないことから未成品と考えられる。

527、528は安山岩製の剥片である。527は何らかの素材を割り出した後の剥片と見られる。528は一部に自然面を残している。

529～531は蛇紋岩製の両刃石斧である。529は基部が狭く刃部が広い平面形態で、大陸系磨製石器

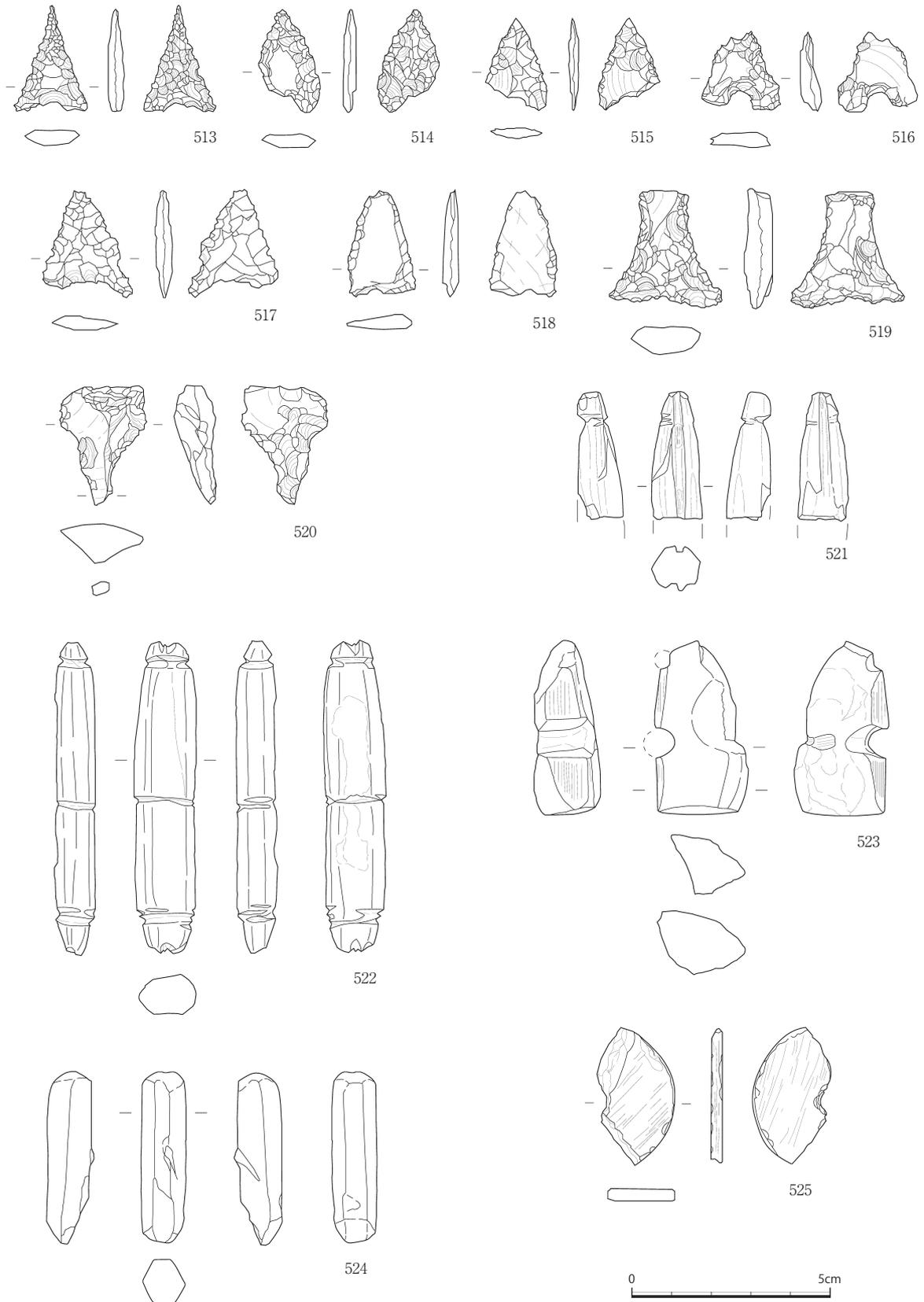


图91 第2次調査（1953年）出土石器（1）（縮尺2/3）



図92 第2次調査（1953年）出土石器（2）

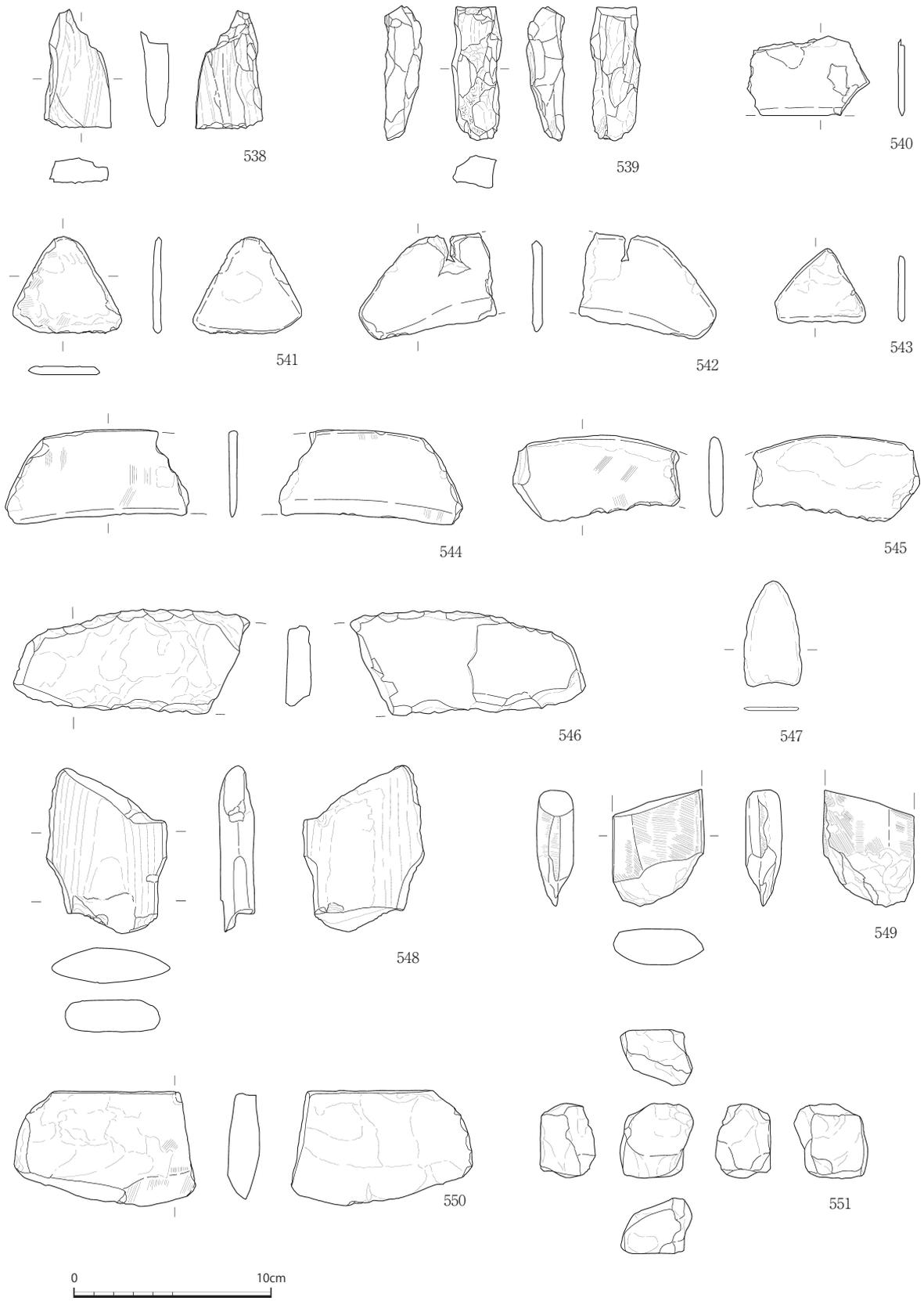


图93 第2次調査 (1953年) 出土石器 (3)

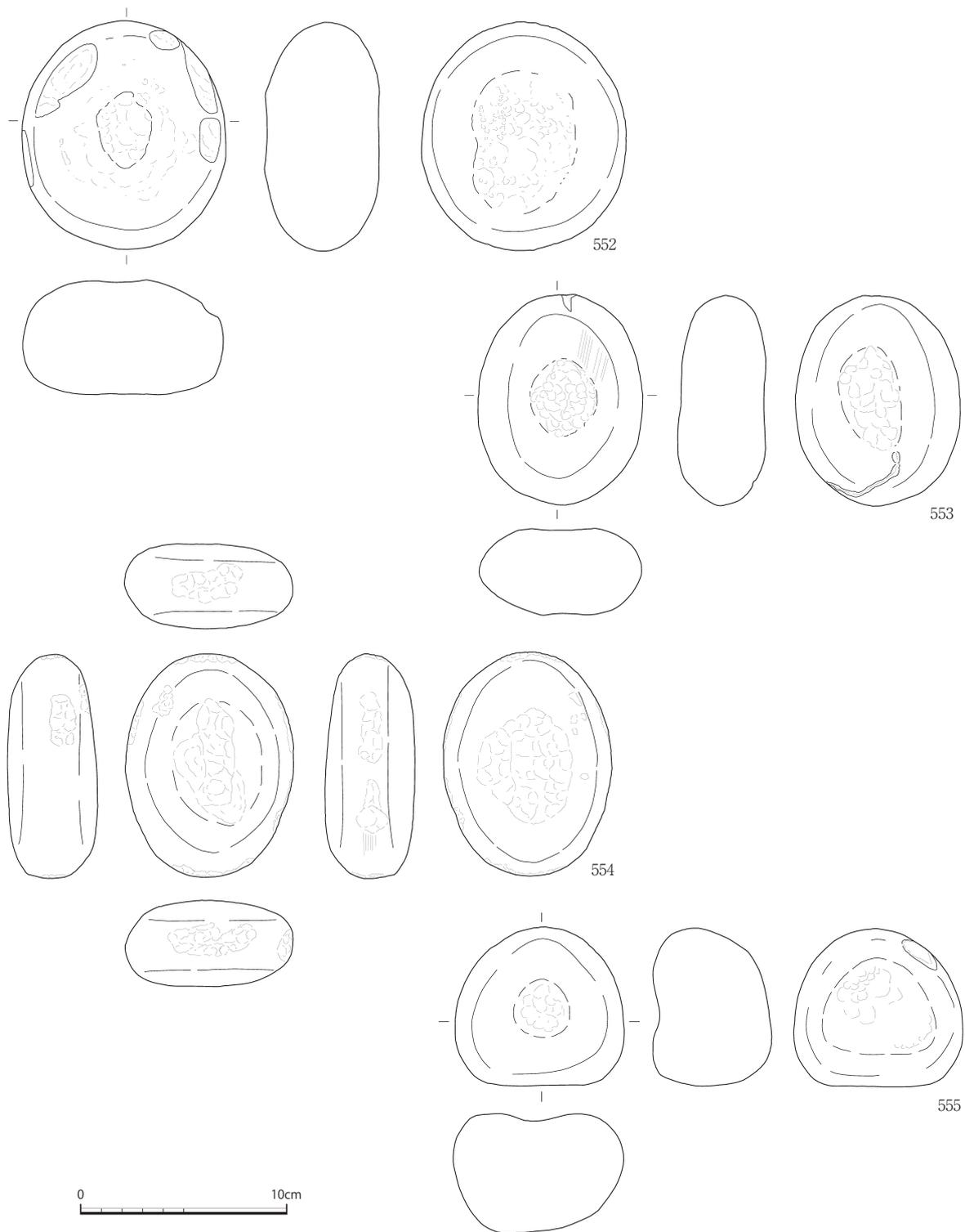


図94 第2次調査（1953年）出土石器（4）

の石斧とは系統が異なる。530は両側縁が若干面取りされており、隅丸四角形状の横断面形を呈する。原の辻遺跡の既往の調査でも類似した形態の石斧が出土している（c.f. 福田・中尾編2005）。531も四角形に近い断面形を呈するが薄手で扁平である。532は玄武岩製の石斧片で、全体の形状は知り得ないが刃部から基部にかけて狭まる平面形態であると考えられる。533～536は層灰岩製の片刃石斧であ

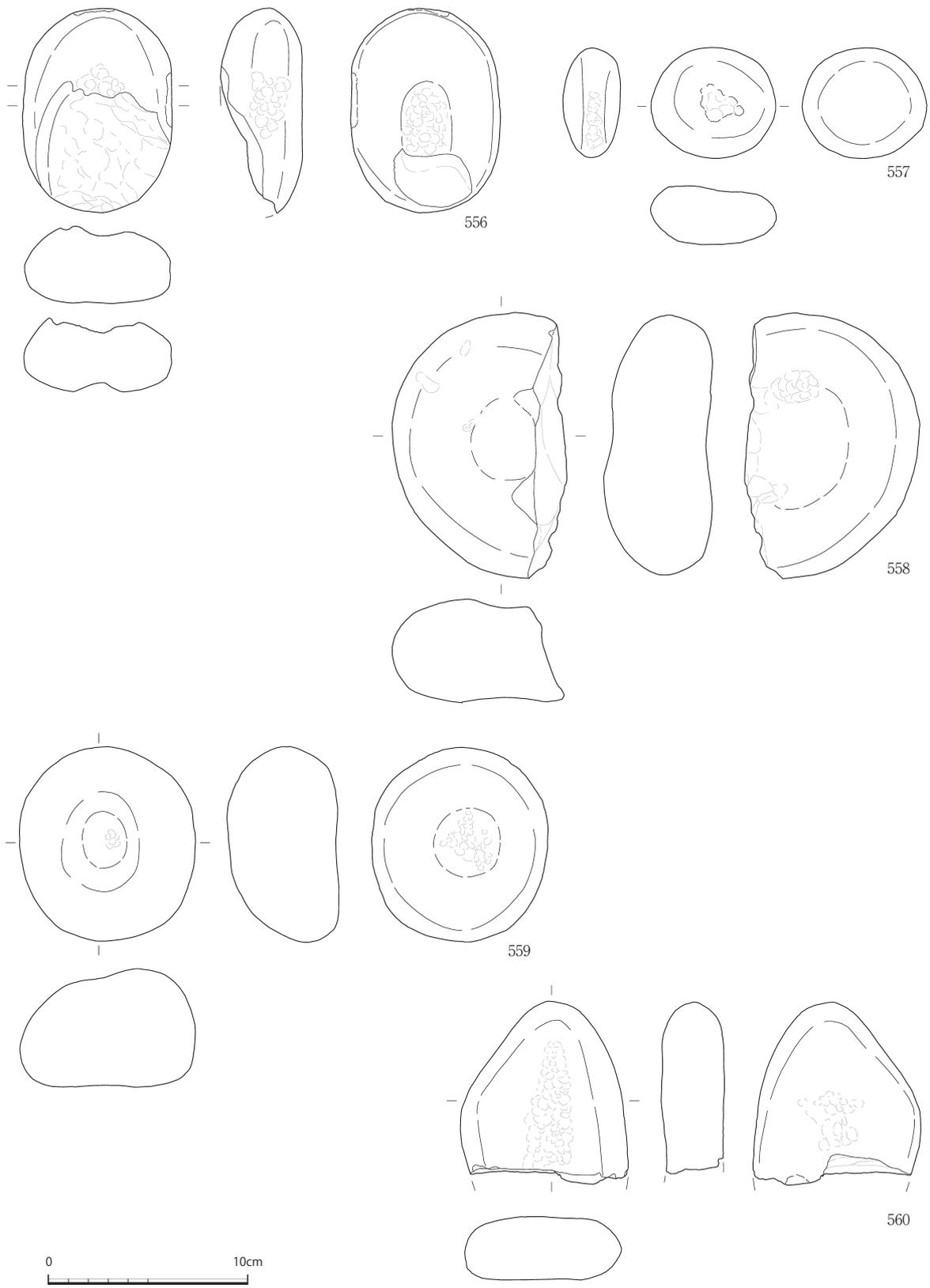


图95 第2次調査（1953年）出土石器（5）

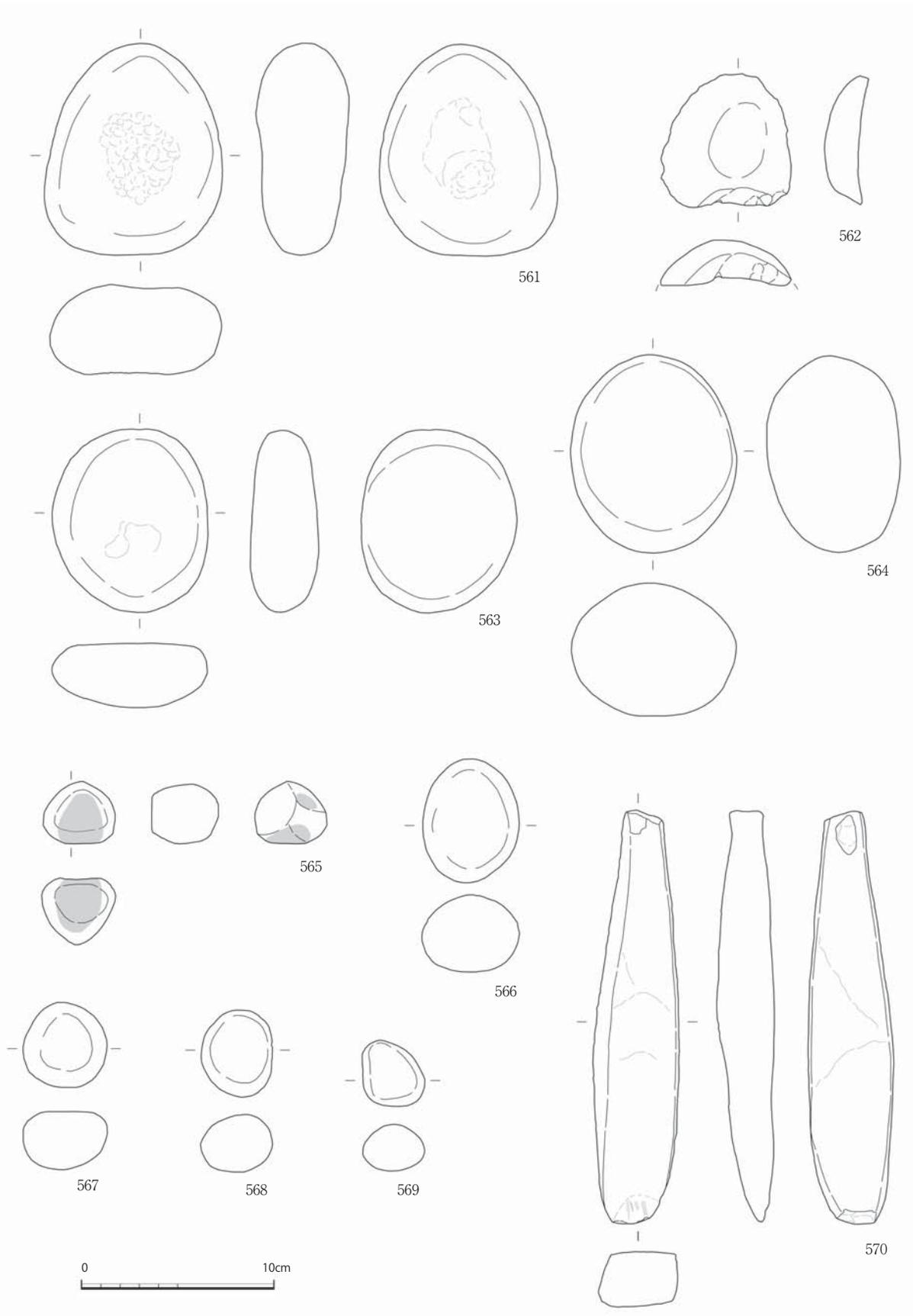


图96 第2次調査（1953年）出土石器（6）

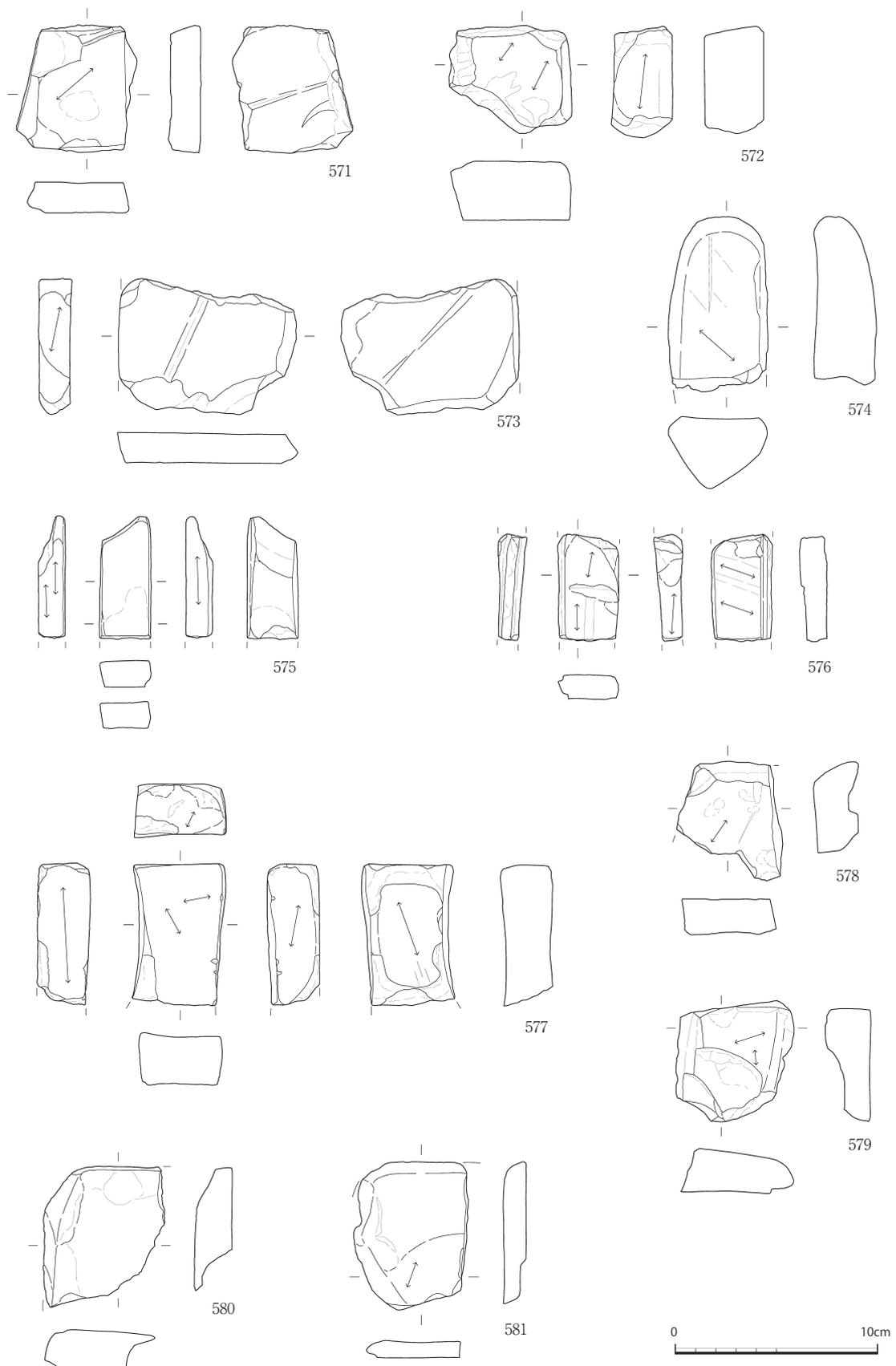


图97 第2次調査 (1953年) 出土石器 (7)



图98 第2次調査 (1953年) 出土石器 (8)

る。533は未成品であり、一部に自然面が残存していることから剥離による整形段階の資料と見られる。534は柱状片刃石斧である。基部側が残存しており、後主面に抉りは確認されない。535は小型の鑿状片刃石斧で、前主面と後主面が丁寧に研磨されている。536は扁平片刃石斧で、全体が丁寧に研磨されている。基部側を欠損している。537は頁岩製の扁平片刃石斧である。表面は風化しているが石材の葉理を確認できる。538は層灰岩製の扁平片刃石斧の未成品である。剥離によって整形されているが研磨には至っていない。539は層灰岩製の鑿状片刃石斧の未成品である。前主面・後主面の判別が可能な程度には整形が進んでいるが一部に自然面を残しており、研磨も確認されない。これらの片刃石斧は、537は葉理が刃部に平行する横目取りであるが、層灰岩製の533～536、538・539はいずれも縦目取りである。

540～545は堇青石ホルンフェルス製の石鎌である。540は小破片だが片面に刃部を確認できる。541は小破片であることに加え、表面が著しく風化しており全形を知り得ないが、かろうじて刃部を確認できることから石鎌とした。542は基部側の破片で、刃部が作り出されているが丸みを帯びており鋭さはない。543は小破片だが形状から刃先部分の破片と見られる。544は白い斑点が形成される段階まで風化が進んでいるが研磨の痕跡を確認することができる。基部から背部にかけて鈍角に屈曲する平面形態が特徴的で、「原の辻型石鎌」と呼称される一群（能登原2012）に該当する。ただし、基部側面の研磨は一部のみである。545は比較的小型で、刃先部分を欠損する。546は頁岩製で、平面形態から石鎌未成品としたが、整形途中であることや他の石鎌に比べるとやや厚手であることから他器種の未成品の可能性もある。

547は堇青石ホルンフェルス製の磨製石鎌である。完形品であるが非常に薄く、表面の風化が激しい。548・549は磨製石剣である。548はホルンフェルス製の有茎式で、関はなだらかである。表面は風化しているが石材の葉理を確認することができる。549は泥岩を素材とした無茎式の基部側破片と見られる。両側縁と体部が丁寧に研磨されているが、研磨痕は全体に及んでいない。

550・551は器種不明石製品である。550は砂岩製で一部が研磨されている。何らかの刃器の未成品と見られるが、詳細は不明である。551は砂岩製で、表面の一部に赤色の付着物が見られる。

552～561は敲石で、561は凝灰岩、それ以外は玄武岩を素材とする。552は主面・裏面に敲打痕が確認される。553は主面・裏面に敲打痕が確認されるほか、主面の一部が磨れている。554は扁平な円礫を素材とし、主面・裏面・上面・下面・両側面に敲打痕が認められる。555は主面・裏面に敲打痕が認められる。556は主面・裏面・側面に敲打痕が認められる。557は他の敲石に比べて小型だが、主面と側面に敲打痕が認められる。558は敲打痕がさほど明瞭でないが、主面・裏面ともに中央部にくぼみが形成されており、両面ともに使用されたと考えられる。559は主面・裏面に敲打痕が認められる。560は扁平な礫を素材としており、主面・裏面に敲打痕が確認されるもののくぼみは形成されていない。561は主面・裏面に敲打痕が認められる。

562～565は磨石である。562は砂岩製で、小破片であり詳細は知り得ないが、磨滅している箇所が見られることから磨石とした。563～565は玄武岩を素材とする。563は主面が平坦であり、この面を使用したと考えられる。564は使用の痕跡が明確でないことから、ほとんど未使用の円礫の可能性もある。565は平坦な面が2面形成されており、いずれの面にも赤色の付着物が確認される。

566～569は玄武岩製で、いずれも敲打や磨耗といった使用痕が明確でないことから、投弾とした。

570は砂岩製の不明石製品である。大型の棒状で、下端部分が磨滅しているが、こういった用途で使用されたかは不明である。

571～588は砥石である。571は砂岩製で、2面利用されており、両面に線状痕が認められる。572

は砂岩製で、主面と側面の2面が利用されている。573は砂岩製で、主面・側面の2面は確実に利用されており、主面にはわずかに溝状痕が形成されている。裏面にかすかに線状痕のような痕跡が確認されるものの、主面・側面に比べて目が粗く、砥面は発達していない。574は砂岩製で1面利用されており、線状痕が認められる。575は砂岩製の定形砥石破損品で、主面・裏面・両側面の4面が利用されている。576は砂岩製の定形砥石破損品で、主面・裏面・左側面の3面の利用が利用されている。また、左側面は凸字型の断面を呈しており、両面からの擦切溝を施した後折り取られた可能性がある。577は砂岩製の定形砥石破損品で、主面・裏面・両側面に加えて上面の一部も利用される5面利用である。いずれの面も使い込まれており砥面が発達している。578は砂岩製で、1面利用されている。579は砂岩製で1面利用されており、利用面が曲面状であることが特徴的である。580は砂岩製で、1面利用されているが砥面はさほど発達していない。581は砂岩製で、1面利用されており、砥面の発達により使用部がややくぼんでいる。582は砂岩製で、主面・両側面と裏面の一部が利用される4面利用である。主面が特に使い込まれており、面の中央部に長軸方向のくぼみが形成されている。583～585は黒色を呈するきめ細かく緻密な泥岩を素材とするもので、同一石材である。583は1面利用されており、研磨痕が明瞭である。584は小破片であるが主面に明瞭な使用痕が認められる。585は比較的大型の砥石の破損品であり、発達した砥面が6面確認される。主面・裏面と右側面の間にそれぞれ形成されている2つの面に、長軸方向に削られたような幅1～3ミリ程度の痕跡が多数認められる点が特筆される。586は砂岩製で、主面・側面の2面が利用されている。石材本来の微妙な起伏が残っており、砥面の利用が進行している途中段階であると見られる。587は粘板岩製で、主面・右側面および左側面の一部の3面が利用されている。588は砂岩製で、主面・右側面の2面が利用されている。

589は石斧の破損品であるが、右側面が平滑に研磨されており、何らかの転用がされたものと考えられる。

590は層灰岩である。主面は自然面で、裏面は葉理に沿って割れている。石斧等の石材として持ち込まれた可能性がある。

### 3. 1954年調査出土石器

591～618は1954年の調査で出土した石器である。

591・592は黒曜石製の打製石鎌である。591は剥離調整が粗く、一部に自然面の残存が観察される。592は小型の完形品で、基部に両側から剥離が施されており凹基に近い形態となっている。593は安山岩製の剥片である。側縁に剥離が施されているが製品か素材かは不明である。

594～596は石錘である。594は砂岩製で、長軸方向の溝と端部に穿孔が施されている。595は泥岩製で、短軸方向の溝を持つ。596は砂岩製で、長軸方向の溝を持つが、穿孔は見られない。594は下條分類の小型A型、595は小型B型にあたる。

597は玄武岩製の太型蛤刃石斧で、今山系石斧であると考えられる。両側縁が尖る凸レンズ状の横断面を呈し、重厚な作りである。598は蛇紋岩製の両刃石斧である。刃部が研磨されているが、両側縁に敲打痕が確認される。蛇紋岩製で基部が狭い両刃石斧は佐賀県吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区に類例がある（細川編2008）。599は砂岩製の両刃石斧である。表面が研磨されており、完成品の刃部の破片と見られる。600は玄武岩製の石斧未成品である。表面に敲打痕が見られ、研磨には至っていない。601は石斧未成品としたが、自然面が残存し整形があまり進んでおらず、敲石などの可能性もあ

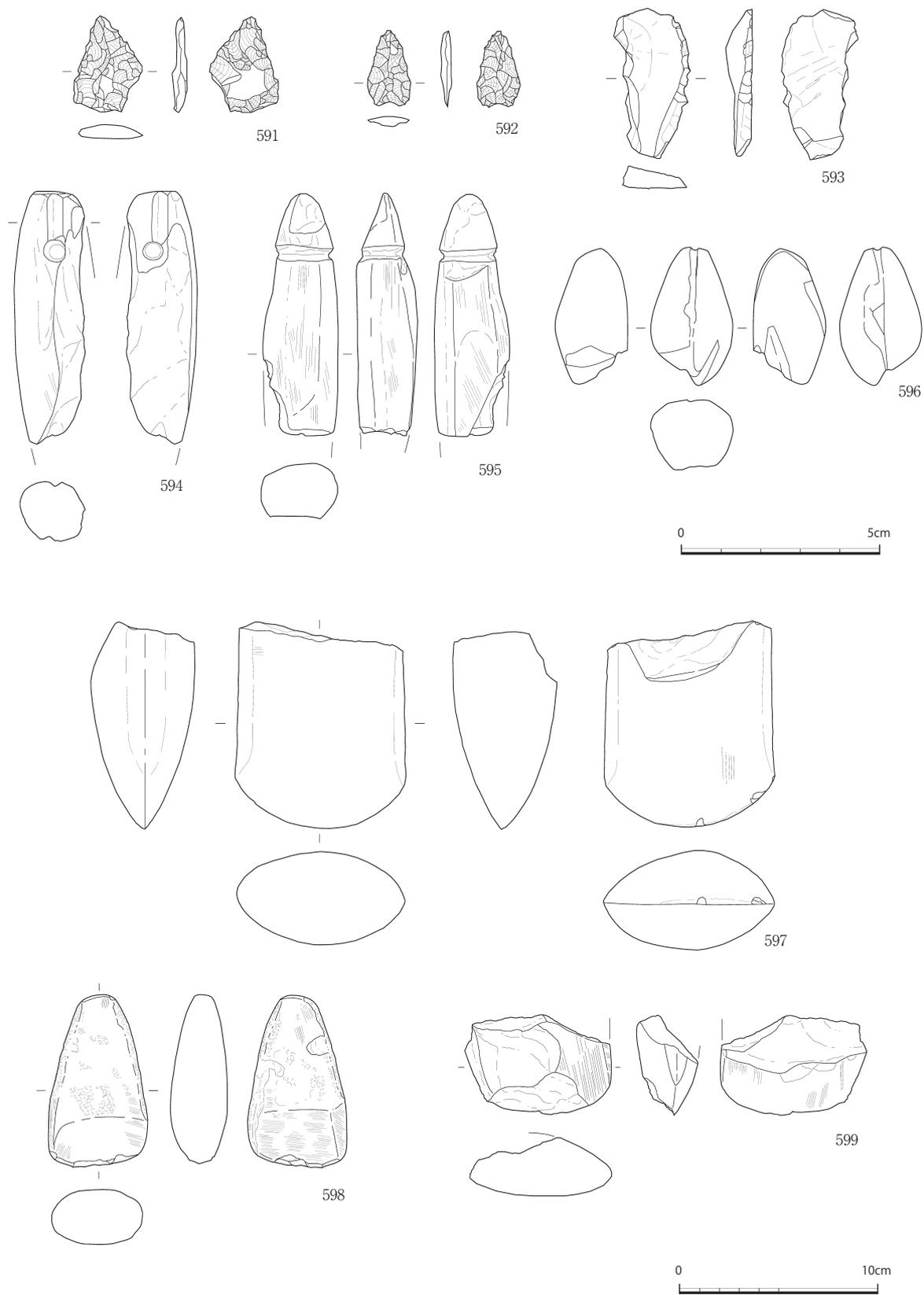


图99 第4次調査（1954年）出土石器（1）

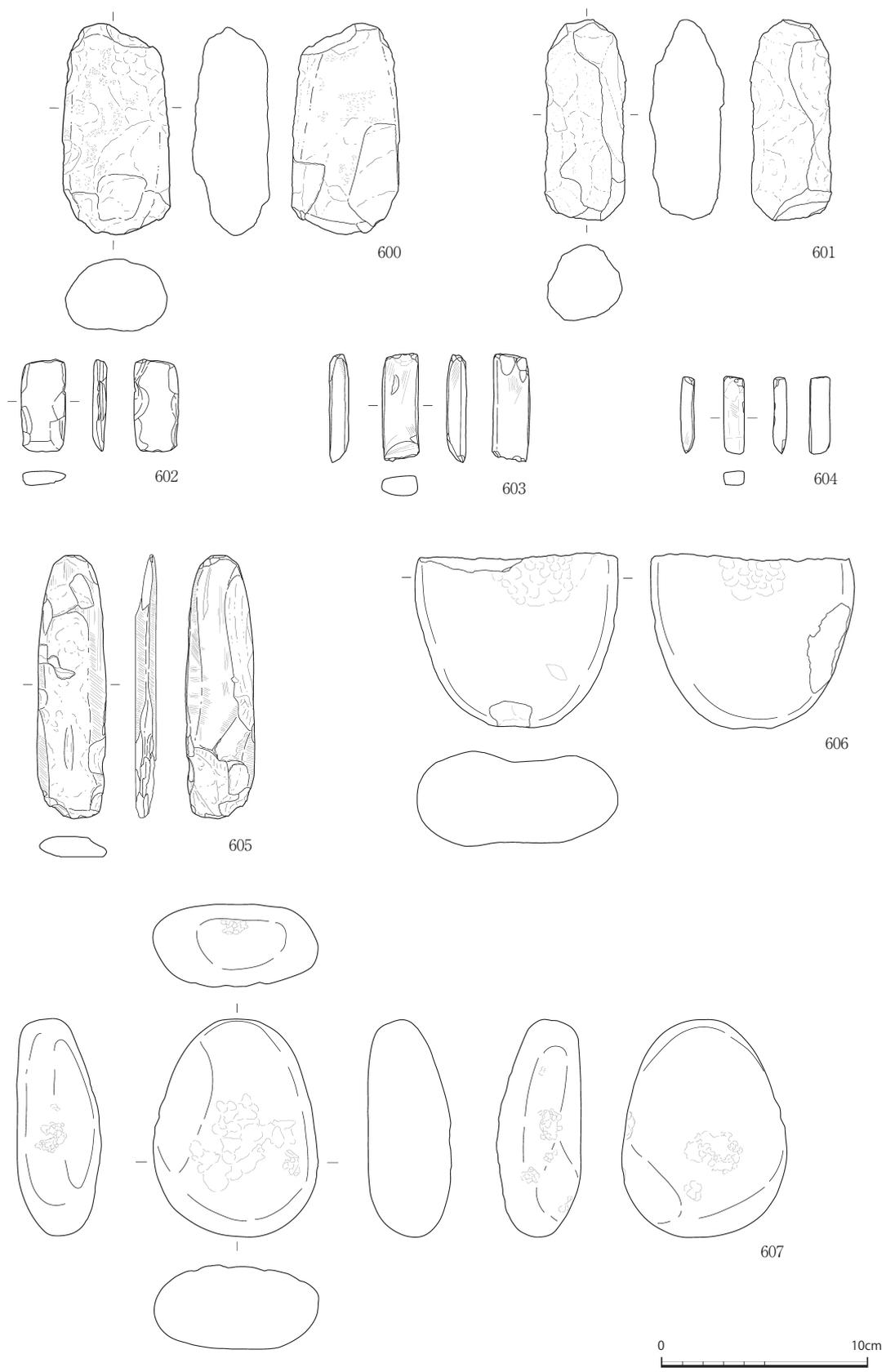


图100 第4次調査（1954年）出土石器（2）

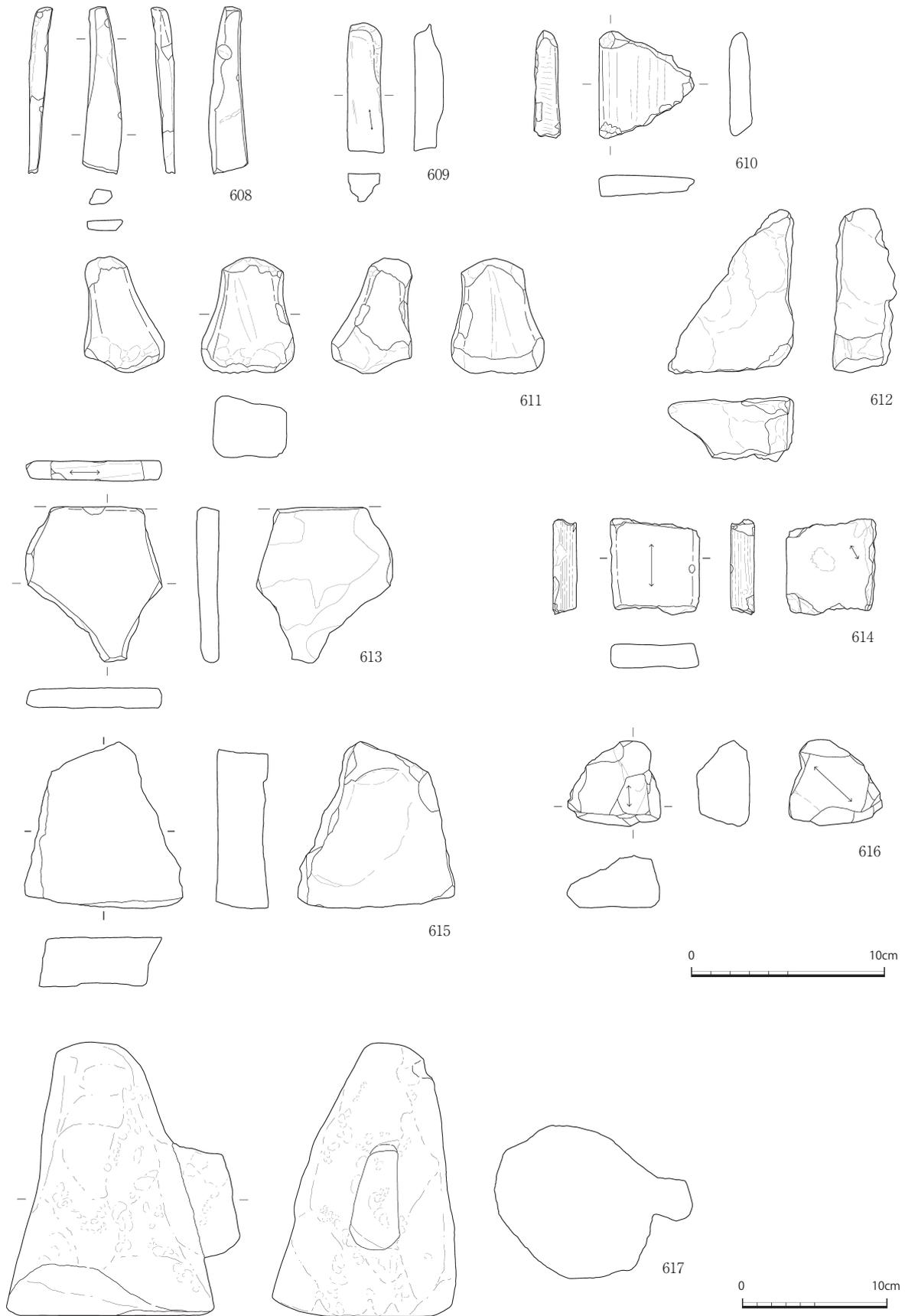


图101 第4次調査（1954年）出土石器（3）

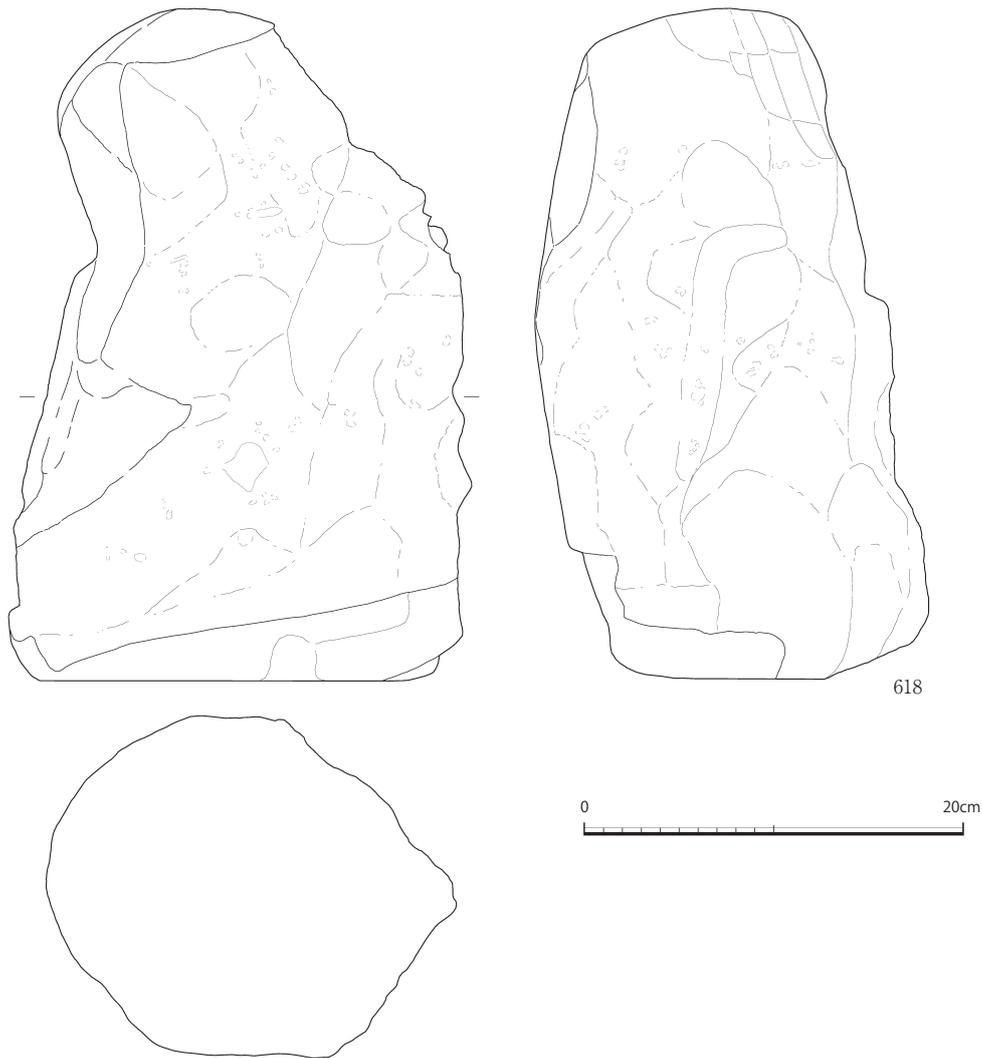


図102 第4次調査（1954年）出土石器（4）（縮尺1/4）

る。602は砂岩製の小型の扁平片刃石斧である。表面が風化しており、調整について詳細は不明である。603、604は小型の鑿状片刃石斧である。603は頁岩製で刃部に微細な剥離が見られる。604は層灰岩を用いた縦目取りによって製作されている。また刃部に偏りがあることから使用と刃部の再研磨を経ていると考えられる。

605は粘板岩製の磨製石剣である。無茎式で、刃部が研磨されているが、体部の研磨は一部に留まっている。

606は凝灰岩製の敲石で、半分ほど欠損しているが両面に敲打痕が確認できる。607は凝灰岩製の敲石・磨石である。敲打の痕跡が確認される一方、一部が磨り減っていることから、磨石としても使用された可能性がある。

608～616は砥石である。608は泥岩製で、4面利用されている。いずれの利用面も下半部が主に利用されている。609は砂岩製で、1面利用されている。610は砂岩製で2面利用されており、定形砥石の破損品と考えられる。611は石英斑岩製で、利用面は4面でいずれの面も砥面が発達している。表と裏面に筋状の使用痕が確認される。612は砂岩製で、3面利用されている。613は砂岩製で、2面利用されている。614は砂岩製の定形砥石の破損品と見られ、4面を砥面とする。615は砂岩製の砥石と



图103 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(1)

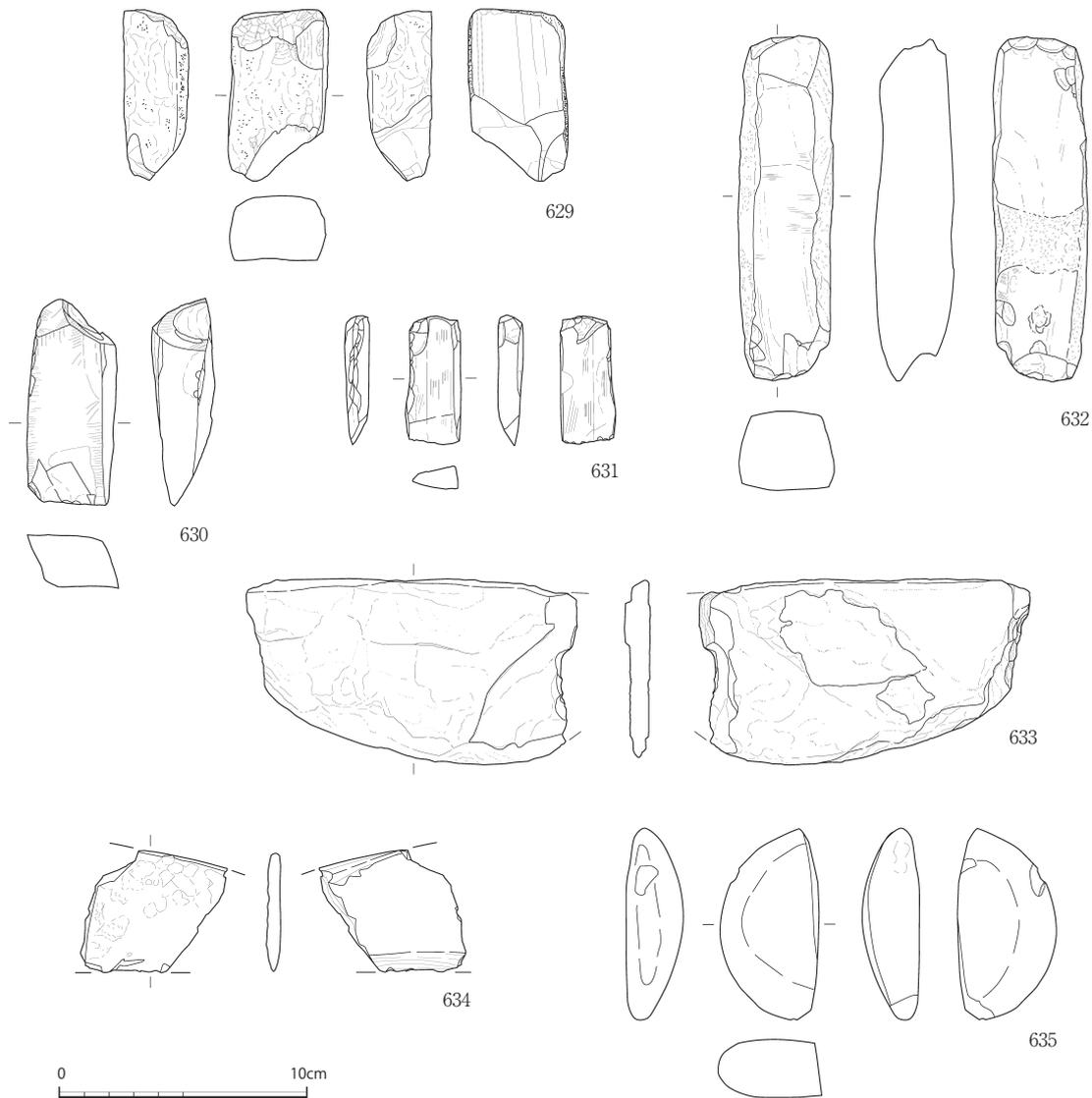


図104 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（2）

したが、砥面が発達しておらず使用痕も不明瞭である。616は砂岩製で、2面利用されている。

617・618は多孔質の玄武岩を素材とする石製支脚である。617は完形品で、凸状の突起を作り出しているが、加工痕は不明瞭である。618は高さ35.4cmの大型品で、突起の作り出しは弱い。上部に削りの痕跡が見られる。

#### 4. 1951・1961年調査出土石器

619～696は1951年および1961年の調査で出土した石器である。両年の調査範囲が同じであり、1951年調査での出土石器が少数であることから、ここでまとめて記載する。

619～621は黒曜石製の打製石鏃である。619は基部を両側から剥離した凹基式である。620は片側の脚部を欠損する凹基式である。621は側縁に剥離調整が施され刃部が形成されているが体部に未加工の部分が残っている。

622～632は石斧である。622は玄武岩製の両刃石斧である。刃部は丁寧に研磨されているが、微細

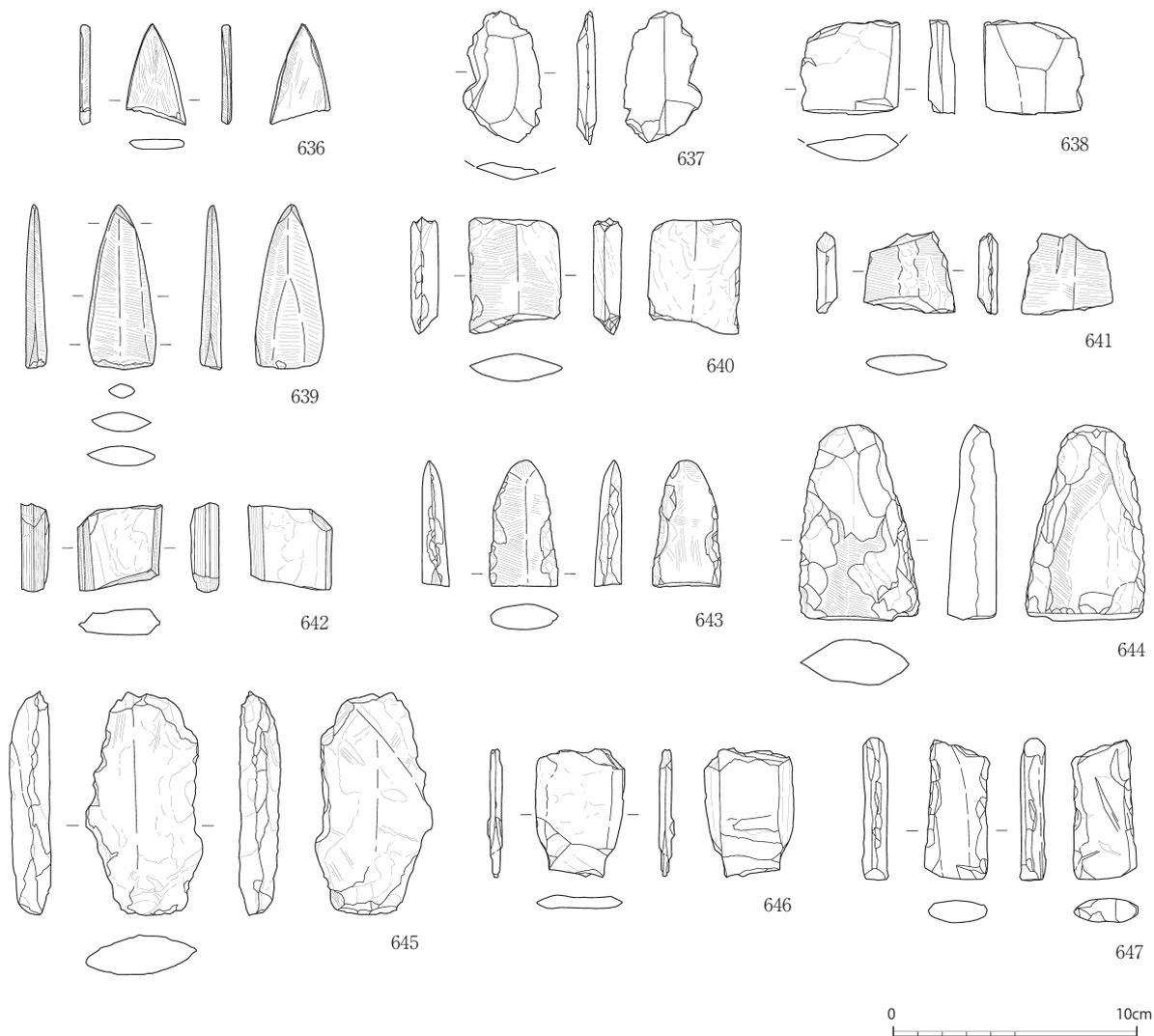


図105 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（3）

な剥離痕があり、刃は丸みを帯びている。体部には側面を中心に敲打痕が見られる。623は砂岩製の片刃石斧である。表面が著しく風化しており研磨の痕跡を確認することはできないが、刃部を研磨によって作り出したものと考えられる。624は砂岩製の両刃石斧である。刃部の形成や体部の整形の途中段階であり、未成品と見られる。625は玄武岩製の石斧未成品である。一部に自然面が残存しており整形があまり進んでいないが、平面や断面形態から見て伐採斧の未成品であると考えられる。626は砂岩製で、加工がほとんどされていないため詳細は不明であるが、石斧の未成品とした。627は頁岩製の石斧である。破損品で全形を知り得ないが、平滑に研磨された面を持ち、横断面が隅丸台形に近いことから柱状片刃石斧未成品の可能性が高い。628はホルンフェルス製で、剥離調整はあまり施されていないものの一部に研磨痕が認められる。横断面形から扁平片刃石斧の未成品と考えたが、縞状の葉理が刃部に平行して見られることから、磨製石剣など他器種の未成品の可能性もある。629は層灰岩製の片刃石斧未成品である。整形があまり進んでおらず、自然面の残存箇所が多く認められる。縦目取りであり、平面形態や横断面形から見て扁平片刃石斧の未成品と考えられる。630は泥岩製の石斧としたが、破片資料であり全形を知り得ない。631は層灰岩製の小型の扁平片刃石斧である。縦目取りで、刃部に偏りが見られることから使用・再研磨を経ていると考えられる。632は層灰岩製の

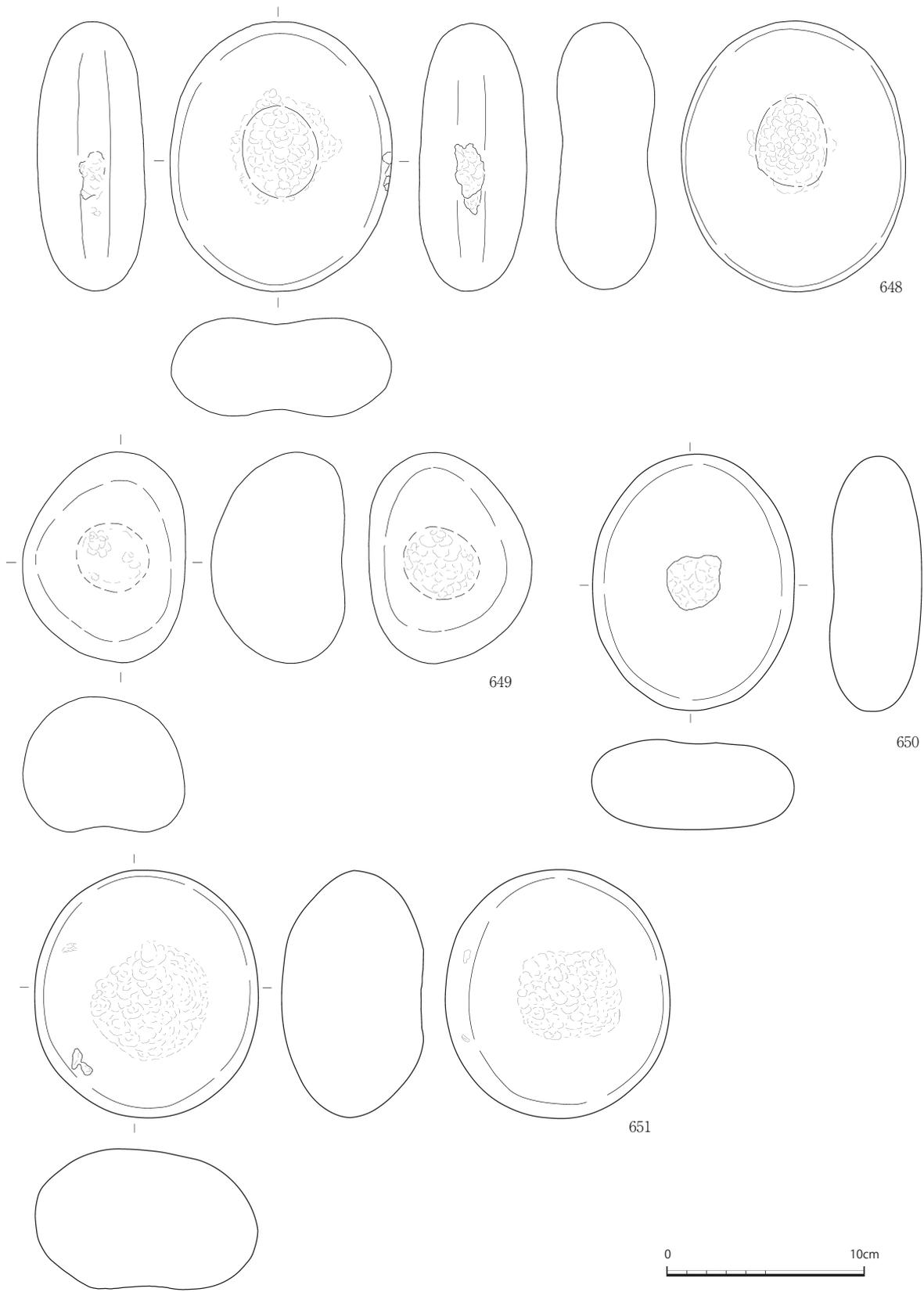


图106 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(4)



図107 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（5）

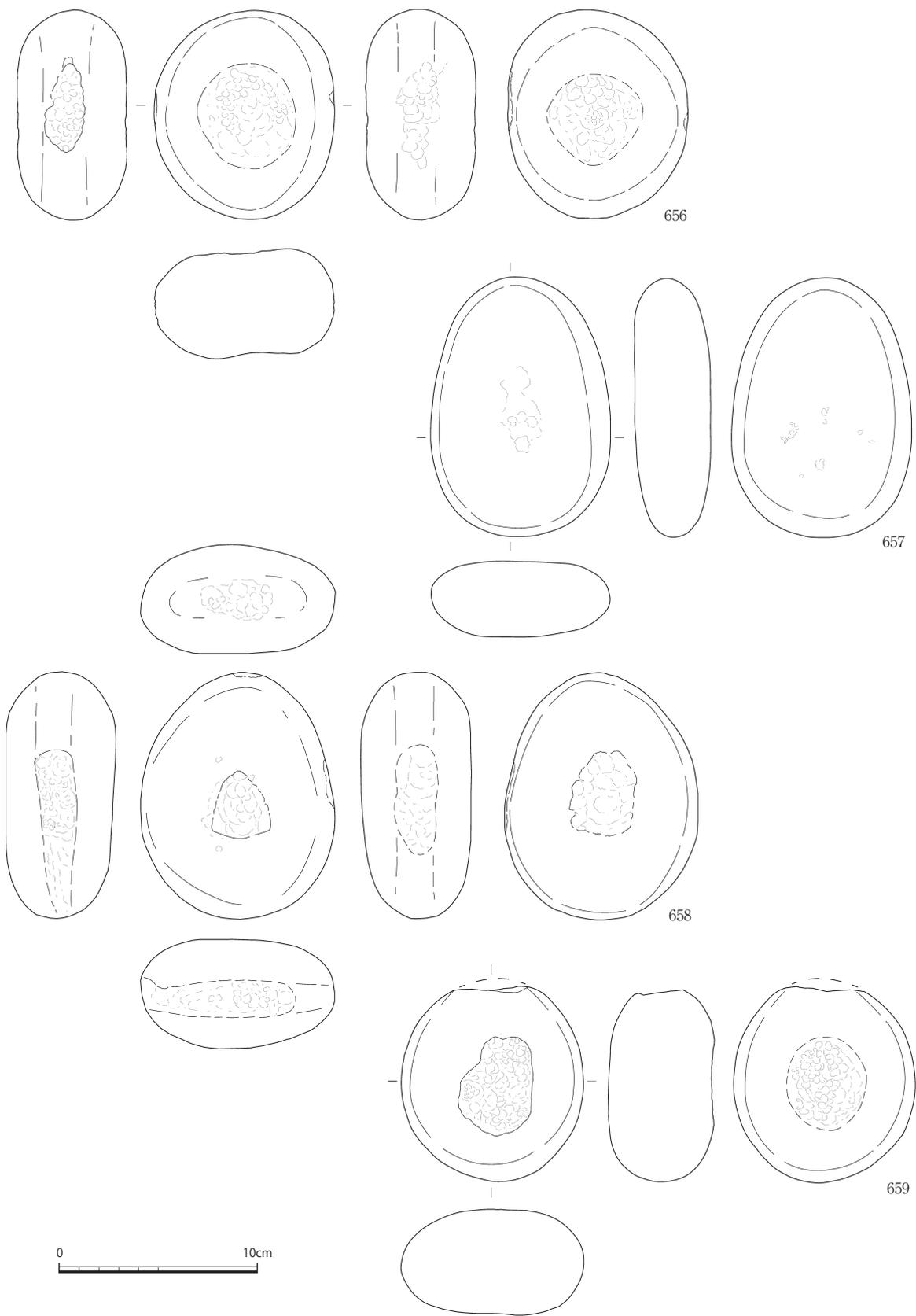


図108 第1次(1951年)・第5次(1961年)調査出土石器(6)



图109 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(7)



图110 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(8)

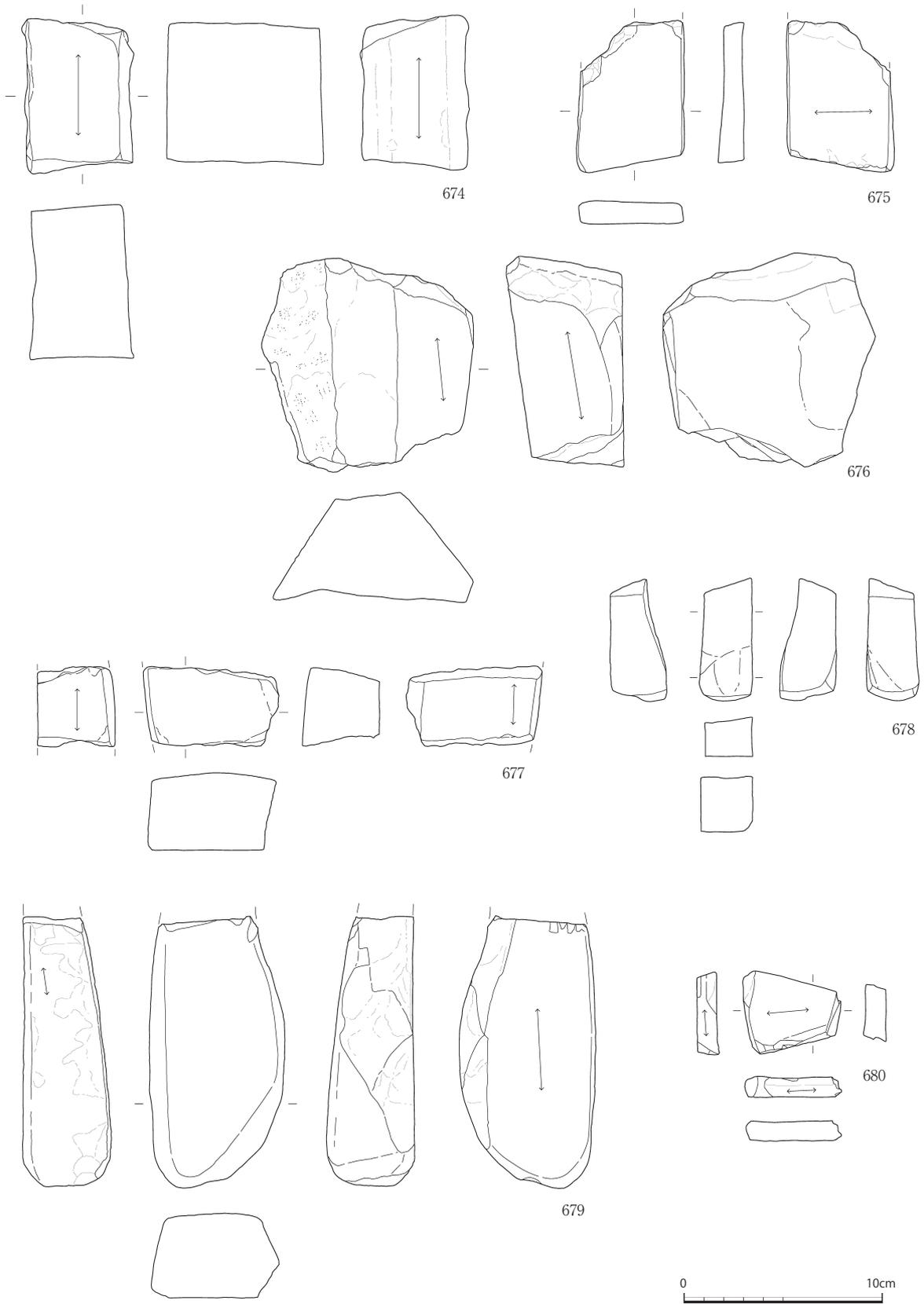


图111 第1次(1951年)·第5次(1961年)调查出土石器(9)

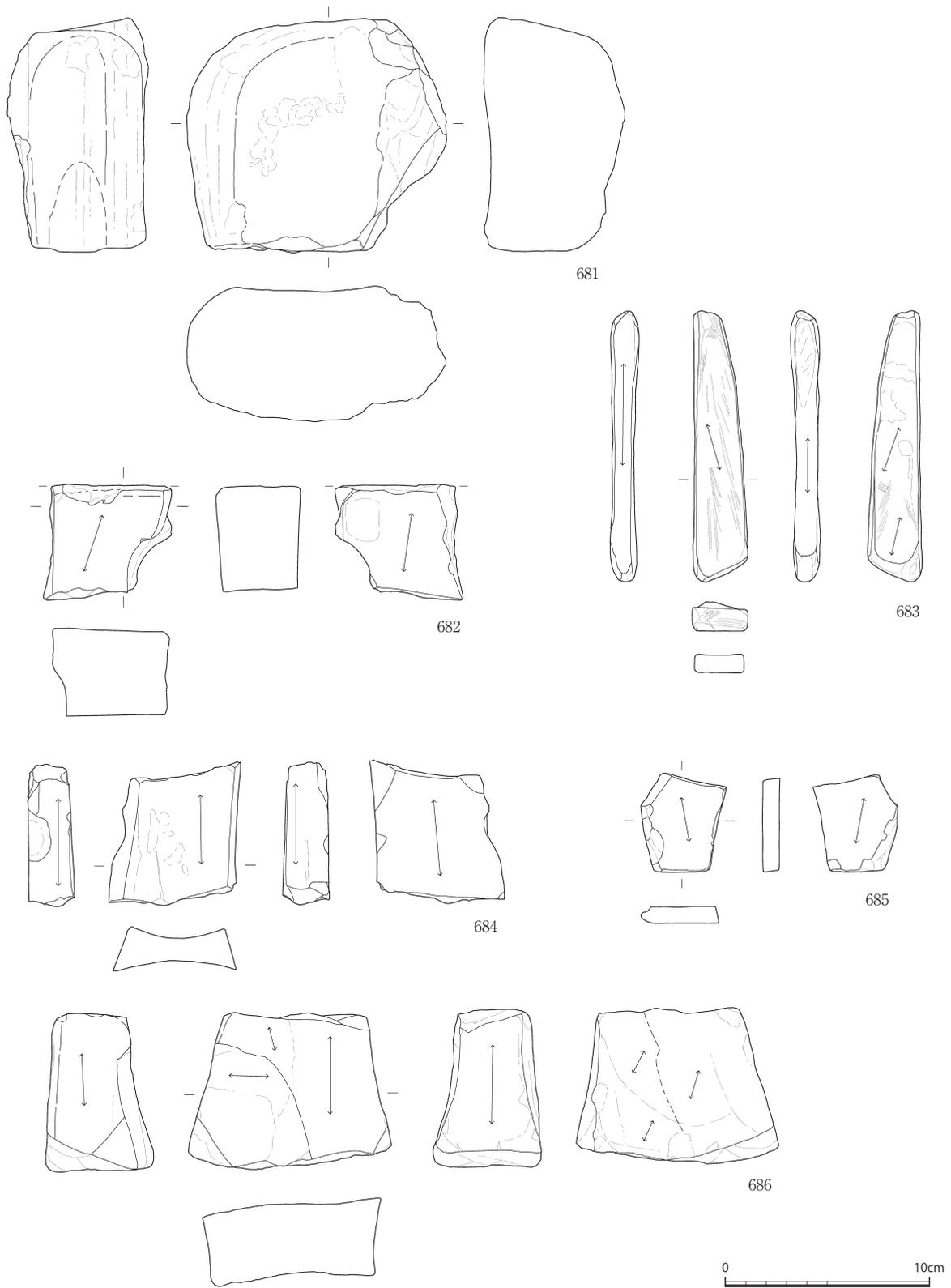


図112 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（10）

柱状片刃石斧である。刃部・基部の整形が完了しておらず、未成品と見られる。抉りに関して、主面に緩やかにほみが形成されているが、裏面にも敲打によって緩やかにほみが形成されている部分



図113 第1次(1951年)・第5次(1961年)調査出土石器(11)

があり、前主面と後主面の判別が難しい。横断面形が台形状を呈する場合、挟りがある面(後主面)の幅が広いのが一般的だが、本資料の場合、幅が広いのは裏面側であるものの、縦断面形から判断すれば主面上部に基部としての加工がなされ、裏面に刃部があるものと考えられる。したがって、ここでは主面側を後主面、裏面側を前主面としておきたい。

633は堇青石ホルンフェルス製の石庖丁未成品で、背部・刃部が作り出されていることから研磨の直前段階と考えられる。縁辺部に剥離調整が認められる一方で、縁辺から体部中央まで届くような大

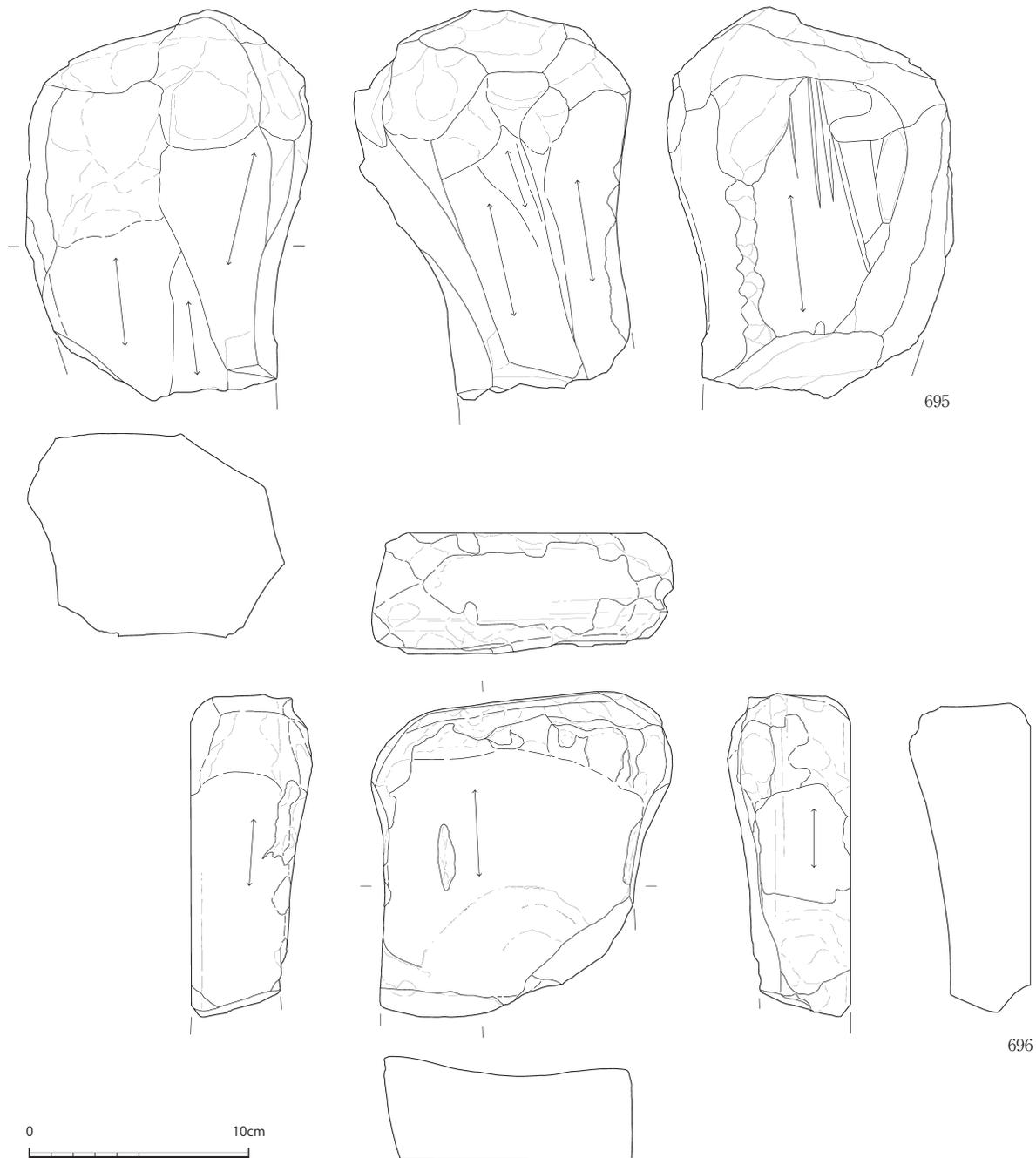


図114 第1次（1951年）・第5次（1961年）調査出土石器（12）

きな剥離は明瞭でないことから、薄く扁平な素材剥片が用いられていると見られる。裏面が平坦であることから、裏面が剥離面側で主面が自然面側と推測される。

634は堇青石ホルンフェルス製の石鎌の小破片である。表面は風化しているが、研磨によって刃部が作り出されていることが確認できる。

635は緑色岩製の不明石製品である。濃緑色の石材で、表面全体が磨かれているが、用途は不明である。

636は頁岩製の磨製石鎌で、基部を欠損している。全面が丁寧に研磨されている。637～647は磨製石剣である。637は泥岩製の破片である。剣身部中央に鑄を確認できる。638は泥岩製の破片であ

る。639は粘板岩製で、体部の左右で研ぎ分けることで中央に鑄が通り、横断面は丸みを帯びた菱形を呈する。ただし表裏で鑄の入り方は異なっており、主面は下部まで鑄が通るのに対して裏面では上半部にのみ鑄が通っている。640は頁岩製で、主面は研ぎ分けによって中央に鑄が通る。裏面にも鑄が通るが、研磨は一部にしか施されていない。641は頁岩製で、全体的に丁寧な研磨されているが、一部研磨が及んでいない部分が残っている。642は層灰岩製で、互層状の葉理が明瞭である。表面に研磨は施されていない。643は頁岩製で、体部は全体的に研磨されているが明瞭な鑄が形成されるには至っておらず、刃部も作り出されていない。644は安山岩製で、形態的には石剣の可能性があるが、使用石材から見て他器種の可能性もある。645は頁岩製で、基部付近で破損した未成品と見られる。剥離調整による整形で横断面が菱形に近くなっているが体部の研磨はほとんどされていない。646は堇青石ホルンフェルス製で、関付近の破片である。表面が風化しているため研磨痕は直接確認できないが、研磨によって刃部となだらかな関が作り出されていると考えられる。647は砂岩製で、柄の一部分と見られる。

648～661は玄武岩製の敲石である。648は扁平な円礫を素材とし、主面・裏面に加えて、側面にも敲打痕が認められる。649は断面が半円形状の円礫を素材とし、平坦な面には敲打によってくぼみが形成されている。また、曲面側にも若干の敲打痕が確認される。650は扁平な円礫を素材とし、主面に使用痕が認められる。651は主面・裏面に敲打痕が認められ、裏面にはややくぼみが形成されているが、主面には形成されていない。652は主面・裏面・側面に敲打痕が認められ、主面と裏面にくぼみが形成されている。表面に若干擦痕が見られる。653は主面・裏面にはほとんど使用の痕跡がないが、側面に使用痕が認められる。654は主面・裏面・上面に明瞭な敲打痕が認められるほか、側面にも若干の敲打痕が見られる。655は主面・裏面に敲打痕が認められる。裏面はくぼみの形成に至っていない一方で主面は敲打の集中で深くくぼみが形成されている。656は主面・裏面に加え両側面にも明瞭な敲打痕が認められる。657は扁平な円礫を素材とし、若干の敲打痕が見られるが明瞭ではなく、あまり使用されなかったものと考えられる。658は扁平な円礫を素材とし、主面・裏面の敲打によるくぼみの形成に加え、両側面と上面・下面にも使用痕が認められる。他資料に比べて使用範囲が明瞭である。659は主面・裏面に敲打痕が認められる。660は主面および側面に敲打痕が認められる。また裏面が磨滅しており、磨石として使用された可能性もある。661は主面に敲打痕が認められるがくぼみが形成されるには至っていない。

662は玄武岩製台石の破損品である。断面半楕円状の大型の円礫を素材とし、平坦な方の面に敲打痕が認められる。

663～667は玄武岩製の磨石である。663は表面の風化により使用痕は明瞭でないが、平坦になっている主面・裏面を使用したものと考えられる。664は棒状の礫を素材とし、主面が磨耗し縦断面が緩やかな凹面状を呈することから、この面が主に利用されたと見られる。665は主面・裏面が磨滅しており、この2面が利用されたと考えられる。666は主面・裏面の一部が磨滅しており、この2面が利用されたと考えられる。667は主面が磨滅し平坦になっている。

668～696は砥石である。668は砂岩製で、2面利用されている。わずかに線状痕が認められる。669は砂岩製で、主面全体と裏面の一部の2面利用である。両面とも砥面が発達しており、くぼみが形成されている。670は砂岩製で、2面利用されている。671は砂岩製の定形砥石で、4面利用されている。672は砂岩製の定形砥石で、4面利用されている。主面に深さ1mm、最大幅5mm程度の溝状痕が認められる。673は砂岩製で、3面利用されている。674は砂岩製で、2面利用されている。両面とも使い込まれているが、主面よりも裏面の方がやや粗い。675は砂岩製の定形砥石の破損品で、主面と

裏面の2面が利用されている。676は砂岩製で、主面・右側面2面・裏面の計4面が利用されている。677は砂岩製で、主面・裏面・側面の3面利用されている。主面は使い込まれているがやや凸レンズ状の断面形を呈している。678は砂岩製で、主面・両側面・裏面の4面利用で、いずれの面も使い込まれている。679は泥岩製で、主面・両側面・裏面の4面利用されている。裏面には長軸方向の擦痕が明瞭に認められる。680は砂岩製で、主面・側面・下面の3面利用されている。下面の上半部と下半部の間に稜線が入っており、使用頻度に差があった可能性がある。681は砂岩製で、使用の方向は明瞭でないが、主面および左側面の一部の2面利用である。側面には石材の葉理が確認できる。主面は使い込まれてくぼみが形成されているが、一部に本来の微妙な凹凸が残されている。682は砂岩製で、主面・裏面の2面利用である。683は黒色を呈する泥岩製で、1953年調査出土の582～584と同一石材である。定形砥石の完形品で、主面・両側面・裏面に加えて下面も使用されている5面利用である。いずれの面も使い込まれているが、裏面には一部研磨が及んでいない部分が残っている。684は砂岩製で、主面・両側面・裏面の4面利用である。いずれの面も使い込まれており、特に主面・裏面は凹面状になっている。685は砂岩製で、主面・裏面の2面利用である。686は砂岩製で、主面・両側面・裏面の4面が利用された定形砥石である。いずれの面も使い込まれているが、主面と裏面は同一面上でも箇所によってやや粒度が異なり、使用の方向もそれぞれ異なっている。687は花崗岩製で、主面と裏面が砥石として利用された可能性があるが、使用痕は不明瞭である。石英の結晶が発達しているが、粒度自体は細かい。688は砂岩製で、主面・裏面の2面利用である。689は砂岩製で、主面・両側面の3面利用である。粒度は#400相当とやや粗めだが、幅3～4mm、深さ2～4mm程度の太く深い溝状痕が8本と、幅1～2mm、深さ0.5mm程度の細く浅い溝状痕が2本認められ、鉄器との関係が注目される。690は泥岩製で、主面・裏面の2面が利用されていることに加えて、片側の側面が面取りされている。691は砂岩製で、主面のみの1面利用である。692は砂岩製の置き砥の破損品で、主面・両側面・裏面の4面利用である。いずれの面も使い込まれており、特に主面は凹面状になっている。主面の上半部の曲面部分も若干使用されている。693は泥岩製で、主面・両側面と、主面と左側面の間に形成された面の4面利用である。表面には線状痕が認められる。694は砂岩製で、側面が砥石として利用された可能性があるが、使用痕は不明瞭である。695は角柱状の砂岩を素材とする。面によって粗さがやや異なるが、5面が利用され、利用部分以外は自然面である。右側面に幅1～3mm、深さ1.5mm程度の溝状痕が4本認められる。696は砂岩製で、主面・両側面・上面の4面が利用された定形砥石の破損品である。主面と両側面は特に砥面が発達しており、凹面状を呈するが、溝状痕や目立った線状痕は確認されない。側面および上面には石材の葉理が確認できる。

本稿を執筆するにあたり、石斧について新潟大学の森貴教先生にご教示をいただきました。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

## 引用文献

- 下條信行1984「弥生・古墳時代の九州形石錘について—玄界灘海人の動向—」『九州文化史研究所紀要』29：pp.71-103
- 福田一志・中尾篤志編2005『原の辻遺跡 総集編1』長崎県教育委員会
- 能登原孝道2012「堇青石ホルンフェルス製石鎌の生産と流通」『西海考古』8：pp.83-92
- 平尾和久2008「紡錘車の編年とその画期—北部九州出土資料を中心に—」『伊都国歴史博物館紀要』3：pp.1-12
- 細川金也編2008『吉野ヶ里遺跡—田手二本黒木地区の弥生時代中期の石器—』佐賀県教育委員会

表3 原の辻遺跡出土石器観察表

No	調査年度	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
513	1953	打製石鏃		黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.39	
514	1953	打製石鏃		黒曜石	2.3	1.4	0.3	1.12	
515	1953	打製石鏃	IV C	黒曜石	2.3	1.5	0.25	0.71	
516	1953	打製石鏃		黒曜石	2	1.8	0.4	1.27	
517	1953	打製石鏃		安山岩	2.3	2.2	0.4	1.87	
518	1953	打製石鏃		安山岩	2.6	1.6	0.4	1.66	
519	1953	打製石鏃		安山岩	2.8	2.8	0.7	4.65	
520	1953	石鏃		黒曜石	3	2.2	1	4.46	
521	1953	石鏃		泥岩	3.2	1.2	1.1	5.77	
522	1953	石鏃	第3C 黒色層	泥岩	7.9	1.6	1	21.66	
523	1953	石鏃	III H	砂岩	4.4	2.4	1.7	18.7	
524	1953	水晶原石	III C	水晶	4.4	1.1	1.1	10.3	
525	1953	紡錘車		安山岩	3.3	1.9	0.3	3.12	
526	1953	紡錘車未成品	IV A	砂岩	5.3	5.1	1.2	43.86	
527	1953	剥片	第4	安山岩	7	5.4	1.8	67.28	
528	1953	剥片	山口土雄畑表面	安山岩	5.4	3.6	1.4	36.63	
529	1953	両刃石斧	III G	蛇紋岩	10.4	5.1	2.3	195.5	
530	1953	両刃石斧	山口土雄畑表面	蛇紋岩	9.8	4.6	2.9	191.84	
531	1953	両刃石斧	IV C	蛇紋岩	8.5	4.3	1.6	92.74	
532	1953	磨製石斧	II F	玄武岩	7.4	4.6	2.2	64.5	
533	1953	片刃石斧未成品	山口土雄畑	層灰岩	7.4	4.2	3	140.67	
534	1953	柱状片刃石斧	IV表面	層灰岩	8.3	3.1	3.5	170.69	
535	1953	ノミ状石斧	第II E2	層灰岩	5.2	1.5	1.6	29.9	
536	1953	扁平片刃石斧	II H	層灰岩	3.8	2.9	1.2	24.3	
537	1953	扁平片刃石斧	III D	頁岩	6.2	4.8	0.8	46.6	
538	1953	扁平片刃石斧未製品		層灰岩	6	3.3	1.2	31.98	
539	1953	片刃石斧未成品	第2 T	層灰岩	6.7	2.2	1.9	46.25	
540	1953	石鏃	IV F	董青石ホルンフェルス	6.1	4	0.3	14.34	
541	1953	石鏃	II P	董青石ホルンフェルス	4.9	5.5	0.4	13.02	
542	1953	石鏃	I 貝層	董青石ホルンフェルス	6.9	5.4	0.5	22.2	
543	1953	石鏃	IV E	董青石ホルンフェルス	4.5	3.7	0.35	9.19	
544	1953	石鏃	IV	董青石ホルンフェルス	9.1	4.4	0.5	36.23	
545	1953	石鏃	II - III 間吉富畑	董青石ホルンフェルス	8.4	4.3	0.7	41.37	
546	1953	石鏃? 未成品	第2	頁岩	11.8	5.2	1.3	137.83	他器種の可能性あり
547	1953	磨製石鏃	IV B	董青石ホルンフェルス	5.2	2.9	0.2	4.77	
548	1953	石剣	山口土雄畑	ホルンフェルス	7.3	6.1	1.8	114.02	
549	1953	石剣	II G'	泥岩	5.8	4.5	1.8	74.7	
550	1953	不明	II D2	砂岩	9.1	5.8	1.6	125.8	
551	1953	不明	第2 E	砂岩	3.8	3.5	2.8	41.36	赤色付着物
552	1953	敲石		玄武岩	11.1	9.8	5.6	960	
553	1953	敲石	第4 i	玄武岩	10.2	7.9	4.2	600	
554	1953	敲石		玄武岩	10.9	8.1	4.2	600	
555	1953	敲石	I 区 A 下層	玄武岩	7.7	8.1	5.8	600	
556	1953	敲石	第3	玄武岩	10.2	7.4	4	387.59	
557	1953	敲石	第2 J	玄武岩	5.5	6.2	2.9	157.3	
558	1953	敲石	第III F 褐色層	玄武岩	13.1	8.5	5.3	960	
559	1953	敲石	第4 H 東壁	玄武岩	9.8	8.7	6.9	800	
560	1953	敲石	第2 D 3	玄武岩	8.5	9.3	2.2	379.5	
561	1953	敲石	VII 2 Z I LM 下層	凝灰岩	11	9.2	4.8	680	
562	1953	磨石	第2 E1E2	砂岩	6.8	6.7	2.4	418.5	
563	1953	磨石	第4 i	玄武岩	9.5	8	3.3	460.12	
564	1953	磨石	第2	玄武岩	10.3	8.5	6.9	900	
565	1953	磨石	II H	玄武岩	3.2	3.6	3.4	58.27	赤色付着物
566	1953	投弾		玄武岩	6.5	5	4	194.49	
567	1953	投弾	トレンチIV F 中間	玄武岩	4.5	4.3	3	96.99	
568	1953	投弾	第2 タテ穴 G	玄武岩	4.5	3.7	3	71.29	
569	1953	投弾	第2 タテ穴 G	玄武岩	3.4	3.2	1.5	38.72	
570	1953	不明	II D'	砂岩	21.5	4.3	3	418.5	
571	1953	砥石	第4	砂岩	6.3	5.9	1.6	92.87	#600
572	1953	砥石	II D3	砂岩	5.3	6	2.9	153.9	#1000以上
573	1953	砥石	第4 i	砂岩	6.6	8.7	1.5	148.04	#800
574	1953	砥石	IV表面	砂岩	8.6	4.9	3.6	208.38	#800
575	1953	砥石		砂岩	6	2.5	1.3	33.4	#1000以上
576	1953	砥石	I 貝層	砂岩	5.3	3	1.4	34.14	#1000以上
577	1953	砥石	II P	砂岩	7	4.4	2.6	152	#1000以上
578	1953	砥石	第4 STU 上層	砂岩	5.7	5.1	2.1	83.01	#1000以上
579	1953	砥石	第4 T	砂岩	6	5.7	2.2	87.68	#1000以上
580	1953	砥石	第2 タテ穴 G	砂岩	7	5.9	2	98.36	#1000以上
581	1953	砥石	IV B	砂岩	7.4	5.5	1.2	79.34	#1000以上
582	1953	砥石	第2 G	砂岩	17.1	4.8	3.6	455.26	#1000以上
583	1953	砥石	II E1	泥岩	12.6	4	2.6	182.6	#1000以上
584	1953	砥石	第2 トレンチ K	泥岩	8.5	7.5	4.9	406.11	#1000以上

No	調査年度	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
585	1953	砥石	II G ?	泥岩	9.4	2.3	1	38.3	#1000以上
586	1953	砥石	第2G	砂岩	11	5.8	2.8	275.26	#1000以上
587	1953	砥石	第2S	粘板岩	13.4	8.2	2.4	417.6	#1000以上
588	1953	砥石	第4G	砂岩	7.6	4.6	6.2	294.9	#1000以上
589	1953	石斧転用品		頁岩	9	5.4	1.5	88.61	
590	1953	層灰岩原石	STU 上層	層灰岩	8.2	8.5	2.3	214.22	
591	1954	打製石鎌		黒曜石	2.4	1.7	0.4	1.62	
592	1954	打製石鎌		黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.67	
593	1954	剥片		安山岩	7.5	3.8	1.1	30.5	
594	1954	石錘	1 M 上	砂岩	6.4	1.8	1.5	19.82	
595	1954	石錘	1 K	泥岩	6.1	1.9	1.4	21.45	
596	1954	石錘	II c	砂岩	3.4	2.1	1.8	10.2	
597	1954	大型蛤刃石斧		玄武岩	10.4	8.5	5.2	66.0	
598	1954	両刃石斧	1 H	蛇紋岩	8.6	5	2.8	183.19	
599	1954	両刃石斧	1 N	砂岩	5.1	7.4	3.1	107.21	
600	1954	両刃石斧	1 A 上層	玄武岩	10.2	5.2	3.7	299.76	
601	1954	両刃石斧	1 H 下層	玄武岩	9.6	3.9	3.6	211.62	
602	1954	片刃石斧	1 B 下層	砂岩	4.5	2.2	0.7	11.9	
603	1954	片刃石斧	立石イモ畑	頁岩	5.1	1.7	1	17.79	
604	1954	片刃石斧	1 C 下層	層灰岩	3.7	1	0.6	4.83	
605	1954	磨製石剣		粘板岩	12.8	3.3	1	60.78	
606	1954	敲石	IB 黒土層	凝灰岩	8.2	9.8	4.6	58.0	
607	1954	敲石・磨石	1B 黒土層	凝灰岩	10.6	7.9	4	453.87	
608	1954	砥石	I D 表土層	泥岩	8.5	1.9	0.9	20.9	#1000以上
609	1954	砥石	II 拡張区	泥岩	6.8	1.8	1.5	16.88	#1000以上
610	1954	砥石	1 H 黒褐	砂岩	5.5	4.9	1.2	38.4	#1000以上
611	1954	砥石	2 拡張区	石英斑岩	5.9	4.8	4.1	125.6	#400
612	1954	砥石		砂岩	8	5.9	3	146.9	#400
613	1954	砥石	1 M 黒褐	砂岩	7	8	1.1	83.1	#600
614	1954	砥石	2 拡張区	砂岩	4.5	4.7	1.3	52.9	#1000以上
615	1954	砥石	1 E 黒褐	砂岩	8.6	8.2	2.6	277	#600
616	1954	砥石	最高地点	砂岩	4.4	4.8	2.7	55.2	#600
617	1954	石製支脚	第1トレンチ C-E	玄武岩	18.8	14.3	10.5	1920	多孔質
618	1954	石製支脚	第1トレンチ C-E	玄武岩	35.4	23.5	21.5	10120	多孔質
619	1961	打製石鎌	4 A	黒曜石	2.2	1.7	0.4	1.04	
620	1961	打製石鎌	4 A	黒曜石	1.6	1.6	0.4	0.85	
621	1961	打製石鎌	4 A	黒曜石	2	1.1	0.45	0.77	
622	1951	両刃石斧	e	玄武岩	15.9	5.2	3.2	501.34	
623	1961	片刃石斧	II - ?	砂岩	10.3	6	1.5	144.1	
624	1961	両刃石斧	1 F	砂岩	8.5	4.6	1.7	80.63	
625	1961	石斧		玄武岩	8.6	5.3	3	221.1	
626	1961	石斧未成品?	1 C	砂岩	11.1	7.2	2.1	196.56	
627	1961	片刃石斧未成品	1 S 上層	頁岩	9.9	3.5	3	118.7	
628	1961	石斧未成品?	5 E	ホルンフェルス	7.1	4.9	2	104.7	
629	1961	片刃石斧未成品	1 M 下層	層灰岩	7	3.9	2.6	115.9	
630	1961	石斧	1 E	泥岩	8.2	3.5	2.3	77.51	
631	1961	扁平片刃石斧		層灰岩	5.2	2.2	1	17	
632	1951	柱状片刃石斧	G 第2F	泥岩	13.9	3.7	3.2	322.78	
633	1951	石庖丁未成品	N	董青石ホルンフェルス	13.2	7.5	1	150.62	
634	1951	石鎌	表面採集	董青石ホルンフェルス	5.8	4.8	0.6	27.3	
635	1951	不明石製品	F	緑色岩	5.1	2.2	1.5	31.5	
636	1961	磨製石鎌	1 S	頁岩	4.1	2.4	0.4	14.9	
637	1951	磨製石剣	R	泥岩	5.1	3.2	0.9	13.1	
638	1951	磨製石剣	PQ1	泥岩	3.8	4	1.1	23.7	
639	1961	磨製石剣	1 R 上層	粘板岩	6.8	2.8	0.9	17.7	
640	1961	磨製石剣	1 W 上層	頁岩	4.8	3.7	1.1	27.5	
641	1961	磨製石剣	5 C	頁岩	3.7	3.3	0.8	10.8	
642	1961	磨製石剣未成品	1 Q 下層	層灰岩	3.6	3.4	1.1	21.56	
643	1961	磨製石剣	1 G	頁岩	5.2	2.8	1.1	19.1	
644	1961	石剣未成品?	1 G	安山岩	8.1	4.8	2	95.42	
645	1961	磨製石剣未成品	中 ni	頁岩	9.1	4.5	1.8	92.7	
646	1961	磨製石剣	1 C 表層下	董青石ホルンフェルス	5.3	3.7	0.6	14	
647	1951	磨製石剣	F I	砂岩	5.7	2.5	1	26.2	
648	1961	敲石	1 X 下	玄武岩	13.7	11.1	5	128.0	
649	1961	敲石	1 W	玄武岩	10.7	8.2	6.6	90.0	
650	1961	敲石	中 e	玄武岩	13	10.2	4.5	98.0	
651	1961	敲石	1 W	玄武岩	12.6	11.2	7.1	154.0	
652	1961	敲石	1 E 表採	玄武岩	11.2	9.1	5.5	92.0	
653	1961	敲石	1 A	玄武岩	9.3	6.5	4.6	44.0	
654	1961	敲石	1 N 上層	玄武岩	10.3	8.9	5	72.0	
655	1961	敲石	1 S-T 下層	玄武岩	11.1	8.7	5.8	92.0	
656	1961	敲石	1 S-T 焼土内	玄武岩	10.5	9	5.5	90.0	
657	1961	敲石	1 B	玄武岩	13.1	9	3.8	74.0	

No	調査年度	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
658	1961	敲石	1 S 上層	玄武岩	12.4	9.8	5.5	1080	
659	1961	敲石	4 D 上層	玄武岩	9.9	9.1	5.3	760	
660	1961	敲石	1 区表採	玄武岩	11.8	9.8	5.7	1000	
661	1961	敲石	1 B	玄武岩	11.8	6.6	4.8	500	
662	1961	台石	1 S 上層	玄武岩	16.5	13.5	6.4	2240	
663	1961	磨石	1 A	玄武岩	10.5	8.4	5.3	740	
664	1961	磨石	1 X 上層	玄武岩	17.8	6.3	4	740	
665	1961	磨石	1 A	玄武岩	9.6	9	6.2	800	
666	1961	磨石	1 F	玄武岩	9.8	7.9	4.8	560	
667	1961	磨石	1 区表採	玄武岩	11.2	10.4	5.2	860	
668	1961	砥石		砂岩	4.2	3.3	2.3	48.39	#1000以上
669	1961	砥石		砂岩	5.6	4.8	1.4	38.6	#1000以上
670	1961	砥石		砂岩	5.2	4.4	1.5	41.2	#1000以上
671	1961	砥石	D 1	砂岩	5.3	2.2	2.2	45.53	#1000以上
672	1961	砥石	1 W	砂岩	8.2	6	4.8	414.4	#1000以上
673	1961	砥石	1 E	砂岩	6.9	4.7	1.4	54.4	#1000以上
674	1961	砥石	1 F	砂岩	7.8	5.5	7.9	409.9	#1000以上
675	1961	砥石		砂岩	7.6	5.4	1.3	81.3	#1000以上
676	1961	砥石	4 D	砂岩	8.6	11	6	720	#320
677	1961	砥石	1 D	砂岩	6.7	3.9	3.9	172.48	#1000以上
678	1961	砥石	1 P 上層	砂岩	6.2	2.7	2.8	61.27	#800
679	1961	砥石	5 G	泥岩	13.8	6.8	4.4	720	#1000以上
680	1961	砥石	1 WX	砂岩	4.2	4.9	1.1	31.5	#1000以上
681	1961	砥石	1 区表採	砂岩	11.4	12.7	6.6	1200	#400
682	1961	砥石	1 S 下層の下	砂岩	5.7	5.8	4.3	219.42	#1000以上
683	1961	砥石	1 J	泥岩	13.3	2.6	1.4	74.9	#1000以上
684	1961	砥石	1 O 上層	砂岩	7	6.6	2.2	109.74	#1000以上
685	1961	砥石	東 i	砂岩	4.8	4.1	0.8	25.14	#1000以上
686	1961	砥石	東 f ii	砂岩	7.7	9.9	5.2	450.9	#1000以上
687	1961	砥石	5 上層	花崗岩	7.8	12.4	8.9	920	#1000以上
688	1961	砥石	4 D	砂岩	5.2	11.4	1.5	134.26	#1000以上
689	1961	砥石	2 F 下層	砂岩	9.5	3.9	3.8	155.43	#400
690	1961	砥石	1 R 上層	泥岩	7.9	4.2	0.8	39.1	#1000以上
691	1961	砥石	4 D 上	砂岩	3.5	4.7	2.3	47.61	#800
692	1961	砥石	1 G	砂岩	8	8	4	382.2	#1000以上
693	1961	砥石	1 M	泥岩	3.9	3.3	1.9	37.5	#1000以上
694	1961	砥石	1 S 上層	砂岩	6	4.4	2.4	104.6	#600
695	1961	砥石	1 N 下層	砂岩	17.3	12.8	12.5	3000	#600
696	1961	砥石	ゴマ畑	砂岩	13.6	14.7	5.5	1360	#1000以上

# 第6章 原の辻遺跡出土骨角器

松本圭太

## 1. 鹿角製ヘラ状製品

東亜考古学会による調査で出土した骨角器は2点であり、いずれも鹿角製ヘラ状製品である（図115、図版70-3）。いずれも出土年度や地区、層位は不明であるが、1961年出土遺物と同一の箱で保管されていたことから、同年出土の可能性はある。697は残長12.3cm、最大幅2.6cm、最大厚1.1cm、重量21.4gである。鹿角素材を縦に半裁した後、切断面と両面の先端を丁寧に研磨する。柄部は欠損している。698は残長9.7cm、最大幅2.6cm、最大厚1.0cm、重量17.0gである。こちらは逆に刃部を欠き、柄部を中心に残す。鹿角素材を縦に半裁し、両側面、表面および、内面端部を丁寧に研磨する。上部端はやや薄く加工され、内側に若干の反りを持たせる。697・698は現状では接合しないが、同一個体の可能性がある。

## 2. 原の辻遺跡出土鹿角製ヘラ状製品の位置づけ

ヘラ状製品としては、原の辻遺跡において「アワビオコシ」とされる鯨骨製品が一定数知られている（中尾2005b）。この種の鯨骨製品を「アワビオコシ」とし、銚とともに漁業活動の道具として指摘したのは岡崎敬である（岡崎1968）。同種のもは、カラカミ遺跡でも多く確認でき（例えば主税ほか2013）、唐津市雲透遺跡（仁田坂編1998）でも発見されるなど、西北九州の沿岸地域部に濃密に分布している（中尾2005a）。また、こうした「アワビオコシ」の数量やバリエーションの増加、鉄製のものの出現が、アワビ、ひいては真珠の獲得率向上を示していると考えられる意見も存在する（下條1998）。また、鯨骨製「アワビオコシ」は、西北九州型結合式釣針などとともに縄文時代の西北九州地域に系譜を持ち、それが朝鮮半島や日本海沿岸に展開するようになったと考えられている（中尾2011）。

しかしながら、素材や形態からいって697や698に最も近いものは、鳥取市青谷上寺地遺跡（図116-4、5）や韓国勸島遺跡（図116-1、2）で多く出土した鹿角製品であろう。中尾氏は鯨骨製「アワビオコシ」とともに鹿角製ヘラ状製品に言及し、後者について以下の2類に区分した（中尾2005）。

A類：半裁した鹿角を用い、先端部を中心に薄く仕上げたもの。

B類：基部に角座を取り込み体部以下を半裁して薄く仕上げたもの。角座を丸ごと取り込んだものがB-1類、半裁して取り込むものがB-2類と細分される。

697は欠損品で判別できないが、698はB-2類に相当する。勸島遺跡A地区で出土した鯨骨製ヘラ状製品は1点のみであり、他は鹿骨製（2点）と鹿角製（10点）（武末2008）で、鯨骨製が大部分を占める西北九州とはコントラストをなしている。また、勸島遺跡から北部九州系の弥生土器が出土することなどから、西北九州の鯨骨製品が、勸島遺跡で材質転換した可能性が示唆されている（武末

表4 原の辻遺跡出土骨角器観察表

遺物番号	調査年	出土区・層位	器種	残長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
697	1961?	不明	鹿角製ヘラ状製品	12.3	2.6	1.1	21.4
698	1961?	不明	鹿角製ヘラ状製品	9.7	2.6	1.0	17.0

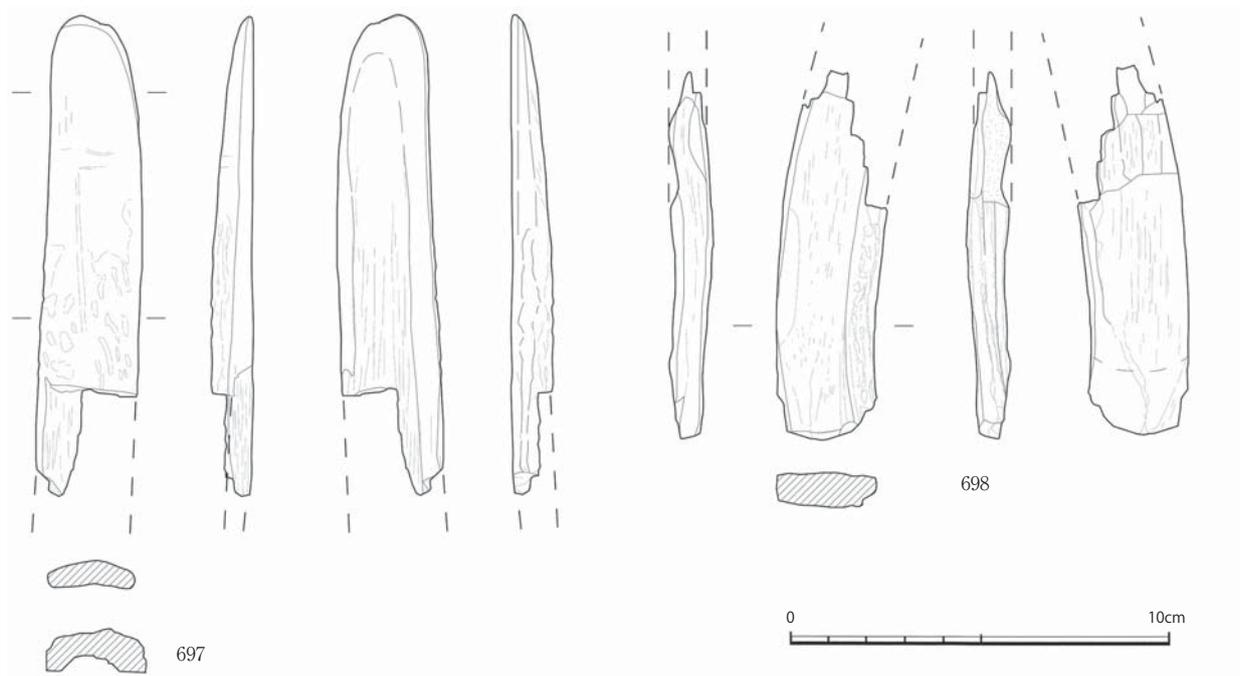


図115 原の辻遺跡出土骨角器

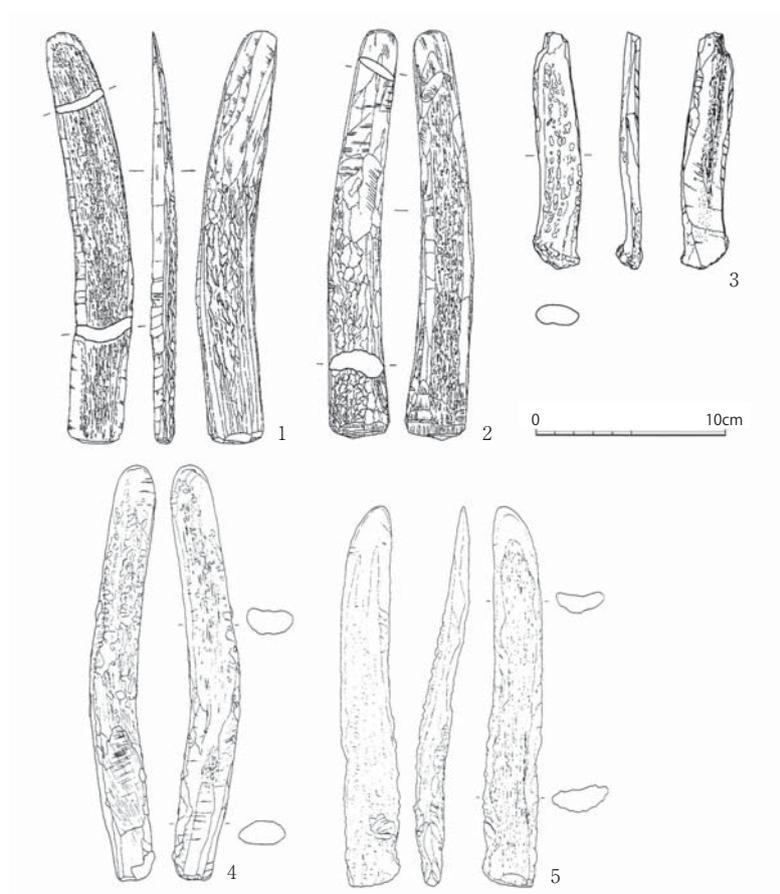


図116 各地の鹿角製ヘラ状製品  
(1、2：勅島遺跡、3：雲透遺跡、4、5：青谷上寺地遺跡)

2008)。また、青谷上寺地遺跡の鹿角製品についても、北部九州の鯨骨製がもとになったことが指摘されている(中尾2005b、武末2008)。なお、鹿角ヘラ状製品は、西北九州でも少ないながら、唐津市雲透遺跡(仁田坂編1998)(図116-3)や下関市綾羅木郷遺跡(田中1981)でも出土している。あるいは、形態はやや異なるものの、カラカミ遺跡出土品(主税2011、図80-478)も類例の1つとして位置づけられるかもしれない。

武末氏も指摘するように、鹿角製ヘラ状製品は靛島遺跡と山陰地域に見られる一方、西北九州には希薄であり、空間的につながりにくいという問題が存在した(武末2008)。697・698は、壱岐島出土としては初めて報告される鹿角製ヘラ状製品である。出土地点・層位が不明な点が惜しまれるが、こうした問題に一石を投じるものとして、また当時の半島・西北九州・山陰の海岸ルートを繋ぐ上で極めて重要な資料であると考えられる。

## 引用文献

- 岡崎敬1968「倭の水人」『日本民族と南方文化』平凡社、pp.93-125  
下條信行1998「倭人社会の生活と文化」『古代を考える 邪馬台国』吉川弘文館、pp.247-264  
武末純一2008「韓国・靛島遺跡のアワビおこし」『九州と東アジアの考古学 上巻』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会、pp.93-110  
田中良之1981「骨角牙器」『綾羅木郷遺跡 発掘調査報告 第1集』下関市教育委員会、pp.477-480  
主税英徳2011「出土骨角器」『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、pp.113-119  
主税英徳・金民善・末廣いづみ2013「出土骨角器」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室、pp.120-129  
鳥取県埋蔵文化財センター編2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告5 骨角器(1)』  
中尾篤志2005a「鯨骨製アワビおこしの拡散とその背景」『西海考古』第6号 pp.85-101  
中尾篤志2005b「骨角器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』長崎県教育委員会、pp.199-202  
中尾篤志2011「九州地方の骨角器」『弥生・骨角器サミット』鳥取県埋蔵文化財センター、pp.38-45  
仁田坂聡編1998『雲透遺跡(Ⅰ)』唐津市教育委員会

## 図版出典

- 図116 1、2：武末2008-図1-6、10、3：仁田坂編1998-Fig 54. 21、4、5：鳥取県埋蔵文化財センター編2010-図27-243、245

# 第7章 原の辻遺跡出土青銅器

松本圭太

## 1. 銅鏃・銅製品

銅鏃は全て有茎二翼鏃である。699～701は1951年第1次調査の出土である。699はr区出土で、残長4.4cm、刃部最大幅1.0cm、刃部最大厚0.6cm、重量4.4g。刃部先端数ミリを欠く。6点のうち最も厚みがあり、鏃が明瞭である。逆刺も窪み状の鑄バリを残すものの、よく表現されている。2枚の鑄型の合わせ目（範線）を茎の側面に残す。メタル部分は良好に残っており、一定方向への研ぎも観察できる。全体的に白緑色を呈する。700はpq区出土で、残長3.8cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.2cm、重量1.8g。刃部先端数ミリを欠く。699を全体的に扁平にしたような形態である。鏃や逆刺の表現も曖昧になっている。全体的に白緑色を呈するが、表面が剥がれた青緑色の部分が散見される。701は出土区不明。全長4.0cm、刃部最大幅1.5cm、最大厚0.4cm、重量5.9g。699や700より横幅が随分広く、身部が大きい。鏃や逆刺部分の窪みが確認できるが、全体は土錆に覆われており、鑄造痕跡等の詳細は判断しづらい。

702～704は1961年第5次調査の出土である。702はIJ区表土層出土。残長3.3cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.5cm、重量2.1g。刃部先端1ミリ程度を欠く。形態的には699に似ているが、厚みや各部位の明瞭さは薄れている。鏃や逆刺部分の窪みは部分的には明瞭であるが、全体は土錆に覆われている。703は第4トレンチA区掘り上げ土内出土であり、残長2.8cm、刃部最大幅1.0cm、刃部最大厚0.4cm、重量2.0gである。刃と茎の両端に表面剥離が認められ、本来は数ミリ長かったものと思われる。幅広である701に形態では類似する。全体的に表面をよく保っており、平行の研ぎ跡を確認できる。全体は薄緑色を呈する。704は1P区表採品である。残長3.5cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.3cm、重量3.1gで、形態上は700に近いが、鏃や逆刺部分の窪みもおおよそ不明瞭である。また、茎が一方方向に少し曲がっている。全体のおよそ半分に土錆が付着する以外は、水色に近く、700～704とは金属の質感をやや異にし、全体に摩滅感がある。

705は出土年度不明であるが、日誌の記載から判断すると、1953年第2次調査の出土品である可能性がある。長さ3.7cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.4cm、重量2.1g。702にやや類似した形態である。全体が緑青に覆われ、内部まで腐食されているが、鑄型の合わせ目や刃部表面の研磨痕は確認できる。706も出土年度不明である。残長1.9cm、最大幅0.4cm、最大厚0.2cm、重量0.9gで銅鏃の茎部分かと思われる。全体的に摩滅しており、断面は楕円形を呈する。2つに破断しているが、金属質がある程度は残している。

原の辻遺跡では、これまでに180点以上の銅鏃が出土している。福田一志によれば、弥生時代前期末から後期に使用された大原地区の墓域出土の銅鏃の一部には以下の特徴があるとされる（福田2005）。（Ⅰ）5cmを越す身長で、逆刺は短いが鋭利である。（Ⅱ）茎上部に篋被関節があり、それを中心に樹皮を巻き付けている。（Ⅲ）茎はかなり研ぎ出したあとがあり、六～八角形を呈する。これらの特徴を有する銅鏃は、原の辻遺跡の中でも形態的に統一性があり、本遺跡の弥生時代中期後葉の形態的特徴として捉えられることから、原の辻型銅鏃として認識されている。これらについては棺外副葬品であった可能性が指摘されている。さらに福田は、原の辻遺跡出土銅鏃全体を以下のように5区分している。A類：上記の原の辻型銅鏃、B類：A類からやや退化し、篋被関節の造りが雑で

やや扁平となるもの。C類：逆刺の造りが弱く、篋被関節が消滅する一方、樋をもつもの。D類：逆刺は短いが鋭いもの。逆刺は、茎の側面から削り出される。E類：茎が刃部よりも長くなる、概ね雑な造りのもの。そして、時間的形態変化については定かでないといわれるものの、概ね原の辻型のようないろんな造りのものから、篋被関節や茎の面取りが退化していき、全体的に扁平になる傾向が指摘されている（福田2005）。この分類に基づけば、本報告の銅鏃は、およそD・E類に該当し、原の辻集落のなかでもやや下る時期のものであることが予想される。

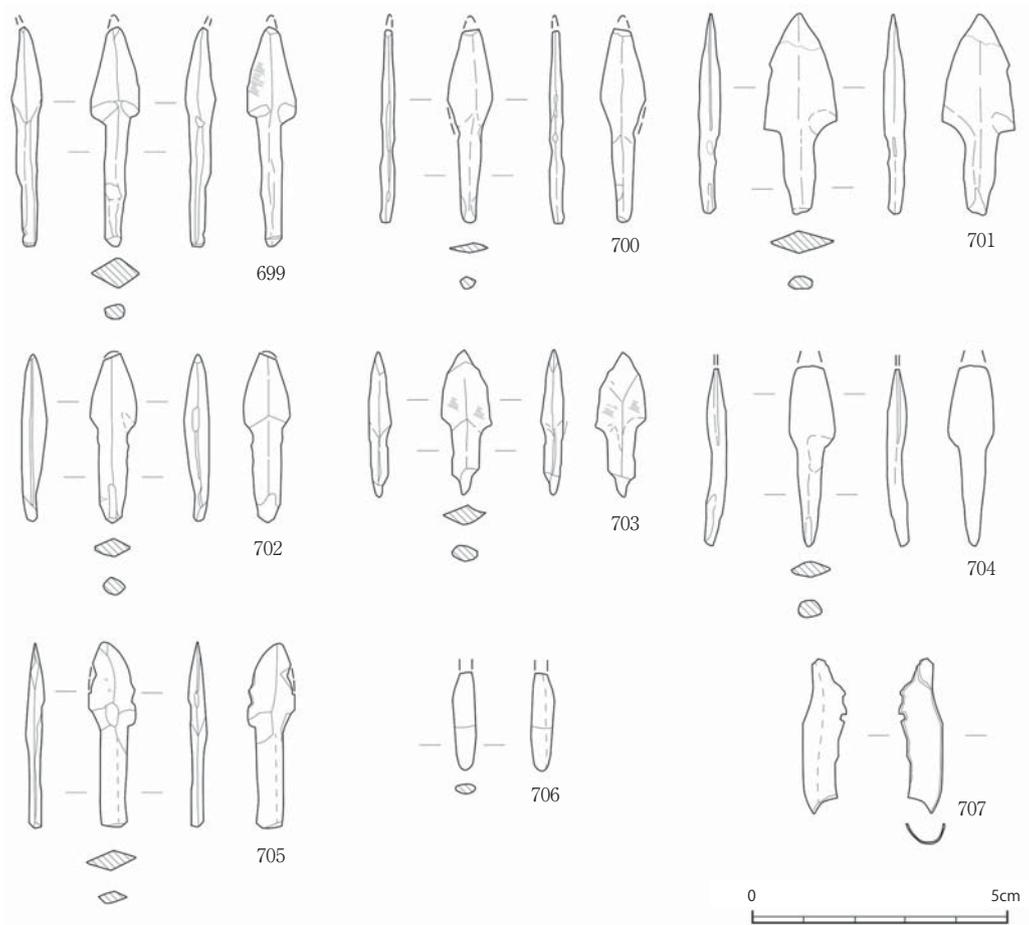


図117 原の辻遺跡出土青銅器

表5 原の辻遺跡出土青銅器観察表

遺物番号	調査年	出土区・層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
699	1951	r 区	鏃	(4.4)	1.0	0.6	4.4
700	1951	pq 区	鏃	(3.8)	0.9	0.2	1.8
701	1951	不明	鏃	4.0	1.5	0.4	5.9
702	1961	第1トレンチJ区表土層	鏃	(3.3)	0.9	0.5	2.1
703	1961	第4トレンチA区掘り上げ土	鏃	(2.8)	1.0	0.4	2.0
704	1961	第1トレンチP区採集	鏃	(3.5)	0.9	0.3	3.1
705	不明		鏃	3.7	0.9	0.4	2.1
706	不明		鏃	(1.9)	0.4	0.2	0.9
707	1953	第4トレンチH・I	不明	(3.0)	(0.8)	<0.1	0.8

707は器種不明の銅製品である。1953年第2次調査第4トレンチH・I区の間、地表下50cmから出土した。残長3.0cm、残幅0.8cm、厚さは0.1cm以下である。重量は0.8gであるが、土錆を含むものである。全体は歪な管状を呈し、長さに沿って半分程度が残存する。緑青に覆われる。

## 2. 貨泉

調査日誌によれば、1951年8月2日、第1トレンチe・f区にて、第一層土器を採取、掘り下げ中に、f区第一包含層より発見された。本層からは他に棒状鉄製品、石斧、鉄斧が出土した。発掘調査で見つかった貨泉としては、日本で初めての事例であり、学史的にも貴重である。第1トレンチf区からは、西新式土器が多く出土しており、埋没時期は弥生終末～古墳前期以前である可能性が高い。

この貨泉は、直径2.3cm、方孔0.7cm、厚さ0.2cm、重量は2.0gである。水野清一・岡崎敬による概報では、輪郭・文字共にすどく、摩滅痕はないとされており（水野・岡崎1954）、現状でも変化はない。割れ口は全体が緑青に覆われており、内部まで金属の腐食が確認できる。

## 3. 現存しない青銅器

東亜考古学会による原の辻遺跡調査では、以上の他にも青銅器が出土したことが調査日誌から伺えるが、いずれも現存しない。調査日誌に基づき、出土年月日と場所を以下に記載する。

銅鏡

1953年7月31日第2トレンチQ区

銅釧

1953年8月7日第2トレンチD2区柱穴

銅鏃

1953年7月30日第2トレンチK区

1953年8月2日第3トレンチF区褐色層

1953年8月3日第3トレンチE区褐色層

1953年8月5日第3トレンチF区第7柱穴

1953年8月7日第2トレンチD1区ピット

器種不明銅製品

1953年8月8日第4トレンチT区

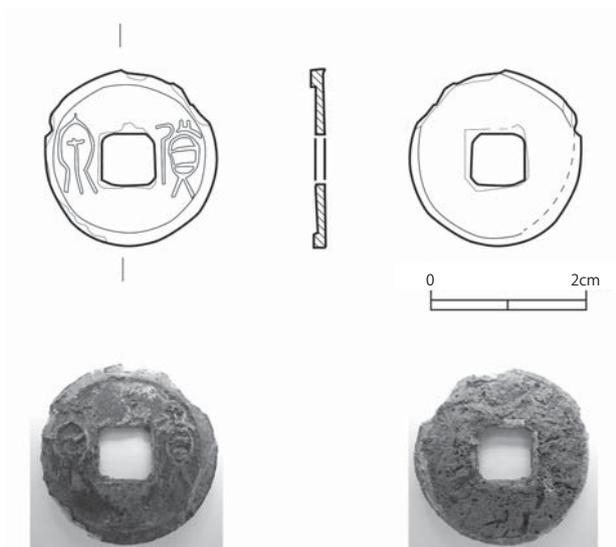


図118 原の辻遺跡出土貨泉

### 引用文献

福田一志2005「青銅器」『原の辻遺跡 総集編I』長崎県教育委員会、pp.179-189

水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺蹟調査概報」『対馬の自然と文化』古今書院、pp.259-309

# 第8章 原の辻遺跡出土鉄器

宮本一夫

## 1. 鑄造鉄器

708・709は鑄造鉄斧刃先である（図119、図版73）。708は1953年第2次調査時の採集品である。709は1953年第2次調査の第4トレンチE区から出土している（図20）。この地点は壱岐市調査の1号土器溜まりに相当し（長崎県壱岐市教育委員会2009）、それに伴うものであるかもしれない。1号土器溜まりは須玖Ⅰ式と須玖Ⅱ式の弥生中期の土器から構成されており、この鑄造鉄斧もその時期のものであろう。710は出土地不明の鑄造鉄斧の胴部側面部分である（図119、図版71）。釜部断面は長方形をなし、燕系の鑄造鉄斧である可能性がある。708・709の鑄造鉄斧刃先と710の鑄造鉄斧は、同一器種のものであり、燕や細竹里・蓮花堡類型あるいは朝鮮半島西南部の粘土帯土器文化に伴う鑿（宮本2021・2023）に相当するものの可能性がある。第9章の金属学的調査によれば、708・709は焼なまし

がされているところからみても、鑿である可能性が高い。

## 2. 鍛造鉄器

### (1) 袋状鉄斧（図120・121、図版71・74-1・2）

712～715は、鍛造の袋状鉄斧である。712・713は、袋部と刃先の間がやや段状をなすのに対し、

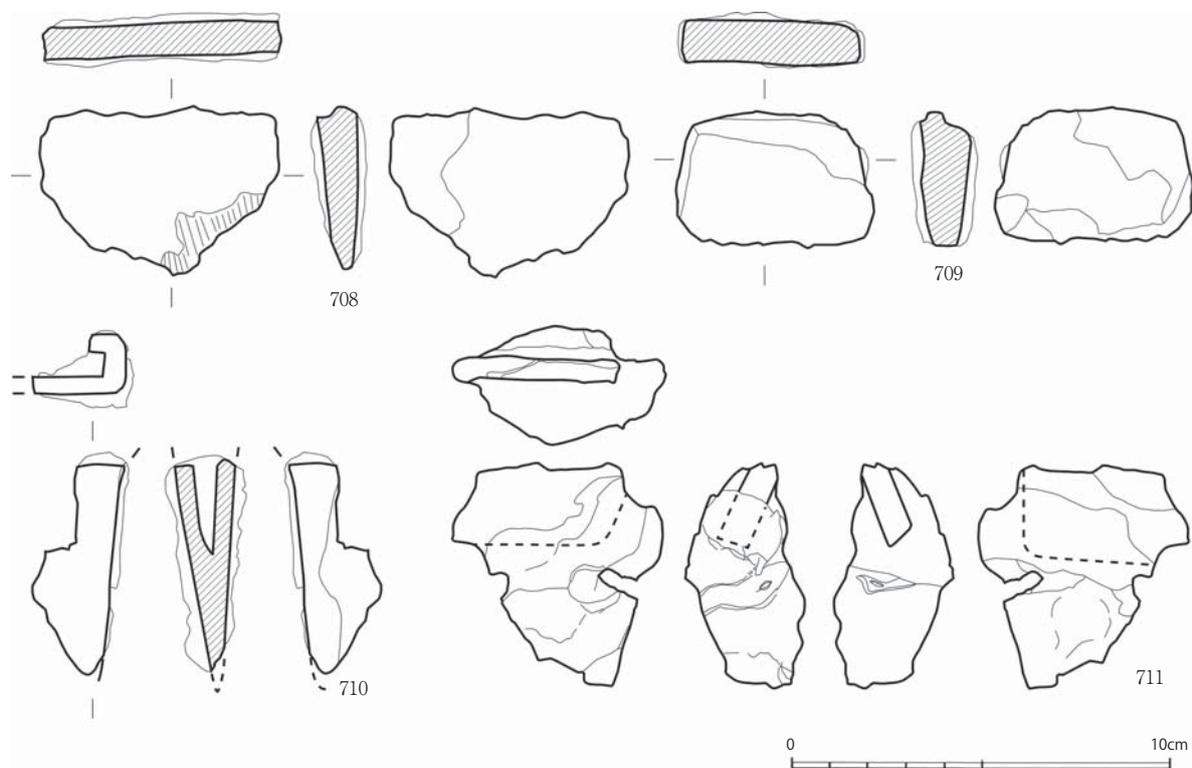


図119 原の辻遺跡出土鉄器（1）

表6 原の辻遺跡出土鉄器集成表

番号	調査年度	トレンチ	調査区	遺構・層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
708	1953		採集		鑄造鉄斧	4.5	6.3	1.0	92.4
709	1953	第4	E区		鑄造鉄斧	3.5	5.2	1.4	105.2
710					鑄造鉄斧	5.7	2.3	1.5	32.4
711	1953	第4	H区		鉄片	1.7	4.4	0.6	76.9
712	1951	第1	f区		袋状鉄斧	7.7	3.7	1.7	63.8
713	1961		採集		袋状鉄斧	6.7	4.5	1.4	97.9
714	1951	第1	p・q区	内環濠?	袋状鉄斧	7.8	3.6	1.8	69.9
715	1961	第1	J区		袋状鉄斧	5.2	2.1	1.0	27.9
716	不明				袋状鉄斧	8.0	4.1	2.3	127.4
717	不明				袋状鉄斧	6.0	2.9	1.0	30.0
718	1953	第2	Q区		鋤先	9.6	8.8	1.4	141.5
719	1953				鋤先	7.9	9.7	1.5	126.8
720	1953	第2	Q区		鋤先	4.9	6.9	1.3	37.3
721	1951				板状鉄斧	13.4	6.3	0.4	143.9
722	1961		採集		鑄造鉄鏟	3.6	3.1	0.7	17.1
723	1951	第1	h区		釣針	2.6	2.2	0.5	2.7
724	1961	第1	Y区	上層	釣針	1.9	1.1	0.3	0.6
725					鎌	3	3	0.6	12.1
726	1961				鎌	4	4.2	0.4	31.5
727	1954	第1	A区		鎌	8.2	2.8	0.2	46.4
728	1961				剣	8.3、7.2	3.3、3.6	0.3	81.3
729	1961	第5	H区	黒土層	鏃	5.5	1.8	0.5	7.0
730	1953	第2	U区		鏃	3.8	1.9	0.5	5.0
731	1953				刀子	7.0	1.7	0.5	41.1
732	1961	第1	S区	下層	刀子	7.0	3.2	0.5	44.2
733	1953	第2	R区		鉄片	6.0	2.0	0.3	9.9
734	1953	第2	Q区		鉄片	4.6	1.7	0.3	8.6
735	1953	第4	G区		鉄片	1.7	1.7	0.3	3.7
736	1953	第2	O・P区		鉄片	5.3	2.9	0.2	9.2
737					鉄素材	3.7	2.0	0.4	6.1
738	1953	第2			鉄素材	3.6	1.2	0.4	4.1
739	1953	第2	E区		鉄片	2.4	2.2	0.2	2.7
740	1961	第1	L区	上層	鉄素材	2.5	2.4	0.4	9.2
741	1961	第5	C区		鉄素材	5.9	3.8	0.8	91.5
742					鉄素材	3.6	2.6	0.5	27.3
743	1953	第2			棒状鉄素材	10.9	1.2	0.7	30.5
744	1953	第2	P区		棒状鉄素材	7.1	7.1	0.7	13.7
745					棒状鉄素材	5.0	1.2	0.5	16.0
746	1953	第4	採集		鑿状鉄製品	7.5	1.5	1.6	56.3
747	1953	第2	S区		棒状鉄素材	2.9	1.5	0.6	6.7

714・715は袋部と刃先がほぼ直線をなすものである。朝鮮半島東南部の鍛造鉄斧では、前者から後者へと変化するものと考えられ（宮本2021・2023）、北部九州の鍛造鉄斧も朝鮮半島東南部のものと何らかの関係があるとすれば、前者から後者への変化が想定できる。712・714・715は、1951・1961年の第1次・第5次調査第1トレンチの内環濠ないしその付近から出土しており、出土地点は比較的近接している。したがって、弥生中・後期のものということができよう。

716・717は原の辻閼遺跡出土と表記されていたが、1954年の閼遺跡の調査日誌にはこれら鉄器の出土の記載がなく、閼遺跡出土品とは認定できない。そこで、原の辻遺跡出土の不明鉄器として取り扱う。ともに鍛造の袋状鉄斧である。716はほぼ完形であるが、717は破片で、袋状の折り曲げ部分も欠損している。

## (2) 鋤先 (図122、図版71)

718～720は鋤先である。岡崎敬が報告した3例（岡崎1956）が、これらにあたる。縦長長方形タイ

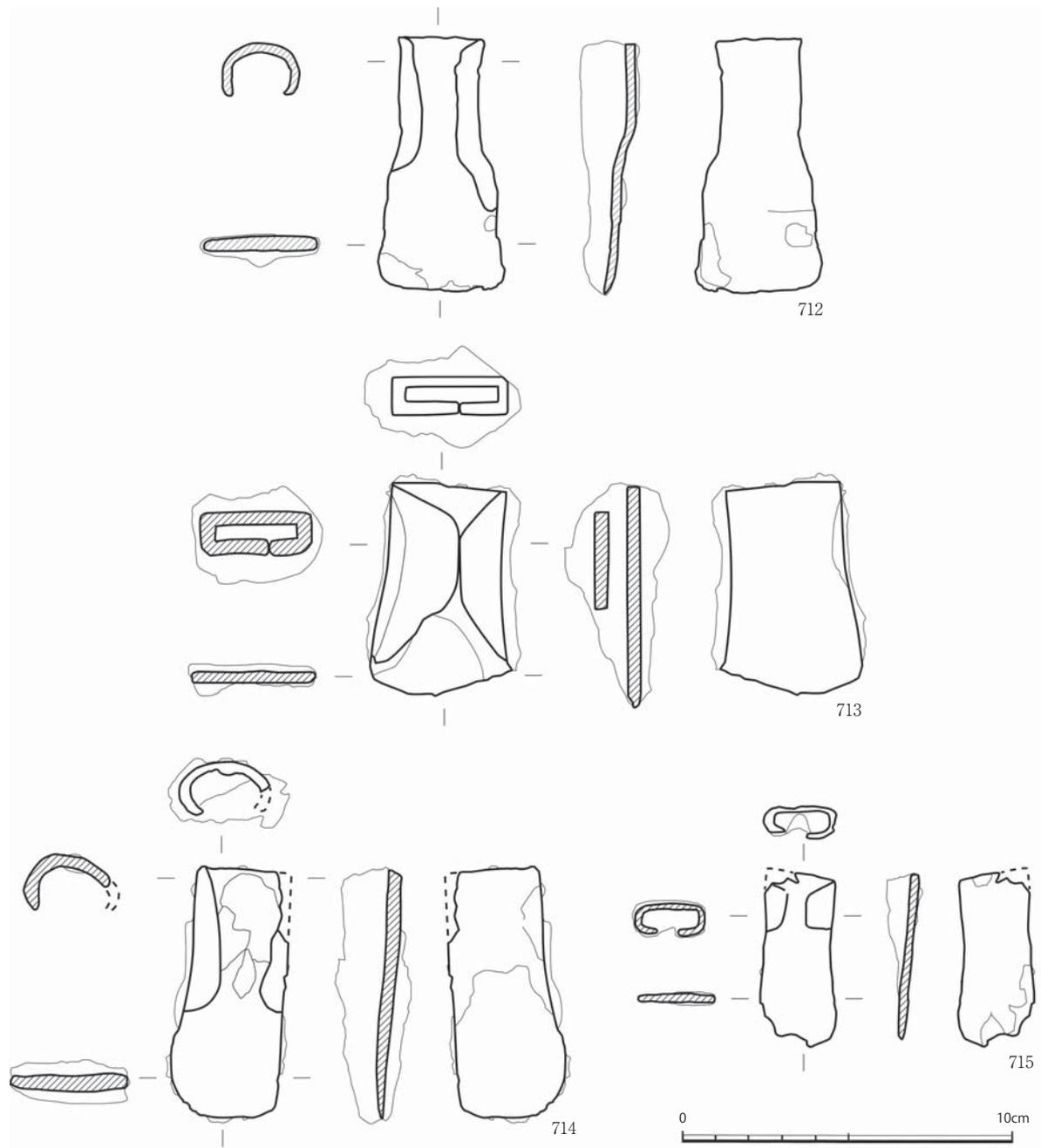


図120 原の辻遺跡出土鉄器 (2)

プのもので、川越哲志の分類の A 1 類にあたる (川越1993)。

(3) 板状鉄斧 (図123、図版71)

721は、岡崎敬が鉄素材と考えたものであるが (岡崎1956)、ここでは板状鉄斧と呼んでおく。刃先部分がないので斧であったかは不明であるが、用途的には鉄素材の可能性が高いものである。

(4) 鎌 (図123、図版71)

725~727が鉄鎌と考えられる。725は基部で折り返し部が認められるが、破損しており、基部の幅や形は不明である。また、刃先の形態も不明であり、折り返しが右にあるのか左にあるのかは不明と言えよう。726は比較的幅広であり、弥生時代のものであろう。前者は出土地不明であるが、後者は

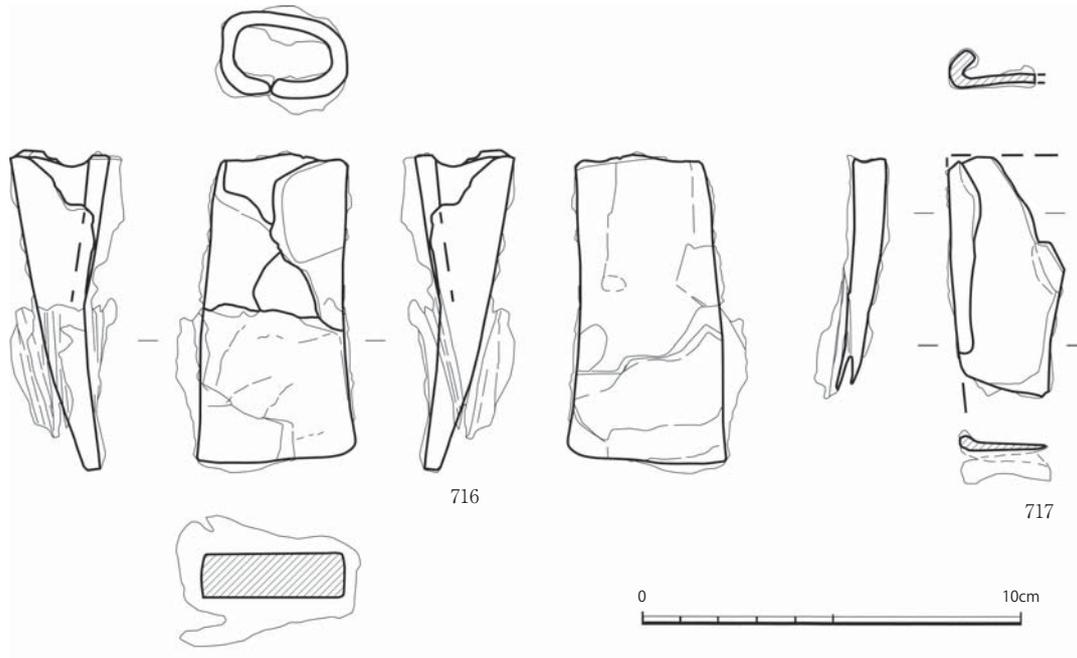


図121 原の辻遺跡出土鉄器（3）

1961年の第5次調査のもので、弥生時代層出土のものと思われる。727は1954年第4次調査第1トレンチA区出土の鉄鎌である。鉄鎌は弥生時代のものに比べ幅狭である点と、A区からは古墳時代前期の土器も出土しているところから、727の鉄鎌は古墳時代前期のものであろう。

**(5) 釣針**（図123、図版71）

723・724が釣針である。724は1961年第5次調査第1トレンチY区出土で、内環濠に相当し、環濠内出土物である可能性がある。723も1951年の第1次調査出土のものであり、724の出土地点に近いところで出土した可能性がある。

**(6) 武器**（図124、図版71・72）

728は鉄剣と考えられるものである。断面は鑄をもたないレンズ型をなし、厚さが3mmと薄く、北部九州の在地産のものであろう。

729・730は有茎鉄鏃で、両者ともに茎部分が遺存している。729は1961年調査の第5トレンチのH区から出土している。第5トレンチは、当初A区～G区が設定され、さらに南側に拡張したトレンチがH区であり、外環濠に相当する可能性がある。

731・732は刀子である。両者ともに脊の厚さが5mmと比較的厚く、刀子というよりは大刀である可能性がある。732は1961年第5次調査の第1トレンチS区下層で出土している。これは内環濠の下層に相当し、弥生中期のものである。素環頭大刀などの舶載品である可能性があろう。

**(7) 鉄片**（図125、図版72）

733～736・739は鉄片である。それらは厚さが2mmと薄いもので、鉄片とした。それらはすべて1953年の第2次調査のものであり、集落の中心地がから出土したものである。733・734・736は、第2次調査第2トレンチのO区～R区にかけて出土している。原の辻遺跡ではこれまで鍛冶炉は発見されていないが、多くの鉄片がまとまって出土しているところから、近くに鍛冶炉が存在していた可能性は高い。

**(8) 鉄素材**（図119・125・126、図版72・73）

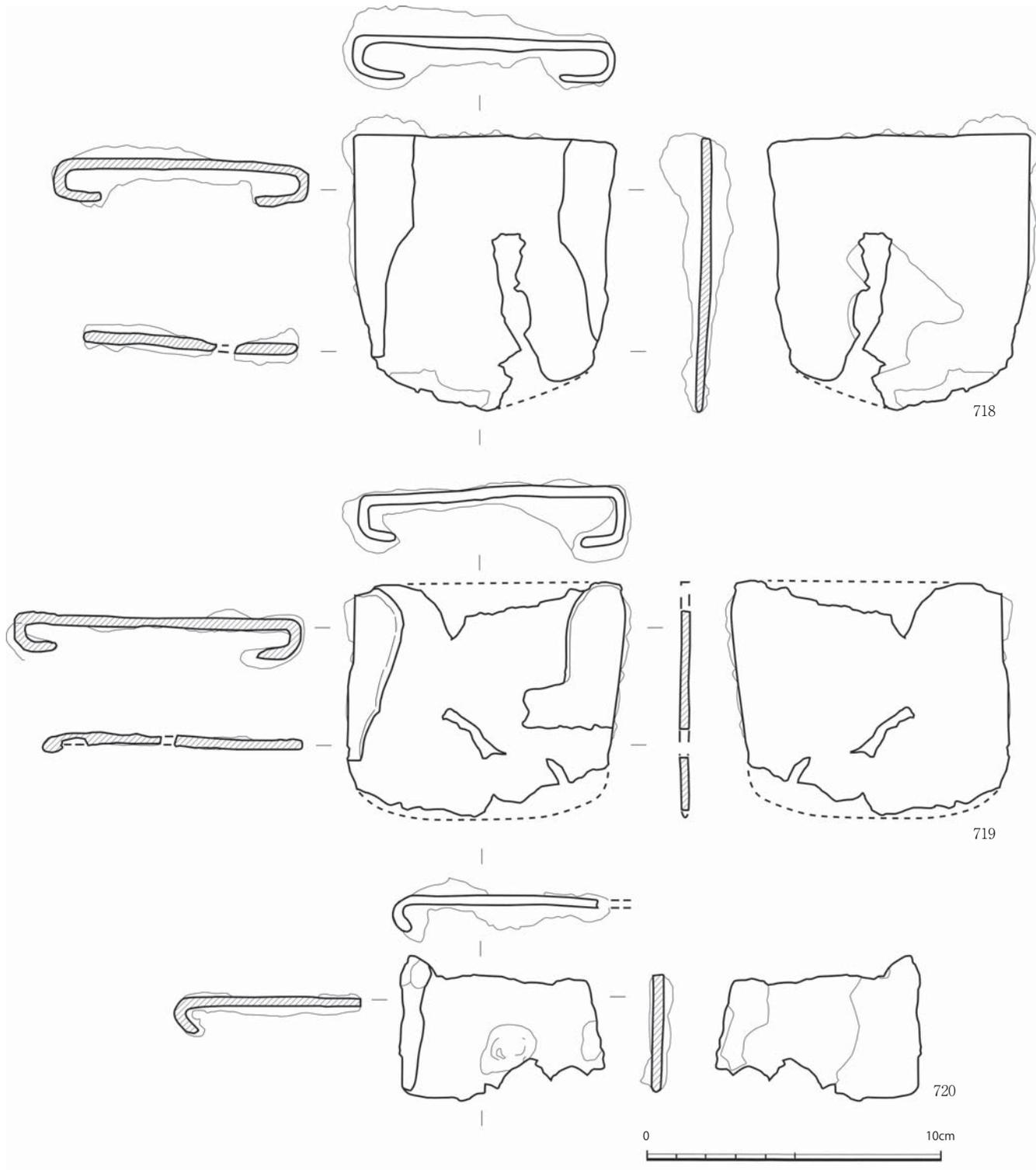


図122 原の辻遺跡出土鉄器（4）

711は、当初スラッグの可能性もあったが、第8章のX線CT調査の結果、鉄板が完全に腐食化して土器片とともに土で覆われたものであった。板状鉄素材の可能性はある。740は厚さが4mmと比較的厚く、鉄素材の可能性はある。741は厚さ8mm、742は厚さ5mmとさらに厚い板状の鉄器であり、鉄素材である。741は1961年第5次調査の第5トレンチのC区から出土している。こ

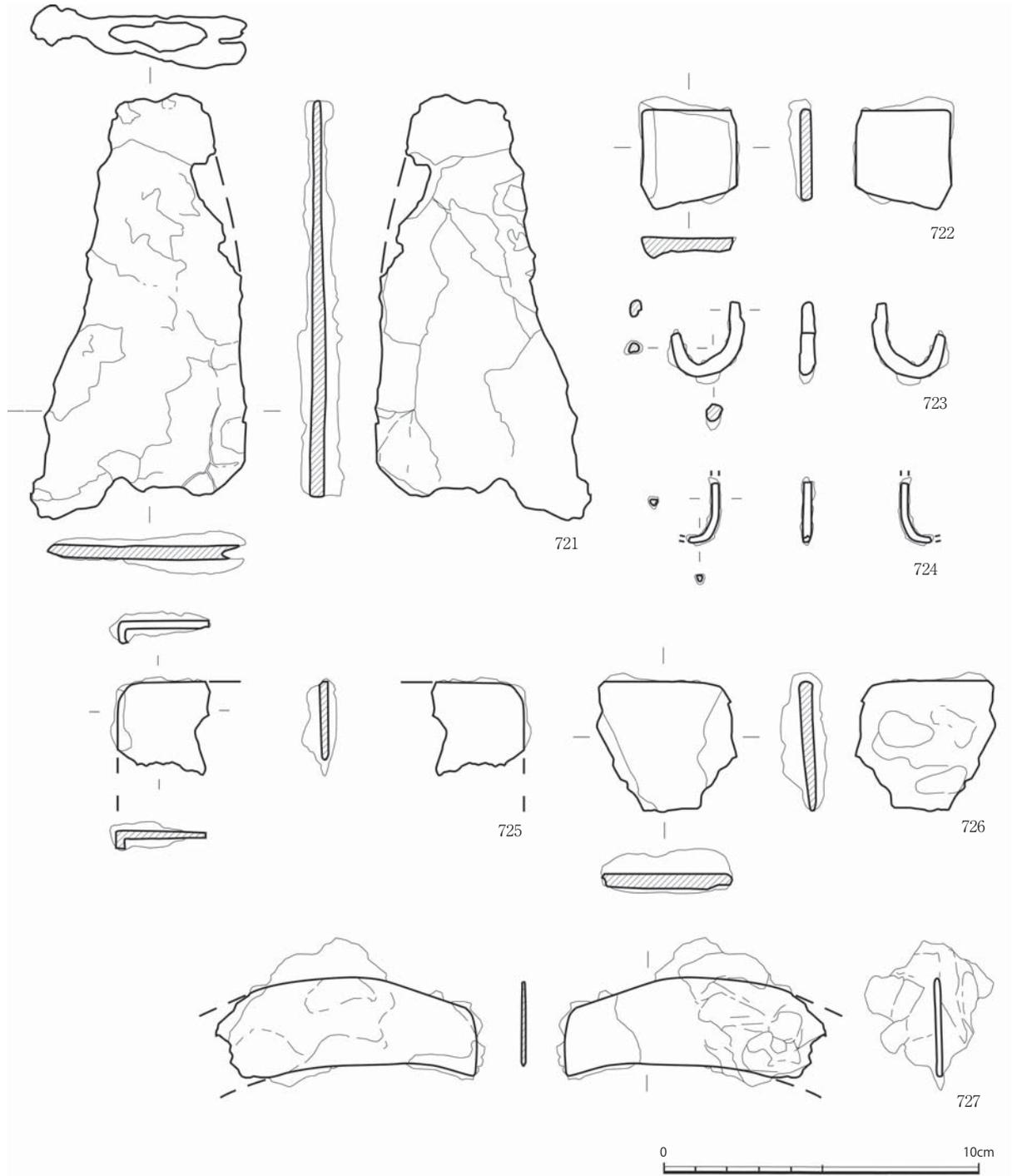


図123 原の辻遺跡出土鉄器（5）

こは外環濠に相当し、741が環濠出土のものであれば、弥生後期～古墳前期のものである可能性がある。出土地不明の742も板状鉄素材である。

743～747は棒状鉄素材と考えられるものである。744は1953年第2次調査の第2トレンチP区出土の棒状鉄素材で、鉄片が比較的多く出土とした地点から出土している。743や747も、1953年第2次調査第2トレンチ出土の棒状鉄素材である。原の辻遺跡の集落の中心に位置する1953年第2次調査第2トレンチは、多数の鉄片や棒状鉄素材が出土しており、鍛冶関連遺構が存在した可能性がある。なお、

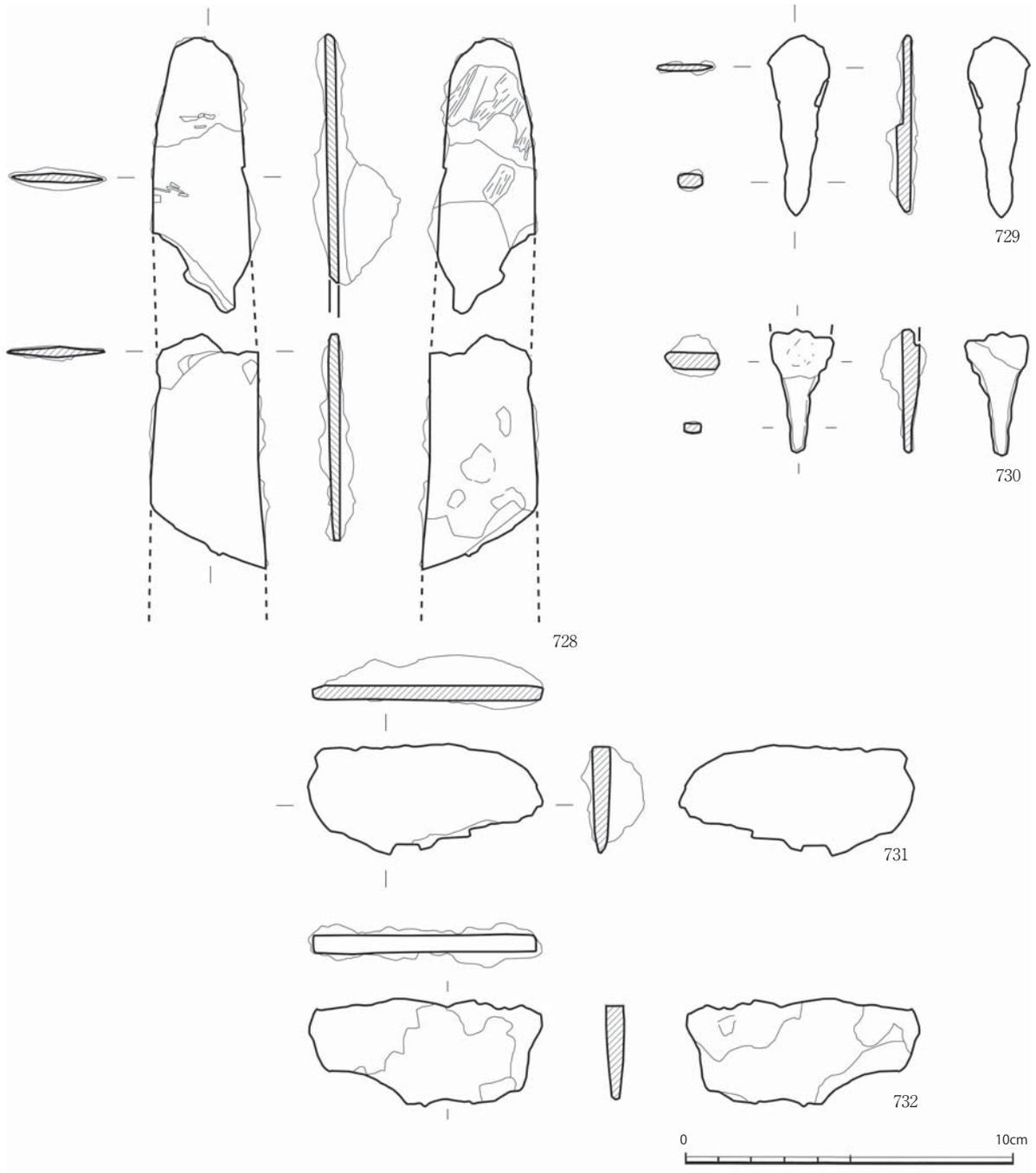


図124 原の辻遺跡出土鉄器（6）

746は棒状素材と考えたが、第9章の X 線 CT 調査などでは、先端が次第に厚みを減じており、鑿状の鉄製品である可能性もある。

### 3. まとめ

燕系の鑄造鉄斧である鑿が出土している。弥生時代中期のものである可能性があり、細竹里・蓮花堡類型などの遼東から朝鮮半島北半で製作された鑄造鉄斧（宮本2021・2023）がもたらされている可

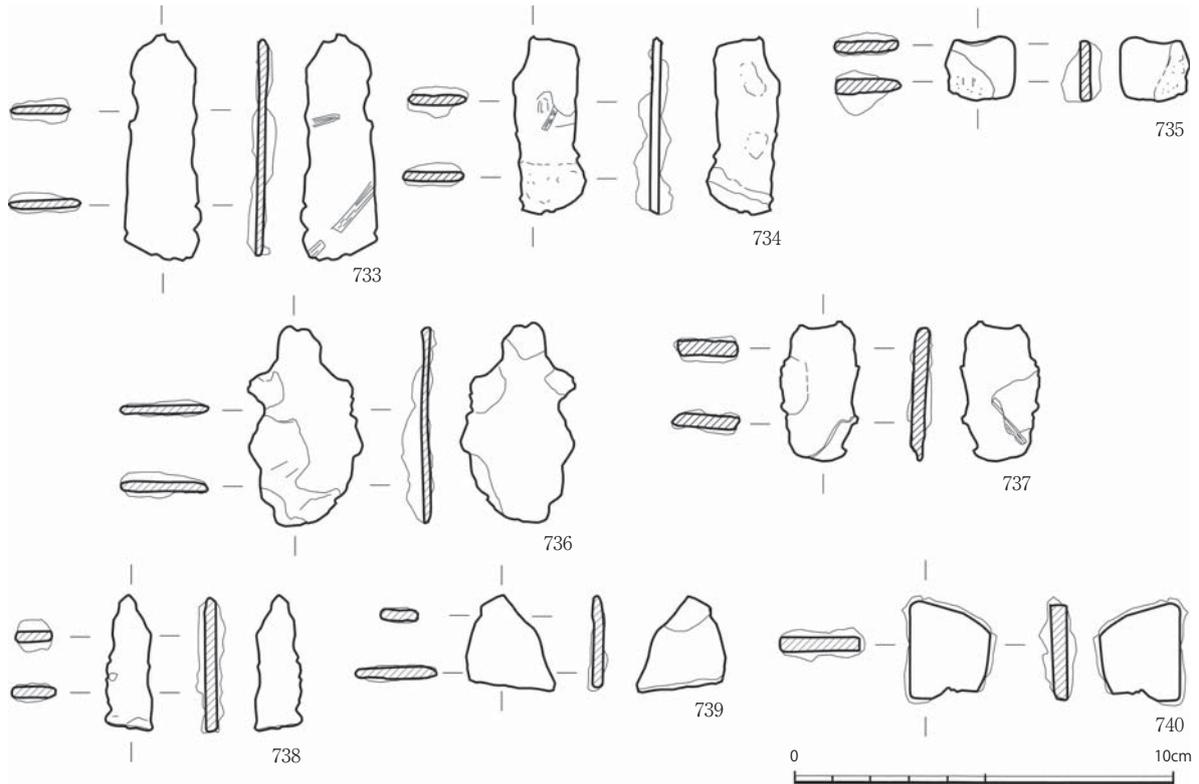


図125 原の辻遺跡出土鉄器（7）

能性がある。原の辻遺跡では東周式銅剣の破片が出土しているように（福田2005）、朝鮮半島西南部の細形銅剣文化とともに、鑄造鉄斧が弥生前期末から弥生中期前半にかけてもたらされた可能性がある。その後、袋状鉄斧、鉄鋤、鉄鎌などの鉄製農工具は、弥生中期後葉以降から古墳時代前期の間で、原の辻遺跡内で鍛冶によって生産されたものである。また、農工具以外にも鉄製釣針が存在し、原の辻遺跡では、農耕のみならず漁撈活動もなされていたことが理解される。

1953年第2次調査第2トレンチのO・P区を中心に棒状鉄素材や鉄片が出土するとともに、鉄器加工具と考えられる叩石なども出しているところから、この周辺に鍛冶炉が存在していた可能性がある。1953年調査の第2トレンチからはこの他板状の鉄素材も出土しており、第2トレンチのような集落遺跡内部には鍛冶遺構が存在していた可能性が高く、鉄器の生産が行われていたであろう。比熱した砥石（図114-696、図版64-696）や金属器を加工する際にできる溝条痕をもった砥石（図114-695、図版64-695）が、1961年の第1トレンチの環濠内から出土している。こうした資料も（森2013）、集落内部での鍛冶による鉄器生産が行われていたことを示している。

このように、弥生後半期～古墳時代前期の鉄製農工具は、朝鮮半島からもたらされた鉄素材を基に鍛冶によって生産されたものである。一方、原の辻遺跡では鉄剣、鉄刀、鉄鎌などの鉄製武器も出土している。鉄鎌は形態からみて舶載品ではなく在地産である。鉄剣も厚さ3mmと薄く、国内産の可能性が高い。一方、鉄刀は脊が5mmと比較手厚く、精巧なものである。732は1961年第1トレンチS区の内環濠下層で出土しており、弥生中期のものである可能性がある。したがって、舶載品の可能性のあるものである。

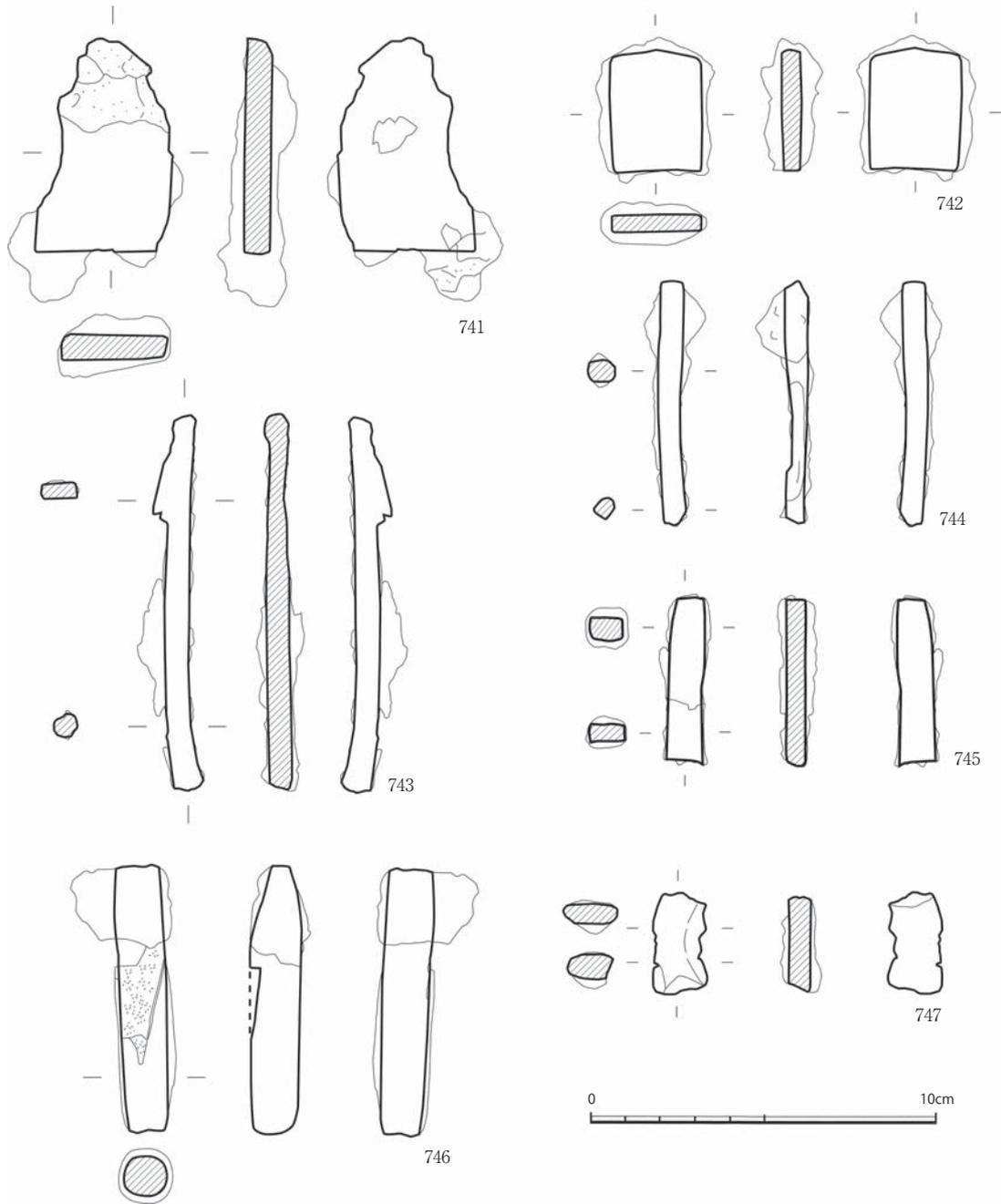


図126 原の辻遺跡出土鉄器（8）

参考文献

- 岡崎敬1956「日本における初期鉄製品の問題－沓岐ハルノツジ、カラカミ遺跡を中心として－」『日本考古学雑誌』第42巻第1号、14-29頁
- 川越哲志1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- 長崎県沓岐市教育委員会2009『特別史跡 原の辻遺跡―史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査―高元Ⅷ区・原ⅩⅤ区・原ⅩⅦ区』（沓岐市文化財調査報告書第1集）
- 福田一志2005「青銅器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）179-189頁
- 宮本一夫2021「朝鮮半島における初期鉄器時代の始まり」『史淵』第159輯、37-84頁
- 宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣
- 森貴教2013「カラカミ遺跡出土砥石の検討」『沓岐カラカミ遺跡Ⅳ－カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査（1977・2011年）―』九州大学人文科学研究院考古学研究室、169-182頁

# 第9章 原の辻遺跡出土鉄製品の調査

鈴木瑞穂

## 1. 調査対象

1953年第2次調査で表面採取された鉄製品2点、同調査第4トレンチ出土から鉄製品2点の計4点を調査した。鑄造鉄斧（図119-708）がNRN-1、鑄造鉄斧（図119-709）がNRN-2、棒状素材または鍛造鉄器（図126-746）がNRN-3、鉄製品（土器付着）（図119-711）がNRN-4に対応している。

## 2. 調査方法

### (1) X線CT調査

X線CT（ニコンインテック社製STH450）を用いて、鉄製品の厚さ・縦・横3方向の断層画像を0.5mm間隔で撮影した。これらの画像をもとに、各断面の形状を精査した。

表7 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	計測値		調査項目					備考
				大きさ(mm)	重量(g)	X線CT	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	EPMA	
HRN-1	原の辻 (1953年調査)	バス道路寄栗畑表面採取	鑄造鉄斧	63×43×14	92.4	○	○	○	○	○	
HRN-2		第4トレンチE区	鑄造鉄斧	52×36×17	105.2	○	○	○	○	○	
HRN-3		第4トレンチ付近 表面採取	棒状素材（鍛造鉄器）	79×29×15	56.3	○	○	○	○	○	
HRN-4		第4トレンチH区	鉄製品（土器付着）	56×50×29	76.9	○	○	○	○	○	

### (2) マクロ組織

試料を端部から切り出した後、断面をエメリー研磨紙の#150、#320、#600、#1000、およびダイヤモンド粒子の3μmと1μmで順を追って研磨し、断面全体像を撮影した。

### (3) 顕微鏡組織

光学顕微鏡を用いて、鉄滓断面および鉄製品の金属組織および非金属介在物を観察後、写真を撮影した。金属鉄部の組織観察には3%ナイトル（硝酸アルコール液）を腐食に用いた。

### (4) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて金属鉄部の硬度を測定した。ビッカース硬度は測定箇所に応力（136°の頂角をもったダイヤモンド）を押し込んだ時の荷重と、それにより残された窪み（圧痕）の対角線長さから求めた表面積から算出される。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は200gfで測定した。

### (5) EPMA調査

EPMA（日本電子(株)製JXA-8230）を用い、鉄滓や鉄中非金属介在物の組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧：15kV、照射電流（分析電流）：2.00E-8A。

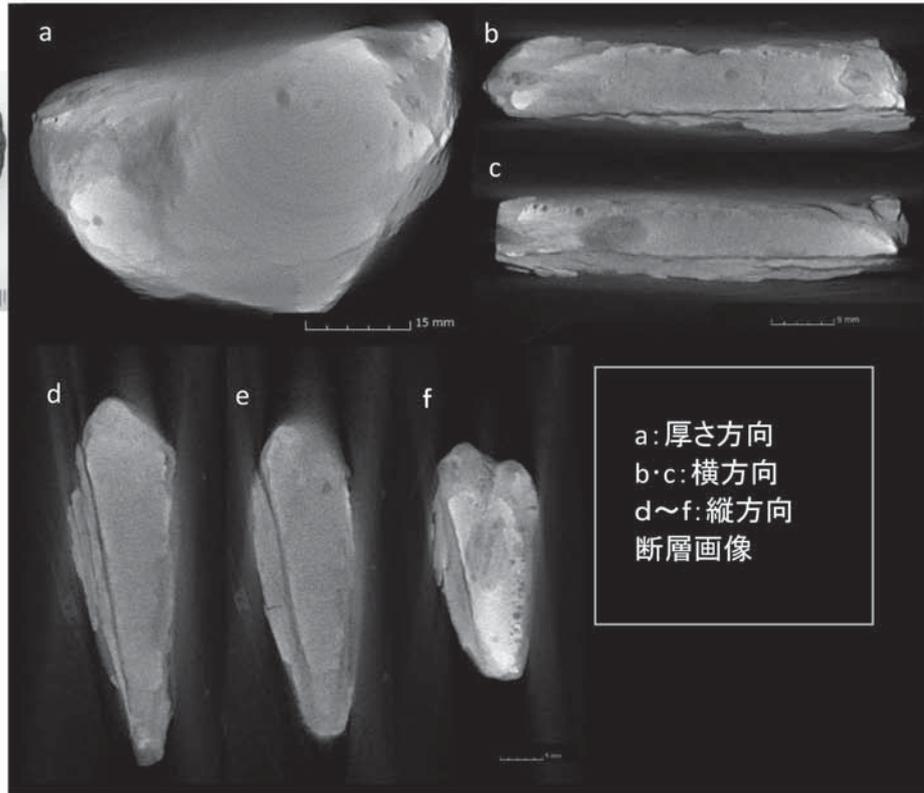
## 3. 調査結果

HRN-1：鑄造鉄斧

(1) X線CT調査：図127上段に厚さ方向（a）、横方向（b・c）、縦方向（d～f）の断層画像を示



HRN-1 外観写真



HRN-2 外観写真

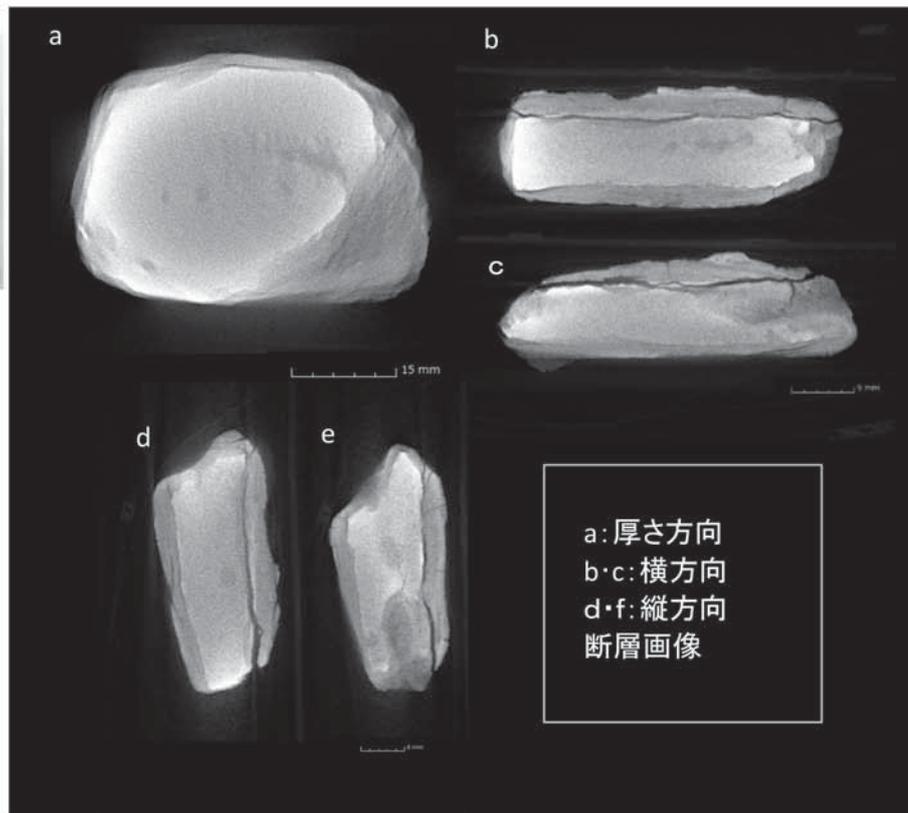
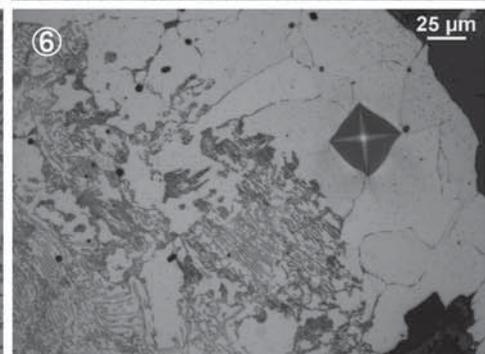
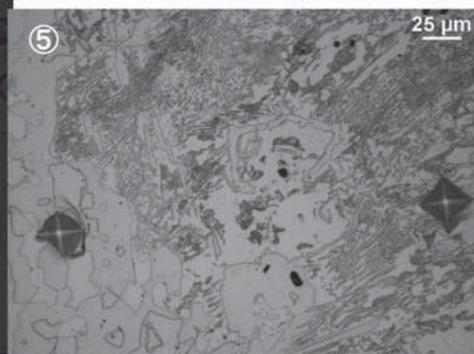
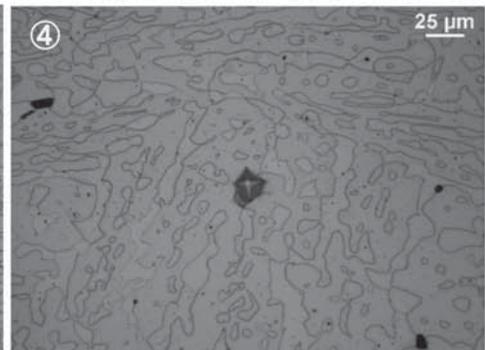
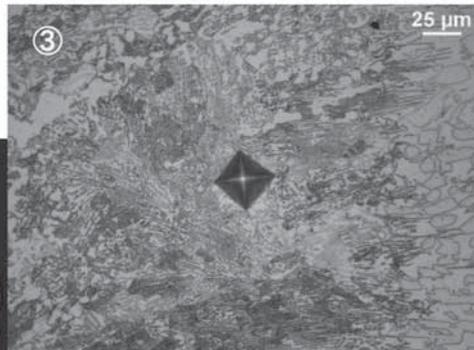
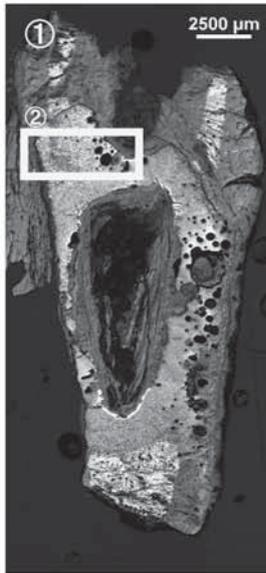
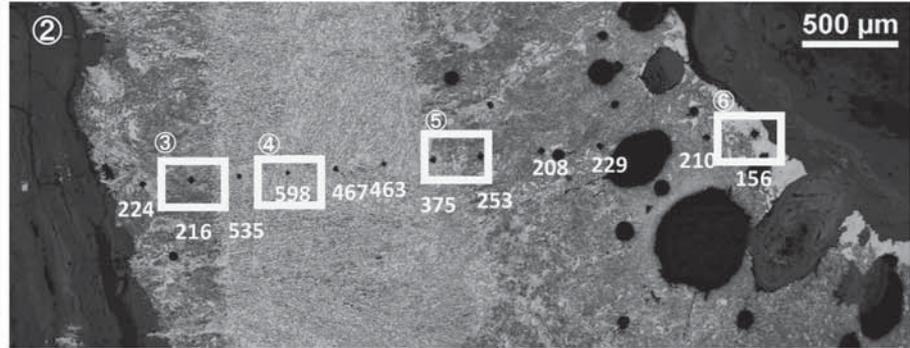


図127 鑄造鉄斧 (HRN-1・2) のX線CT画像

HRN-1 鑄造鉄斧

①マクロ組織、鑄造後焼なまし

②～⑤袋部底金属鉄部拡大、脱炭層;フェライト～パーライト(156～229Hv)、芯部レドブライト(375～598Hv)



Element	1
N	0.680
O	20.308
Si	13.305
As	-
Na	0.011
Mg	0.528
Al	3.337
Ca	8.278
Ti	0.205
Sn	0.006
Pb	0.028
S	0.217
Zr	0.020
P	0.101
Cu	1.123
Ni	0.016
Co	0.104
Fe	46.825
Mn	0.041
Total	95.133

上: 鉄中非金属介在物(⑧)・黒鉛(⑦)の反射電子像(COMP)および特性X線像 右: 定量分析値

図128 鑄造鉄斧 (HRN-1) の顕微鏡組織・EPMA 調査

す。表層は銹化（腐食）しているが、内部に金属鉄（明白色部）が残存する。金属鉄中には大小の鑄巣が確認される。また縦断面の形状から、鑄造鉄斧の袋部底から刃部にかけての破片と判断される。

（2）マクロ組織：図128①に示す。外観写真右側面から、試料を採取して刃部縦断面を観察した。刃部中央に大きな鑄巣が存在しており、その周囲は脱炭が進んでいる。これに対して、上端の袋部底と刃部側下端には、白鑄鉄組織が確認される。以上の組織から、この鉄斧は鑄造後に焼なましされて表層が脱炭されたことが明らかとなった。

（3）顕微鏡組織：図128②～⑥に示す。試料上側の袋部底部分の拡大である。刃部および袋部底の表層部は脱炭しており、ほとんど炭素を含まないフェライト単相（Ferrite： $a$ 相）から、パーライト（Pearlite）素地の亜共析（ $C < 0.77\%$ ）組織が確認された。③の左側、⑤の右側および⑥はその拡大である。これに対して、芯部には白鑄鉄組織（レデブライト：Ledeburite）が残存する。④はその拡大である。

（4）ビッカース断面硬度：図128②に示す。袋部底の表層（フェライト単相）の硬度値は156Hv、その内側および刃部外面の脱炭層（少量フェライト・パーライト組織）の硬度値は208～253Hvであった。これに対して、白鑄鉄組織残存部分の硬度値は375～598Hvであった。焼なましによって脱炭層が軟化していることが確認された。

（5）EPMA 調査：図128⑦に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。中央の暗灰色部の定量分析値は46.8%Fe - 13.3%Si - 3.3%Al - 8.3%Ca - 1.1%Cu（分析点1）であった。非晶質珪酸塩と推測される。

また図128⑧の塊状黒色部は炭素（C）に強い反応がある。鑄造後の焼なましに伴い生じた黒鉛（Graphite）と推定される。

#### HRN-2：鑄造鉄斧

（1）X線CT調査：図127下段に厚さ方向（a）、横方法（b・c）、縦方向（d・e）の断層画像を示す。表層は銹化（腐食）しているが、内部に金属鉄（明白色部）が残存する。金属鉄中には大小の鑄巣が確認される。また縦断面の形状から、HRN-1と同様、鑄造鉄斧の袋部底から刃部にかけての破片と判断される。

（2）マクロ組織：図129①に示す。外観写真右側面から、試料を採取して刃部縦断面を観察した。刃部に大きな鑄巣が存在する。

（3）顕微鏡組織：図129②～⑤に示す。試料上側の袋部底付近の拡大である。素地はフェライトまたは層間の広いパーライトで、その内部には粒状・網目状のセメントイト（Cementite： $Fe_3C$ ）およびレデブライトが分布する。当鉄斧もHRN-1と同じく、鑄造後焼なましされたが、セメントイトが分解しきらず残存していることが確認された。

（4）ビッカース断面硬度：図129③に示す。硬度値は201～592Hvであった。④は最も軟かい箇所、⑤は最も硬い箇所の拡大である。セメントイトおよびレデブライトがまとまって残存する部分が硬質であった。

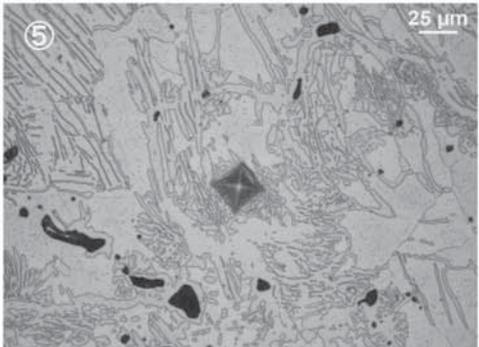
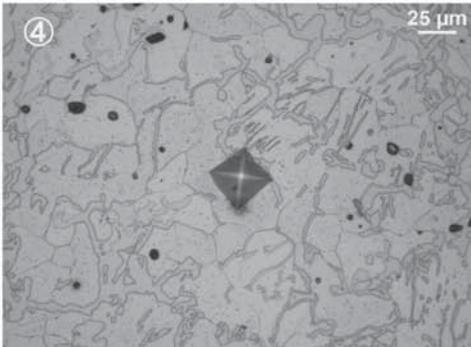
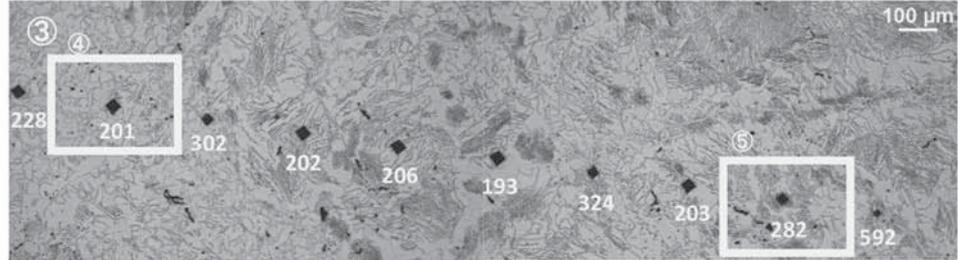
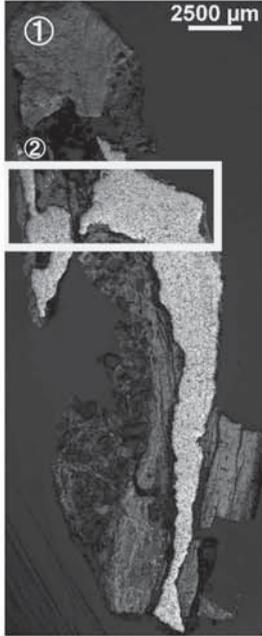
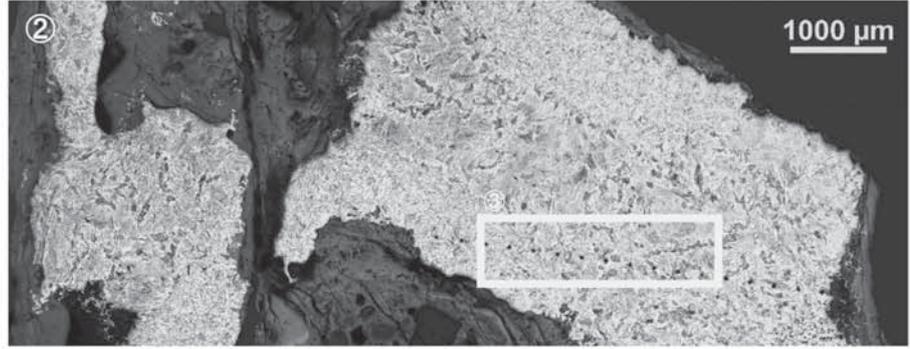
（5）EPMA 調査：図版129⑥に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。中央の炭鉄褐色粒の定量分析値は59.2%Fe - 3.3%Mn - 36.0%S（分析点2）であった。硫化鉄（ $FeS$ ）で、マンガ（Mn）を少量固溶する。

また図版129⑦の塊状黒色部は炭素（C）に強い反応がある。鑄造後の焼なましに伴って生じた黒鉛（Graphite）と推定される。

HRN-2 鑄造鉄斧

①マクロ組織、鑄造後焼なまし

②～⑤袋部底金属鉄部拡大、素地:フェライト～不完全球状セメンタイト、レデブライト・セメンタイト残存、硬度:193～592Hv



左: 鉄中非金属介在物(⑥)・黒鉛(⑦)の反射電子像(COMP)および特性X線像 下: 定量分析値

Element	2
N	0.528
O	0.259
Si	0.016
As	0.034
Na	0.008
Mg	0.011
Ti	0.086
Sn	0.011
Pb	0.086
S	35.999
Zr	0.049
Cu	0.176
Ni	0.008
Co	0.072
Fe	59.166
Mn	3.284
Cr	0.139
Total	99.932

図129 鑄造鉄斧 (HRN-2) の顕微鏡組織・EPMA 調査

#### HRN-3：棒状素材（鍛造鉄器）

(1) X線CT調査：図130上段に厚さ方向(a)、縦方法(b)、横方向(c～f)の断層画像を示す。調査前外観観察では棒(細長い直方体)状の鉄素材と推測された。しかしX線透過像を見ると、土砂に厚く覆われた下側部分で幅と厚みが徐々に減じていることが明らかとなった。この特徴から、鑿状の鉄製品であった可能性が考えられる。

また写真上側の芯部には金属鉄が残存する。横断面の断層画像(c)をみると、層状に非金属介在物が分布している。折り返し鍛錬された鍛造品と推定される。

(2) マクロ組織：図131①に示す。外観写真上側端部から、試料を採取して横断面を観察した。内部の明灰色部は金属鉄である。折り返し鍛錬による接合部に沿って、左下から中央部にかけて銹化(腐食)が進んでいる。

(3) 顕微鏡組織：図131②～⑥に示す。②の上側表層と中央の折り返し鍛錬による接合部は、酸化雰囲気曝露に曝されて脱炭したと推測される。フェライトの割合が高い組織となっている。③、⑤、⑥は低炭素域の拡大である。これに対して、素地部分はパーライト主体の組織であった。④はその拡大である。

(4) ビッカース断面硬度：図131②に示す。上側表層の硬度値は143～191Hv、内側の硬度値は185～236Hvであった。表層側(低炭素域)がやや軟質で、組織に見合った値である。

(5) EPMA調査：図131⑦に鉄中非金属介在物の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶の定量分析値は92.7%FeO - 1.3%MgO(分析点3)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)と推定される。素地の暗灰色部の定量分析値は26.1%SiO<sub>2</sub> - 16.9%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> - 4.6%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> - 29.4%CaO - 2.4%MgO - 1.7%K<sub>2</sub>O - 17.7%FeO(分析点4)であった。非晶質珪(燐)酸塩と推測される。

さらにもう1箇所、試料中央の折り返し鍛錬による接合部の反射電子像(COMP)を示す。写真右下の明白色部は金属鉄である。金属鉄表層(灰色部)の定量分析値は71.0%FeO(分析点5)であった。熱間での鍛冶作業に伴い鉄素材の表層に生じた鉄酸化物が、折り返し鍛錬によって内側に取り込まれたものと推定される。さらに47.0%SiO<sub>2</sub> - 9.0%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> - 28.8%CaO - 2.5%MgO - 1.8%K<sub>2</sub>O - 8.1%FeO(分析点6)であった。非晶質珪酸塩である。

当鉄製品中には、熱間加工で生じた鉄酸化物と、鉄素材表面の酸化防止や鍛接剤として用いられた粘土汁や藁灰などから生じた珪(燐)酸塩系の介在物が確認された。これらは折り返し鍛錬された鍛造品の特徴といえる。

#### HRN-4：鉄製品（土器付着）

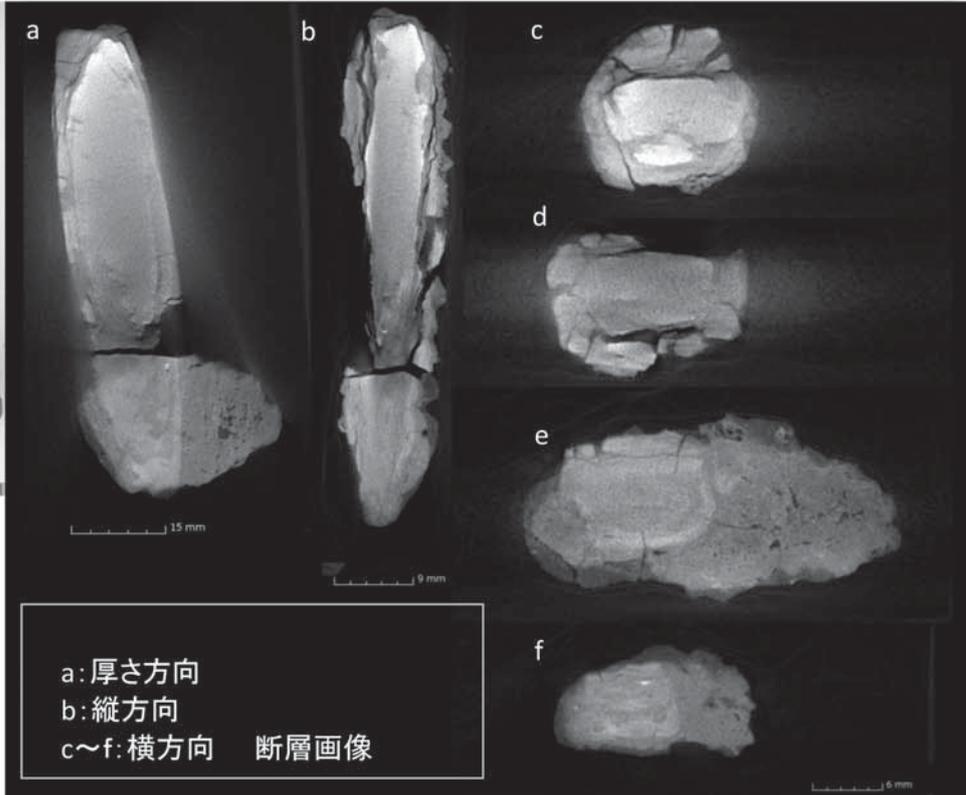
(1) X線CT画像：図130下段に厚さ方向(a)、縦方法(b)、横方向(c～e)の断層画像を示す。外観写真上段の淡橙色部は土器片である。その下側の淡褐色～茶褐色部中には板状の鉄片の輪郭(明灰色部)が確認された。鉄片は全体が完全に銹化(腐食)し、内部に金属鉄は残存していない。また鉄片の周囲は土砂で覆われ、土器片との間も土砂が埋めている状態であった。このため土器片と鉄片は、廃棄後に付着した可能性が高いと考えられる。

(2) マクロ組織：図132①に示す。外観写真下側端部から、試料を採取して横断面を観察した。厚さ約5mmの板状の破片であった。

(3) 顕微鏡組織：図132②～⑤に示す。②③は鉄片表層部、⑤は内側部分の拡大である。ともに銹化(腐食)しており、金属組織痕跡は不明瞭であった。ただし②③の素地部分はフェライト、暗灰色部はパーライトであった可能性が考えられる。



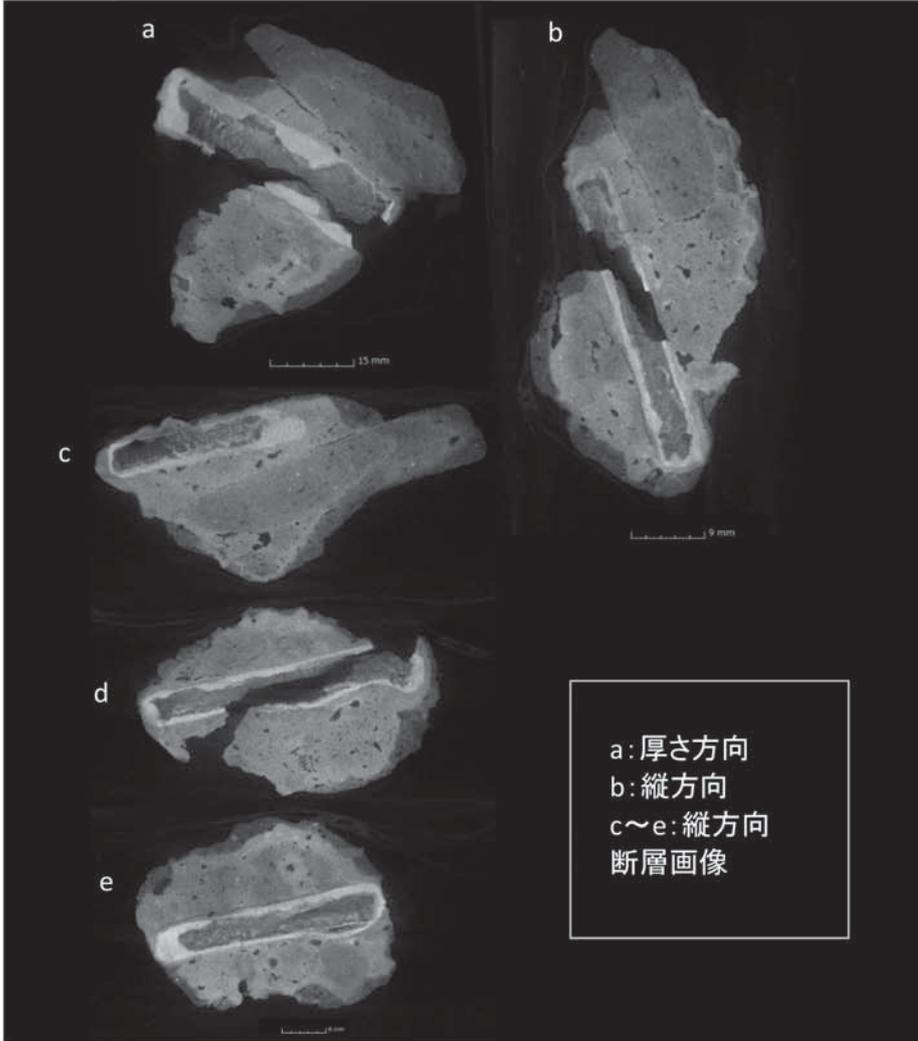
HRN-3  
外観写真



a: 厚さ方向  
b: 縦方向  
c~f: 横方向 断層画像



HRN-4 外観写真



a: 厚さ方向  
b: 縦方向  
c~e: 縦方向  
断層画像

図130 鉄製品 (HRN-3・4) のX線CT画像

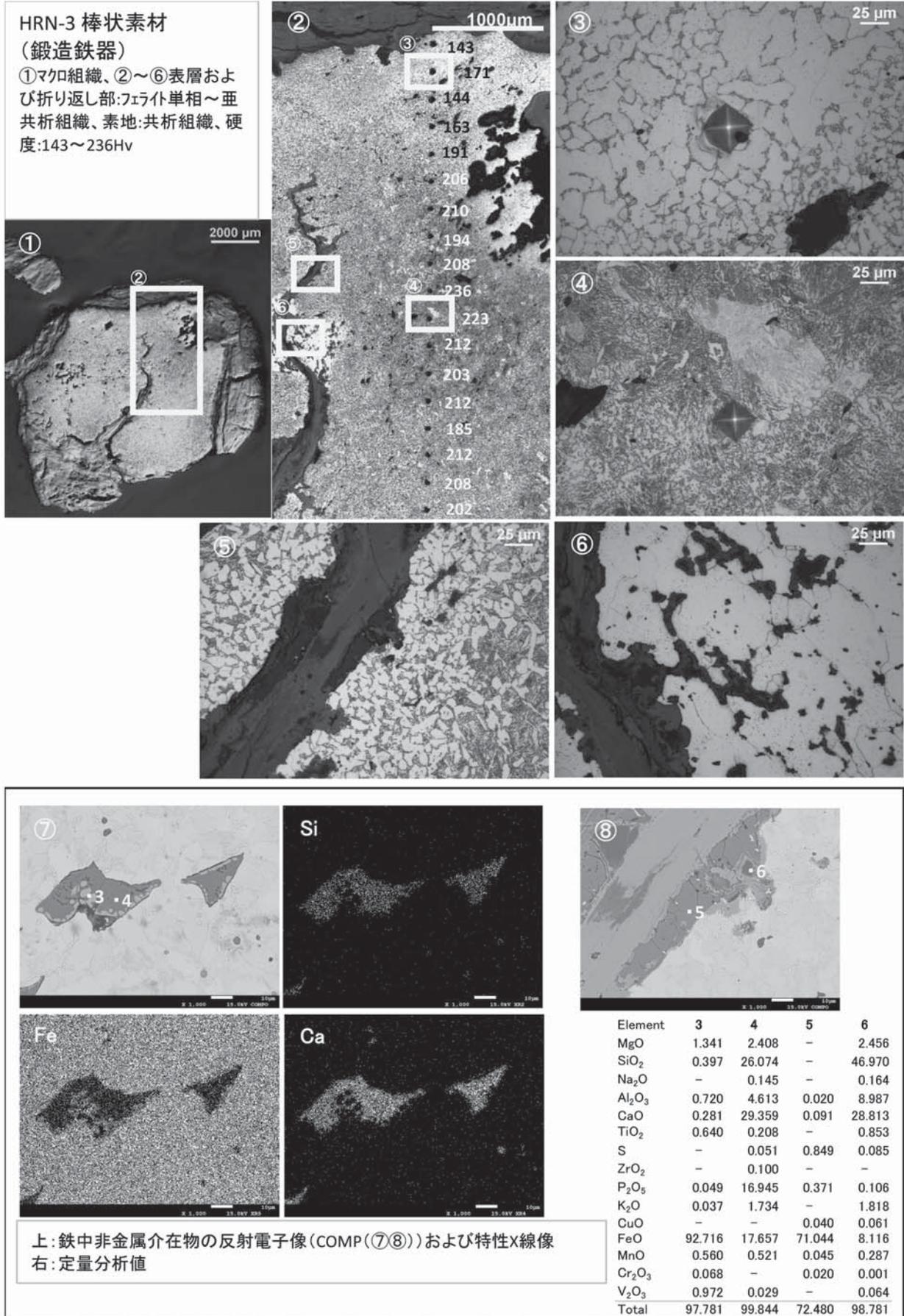
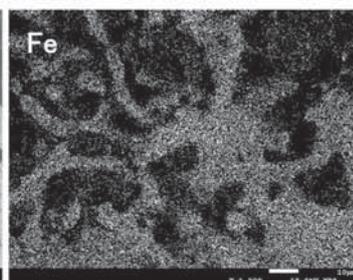
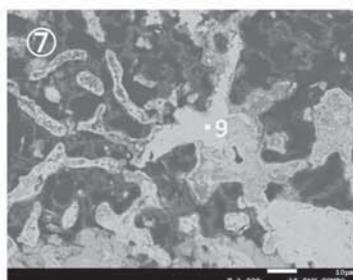
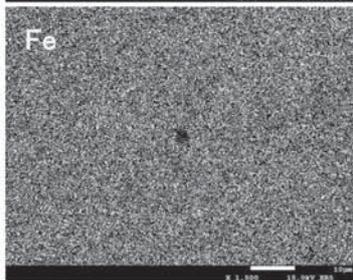
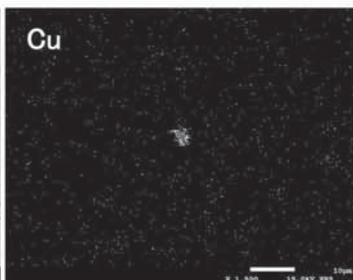
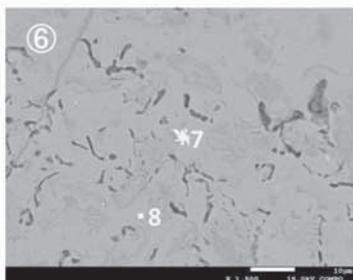
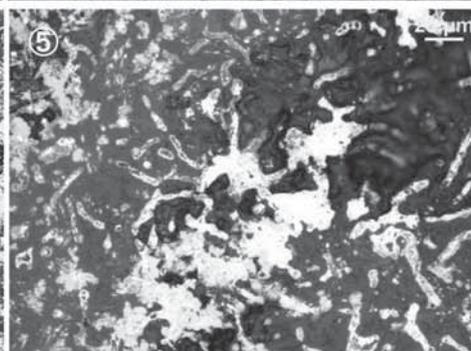
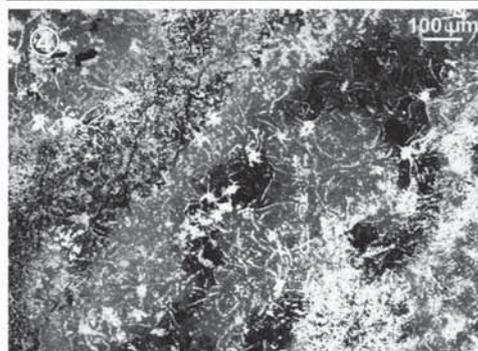
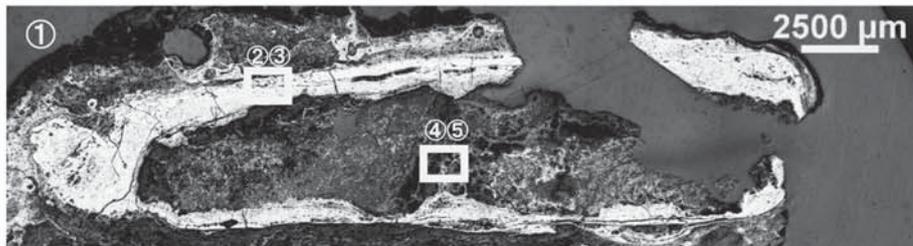


図131 棒状素材 (鍛造鉄器) の顕微鏡組織・EPMA 調査

HRN-4 鉄製品

(土器附着)

- ①マクロ組織、②～⑤錆化鉄、金属組織不明瞭、
- ③微小淡橙色部:金属銅



左: 錆化鉄部(⑥⑦)の反射電子像 (COMP) および特性X線像  
下: 定量分析値

Element	7	8	9
N	0.869	0.542	0.645
O	0.460	29.718	28.292
Si	0.012	0.364	0.225
As	-	0.036	-
Ca	0.003	-	-
Ti	0.007	0.004	-
Sn	-	0.005	0.003
Pb	-	0.020	0.054
S	-	0.010	0.132
Zr	-	0.058	-
P	0.015	0.047	0.026
K	0.001	-	-
Cu	93.608	0.085	0.008
Ni	-	0.016	-
Co	0.004	0.134	0.158
Fe	7.566	68.368	69.734
Mn	0.001	0.025	0.047
Cr	-	0.012	0.018
Cl	0.025	0.012	0.001
Total	102.571	99.456	99.343

図132 鉄製品 (土器附着) の顕微鏡組織・EPMA 調査

(4) EPMA 調査：図132⑥に鉄片表層部の反射電子像 (COMP：図132③の拡大) を示す。中央の微細な淡橙色部の定量分析値は93.6Cu - 7.6Fe (分析点7) であった。金属銅 (Cu) と推定される。製鉄原料の鉄鉱石中に銅を含む鉱物ごく微量共伴しており、製錬時に鉄中に移行した可能性が考えられる。これに対して素地部分の定量分析値は68.4%Fe - 29.7%O (分析点8) であった。金属鉄が錆化 (腐食) した水酸化鉄と推定される。

また図132⑦は鉄片表層部の反射電子像 (COMP：図132⑤の拡大) である。明灰色部の定量分析値は69.7%Fe - 28.3%O (分析点9) であった。この部分は金属鉄が錆化 (腐食) した水酸化鉄と推定される。その周囲の暗灰色内部は特性 X 線像では鉄 (Fe) の反応がなく、錆化 (腐食) に伴い空洞化が進んでいることが確認された。

## 4. まとめ

原の辻遺跡から出土した鉄製品4点を調査した結果、以下の点が明らかとなった。

### (1) 焼なましされた鑄造鉄斧

鑄造鉄斧の袋部底から刃部の破片が2点 (HRN-1、2) 確認された。また断面の金属組織を観察した結果、鑄造後に熱処理「焼なまし」されたことが明らかとなった。

鑄込みのままの硬くて脆い白鑄鉄製品に靱性 (粘り強さ) を持たせる「焼なまし」の技術は、戦国時代の中国大陸で発展した。日本列島内の初期鉄器との関連性が深い、中国東北部でも焼きなましされた鑄造鉄器類が確認・報告されている<sup>(注1)</sup>。日本列島内で最も早い時期の鉄製品のひとつと考えられる、弥生時代前期末の福岡県春日市平若 A 遺跡出土鉄片も、焼きなましされた鑄造鉄部の袋部底から刃部破片であった。<sup>(注2)</sup>。こうした鑄造鉄斧の各部の破片は、弥生時代を通じて西日本各地で確認されている。特に刃部破片の理化学的調査事例は多い。袋部底は最も厚みがあるため、芯部に鑄造時の白鑄鉄組織が残存することが多い。従って、袋部よりも再生鉄器の素材、または鍛冶原料として加工・再利用することは難しく、そのまま残りやすい可能性が考えられる<sup>(注3)</sup>。

壱岐島では、カラカミ遺跡から弥生時代後期後葉と推定される鑄造鉄斧の袋部底の小破片や、鑄造後焼なましされた刀子の破片が確認されている<sup>(注4)</sup>。上述したように中国では鑿 (鑄造鉄斧) 以外にも鎌や鉄刀、鉄鏃等の多様な製品が、鑄造後に焼なましをして利用されている。一方日本国内では、鑄造鉄斧以外の焼なましされた鑄造製品の確認例はきわめて少ない。壱岐島では、より多様な鉄製品が交易で入手されていた状況が窺える。

### (2) 板状鉄片

今回調査を実施した遺物のうち、鉄製品 (HRN-4) は、調査前には鉄滓の可能性も考えられた。しかし調査結果、土器片と土砂が廃棄後二次的に付着した、厚さ5mm前後の鉄板であったことが確認された。また側面を研磨して刃部を成形した痕跡はみられなかった。

鉄板自体は完全に腐食 (錆化) しており、金属組織痕跡も不明瞭であった。ただし鑄造鉄器の破片に4~5mmの板厚のものが多くことや、断面に折り返し鍛錬に伴う層状の割れがないこと、断面表層と内側で腐食の具合が異なることを考えると、鑄造鉄斧 (HRN-1、2) のように、鑄造後焼なましされた鑄造鉄器の破片、または板状の鉄素材であった可能性が考えられる。しかし、それを裏付けるような白鑄鉄組織や、焼なましで生じた黒鉛などの明瞭な痕跡は残存していなかった。

### (3) 鍛造鉄器とその焼入れ技術

鉄製品 (HRN-3) は鍛造品であった。調査前の外観観察の段階では、棒状の鉄素材の可能性が考

えられた。しかし X 線 CT で断像画像を見ると、土砂に厚く覆われた下側部分で幅と厚みが徐々に減じていることが確認された。この特徴から、鑿状の鉄製品であった可能性が考えられる。

また上端部の横断面を観察したところ、折り返し鍛錬に伴い鉄材の表面に生じた鉄酸化膜が内部に取り込まれた状態が確認できた。この折り返し部分や、試料表層の一部は脱炭して低炭素域が生じている。これに対して素地はほぼパーライト組織で、炭素量は0.7～0.8%前後の高炭素鋼と推測される。

下端部（刃先側）は錆化（腐食）が進み金属鉄が残存しないため、材質に関しては不明である。ただし上端部の素地部分と同等の材質（高炭素鋼）であった場合、適切に部分焼入れ～焼もどしをする技術があれば、硬さと粘り強さをあわせた刃先が得られる。工具に適した材料の製品と判断される。

その一方で、全体が炭素量の高い鋼からなる製品は、製品全体を一気に焼入れすると、焼き割れや変形が起きて利用可能な製品にならない<sup>(注5)</sup>。このため、特に研ぎによる摩耗の速い製品は、適切に部分焼入れして刃先の直しをする技術がないと、刃先の切削性を長く保つことは難しい。最近の理化学的調査で、日本列島内に熱間での鍛打加工による本格的な鍛冶技術が定着する前段階に、焼入れによる硬さの調整を在地でした可能性を示唆する製品も確認されている<sup>(注6)</sup>。

壱岐島での鉄器や鍛冶技術の普及の実態を考えるうえでも、焼入れでの硬さの調整や補修が地域でいつからどの程度行われていたのか、今後検討していく必要があるといえる。

#### (注)

- (1) 陳建立2014『中国古代金属冶铸文明新探』科学出版社
- (2) 鈴木瑞穂2022「平若 A 遺跡・赤井手遺跡の出土鉄器・鉄片の調査および弥生時代の製作技術」『令和3年度春日市文化財年報』春日市教育委員会
- (3) 鈴木瑞穂2017「弥生時代～古墳時代初頭の鑄造鉄斧・鉄素材の材質と鉄器製作技術に関する研究」『FUSUS』9号アジア鑄造技術史学会
- (4) 大澤正己・鈴木瑞穂2013「カラカミ遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
- (5) 朝岡康二1993『日本の鉄器文化－鍛冶屋の比較民俗学－』慶友社
- (6) 鈴木瑞穂2020「出土遺物の理化学的分析結果からみた弥生時代の鉄器とその製作技術」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－（最終報告書 論考編）』新・日韓交渉の考古学－弥生時代－研究会・新・日韓交渉の考古学－青銅器～原三国時代－研究会

# 第10章 原の辻遺跡出土玉類

谷澤亜里・田村朋美

## 1. 資料の概要

ガラス小玉9点、水晶製算盤玉1点、碧玉製管玉1点の合計11点が出土している（図134、表8）。748～756はガラス小玉。いずれも孔と平行方向の気泡筋や気泡列がみられ、引き伸ばし技法で製作されたことがわかる（図133）。いわゆる *Indo-Pacific beads* (Francis1991) に該当する。これらについては材質分析を実施した。結果は次項で述べる。757は水晶製算盤玉で側面ににぶい稜をもつ。孔径は直径に対してやや小さく、孔内には回転痕がみられる。758は碧玉製管玉で縦方向に破損している。青色味が強く光沢をもつ石材で、両面穿孔である。孔内には石針穿孔に特徴的な回転痕が明瞭に確認できる。いわゆる半島系管玉（大賀2010）に該当する。



図133 ガラス小玉（755）の顕微鏡写真

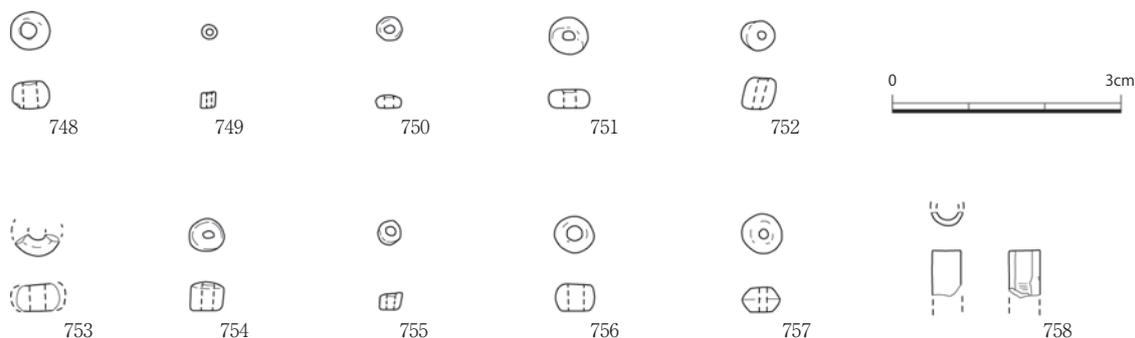


図134 原の辻遺跡出土玉類

表8 原の辻遺跡出土玉類一覧

番号	器種	色調	直径 (mm)	厚さ/全長 (mm)	トレンチ	注記
748	ガラス小玉	淡青色透明	4.90	3.40	第2-M/N	-70cm 1953/7/31
749	ガラス小玉	黄緑色半透明	2.00	2.15	第3-B	柱穴 no.4 1953/8/7
750	ガラス小玉	濃青色半透明	3.20	1.60	第1-N	上層 1961/7/25
751	ガラス小玉	淡青色透明	4.80	2.20	第1-N	上層 1961/7/25
752	ガラス小玉	淡青色半透明	4.00	4.20	第1-S	上層・壺の横 1961/7/26
753	ガラス小玉	淡紺色透明	5.30	3.40	第1-X	上層 1961/7/27
754	ガラス小玉	淡青色半透明	4.20	3.80	第1-N	上層・甕棺東1尺 1961/7/27
755	ガラス小玉	淡青色透明	2.60	2.20	第1-X	(黒色土層) 上層 1961/7/27
756	ガラス小玉	淡青色透明	5.10	3.60	第1-X	1961/7/29
757	水晶製算盤玉	無色透明	5.00	3.35	第4-B	掘り上げ土 1961/8/3
758	碧玉製管玉	青味の強い緑色	4.00	6.30	第1-X	表土下30cm 1961/7/27

表9 原の辻遺跡出土ガラス小玉の蛍光 X 線分析結果

番号	色調	分析結果				重量濃度 (wt%)																	※		
		大別	細分	Group	着色材	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CoO	Ni <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	ZnO	PbO	Rb <sub>2</sub> O		SrO	ZrO <sub>2</sub>
748	淡青色透明	カリ	高アルミナ	PII	銅	1.4	1.0	3.9	75.3	0.0	14.6	0.5	0.13	0.03	0.02	0.54	0.01	0.00	1.88	0.03	0.44	0.08	0.02	0.13	0.38
749	黄緑色半透明	カリ	高アルミナ?	PII?	銅+錫酸鉛	0.6	0.7	3.3	69.4	0.1	14.3	0.3	0.10	0.02	0.04	0.90	0.01	0.01	2.12	0.03	7.67	0.05	0.07	0.27	0.87
750	濃青色半透明	カリ	分類外	P	銅+マンガン	1.0	1.1	4.1	72.5	0.0	13.6	1.0	0.15	0.02	0.72	1.07	0.01	0.01	2.08	0.06	2.29	0.05	0.04	0.14	0.56
751	淡青色透明	カリ	高アルミナ	PII	銅	1.3	1.0	4.1	75.1	0.1	14.6	0.7	0.14	0.02	0.02	0.64	0.01	0.01	1.41	0.03	0.34	0.08	0.03	0.39	0.26
752	淡青色半透明	ソーダ	高アルミナ	SIIB	銅	19.2	1.1	7.2	65.9	0.1	1.2	2.0	0.37	0.01	0.05	0.93	0.01	0.01	1.35	0.03	0.28	0.03	0.09	0.22	0.30
753	淡紺色透明	カリ	中アルミナ	PI	コバルト	0.7	1.0	3.6	73.7	0.1	16.0	1.2	0.16	0.03	2.08	0.92	0.01	0.00	0.11	0.02	0.12	0.05	0.05	0.11	0.63
754	淡青色半透明	ソーダ	高アルミナ	SIIB	銅	15.2	0.9	8.6	66.4	0.0	3.3	2.1	0.40	0.01	0.06	1.11	0.01	0.01	0.96	0.03	0.54	0.02	0.07	0.28	0.17
755	淡青色透明	カリ	高アルミナ	PII	銅	3.0	1.2	4.3	74.0	0.0	14.1	0.5	0.12	0.02	0.02	0.52	0.01	0.01	1.50	0.03	0.38	0.07	0.03	0.11	0.28
756	淡青色透明	カリ	高アルミナ	PII	銅	1.0	1.0	4.0	78.6	0.0	13.0	0.3	0.11	0.02	0.04	0.40	0.01	0.00	0.99	0.05	0.17	0.04	0.03	0.10	0.25

※スタンダードレスのFP法による計算値

## 2. ガラス小玉の材質分析

ガラス小玉9点については、主要な構成成分とその含有量を知るために蛍光 X 線分析を実施した。ガラス製遺物の表面は風化の影響により構成元素の一部が増減する。蛍光 X 線分析は表面分析のため、資料本来の正確な化学組成を知ることができないものの、基礎ガラスの種類や着色要因を推定することは可能である。

資料の測定箇所は、亀裂等が少なく、保存状態が良好と判断した部分を選定した。測定に先立ち、土などの汚れは顕微鏡下でエチルアルコールを用いた洗浄をおこなった。測定結果は測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料 (CG-A、SG5、SG7、SGT5、NIST620) を用いて補正した理論補正法 (FP 法) により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。

測定に用いた装置は、エダックス社製 EAGLE III である。励起用 X 線源ロジウム (Rh) 管球、管電圧は、FP 法を用いた定量分析では20kV に設定し、一部の資料については20keV 以上のスペクトルを検出するため、45kV に設定した。管電流は200μA、X 線照射径は50μm、計数時間は300秒とした。なお、測定は真空中で実施した。

分析結果を表9に示す。これらについて化学組成による分類の検討を行った結果、カリガラス製のものが7点 (748~751・753・755・756) とソーダガラス製のものが2点 (752・754) 存在することが明らかとなった。

日本列島で出土するカリガラスは、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) と酸化カルシウム (CaO) の含有量から大きく二分され、使用される着色剤とも対応関係があることが明らかとなっている (Oga and Tamura 2013)。これをふまえ、今回の分析でカリガラスと判断された資料がいずれにあたるかを検討した (図135)。

淡青色透明を呈する4点 (748・751・755・756) は、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>含有量が多く、CaO 含有量が少ないタイプ (Group PII) に該当する。ただし、Group PII のなかでも Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の少ない領域にまとまる傾向が認められる。これらは酸化銅 (CuO) を0.99-1.88%含有することから、銅イオンが主な着色要因である。また、着色剤としての銅原料に伴うと考えられる鉛と錫をわずかに含む。このような着色剤の

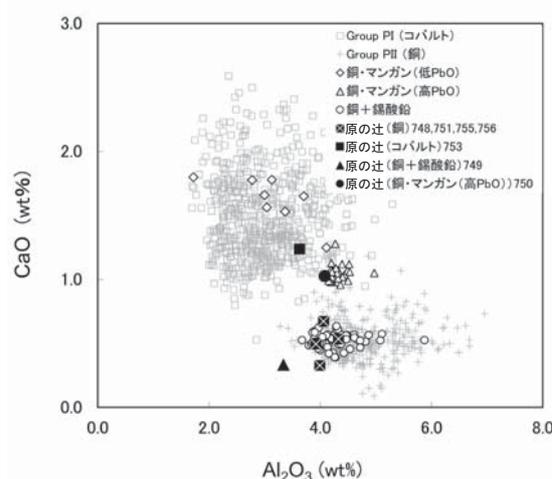


図135 基礎ガラス成分によるカリガラスの細分

特徴はこれまでに知られている典型的な Group PII と共通するものである。

淡紺色透明を呈する 1 点 (753) は、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  含有量が相対的に少なく、 $\text{CaO}$  含有量が多いタイプ (Group PI) に該当する。典型的な Group PI はコバルト着色による紺色を呈するが、本資料はコバルト ( $\text{CoO}$ ) の含有量は極めて少なく、元素分析だけでは判断が難しい。ただし、典型的な Group PI と同様にマンガン ( $\text{MnO}$ ) を 2.08% と多量に含むことや、銅などの他の着色成分に乏しいことを考慮すると、典型的な Group PI と同様に  $\text{MnO}$  を多く伴うコバルト原料で着色されている可能性がある。コバルトイオンは極めて微量でも強く発色することから、ごく微量のコバルトによる着色の可能性の有無を検討するために可視分光分析を実施した。測定に用いた装置は、Ocean Optics 社製 USB4000、光源：DH-2000水素タングステンハロゲン、ファイバースコープ：R200-7-UV-VIS、コア径：200 $\mu\text{m}$ 、照射角度：90°、測色条件：D65 (太陽光)、標準白色版で校正した。測定波長範囲は358–968nm、積算回数は0.1秒×100回である。結果を図136に示す。コバルトイオンによって着色されたガラスは、530nm、600nm、640nm 付近に吸収をもつ特徴的な可視反射スペクトルを示すことが知られている (不破1938)。比較のため提示した典型的な Group PI と同様に、本資料でもこれらの波長付近に吸収が認められた。すなわち、極めて微量ではあるがコバルトイオンによって発色していると判断された。

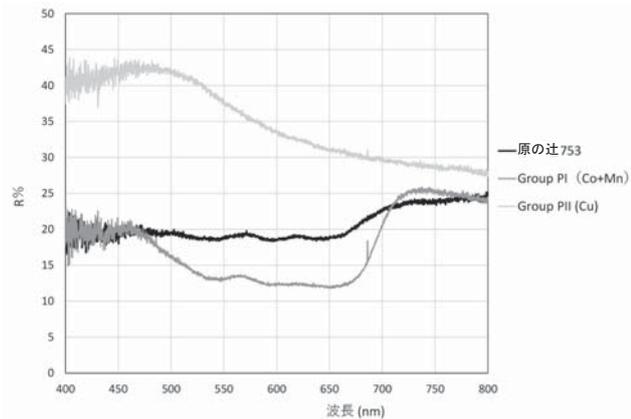


図136 淡紺色ガラス小玉 (753) の可視分光スペクトル

黄緑色半透明の 1 点 (749) は、酸化銅 ( $\text{CuO}$ ) を 2.66%、酸化鉛 ( $\text{PbO}$ ) 7.66% を含有し、酸化錫 ( $\text{SnO}_2$ ) もわずかに含むことから、銅イオンと黄色の人工顔料である錫酸鉛 ( $\text{PbSnO}_3$ ) で複合的に着色されたものと判断される。このような着色技法はソーダ石灰ガラスで一般的なものだが、カリガラスでもいくつかの類例が知られている。 $\text{Al}_2\text{O}_3$  と  $\text{CaO}$  の含有量比においては、Group PII がプロットされる範囲のなかでも  $\text{Al}_2\text{O}_3$  の少ない周辺域にプロットされる。このような基礎ガラスの傾向は、福岡県門田辻田13号土壙墓出土ガラス小玉57点、福岡県桑原金屎古墳出土ガラス小玉 1 点などの類例

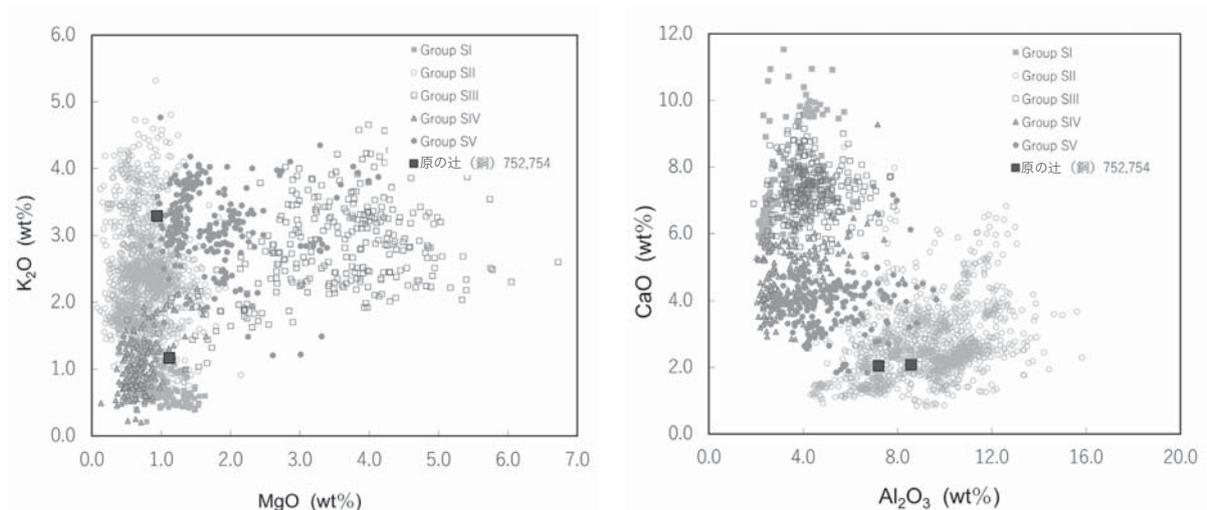


図137 基礎ガラス成分によるソーダガラスの細分

(大賀・田村2016) と概ね類似するが、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ がより少ない傾向は認められる。

濃青色透明の1点(750)は、 $\text{CuO}$ を2.08%、 $\text{MnO}$ を0.72%含有することから、銅イオンとマンガンイオンで複合的に着色されたものと判断される。このように銅とマンガンにより着色されたカリガラスは、典型的な Group PI や Group PII に比べて分析事例が少ないがいくつかの事例が知られており、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ と  $\text{CaO}$  の含有量比では Group PI と Group PII の中間にプロットされるものと Group PI と重なるものの二者がある(大賀・田村2016)。さらに、前者は  $\text{PbO}$  を1%以上含有するのも特徴である。本資料は前者に該当し、類例として福岡県井原ヤリミゾ2号甕棺墓、同16号甕棺墓出土のガラス小玉、および熊本県木船西遺跡出土のガラス小玉(田村2017)が挙げられる。

ソーダガラス製の2点(752・754)は酸化マグネシウム( $\text{MgO}$ )、酸化カリウム( $\text{K}_2\text{O}$ )、酸化カルシウム( $\text{CaO}$ )、酸化アルミニウム( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )の含有量から設定された既存の細分(Oga and Tamura 2013)のうち、高アルミナタイプのソーダガラス(Group SIIB)に該当する(図137)。2点とも淡青色半透明を呈し、 $\text{CuO}$ を0.96-1.35%含有することから銅イオンが主な着色要因であり、着色剤に伴うと考えられる鉛と錫もわずかに含む。銅着色の Group SIIB は、着色剤に鉛と錫を伴うもの(古相タイプ)から伴わないもの(新相タイプ)へと変化することが知られており(田村2022)、本資料は古相タイプに相当する。

### 3. 資料の考古学的位置づけ

以上で報告した玉類について、その製作地や帰属時期を検討し、まとめにかえたい。

ガラス小玉は全て舶載品である。カリガラス製の7点は日本列島へのガラス小玉の流入量が増加する弥生時代後期のものとして理解できる。なお、Group PI・PIIの典型的なもの以外の材質のガラス小玉は、本州以東では出土が稀なものである(大賀2003、谷澤2020)。一方、ソーダガラス製の2点は銅着色の Group SIIでも古相タイプに該当するが、同様な材質のガラス小玉は古墳時代前期後半に特徴的に出現するもので、他の個体とは時期差がある。

管玉1点も半島系管玉の特徴を備えており、舶載品と判断される。半島系管玉は、弥生時代開始期から列島への舶載が始まり、前期末～中期初頭に流入量のピークを迎えた後、中期前半～後期前半には流入が低調化するが、後期後半～古墳時代前期には再び一定量が流入するようになる(大賀2010)。本資料はこの間のどこかで舶載されたものと考えられよう。

水晶製算盤玉に関しては、直径≒高さとなるプロポーションは奈良岡遺跡などで製作されたタイプ(大賀2011のA類)と類似するが、サイズがやや小さく(図138)孔径も小さいといった特徴から製作地や製作時期を絞り込むのが難しい。舶載品である可能性も残る資料である。

以上のように、本章で報告した資料の多くを舶載品が占める点、ガラス小玉のなかに本州以東では出現の稀な材質のものを含む点は、対外交流の拠点としての原の辻遺跡の性格と調和的であるといえよう。

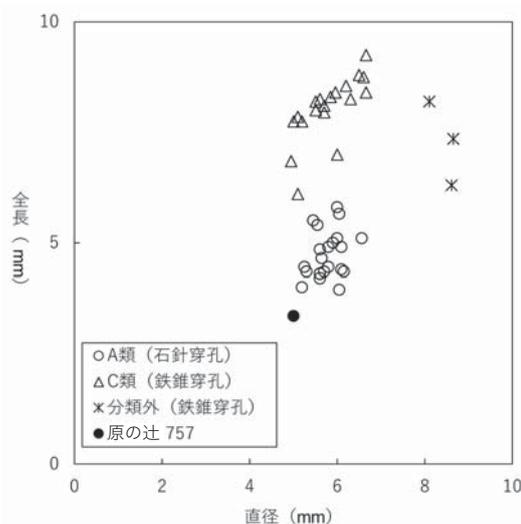


図138 弥生時代の水晶製算盤玉の法量分布

## 【引用文献】

- 大賀克彦2003「紀元3世紀のシナリオ」『風巻神山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 清水町教育委員会, 72-90頁
- 大賀克彦2010「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価—半島系管玉の出土を中心に—」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館, 315-337頁
- 大賀克彦2011「弥生時代における玉類の生産と流通」甲元眞之・寺沢薫(編)『弥生時代(上)』講座日本の考古学5 青木書店, 707-730頁
- 大賀克彦・田村朋美2016「日本列島出土カリガラスの考古学的研究」『古代学』第8号, 11-23頁
- 田村朋美2017「木船西遺跡出土ガラス小玉の分析」『木船西遺跡』160-165頁
- 田村朋美2022「ベンシヨ塚古墳出土ガラス製玉類の自然科学的調査」『ベンシヨ塚古墳発掘調査報告書』奈良市埋蔵文化財調査研究報告書第6冊 奈良市教育委員会, 59-73頁
- 谷澤重里2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
- 不破橋三1938「酸化コバルトを含むガラス(第1報)」『大日本窯業協會雑誌』第46巻552号, 644-646頁
- Francis, P. 1990. Glass beads in Asia Part2. Indo-Pacific beads. *Asian Perspectives*, 29-1, 1-23.
- Oga, K. & Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical compositions, chronologies, provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun periods (3rd Century BCE- 7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9, 35-65.

# 第11章 原の辻遺跡出土米

## および九州大学所蔵出土米の粒形質分析

上條信彦

### 1. 分析資料について

対象は九州大学による原の辻遺跡1953年調査時の出土米および、上條・小泉（2019）以降新たに見つかった立岩・津古内畑・津島遺跡出土米である。原の辻遺跡1953年第2次調査出土米は、全て木箱の中にガラス試験管に入れられた状態で保管されていた。ガラス試験管6本分ある。各試験管には「第2G'G'」「第2F」「第2E' ムギ」「第2F 石付近」「IV」「I・Ⅲ・IVマメ」のラベルが貼られている。それぞれ、これらのうち、「第2E' ムギ」にオオムギ2粒、「I・Ⅲ・IVマメ」にマメ類1粒があり、それ以外には炭化米が入っている。内訳は、「第2G'G'」79粒、「第2F」24粒+塊1点、「第2F 石付近」塊1点、「IV」1粒である。「IV」1粒は破損する。「第2G'G'」「第2F」「第2F 石付近」の3地点は、第2トレンチF～G'区の範囲にあたり、住居址内の炭化米出土範囲の試料と判断される。以上より、これら3地点分は、もともとは一つのまとまりであったものと考えられることから、分析では一括して報告する。

立岩（甘木）遺跡出土米はガラスシャーレに300粒程が入っている。立岩遺跡は、福岡県飯塚市立岩にある弥生時代の遺跡として知られる。ラベルから第3次調査時の資料と判断される。なお、立岩遺跡の既分析試料として、牧山重信1964年立岩小学校体育館西側採集資料（N20・23）と、嘉穂東高校児島隆人採集資料がある（上條2018）。粒数が多いことから、本試料は、後者の嘉穂東高校児島隆人採集資料とみられる。この資料は昭和24年、堅穴から大量に検出された一部とみられ、共伴土器から城ノ越式期と推定されている。なお、この資料は佐藤敏也氏によっても計測されている（佐藤1971）。

津古内畑遺跡は福岡県小郡市津古内畑に所在する弥生時代主体の遺跡である。出土米は1969年調査19号袋状堅穴出土資料である（小郡町教育委員会1970）。袋状堅穴は深さ180cm、底面径146cmで、埋土にはスサ入粘土塊が充填されていた。底面上5cmから壺と甗、石斧が共伴し、5～20cmの厚さで炭化米層が検出された。土器から板付Ⅱ式古段階とされる。

津島遺跡は岡山県岡山市北区いずみ町の弥生時代を中心とした集落遺跡である。弥生時代前期の集落と水田が隣接して発見されたことで知られる。本資料に関しては、「総合グラウンド北の池、昭和28年（土器弥後酒津式直前）」というラベルが付く。津島遺跡の本格的な調査は、岡山大学や岡山県教育委員会による1960（昭和35）～1963（昭和38）年の第1～4次調査が知られる（岡山県教育委員会2001）。北池地点では、1次調査1基（土坑2）、2次調査2基（土坑6・7）で炭化米が多量に検出された。土坑2は、弥生時代後期Ⅱ～Ⅲ段階に相当する。土坑6・7は時期不明である。種子については笠原・武田（1979）に詳しい。そのほか、第1次調査以前の出土資料として、鎌木義昌氏の採集資料が考えられる（佐藤1971）。この資料は氏が工事中に削り取られた長径2mの堅穴から採取し、倉敷考古館に保管されていたものである。残存する深さ20cmほどの範囲に籾粒が充填されていた。籾粒はおおよそ同一方向を揃っていたということで、穎穀の状態で貯穀されていたとみられる。時期は弥生時代後期とされる（鎌木1969）。なお、この資料も佐藤敏也氏によっても計測されている。

る（佐藤1971）。よって付箋にある採集年から、本炭化米は鎌木義昌氏の採集資料の可能性が高い。

## 2. 分析方法

種子は8倍マクロズームレンズ（TS93006、株杉藤）を装着したデジタルカメラ（DS-Fi3、株ニコ）で撮影した。種子の長さとは幅はImage J 1.52a（National Institute of Mental Health, USA）にて計測した。粒大と粒型を、それぞれ長幅積と長幅比により算出した後、種子を分類した。なお、粒大と粒型、集団内の平均、標準偏差や変動係数および集団間の有意差検定はEXCELにより実施した。また長さとは幅の相関係数は、0.7～1：かなり強い相関、0.4～0.7：やや相関、0.2～0.4：弱い相関、0～0.2：ほとんど相関なしと判断した。また表記におけるSDは標準偏差、CVは変動係数を示す。観察は資料の年代的な貴重性をふまえ、破壊粒（破片）も含め同定された全てを対象としたが、計測の際にはこれを除いた。また付着物がある場合はこの箇所を除いて計測した。全て籾が外れた玄米あるいは胚乳の状態であり、この状態を計測した。

出土米の粒型と粒大の分類基準は、松本（1994）に依拠し、各遺跡の割合を検討した（表10）。主なタイプ分けは粒型と粒大の組み合わせのうち各割合が10%以上の場合を主要なタイプと判断した。なお、タイプ分けはあくまで傾向をみるためであり、各タイプ=ある品種を示すわけではない。

表10 出土米の粒型と粒大の分類基準

粒型	長幅比	粒大	長幅積
長粒	長	2.60-3.60	極大 20.00以上
	中	2.30-2.60	大 16.00-20.00
	短	2.00-2.30	中 12.00-16.00
短粒	長	1.80-2.00	小 8.00-12.00
	中	1.60-1.80	極小 8.00以下
	短	1.40-1.60	
円粒	長	1.20-1.40	
	中	1.00-1.20	
	短	1.00以下	

<sup>1</sup>松本（1994）の一部を改変した。

## 3. 種子塊の観察（図139）

1953年第2次調査第2トレンチFグリッドからは塊状の試料が得られており、埋蔵状態が分かる。これは弥生中期の住居址（図10）に伴うものである。図139を見ると、2点とも炭化したイネ種子が、覆土中に土壌と混じり合うように散布する。イネ種子は、籾殻である穎や胚芽がなく胚乳のみの状態である。よって脱穀後の玄米とみられる。種子の向きは不統一で軸や穎の混入はない。このことから、イネ種子の多くは脱穀後の玄米で、保管されていたものが焼けたと推定される。

## 4. 原の辻遺跡出土米の計測結果（表12・図版75）

計100粒を計測した。種子長は3.49～5.17mm、種子幅は1.82～3.29mmである。大きさ平均は、4.50×2.54mmである。長幅の相関係数は0.24で弱い相関を示す。各ヒストグラムは単峰性である。種子長と種子幅との比（粒型）は平均1.78で、粒型は中短粒、あるいは長短粒に分類される。また、種子長と種子幅の積（粒大）は平均11.46で小型が多い。標準偏差は粒型0.19、粒大1.53である。

## 5. 立岩遺跡出土米の計測結果（表13・図版76）

種子には、熱による膨張やひび割れが2割程度に認められたため、これら変形の小さい計100粒を計測した。種子長は3.51～4.88、種子幅は2.07～2.93である。大きさ平均は、4.24×2.45mmである。長幅の相関係数は0.28で弱い相関を示す。各ヒストグラムは単峰性である。種子長と種子幅との



図139 原の辻遺跡1953年出土種子塊

比（粒型）は平均1.73で、粒型は中短粒が半数を占める。また、種子長と種子幅の積（粒大）は平均10.42で小型が9割以上を占める。標準偏差は粒型0.14、粒大1.13である。粒形質では原の辻遺跡と比べ、ばらつきが若干小さい。

## 6. 津古内畑遺跡出土米の計測結果（表14・図版77）

計103粒を計測した。種子長は3.68～5.52、種子幅は2.21～3.74である。大きさ平均は、 $4.49 \times 2.79$ mmである。長幅の相関係数は0.20で弱い相関を示す。各ヒストグラムは単峰性である。種子長と種子幅との比（粒型）は平均1.62で、粒型は中短粒と短短粒がそれぞれ4割ほどを占める。また、種子長と種子幅の積（粒大）は平均12.56で、中型が6割ほどを占める。標準偏差は粒型0.16、粒大1.62である。粒形質では原の辻遺跡と比べ、円粒で大粒である。ばらつきは同程度である。

## 7. 津島遺跡出土米の計測結果（表15・図版78）

計112粒を計測した。種子長は3.48～5.07、種子幅は2.01～3.25である。大きさ平均は、 $4.28 \times 2.68$ mmである。長幅の相関係数は0.55でやや相関を示す。各ヒストグラムは単峰性である。種子長と種子幅との比（粒型）は平均1.60で、粒型は中短粒と短短粒がそれぞれ4割ほどを占める。また種子長と種子幅の積（粒大）は平均11.53で、小型と中型が半数を占める。標準偏差は粒型0.12、粒大1.65である。粒形質では原の辻遺跡と比べ、円粒で大粒である。ばらつきは粒型で小さく、粒大で同程度である。

## 8. 本分析資料における出土米の粒形質評価

まず、原の辻・立岩の2遺跡は、同じ遺跡内の試料を筆者のほか、岡崎敬（岡崎1968）、佐藤敏也（佐藤1971）、和佐野喜久生（和佐野1993）が過去に分析を行っている。原の辻遺跡において粒型1.62～1.80、粒大11.5～13.6で、粒型に違いが認められる。立岩遺跡において粒型1.68～1.83、粒大10.4～12.1の範囲にあり、粒大に違いが認められる。これは、上記、採取地点の違いを表している。

次に、本稿のデータに対し、弥生時代の北部九州15地点のデータ（上條2018、上條・小泉2019）と奈多砂丘B遺跡のデータ（小畑・小林ほか2012）を加えて、粒形質を評価する（図140）。上條（2018）のパターン分類（表11）に基づく、原の辻はパターン④、立岩はパターン①、津古内畑はパターン②、津島はパターン②となる。

表11 上條（2018）における粒形質パターン

		粒型	
		1.7 $\leq$ (長粒多)	1.7 $>$ (円粒多)
粒大	11.0 $>$ (小型多)	①	③
	11.0 $\leq$ (中型多)	④	②

そして、上條（2018）で設定された各段階のうち、原の辻は中期前半（須玖式）～後期（下大隈式期）の第4段階にあたる。この時期は、

パターン③・④の増加と定着、パターン①の減少が特徴的である。特にパターン④の粒形質はやや長粒で中粒が多い。西北九州と宮崎南部山沿い、薩摩地域ではパターン④であった。これらの遺跡ではばらつきも比較的大きい。

今回分析した原の辻遺跡出土米の形質は、筆者以外の分析結果を含めてもパターン④が多く、ばらつきが比較的大きいというこの段階の内容に一致し、西北九州の地域性が、壱岐島でも表れていることを示唆する。また、同じ第4段階にあたり今回新たに分析に加えた奈多砂丘B遺跡もパターン④に属す。鉄生産において壱岐地域との関連が指摘されているが（宮本2012）、出土米の粒形質が共通する点は注目される。

立岩・津古内畑は前期中葉（板付Ⅱ式期）～中期初頭（城ノ越式期）の第3段階にあたる。この段階は地域性と遺構間差が出現する。粒型と粒大のまとまりで3つのパターンが見出せる。特にパターン①や④といった長粒の米において、地域差や遺構差がある。綾羅木郷遺跡例のように、意識的に長粒の形質をもった米を分けて保管する例もある。地域のまとまりはパターン②・③が多い福岡・筑後地域と、パターン①・④が比較的多い筑豊・北九州・下関地域で分かれる。

分析の結果、パターン①だった立岩は筑豊地域、パターン②だった津古内畑は筑後地域に属し、まさにこれまでの傾向と合致する。さらに立岩はこれまでパターン④のみであったが、パターン①が加わったことにより、下関市綾羅木郷遺跡のような遺構間の差も見出せそうである。

津島遺跡は、九州での結果を応用すると、中期前半（須玖式）～後期（下大隈式期）の第4段階にあたる。津島はパターン②である。またばらつきが比較的小さい。こうしたパターン②は前期中葉（板付Ⅰ式期）以降、平野部の灌漑システムをもった大規模水田と集落を伴う遺跡に展開する。こうした遺跡の出土米は、ばらつきが比較的小さい。津島遺跡では、弥生時代前期より灌漑システムをもった大規模水田が展開しており、九州北部平野部と同じ粒形質を持ったイネが導入されたと考えられる。これまでの水稻農耕技術の研究では、農具や灌漑設備が注目されてきたが、こうした技術のなかに、イネ品種も含まれ、大規模水稻農耕技術の拡散とともに、一定の粒形質を持った品種も拡散していったと考えられる。

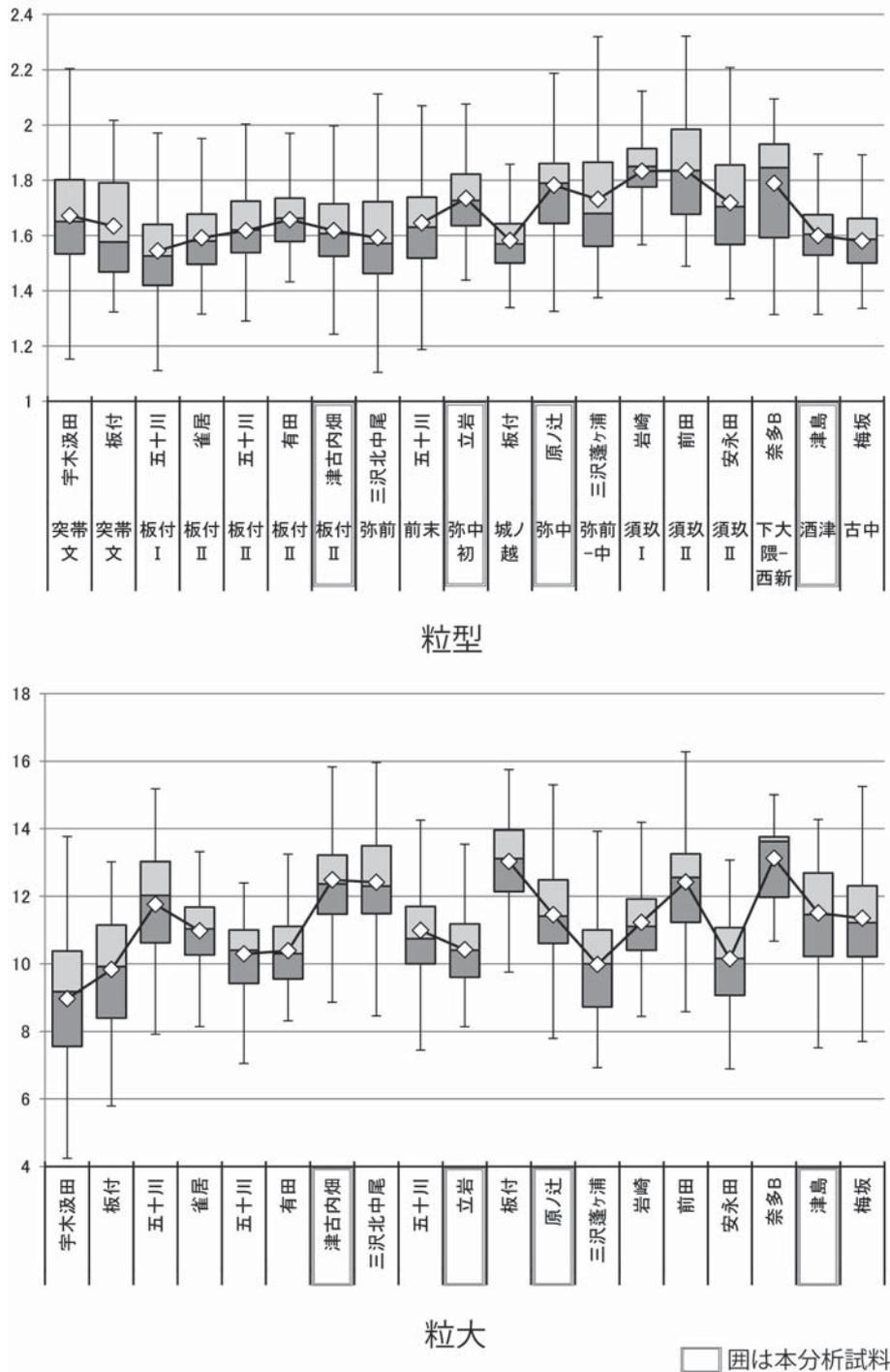


図140 九州北部弥生時代を中心とする粒型・粒大の比較

参考文献

岡崎敬1968「日本における初期稲作資料－朝鮮半島との関連にふれて－」『朝鮮学報』49. 67-87頁  
 岡山県教育委員会2001『津島遺跡3』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告160）  
 小郡町教育委員会1970『津古内畑遺跡』  
 小畑弘己・小林克也・杉山真二2012「奈多砂丘B遺跡第2次調査出土の植物遺存体」『市史研究ふくおか』7. 福岡市史編集委員会. 91-109頁  
 笠原安夫・武田満子1979「岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究」『農学研究』58. 117-179頁

- 鎌木義昌1969「岡山県津島遺跡の調査について」『案山子』3. 農業部会. 1・2頁
- 上條信彦2018「水稲農耕定着段階における九州出土米の粒形質変異」『九州考古学』93. 1-21頁
- 上條信彦・小泉翔太2019「九州大学所蔵出土米の形態分析」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』164-198頁
- 小泉翔太・田中克典・上條信彦2020『日本の出土米Ⅴ西日本出土米の粒形質・DNA分析』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター
- 小泉翔太・田中克典・上條信彦2018『日本の出土米Ⅲ佐藤敏也コレクションの研究』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター
- 佐藤敏也1971『日本の古代米』雄山閣出版
- 田中克典・佐藤洋一郎・上條信彦2015『日本の出土米Ⅱ佐藤敏也コレクションの研究』弘前大学人文学部北日本考古学研究センター・六一書房
- 福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会編1977『立岩遺蹟』河出書房新社
- 松本 豪1994「日本の稲作遺跡と古代米に関する研究」『大阪府立大学紀要（農学・生命科学）』46、135-194頁
- 水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺蹟調査概報」『対馬の自然と文化』九学会連合対馬共同調査会
- 宮本一夫2012「奈多砂丘B遺跡の発掘調査」『市史研究ふくおか』7. 福岡市史編集委員会. 78-91頁
- 和佐野喜久生1993「九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性変異に関する考古・遺伝学的研究」『育種学雑誌』43、589-602頁
- 和佐野喜久生2009「炭化米の粒形質の変異分布と古代日本稲作の起源」『日本考古学』28、23-40頁

表12 原の辻遺跡検出のイネ種子の観察表

番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考	番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考
			長幅比	型	長幅積	型					長幅比	型	長幅積	型	
① F グリッド第2トレンチ7.29								28	4.70	2.95	1.59	短短粒	13.87	中	
1							未計測	29	4.91	2.38	2.06	短長粒	11.69	小	
2							未計測	30	4.23	2.14	1.98	長短粒	9.05	小	
3							未計測	31	4.51	2.52	1.79	中短粒	11.37	小	
4	4.28	2.73	1.57	短短粒	11.68	小		32	4.92	2.58	1.91	長短粒	12.69	中	断片付着
5	4.56	2.47	1.85	長短粒	11.26	小		33	4.45	2.39	1.86	長短粒	10.64	小	
6	4.69	2.61	1.80	中短粒	12.24	中		34	4.31	2.62	1.65	中短粒	11.29	小	断片付着
7	4.39	2.87	1.53	短短粒	12.60	中		35	4.42	2.66	1.66	中短粒	11.76	小	
8	4.71	2.79	1.69	中短粒	13.14	中	断片付着	36	4.82	3.09	1.56	短短粒	14.89	中	
9	4.34	1.82	2.38	中長粒	7.90	極小	断片付着	37	4.70	2.24	2.10	短長粒	10.53	小	
10	4.14	3.05	1.36	長円粒	12.63	中		38	5.07	2.17	2.34	中長粒	11.00	小	
11	4.28	2.31	1.85	長短粒	9.89	小		39	4.51	2.26	2.00	長短粒	10.19	小	
12	4.10	2.38	1.72	中短粒	9.76	小		40	3.90	2.68	1.46	短短粒	10.45	小	
13	4.40	2.18	2.02	短長粒	9.59	小		41	4.35	2.66	1.64	中短粒	11.57	小	
14	4.26	2.45	1.74	中短粒	10.44	小		42	4.02	2.45	1.64	中短粒	9.85	小	
15	4.67	2.51	1.86	長短粒	11.72	小		43	4.57	2.54	1.80	中短粒	11.61	小	
16	4.41	2.37	1.86	長短粒	10.45	小		44	4.28	2.56	1.67	中短粒	10.96	小	
17	4.12	2.48	1.66	中短粒	10.22	小	断片付着	45	4.60	2.26	2.04	短長粒	10.40	小	
18	3.77	2.03	1.86	長短粒	7.65	極小		46	4.50	2.46	1.83	長短粒	11.07	小	断片付着
19	3.49	2.12	1.65	中短粒	7.40	極小		47	4.38	2.50	1.75	中短粒	10.95	小	
20	4.70	2.69	1.75	中短粒	12.64	中		48	4.46	2.42	1.84	長短粒	10.79	小	一部破壊
21	4.75	2.34	2.03	短長粒	11.12	小		49	4.27	2.80	1.53	短短粒	11.96	小	
22	5.05	2.25	2.24	短長粒	11.36	小		50	4.84	2.66	1.82	長短粒	12.87	中	
23	4.79	2.66	1.80	長短粒	12.74	中		51	4.82	2.58	1.87	長短粒	12.44	中	
24	5.17	2.28	2.27	短長粒	11.79	小		52	4.18	2.63	1.59	短短粒	10.99	小	
② G'・G" グリッド第2トレンチ8.1								53	4.39	2.61	1.68	中短粒	11.46	小	
1	4.40	2.52	1.75	中短粒	11.09	小		54	4.55	2.53	1.80	中短粒	11.51	小	
2	4.84	2.64	1.83	長短粒	12.78	中		55	4.36	2.48	1.76	中短粒	10.81	小	
3	4.09	2.68	1.53	短短粒	10.96	小		56	4.54	2.38	1.91	長短粒	10.81	小	
4	4.56	2.92	1.56	短短粒	13.32	中		57	4.40	2.70	1.63	中短粒	11.88	小	一部破壊
5	5.06	2.66	1.90	長短粒	13.46	中		58	3.87	2.21	1.75	中短粒	8.55	小	一部破壊
6	4.29	2.68	1.60	中短粒	11.50	小		59	4.90	2.84	1.73	中短粒	13.92	中	
7	4.90	2.54	1.93	長短粒	12.45	中	断片付着	60	3.95	2.49	1.59	短短粒	9.84	小	断片付着
8	4.98	2.38	2.09	短長粒	11.85	小		61	4.07	2.09	1.95	長短粒	8.51	小	断片付着
9	4.66	2.86	1.63	中短粒	13.33	中		62	4.72	2.53	1.87	長短粒	11.94	小	断片付着
10	4.71	2.94	1.60	中短粒	13.85	中	断片付着	63	4.26	2.41	1.77	中短粒	10.27	小	
11	4.66	2.20	2.12	短長粒	10.25	小		64	4.33	2.34	1.85	長短粒	10.13	小	
12	4.70	2.78	1.69	中短粒	13.07	中	断片付着	65	4.38	2.90	1.51	短短粒	12.70	中	
13	4.62	2.58	1.79	中短粒	11.92	小		66	4.90	2.40	2.04	短長粒	11.76	小	
14	4.40	2.65	1.66	中短粒	11.66	小		67	4.80	2.58	1.86	長短粒	12.38	中	
15	4.46	2.44	1.83	長短粒	10.88	小		68	4.80	2.24	2.14	短長粒	10.75	小	
16	4.47	2.61	1.71	中短粒	11.67	小		69	4.44	2.46	1.80	長短粒	10.92	小	
17	4.36	3.29	1.33	長円粒	14.34	中		70	4.45	2.86	1.56	短短粒	12.73	中	断片付着
18	4.46	2.46	1.81	長短粒	10.97	小	断片付着	71	4.44	2.60	1.71	中短粒	11.54	小	
19	4.58	2.44	1.88	長短粒	11.18	小	断片付着	72	4.76	2.66	1.79	中短粒	12.66	中	
20	4.23	2.62	1.61	中短粒	11.08	小		73	3.69	2.02	1.83	長短粒	7.45	極小	断片付着
21	4.78	2.60	1.84	長短粒	12.43	中		74	4.80	2.70	1.78	中短粒	12.96	中	
22	4.56	2.46	1.85	長短粒	11.22	小		75	4.31	2.56	1.68	中短粒	11.03	小	
23	5.10	3.16	1.61	中短粒	16.12	大		76	4.60	2.56	1.80	中短粒	11.78	小	断片付着
24	4.37	2.33	1.88	長短粒	10.18	小		77	4.18	2.38	1.76	中短粒	9.95	小	断片付着
25	4.92	2.70	1.82	長短粒	13.28	中		78	4.24	2.44	1.74	中短粒	10.35	小	断片付着
26	4.65	3.17	1.47	短短粒	14.74	中		79	4.96	2.54	1.95	長短粒	12.60	中	
27	4.13	2.66	1.55	短短粒	10.99	小									

表13 立岩遺跡第3次調査検出のイネ種子の観察表

番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考	番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考
			長幅比	型	長幅積	型					長幅比	型	長幅積	型	
1	4.55	2.36	1.93	長短粒	10.74	小		51	4.13	2.48	1.67	中短粒	10.24	小	
2	4.38	2.56	1.71	中短粒	11.21	小		52	3.88	2.52	1.54	短短粒	9.78	小	
3	4.17	2.52	1.65	中短粒	10.51	小		53	4.22	2.64	1.60	短短粒	11.14	小	
4	4.30	2.36	1.82	長短粒	10.15	小		54	3.88	2.44	1.59	短短粒	9.47	小	
5	3.64	2.53	1.44	短短粒	9.21	小		55	4.13	2.56	1.61	中短粒	10.57	小	
6	4.42	2.52	1.75	中短粒	11.14	小		56	4.50	2.61	1.72	中短粒	11.75	小	
7	4.17	2.81	1.48	短短粒	11.72	小		57	3.93	2.27	1.73	中短粒	8.92	小	
8	4.26	2.60	1.64	中短粒	11.08	小		58	4.67	2.56	1.82	長短粒	11.96	小	
9	4.34	2.69	1.61	中短粒	11.67	小		59	4.38	2.64	1.66	中短粒	11.56	小	
10	4.59	2.52	1.82	長短粒	11.57	小		60	4.05	2.27	1.78	中短粒	9.19	小	
11	4.79	2.31	2.07	短長粒	11.06	小		61	3.51	2.40	1.46	短短粒	8.42	小	
12	4.17	2.56	1.63	中短粒	10.68	小		62	4.63	2.27	2.04	短長粒	10.51	小	
13	4.13	2.31	1.79	中短粒	9.54	小		63	4.26	2.89	1.47	短短粒	12.31	中	
14	4.42	2.64	1.67	中短粒	11.67	小		64	4.17	2.52	1.65	中短粒	10.51	小	
15	3.93	2.07	1.90	長短粒	8.14	小		65	4.09	2.44	1.68	中短粒	9.98	小	
16	4.30	2.77	1.55	短短粒	11.91	小		66	4.67	2.48	1.88	長短粒	11.58	小	
17	3.80	2.44	1.56	短短粒	9.27	小		67	4.79	2.52	1.90	長短粒	12.07	中	
18	4.13	2.19	1.89	長短粒	9.04	小		68	4.50	2.52	1.79	中短粒	11.34	小	
19	4.30	2.56	1.68	中短粒	11.01	小		69	4.13	2.23	1.85	長短粒	9.21	小	
20	4.46	2.56	1.74	中短粒	11.42	小		70	4.26	2.52	1.69	中短粒	10.74	小	
21	4.09	2.73	1.50	短短粒	11.17	小		71	4.26	2.64	1.61	中短粒	11.25	小	
22	4.17	2.52	1.65	中短粒	10.51	小		72	4.30	2.81	1.53	短短粒	12.08	中	
23	4.30	2.81	1.53	短短粒	12.08	中		73	3.93	2.07	1.90	長短粒	8.14	小	
24	4.63	2.65	1.75	中短粒	12.27	中		74	4.17	2.44	1.71	中短粒	10.17	小	
25	4.21	2.36	1.78	中短粒	9.94	小		75	4.17	2.27	1.84	長短粒	9.47	小	
26	4.34	2.52	1.72	中短粒	10.94	小		76	4.63	2.40	1.93	長短粒	11.11	小	
27	3.84	2.27	1.69	中短粒	8.72	小		77	4.09	2.44	1.68	中短粒	9.98	小	
28	4.26	2.40	1.78	中短粒	10.22	小		78	4.26	2.56	1.66	中短粒	10.91	小	
29	3.93	2.23	1.76	中短粒	8.76	小		79	4.59	2.40	1.91	長短粒	11.02	小	
30	4.34	2.48	1.75	中短粒	10.76	小		80	3.84	2.36	1.63	中短粒	9.06	小	
31	4.05	2.23	1.82	長短粒	9.03	小		81	4.22	2.44	1.73	中短粒	10.30	小	
32	4.30	2.52	1.71	中短粒	10.84	小		82	3.93	2.56	1.54	短短粒	10.06	小	
33	4.42	2.36	1.87	長短粒	10.43	小		83	4.38	2.69	1.63	中短粒	11.78	小	
34	4.05	2.56	1.58	短短粒	10.37	小		84	3.97	2.27	1.75	中短粒	9.01	小	
35	4.38	2.31	1.90	長短粒	10.12	小		85	4.34	2.27	1.91	長短粒	9.85	小	
36	4.38	2.31	1.90	長短粒	10.12	小		86	4.38	2.56	1.71	中短粒	11.21	小	
37	4.22	2.40	1.76	中短粒	10.13	小		87	3.93	2.07	1.90	長短粒	8.14	小	
38	4.26	2.36	1.81	長短粒	10.05	小		88	4.50	2.40	1.88	長短粒	10.80	小	
39	4.09	2.69	1.52	短短粒	11.00	小		89	4.50	2.56	1.76	中短粒	11.52	小	
40	4.50	2.48	1.81	長短粒	11.16	小		90	4.38	2.27	1.93	長短粒	9.94	小	
41	4.42	2.69	1.64	中短粒	11.89	小		91	3.93	2.48	1.58	短短粒	9.75	小	
42	3.84	2.27	1.69	中短粒	8.72	小		92	4.26	2.40	1.78	中短粒	10.22	小	
43	3.88	2.15	1.80	長短粒	8.34	小		93	4.17	2.44	1.71	中短粒	10.17	小	
44	4.34	2.19	1.98	長短粒	9.50	小		94	3.80	2.48	1.53	短短粒	9.42	小	
45	4.13	2.40	1.72	中短粒	9.91	小		95	4.59	2.31	1.99	長短粒	10.60	小	
46	4.01	2.40	1.67	中短粒	9.62	小		96	4.22	2.07	2.04	短長粒	8.74	小	
47	4.30	2.40	1.79	中短粒	10.32	小		97	4.38	2.11	2.08	短長粒	9.24	小	
48	4.26	2.27	1.88	長短粒	9.67	小		98	4.05	2.27	1.78	中短粒	9.19	小	
49	4.38	2.69	1.63	中短粒	11.78	小		99	3.97	2.56	1.55	短短粒	10.16	小	
50	4.59	2.60	1.77	中短粒	11.93	小		100	4.88	2.93	1.67	中短粒	14.30	中	

表14 津古内畑遺跡第19号竪穴検出のイネ種子の観察表

番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考	番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考
			長幅比	型	長幅積	型					長幅比	型	長幅積	型	
1	4.51	2.64	1.71	中短粒	11.92	小		53	4.71	2.36	2.00	長短粒	11.09	小	
2	4.32	2.87	1.51	短短粒	12.37	中		54	4.52	2.72	1.66	中短粒	12.32	中	
3	4.83	2.56	1.88	長短粒	12.36	中		55	4.35	2.42	1.80	中短粒	10.52	小	
4	4.60	2.73	1.68	中短粒	12.58	中		56	4.37	2.62	1.67	中短粒	11.44	小	
5	4.25	2.86	1.49	短短粒	12.14	中		57	4.49	2.94	1.53	短短粒	13.16	中	
6	4.22	2.63	1.60	中短粒	11.12	小		58	5.01	2.89	1.74	中短粒	14.46	中	
7	3.76	2.72	1.38	長円粒	10.22	小		59	4.99	2.97	1.68	中短粒	14.81	中	
8	4.62	2.36	1.96	長短粒	10.88	小		60	4.63	2.94	1.58	短短粒	13.63	中	
9	4.52	2.95	1.53	短短粒	13.33	中		61	4.61	2.83	1.63	中短粒	13.01	中	
10	4.31	2.73	1.58	短短粒	11.74	小		62	4.74	3.08	1.54	短短粒	14.59	中	
11	4.29	2.84	1.51	短短粒	12.20	中		63	4.93	2.88	1.71	中短粒	14.16	中	
12	4.26	2.21	1.93	長短粒	9.41	小		64	4.86	2.81	1.73	中短粒	13.68	中	
13	4.21	2.76	1.53	短短粒	11.63	小		65	5.26	2.99	1.76	中短粒	15.75	中	
14	4.03	2.88	1.40	長円粒	11.60	小		66	4.77	3.07	1.56	短短粒	14.65	中	
15	4.65	2.74	1.69	中短粒	12.75	中		67	4.33	2.39	1.81	長短粒	10.33	小	
16	4.87	2.90	1.68	中短粒	14.13	中		68	5.15	2.47	2.08	短長粒	12.73	中	
17	4.85	2.71	1.79	中短粒	13.12	中		69	4.91	2.90	1.70	中短粒	14.21	中	
18	4.38	3.74	1.17	中円粒	16.38	大		70	4.40	3.68	1.20	中円粒	16.17	大	
19	4.34	2.73	1.59	短短粒	11.85	小		71	4.60	3.05	1.51	短短粒	13.99	中	
20	5.10	2.99	1.71	中短粒	15.24	中		72	4.50	2.74	1.64	中短粒	12.35	中	
21	4.56	2.80	1.63	中短粒	12.74	中		73	4.30	2.91	1.48	短短粒	12.52	中	
22	4.59	2.99	1.53	短短粒	13.73	中		74	4.24	2.34	1.81	長短粒	9.93	小	
23	4.23	2.54	1.67	中短粒	10.71	小		75	4.52	2.64	1.71	中短粒	11.96	小	
24	4.66	2.81	1.66	中短粒	13.10	中		76	4.55	2.87	1.58	短短粒	13.07	中	
25	4.39	2.99	1.47	短短粒	13.11	中		77	4.33	2.77	1.56	短短粒	11.98	小	
26	4.18	2.62	1.59	短短粒	10.95	小		78	4.19	2.74	1.53	短短粒	11.48	小	
27	4.33	2.77	1.56	短短粒	11.98	小		79	3.88	2.70	1.43	短短粒	10.48	小	
28	4.64	2.78	1.67	中短粒	12.90	中		80	4.98	2.60	1.91	長短粒	12.95	中	
29	4.44	3.02	1.47	短短粒	13.42	中		81	4.71	2.71	1.74	中短粒	12.76	中	
30	3.82	2.72	1.41	短短粒	10.38	小		82	4.26	2.60	1.64	中短粒	11.10	小	
31	4.03	2.51	1.61	中短粒	10.10	小		83	4.38	2.86	1.53	短短粒	12.55	中	
32	4.23	2.61	1.62	中短粒	11.03	小		84	4.60	2.63	1.75	中短粒	12.09	中	
33	4.36	2.79	1.57	短短粒	12.15	中		85	4.28	2.57	1.67	中短粒	11.00	小	
34	4.35	2.85	1.53	短短粒	12.38	中		86	4.97	2.77	1.80	中短粒	13.74	中	
35	4.84	3.46	1.40	長円粒	16.72	大		87	4.49	2.80	1.60	短短粒	12.58	中	
36	4.18	2.95	1.42	短短粒	12.33	中		88	4.37	3.57	1.22	長円粒	15.57	中	
37	3.84	3.18	1.21	長円粒	12.21	中		89	4.62	2.52	1.83	長短粒	11.65	小	
38	4.63	2.70	1.72	中短粒	12.51	中		90	4.98	3.28	1.52	短短粒	16.34	大	
39	4.90	2.86	1.71	中短粒	13.99	中		91	4.94	2.84	1.74	中短粒	14.06	中	
40	4.04	2.60	1.55	短短粒	10.51	小		92	4.46	2.78	1.60	中短粒	12.42	中	
41	4.80	2.64	1.82	長短粒	12.69	中		93	4.50	2.56	1.75	中短粒	11.52	小	
42	4.88	2.97	1.65	中短粒	14.48	中		94	4.56	2.85	1.60	中短粒	12.97	中	
43	4.46	2.77	1.61	中短粒	12.37	中		95	3.97	2.79	1.42	短短粒	11.05	小	
44	4.08	2.67	1.53	短短粒	10.90	小		96	4.20	2.98	1.41	短短粒	12.50	中	
45	4.52	2.58	1.76	中短粒	11.64	小		97	4.28	2.33	1.84	長短粒	9.98	小	
46	4.16	2.76	1.51	短短粒	11.47	小		98	3.68	2.29	1.61	中短粒	8.44	小	
47	4.72	2.80	1.69	中短粒	13.18	中		99	4.35	3.09	1.41	短短粒	13.43	中	
48	4.29	2.47	1.74	中短粒	10.59	小		100	4.65	2.64	1.76	中短粒	12.29	中	
49	4.47	2.73	1.63	中短粒	12.21	中		101	5.52	2.92	1.89	長短粒	16.11	大	
50	4.03	2.66	1.52	短短粒	10.73	小		102	4.42	2.97	1.49	短短粒	13.15	中	
51	4.31	2.80	1.54	短短粒	12.08	中		103	4.76	3.18	1.50	短短粒	15.15	中	
52	4.46	2.93	1.52	短短粒	13.04	中									

表15 津島遺跡検出のイネ種子の観察表

番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考	番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考
			長幅比	型	長幅積	型					長幅比	型	長幅積	型	
1	4.31	2.62	1.64	中短粒	11.31	小		57	4.05	2.52	1.60	中短粒	10.21	小	
2	4.46	3.17	1.41	短短粒	14.14	中		58	4.40	3.10	1.42	短短粒	13.62	中	
3	4.55	2.79	1.63	中短粒	12.70	中		59	4.67	2.99	1.56	短短粒	13.98	中	
4	4.01	2.86	1.40	短短粒	11.44	小		60	4.15	2.77	1.50	短短粒	11.47	小	
5	4.20	2.49	1.68	中短粒	10.46	小		61	4.08	2.72	1.50	短短粒	11.11	小	
6	4.44	3.16	1.41	短短粒	14.03	中		62	4.43	2.83	1.56	短短粒	12.55	中	
7	4.04	2.82	1.43	短短粒	11.40	小		63	4.56	2.94	1.55	短短粒	13.37	中	
8	3.97	2.57	1.54	短短粒	10.22	小		64	4.41	2.72	1.62	中短粒	11.98	小	
9	4.39	3.25	1.35	長円粒	14.27	中		65	4.87	2.66	1.83	長短粒	12.96	中	
10	4.72	2.89	1.63	中短粒	13.66	中		66	4.24	2.01	2.10	短長粒	8.53	小	
11	4.15	2.94	1.41	短短粒	12.18	中		67	3.99	2.63	1.52	短短粒	10.50	小	
12	4.79	2.93	1.64	中短粒	14.02	中		68	4.32	2.82	1.53	短短粒	12.21	中	
13	4.24	2.77	1.53	短短粒	11.73	小		69	4.44	2.49	1.79	中短粒	11.04	小	
14	4.39	2.79	1.57	短短粒	12.27	中		70	4.15	2.35	1.76	中短粒	9.78	小	
15	3.84	2.47	1.55	短短粒	9.47	小		71	4.16	3.02	1.37	長円粒	12.57	中	
16	4.11	2.39	1.72	中短粒	9.81	小		72	4.22	2.59	1.63	中短粒	10.95	小	
17	3.98	2.52	1.58	短短粒	10.05	小		73	4.42	2.70	1.63	中短粒	11.93	小	
18	4.14	2.74	1.51	短短粒	11.34	小		74	4.01	2.45	1.63	中短粒	9.82	小	
19	4.16	2.66	1.56	短短粒	11.08	小		75	4.70	2.88	1.63	中短粒	13.51	中	
20	4.08	2.43	1.68	中短粒	9.91	小		76	4.01	2.60	1.54	短短粒	10.42	小	
21	3.63	2.16	1.68	中短粒	7.84	極小		77	4.58	2.73	1.67	中短粒	12.51	中	
22	4.53	2.71	1.67	中短粒	12.26	中		78	4.41	2.60	1.70	中短粒	11.44	小	
23	4.20	2.43	1.73	中短粒	10.19	小		79	4.33	2.44	1.78	中短粒	10.55	小	
24	3.89	2.35	1.65	中短粒	9.14	小		80	3.95	2.59	1.52	短短粒	10.23	小	
25	4.30	2.63	1.63	中短粒	11.31	小		81	4.66	2.94	1.59	短短粒	13.67	中	
26	3.71	2.34	1.59	短短粒	8.67	小		82	3.85	2.93	1.32	長円粒	11.28	小	
27	3.87	2.35	1.65	中短粒	9.08	小		83	3.76	2.20	1.71	中短粒	8.27	小	
28	3.83	2.28	1.68	中短粒	8.75	小		84	4.02	2.66	1.51	短短粒	10.69	小	
29	4.54	2.44	1.86	長短粒	11.06	小		85	4.18	3.15	1.33	長円粒	13.17	中	
30	3.87	2.42	1.60	中短粒	9.36	小		86	4.65	2.99	1.55	短短粒	13.88	中	
31	3.97	2.29	1.73	中短粒	9.09	小		87	4.34	2.80	1.55	短短粒	12.14	中	
32	4.69	2.57	1.82	長短粒	12.06	中		88	4.28	2.77	1.54	短短粒	11.86	小	
33	4.36	2.74	1.59	短短粒	11.97	小		89	4.24	2.87	1.48	短短粒	12.15	中	
34	4.67	2.89	1.62	中短粒	13.49	中		90	4.44	2.73	1.62	中短粒	12.13	中	
35	4.21	2.62	1.61	中短粒	11.05	小		91	3.71	2.41	1.54	短短粒	8.93	小	
36	4.00	2.62	1.52	短短粒	10.48	小		92	4.32	2.93	1.47	短短粒	12.64	中	
37	4.62	2.59	1.78	中短粒	11.97	小		93	3.97	2.47	1.61	中短粒	9.80	小	
38	4.08	2.49	1.64	中短粒	10.16	小		94	4.02	2.55	1.58	短短粒	10.22	小	
39	4.57	2.94	1.55	短短粒	13.43	中		95	4.56	2.79	1.64	中短粒	12.69	中	
40	4.27	2.83	1.51	短短粒	12.07	中		96	4.23	2.49	1.70	中短粒	10.54	小	
41	3.97	2.43	1.63	中短粒	9.64	小		97	4.85	2.72	1.78	中短粒	13.21	中	
42	4.32	3.05	1.42	短短粒	13.19	中		98	5.07	2.77	1.83	長短粒	14.03	中	
43	4.85	2.94	1.65	中短粒	14.26	中		99	4.82	2.76	1.75	中短粒	13.28	中	
44	4.64	2.67	1.74	中短粒	12.39	中		100	3.79	2.76	1.37	長円粒	10.46	小	
45	3.72	2.35	1.59	短短粒	8.73	小		101	4.30	2.45	1.75	中短粒	10.54	小	
46	4.49	2.69	1.67	中短粒	12.05	中		102	4.22	2.32	1.82	長短粒	9.79	小	
47	4.23	2.94	1.44	短短粒	12.41	中		103	4.53	2.81	1.61	中短粒	12.71	中	
48	3.48	2.16	1.61	中短粒	7.51	極小		104	4.60	2.60	1.77	中短粒	11.98	小	
49	4.22	2.69	1.57	短短粒	11.37	小		105	4.79	2.87	1.67	中短粒	13.78	中	
50	4.56	3.01	1.51	短短粒	13.71	中		106	4.29	2.92	1.47	短短粒	12.51	中	
51	3.98	2.42	1.65	中短粒	9.65	小		107	3.69	2.15	1.71	中短粒	7.94	極小	
52	4.52	2.94	1.54	短短粒	13.29	中		108	4.23	2.85	1.48	短短粒	12.07	中	
53	4.34	2.56	1.70	中短粒	11.12	小		109	4.44	3.14	1.41	短短粒	13.94	中	
54	4.58	2.69	1.70	中短粒	12.33	中		110	4.20	2.73	1.54	短短粒	11.47	小	
55	4.25	3.12	1.36	長円粒	13.26	中		111	4.54	2.82	1.61	中短粒	12.79	中	
56	4.84	2.84	1.71	中短粒	13.72	中		112	4.41	2.67	1.65	中短粒	11.78	小	

## 第12章 原の辻閨繰遺跡調査報告補遺

宮本一夫

原の辻閨繰遺跡は、1954（昭和29）年の東亜考古学会によって調査された弥生時代の墓地遺跡であるが（図141）、その後、1995（平成7）年に長崎県教育委員会によって同じく弥生時代の墓地遺構が発見された（長崎県教育委員会2002）。これら二つの墓地遺構の間は約150m離れているが、一連の墓地遺構であり、石棺墓と甕棺墓からなるものである（図141）。石棺墓が成人埋葬用墓で、甕棺墓が小児用甕棺である。甕棺の土器型式からは、東亜考古学会調査のものが弥生前期末から中期前半であり、長崎県教育委員会調査のものが須玖Ⅰ・Ⅱ式の弥生中期後半を主体とするものである。東亜考古学会調査位置の墓群から長崎県教育委員会の墓群へと相対的に墓地が移動しているように見える。

1954年第3次原の辻調査である閨繰遺跡については、既に調査報告書を出している（宮本ほか2018）。この度の原の辻遺跡東亜考古学会第1～第5次調査の再整理時に、第3次調査の閨繰遺跡調査の不明土器と不明管玉を再発見するに至った。そこでその内容を報告するものである。

1954年の閨繰遺跡では、土木工事に際して箱式石棺10基と甕棺6基が発見されたところから、遺跡の記録保存のための緊急調査が1954年3月～4月にかけて実施されたものである。発掘調査では、箱式石棺墓6基と甕棺墓16基が検出されている（図142）。この内、不明であった管玉4点（図143、図版74-4、表16）が発見された。759が4号石棺墓出土、760が5号石棺墓出土のものである。碧玉製で片面穿孔のもので、4号墓のものが比較的大型の管玉である。4号墓と5号墓の管玉はともに青色味が強く光沢をもつ石材であり、朝鮮半島系管玉である可能性がある。一方、8号甕棺墓からは比較的小型の碧玉製管玉2点出土している。同じく片面穿孔である。8号甕棺墓は城ノ越式の甕棺であり、12号甕棺墓などとほぼ同じ時期である。これらは、4・5号墓のものに比べ青色味はみられず、緑色をなすもので、761は波状の節理が認められる特徴的な碧玉である。761と762はともに日本産のもので



図141 原の辻閨繰遺跡の墓葬分布

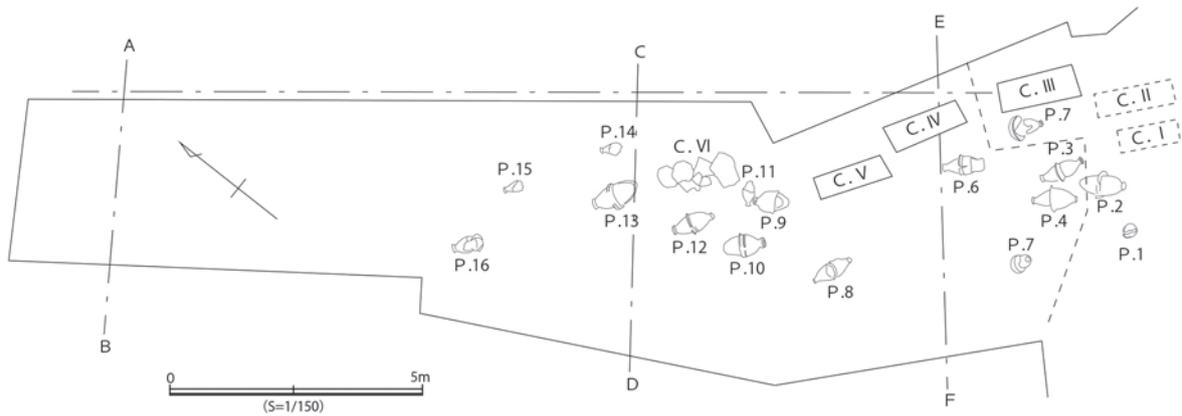


図142 東亜考古学会調査区の墓地

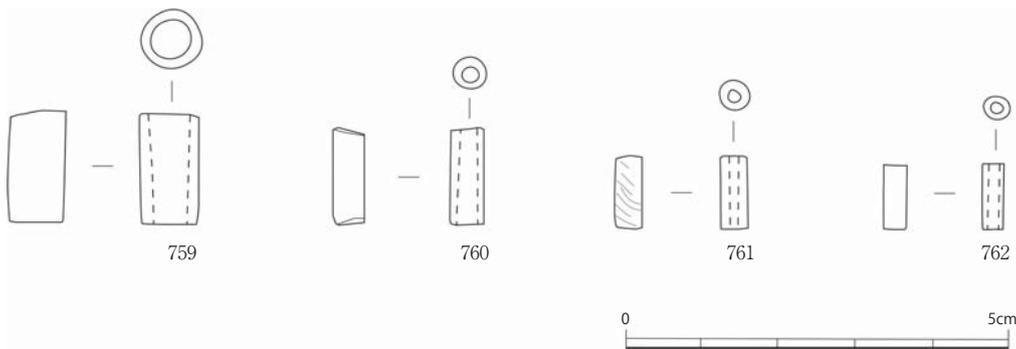


図143 第4・5号石棺墓、第8号甕棺墓出土管玉

表16 原の辻間線遺跡出土管玉一覧

番号	器種	色調	長さ (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	出土墓葬
759	管玉	青味の強い緑色	140	7.5	4.5-4.0	4号石棺墓
760	管玉	青味の強い緑色	130	4.0	2.5-2.0	5号石棺墓
761	管玉	緑色	9.5	4.0	1.5-1.0	8号甕棺墓
762	管玉	緑色	9.0	3.0	1.5-1.0	8号甕棺墓

あろう。

この他、12号甕棺墓の上甕が2018年の報告時には不明であった。この度発見された12号甕棺墓の上甕（図144-763）は、亀の甲タイプの口縁が肥厚し頸部に突帯をもつもので、弥生前期末～中期初頭の城ノ越式である。類似した形態の甕は、16号墓の下甕に認められる（宮本編2018、図18-39）。12号墓の下甕（図144-764）は如意形口縁をなし、底部は上げ底である板付Ⅱc式から城ノ越式の特徴を示す。

### 参考文献

- 宮本一夫・梶原慎司・福永将大2018「原の辻間線遺跡の発掘調査」『壱岐原の辻間線遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳—東亜考古学会壱岐春の辻遺跡調査報告書Ⅰ—』九州大学人文科学研究院考古学研究室、1-32頁
- 長崎県教育委員会2002『間線遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集

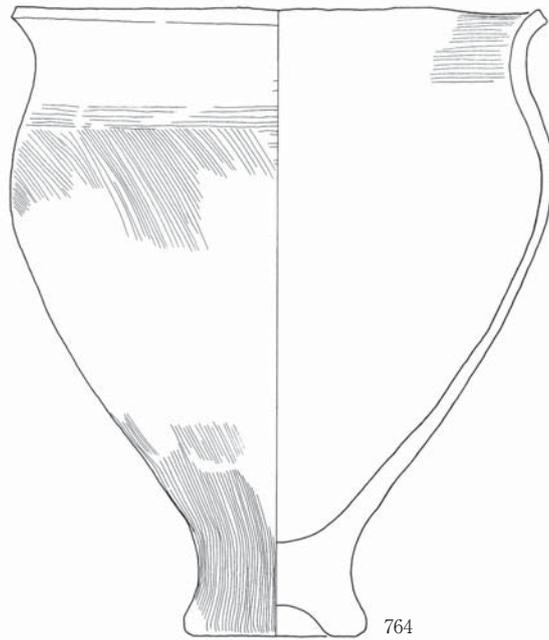
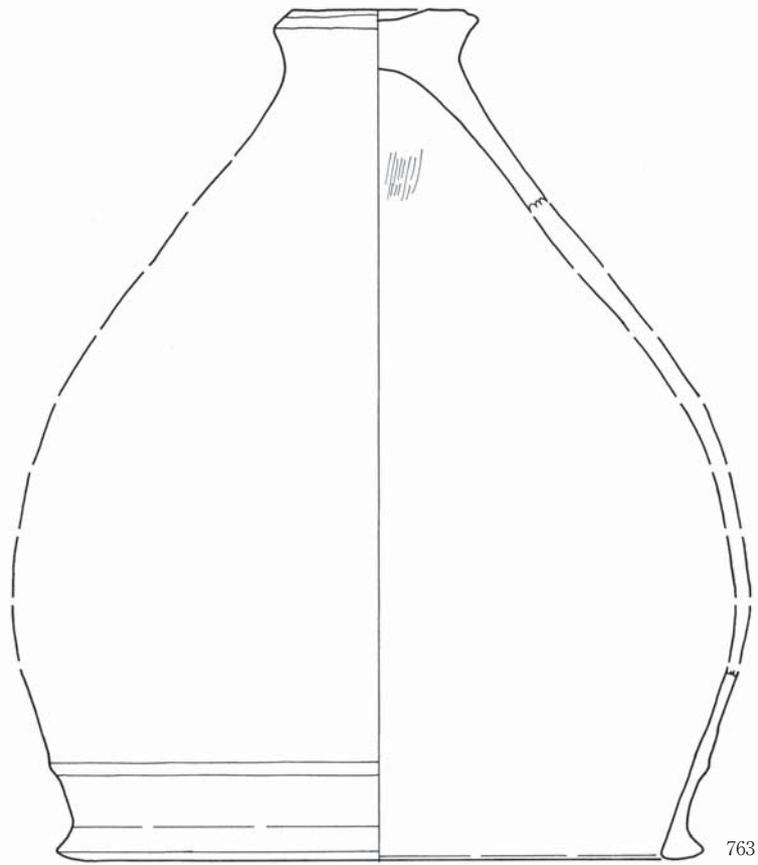


図144 原の辻間線遺跡12号甕棺

# 第13章 原の辻遺跡の整理調査の成果と課題

宮本一夫

## 1. 東亞考古学会調査の概況

東亞考古学会によって行われた原の辻遺跡の発掘調査は、1951年から1961年の5次にわたって実施された。出土遺物からみると、原の辻遺跡の最も古い土器は、弥生前期の板付Ⅰ式に始まるが、遺跡が継続的に始まるのは弥生前期後葉の板付Ⅰc式段階以降である。これは原の辻閨線遺跡の甕棺墓の年代（宮本編2018）からも肯首できるところである。その後、本格的な遺跡の展開は弥生中期前半の城ノ越式・須玖Ⅰ式段階以降であり、弥生時代を通して継続するとともに、古墳時代前期まで存続している。

今回の整理調査によって、閨線遺跡の第3次調査を除き、これらの発掘調査は、環濠集落の中心部分である環濠を含めたその内部の調査を行っていたことが、明らかとなった。環濠は、1951年第1次調査g・h・i・p・q・r区、1961年第5次調査第1トレンチS・T・Z・W・X・Y区と第4トレンチD区部分があたり、それらが内環濠にあたっている。また、1951年第1次調査b・c区と1961年第5次調査第5トレンチが外環濠にあたっている。一方、1954年第4次調査の第1トレンチも内環濠に相当している（図145）。内環濠は弥生中・後期の土器が出土し、外環濠は須玖Ⅱ式から古墳時代前期までの土器が出土している。内環濠と外環濠では時期差が存在している可能性があるが、それらの環濠が完全に廃棄されるのが、古墳時代前期である。

## 2. 東亞考古学会調査の成果

1951年調査時期で、原の辻上層式が設定され、弥生中期の須玖式と弥生後期の高三瀦式の移行期の土器型式といった認識がなされ（水野・岡崎1954）、1961年第5次調査ではその層位関係を検証するために、下層と上層を区分して発掘調査がなされている。この度の再整理調査では、その分層の大部分は内環濠部分に相当する可能性が明らかとなった。さらに上下層の分層により、第1次調査で提起された原の辻上層式の型式設定は困難であることが判明したものの、下層は城ノ越式～須玖Ⅱ式の弥生中期、上層は下大隈式～西新式の弥生後期・終末期から古墳時代前期のものであることが明らかとなった。すなわち分層により時期差が明らかとなったのである。下層の土器は弥生中期に収まるところからも、環濠は一度弥生中期末に埋め戻されたという解釈（長崎県教育委員会2005）を追認した。とともに、1951年・1961年調査の上層に含まれる土器は完形土器が目立つところから、古墳時代前期の環濠の廃棄時には一気に環濠の埋め戻しが行われたと想像できる。

1953年第2次調査では、環濠内の集落の中心地が調査された。1953年調査第2トレンチでは弥生中期の須玖式段階の円形住居址が発見されるとともに、円形住居址を切るように弥生後期には方形住居址が作られていた。1953年調査第4トレンチでは、古墳時代前期の遺構が存在する。このように、集落の中心部には住居やその他の遺構が弥生時代中期から古墳時代前期まで周密に存在していた可能性がある。また、出土遺物には鑄造鉄器や鍛造鉄器が多数みついている。鑄造鉄器は朝鮮半島からの舶載品であり、弥生前期末から弥生中期前半のものであろう。第3次調査の端緒となった銅剣・銅矛の発見地点は、石田大原墓域の一部である（図146）。この細形銅剣も同じように舶載品として朝鮮半

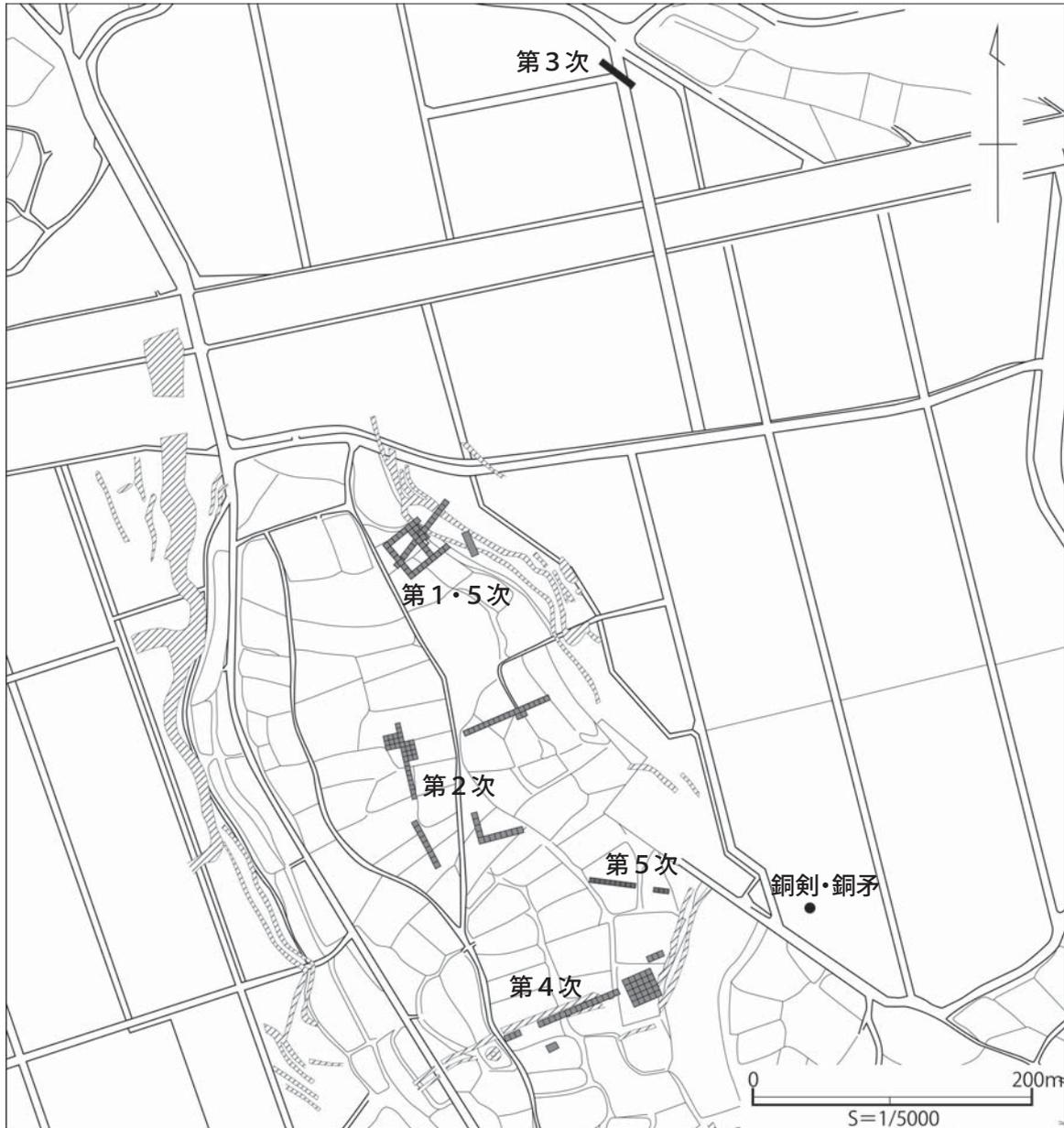


図145 東亜考古学会による原の辻遺跡の調査区と環濠

島から流入し、副葬品とされたものであろう。

一方で、鍛造鉄器は弥生時代中期後葉から古墳時代前期のものと考えられる。それらは農工具のみならず鉄剣や鉄鏃などの武器類に及び、鉄器がかなり普及していたことが知られる。また、棒状鉄素材・鉄素材や鉄片は1953年調査で集中して出土している。また、砥石や叩石などの鉄器の加工用の石器も、集落内部や環濠内部から多数発見されており、集落内部に鍛冶遺構が存在する可能性は高い。今後、集落内部において鍛冶遺構を探索する必要がある。

この鍛冶遺構が始まる弥生中期後葉以降は、朝鮮半島北部に楽浪郡が設置され、楽浪郡と北部九州との長距離交易によって、漢系遺物が北部九州に流入していく。原の辻遺跡の東亜考古学会調査でも、漢鏡片や貨泉が出土しており、漢系遺物が存在する。また、出土したガラス小玉9点は、第10章で示されたようにすべて舶載品であり、楽浪郡を経由してもたらされたものであろう。このような楽浪郡



図146 原の辻遺跡と東亞考古学会の調査区（宮崎2008を改変）

や三韓との交易活動は、東亞考古学会発掘調査で出土した多数の楽浪系土器や三韓系土器の存在からも知ることができる。

1954年第4次調査の第1トレンチは内環濠に相当しているが、その内環濠の南側の1953年調査第5地点から弥生中期の甕棺墓が複数見つっている。これまで原ノ久保A・B・C区が多重環濠の南側に位置することがわかっていたが、外環濠の集落の外側に1953年調査第5地点が位置しており、新たな墓群が存在する可能性がある。あるいは原墓域や石田大原墓域に連なる新たな支群として位置づけることも可能であろう。

生業面でいえば、炭化米の多量の出土などが示すように、稲作が主たる生業であり、一般的な弥生時代の西日本の生業のあり方を表している。第11章で示されたように、原の辻遺跡の炭化米は長粒で粒大も中型が多い④パターンのものであり、筑豊、北九州市域、下関地域などの炭化米パターンと類似しており、福岡・筑後地域の炭化米の形状の類型とは異なっている。これは、気候環境における適応差に起因していることを示しているのであろうか。

一方で、石錘や鉄製釣針の出土例が目立つように、漁撈活動も行われていた半農半漁の生業活動に、交易拠点としての物資の流通に関わる生業が想定される。漁撈活動を示すものとして、原の辻遺跡ではアワビおこしが出土している。壱岐では原の辻遺跡（中尾2005）やカラカミ遺跡（主税2011）でアワビおこしが出土しているが、いずれも鯨骨製である。東亞考古学会調査で発見されたアワビおこしは鹿角製であり、カラカミ遺跡にその可能性があるものがあるが（主税2011）、壱岐では確実なものとして初めての出土品である。鹿角製アワビおこしは、朝鮮半島南部の靑島遺跡や山陰の青谷上寺地遺跡から出土している。この鹿角製アワビおこしは、朝鮮半島南部から壱岐を経由して山陰への広がり示す可能性があるとともに、その分布が交易ルートを示すものである可能性もある。

### 3. 原の辻遺跡の歴史的な位置づけ

原の辻遺跡の環濠集落が廃棄されるのが古墳時代前期である。この後、原の辻遺跡は国分寺などに通ずる古代の官道などに付随する遺跡として存続していく。弥生前期後葉から古墳時代前期まで北部九州と朝鮮半島南部との長距離交易の交易拠点として壱岐のカラカミ遺跡などとともに存在していた（宮本2023）。しかしながら、古墳時代前期を境に交易拠点としての役割を終えるのはなぜであろうか。弥生時代中期後葉の須玖Ⅱ式段階に、遠賀川以東系の跳ね上げ口縁甕がカラカミ遺跡ではかなりの量を占めているのに対し、同じ壱岐島の弥生遺跡である原の辻遺跡では跳ね上げ口縁甕はごく僅かであり、遠賀川以西系の鋤先形状口縁甕が主体を占めている。このことは、カラカミ遺跡と原の辻遺跡が異なった交易チャンネルの交易拠点であった可能性が考えられる（宮本2023）。カラカミ遺跡が糸島地域と遠賀川以東を交易対象としているのに対し、原の辻遺跡は福岡平野などの遠賀川以西を交易対象の中心とすることが想定された。カラカミ遺跡は、弥生後期の下大隈式段階まで交易拠点として存続する（宮本2013）が、原の辻遺跡は古墳時代前期まで存続している。古墳時代前期の福岡平野には西新遺跡や博多遺跡群が存在し、対外交易の拠点を形成している。この時期は、福岡平野が朝鮮半島とヤマトとの中継交易拠点化した段階であるが（宮本2023）、福岡平野と朝鮮半島の間の中継交易拠点として、原の辻遺跡が弥生時代以来の交易拠点として存続していたのである。こうした交易ルート上の拠点の役割を終えるのが、313年の楽浪郡の滅亡以降にみられる対外交易関係の変化である。この時期以降、ヤマト政権は朝鮮半島南部の金官加耶との直接交易により鉄素材などの交易品の確保を進めることになる。その交易ルートは近畿から瀬戸内海を通り玄界灘から直接に金官加耶へ達するも

のであった。その海上ルート上にある沖ノ島がこの時期以降に航海祭祀の場と化することになる。そして、中継交易拠点の役割を終えた西新遺跡や原の辻遺跡は遺跡の終焉を迎えることになる。

#### 参考文献

- 主税英徳2011「出土骨角器」『沓岐カラカミ遺跡Ⅲ－カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）―』113-119頁
- 長崎県沓岐市教育委員会2006『特別史跡 原の辻遺跡―史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査―原XⅤ区・原XⅣ区・高元Ⅲ区・高元Ⅳ区 石田大川604区・石田大川605-1区』（沓岐市文化財調査報告書第9集）
- 長崎県沓岐市教育委員会2009『特別史跡 原の辻遺跡―史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査―高元Ⅷ区・原XⅤ区・原XⅦ区』（沓岐市文化財調査報告書第1集）
- 長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）
- 中尾篤志2005「骨角器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）199-202頁
- 水野清一・岡崎敬1954「沓岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』古今書院、295-309頁
- 宮崎貴夫2008『原の辻遺跡』（『日本遺跡』32）同成社
- 宮本一夫2013「カラカミ遺跡の鍛冶と長距離交易―カラカミ遺跡発掘調査の総合的成果―」『沓岐カラカミ遺跡Ⅳ―カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査（1977・2011年）―』238-254頁
- 宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣

版 圖



1 原の辻遺跡遠景（1951年第1次調査）



2 第2次調査（1953年）第1トレンチ貝層出土状況



1 第2次調査（1953年）第2トレンチ O・P 区土器出土状況



2 第2次調査（1953年）第2トレンチ L・M 区土器出土状況



1 第2次調査（1953年）第2トレンチ拡張区（E1～U区）の遺構（東から）



2 第2次調査（1953年）第2トレンチ拡張区と1号住居址（北西から）



1 第2次調査(1953年)第2トレンチ1号住居址(南から)



2 第2次調査(1953年)第2トレンチ1号住居址(北西から)



1 第2次調査第3トレンチ柱穴群（南から）



2 第2次調査第4トレンチ遺物出土状況



3 第2次調査（1953年）第4トレンチI区遺物出土状況（西から）



1 第2次調査（1953年）第5トレンチ甕棺墓出土状況



2 第2次調査（1953年）調査参加者



1 第4次調査(1954年)第1トレンチA区  
遺物出土状況



2 第4次調査(1954年)第1トレンチA～  
F区遺物出土状況



3 第4次調査(1954年)第1トレンチA区  
遺物出土状況



4 第4次調査(1954年)第1トレンチA・B  
区遺物出土状況



1 第4次調査(1954年)第1トレンチ遺物出土状況(西から)



2 第4次調査(1954年)第1トレンチL区出土土器



3 第4次調査(1954年)第1トレンチD区遺物出土状況(北から)



4 第4次調査(1954年)第1トレンチL区遺物出土状況



1 第4次調査（1954年）第1トレンチ遺物出土状況



2 第4次調査（1954年）第2トレンチ柱穴遺構（南東から）



1 第1次調査（1951年）第1トレンチ（南から）



2 第1次調査（1951年）第1トレンチh・r区土器出土状況



3 第1次調査（1951年）第1トレンチh・p・q・r・f・g区遺物出土状況（北から）



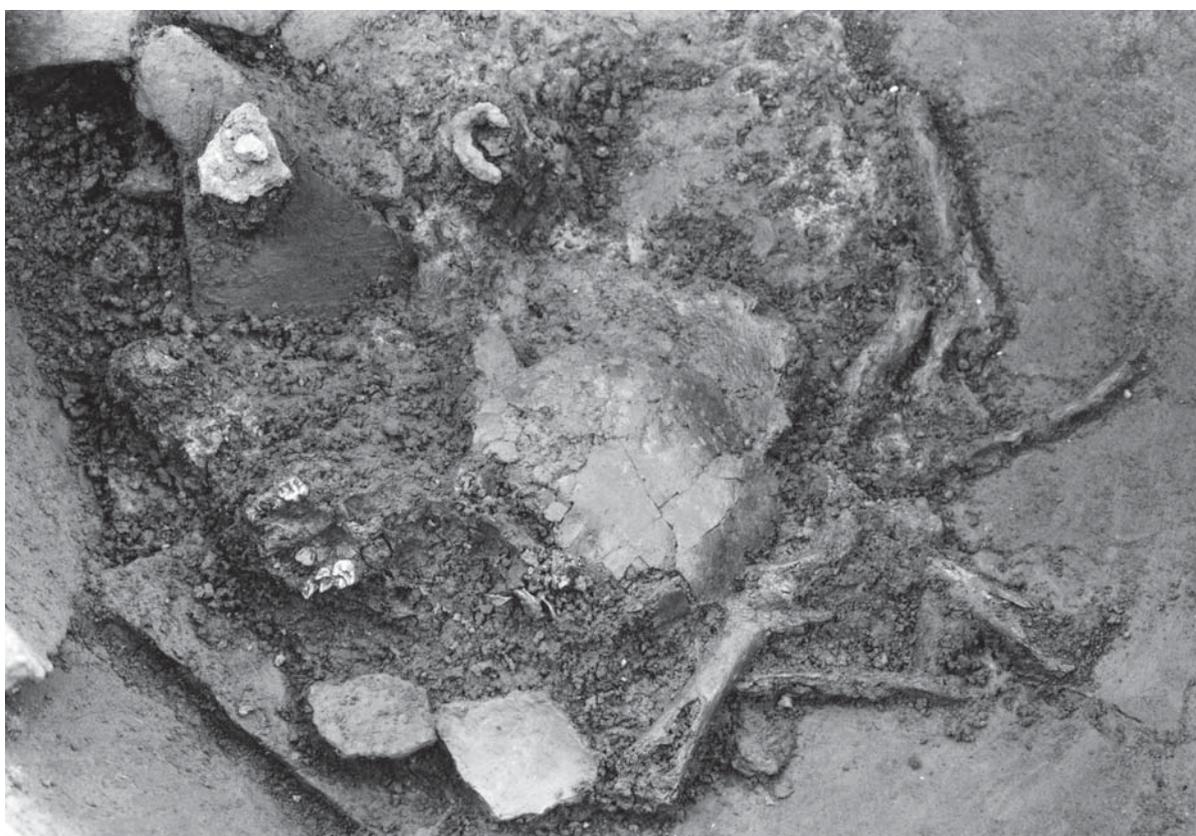
1 第1次調査（1951年）第1トレンチh・p・q・r区（北から）



2 第1次調査（1951年）第1トレンチh区甕棺出土状況（北から）



1 第1次調査（1951年）第1トレンチh区甕棺出土状況（北東から）



2 第1次調査（1951年）第1トレンチh区甕棺内人骨および鉄釣針



1 第1次調査（1951年）第1トレンチ a区犬骨格および丹塗壺出土状況



2 第1次調査（1951年）第1トレンチ b区遺物出土状況



1 第5次調査（1961年）第1トレンチF・G区遺物出土状況



2 第5次調査（1961年）第1トレンチL・M区遺物出土状況



1 第5次調査（1961年）第1トレンチ M・N・O区遺物出土状況



2 第5次調査（1961年）第1トレンチ W・X区遺物出土状況



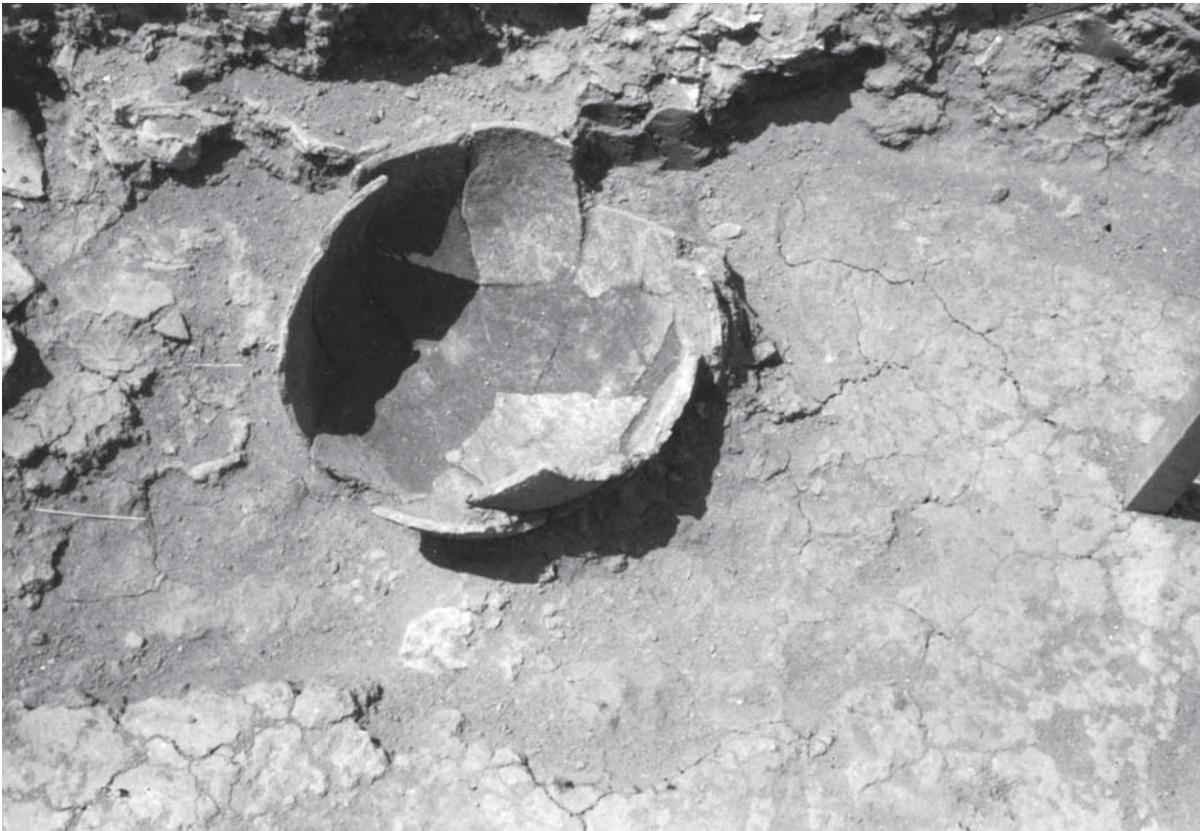
1 第5次調査（1961年）第1トレンチS区遺物出土状況



2 第5次調査（1961年）第1トレンチS・T区遺物出土状況



1 第5次調査（1961年）第1トレンチS・T区焼土層出土状況



2 第5次調査（1961年）第2トレンチN区甕棺墓出土状況



1 第5次調査（1961年）第2トレンチ A 区遺物出土状況



2 第5次調査（1961年）第4トレンチ D 区遺物出土状況



1 第5次調査（1961年）第5トレンチC区遺物出土状況



2 第5次調査（1961年）第5トレンチC区遺物出土状況



第2次調査（1953年）出土土器（1）



第2次調査（1953年）出土土器（2）



第2次調査（1953年）出土土器（3）



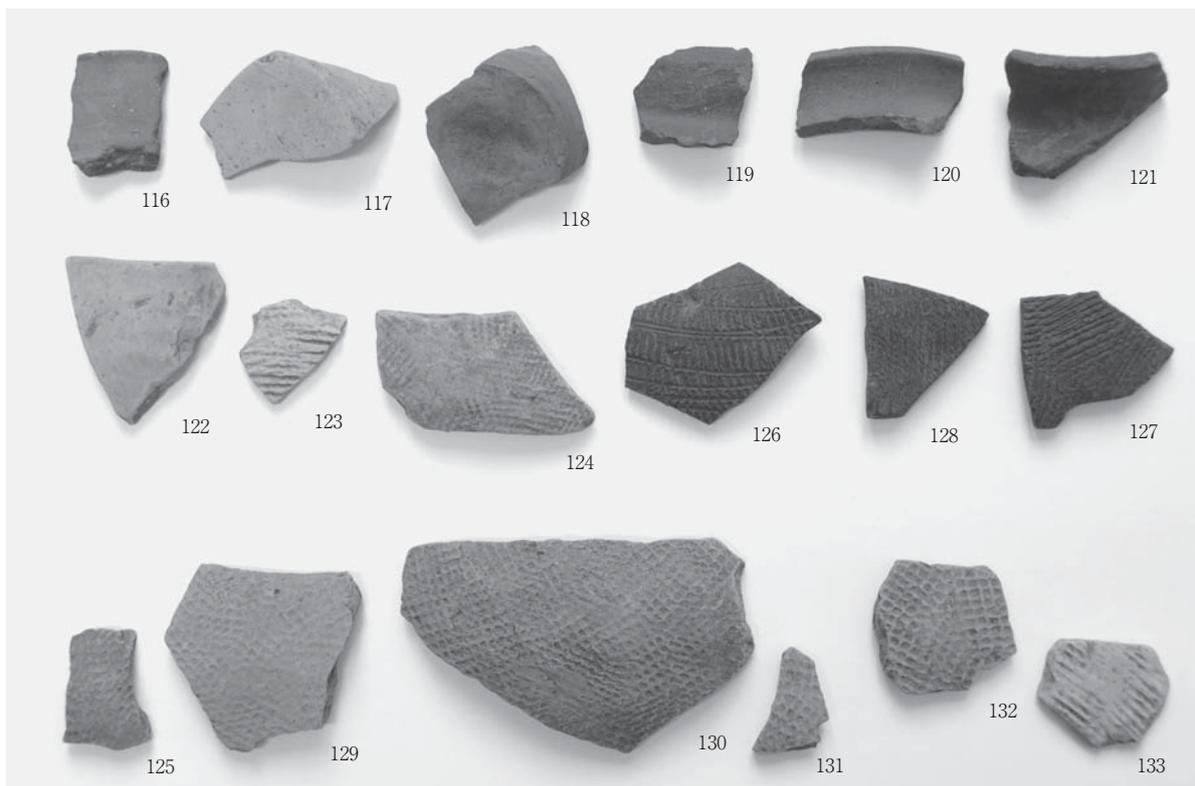
第2次調査（1953年）出土土器（4）



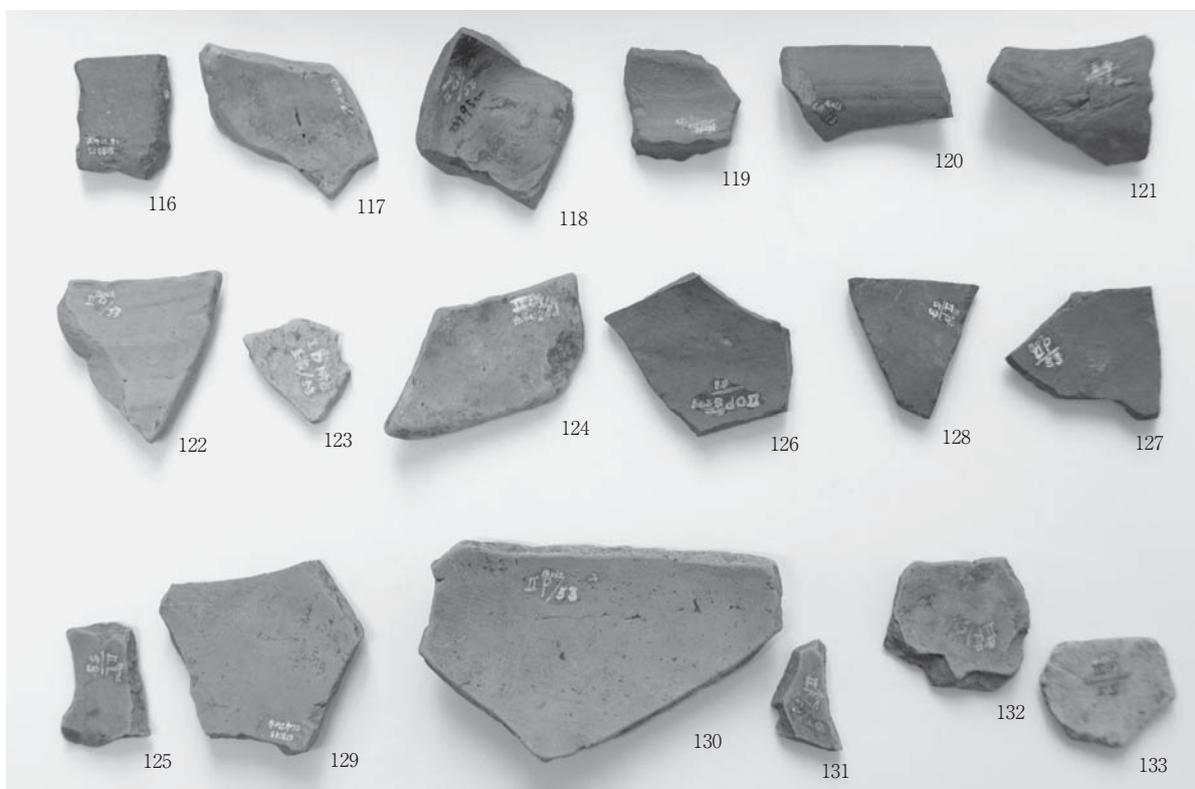
第2次調査（1953年）出土土器（5）



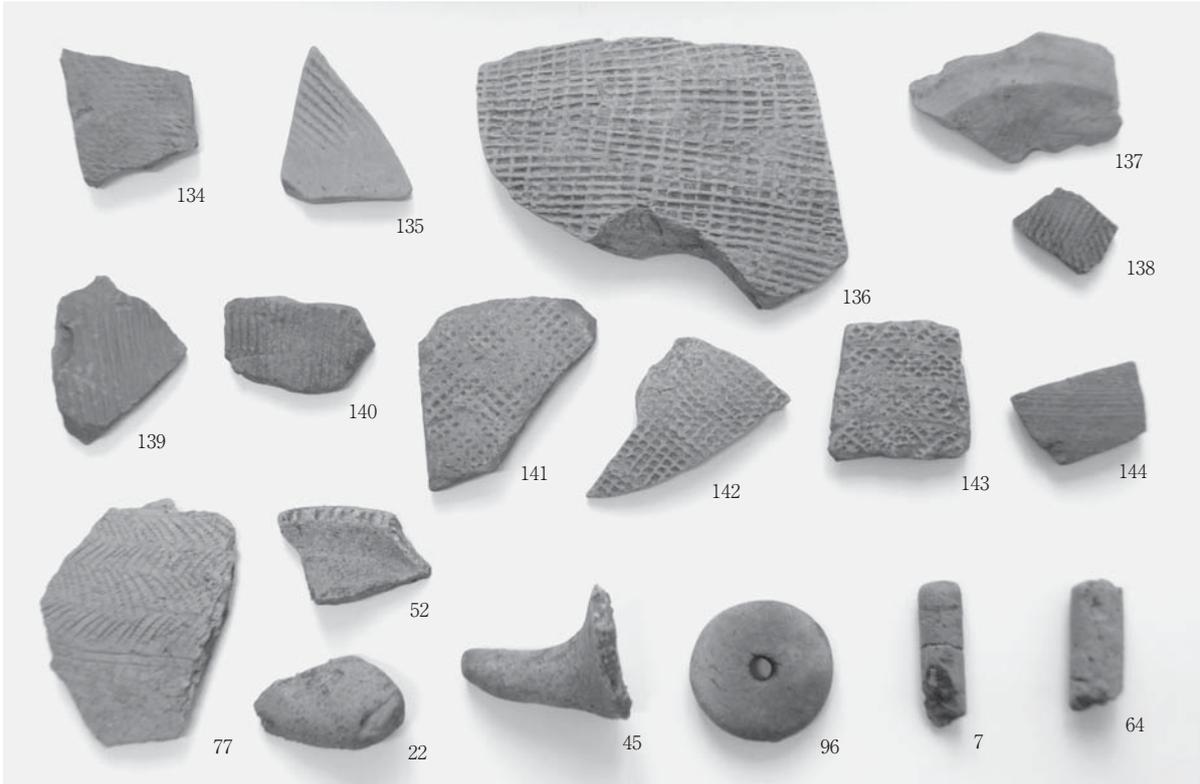
第2次調査（1953年）出土土器（6）



1 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器(1)(表)



2 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器(1)(裏)



1 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器その他(2)(表)



2 第2次調査(1953年)出土楽浪系土器・三韓系土器その他(2)(裏)



第4次調査（1954年）出土土器（1）



第4次調査（1954年）出土土器（2）



第4次調査（1954年）出土土器（3）



第4次調査（1954年）出土土器（4）



第4次調査（1954年）出土土器（5）



第4次調査（1954年）出土土器（6）



第1次調査（1951年）出土土器（1）



第1次調査（1951年）出土土器（2）



第1次調査（1951年）出土土器（3）



第1次調査（1951年）出土土器（4）



第1次調査（1951年）出土土器（5）



1 第1次調査（1951年）・第4次調査（1954年）出土楽浪系土器・三韓系土器（1）（表）



2 第1次調査（1951年）・第4次調査（1954年）出土楽浪系土器・三韓系土器（1）（裏）



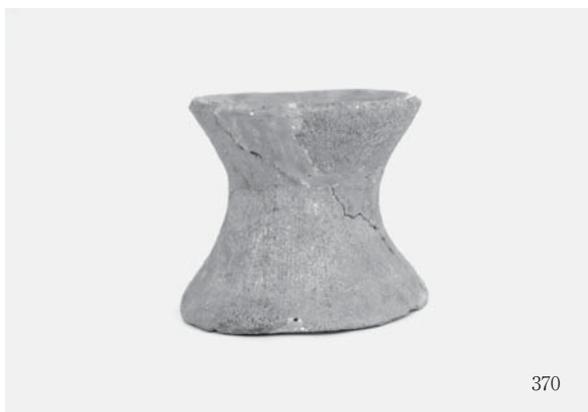
3 第2次調査（1953年）出土壁土



第5次調査（1961年）出土土器（1）



第5次調査（1961年）出土土器（2）



第5次調査（1961年）出土土器（3）



第5次調査（1961年）出土土器（4）



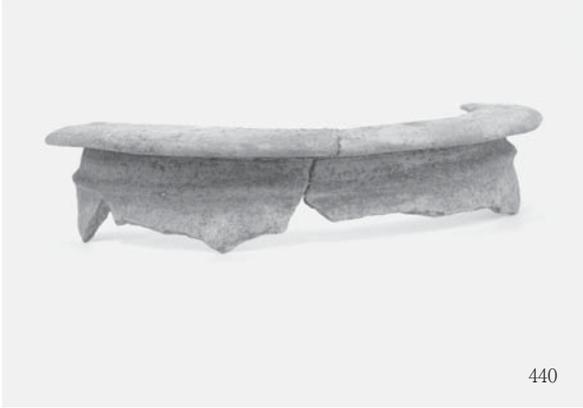
第5次調査（1961年）出土土器（5）



第5次調査（1961年）出土土器（6）



第5次調査（1961年）出土土器（7）



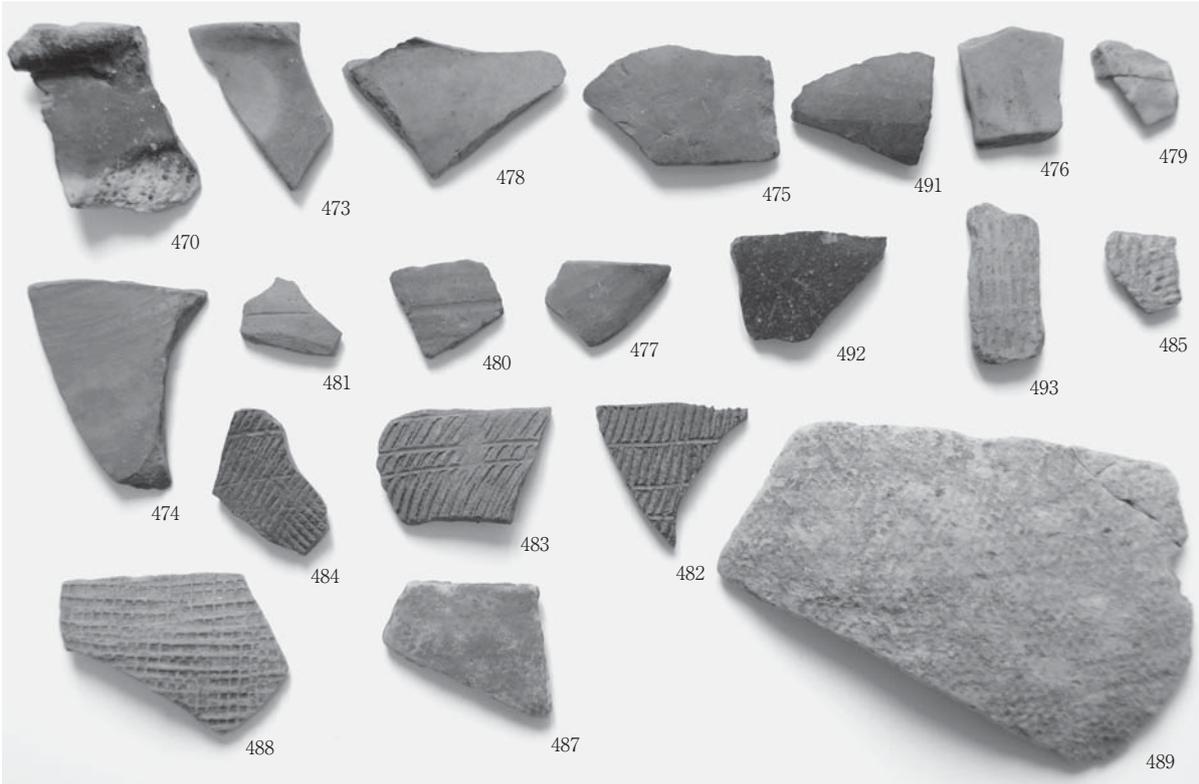
第5次調査（1961年）出土土器（8）



第5次調査（1961年）出土土器（9）



第5次調査（1961年）出土土器（10）



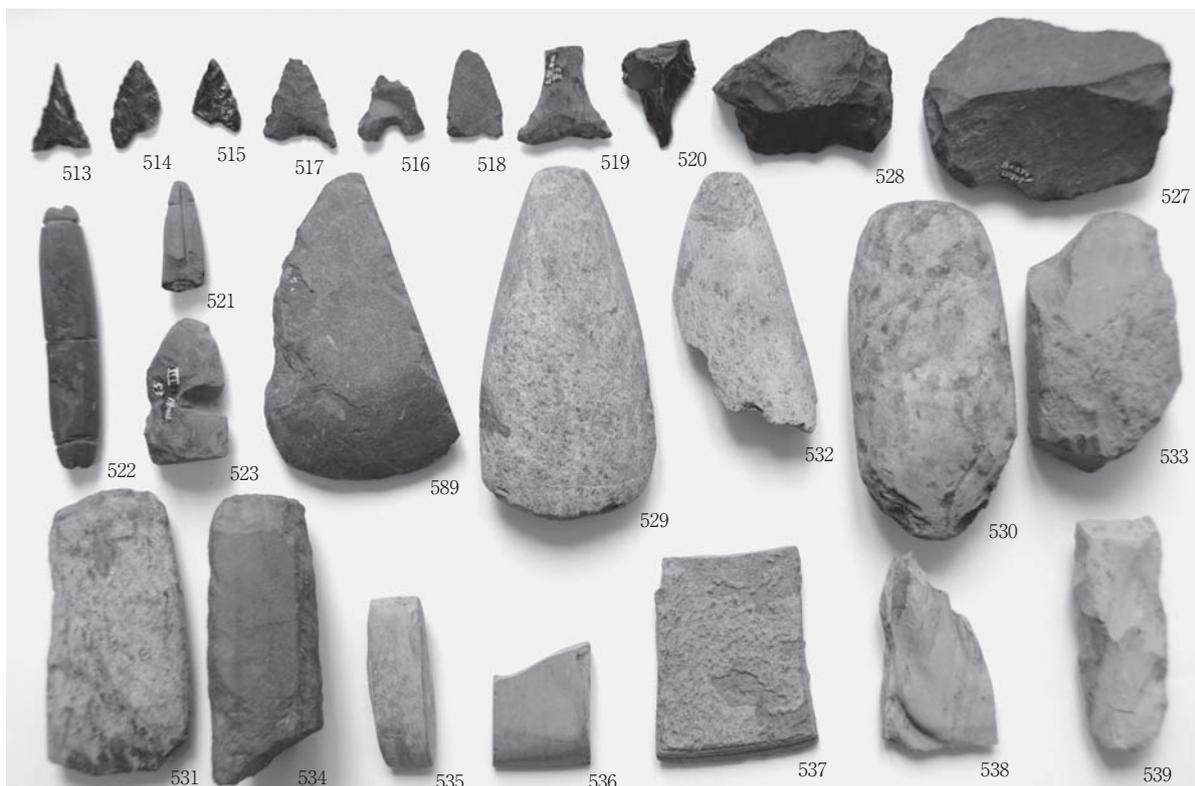
1 第5次調査(1961年)出土楽浪系土器・三韓系土器(表)



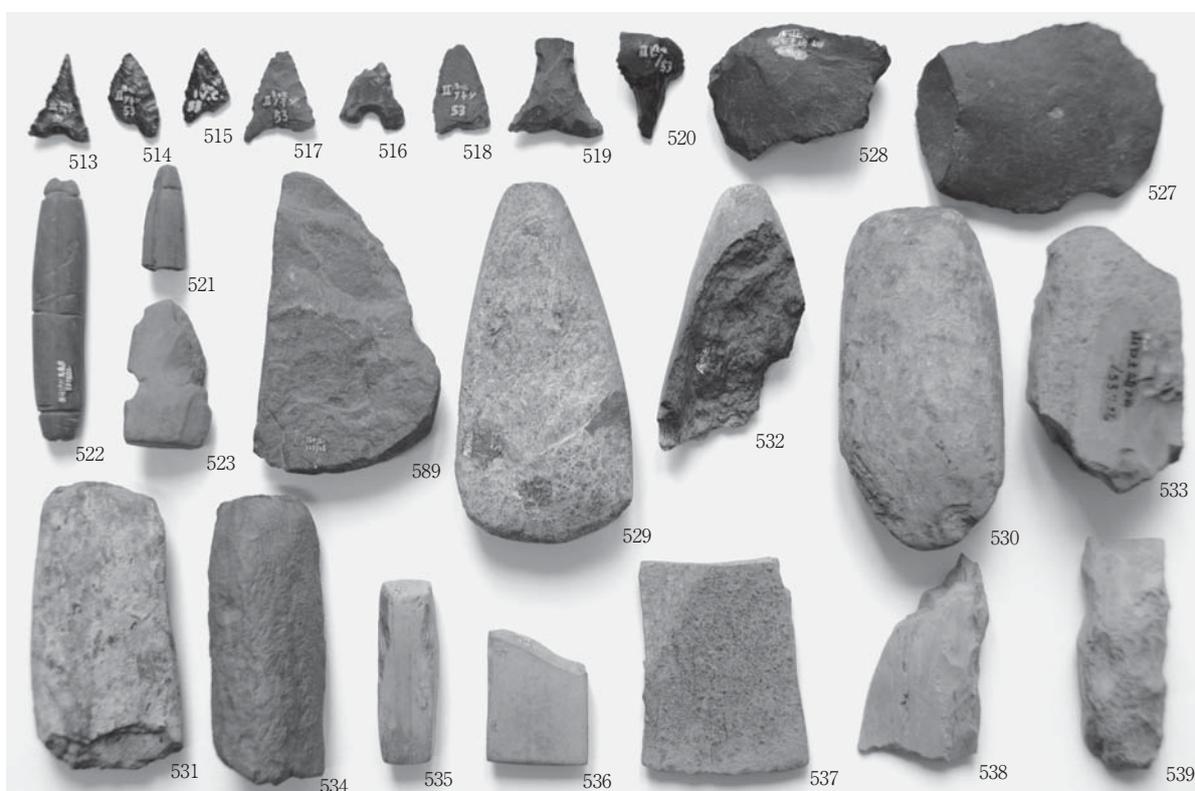
2 第5次調査(1961年)出土楽浪系土器・三韓系土器(裏)



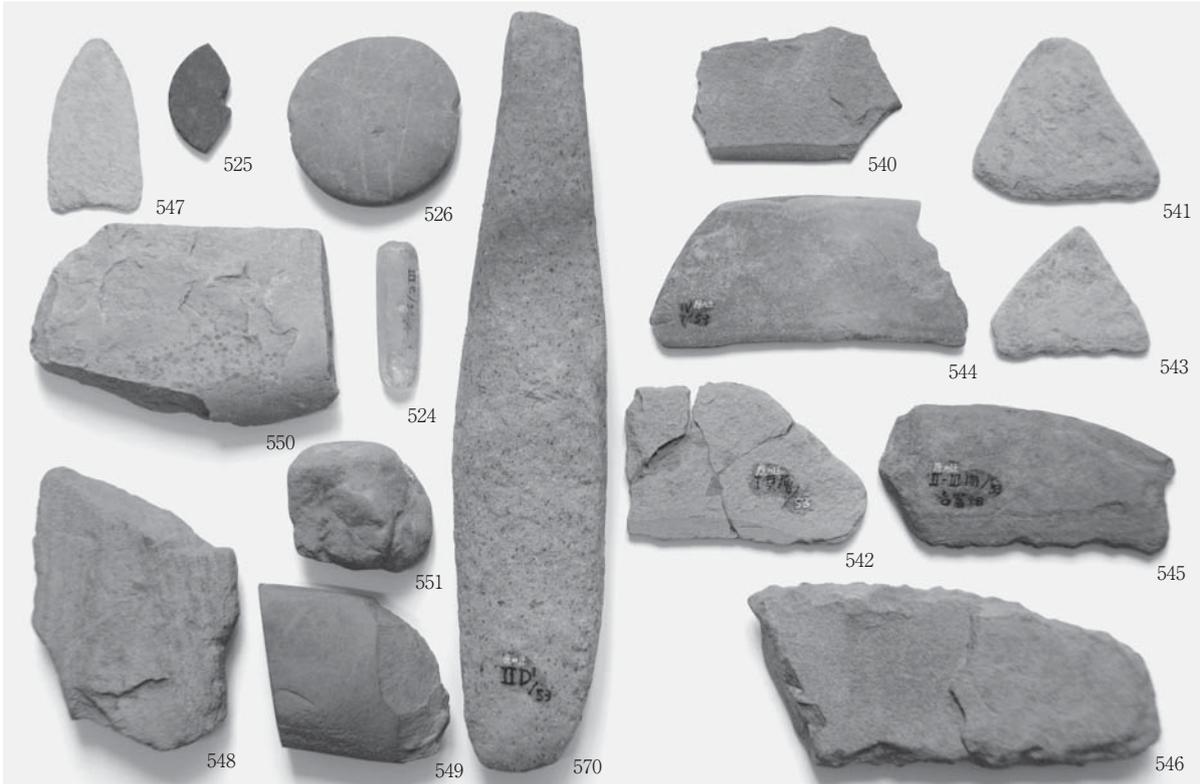
出土地不明土器



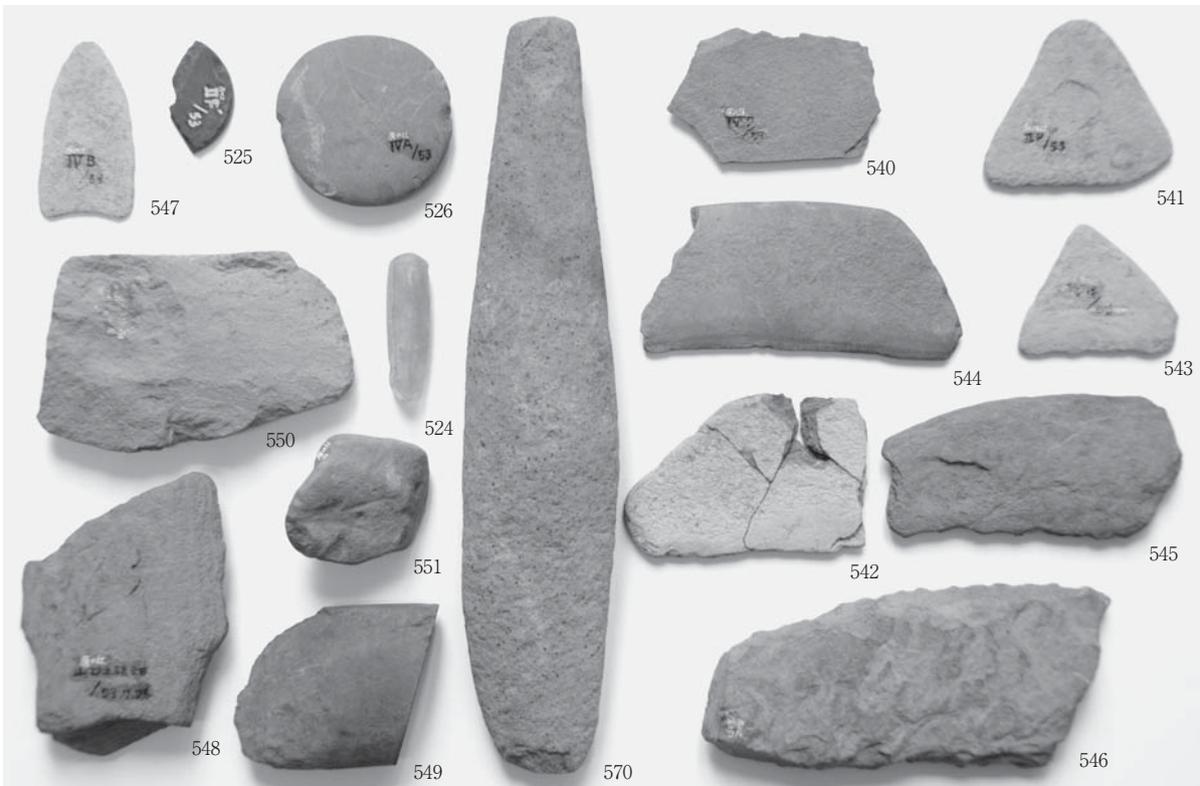
1 第2次調査(1953年)出土石器(1)(表)



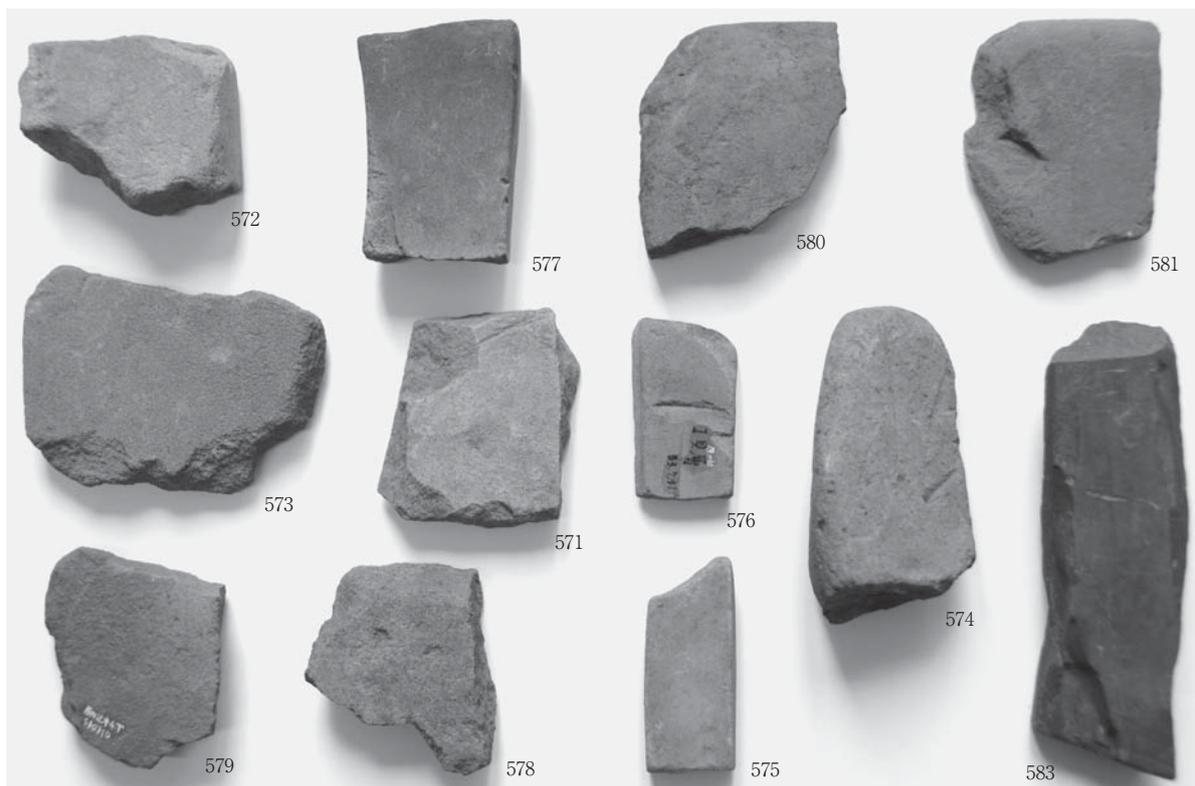
第2次調査(1953年)出土石器(1)(裏)



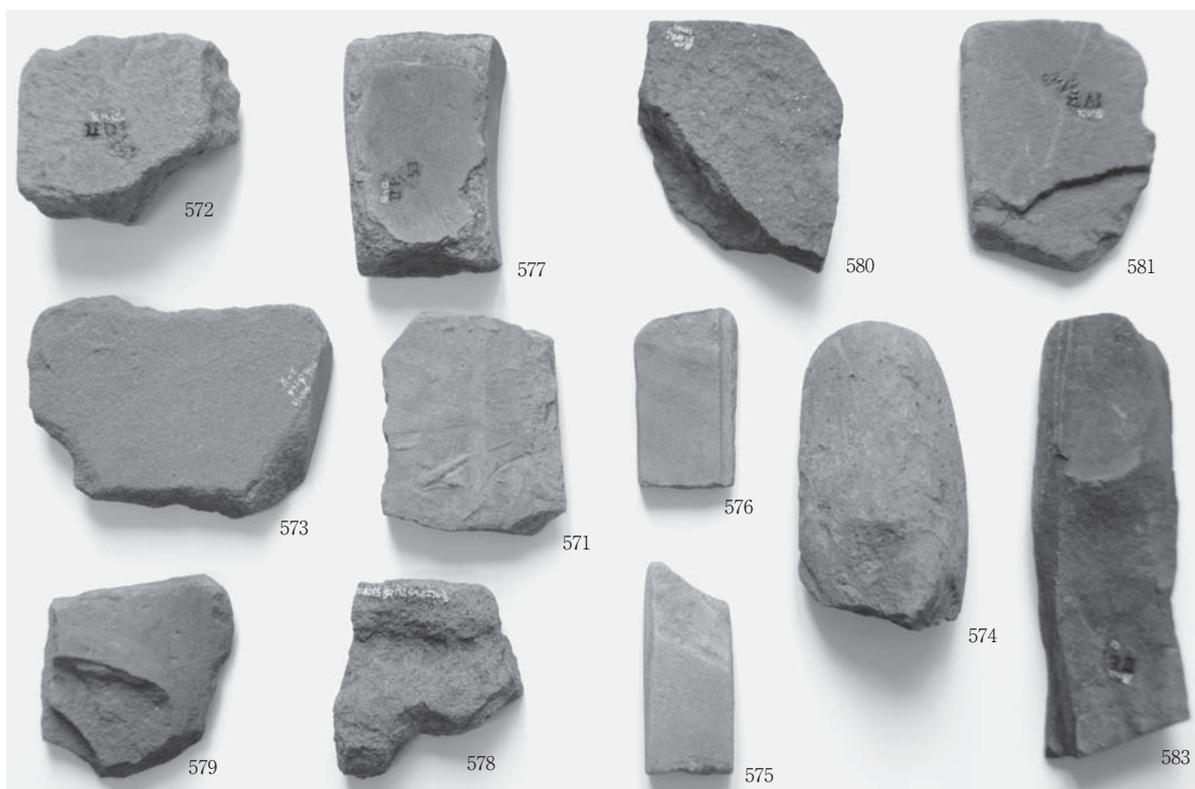
1 第2次調査(1953年)出土石器(2)(表)



第2次調査(1953年)出土石器(2)(裏)



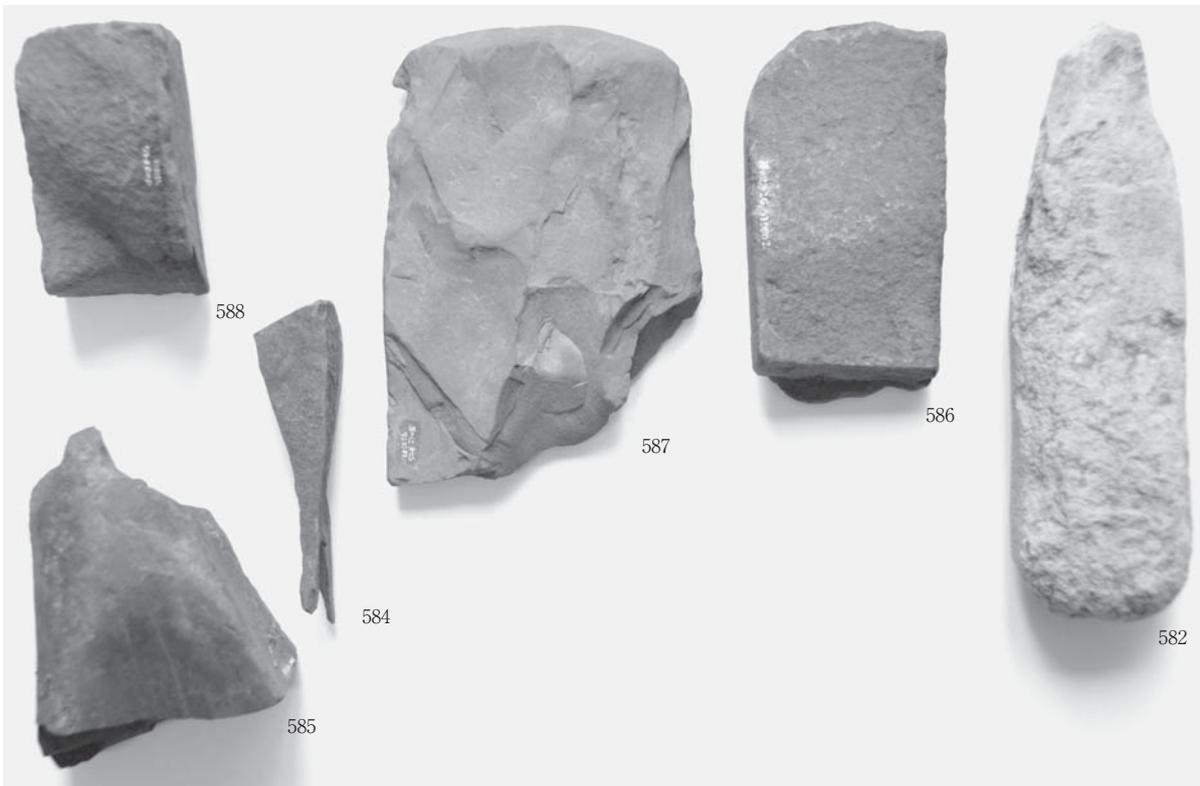
1 第2次調査(1953年)出土石器(3)(表)



2 第2次調査(1953年)出土石器(3)(裏)



1 第2次調査(1953年)出土石器(4)(表)



2 第2次調査(1953年)出土石器(4)(裏)



1 第2次調査(1953年)出土石器(5)(表)



2 第2次調査(1953年)出土石器(5)(裏)



1 第2次調査(1953年)出土石器(6)(表)



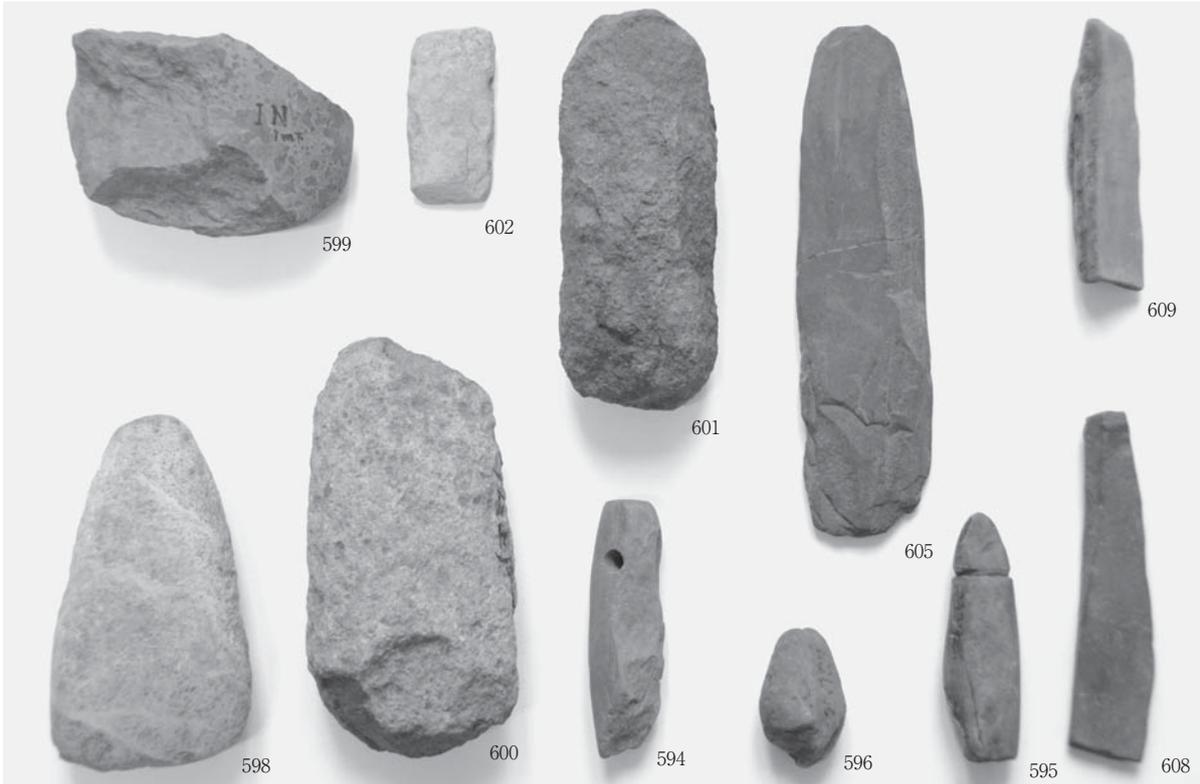
2 第2次調査(1953年)出土石器(6)(裏)



1 第4次調査(1954年)出土石器(1)(表)



2 第4次調査(1954年)出土石器(1)(裏)



1 第4次調査(1954年)出土石器(2)(表)



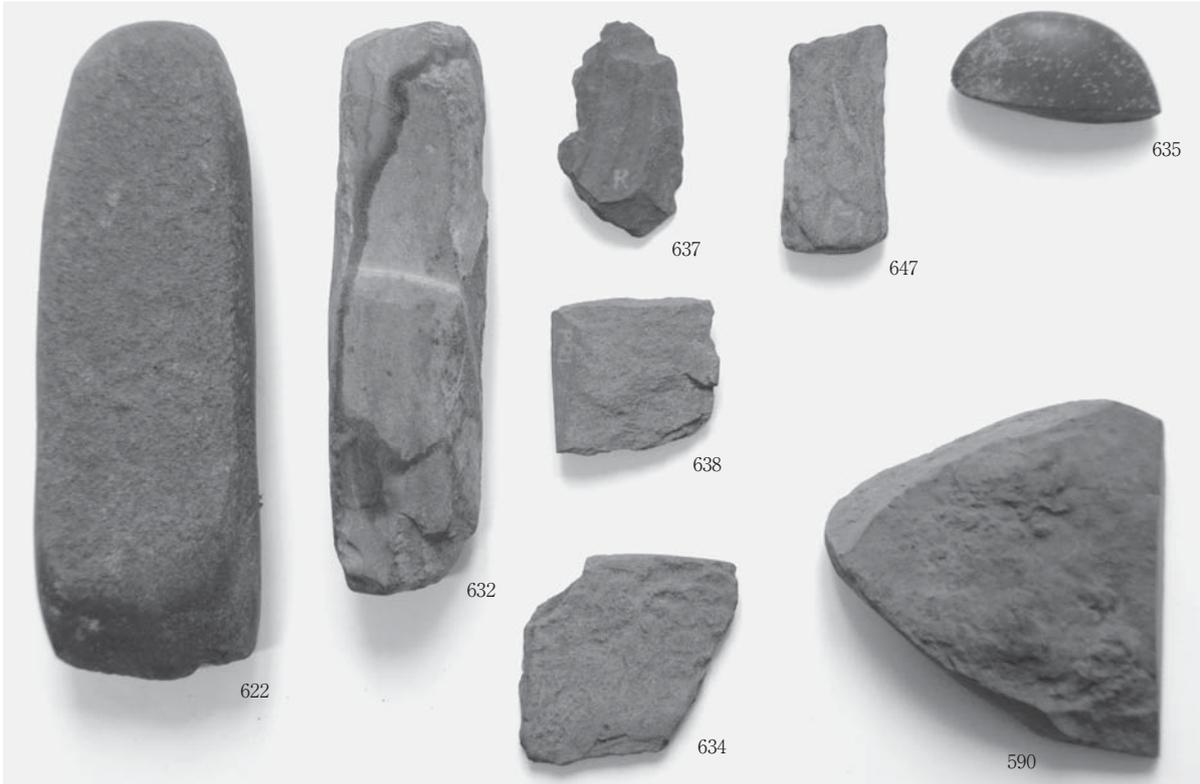
2 第4次調査(1954年)出土石器(2)(裏)



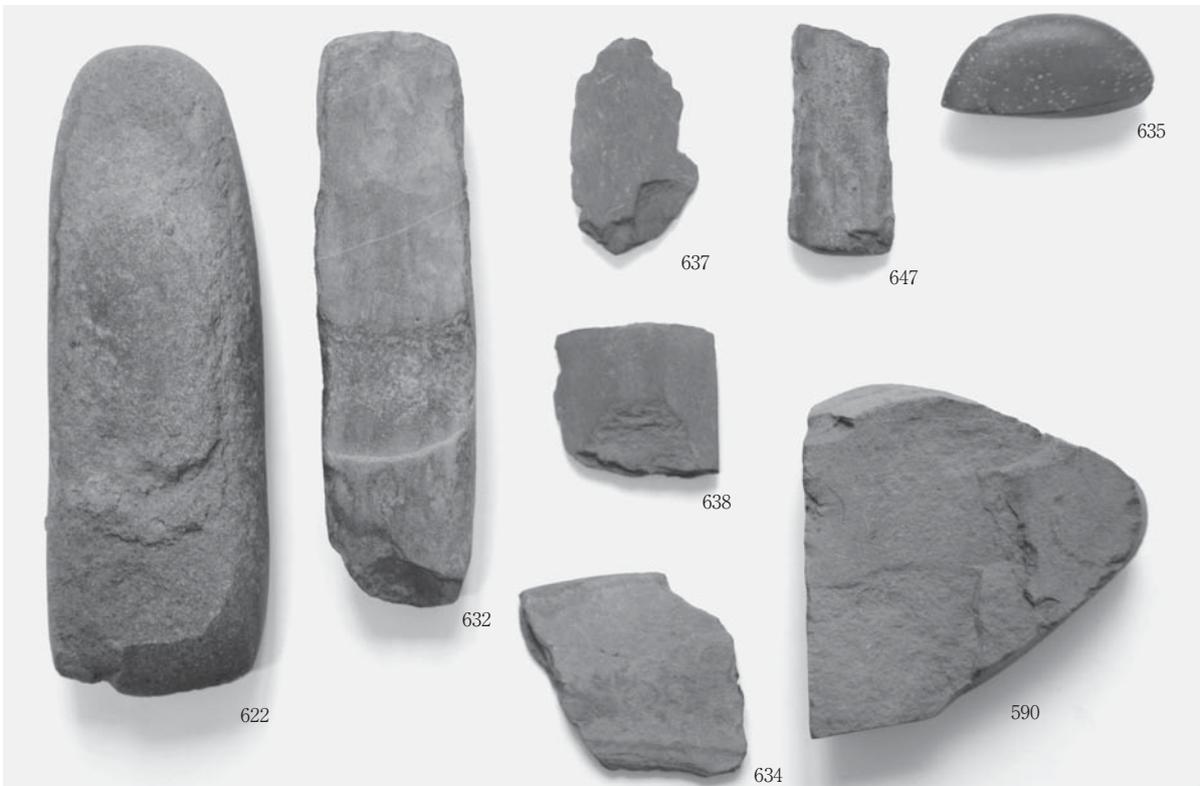
1 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土石器(表)



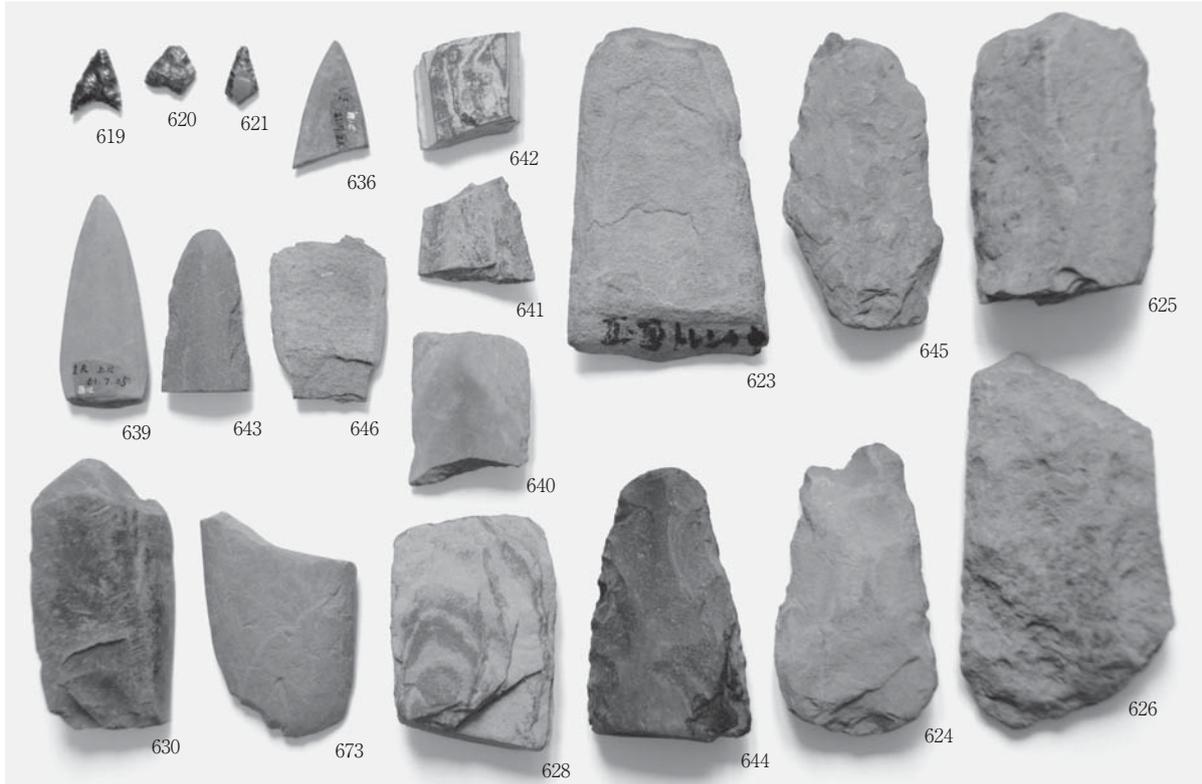
2 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土石器(裏)



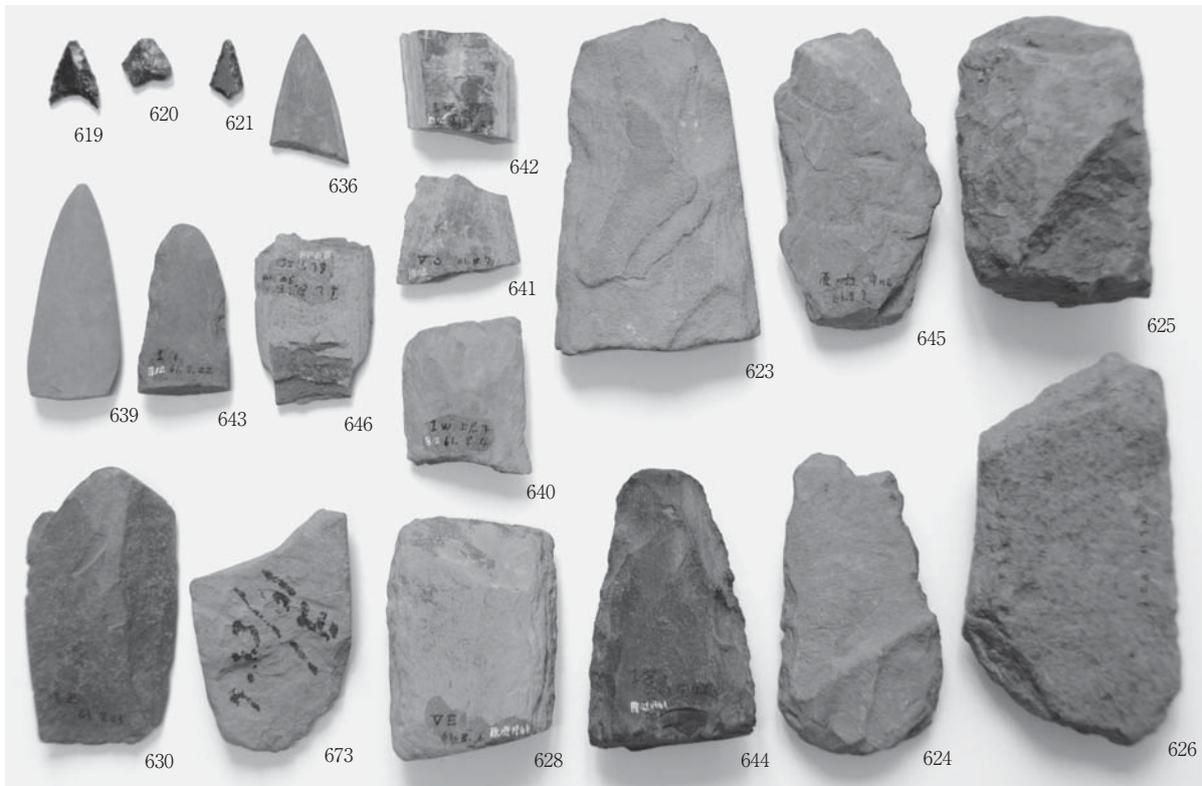
1 第1次調査(1951年)・第2次調査(1953年)出土石器(表)



2 第1次調査(1951年)・第2次調査(1953年)出土石器(裏)



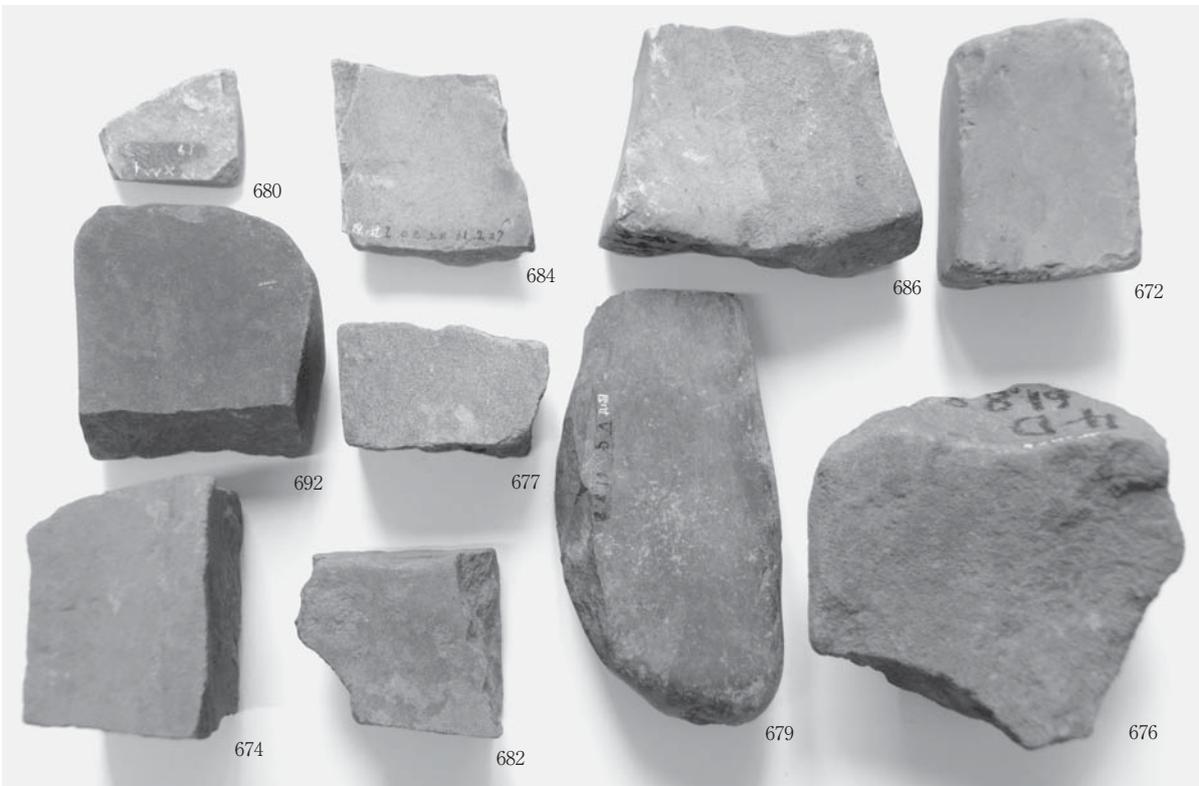
1 第5次調査(1961年)出土石器(1)(表)



2 第5次調査(1961年)出土石器(1)(裏)



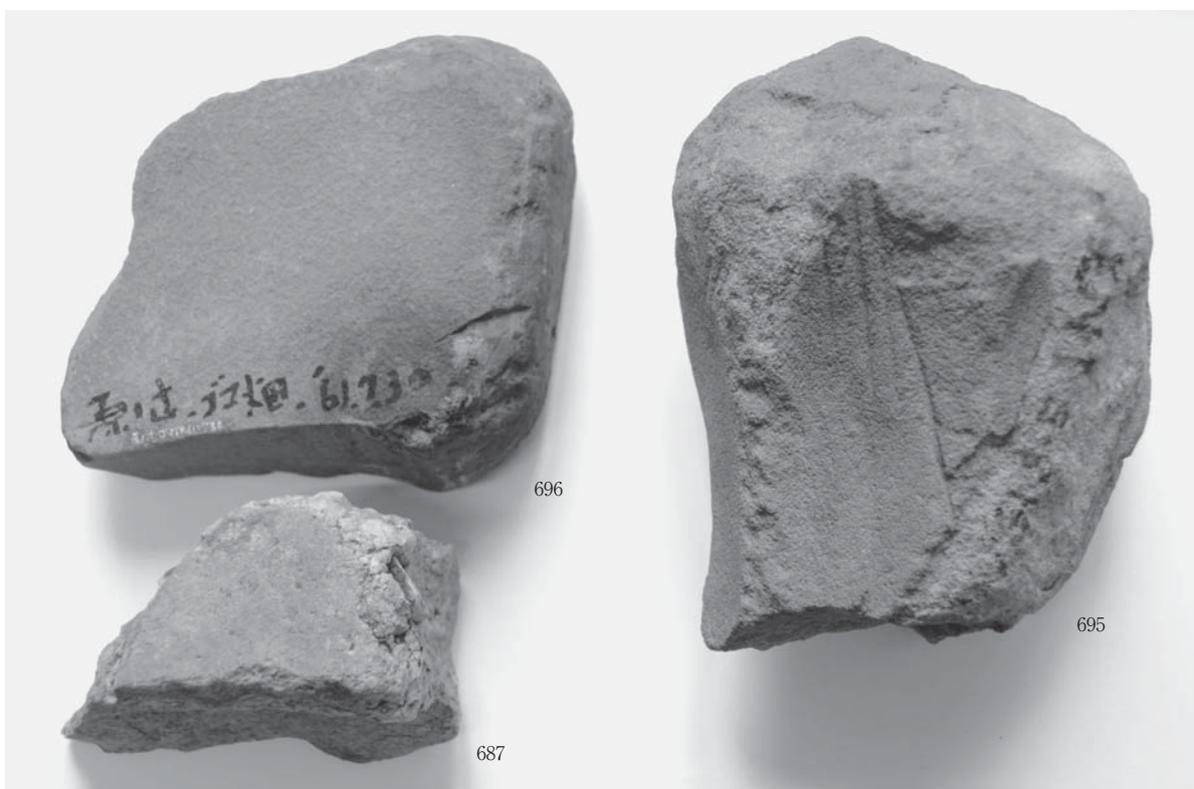
1 第5次調査(1961年)出土石器(2)(表)



2 第5次調査(1961年)出土石器(2)(裏)



1 第5次調査（1961年）出土石器（3）（表）



2 第5次調査（1961年）出土石器（3）（裏）



1 第5次調査（1961年）出土石器（4）（表）



2 第5次調査（1961年）出土石器（4）（裏）



1 第5次調査(1961年)出土石器(5)(表)



2 第5次調査(1961年)出土石器(5)(裏)



1 第5次調査（1961年）出土石器（6）（表）



2 第5次調査（1961年）出土石器（6）（裏）



1 第5次調査（1961年）出土石器（7）（表）



2 第5次調査（1961年）出土石器（7）（裏）



第4次調査（1954年）第1トレンチ出土石製支脚



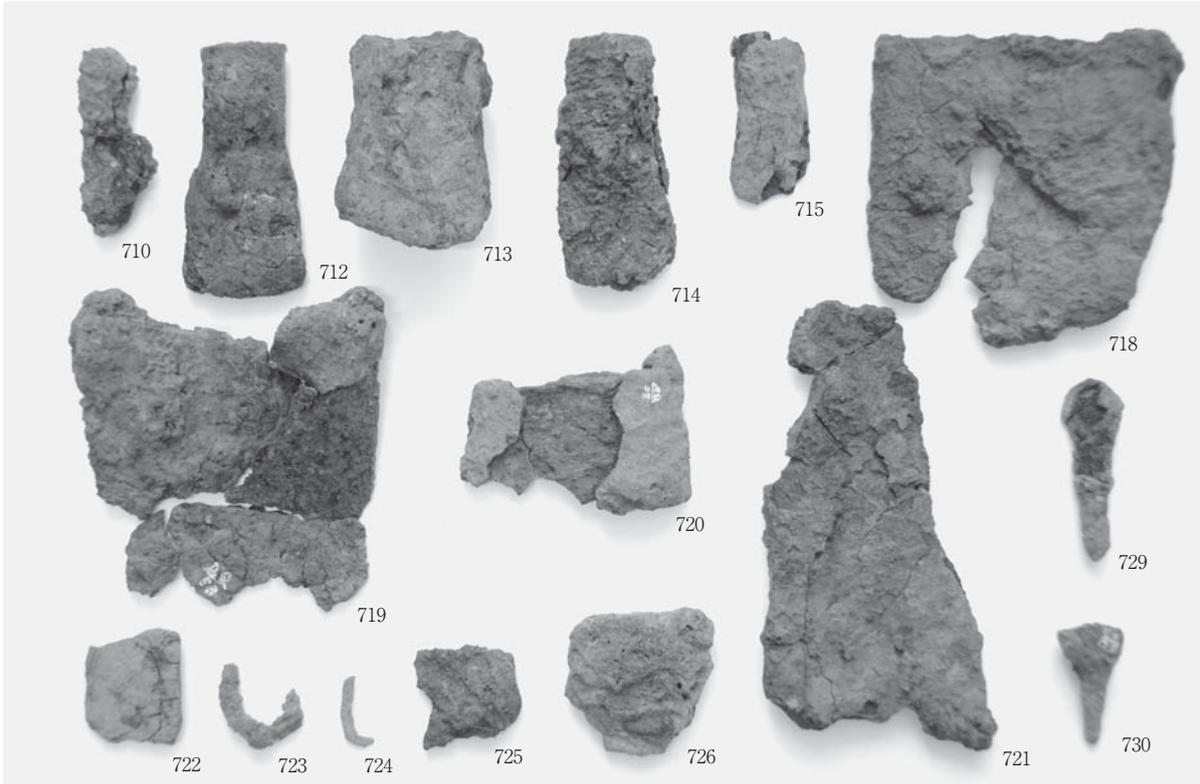
1 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土青銅鏃(表)



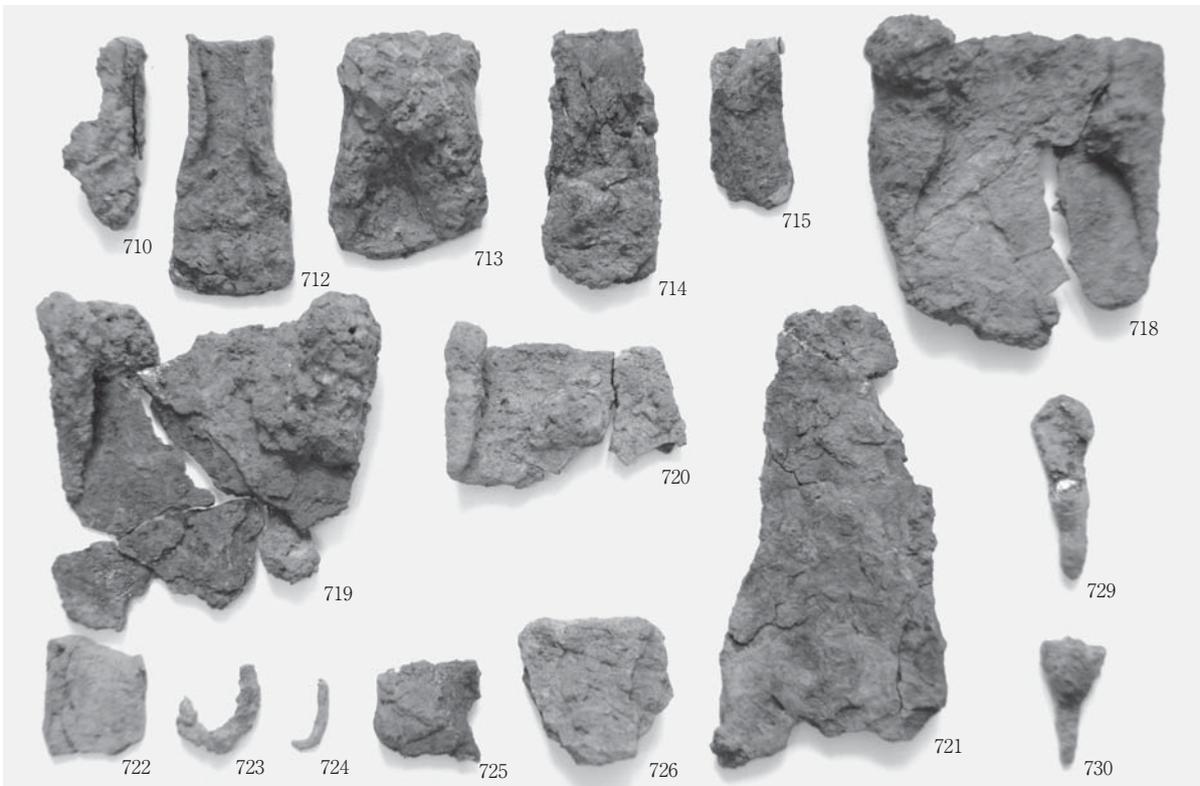
2 第1次調査(1951年)・第5次調査(1961年)出土青銅鏃(裏)



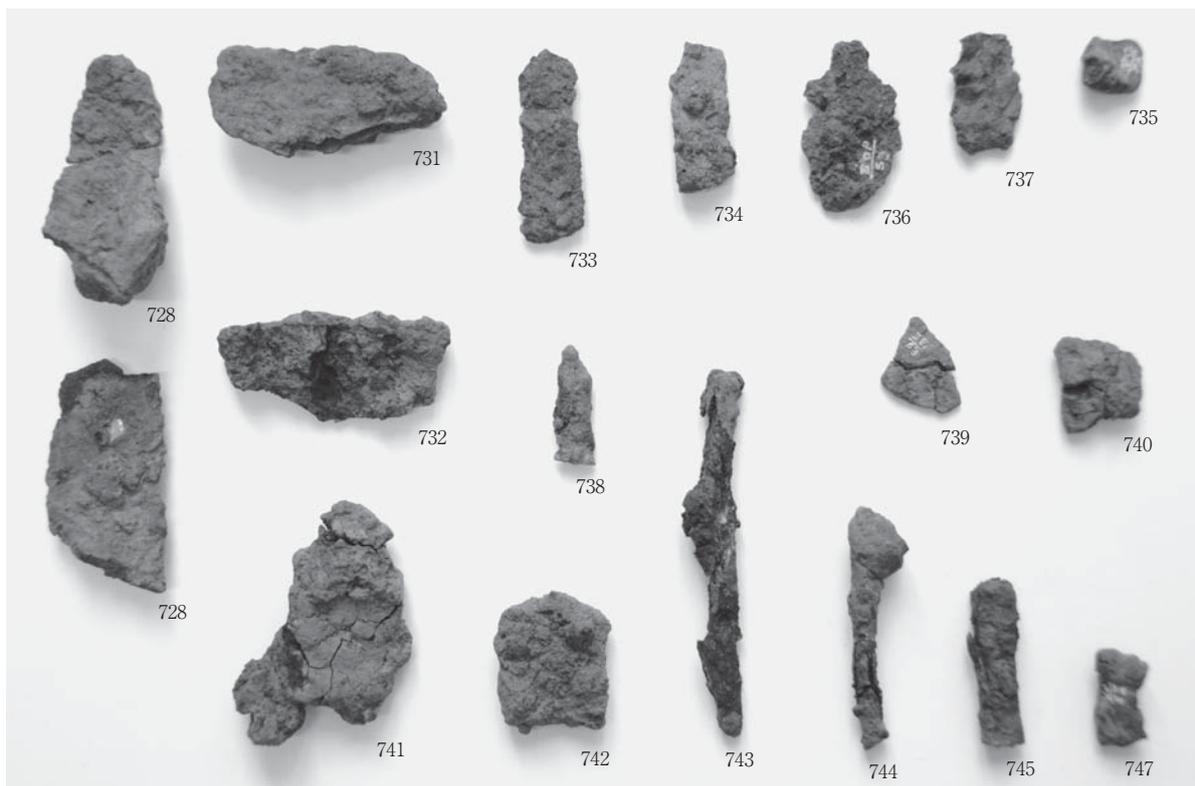
3 原の辻遺跡出土アワビおこし(表・裏)



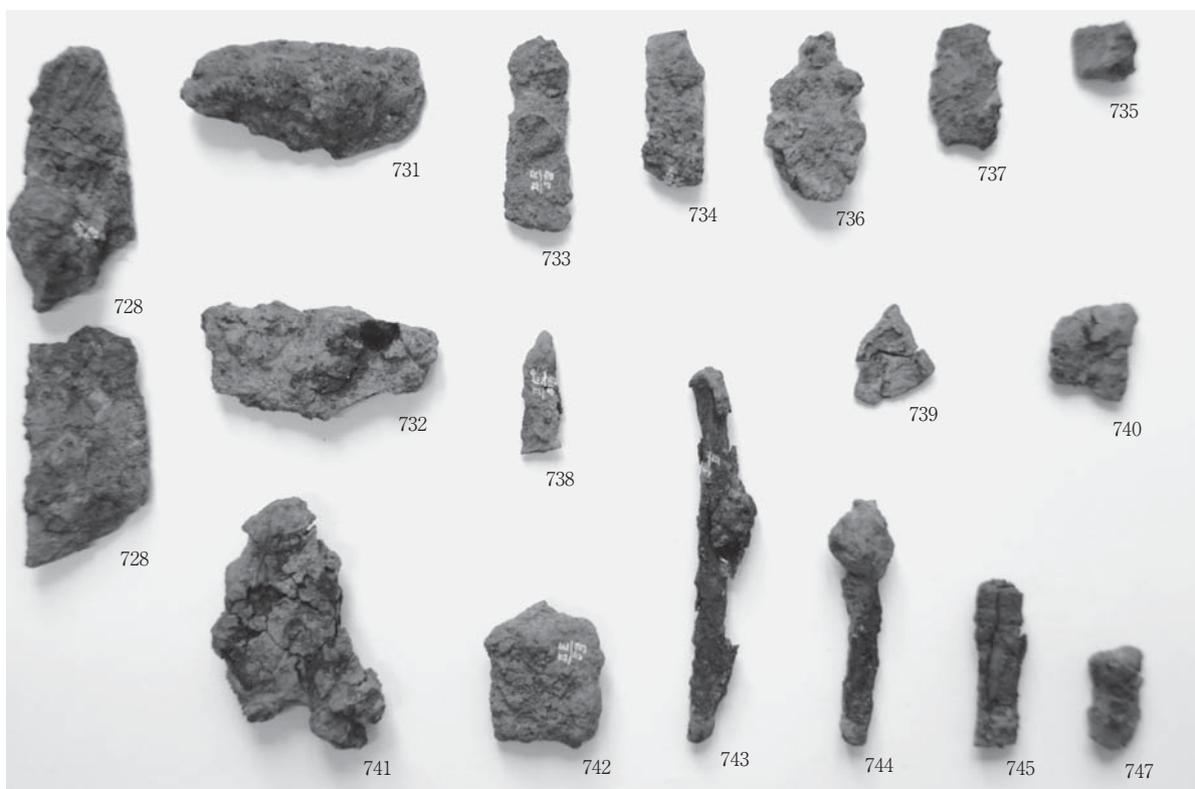
1 原の辻遺跡出土鉄器（1）（表）



2 原の辻遺跡出土鉄器（1）（裏）



1 原の辻遺跡出土鉄器（2）（表）



2 原の辻遺跡出土鉄器（2）（裏）



原の辻遺跡出土鉄器（3）



1 原の辻遺跡出土鉄器（4）（表）



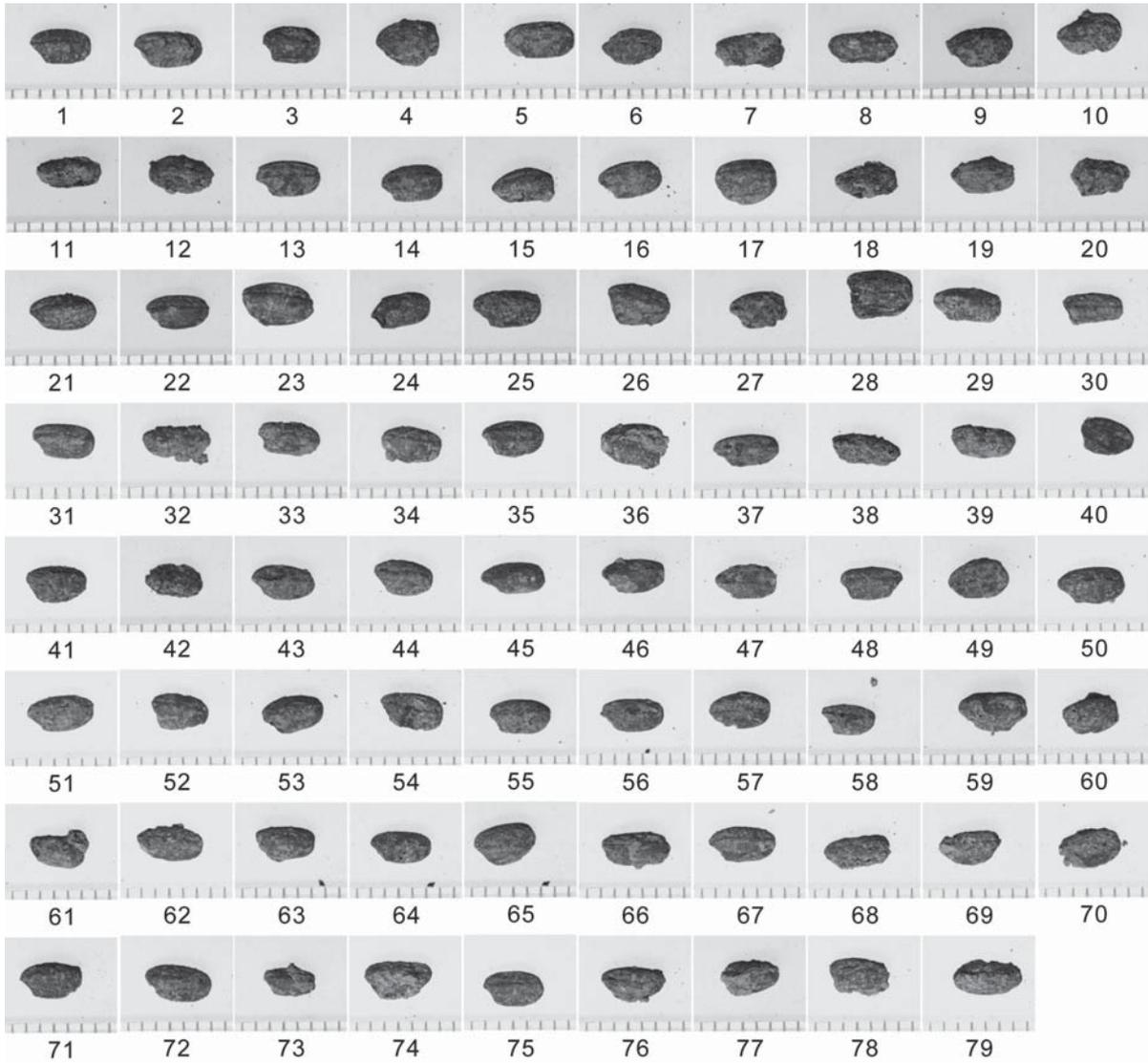
2 原の辻遺跡出土鉄器（4）（裏）



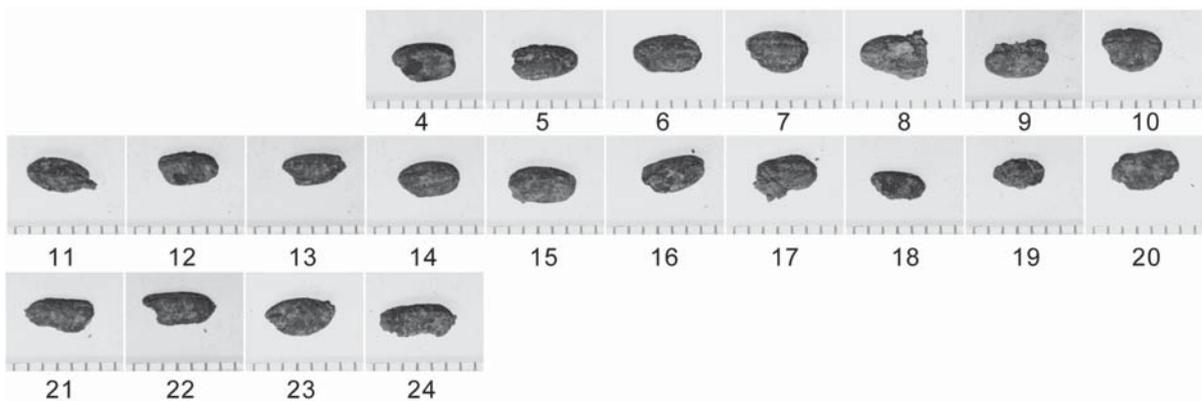
3 原の辻遺跡出土玉類



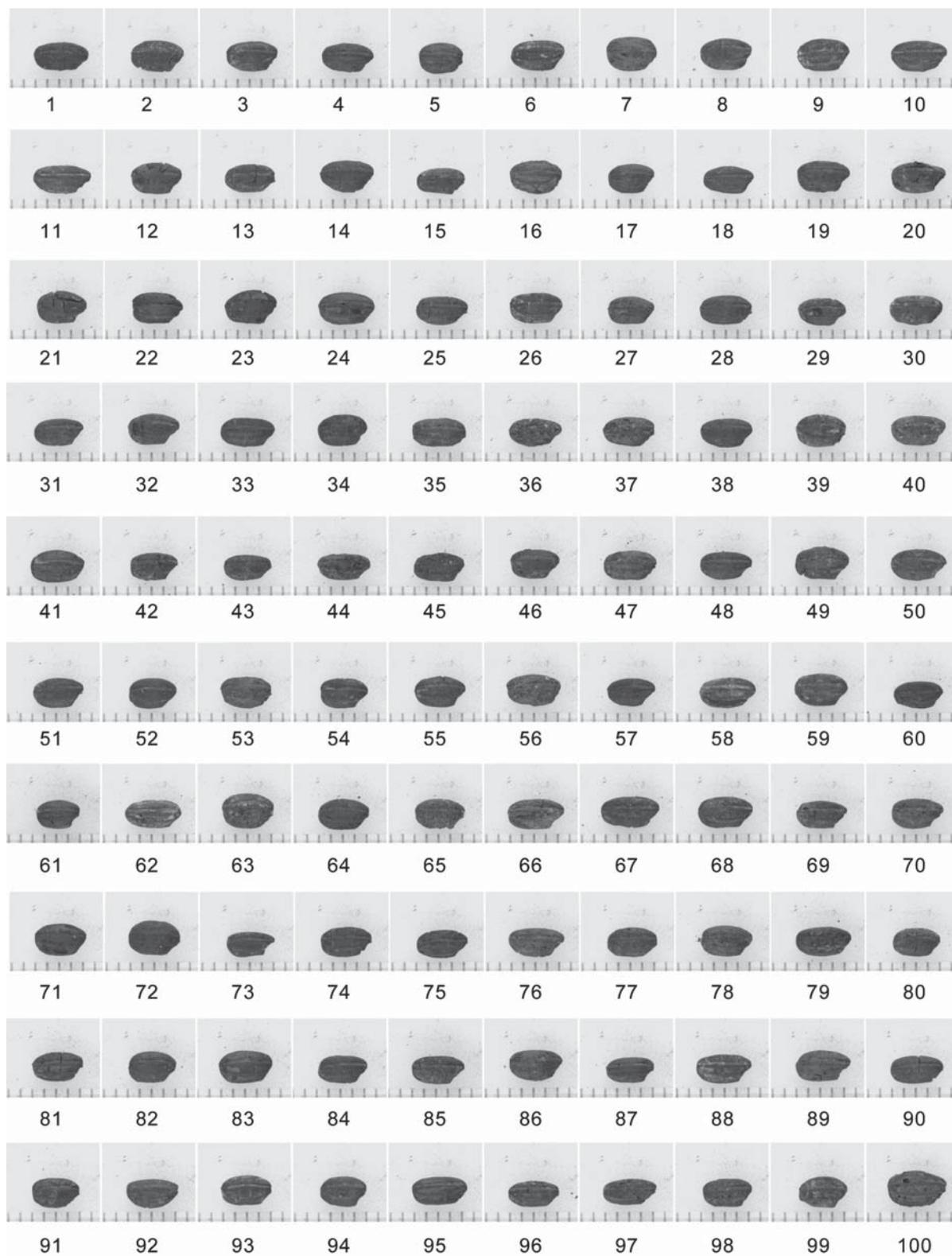
4 閨繰遺跡出土管玉



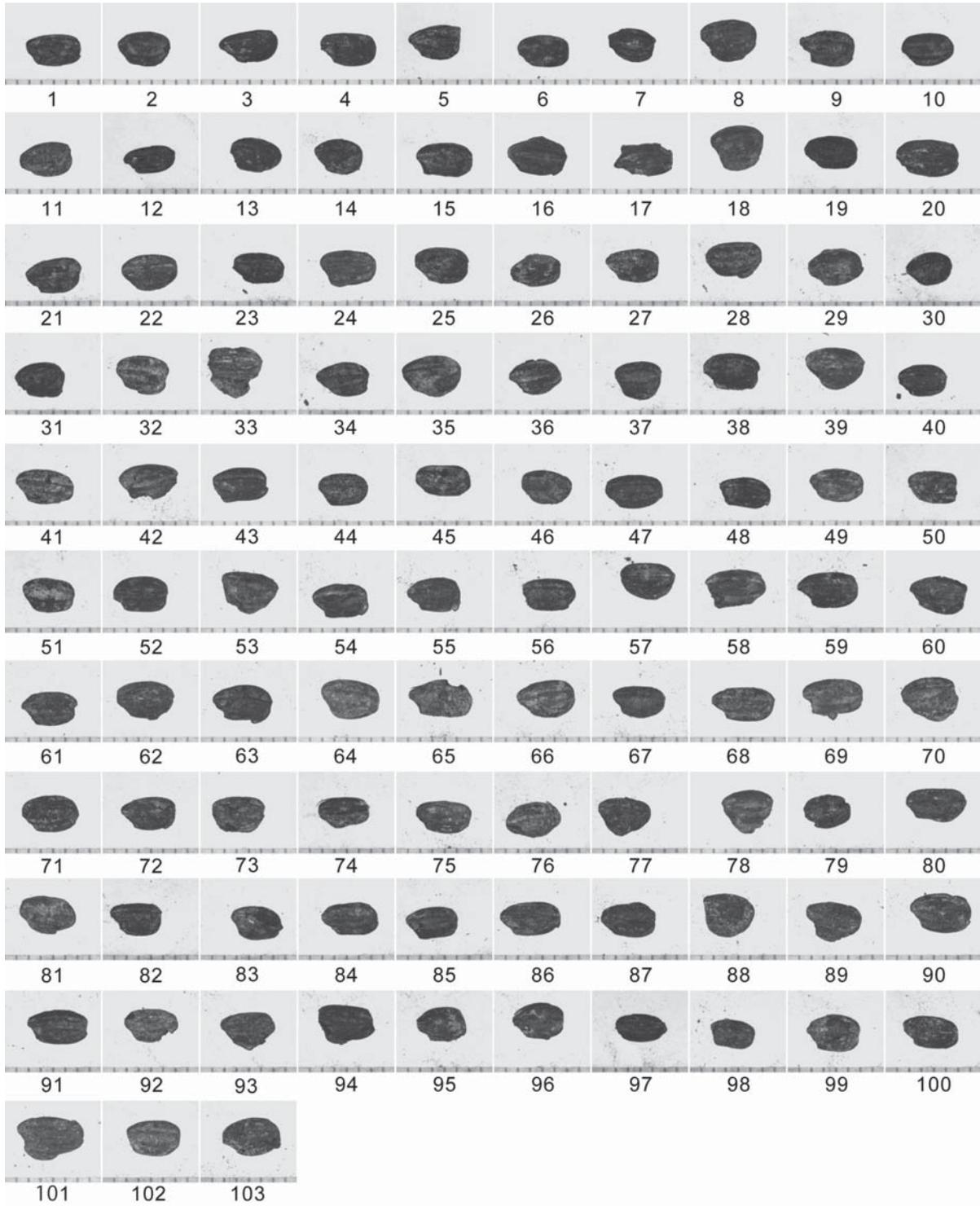
1 原の辻遺跡出土米1 (G'G' グリッド)



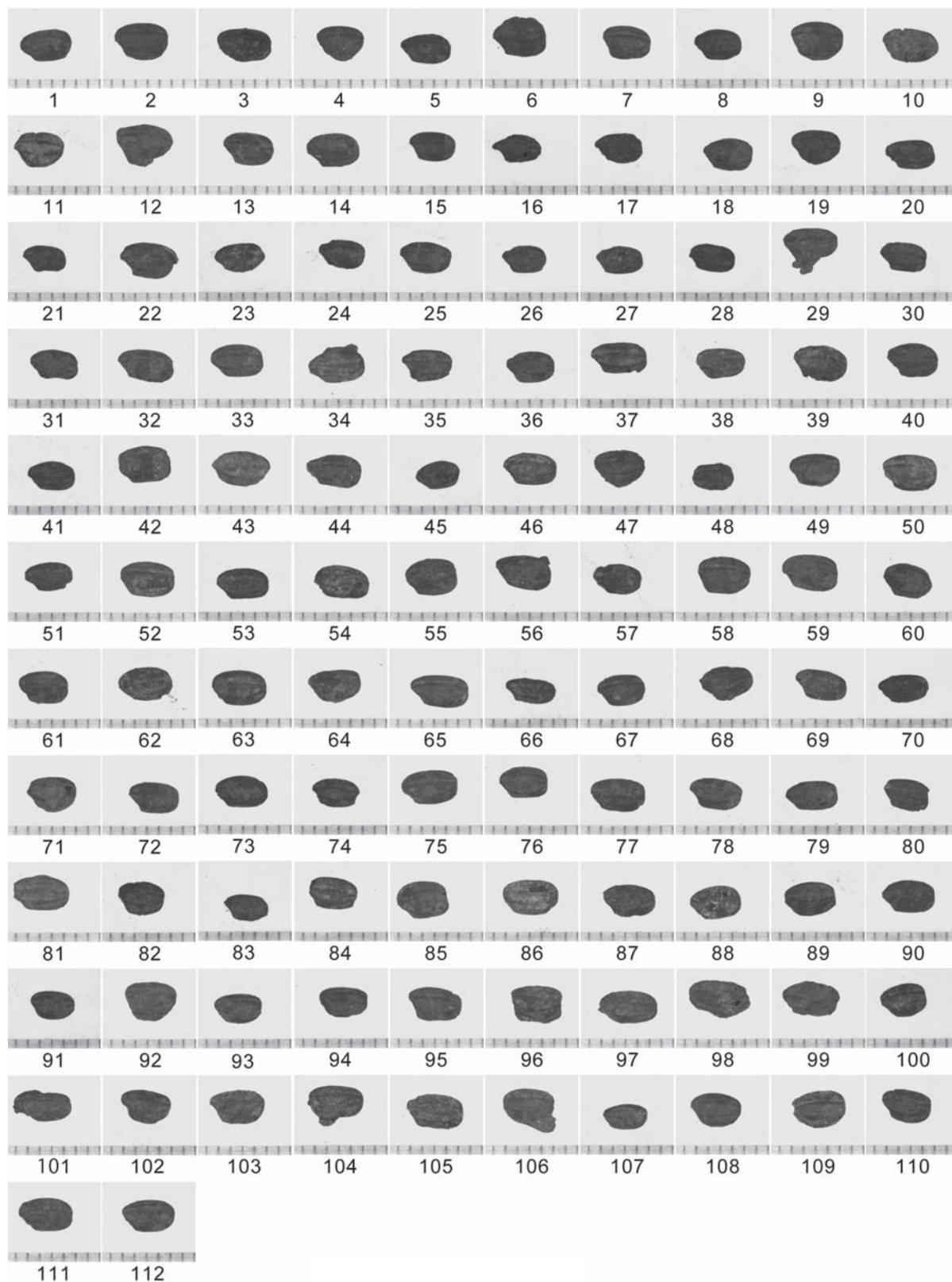
2 原の辻遺跡出土米2 (F グリッド)



立岩遺跡第3次調査出土米



津古内畑遺跡出土米



津島遺跡出土米

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	いきはるのつじいせき								
書 名	壱岐原の辻遺跡								
報 告 書									
巻 次									
編集者名	宮本一夫								
編集機関	九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室								
所 在 地	〒819-0395 福岡市西区元岡744 TEL.092-802-5093								
発行年月日	西暦2023年7月26日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	〃 〃	〃 〃	m		m <sup>2</sup>	
はる つじいせき 原の辻遺跡	ながさきけん 長崎県 いきし 壱岐市 あしべちょう 芦辺町 ふかえつるきふれ 深江鶴亀触	42210		33° 45' 39"	129° 45' 3"	14	1951.7.26 ～1951.8.6 1953.7.24 ～1953.8.12 1954.7.18 ～1954.8.16 1961.7.22 ～1961.8.10		学術調査
はる つじ 原の辻 みやくりいせき 閩線遺跡	ながさきけん 長崎県 いきし 壱岐市 あしべちょう 芦辺町 ふかえつるきふれ 深江鶴亀触	42210		33° 45' 57"	129° 45' 10"	8	1954.3.22 ～1954.3.26 1954.4.11 ～1954.4.20		学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
はる つじいせき 原の辻遺跡	集落	弥生	環濠・住居址 甕棺墓		土器、石器、骨角器、 青銅器、鉄器、玉類、 炭化穀類				
はる つじ 原の辻 みやくりいせき 閩線遺跡	墳墓	弥生	石棺墓・甕棺墓		土器、玉類				

## 壱岐原の辻遺跡

－ 東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅱ －

---

編 者 宮本一夫  
発 行 日 2023年7月26日  
発 行 者 福岡市西区元岡744  
九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室  
印 刷 所 福岡市南区向野1丁目19番1号  
九州コンピュータ印刷